FOOL'S MATE

フールズメイト

SPECIAL STOCK

ジョン・アンダーソン・
ヴァンゲリス
マイク・オールドフィールド

ベルギー・ロック・シーン
未公開名盤150選 ブロンディー
ラフ・トレード・レーベル
ユーロック・ディストリビューション

EURO ROCK MAGAZINE

Fool's Mate

Special Stock

part 2

特集

フールズ・メイト
未公開アルバム150選

インタビュー

ジョン・アンダーソン
バンゲリス
マイク・オールドフィールド
アシュラ

Interiew
& Special Close Up



ぱふ1月増刊　*Fool's Mate Vol.15+S.S*

FIRE WIND/ELECTRIC SUN



ここにヘヴィ・メタルの明日が見えた!!

真のスーパー・ギタリスト、ウルリッヒ・ロートの最新作。これこそヘヴィ・メタル・ギターの究極点だ!!

ファイヤー・ウインド
ウルリッヒ・ロート&エレクトリック・サン

●RPL-8035 RPT-8035 各¥2,700
Produced, Arranged & Composed by ULI JOHN ROTH

'78年スコーピオンズを正式に脱退した後、ジミ・ヘンドリックスの一番の理解者であるモニカ・ダネマンのバック・アップで'79年10月、アルバム「天地震動」を発表、その健在振りを示したウルリッヒの最新作。この一年間、すべての情熱をそそぎ込んで制作されたこのアルバムは、ロック史上の奇蹟とも呼べるほどの出来映えだ。ベースのウル・リットゲン、ドラムスのシダッタ・ゴータマとのインタープレイも冴え渡り、ウリのギターは、そのテンション、パワーで"トリ肌が立つ"ほどだ。テクとスピリットの両方を兼ねそなえたプレイ——俺は聴く、キミも聴け。

曲目：キャスト・アウェイ・ユア・チェインズ／ファイヤー・ウインド／前奏曲宇宙短調／ジャスト・アナザー・レインボウ／組曲「エノラ・ゲイ」(ヒロシマ・トゥデイ?)／他全9曲

RCA移籍第1弾!! 2月21日発売決定!



このR&Rツアーはキャンセルできない!!

LUMINOUS BASEMENT / THE TOURISTS

地下室の灯／ザ・ツーリスト

●RPL-8040 ¥2,700　Produced by TOM ALLOM

無限のロッキン・スペースを駆けめぐるツーリストの旅は素晴らしい。'76年4月、デイヴ(G)、ピート(Voc,G)、アン(Voc,Keyb Fl)の3人を中心に結成されたザ・ツーリストは、ストローブス、ジューダス・プリースト等をかかえるアーナカータというマネージメントをバックにLOGOレーベルからデビュー。'79年レディングではポリスに次ぐセカンド・ビルとして登場するなど、またたく間に、一流グループに仲間入りしてしまった。これはRCA移籍第1弾で、彼らとしては3枚目のLP。ヴォーカルの紅一点アン・レノックスをはじめ、最高のファッション性をそなえ、高い音楽性と話題のライブ・パフォーマンスは'81年の最注目株。

RCA Records and Tapes

発売元／RVC株式会社

Fool's Mate
Special Stock





Angels on the Balcony by Blondie

遠い家並遠くの夕映え
開いた戸からの光は冷たく
子供が現れ勇み亡霊を追う
暖炉に燃え溢れる炎に似て

全能を点す鎮静した光
幻覚のタバコと鎮静の叫声
戸は徐徐に開き外気が冷い
逃げたり隠れたり逃げ隠れ

隅のあなたは歌い続け
永遠に消去されぬ歌が続く
やって来る子供は歌を呑み

鎮静された海での回想
長く持続する退行での曲調
バルコニーの天使様が聞く
バルコニーでは天使が歌う
（大意）







Europa by Blondie

移動性という絶対的欲望の基に
宗教性自由という物質的誘引の基に
人類は車輪と転がるさらに遠く
たった今も彼方の地方さらに彼方に
その人為的運搬は疑惑で許され
この明瞭なる概念は人類を運び込む
唯の連鎖集合体、地図の迷宮へ
車輪に暖められ高速道路に遺棄され

「高度3000
8－1エコーは2－5－0に向け
左施回する」

（大意）



Caught in the Crossfire
by John Wetton

寒さのこたえる暗く寂しい夜
君は他に道がないことに気づく
愛したものと失ったものの2つを賭けたなら
それは、つらくても通らなきゃいけない道なんだ

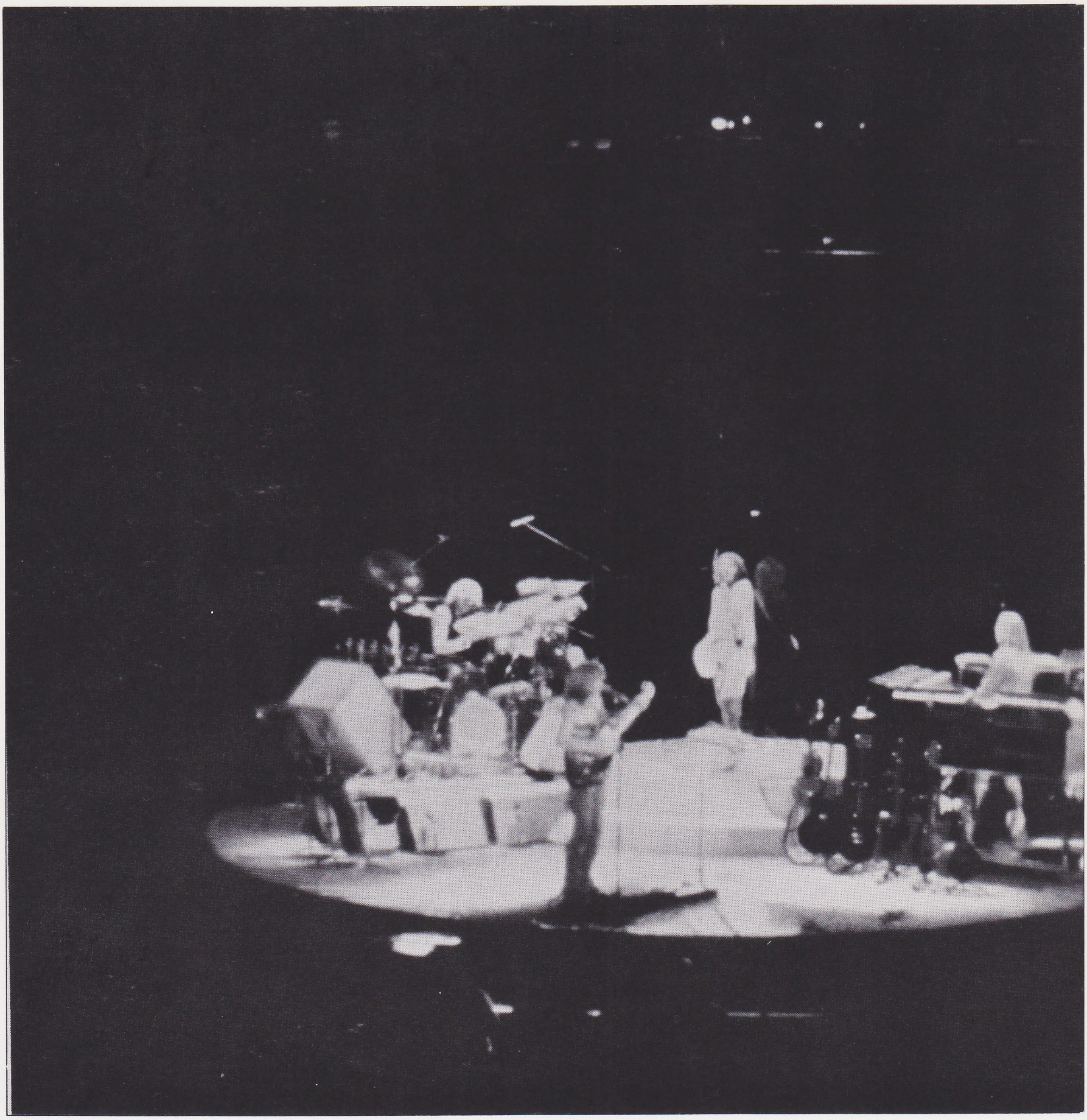
まだ若かった頃　自分は決して変わらないと思ってた
しかし、価値なんてものは変わりやすい
こんなに苦しい思いをするなんてたまらない
自分の一生が作り直されるのを目のあたりにするなんて

僕は十字砲火を浴びた
君と僕、僕と彼女の間にはさまれて
僕は十字砲火を浴びた
右と左、善と悪の間にはさまれて
経験も今は何の慰めにもならない
それは、未知の世界
大衆の中に敷かれた一本の道を
僕は一人で歩いていく

初めから　選択は余儀なくされていた
決断を下すのは自分のためだった
夜明けには順調な航海が
夕暮れには潮にさらわれていたんだ

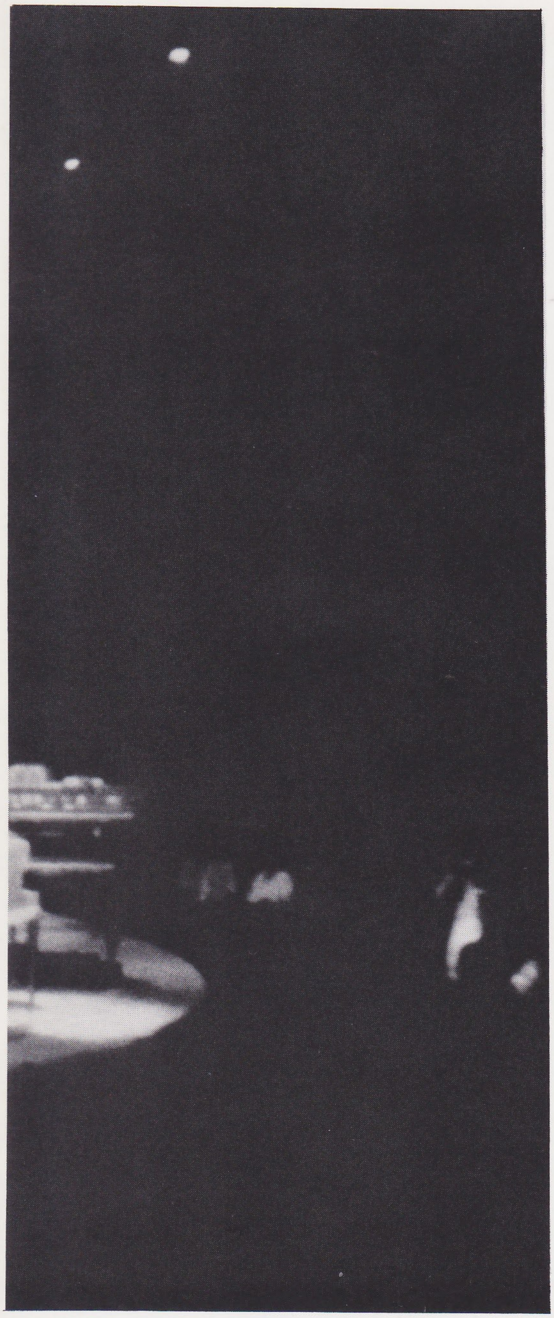
僕は十字砲火を浴びた
君と僕、僕と彼女の間にはさまれて
僕は十字砲火を浴びた
正しかったことと、それが僕に残したことで
だから　毎日、道を捜し続ける
今の状況から逃れようともがき続ける
悲しみを紛らわし、乾杯するんだ
明日になれば　きっと

（大意）



僕らは僕らの音楽の全てを保つため歌いながら送るのだ
僕らは努力し、考えて
僕らが与えようとする全てを手に入れる
僕らの言う全てのことは　聴衆にむける僕らの魂
僕らは航海するまで
僕らの歌をもっとわかりやすく提供するつもりはない
僕はそこにいるだろう
そう　そこにいるだろう
もっとクリア一た仲間達のように
君の近くに行くよう　呼ぼう
彼らは動き回り、歌うと僕に言う。
彼らは全くかまわないみたいだ
まるで　全くね……
僕を抱いて、ねえ君、今日　僕を
僕のいう旅をし　愛の調べを選び出すためにさまよう
僕らは音を聴き　僕らの帰路を変える
僕らは影を吹き流し　道を家の方向へ向ける
飛んで行こう
家へ帰ろう
僕を見て　ねえ君　センテンスは踊りながら行ってしまう
僕らは一緒になる　僕らは受け入れる
僕らの歌の思い出が　ある意味では
長い年月の希望であるように
Nous Sommes du Soleid
僕を抱いて　僕らを永久に
僕らはプレイする時が一番好きさ

(大意)



Novs Sommes Du Soleil
by Yes

NOUS SOMMES DU SOLEIL 僕らはプレイするのが好き
NOUS SOMMES DU SOLEIL 僕らはプレイするのが好き
ドアを開けて僕達は我が道を見出す
捜し、見つめ、笑みを浮かべる
確実に夜明けは我々の小道を照らし
しばし止まるだろう。
彼らを走らせ追い立てるんだ
間に隠せば
不変のドアは目を開けることだろう
人生というものは
そう人生というものは　戦いと同じ　戦いと同じなんだ
おそらく僕はしばし　ただ歌うだけ
そして君に電話をしよう
たぶん僕はこんにちはのあいさつをするだけだけど
それで全てさ　と言うもんだ
家へ急ごう　愛は真実のみ
夜を通じて僕らを救ってくれるだろう
僕らが再び家に帰るまで
僕らの人生というものは
そう人生というものは　戦いと同じ　戦いなんだ
僕らは見ながらにして捕え　流れる感情を駆使する
僕らが持続しようとする時
僕らは与えようとする全てを手中にする
おそらく僕はしばし立ち尽くすのみ
きっと電話しょう
夢は勇気を奮い起こすと言われ
魂までも絶えることなく
僕らは時がそうであるように変わってゆかなければならない
変化は行く道を呼び起こしてくれる
内側へと引き裂かれながら　我々は夜明けをむかえる。
問いただし　問いただしながらも

源　源　源



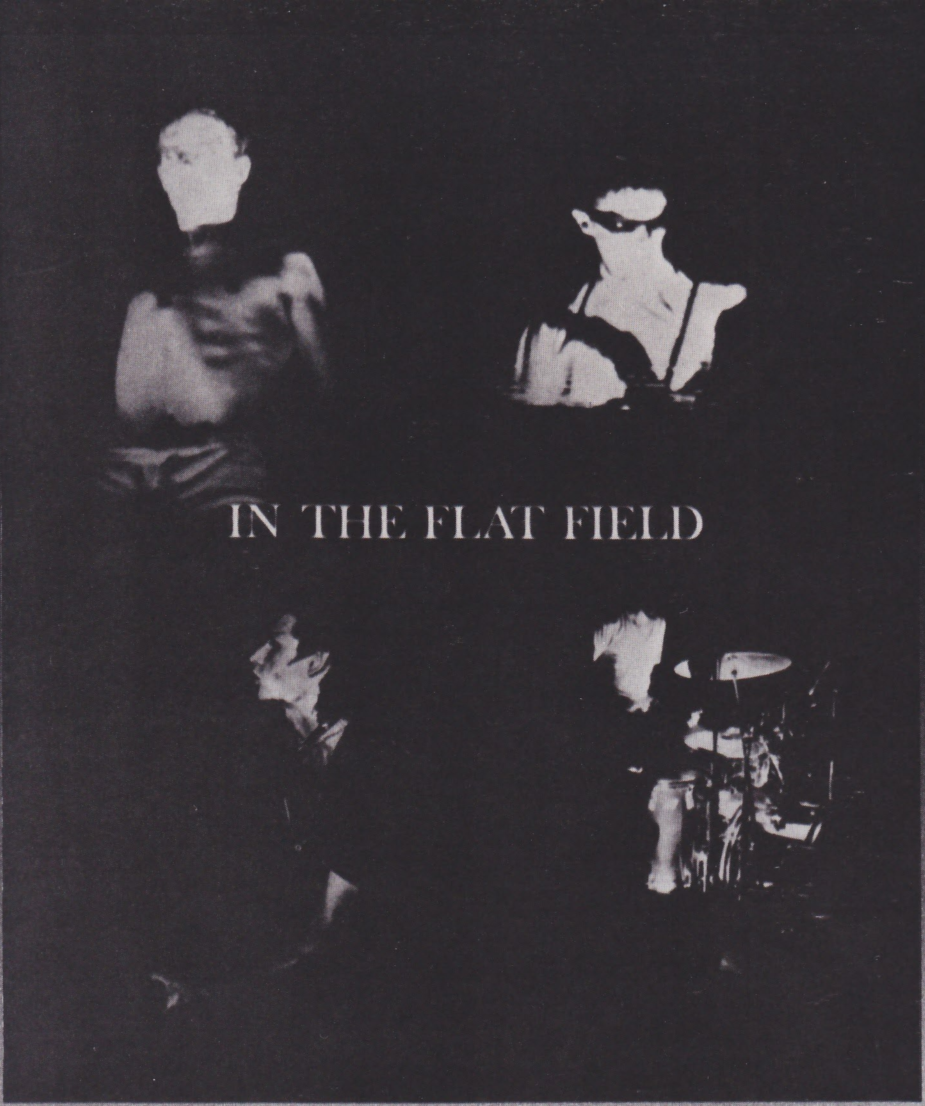
Biko
by Peter Gabriel

77年9月
エリザベス港、天候良好
いつもの通り、それはビジネス
警察署の中の619号室
Oh, ビコ　なぜってビコ
Oh, ビコ　なぜってビコ
イーラ　モジャ　イーラ　モジャ
——男は死んだ

僕が夜眠ろうとすると
ただ真赤な夢を見るばかり
外の世界は死の色で黒と白のみ
Oh, ビコ　なぜってビコ
Oh, ビコ　なぜってビコ
イーラ　モジャ　イーラ　モジャ
——男は死んだ

君はろうそくを吹き消すが
終結を吹き消すことはできない
一度炎が燃え上がると
心はそれを更に燃え上がらせる
Oh, ビコ　なぜってビコ
Oh, ビコ　なぜってビコ
イーラ　モジャ　イーラ　モジャ
——男は死んだ
世界の目は今注がれている
今注がれている

（大意）



Nerves by Bauhaus

神経の末端がはためくページの中でかちかちと音を立てる
片目は予感を怖れて閉じたまま
ふさがれたままだろうか？　それともずっと開いているのだろうか？
何が何故？
何が何故？
神経は異常

七つの感覚を舌なめずりする話を聞かせよう
つばははかなく飛び散る、君は無防備
織られた夢も引きちぎられる
君が動悸を激しくして
陰の短剣のねじれを感じるように
神経は過敏

ナイロンのような神経、鋼鉄のような神経
ナイロンのように神経過敏、鋼鉄のように異常な神経

手当たり次第の刃物の跡が
コンクリートの地下道を切りつける
平静な感覚はガラスの破片のきらめきの中に飛散する

神経過敏、異常神経

ナイロンのような神経、鋼鉄のような神経
ナイロンのような、鋼鉄のような
異常神経

私たちのおさない少年兵士が
B.F.P.Oから故郷に帰ってくる
私は、むらさきの花の一ふさをもつ
母さんの英雄をたたえるため。
飛行場ではなげきが
気候はだんだんあたたくなる、そして彼はだんだん冷たく
制服姿の4人の男が故郷に運んでくる
私のかわいい兵士を

（コーラス）
彼は何をやったことだろう、ロック・スターになっていたにきまっている
それにしても彼はギターを買う金をもっていなかったのだっけ。
彼は何をやったことだろう、政治家になっていたにきまっている





Gentlemen Take Polaroids
by Japan

街角のあちこちで見かける娘
僕は知りたいんだ
僕は君とともに遠くへ行きたいんだ
そしてもし君が僕を愛していると言ってくれたら
どうしていやがったりするだろう
君の言葉には裏はないから
片田舎に連れ去ったら、君はもう勝つことはできない
（コーラス）
紳士達がポラロイドカメラを取っている
彼らは恋に落ちている
彼らは恋に落ちている
僕の内なる生命に息を吹き込んでほしい
僕をぐるぐる回転させておくれ
そしたら僕は座り込み
どうしてだか考えてみる
異質の心を持つ異邦人
なぜこんなにもみんな無情なのだろう
田舎の空気をあじあうことを、君はまったく知らない
（コーラス）
田舎の空気の中で連れていったら、君はもう勝つことはできない
（コーラス）

（大意）



Swing
by Japan

仕事が済んだら話してほしい
一日が過ぎ去ったら話してほしい
そしたら僕は安心してドライブできるよ
アフリカの島々を手に入れるのにね
もし誰かが近づいてきたら大声をあげてくれ
僕がするべきことがなんであるかわかるだろう
僕は車で安全に到着するよ
アフリカの島々を手に入れてさ
(コーラス)
今、君の足はふたたび地面にもどっている
彼女は空が曇っていると言うだろう
だけどリラックスしてアイ・ラブさ
力をゆるめて、揺らしてごらん
君は物事をあんまりはっきり言わない
僕は君とは全く関係ない誰かさ
だけど僕はここに座ってはるかかなたから見ているだろう
アフリカの島々を手に入れるのにね
(コーラス)
風の中でささやいてほしい
(コーラス)

(大意)

Christine
by Siouxsie and the Banshees

変幻きわまりない万華鏡のようなスタイルを
彼女はこわすまいとしている
華やかな笑いの裏側で
性格は変わってゆく
新たな問題が起こる度に
彼女の心の中には別の人間が現われる
どうすることもできなくて
今度もまた偽りの表情を繰り返す
　クリスティン――ストロベリー・ガール
　クリスティン――バナナ・スプリット・レディ
この世界では忘れられてしまった優しい蛮人達を
彼女は歌い続ける
自分の顔つきが変わってゆくのを
この大きな目をした女の子は知っている
今彼女は別世界…
今彼女は一匹の亀…
もう、ば・ら・ば・ら
　クリスティン――ストロベリー・ガール
　クリスティン――バナナ・スプリット・レディ
22の顔を持ち…
もう、ば・ら・ば・ら

（大意）

smus und
it", "Lohnab
um von Produ
und und Bode
ganisationsf
st also die
ne REVOLUTIO
ukturveränd
ur das Ganze
nden Konseq
nnte wie di
n 19. und 2C
sie begründete
Industrialisierung,
te den Bestand des
ch regeln? Damit wird
ff selbst ins Zentrum

bereich
dessen Entw

smache
begriff i
em in der
der sic
as gesamt
eit, somi
unseres
produktio

in the ba
forking down
my meal
stretched my chi



CONTENTS' OF NO15+SS

Special Stock

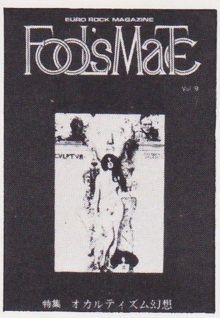
特集　*Euro Electronic Music* の旗手達

インタビュー

特集　イタリアン・ロック　*1979*

特集　オカルティズム



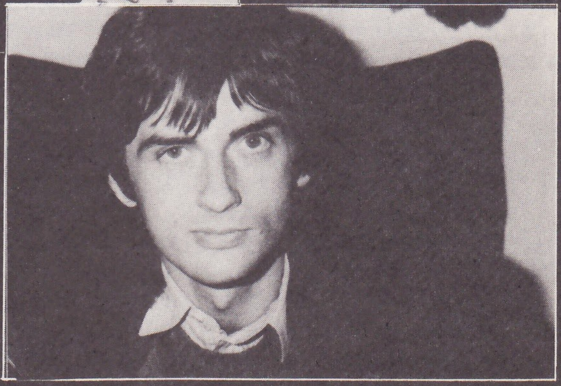


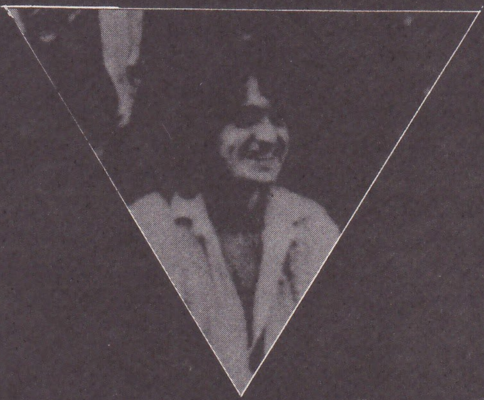
Vol. 15＋スペシャル・ストック

インタビュー特集

構成：角屋直彦







マイク・オールドフィールド
バンゲリス
ジョン・アンダーソン

現代の落とし子達は、暗くてひたすらよどんだイメージをも娯楽として満喫してしまったようだ。このような不安定な時世にあっても、ただひたすら自己の音楽的探究、そして個人の主観を何よりも尊重し、時代性や安易な風俗に束縛される事のない真に自由な創造を行ない続ける３人のミュージシャンがいる。ヴァンゲルス、ジョン・アンダーソン、マイク・オールドフィールドである。彼等３人には常に共通して孤独のイメージがつきまとい、さらに並み大低のものではないエゴと、一瞬自己完結されきったように思える世俗とはおよそ縁遠い哲人的な厳粛さすら感じられる。彼等がこれ程までに個我に基づく創造的パワーに固執するのはなぜだろう？それは自由のシンボルとしての《主観の尊重》なのかもしれない。そこには何か、時代を逆行してルネサンス的なヒューマニズムを体現化しようとする純粋な理性が働きかける感銘がある。この深遠な世界に包まれた聖なる空間は、壮大なロマンとナイーブな優美さに色彩られている。



ヴァンゲリス・インタビュー

VANGELIS Interview

私の場合、作品以外の自己主張はない。

1943年３月29日にギリシアのボロスで生まれたヴァンゲルス・パパサナシューは、４才の時からピアノを習い始め、６才で彼自身のリサイタルを開き名声を得ていた大天才である。やがてアテネのアカデミー・オブ・ファイン・アートで絵画を学び、その後映画、クラシック・ミュージックの勉強をした。このように幅広い教養とある程度の裕福な環境を背景に、1967年になるとギリシア神話の中に登場する「恋愛と美の女神」であるアフロディテの子という名を持つグループ、アフロディテス・チャイルドを結成。ヴァンゲルスと共に結成の中心となったデミス・ルソスと後から加わったドラマーのルカス・シデラスの３人はギリシャ・フィリップスからシングル「エンド・オブ・ザ・ワールド」でデビュー。この曲の好調なヒットによって英国進出を目ざしたが、その道中のフランス、オルリー空港で立往生してしまう。理由は、イギリスでのゼネストによるものだった。そこでフランス国内で「雨と涙」をレコーディングしてみたが、これが予想外に空前の大ヒットとなり大成功を収める。しかし「アフロディテス・チャイルド」とセコンド・アルバム「イッツ・ファイブ・オクロック」の２枚のアルバムを残し、71年の暮には一度解散してしまう。これからがバンゲルスの個性を発揮する時期で、彼の壮大なコンセプトによる音楽が花開くわけである。72年の春にギタリスト、シルバー・コウルーリスを加えた４人組でグループを再結成し、詩人のコスタ・フェリスによって書かれたギリシアの古代英雄伝説的なストーリーをコンセプトとする「666」を発表。これはロック史上に永遠に残る傑作として君臨している。しかしその後グループは自然に消滅してしまう。その理由をヴァンゲルス自身のコメントで裏付けてみよう。

「アフロディテス・チャイルドは、ただ金を得るためのグループでしかなかった。それはもうコマーシャルなものだったからね。だからこそ成功してすぐに辞めた。つまり十分な金が入ってきて好きな音楽ができるようになったからね」

その後、ソロ・アーティストとしての活動を続け、一時はイエス加入の話もあったが、なぜかグループとしての活動には、否定的なようだ。彼自身は、グループの音楽活動をどう思っているのだろうか？

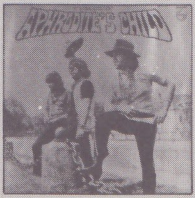
「私はどちらかというとスタジオでの仕事が好きだし、その理由は創造性の問題なのさ。だから正直なところグループには入りたくない。人間は、２入以上になると社会を形作り、そこには当然互いのバランスや力関係が浮きぼりになってくるからね。それが音楽の表面に反映されるのはきらいなのさ！私は個人の感性や自由で限りない可能性をもつ一人の人間としての創造力の方を信じる」

こうして開いてみると、彼自身の創作力の根底には、解放されきった個人の自由な表現がうらやましいまでに感じられる。この事を反映してか、彼の音楽には、ヨーロッパの伝統的手法が流れつつも、それをも越えていこうとする表現の拡大が意図されているように思える。

「私自身、クラシック・ミュージックを学び、その理論的構造やその組み立てによって得られる感動を十分に心得ているつもりだが、ただ単に音楽がそれだけで終わるような事があってはならないと思っている。なぜなら、私は現代に生きているのであって、なにも古典的作品を保存するために生まれてきたわけではないのだから。今生きているという事は、その証しである創造の喜びも引き出してくれるし、今こうして作



アフロディティス・チャイルド



イッツ・ファイヴ・オクロック



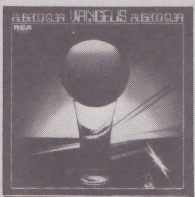
６６６



アース


ソクラテス／フオス

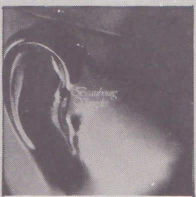

天国と地獄



反射率0.39



螺旋


霊感の館


チャイナ

品を作り続ける事は、現代の社会状況や現代人の求めている物を自然に映し出してゆくわけだから、音楽に於ける時代性とは、歴史を鏡に映し出し、この音楽創造そのものが、逆に歴史になってゆくものだと思う」

さらに、彼は東洋に関心をもっており、それはアルバム「チャイナ」にも反映されている。彼の話は、しだいに彼自身の興味や音楽感の核心に近づいてきた。

「私は、定まったスタイルをもたないつもりだ。これはあたりまえの事だが、意外にむずかしく、私自身も自由なスタイルを概念としてこだわると、かえってそれが目的になってしまったりして、その本質が極められない時がある。だけど、自分の感じたままにやっているつもりだ。だから私が東洋に関心があるというのは、なにもあこがれやブームによる安易な発想で口にしているのではない。西洋人である私が、東洋を認識したいと願うのは当然だし、それが不完全で、結果として的を得ていなくとも、そう願う気持ちをも歪めておさえる必要はないと思うんだ。つまり自分の感じたままにやっているという事さ。日本の伝統音楽も好きだし、その他の美術工芸品にもすごく興味があるよ。私は「アース」や「666」でギリシア音楽の根源を探究したつもりだが、それは中国や日本の音楽と共通するところが多いみたい」

彼は、音楽キャリアを多角的なものとしてとらえていて、そのためか作品の性質も多種に渡っている。ソロの作品としてその本質が十分に発揮している大作や映画のサウンド・トラック、さらに半ば遊びや実験とも思えるテープ、ジョン・アンダーソンとのデュオなどその種類は限りない。

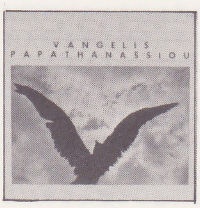
「私の活動には、2通りのものがある。ひとつは、聴衆のためのもの、つまりコンサートやレコードの制作などだ。もう一つは音楽に対する総合的なアプローチで、その探究や創造などもっと学究的なニュアンスを含んだものである。むしろ前者は、後者の結果として導びかれた一つの断片にすぎない。だから、レコードに入った音やステージで上演した音が、私のやりたいものだとは断言できないし、決定づけられたスタイルとも言えない。ただ私自身、違った事をやったり、それにアプローチしたり掘り下げる事が好きだし、楽しんでいる。そういった意味でも同じ事やスタイルを絶対に2度はやりたくない」

彼は、ギリシアの軍事クーデター以来ずっとパリに住んでいたが、ここ何年かはロンドンに自分のスタジオ、ネモを設置し音楽制作を行っている。彼に関しては、数年前まではインタビューもほとんど手に入らなく、何か謎めいた面が多かったが、そういった意味でもここに載せたヴァンゲルス自身のめずらしいコメントは貴重なものになると思う。そこで最後に彼自身の音楽に対する考え方、取り組み方などその本質をコメントしてもらう事にした。

「私とその音楽を聞いている聴衆との関係は、その作品を感性で受けとめてくれるか、そうでないかだけのものであって、そこには何の束縛もないし、音楽作品以外のコミュニケーションはない。現代のように雑多な音楽が氾濫していると、その今言ったように純粋な関係は、保たれなくなると思うんだ。風俗やその時世の文化が音楽に反映されるのは当然だけれども、それを意図して行なうのはまちがいだ。つまり文化をとりまくさまざまな外的要因というのは、自然にそこに含まれてくるものだと思う。私は、ヒット・ソングの作り方も知っているし、それが無駄なエネルギーの消耗だという事も知っている。しかしメジャーなヒット・ソングなどは、金を得るためのもので何にもならない。私は、今自分自身の作品を作る事を楽しんでいるし、その結果として受け手との関係も実にうまくいっていると思う。もちろん、私の音楽を聞いている人の中に、私のブロマイドや雑誌に載るゴシップを集めようとする人はいないのだろうけど……。要するに本質は、音楽をトータルに取りくむ事にあると思うんだ。そこには、終わりもなければ、結果もない。それはとても"自然"なものでなければならないので、私の音楽的ソースは至る所に存在すると言えるのだろうね」

こうしてヴァンゲルスは、果てしない音楽的野心を純粋に追求し、それをエンジョイしている事を私達に教えてくれたのである。





イグナチオ



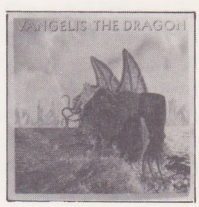
野生



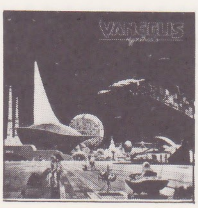
野生の祭典



野生　パートII



ドラゴン





ジョン・アンド・ヴァンゲリス/
ショート・ストーリーズ


流氷原

参加アルバム

デミス・ルソス／マジック

クラウディオ・バジリョーニ／E.Tu

イカルド・コチャンテ／コンチェルト・ペル・マルゲリータ

インタビュー JON ANDERSON

ジョン・アンダーソンの近況



バンゲリス　　ジョン・アンダーソン

――これからは、自分のやりたい事をやっていくし、そういう姿勢を基本にして行くつもりだ――

ジョン・アンダーソンは、冷静に落ち着き払った様子で、しかもある種の自信とそれを裏付ける思慮深い判断によって最後の一言を選んだようだ。しかし、昔のように高慢ちきで近寄り難い印象は一つもなく、穏やかで礼儀正しい人間味がある種の親近感を与えているようだ。

イエス時代を回想し、かつて自分に向けられた攻撃に対して

自分ではイエスを良い意味でリードしてきたと思ってた。僕等にもそういう時代があったという事を誰もが忘れてしまうみたいだ。かつては、僕等だって今始めたばかりのバンドと全然変わりなかったし、無一文で安い出演料をもらって、ヴァンで移動していた。皆と同じで苦労したんだ。しかしイエスがビック・ネームになると、成功した連中を攻撃したがる人々の批判の的になってしまった。でも僕等は人の何倍も努力したんだ。成功は誰かにもらったわけでもなく、自分たちで手に入れた……。だからこそ非難される理由はないね！

イエスの分裂。そしてジョン・アンダーソンの立場について。

僕はいつものように新しいアルバムに関するアイデア、明確なコンセプトや方向を思索していた。そして何ヵ月ぶりにメンバーが集まりそれを説明したのだけれど、皆余り賛成してくれなかった。もちろん以前にもこのようなケースは何度もあったし、反論が出る事は解かりきっていた。そう、イエスというグループは、相反するアイデアを、そしてメンバー個々のアイデアを統合する能力を常に誇ってきたしね。しかし今度ばかりは溝が深かった。僕は他に具体的なアイデアもないのに自分の意見が容れられなかったのが無念だったし、それはもはや生産的で創造的な次元でなくなってしまった事を示していたように思えたんだ。これはイエスというグループそのものの危機だったのさ。誰にとっても苦しい時期だった。意見がぶつかり合うのではなく、何をやったら良いのか解からなかった。だからどうしても事態が好転しないことが分かったんだ。それに僕の提案した新しいコンセプトは、イエスをもう一歩前進させるものだと確信していたしね。気分をこわすというよりもがっかりしたよ。かつて僕はグループをリードし、動機を与えてきた。他のメンバーのアイデアも民主的に歓迎したつもりだし、どんな問題でも話合いで解決できると思っていたんだ。しかしあの時点では、グループのまとまりが完全になくなっていたし、皆が同じ目標、つまりグループを楽しくつづけ、各メンバーにとって興味の尽きない音楽を作る事に向かっているとは思えなかった。

ジョン・アンダーソン自身の表現方法やそのアプローチ方法の変化について。

イエスはもう終わりだという気はなかった。でも僕は自分を表現するのにいくらでも他の方法を見い出す事が出来たよ。以前にヴァンゲリスとアルバムを作ったんだけど、それはもう非常に得るところが大きかった。その時のやり方が素晴らしくてね。１週間位で仕上げたんだ。すごく楽しくて、スポンテニアスな仕事だった。だけどもイエスの場合だとそうは行かない。まず何をやるかミーティングで話合って、公式を作り上げてしまうから、実際にスタートする前からもうどうなるか予測がついてしまう。僕としては、もっとスポンテニアスにやればいいと思っていた。何度もそれを提案したんだよ。もっと自由で表現力に富む音楽をやろうってね。それでもぜんぜん聞き入れてもらえなかった……。音楽をあまりにも近くで見過ぎると、つまりいつも分析ばかりしすぎると音楽そのものがだめになると思う。やり続ける事、音楽をプレイすることが大事だ。

かつての暴君ジョン・アンダーソンと彼の指導性について。

ビル・ブラフォードは、「危機」を発表した後イエス去り、僕の事を"暴君"と決めつけた。他にもそう見る人は何人かいた。そう見られても仕方がない時期は確かにあった。もう少しかけひきを使えば、もっと良い仕事が出来たかもしれないと思う時が何度もあった。確かに一時期の僕は嫌な奴だったのかもしれない。それは僕が自分をミュージシャンだって思えなかったということなんだ。この事は、他のたくさんのシンガーにも共通して言える事だろう。

音楽テクニックというものをつかんでしまって、物事が音楽になって頭に浮かんでくるようになると、それを自分が楽器で表わすことが出来ないというもどかしさにぶつかる。そこで誰かにそれを説明しようとするんだけど、中々そのアイデアをつかんでもらえない。すると「なあ、君はこの楽器をこなせるはずだぜ。それなのに僕の頼んだ事を演奏できないというのはどうして



？」と言うのさ。返事は「ジョン、君には分からないかもしれないが、そのアイデアは非オーソドックス過ぎるよ……。」というものさ。そこで僕は「それなら非オーソドックにやれよ！それともそれは君には難し過ぎるのかい？もっとやさしいものにしてくれって言うの？」と反論してしまう。今考えてみれば、そんな事を言えば人を苦しめる事になるということは分かりきっていた。僕はイエスのようなグループと仕事が出来てラッキーだったと思う。彼等の場合、非オーソドックスな事を注文するのは簡単だったしね。たまにボクシング・マッチみたいケンカになったりもしたけど、それはだいたいに於いて共通の場を求めての闘いであるか、華々しいアイデアの交換というものだった。結果が出せればそれで良かったんだ。時々すごく大変なこともあったけど、結局はやるだけの価値はあった。

主観的時代感やイエスに対する当時の酷評に対して。

ナイスは僕等の好きなバンドだったし、一緒にツアーしたり、時々連絡しあったりしてきた。ジェネシスやジェスロ・タルとも同じだった。彼等のレコードを聞いたり、どこかでバッタリ顔を合わせるのも一度や二度のことじゃなかった。皆でいっしょにショウをやりたいなって思ってた時もあった……。もちろん夢で終わってしまったけど。まったくいい時代だったね。当時の理想はまだ生きていると思う。ただそれをサポートするフラワー・パワーの話をする事が時代遅れなんだ。でもたいした時代だった。僕は多くの人がその当時信じていたものを今でももち続けていて、もう一度花開くのを待っているんだ。ところが70年代も後半にさしかかるとパンクが台頭し始めて、一時期決って「パンクをどう思う」と聞かれるときがあった。でもその質問はいいかげんに、あるいはすぐに答えを出せるものではなかった。その多くはかなりエクサイティングで良いものだったけど、僕はパンクを支援している訳じゃない。当然のことながら、パンクをやっている連中は、僕等のことを目の仇にした。でも場所にかかわらず、僕等は常にまともなショウをやっていると自認していたし、たまに大きい会場で演奏していた。大観衆を前にしてね。そこが攻撃の的になったんだ。べつに憤慨することはなかったけど、でも僕等は相変わらず一生懸命やってたし、新しいアイデアとか、新しいプレゼンテーションを学んだり追究したんだ。だから非難されるような覚えはない。もしも「こわれもの」の後に同じサウンドで続けていったら弁解の余地はないと思うけど、もっと違う方向に進んだんだ。スケールの大きな音楽にね。そして大成功をおさめた。僕等は聴衆に対して何かお返しをしたいと思ってた。だから次の作品では前回のものよりも常にスケールの大きい、そしてプログレッシブな音楽をやりたいと思っていた。成功が僕等の道を示し、僕等が成長し拡張する機会を与えてくれた。才能の及ぶかぎり最高の音楽を作ろうとしてそうなっただけなんだ。時には客観的になり過ぎたことがあったかもしれない。でも僕の場合ステージに上がるとそんなものはなくなってしまったね。ある意味ではスタジオよりもステージの方が良かったと思う。

ニュー・アルバムについて。彼の最近の傾向や方法について。

僕の新しいアルバムは、過去10年間に渡ってイエスでやってきた事に比べても楽な気持で聞くことができるだろう。この事によって今までイエスのイメージに対して拒否反応を示していた聴衆が偏見をもたないでこのアルバムを受け入れてくれると良いと思う。もちろん今までのファンをおろそかにするわけじゃないし、僕としては出来るだけ広範囲の聴衆に向けてプレイしたいと思っているだけなんだ。最近のロック・ファンの間の派閥の障害を除き、扉を開きたいと思っているのさ。このアルバムに収められた「Heart of The Matter」のようなナンバー（ストレートなロック）に対するイエス・ファンの反応を知りたいものだ。この曲をアトランティック・レコードの連中に聞かせたら、イエスのとっている安全な姿勢から余りにもはずれていると思われて拒否されたけど、結局僕としてはこの曲をアルバムに収録すると言ってやったのさ。僕は５年位前に、クラブや小さな劇場に活動を戻すべきだと説得したけど聞き入れられなかった。という訳で僕のプレイする場所はコルストン・ホール、フリー・トレード・ホールとか、いわゆるタウン・ホールになるだろうね。クラッシュやスペシャルズといった連中がプレイする所だ。でもロンドンではアルバート・ホールで演奏するつもりだ。



マイク・オールドフィールド　インタビュー



現在のマイク・オールドフィールドは、まるで絶望のどん底で苦悩しているように、以前よりもいっそう孤独な心境でいるようだ。そんな彼が自分の近況について語ってくれたので過去の話も含めて紹介してみよう。

ニュー・アルバム『ＱＥ２（クィーンエリザベスII世号讃歌）』について触れる前に、彼が最近に至るまでの長い年月で経験し、あるいは直面してきた幾面の至難について記しておこう。マイク・オールドフィールドはもちろん『チューブラベルズ』によって一躍スターダムに伸し上がり、世の人々から天才扱いをされた青年で、その当時は彼の周辺にも、そして彼の成功によってクローズ・アップされたヴァージン・レーベルにも明るい話題が絶えることがなかったのである。病気がちでありながらも充実した日々を送っていた彼の身辺に不穏な影が忍び寄ったのは、ちょうど２つの巨大なコンサートからであった。それは50人もの人数で構成されたオーケストラと合唱団とさらに30人のスタッフを加えた計80人余りによる大規模なイベントで79年４月頃に行なわれたものだった。この誠実なアプローチは当然のことながら彼を破産に近い状況に追い込み、あげくの果てには家かスタジオを売らなければならないところまで追い詰められたのである。このような救い難い状況をふまえて、急テンポで録音されたのが『プラチナム』であり、これだけが50万ポンドの赤字を克復する唯一の方法だったのかもしれない。今年に入ってからは状況が一刻一刻改善されてきた事だけは確かなようだが、それは３月に行なわれた２度目のツアーで10人編成のバンドによるとても創造性に富むコンサートによって自信を得て、これが今回のアルバム発表の引き金になったことでも理解できるだろう。

私は来年までは、別のアルバムを出す計画はなかったのだが、３月のツアーが成功し、今すべき事は何か、と考えてみたんだ。自分としては、特別に思いあたる事もなかったのでアルバムを作ることにした。でも、レコーディングするには、材料不足だったし、そこでヴァージン・レーベルに電話して何か良い案はないものかと尋ねてみたところ、彼等は僕にとても素晴しい助言をしてくれたんだ。結果的に私のこれまで作ってきたアルバムの中で最も自然なものに仕上がった。作り始めた時点では、ただピアノの前に座って、テープ・レコーダーのスイッチを入れてもらい、２～３分演奏してみて、さらにオーバー・ダビングを始めたんだ。たったこれだけの事が、このニュー・アルバムのソースだった。



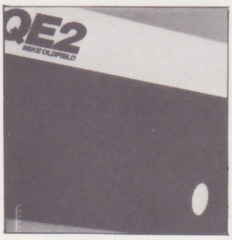




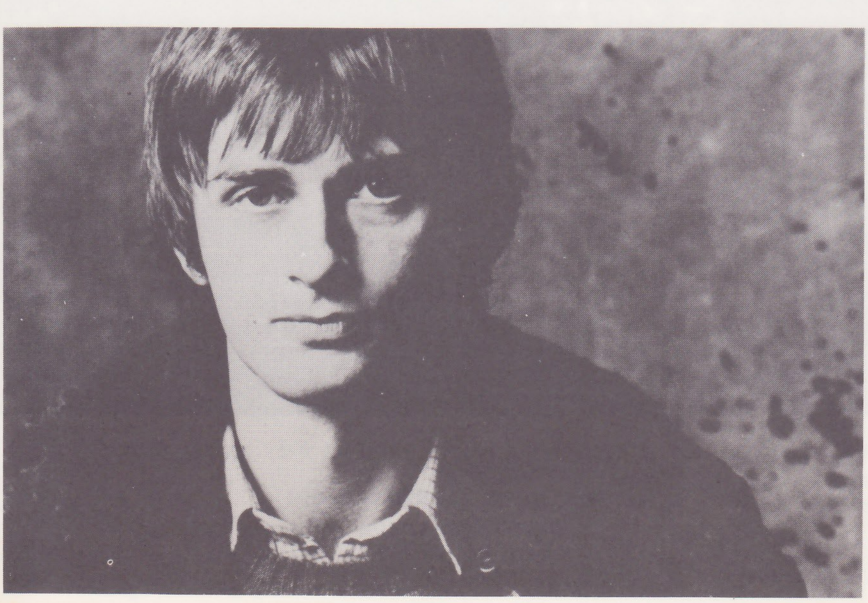


このようにして、リリースされたアルバムには何とジェネシスの一連のアルバムをプロデュースしてきたディヴィッド・ヘンツェルが当っている。驚くべき話ではあるが、マイクはジェネシスの作品というのはほとんど知らなかったらしい。しかしながらヘンツェルとはうまく行ったようだ。

このアルバムにはウワサの曲、ＡＢＢＡの“Arrival”が含まれている。又、The Shadowsの“Wonderful Life”を彼流に料理している。このアルバムは前作の『プラチナム』のＢ面のように短かい曲でちりばめられていて、『インキャンティションズ』やそれ以前のアルバムのような大曲は収められていない。彼の作品の中では批判の対象となってしまった『プラチナム』と似通ったイメージを与えつつ、なおかつジェネシスの香りをそこはかとなく漂わせているこの新作をあなたはどのように受けとめるのだろうか。彼はその独特な音楽性のゆえに狂信的な彼のファンをもかかえ込んでしまい、それは初期の３枚のアルバムである『チューブラー・ベルズ』、『ハージェスト・リッジ』、『オァドーン』路線を今だに彼に期待して、彼の新しいアプローチに渋い顔をし、失望だと言って彼を責めたてている。



QE2
（クィーン エリザベスII世号讃歌）



『チューブラー・ベルズ』があんなにすごく売れたってことも、みんながそれを気に入ってくれたってことも、僕にはどうでもいいことだったのさ。

『オマドーン』は僕にとって悲惨なものだった。僕にとっては、パンクにおけるフラストレーションの発散をやったってことだよ。そういうものなんだ。

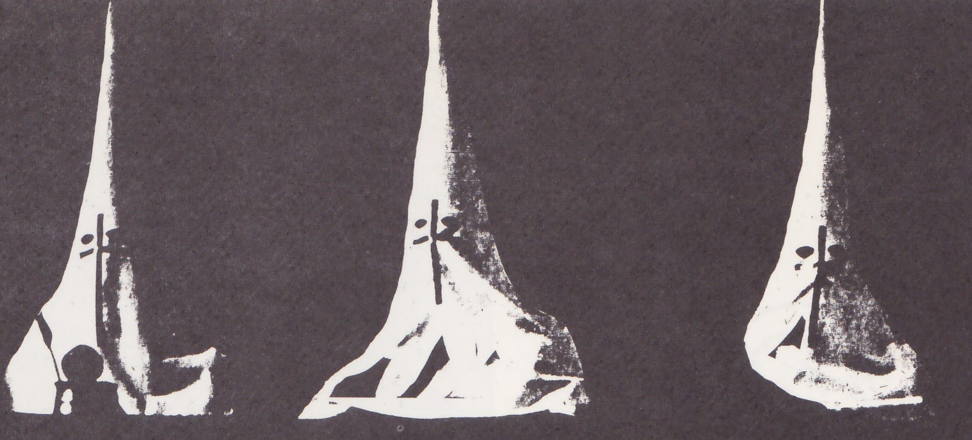
この発言をあなたたちはどのように感じるのだろうか。彼をもとの道――現実や文明を否定していた頃、自身の内側に閉じこもって酒とドラッグで精神のバランスを失ってしまい、彼の言葉でいう“本当におかしくなってしまって、何もできなくなった悲惨だった”頃に引き戻そうとするのは他ならぬ彼の“熱狂的”ファンなのである。

ヘヴィー・メタルはすごい。近頃のヤツは本物じゃないんだけど――ツェッペリンやフリーみたいなのが正真正銘のヘヴィー・メタルなんだ。近頃のバンドってのは、ボリュームを下げたら感傷的なノイズが残るだけでいただけないね。

彼は確かに現在のロック・シーンをうとんじているし、彼の興味をひくようなバンドはポリス、ブームタウン・ラッツ、そしてバグルス位のものである。そういった彼の現在のロック・シーンに対する考えは良きにつけ悪しきにつけ時流に乗れないのである。

彼の今の興味の対象はゲール語の本だそうである。彼は昔のアイルランドの伝説に基づいた“英雄”という映画の音楽を依頼されている。彼は自分の持っていたアイルランドの伝説の古い本を持っていて、それと同じような内容の訳された本を発見して喜び、そのことによって依頼された映画を是非行うべきだと説きふせているようだった。

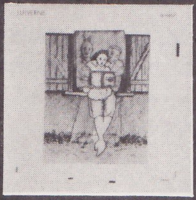
彼は突然私達の目の前に現われ、消え、再び現われた。彼の行く先を一体誰が知っているというのだろう。私でもあなたでもない。多分、彼自身も知らないのだろう。



New Release

RECOMMENDED RECORDS

Slapp Happy/Sort of/近日入荷!!



JULVERNE
「A Neuf」

L. VOAG
「The Way Out」

プロフィールその他全く不明の変態情動音楽。２枚の超大型ポスター付き。レコードはすでに製造中止の模様。

MAGMA
「1001 Centigrad」

長らく廃盤となっていたマグマの幻のセカンド。

その他
Henry Cow
Art Zoyd
Faust
Stormy Six
Samla Mammaz Manna
Univers Zero
Plastic People of the Univers

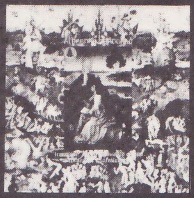
Recommend Records の日本唯一の公認デストリビューターとして、また入手が容易でないヨーロッパ盤を直輸入によりり国内に流布させることを目的とするRadiation特の活動を続けてきたRecommended Records Japan並びにOMNI-PRODUCTIONでは、'81年より本来の意図するところである、マイナー・レーベル設立を目指す第２ステップに入ります。そのため、現在の通信販売業務の規模も多少縮小されますし、広告のアルバムも在庫が限られておりますので、御希望の方はお早めに御応募下さい!

マイナー・レーベル設立準備!!

アルバム制作のための準備期間として、当OMNI-PRODUCTIONでは優秀な作品を広く募集しています。グループ、個人を問いません、連絡先を明記してテープをどんどんお送り下さい。

SPECIAL RADIATION

スペインの２大グループ、**グラナダ**、**トリアナ**の全アルバム、スペイン期待の新人**クラック**。東欧の巨星SBB、ベルギーの天才**ダニエル・シェル**等、入手困難なアルバム400種類を放出中。







OTHERS IN RADIATION

Argarnas Tradgard, Azahar, Bloque, Blue Effect, Booz, Collegium Musicum, Goblin, Heratius Corporation, Iceberg, Jazz Q, Maneige, Omega, Rum, Ripaille, SBB, R. Vimal, etc...

来たる１月22日(木)にオムニ・プロダクション協賛のフールズ・メイト・レコードコンサートが催されます。場所は明大前キッド・アイラック・ホール、午後５時開場です。詳しくは本誌 222 ページをごらん下さい。

詳しい申し込み方法やリストを希望する方は、50円切手同封の上、下記まで御請求下さい。
〒156 東京都世田谷区松原2-46-9・401号
OMNI-PRODUCTION



美のみが形作った神秘なる館の情感 そして飛翔し尽くした壮大で幽寂な雄姿

——フォルムラ・トレ、イル・ボロ——

68年の暮の事であった。ナポリで生まれ、コンセルヴァトリオ公立音楽学校で正式な音楽教育を受け、ルチオ・バッティスティのアルバムなどのセッションで有名な**トニー・チッコ**（ドラムス、リード・ヴォーカル）とローマに生まれ、クエッリ）PFMの母胎とも言われている）に参加していた**アルベルト・ラディウス**（ギター）とリヴォルノで生まれ、ポップ・グループとして有名なイ・カメレオンティで活動していた**ガブリエレ・ロレンツィ**（キーボード）の3人が出合う事によってフォルムラ・トレの歴史が幕を開けた。彼等3人は、共通してイタリア・ミュージック・シーンの立て役者であるルチオ・バッティスティに強く共感し影響を受けていたが、そのバッティスティ本人によって見い出され、彼自身の創造的な祈願のために設立されたヌメロ・ウーノから69年にデビューした。このデビュー曲は、バッティスティとモゴール（もう1人のヌメロ・ウーノの立て役者）のペンによるシングルで「Questo Folle Senti-meto」というタイトルであった。そして翌70年には、デビュー・アルバム「Dies Irae」（ZSLN 55010）を発表しいよいよその真価が発揮され始めたのである。71年は、彼等にとって本当に忘れる事の出来ない年であった。カンツォーネのビッグ・フェスティバルとして広くその名を知られるサンレモ音楽祭に出演し、「La Folle Corsa」を演奏して見事に入賞。これによりフォルムラ・トレは、以前にも増して注目を浴びるようになる。同年セカンド・アルバムにあたる「Formula 3」を発表し、グループのサウンドを確立し、さらにシングル「Eppur Mison Scoradato Di Te」は、71年の年間ベスト・シングル部門9位という快挙を成し遂げたのである。



72年は彼等にとってこの上ない刺激的なものになった。恩師ルチオ・バッティスティのプロデュースによるPFMのデビュー・アルバムが、もの凄い反響を呼んだからである。PFMの出現は、今まで作曲やプロデュースの面をバティスティとモゴールのコンビに委ねていたフォルムラ・トレの根本的姿勢を大いに揺るがしたのである。そのためメンバー自らも曲を書くようになり、バッティスティとの交流も以前よりは弱まっていき、さらにプロデュースもメンバーを通し、バッティスティが行なうようになった。この72年に発表された「Sognando E Risognando」は、ルチオ・バッティスティのプロデュースでありながらも、彼等のオリジナリティを極めたイタリア・ロック史上の永遠の最高傑作と言えよう。これは〝現実的な男の夢〟を描いたもので、4つのテーマからなるトータル・アルバムに仕上げられているが、全4曲中2曲がフォルムラ・トレ自身の作品で、残りが例によりバッティスティ＝モゴールのコンビによるものである。陰湿な空間の中で、何度もくり返されてゆくモチーフは、ラディウスの繊細で啜り泣くようなギターとこれに導びかれるように重なり合うロレンツィの流麗なキーボード・ストリングス・アンサンブルによって重々しい壮大なアンサンブルを展開してゆき、そこには変則的で不安定な印象を与える衝撃すら感じられる。このような緊迫した雰囲気の後に歌い出される「Sognando」は、牧歌的で平和な光景を描き出し、

私達はある種の感情の高ぶりと根源的な〝美〟を見い出すだろう。これは何とも形容し難い見事な場面の転換であり、彼等の表現が実に雄弁である事を示している。優美で華麗でありながらも、形式のみに片寄ることなく、人間の感傷的で起伏の激しい感情を暴露していくイタリア人の真にイタリア的哀愁が多くの人の心を捉えて離さないだろう。そして同年、ギタリスト、アルベルト・ラディウスは、初めてのソロ・アルバム「Radius」を発表した。この後に彼はブラジルへ渡り、アルバムの中の「Aeternum」をリオデジャネイロのフェスティバルで歌って見事に入賞した。このように以前にも増して積極的に活動するフォルムラ・トレは、73年に入ると完全にバッティスティから独立しようと決心し、アルバム「La Grande Casa」を発表した。これは、グループとモゴールの共同プロデュースで、前作以上に叙情的な美を追求したものに仕上がった。自由で解放的なイタリアの日差しのように暖かい詩、そしてサウンドは、アコースティックで自然な雰囲気に包まれているが、驚くほどドラマチックなものに変化し、人間の思い、願い、理想を見事に歌い上げた美の極致を現出したのである。しかしこのアルバムにおけるトニー・チッコのもつヒューマニティーと自由奔放な感情表現の傾向は、いっそうダイナミックでそれを越えてゆこうとするアルベルト・ラディウス、ガブリエレ・ロレンツィの野心と対立を成して、遂に73年10月29日の国際連合児童緊急基金ショーのステージを最後に5年間の活動の幕を閉じたのであった。結局ラディウスとロレンツィの目ざしたのは計算され尽くされたダイナミックなアンサンブルで、器楽そのものの表現の可能性やよりリズミカルでロック感覚の強いものを加味してゆくのが目的であったようだ。後のイル・ボーロでは、この多彩でスケールの大きい面と内向的で感情を重んじる「La Grande Casa」での美的要素がバランス良く消化される事になる。　（角屋　直彦）

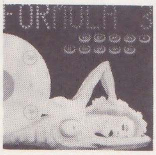


結成当時、Super Gropp（スーペル・グッポと呼ばれたようにイタリアを代表するバック・ミュージシャンやフォルムラ・トレのメンバーが集まって出来たグループである。メンバーは映画音楽やTV主題歌の作曲や名アレンジャーとして知られるヴィンチェ・テンペーラ（キーボード、元フローラ、ファウーナ＆チェメント）、クェッリ、フォルムラ・トレのアルベルト・ラディウス（ギター）、カマレオンティ、フローナ・ファウーナ＆チュメントのマリオ・ラヴェツィ（ギター）、カマレオンティ、フォルムラ・トレのガブリエーレ・ロレンツィ（キーボード）、アレアのストラトスなどと結成していたグループ（元はイタリアNo.1シンガー、アドリアーノ・チェレンターノの親衛隊グループ）リベッリのジャンニ・ダッラリオ（ドラムス）そしてレコード・クレジットには契約の関係で名前をふせているOLOVことボブ・ガッロ（ベース）の6人のイタリアを代表するミュージシャンである。

デビュー・アルバム〝IL VOLO〟は74年5月発表である。ルチオ・バッティスティとのコンビで知られるモゴールがプロデュースを担当している。翌75年にはセカンド・アルバム〝ESSERE O NOU ESSERE? ESSERE、ESSERE、ESSERE〟を発表。その後人気カンタウトーレのファウスト・レアーリとの共演盤〝AMORE DULCE、AMORE AMARO、AMORE MIO〟を発表後、グループを解散、再びソロ・シンガーやアレンジャー、バック・ミュージシャンとして活躍している。日本で発売されているマルチェラのライヴなどもイル・ヴォーロのメンバーがバックの中心である。

（前田　豊）





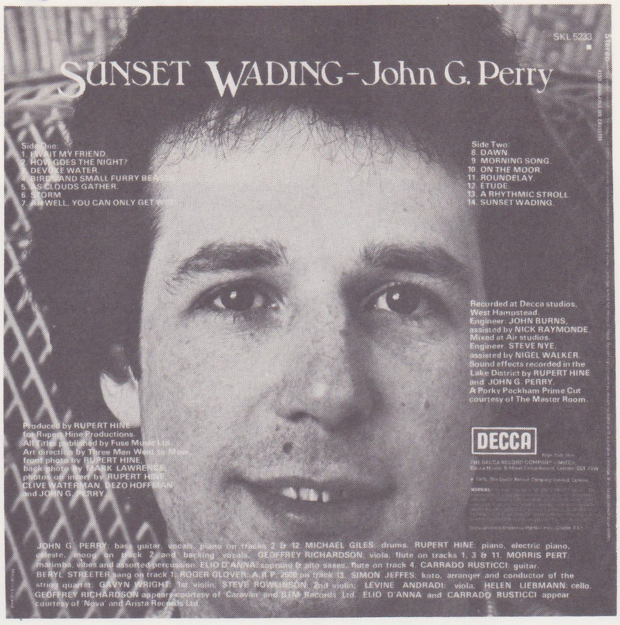
Dies Irae
(Numero Uno ZSLN-55010)
Formura 3
(Numero Uno ZSLN-55013)
Sognando e Risognando
(Numero Uno ZSLN-55152)
La Grande Casa
(Numero Uno ZSLN-55655)
Il Volo
(Numero Uno ZSLN-55667)
Essere O Non Essere?
(Numero Uno ZSLN-55679)

Radius
(Numero Uno ZSLN-55153)
Che Cosa Sei
(CBS:S-81476)
Carta Straccia
(CGD:20008)

America Good-bye
(CGD:20122)
Macedonia
(CGD:
Notte
(CBS:69085)
E Mia Madre
(CBS:69205)
La Gente Dice
(CBS:81472)
Macchine Mecchinete
(EMI:3C 064-18344)
Ia Ia
(CGD:81382)
Cartolina
(CGD:20173)
Piano, Piano, Piano
(EMI:3C 048-50468)
The Pleasure Machine
(Start:LPS 40089)



影の実力者が描き続ける耽美的空間
——ジョン・G・ペリ——



ジョン・G・ペリーはブリティッシュ・ロック・シーンが誇る屈指のベーシストの１人と言えよう。そのクールで洗練されきったプレイに接するなら、誰しも彼の貴重な存在感を認識するに違いない。このような研きぬかれた職人芸とも思える彼のベース・プレイは、長年に渡るセッション・キャリアと多くのバンドを経験する事により養われたもので、同時にブリティッシュ・ロックにおけるアンダーグラウンド・シーンの伝統を感じさせる深みのあるものと言えよう。彼の歴史には、常にかけがえのない努力があったわけである。

トランキュリティと言うバンドにベーシストとして参加後、セッション・マンとして活動するが、彼の才能は埋もれることなく、キャラバン参加により、名前もロック・シーンに浮上するようになったのである。ベーシストとしてのみならず、１人のミュージシャンとしての自己存在を重要視することにより、キャラバンを脱退する。後にカーブド・エアの「ミッドナイト・ワイヤー」に参加する。そしてこのアルバムに於てもプログレッシブでもありかつオーソドックスなベース・プレイを十分に披露したのである。カーブド・エアに参加することにより、自己内部に生じる一個のミュージシャンとしての自己存在の葛藤を明確に悟った彼は、やがて初のソロ・アルバムである「サンセット・グロウイング」をデッカ・レーベルより発表するのである。この「サンセット・グロウイング」は、彼の幅広いミュージシャン達との交流を物語っている。というのはこのアルバム、彼がベースを担当しているのはもとより、元キング・クリムゾンのピーター・ジャイルズ、71年にパープル・レコードからシンガー・ソング・ライターとしてデヴューしたルーパート・ハイン、そしてブランドXのモーリス・パート、元ディープ・パープルのロジャー・グローバーなどのつわものの面々がバックとして参加しているからだ。これらの面々の名を上げただけでも本当にゾクッとくるあの痙攣にも似た感覚が体を走りぬけるのである。

他のアーティスト達もこのような大セッション・アルバムを出してはいるが、得てしてくだらぬ自己満足的な馴合いのレコードになりがちである。しかし、そのような中でこのアルバムやはり著しく際立っていると言えよう。

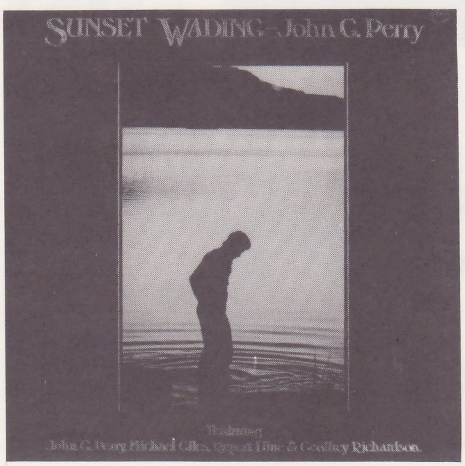
ジャイルスのドラムが歯切れ良くリズムを刻み、ペリーのベース・ラインがそれに乗り、他の参加アーチスト達もその快よいリズム・セクションに吸い込まれるがごとく各々の個性とプレイを溶け込ませて行く。ジャージィでありかつブルージィである、楽しく聴ける数少ない名盤の１枚であると言えよう。

彼が参加した数々のアルバム、たとえばルーパート・ハインの「ピック・アップ・ボーン」、「アンフィニイッシュト・ピクチャー」や、キャラバンのアルバムを聴くことは彼のファンにとって当然のことであろう。しかしながら、彼を知る上でこのアルバムは必要不可欠なものであると言えよう。

ジョン・G・ペリーはこのアルバム発表後グループの１員としてまたベース・プレイヤーとしてルーパート・ハイン、元ペドラーズのトレヴァー・モイス、アーク・ワーナー等と伴にクワンクム・ジャンプなるバンドを作り活動を開始する。しかしあくなき彼のミュージシャン魂はつきることなく、その後イングランズ・フィティ・エジソンというバンドで、ロビン・ラムレーのプロデュースによって新しい日々を送ることになる。このイングランズ・フィティ・エジソンは、ミック・ロジャーズ、クライブ・バンカーの他にRSOレーベルから「MARS CAPE」を発表しているジャック・ランカスターを含んでいる。

このようにジョン・G・ペリーの経歴を軽く書いただけでも彼の在存がブリティッシュ・プログレッシブ・ミュージック・シーンに於いていかに重要な位置を占めているかがうかがえる。そして60年代後半から70年初頭にかけてのロックの一大混乱期を生きぬいてきた彼、すなわちジョン・G・ペリーは今、私達に何かを問いかけているのである。

（岩本晃市郎）



Grape Fruit / Around Grapefruit
(Stateside SSL-5008)
Grape Fruit /
Gringo
(MCA MKPS-2017)
Rupert Hine / Unfinished Picture
(Purple TPSA 7509)
Tranquility / Tranquility
(Epic EPC-64729)
Caravan /

Yvone Elliman / Food of Love
(Purple TPS 3504)
Sunset Wading

Quantam Jamp / Quantam Jump
(Electric TRIX 1)
Quantam Jamp / Barracuda
(Electric TRIX 3)
Golden Guiltrap / Visionair
(Electric TRIX 2)
Golden Guiltrap / Pearious Journey
(Electric TRIX 4)
Golden Guiltrap / Fear of the Dark

(Electric TRIX
Aviator /
(
Aviator /
(
Dave Greenslade / Cactus Chor
(
Cafe Jacques / Round the Back
(Epic EPC 82315)
Cafe Jacques / International
(Epic EPC 83045)

スパニッシュ・ロックの発火点
初めての創造集団

—カナリオス—

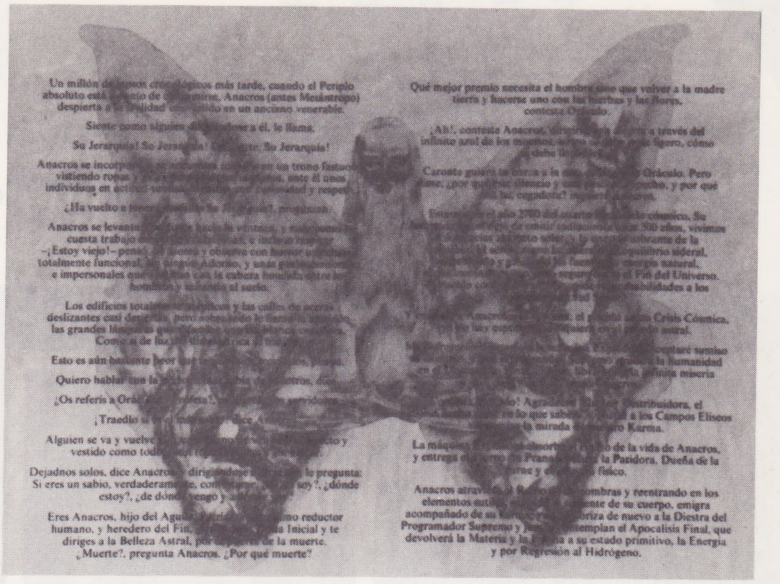
大作「四季」をめぐっての解釈





そのテーマの大きさ、音色の抜粋、音の構成の複雑さと論理性、テクニックの適確さ、演奏進行の意外性、そして、その最終的に人の三半器官を通して伝わる音楽としての全てが、何といっても感動的であるということが、まさにこの作品の魅力だと思うのです。

Los Canarios――自らをつねに歌を忘れることのないカナリヤたちと名付けたこのグループは、60年代後半に、テディ・バウティスタを中心として8人編成により結成され、当時は、ホーン・セクションを加えたグループ・サウンズとして活動していました。しかし、この形態では、リーダーであるテディ・バウティスタ自身が考える音楽の創造は不可能である、と限界を感じた彼は、グループを解散し、しばらくは第一線を退き、彼が過去5年間におよぶ創作であるアントニオ・ヴィヴァルディの作品中、もっとも有名な『四季』を題材とした、一大ロック・シンフォニー「シクロス―Ciclos」の現実化と、それに耐えうるミュージシャン、アーティスト、スポンサーをさがすために、3年を費しました。そしてつ



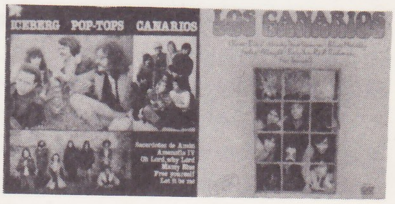
いにはレコーディングされる段階に至り、多くの犠牲を払ってまでもその制作の魅力にひかれた一流のスタッフを集める事ができたのです。ともかく、彼が生きてきた半生すべてを賭けた作品であることは、アルバムのどこをとってみても感じることができるんです。

1974年スペイン本国で発表された〝シクロス〟はダブルアルバムで造られています。それぞれのSideが、春、夏、秋、冬、を形どり、ヴィヴァルディの原曲でいえば、作品8のひとつ目にあたる〈春〉が、第1面サイドAすべてをつかった「第1の輪廻ー遙かなる楽園ー」となります。サイドBすべてをつかった「第2の輪廻ー次なる深淵ー」は、「四季」作品8の2にあたる〈夏〉がモチーフとなっており、2枚目のレコードサイドCのすべてを費した「第3の輪廻ー未来の境界ー」は〈秋〉にあたり、サイドDさいごの面すべてをついやした〈冬〉は、「第4の輪廻ー復元された鎖ー」と題されています。『最初の叫び』によって幕はおとされ、4面すべてを流れる大河は、「新しい世界の最初の光景」➡『宇宙のきびしい調和への第一歩』➡『途方もない変容』➡『新しい世界での最初の疑問』➡『神経質なる子供への歌』➡『初めての逆境への批判的な讃美歌』➡『途方もない小コンチェルト』➡『内面的な日記の銀色のページ』➡『狂気のプログラムへの反讃美歌』➡『狂気の過程』➡『途方もないクリスマス・キャロル』➡『危機』➡『影の踊り』➡『終末の無情な調和への讃美歌』➡『途方もないねはん』➡『高級な対話』➡『過度の破滅』➡『天啓』と連なり、それは、宇宙レベルでの大きな思想とでも言おうか、テディ・バウティスタが考えるところのその〈現代〉という時代背景、五感がかんじることのできる全ての環境、そして、瞬間にまで見つめた静を、動かし積み重ねて、連続的な流れとなしうる、空間の中の時間、しいてはそれらをすべて司る〈神〉という概念の音楽化であると思うのです。(「2001年宇宙の旅」が音楽になったようなイメージで捉えてもらったほうが、より適確かもしれないな)また海外輸出向けの英語ヴァージョンのシングル・アルバムに集約された形で、日本ビクターより76年に発売された事もありましたが、当時は、まったく評価を得ませんでした。それには、編集内容が貧弱だったこともあって、今年、新たにキングより原盤に忠実な形で発売されることは、本当にうれしい事です。

「シクロス」の演奏活動は、作品完成後、約1年スペイン全土で興業され、そのコンサートを見た者は、2度と忘れることのない感動と、衝撃を受けたと言われています。そして今日のスペイン・ロック界のサウンド・ポリシーに対して、「シクロス」のあたえた影響は余りにも大きかったといえましょう。数々の若手ミュージシャンを最も精力的に今日送り出している新興レーベルCFEの社長Carlos Perez Alvaroさんは、CANARIOSのマネージャーだったことも、見逃すことのできないことです。〝シクロス〟の興業終了と共に第二期カナリオスは自然解散となりましたが、Teddy Bautistaは、今日に至るまで、数えきれない程のアルバムに、プロデュースの仕事をしたり、実際にゲスト参加したりして、スペイン・ロック界の大御所として君臨しています(作年CFEレーベルから発表されたNos Va La Manchaの中で、計23分に及ぶソロ演奏を聴くことができます)。

グループとしての沈黙が5年以上も続いていることは、新生第三期カナリオスの創造も真近いものと、期待しているのですが、果たして次は、どんな企てを練っているのでしょうか……。 (高石 源太)



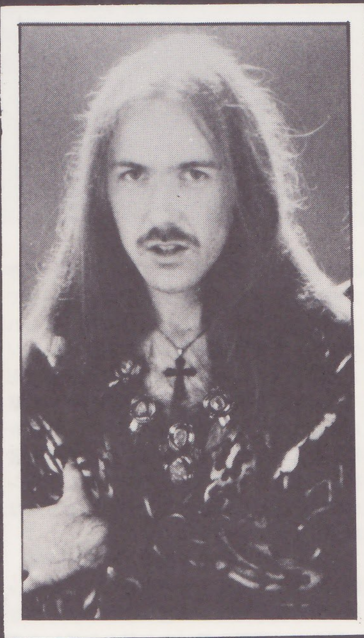


Liberate
(GM:
Liberate (best album)
(GM:747)
Iceberg / Pop-Tops / Los Canarios
(live album)
(CAU-5113)
Ciclos '74
(Ariola:87904-5XD)
Alfredo Carrion /
Los Andlares Del Aquimista '75
(Gong:S-32.838)
Taburiente / Ach Buarne
(Caudal:
Goma / 14 April
(Gong:S-32.667 '75
Triana / 1st-3rd

ハード・ロック・セミナー

連載第一回

ウルリッヒ・ロート



昔々、いま流行のヘヴィ・メタル・ロックが、まだハード・ロックと呼ばれていた頃のことでした。あるところにブラック・サバス狂いの少年がおりました。少年の狂い方はそれはもう重症で、一日に何度も何度も「パラノイド」や「NIB」を聞かなければ夜もろくに眠れないという有様でした。しかし、そのうちにそれだけでは満足できず、少年は新しい刺激を求めるようになりました。少年はレコード屋に足げく通い、片っぱしから聞きまくりました。ツェッペリン、パープルは言うに及ばずウィッシュボン、バッジーから、果てはストレイ・ドック、ベトラム、エルサレムといったところまで漁り回りました。その甲斐あってか、少年の症状もだいぶおさまりました。でも、結局それも束の間でした。少年は再びそれ以上の刺激を求めてしまったのでした。そしてついに、少年は輸入レコード店という禁断の地へ足を踏み入れてしまうのでした。この時少年は叫びました。「おぇ〜っ！俺の知らないグループのアルバムが、こ、こんなに、ぎょーさんある。こないに見知らぬアルバムがあれば、第二・第三のサバスなど、死ぬほどあるに違いない。ここは宝の山や」その日少年は有り金全部をはたいて、見るからにハードっぽいレコードをたくさん買い込みました。でもそれは皆クズでした。「ちくしょう。こんなバカな。俺は運が悪かっただけに違いない。きっとどこかにすごいハード・ロックがあるハズだ。」少年は必死でした。度重なる失敗にもメゲず買いまくり、しだいに賢くなっていった少年は、まだ日本盤が出る前のUFOやジューダス・プリーストを掘り出して悦に入っておりました。しかし、少年はこの頃からプログレッシヴの魅力にもそうとう引きつけられていました。「たしかにプログレはすごい。でも俺はハードで育った人間や、そない簡単にはハードを見捨る訳にはイカンのや。」と、考えていた少年も、'74年頃からでしょうかハード・ロックの新譜が申し合わせたようにつまらなくなり、しだいに数も減ってきた時にはさすがに観念し、「ハード・ロックはもう煮つまってしもた。これからはプログレの時代や。それは充々わかっておる。でもここまでやってきたんや。せめてもう一度、もう一度だけ、目ん玉からジェット噴射の飛び出すようなゴツイハード・ロックに巡り合わせてくれ。」と祈るのでした。そんな或日、少年は某輸入盤店で一枚のレコードを手にしておりました。「スコーピオンズか、まだ生きとったんか。へぇー〝フライ・トゥ・ザ・レインボウ〟か。〝ロンサムクロウ〟は少しイモやったけど、多少は良くなったかもしれんな。」と考えそれを買って帰りました。さてそれに針を落とした少年、いきなりトーンアームの響き、そして始まる。〝スピーディー・カミング〟。「こ、これだぁーっ。これが

俺の頭の中にあったギターの音色だ。誠のハード・ロックだ。くァくっくっ…。ハード・ロックはここに完成した。もうこれ以上のハード・ロックは出ない!!」幸福にひたる少年の目には涙さえ浮んでいたのです。こうして少年はこのスコーピオンズのあまりの素晴らしさ故にハード・ロックへの義理立てを断ち切り、プログレッシヴの道へと進むことができたのでした。めでたし、めでたし。

と言うのが、今でこそ東欧だの北欧だのとマイナーな国のマイナーなプログレを、ふんだらへんだら言ってる私の〝熱中時代・ハード編〟なんだけど。なぜに、こんな生き恥をさらすような馬鹿げた話を長々とするのかと言うと、最近のヘヴィ・メタルの過熱ぶりにとうとう本誌でもそれらの動向を扱うべくこととなり、今まで隠れリード・ロック信者の身であった私が大手を振って、しかも連載で書かせてもらえるという、あまりの嬉しさについ筆がすべったという次第なのである。





さて、この記念すべき連載第一回は私のハード・ロック狂いに引導を渡したスコーピオンズの当時のギタリストで、最近はエレクトリック・サンを率いてますます血気盛んなミスター・ヘヴィ・ギター、ウルリッヒ・ロート氏に御登場願おう。

ウルリッヒはスコーピオンズ脱退後すぐにエレクトリック・サンを結成し、ファースト・アルバム「天地震動」を発表している。これは〝ジミ・ヘンドリックスの魂に捧ぐ〟とクレジットされていることでも解るように、楽器としてのギターを超越したもの、つまりギターによる芸術表現の限界を拡張しようとするという、かなり古くからある試みではあるがあまり成果が見られていないテーマに真向うから挑んだ意欲作であった。これは彼が長年暖ためていた懸案であったと同時に、聞き手に対して〝かゆい所まで手が届くほど〟気を使ってくれるスコーピオンズで長くプレイしてきた彼の、ギタリストとしてのフラストレイションを一気に放出したアルバムと言えるだろう。それだけに尖鋭的であり、スコーピオンズの分身を期待していた方々にはかなり難しい、大人向きの内容であったようだ。



さて、この度発売されるセカンド・アルバムの方はと言うと、これまたファーストとは感じがだいぶ違う　ファーストのレコード・セールスとか最近のヘヴィ・メタルの形傾を分析したのか、かなりスコーヒオンズに近い　もともと私はスコーヒオンズ・タイフの方が好みなので万々才なのだが、このアルバムにおける彼のギタリストとしての熱意はサウンドとかフレーズというよりも、音自体の処理や録音により注がれているように思える　その証拠に、録音はロンドンのオリンヒック・スタジオで5ヶ月間、オヴァー・タヴはハンブルクのバーンウエイ・スタジオで2ヶ月間、ミックス・ダウンは同じくハンブルクのルーゼル・スタジオで2ヶ月間といった具合に、かなり念入りな作成が行なわれている　だからと言って、サウンドの方がないがしろにされているという訳では決してない　まずA－I〝キャスト・アウエイ・ユア・チェインズ〟で最初の衝撃　スコーヒオンズをほうふつとさせるノリのよいメロディアスな好曲　その後にレインボーほい曲なんかも入っていたりして、ゴキゲンなまま4曲目のタイトル・ナンバー〝ファイアー・ウインド〟でA面の最高潮を迎える　これはこのアルバム中最もお気に入りのナンバーだ　そしてB面は、ウルリッヒ独特の節まわしでヴァージン・キラー・タイフの〝ジャスト・アナザー・レイボーで幕を開けるが、何といっても組曲の〝エノラ・ゲイ〟だろう　これはもちろんヒロシマに原爆を落としたB　29の愛称である　披爆とは、我々日本人にとっては拭い去れない暗い記憶ではあるが、ウルリッヒが演るとまつたく隠惨なイメージとならないのがミソ　なんせドイツは味方だったもんね　こうやって楽しいうちにアルバムは終ってしまうのだが、感想は大満足採点はAの中というところだろうか　ハード・ロックの本質が聞き手を乗せて楽しませるというものであるなら、このアルバムのコンセフトは成功しているし、おそらく正しいだろう　どちらにせよ、'72年当時のハード・ロックの抱えていた問題意識や切迫感の担い手は、現在ではニュー・ウエイヴのものなのだから、単にアミューズメントを与える者としての彼らの必要性は増していることには間違いない　疲れた時や滅入った時は、やっぱりハード・ロックが一番だからね

（羽積秀明）





Formura 3



Albert Radius

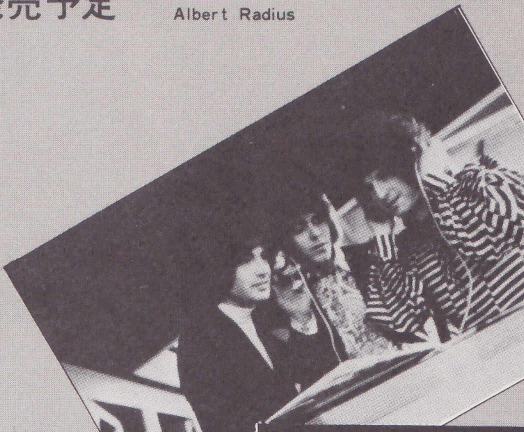
ヨーロピアン・ロック発売予定

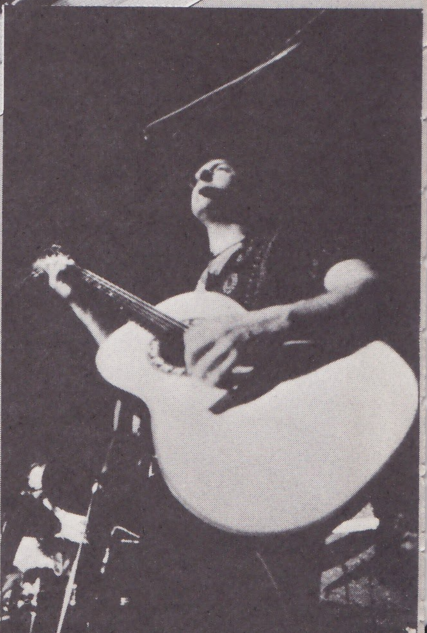
長い間お待たせしました。今回は、一番リクエストが多かったヌメロ・ウーノ・レーベルのフォルムラ・トレ、イル・ヴォロを獲得し、さらに幻のアクア・フラジーレのアルバムも加えて計5枚のイタリアン・ロック最高傑作をシリーズに加えることができたのだ!!

これは、僕も含めたキング・レコードの多大な苦労によってようやく実現した企画で、さらに皆様からの熱心なリクエストのおかげでもあってこれからのユーロ・ロック・シリーズもいっそう充実したものになると確信してます。本当に熱心な皆様の御期待に答えられるように、これからもマイナー・レーベルを獲得していきたいと思っていますが、今のところ**クランプス(伊)**、**グロック(伊)**、**クリプト(仏)**、**スカイ(独)**を目標に努力を続けています。この4つは最も有力な候補となっていますが、さらには、ドイツの古典的レーベル、**オール**(タンジェリン・ドリーム、アシュラ・テンプル、マイソス、グル・グル、フローデ・コロンなどの旧譜)、**ピルツ**(ヘルダーリン、ポポル・ヴフ)、さらにスペインの**ゴング**(グラナダ、トリアナ、ゴティック)や**チャパ**なども考案中です。

さて今回のパートV、そして次回のパートVIの2回に渡ってフォルムラ・トレ、イル・ヴォロ、アクア・フラジーレの計5枚が発売されるわけですが、これを記念してこれらのシリーズ計16枚のアルバムの中から10枚をお買上げ下さった人には、**㊙特典レコード**(マニアが泣いて喜ぶ超貴重盤)をプレゼントすることになりました。これについての詳細なことはパートVIで報告するのでどうぞ御期待下さい。なおパートV、パートVIのすべてのレコードのライナー・ノーツのコーナーには、特点券がついているので保存しておいて下さい。

キング・レコード
たかみ　ひろし





Albert Radius

The Tide is High!



POPの1サンプルとしてのブロンディー

by 中島　達弘

（はじめに）

デヴォラ・ハリーは今やポップ・ロックの女王である。デヴォラ・ハリーはまた、ディスコの女王としても、パーティーの女王としても、ファッションの最先端としても、パルコの道標としても、女優としても、モデルとしても、あらゆる面でロックとは無縁の人にも、その白痴美的な顔を拝ませている。そして、彼女の持つその多才な能力程デヴォラ・ハリーのことをブロンディというバンド名と同一視している人々も少くない。昔、彼女は一度来日し、その時の客の入りが余りに悪くホテルを追い出された、というのは有名な話である。ニューヨーク・アンダーグラウンドの女王としか言われていなかった彼女を何がここまでメジャーにしたのであろうか。ニューヨークという都市なのか？　彼女自身の方法論によるものなのか？　ここでは、いわゆるアヴァンギャルド、アンダーグラウンドと言われ日の目を見ることのなかった一前衛ロックバンドがＰＯＰという道を極めることにより、メジャーとなり莫大な資本を得るに至ったその事実を、ブロンディという顕著な１サンプルをもとに解析していきたいと思う。

（アヴァンギャルドとポップの相互作用について）

アヴァンギャルド、アンダーグラウンドとは何なのか。またそれと同系列上にポップが位置しているのに何の意味があるのか。さらに、ある音楽がポップとして認められる為には必ずといっていい程ファッションが仲介しているのだが、そこに何の意味があるのか。まず、これらのことについて考察してみよう。つい最近、アルバム〝the Wall〟はＰ．フロイドにより全世界に爆発的大ヒットをもたらしたのだが、そうなってもまだ彼らを前衛音楽グループという人間がいるだろうか？〝the Wall〟を一聴してみれば確かにＰ．フロイドらしい音創りだが、前衛音楽につきものの霊性が明らかに欠如していることに気着くだろう。では、Ｐ．フロイドはもうダメなのか？そんなバカな事は決してない。Ｐ．フロイドはＰ．フロイドなのだし、完璧な不変の外見を持ち多くのどんなに心の視力の弱い人にもそれと分る形を持ったＰ．フロイドなのである。彼らが前衛音楽家グループと言われた頃、今、聴いてこそ現在のＰ．フロイドという生命体を基にして理解で





きるのであるが、それは単にP．フロイドの軌跡をフィードバックしただけであって前衛音楽バンド、P．フロイドを掴んだのではない。当時、彼らが出たての頃はやはり彼らは四次元的で掴み様がなく、ただ沸いてくる霊性のもとに彼らはデヴューできたのである。それ故、彼らが前衛音楽家グループと言われたのであるが……。その後、彼らはサイケデリックという流行のファッションのもとにより多くの人に、より普通の人にと分ってもらえるようその奥に秘めた魂の心臓は失わずに外見のみをさらに明確に改造し、変革し、作り上げていった。

これは前衛音楽家バンドが広く受け入れられるようになった一例だが、今、ここで私は当然のことのようだが余り、はっきりとは知られていない面白い事に気着いた。全世界的に爆発的なヒットをとばし、それを持続させる為には、パンクが長続きしなかったのも併せ考えて、一度は前衛と呼ばれることが必須の事のようなのである。ビートルズにしてもしかり、ドアーズにしてもしかり、そして、自らの姿を、決して魂まで浸蝕する事のないよう最も商業的に見て有利な層に合わせ変換させていく。そうすることにより自分とは違った形をしている自分を創っていく。これが必要なのではないだろうか。私は最近、出版された本の中で『コインロッカー・ベイビーズ』という村上龍著の本が気に入っているのだが、その中にハシという一人の気の弱いホモ少年をスターにしていく過程が描かれている。それは大変に印象的な場面なのである。彼は一度スターへと装飾されてしまうと、昔の友人、その他自分に関係した人々と一際の面会を拒絶する。その理由が「僕はもう昔のような僕じゃない」というものなのだが、これはハシがメジャーに乗り込む為、さんざん改造された後、また元の自分に戻らないようにする為の自己防衛本能的な発言なのではなかろうか。やはり、アヴァンギャルド、アンダーグラウンドがメジャーになる為には外見の改革が必要なのである。それは主にファッションという爆弾により成され大衆の中に飛び込んでいく。最近、前衛畑からファッションという爆弾を抱え大衆の中に飛び込んだブロンディを台頭とするウルトラヴォックス、M等は皆、ポップという分野に集約されている。思うにポップというものはこれから先、前衛というものを開放的にしていく一手段となっていくのではないだろうか。というのは、G．ニューマンがデヴューした時、彼はしきりとウルトラヴォックスを指示した。それにより、今まではそれ程知られていなかったウルトラヴォックス、ジョン・フォックスが一挙ヒット街道を突き進むことになったからである。ポップはアヴァンギャルドから派生したが故にこういったことも可能となる。これは今までになかった仲々生産的な相互作用である。それにより前衛音楽家たちは貧困から救われるということになるのだから。

その様なことから、やはりポップはアンダーグラウンド、アヴァンギャルドの同系列上にあるし、それにはより奇抜なファッションがつきものなのだ。

（その一例としてのブロンディ）

その事を見事に裏付けさせてくれるブロンディの様々な話をここに紹介しよう。ポップ・ミュージックは売れてこそ、儲けてこそポップ・ミュージックである。とにかく売らなくてはならない。その点においてブロンディの商業手段は徹底している。例えば、アルバム、"Heart of Glass"の出た時の話であるが、大抵のアーティストはヒットを狙ったアルバムを発表した時にはワールド・ツァーなるものを行う。が、彼らに限りそのような野暮な真似は行わなかった。彼らは4000万円を投資し、レコードの内容に見合ったビデオを作り全世界へ送った。考えてみよう、コンサートをやりながらアルバムを売っていくのと、高質のビデオを作り、それによりレコードを売るのとではどちらが実利的かを。ここで、それはミュージシャンにあらぬ態度と目くじら立てる方も大勢おられ





るであろう。が、もしこれが新しいタイプの、そう最も新しいタイプのミュージシャンの伝達方法だとしたら……。デヴォラ・ハリーはその後も視覚的なものに非常な力を注いでおり、これからのレコードは見る時代だと公言している。

また、ファッションの面においてもしかりである。デヴォラ・ハリーの衣装が10worst dresed に選ばれたことがあったが、彼女をそこに挙げ、「10セントで踊っても５セントの釣銭が来る」と言ったブラックウェルというデザイナーこそ、デヴォラ・ハリーの衣装担当、その人なのである。ポップにおいて美しい、醜いはどうでもいいことなのだ。要は奇抜であればそれでいい。相手に、大衆にショックを与えていればいいのである。快いショックを。さらに彼女は「ユニオン・シティ」という映画に主演で登場していたのだが、後にこの映画は商業性がないとのことで一般公開しないままにお倉入りになっている。これだけ見ても、ブロンディなり、そのバックなりが売る為に、広く浸透させる為にどれだけ努力しているかが分るだろう。

そんなセクシーさがシンボルのデヴォラ・ハリーにアメリカ国民が今は亡き、古き良き時代のマリリン・モンローの影を追い求めるのも当然と言ってしまえばそれまでの話である。アメリカは現在、危機に瀕しているのは周知の通りである。大方の予想を裏切り、カーターならぬレーガンが当選したのもアメリカ国民が強い人、頼れる人を追い求めている為だと、どこかの政治評論家が解説していた。ブロンディことデヴォラ・ハリーの後にはそんなアメリカの社会情況までが尾を引いているのだ。これは同時にポップ・ミュージックというものに全世界の荒んだ社会情況が含まれていると断言しても過言ではなかろう。前衛から派生し、多くの人に受け入れられているポップ・ミュージックのこれは主軸となる存在要因である。

（今回のアルバムについて）

さて、そうしたブロンディの最新アルバム、「オートアメリカン」についてであるが、あなたが今までポップというものを軽視していた前衛ファンであるなら、A面１曲目の『遙かなるヨーロッパ』には肝を抜かれることだろう。

「移動したいという絶対的な欲求と自由という名の宗教の巨大な物質的誘惑によって

クルマは人類を予想外の次元へと導いた」といった詩で始まる、実に電子的な混沌としたこの曲は正にこれからのポップ・ミュージックの方向性を指唆しているのである。すなわち、前衛から派生したポップ・ミュージックが再び前衛に回帰しだしたかのような。

このアルバム、他の曲の歌詩は皆、ブロンディお得意の軽いラヴ・ソングでがっかりしてしまったが、曲という面ではかなり刺激的な要素を持っている。このアルバムは歌詩によりアルバム・コンセプトを示すことを拒絶し、曲によりコンセプトを見せているのである。アメリカ大陸が発見され、今日のような狂気すらファッションの一形態となってしまう情況に至るまでを描いているのだが、一曲一曲、その当時に流行ったロック、ジャズ、スタンダード、そのような形式で統制しているのだ。これは単なるアイデァに踏み留まらない、おそらく成功するであろう実験のように思える。また、アンダーグラウンドで育ったブロンディが一躍スターダムにのし上がるまでの苦心を綴った回想のようにも。プロデュースにおいてもブロンディはマイク・チャップマンと再び活動しているし、そのことについて「彼はアルバム向きだから」と言っていることもあり、どうやらこのポップという急激に成長した分野は放って見ておく訳にはいられないようである。おそらく今後、凄まじい発展を見せるのは必至である、一つの音楽的分岐点なのだろう。

インデペンデント・レコード＆テープス



昨今、マイナー・レーベル、インデペンデント・レーベルの台頭が目立っているが、けっして新しいものではないこうした自主的機構によるレコード製作、販売がここ数年来我々の関心をひくのも、スロビング・グリッスルの成功をはじめとして、アンダーグラウンドなアーティストたちがパブリックな音楽産業とは別箇にノン・コマーシャルな活動の戦線をそうした自主機構によりひこうという気配がうかがわれる為である。金銭的な問題上、録音技術などは大手のものにおよばないとはいえ最近はかなり良質な音が得られるようになっている。音質へのこだわりはミュージシャンに自明の事である一方で、レコード盤とは産業主義の一オブジェであるという従来の偏見が含まれている事も事実だ。レコードを完結した作品とみなすか、単に音楽的営為の一つのプロセスを示すードキュメントとみなすかでレコード製作の意図はかなり変ってくるであろう。いずれにしろ最良の事は、こうしたインデペンド・レコード作家たちに金銭的な問題がなくなるということであり、そうすれば品質ともに期待がもてるという事だ。プレス数の少ないのも利益を第一の目的としないからであるが、回収できねばどうしようもない。今回はユーロック・デイストリビュージョンのカセット・テープ、レコードをはじめとするこうした動向の一端を紹介する。

Eurock Distribution

米国の雑誌「ユーロック」が現在進行中の「ユーロック・ディストリビューション」について以下に紹介する。
「ユーロック」は米国に於て言葉上の問題や音楽形態上パブリシティーを獲得するのが困難なヨーロッパのロック・アーティストを紹介してきたわけだが、誌上とは別箇にヨーロッパのアーティストに関するブックレットを独自の方法でディストリビュートしている。それは以下のようなものだ。

○Magma○

Antoine de Caunesによるマグマの歴史とフォト、ディスコグラフィー等。フランス語によるテキストを収録。

○Hopes & Fears Booklet○

アート・ベアーズのファースト・アルバムのテキストとなるであろう種々の論稿、引用文、ラビリンス学、クリス・カトラーの「地図作成についての予備ノート」他。

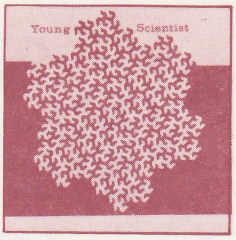
○Un Certain Rock ? Francaise ♯1,2○

フレンチ・ロックに関する合本。フォト、インフォ、ディスコグラフィー他。

○The'80's ♯7/8 Sans Titre○

西ドイツのアルターネーティブ系の雑誌'The '80s,の特別号。アーティストの寄稿文、カラー・グラフィック、インフオ他。

レジデンツ、ペル・ユビュ、クローム、LAFMS等の活動する米国西海岸では、こうした連中とは別に明らかにユーロ・ロックの影響が顕著であると目されるアーティストが台頭している。ユーロック・ディストリビュージョンの扱っているテープ、および自主製作のディスクのなかにはこうしたものが幾つか含まれている。まずユーロック・デイストリビュージョンはそれほど目新しくはないヨーロッパのアーティストを扱っているのでそれを列挙しておこう。プラスティック・ピープル、ジョン・リーベングッド、メタボリスト、コス、マクロマサ、アリエル・カルマ等がそれである。次にワシントン州シアトルの「パレス・オブ・ライツ」で活動しているK・レイマー、ヤング・サイエンテイスト、マーク・バレッカ＆ローランド・バーカー等は、テリー・ライリー、フィリップ・グラスそしてユーロ・エレクトリック・ミュージック、イーノ等のフィードバックにより生じたと推される音楽形態をもち、アーチー・パターソン、アノード・プロダクションの協力でカセット・テープ、レコードの製作を行なっている。またコロラドのムネモニスト・オーケストラのようにアメリカン・ミュージックのバックグラウンドをもってアート的、エクスペリメンタルな手法を展開しているものもある。シーランドのネガティブランド等と同様にこうした類型のパラフレーズはオルターネーティブ・ミュージックのなかに発見できる。







○Mnemonist / Mnemonist○ Some Attributes of Living −System○

ビル・シャープをコンダクターとして10～20人のアーティストにより形成された集団ムネモニストはコロラドの自主レーベルDysから'79年、'80年に1枚づつLPを製作している。彼らのサウンドはフリー・ジャズ的インプロビゼーション、新聞記事、詩、小説などの断片、エレクトリック・ノイズ、テープ・コラージュ等を合体したヒューマニスティックなコンバイン・ミュージックといえよう。オーソドックスな即興演奏のパッセージに依存しているものの、「生活システムの一属性」というタイトルが示すように、意味と無意味が雑然と散在する生活−行為の関係性を意図するノイズ・メデイウムであろうとする目論見が感受できそうである。レコード製作、カヴァー、ブックレットのアート・ワーク等、全てムネモニスト自身によって手がける。

○K・Leimer ○Natural History / The Mind and It's Likeness

○Translucent / Memory ○

○Fiction / Decade ○

○Closed System Potentials ○

最初の二巻のテープは77年から78年にかけて製作されたもの。79年製作のシングル「フィクション/デケード」は300枚の限定プレス。80年になってアルバム「クローズド・システム・ポテンシャル」が発表された。オブリーク・ストラテジーズの使用等、イーノの直接的影響下にある。メロディックで印象主義的マチエールをもつ神経質なエレクトロニクス・サウンド。

○Melodic Energy Commissions / Migration of the Fraser

○D・A・Dattmar ＋Gerald Toon / Synthesis ○

メロディック・エナジー・コミッションズは、もとホークウインドのシンセサイザー奏者、デル・デットマーを中心に結成されたバンドである。ジェラルド・トウーンはカナダのミュージシャン。M・E・Cによる2作のＬＰとデットマー/トウーンの共作によるテープがある。シンセのコズミックなサウンド、民族的気分をもつ曲想、プログレッシブ・ロックの展開が独自のファンタジー世界を作りだしている。

○Plastic People / 100 Points ○

Bozi Mlynプロダクションと協同でリリースされたプラスティック・ピープル・オブ・ザ・ユニバースの'77年10月1日チェコで開催された「セコンド・カルチャーの第三音楽フェスティバル」に於けるライブの模様を収録。Jiri Kabes のエレクトリック・ビオラが大きくフィーチュアされる。6名のメンバーによるもの。なお'76年度製作の"100 Points"なる標語状のテキストを付す。

○John Livengood / Baladjin ○

フランスのデュオ、スペース・クラフトのシンセサイザー奏者リーベングッドのソロ・レコーディング。

○Young Scientist / Live Sciences ○

Marc Barreca, James Husted, Roland Barkerから成るシンセサイザー、テープ奏者のトリオ。Live Sciencesは79年のライブ。マルチプルなリズムとサイエンス・フィクション的なイメージをもつ即興音楽。メンバーのうちの2人はデュオ・グループも結成して活動している。

○Dennis Weise / Valhalla ○

ニューヨーク・ゴングのメンバーの一人、デニス・ワイズのソロ。79年の作でジャマイカでプレスされている。初期アモンデュール、あるいはファウストを想わせるワイズのこの作品はジャーマン・エクスペリメンタル・ミュージックのエターナルな部分を良く継承している。ジューサーやテープ・エフェクト、ディスポーザル・ユニット等を使用したノイジーなオープニングで開始されるこのトータルな作品は幻覚的、ユートピア的な世界を展開しておりコンテンポラリーなアーティストのなかでも異質なものだ。

○Galen / Xom
/ Limacon

2つのガレンによる限定作品。2つは内容的に異なっている。"Limacon"は、より低いキイ、メロディーであるのに対し、"Xom"は、より暗く緊張している。それらは同様の建設的アプローチを共有している。ループやフィードバックの大規模な使用は、サウンドの粒子が意識に触れる程の力強い効果をみせる。ある面でK・シュニッツラーを回想させる。(eurock)

○Rascal Reporters / Freaks Obscure ○

中部アメリカ音楽は端へ追いやられてしまった。このテープは精神的にはレジデンツに連結され、物質的にはH・カウに近い。音楽的にごく単純な方法論とコンセプチュアルな議論の混合物。(eurock)

○Larry Mondello Band / Foreigh Matter
/ Exists / 6is 10… ○

レジデンツに傾斜するもう一方のバンド。ラリー・マンデロ・バンドはロック・ミュージックのある種の毒々しさ、原始性、奇抜さを所有している。音波の爆発の連鎖を作りだすエレクトロニクスとギターのクラッシュが合体してカテゴライズされる事を拒む。(eurock)

○Ken Moore / Tempus Fugit… ○

電子的な印象主義はケン・ムーアの操作する王国である。2つの暗い曲想をもつ"Tempus Fugit…"は、無造作に変換されアレンジされたかのような移動する音片の集合したメロディーの刺撃的なエレクトロニクス作品。(eurock)

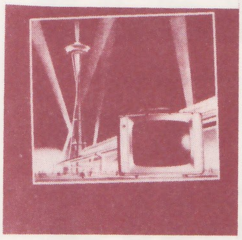


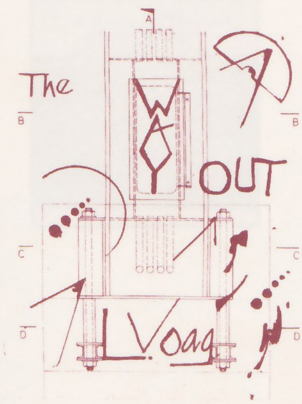


Borbetomagus

ニューヨークのインデペンデント・レーベル、アガリック、から400枚のコピーを発表しているBorbetomagusはJim Sauter（リード楽器）、Don Dietrich（リード楽器）、Donald Miller（ギター）、Brian Doherty（エレクトロニクス）からなる即興演奏グループの作品である。ジムの手紙によると、彼らはこの作品をレコーディグする為に３年間の演奏活動でためた金を全部つぎ込んだという。無名のアンダーグランド・アーティスト達の例にもれず、彼らも皆、音楽以外の仕事をもっている。このアルバム製作の経過は以下のようなものであった。まず今年の４月11日の晩に、ニューヨークのポモナにあるスカンク・ホロウ・レコーディング・スタジオで最初のサウンド・チェックが行なわれた。この後、彼らはメンバーの一人、ディートリッヒの自宅にもどり、ジャケットに使用する為のミミズを捕獲する作業にとりかかる。翌日の土曜日に再びスタジオにはいり１時間余りの即興演奏を録音、次の日になってこのテープの中からベストのトラックが選びだされた。

こうして録音された彼らのサウンドは、ブロッツマンのような相貌をしたジム・ソウターとディートリヒのサックス、ミラーのギターのフリーキーなアンサンブルにドハーティーのテープ、ライブ・エレクトロニクスがアッセンブラージュされたもので、全体は激化されたノイズのような音響現象となっている。ソウターはエヴアン・パーカー、ジョン・スティーブンス、近藤等則、トリスタン・ホンジンガー、ラドゥ・マルファッティ等との共演経験をもち、D・ディートリッヒと供にロックン・ロールの形態をもつ45rpmのレコードを製作している。またディートリッヒはシンセティック・ディスコ／パンクのバンド、シック・ディック＆ザ・フォルクスワーゲンスに参加している模様。





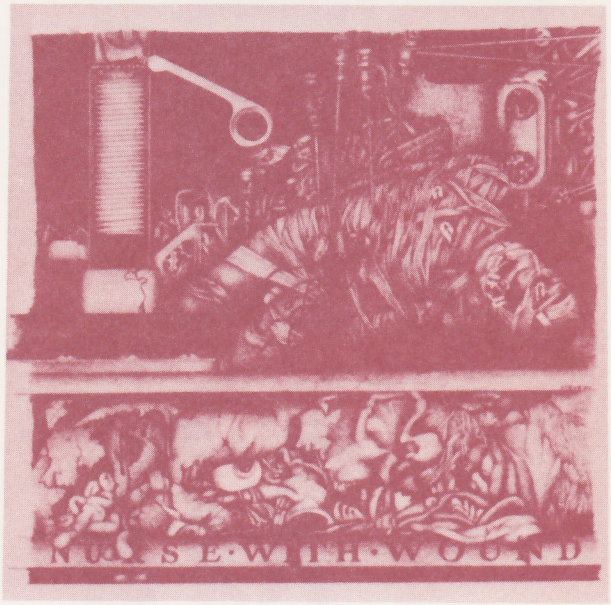
Negativland

ネガティブランドはカリフォルニア州コンコルドのインデペンデント・レーベル、シーランドから最初のアルバムを発表した。メンバーはMark Hosler, Richard Lyons（テープス、エレクトロニクス、クラリネット、オルガン、ヴイオラ、ギター他）、David Willis（シンセサイザー、テープ、編集ヴォイス）、を中心に、Peter Dayton（ギター、ヴィオラ）、W・Kennedy M（ギター）、の助力を得ている。この作品はまさに自家性のポップなモダン・ノイズの集積したオブジェであり、ファクトリー・ミュージックからコンクリート・ノイズ、まで様々な部分をもつトータルなサウンド作りがなされている。壁紙の台紙、広告写真、料理ブックの断片、雑誌の切り抜きを使用したハンドメイド・ジャケットや家庭用電化製品の参加等、アメリカの市民的日常生活へのノスタルジックなオマージュとなっている。ポップ・ミュージックはもともとあった日常的世界へオプティミスティックな態度で帰される。ネガティブランドはオルターネーティブなラジオである。

L·Voag／The Way Out

このアルバムはReレコードがディスリビュートしているものだが、レーベル名もなく事実上、L・Voagによる個人制作のアルバムである。この作品はX軸HouseとY軸 Chatの２つの局面をもつ。Houseでは家の各所（フロント・ドア、キッチン、トイレット、ベッドルームetc.）をタイトルにもつ７曲が演奏される：一応バンド形態をもっているこれらはファウストのソー・ファー・タイプのポップなヴァージョンで、ブラック・ユーモアの佳作といえよう。幾分ニューヨーク的な雰囲気ももっている。 chat では行為の描写やキネティックな状態がタイトルになっている。（ボクシングとスパーリング、ショッピング・ナイフとフォークを食卓におろすetc.）。こちらは house の面に比べるとより抽象化？されたサウンドが並んでおり、テープ・コンクレート、ミキシング処理など手が込んだ工夫がされている。シンセサイザーなどを使用せず、超現実的効果は全てテープ操作によっているのもこの作品の特徴である。その他のインストルメントもごく素朴なものが使用されている。（ギター、ベース、ドラムス、ヴァイオリン、ピアノ）。





P·D／Schwegende Mehrheit/Alitag

P・Dの構成員はJoachim(ベース、ボーカル、テープス)、Jochen (チェロ、シンセサイザー、テープス)、Ralf(ギター、ボーカル、テープス）であり、この西ドイツのトリオの唯一のリリースが、ここに紹介する33回転４曲入りEPである。

A面はテープ・ヴォイス、呼吸音から始まりギター、ベース、シンセがエコーノイズのような音響を作りだすことに終止する。B面に収録された３曲も主にプラットホームの雑音と楽器音のアッサンブラージュで、楽器は単にノイズの発生源としてエンバイラメント音に同化する。都市の描写というよりは、むしろ聴者をインヴォルブする為のフィードバック回路として作用する。レコードに付属するパンフレットからP・D自身の言説を聞いてみよう。「そもそも音楽とはひとつである。中心街の激しい人通りや車の往来、日常生活の中のディスプレイ、或いは毎日の生活の中の切迫したリズムと同調してゆく事は音楽的営為といえる。」「ここから他処へ行く運動とは我々のアートに於て遠くへ行ったりまたそこから戻ったりする事である。」「男あるいは女とは、ちょうど速度という〈隔り〉に囲まれた、また、どこかへ旅する事に消耗するエネルギーに密閉された〈駅〉と同様のものとして映じる。」「我々は除々に音楽の中に存在することに慣らされており、これ以上それらを意識的に聴く事はない。つまり我々は極めて響きのよい音楽器具に取り囲まれているのだ。」

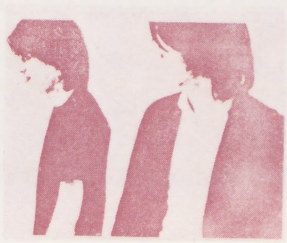
Schweigende Mehrheit（多勢の沈黙者たち）は我々がふと都市のノイズに耳を傾むるだけで、これまで未知であった多くの言葉を語り始めるはずだ。

Nurse with Wound/To The Quiet Men From Tiny Girl

英国のユナイテッド・ディリー・プロダクションから500枚の限定プレスで発表されているこの作品は、RIO参加のフランスのアーティスト、ジャッキー・ベロカルと他５名のミュージシャンによるコラボレーションである。ベロカルは、チベッティアン・オーボエ、ポケット・トランペット、貝で参加している。チープ・パーカッション、シンセ・ノイズ、テープ・コンクレート、ギターの不健康な流動的ノイズの延々と続く時間のなかにベロカルのソロが浮遊する。ノイズは静的ではあるが心理的、象徴機能をもっている。不毛で嫌悪を催させるような音響ルーム、一種の洗脳的エンバイラメントとして機能する音響である。形態は異なるがＴＧのような方法論と相似するものだ。ヴォルフ・フォステルのような欧州のハプナーがそうであったようにエレクトロニクスを心理的メディアとして使用する例はこうしたオルターネーティブ系のアーティストにも感受できよう。サイド①の「she alone hole and open」というオブシーン的イメージを連想するタイトルの曲は、自己毀損行為というアートの名目で自殺したRudolf Schwarzkoglerなる人物に捧げられている。なお当アルバムには、ジョン・ケージと英国フィルム・インスティテュートへの多大な感謝の意が記されている。



PERFECT MOTHER



AIRYFARM

我が国で最も先鋭的なアーティスト達の集合体としてカセット・ディストリビューションを続けてきたYLEMが、この度日本からとしては初めて、Eurockディストリビューションに加わることになった。これはEurockとからの強い要請によっ実現したもので、今後の発展いかんではジャパニーズ・ロック・シーンの大きな契機になるものとして大くの注目を集めている。

YLEMを中心としたBAND達は、ホームレコーディングを主とした人々たちである。現代のライブ、パフォーマンスにその姿を現わした人々は、ほとんどいない。彼等は、Studio YLEMや自宅をその活動場所としている。彼等は録音技術やプロデュース等を学習とし、そうした現場から外へ活動を開始しようとしている。まず今は、エレクトロニクスを学ばなければ、ライブ・パフォーマンスができない。それ故に、シールドの接続からBANDは生まれる。そして、様々なセッション形態をとりながら、自分達の音づくりを実践している。このような方法は、今の日本にとって必要であり、重要である。産業構造の中で、様々なBAND達は目的も手段も混沌と化して駄目になっていってしまっている。彼等は一番そこに危機感を抱いている。まずは音の現場を充分に体験することから始まる。それは音楽だけに止まらず、様々な視座となって様々な制作に拡大される。彼等はBANDであって、BANDに止まらない。

今、YLEMで活動している主なBANDは、大森を主としたAIRYFARM（エアリーファーム）、上田を主としたPERFECT MOTHER（パーフェクト マザー）、大友を主としたMARIONETT KARMA（マリオネット カルマ）、大森・大山を主としたBUSHMAN（ブッシュマン） 19、新保・高場を中心としたLa Stellar（ラ・スティフ）等である。他の多くは、セッションバンドとして活動している。



PEOPLE AROUND YLEM

YLEM

AIRYFARM

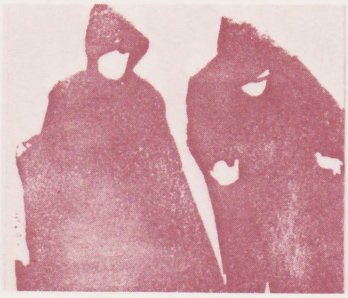
サウンド・トラック等を主として活躍、日本のアンダーグラウンド映画に新鮮な音を投げかけている。

PERFECT MOTHER

ヴァンティより、変なシングルを出している。又、京都・大阪のディスコで、幻のライブ・パフォーマンスを行っている。多分、東京でも幻のライブ・パフォーマンスを行うだろう。

MARIONETT KARMA

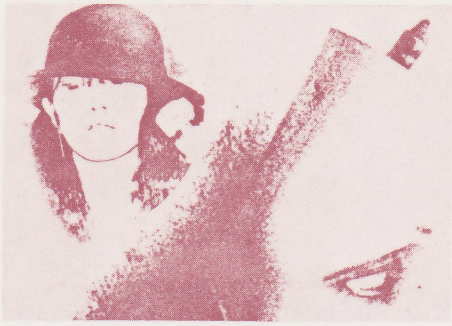
リズムボックスを購入してリズミックになった彼等は、MC-4を新たに購入し、自動演奏と実演奏をミックスした不思議な世界をつくり出そうとしている。



LA STELLAR



BUSHMAN-19



M. T. P.

BUSHMAN-19

彼等は様々な音楽をソースとしてミックスした音づくりと、ライブ活動のための準備を開始している。

La Stellar

彼等は、オルターナティブ・ミュージックへ前進しようと練習を繰り返している、20才と19才の若手ホープである。そのサウンドは、もう少しで人々の前に現れるだろう。

ALTERNATIVE SINFONIA

現代音楽・民族音楽・邦楽・ロック等の様々なプレイヤー達による、オルターナティブ・ミュージックへの展開。「ALTERNATE（オルタネイト） ANGLES（アングルス）」によって結成される。

META MEDIA SPACE ALL ART

YLEM

YLEM CASSETTE LINE

Vol.1
ASSEMBLAGE／VARIOUS ARTISTS YLEM001

Vol.2
FRAME-OUT／AIRYFARM YLEM201

Vol.3
GLAND CATALOGUE／VARIOUS ARTISTS YLEM002

Vol.4
obsessional opp／PERFECT MOTHER YLEM101

Vol.5
SELECT YOURSELF！／AIRYFARM YLEM202

Vol.6
ANOTHER TAKES／VARIOUS ARTISTS YLEM003

Vol.7
MEMENTO／PERFECT MOTHER YLEM102

Vol.8
MODERATE AFTERNOON／TOMO YLEM103

Staff

CHIEF DIRECTIVE UNIT
UEDA, OHMORI, KONISHI

SOUND CREATOR
OHMORI, UEDA, SHIRAISHI, OHYAMA, SHINBO
HARA, TAKABA, OHMOTO, MATSUMOTO, NAKAGAWA
"BAND"
AIRYFARM, PERFECT MOTHER, BUSHMAN-19, MARIONETT KARMA, SUMMITION, A.N, La Stellar, TOLERANCE, GOLDEN SHOWER, MAD TEA PARTY, KA CHI FU SUI, V.C, ef, ALTERNATIVE SINFONIA

VISUAL STAFF
FILM KONISHI, KATO, OHMORI, SHIRAISHI
DESIGN UEDA, KUWABARA, SATO

問い合わせ

151
Tokyo Shibuya
Uehara 2-48-12
Uehara Coop 302
Tel: 03-460-8469

Fool's Mate
Special Stock



ROCK in BELGEUM



ベルギー・ロックシーンの胎動期

ベルギーのプログレッシヴ・ロックを語るに際しては、しばしば非常な困難がつきまとうものである。理由は幾つかあるが、まずここには、ロックが語られるべきシーンが充分に確立されていないことが挙げられる。さらにレコード会社とプレスによるサポートの不備、そして、以上の2つの要因の直接的結果としてバンドのレベルの低さが挙げられる。バンドの質は、多くの場合素人臭くオリジナリティーに欠けるということである。そんなわけで、バンドは結成しては解散という不名誉に甘んじてきたわけである。

最近では、しかし幾つかの音楽誌の刊行に伴い、ロック・シーンは大幅な変化を遂げつつあるようだ。例えばRiff（ベルギーのオランダ語、フランダース語で掲載）はベルギーのバンドによるアルバムの批評からインタビュウを載せている。また、SticやPulsionそしてEn Atten（共にフランス語で掲載）がベルギーのプログレッシヴ・バンド、**ユニヴェル・ゼロ**、**マキアヴェル**、**ネッシー**、**コス**といったプログレッシヴ・バンドを扱っている一方で、もっぱらベルギーの一般的なバンドに専心している。しかしながらこの現象は、**ザ・キッズ**、**ティー・ジェン**、**カウンター**、**トイ**、**ザ・ミスターズ**など、ニュー・ウエイヴ志向のバンドにとっていっそう有利であるといえる。なにしろベルギーのプログレッシヴ・バンドのレコードは、ほとんど知られていないのだし、手に入れるのはさらに困難であるという状況があるのだから。マキアヴェルのレコードがかろうじて見つけられるくらいで、ネッシー、**マルク・オランデル**、ユニヴェル・ゼロ、あるいはシャルル・ルースらのレコードはきわめて手に入れにくいのである。さらに**カンダール**、コス、**イソポダ**、**アブラクサス**などは、専門家向けの店でのみ、それもリリースされた時期にのみ見つけることができるのである。ほとんどの店は、たとえ人が頼んだにしてもレコードを注文することで頭を悩ますことさえないのである。これが我が国のバンドが直面している状況であり、同様にファンの見つめている現実でもあるわけである。彼らの為に私は、音楽を語ることにスペースをさくつもりである。そうすることがひとえにベルギーの発展につながると思うからだ。



シーンの全貌

60年末から70年初頭においてはそれでも、幾つかのオリジナルなバンドが存在していた。そのうちで、まずまずの成功例としてシングル志向の**ザ・ペブルス**があげられよう。彼らは、「Get Around」や「Macintosh」などのようなプログレッシヴなアレンジメントに強化された秀逸な作品を残している。他にアルバムも2枚ほど作成している 編成は、ベルギーのベスト・ドラマーの一人とされている、セル・ドゥ・クヴェール、そして、いずれも優れたコンポーザーでもある、リュック・メッツ、フレディー・ベック、ボブ・ボボット等により成っていた。

また、**ウォーレス・コレクション**の存在も忘れてはならないものだろう。彼らは、ジャズ出身のピアニストと、国立ベルギー・オーケストラのメンバー2人から成る、いわゆる実験的ポップ・バンドであった。スタイルとしては、ELOのavant-la-lettleに近いといえるだろう。前述の2人のメンバーのうち1人は、後に国際的バンド、**エスペラント**を結成したレイモンド・ヴァンサンである。ウォーレス・コレクションは、多くのシングルと3枚のアルバムを出している。彼らの最大のヒットは、「Day Dream」であるが、ファーストアルバム「Laughing Cavalier」は、今だにイギリスにおいてはコレクターズアイテムとされている。ともかく彼らは、国際的に認められた最初のベルギーのバンドだった。メンバーのシルヴァン・フォン・オルマンはグループを離れて、現在はローカル・ポップシーンの重要なプロデューサーとなっているが、同時に、**ツー・マン・サウンド**のメンバーでもある。

一方、プログレッシヴ・シーンには、**マッド・カリー**と**シャンプー**があった。マッド・カリーは、ベルギーにおいては最初のプログレッシヴ・アルバムであるに違いないものをリリースした。これは、現在でも、時々ジャズ・シンガーとして現れる**ヴィオナ・ウェストラ**の非常にすぐれたアレンジメントでプレイされた8曲のジャズ風の曲から成っているベルギーのロック・シーンにおいては重要な一枚となっている。シャンプーはペブルスから派生したものである。セル・ドゥ・クヴェールとルュック メッツによって結成されたもので、他に、マッド・カリーのサックス奏者の顔も見られる。彼らは、キーボード、ベース、ギター、ドラム構成の比較的長い曲を得意とした。ただ、彼らは1枚の非常にすぐれたアルバムを出しただけで解散している。その後、再び彼らは**ドリーム・エクスプレス**として落ち着いたようである。この時代には、他にもまだ幾つかの成功しなかったバンド、例えば、**ジャニス・カーン**、**ロルリー**（それぞれアルバムが1枚ずつ）、**レクリエーション**（アルバム2枚）などがあった。かつて、ジャニス・カーンとロルリーで活躍していた**ピエール・ラプサット**は今もソウル・アーティストとしてレコーディングを続けており、シンガー・ソング・ライターのようなことをやっている。

多少なりとも認められ、またアルバムも出したベルギーにおける最初のシンフォニック・バンドといえば、**バンザイ**である。以前彼らをライブ・コンサートで見たことがあるが、コンサートに見る彼らは実に印象的だった。しかし、話題のアルバム「Hora Nota」は、ベルギーのミュージック・シーンの内包する根本的問題であるプロデュースの不備がところどころにめだっている。そのサウンドは、幾分イエスの影響がみられるとはいえ、彼ら独自のものというに充分で、全体的に見れば、成功といえるものである。ただ残念なことに、彼らも今は解散してしまっている。

ベルギーのシーンにおける著名な人物として、**マルク・ムーラン**の名があげられる。彼は現在**テレックス**で活動するかたわら、アメリカのFMスタイルをモデルにした〝Radio Cite〟という非常にポピュラーなラジオ番組に関っている。コスや**フィリップ・カザリーン**といった同系列のレコードのプロデュースを手掛け、**プラセボ**というファンクなジャズ・ロック系フュージョン・ミュージック・バンドを率いていたのもそんなに昔



Wallace Collection

Esperanto

Philip Catherine/Nairam

Cos



Cos/Babel



のことではない。プラセボは3～4枚のアルバムを発表しているが、それとは別にムーランは、「Sam Suffy」というソロ・アルバムを出している。これはとても優れたもので、ソロ・ミュージシャンとしての彼の特質が憤懣なく発揮されている。Side 2はスペイシーなジャズ・ロックからフリーブローイングへと移って行くワン・トラックである。また彼は、イーノのObscure Recordsにも匹敵しうる〝Kamikaze〟というプログレッシヴ・レーベルを設立した。しかし、テレックスや〝Radio Cite〟、**リオ**（テクノ・ディスコの女の子）のプロデュースのため後述のマルク・オランデルの作品のみで断念してしまったのは残念だ。

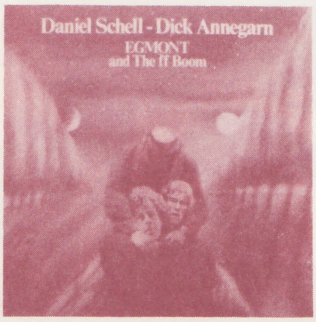
今日、我国には、インターナショナルな興味をひくようなプログレッシヴ・バンドがほとんど出ていないという状況をよそにコス、カンダール、ユニヴェル・ゼロなどの活躍にはめざましいものがある。

まず、マキアヴェル。彼らはベルギーのフランス語圏では非常にポピュラーで、彼らのアルバムはアメリカに輸入され、ゆうに500000枚は売っている。彼らのファースト・アルバム「Machiavel」は1976年にリリースされたもので充分なプロデュースがなされているとは言えないが、将来有望なシンフォニックバンドとしての技量をあますとこなく我々に見せつけた。彼らはまた、'76年のVilzenfestival（英国のレディング・フェスに近いイベント）を開き成功を収めた。セカンド・アルバム「Jester」を'77年にリリース。ここでは、オリジナルメンバーのジャック・ロサムがジャン・ポール・デルヴォーにとってかわられ、マリオ・フッシーがリード・ヴォーカルとしてフィーチャーされている。そして、ドラムスにマルク・イゼー、ベースにロナルド・デ・グリーフ、キーボードのアルベール・ルシュトゥールからなっている。プロデュースにも改善がみられ、1つ1つのトラックはよりコンパクトな展開をみせている。3枚目の「Mechanical Moonbeams」にもこの傾向はひきつがれている。致密に組み立てられたトラックは互いに流れこみ、せめぎあって美しい調和をみせている一方でヴォーカル・パートはインストゥルメンタル・パートと絶妙なバランスを保っている。彼らのベスト・アルバムとするに充分な仕上がりをみせている。今年5枚目のアルバムも発売されている。

そして、フランスのマグマやザオと多くの音楽上の一致をみせているコス。彼らのファースト・アルバム「Postaeolian Tram Robbery」が'74年にリリースされた時は非常な驚きだった。これ程オリジナリティを感じさせるきらめいたサウンドをクリエイトするバンドがかつてベルギーに存在していただろうか。彼らのデヴューから数年たった今でさえそれらを語るべきどんな言葉も見つけられはしない。無言のヴォーカルがクラシックの訓練をうけたシンガー、パスカル・サンのスタイルの中でとき放たれて行く。彼女の魅力的なヴォーカルは、ギターのダニエル・シェル、ベース、アラン・ゴーティエ、キーボード、シャルル・ルースそして、ドラムスにボブ・ダルシュといった面々にフォローされている。彼らのセカンド・アルバム「Viva Boma」には、より大幅なサウンド展開がみられる。ジャズ・ロックからエレクトリック・サウンドへのアプローチなど、それによって様々なヨーロッパ音楽文化の撚り糸が共に引かれるというしくみになっている。ここでは、シャルル・ルースはマルク・オランデルに、ボブ・ダルシュがギイ・ルノーへと若干のメンバー・チェンジが見られる。また、共同制作者として、マルク・ムーランが名を連ねている。そして、彼らのサード・アルバム「Babel」も引き続きヨーロッパ哲理に裏打ちされたものであり、「Mein Maschine ist Schon」というドイツ語ヴァージョンが挿入されるなど、とても興味深い。また、新しいドラマー、フィリップ・アリエルがフィーチャーされて、音楽はよりタイトに組織化されているが、再びパスカル・サンが「Babel」や「Greeneldo」のような曲で力量を発揮している。オリジナル・メンバーのシャルル・ルースや先のマルク・ムーラン、さらにフランソワ・カーン(ZAO)などもゲストとして参加している。ほとんどの曲はダニエル・シェルの手によるものであるが、ヨーロッパのヴィジョンの担い手として彼の名をあげたい。また、彼らがフランス語圏の出である一方でフランダース語のタイトルを使用していることも人々の興味を集めている。ワルーン語（フランスの一方言）とフランダース語がたいした矛盾もなく並べ置かれている珍しいケースである。シェルは古いフランダース音楽に深く興味を持っている。彼の関心は、ディック・アネガルンとレコーディングしたアルバムに著しく表れている。「Egmond and the ff Boom」と題されたこの魅力あるレコードは、フラ



Machiavel/Mechanical Moonbeams



Daniel Schel/Egmod and the ff Boom



ンダースの歴史と音楽にインスパイアされた素晴しいコンセプト・アルバムである。

同じくフランダース地方のトラディショナルを素材とするものに**ラム**がいる。その３枚のアルバムは、いずれも澄みきった透明感に彩られた清楚なトランス・ハーモニック・ミュージックとして知られている。

その他コスの流れをくむものとしてさらに幾つかのバンドの名があげられる。アブラクサスはシャルル・ルースによって結成されたものであり、サンハウスはアラン・ゴーティエをそのメンバーに含んでいる。両方ともよりコンヴェンショナルなジャズ・ロック・バンドである。ルースはまた、自分の名で「Ego-Triste」というソロ・アルバムを出している。

マルク・オランデル率いる**アクサク・マブール**はさらにもう一つのコスの支流として派生したものであり、独創的な音楽と多くのユーモアを伴う一種のワンマン・バンドである。

オランデルはキーボード、クラリネット、フルート、ダブーカ、シロホンを巧みに繰り、ベース、パーカッション、ヴォイスに数人の友人の手を貸りているばかりである。アルバム「Onze Dances Pour Combattle La Migraine」(頭痛と戦うための11のダンス)は、ほとんど完全なインストゥルメンタルで、フォークからミニマリズムまで多岐にわたるジャンルのマテリアルを包括している。

'80年に、ヘンリー・カウー派の組織するRock In Oppositionの系列から登場したセカンド・アルバム「Un Per De L'eme De Band its」は、ドラムスにクリス・カトラー、ギターとヴァイオリンにフレッド・フリス、弦楽器にユニヴェル・ゼロのメンバーという凄まじいライン・アップを配して録音されている。多分そのサウンドとコンセプトの先鋭性は、現在のヨーロッパが生み出したどの音楽よりも突出した文句なしにプログレッシヴなものだろう。

この作品をリリースしたCrammedというレーベルは、他にも**ジュルヴェルヌ**というファンタスティックで、前衛的な室内楽のアルバムを限定盤リリースしている。〝呪われたドビッシー″ともいうべき魔詞不思議な調べは、世界の審美的なロック・ファンにも充分な衝撃をもたらすことだろう。

カンダールはブルース出身のカレル・ボガードによって結成されたバンドである。彼はブルースのアルバムとBlues Lexicon(1971年発行)という本を刊行した後、さらに別の新しい音楽分野を探るべくなされたアプローチがカンダールの結成だったのである。また、Dwarf Recordsという自主レーベルも創始している。1974年の長いライブ・アルバムが彼らのファースト・アルバムになる。ある部分は見事なインストゥルメンタル、またある部分はブギーの影響をうけた音など、バラエティーに富んだ音作りがされている。「the Court of the Catherine Squeezer」では、アルバム「the Sliced Ham」におけるインストゥルメンタルの方向性を

Julverne



Rum





Unvers Zero

目さし、またとてもシンフォニックである ギター、サックス、キーボードの絶妙なコンビネーションがきかれるこのアルバムののち、ボカードはバンドを抜け、新たに**ハイウェイ・バンド**を結成する そこで作製した唯一のアルバムはカンダールのレコード・コンセプトに忠実に立ち戻っていることがわかる また、彼は「From Dusk Until Dawn」というソロアルバムを出している カンダールは たいした数のギクをしてはいないが、トゥルーフ座における実験的演技を伴ったアルカ・テアトルの中心的バンドであった '78年、彼らはボガード抜きでサード・アルバム「Pictures Of the Past」をリリースし、再びギグを開始した ここには、非常にリラックスした旋律の美しいサウンドが聴かれる キャメルファンには、一聴の価値あり！

ユニヴェル・ゼロは前述したアクサク・マブール、ジュルベルヌと並び、我が国の今最もプログレッシヴなバンドとされている 彼らはいうなれば一種の室内楽団である ヴァイオリン、バスーン、ハーモニウム、ベース、ドラムのコンビネーションは特殊で彼らのユニークな音楽はどこか中世を呼びおこす一方で、大変モダンである ひどく魅力的だが、誰でもが気に入るものでもないだろう とはいえ、コンサートに見る彼らは非常にエクサイティングだ 彼らはthe French Atemレーベルより２枚のアルバムをリリースしていて、新作の登場も間近だ

これらのバンドについてここまで述べてくると、さらに３つのシンフォニックなバンドを語らないわけにはいかない イソポタは、「Acrostichon」をリリースした５人組のバンドである 再びプロデュースのまずさが目立つとはいえ、そのサウンドにはフォークの影響が見られ幾つかの美しいインストゥルメンタルの節や旋律が出てくる **フライト**は、６人からなるグループでアルバムの発表が待たれている コンサートに接するかぎりでは素晴しいアルバムが期待できる ネッシーは、彼ら自身のnon name labelより２枚のアルバムをリリースしている 彼らは、配布からあらゆることを全て自分達で監督している フランス語誌では大きくとりあげられ、好意的な批評をうけている そこで彼らは、ユーライア・ヒープの影響を受けていることを告白しているが、彼らの音楽はそれ程ヘヴィではなく、よりシンフォニックである ヴォーカルが少々耳障りな点を除いてはまあまあだろう ドラマーのジャン・マリーが、自分達は新しい方向を求めていると最近手紙で知らせてきた

一般にはプログレッシヴとは受け取られていないが、２枚の素晴しいアルバムを残して解散してしまった**フィフス・ボール・ギャング**も重要な存在である リーダーのユーゴ・スペンサーは、ベルギーの偉大なるミュージシャンとして容認されている 彼はあらゆるルーツの音楽、r'n'b、レゲエ、カリプソ、'50年代のr'n'bなどに影響をうけ、今もハイエネジーのロックをプレイするラッツで活躍している 彼らのファースト・アルバムはそろそろthe Dutch Bubbleレーベルより出るはずである

２枚のソロ・アルバムを出している他に、ラリー・カーライル、クリス・ハインツ、フォーカスなどにゲストで参加している、国際的な知名度を有すフィリップ・カサリーンがいるが、彼の名をもってこの章をしめくくりたいと思う

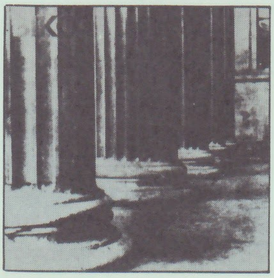
今後のハード・ロック・シーンの担い手として**ダウントリップ**があげられよう すでに彼らは３枚のアルバムを出している 最新アルバムのDowntownは良い出来である タッシュはアルバムを１枚出して解散しているがそのギタリストは、いまヘルマンブルードで活動している **マザーズ・オブ・トラック**はハード・ロックン・ブギーを得意とするバンドである

そんなわけで、ベルギーのシーンについてひととおり述べてきたわけであるが、コス・カンダール、マキアヴェル、ユニヴェル・ゼロ、そしてそれらに続くであろう他のバンドとともにインターナショナルな領域でのベルギーのロックの台頭が近いうちに果されることは間違いない



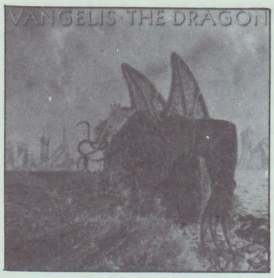
IMPORTED RECORDS

輸入盤レコード・レビュー



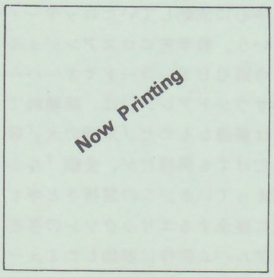
PETER GABRIEL
Biko
E: Charisma CB37012

ピーター・ガブリエルのサード・アルバムの中に収録されていた『ビコ』のシングル用ロングバージョンである。もちろん曲はオリジナルの物とは別テイクで、新らたなプロデュースが施されている。“ビコ”とは、アフリカの解放運動者の名で、裏ジャケットには彼の顔とその紹介が載っていてとても興味深いが、この南アフリカの黒人指導者に関しての物と、B面に収められた2つの未発表曲の中の一つ『Shosholoza』に関するコメントもおもしろい。それによると、この曲はサウンドトラックのＬＰ「Dingaka」に入っているもので、マーキュリー・レコードにこの曲の権利に対する感謝の意が表明されている。この30㎝シングルには、コンセプトとしての重要性も以上の事からかなりの評価を与えるべきなのかもしれないが、音の方はそれ以上に注目に値する。ここには、イーノとトーキング・ヘッズの仕事でも感じられる、第３世界（特にアフリカ）を目指す意識的ミュージシャンの新らたな方向性が示唆されているからである。彼自身がこの一枚のシングルをとても重んじているのは、スティーヴ・リリーホワイトのプロデュースだった曲を自らの手で再プロデュースしている点でも解るし、彼は今あらゆる作業を自分の意志で行い、そして最もラジカルでありながらポピュラーになったのである。（角屋直彦）



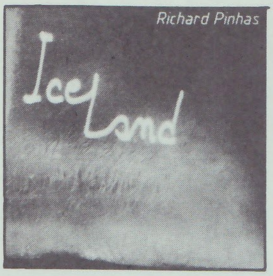
VANGELIS
The Dragon
E: Charly CRL5013

ヴァンゲリスのアルバムは、正式にソロ・アルバムとしての目的で作られているものやサウンド・トラック用、あるいはそれがタイトル違いで発表されるなど本当に複雑に出回っているが、そんな中にあってイギリスのアフィニティー・レーベルから発表された「ヒポセシス」とここに登場する「ドラゴン」の２枚は彼にとっての幻のテイク、あるいはセッションと思える内容で、正規のアルバムと比べて明らかに異質の音楽性が感じられる。「ヒポセシス」の方はどちらかというとジャージーな内容で、この「ドラゴン」は民族音楽やトラディショナルな音作りが施されているが、両方ともとてもフリーフォームでさらに感覚的なプレイが楽しめる。そういった意味からは、ヴァンゲリス自身のインプロヴィゼーションにおけるある種のひらめきやセンスがうかがえる貴重なテイクに違いない。彼の音楽性は計算され尽くされたスコアや理論による音の組み立てだけでなく、もっと多角的で自由なものなのかもしれない。ここでは、オリエンタルなフレーズをくり返えすバイオリン（Michel Pipoche）やバンゲリスが「アース」で聞かせたようなスピネット、あるいはクラビネットの神秘的なフレーズがとても印象的である。録音は1971年の６月、ロンドンのマーキー・スタジオである。（角屋直彦）



CARAVAN
The Album
E: Kingdom KVL9003

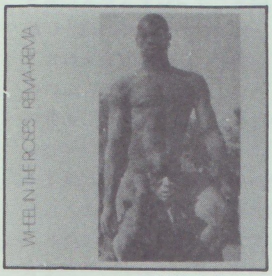
キャラバンの歴史は本当に地味であるが何度も行なわれたメンバー・チェンジは、ある時は新しいスーパー・グループを生み出し、優秀なアーティストをも育てていき、ブリティッシュ・ロックの歴史にある一つの確実な流れと方向性をもたせていった。いわゆるカンタベリー・ファミリーと呼ばれている人々の中心を形作った彼等も最近ではどうも不調のようである。ここに一応ニュー・アルバムの音があるので紹介しておくと、その内容はポップ指向の中にも少しだけ昔のジャージーなセンスが光っているようなもので、これはおそらくデイヴ・シンクレアのカムバックによるものだろう。それにしてもキングダム・レコード（仏のパルサーやフューシアなどを発売しているレーベル）がまだ残っていたのは意外だ。発売元も一応決まったみたいだし、再びあの全盛時代のような精力的な活動を期待したいものだ。ところで全盛時代のキャラバンといってもどれだけの人が知っているのかな？まだ彼等の事をよく知らないのなら「グレイとピンクの地」や「夜ごとに肥る女」、「ロッキンコンチェルト」などの名作をぜひ聞いてもらいたい。それから最近の２作にあきれていた人には、このアルバムがかつての名盤と同じく素晴しいものである事を報告しておきます。（角屋直彦）



RICHARD PINHAS
Iceland
F: Polydor 2393254

夏の終わり頃このアルバムを聴いた。とにかく80年という年は、ぼくにとってもいろいろありすぎて、音をじっくり楽しむという余裕すらあまりなかった。このアルバムも「いつか載せなくちゃ」と思っているうちにとうとうもう真冬だ。"Iceland" なんて実に寒々しくて冬にぴったりのタイトルでしょう。リシャール・ピナスとしては３枚目のソロ・アルバム、彼の率いた伝説的ロック・グループ、エルドンはもう解散してしまったのだろうか。アルバムはＡ面が「アイスランド組曲」; Ｂ面には「グリーンランド」という長大な曲をメインに４曲のナンバーがフィーチャーされている。針を落としてまず気付くことはその音の厚みだ。冷えきった無情なリズムの上を凄まじい圧力を秘めた狂熱の権化のようなシンセサイザーが、とある生理的な平衡をも無視して連綿と襲いかかる。古代へ、古代へ、一種の儀式性をまのあたりにしながら時間は逆流し流転する。人とも獣の声ともつかぬワイルドな息吹きのような効果音が何とも言えない。荒々しい原初の王国の出現は、昨今の音楽組織論から失なわれて久しかった魔的なヴィジョンでもある。Ｂ面では例のフリップナイズされたギター・トーンも大御所を超えて健在である。バックにはエルドンのフランソワ・オージェ（Ds）の他、話題の新人ジャン・フィリップ・ゴーデも参加している。天才が天才を証明する作品であり、見果てぬ幻を追うぼくのような人間にとって最高のヘヴンリー・ミュージックであったと白状しよう。

（北村昌士）



REMA REMA
Wheel in the Roses
4AD BAD5

今、色々な分野から最も注目されている国は、アフリカ、第三世界の国々であろう。音楽界でも注目されており、最近色々なミュージシャン達がアフリカンリズムなどアフリカ民族音楽の要素を自分達の音楽に取り入れている。トーキングヘッズの「リメイン・イン・ライト」やブライアン・イーノの「第四世界の鼓動」などがその例である。

しかし、イーノ達はアフリカのある一面しか取り入れていない。イーノ達が取り入れているのは地球の鼓動を都市で生活するより強く感じることのできる大自然の中で生活するアフリカ人達の持つ楽天主義的未来観だけである。だから、変に明るすぎたり、きれいすぎたり聴こえてしまう。

原始的な生活社会の中で、予言者や占い師などは高い階級に属している。そして各村に少なくともひとりはいる。このことは彼らの社会において宗教の原型のひとつであるアニミスムがいかに生活に密着していたかということが理解できる。

このREMA・REMAはアフリカの民族音楽の中にある呪術性をうまく取り入れている。ミニチュアミュージックしか作れないイーノなんてくそくらえ！スロッピング・グリストルもさようなら！これからは４-ADの時代だ！

（森田一義）



DANIEL SCHELL・
DICK ANNEGARN
Egmont & The ff Boom
F: FLY 05

今月号で紹介したベルギーのロック・シーンに活動する多くのグループが、殆んど世界の注目を集めることなくこの世から消えていってしまったのは本当に残念でならない。今となってはユニヴェル・ゼロ、アクサク・マブールの２つの大物がベルギーを象徴しているに過ぎないのだから。Cos ——この名は忘れように忘れられない稀有の名グループのひとつだ。邪悪なギター・ワークと澄み切ったハイ・トーンの女声ヴォイス。そしてマルク・オランデル（現アクサク・マブール）の類まれなキーボード・ワークを核に、素晴しくハイ・ブロウなアンサンブルを聴かせてくれたCos のもうひとつの支流が、このギタリストのダニエル・シェルの作品だ。多くのゲストの中にはCos のヴォーカリストだった女の子パスカルや、ユニヴェル・ゼロのミシェル・ベルクマンの名も見える。近代クラシック風の手法や、フランダース民謡をベースにした曲、また教会音楽風のアストラルな作品、そしてCos をほうふつとさせるジャズ・ロック風のアンサンブル曲など、とてもヴァラエティー豊かな方法の中に、ダニエルの卓越した音楽観が息づいている。このバンドがグループとして機能するに至っていないのは非常に残念でならないが、多くの作品と同じように、このアルバムが伝説の中に埋没してしまわないうちに一聴することをすすめたい。

（北村昌士）



ROKY ERICKSON

E: ICBS-84463

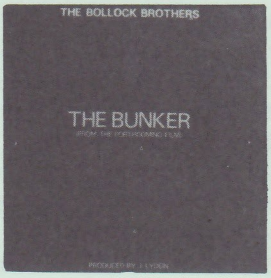
60年代に13thフロアー・エレベーターズを結成してテキサスを中心に活動していたロッキー・エリックソンはエレベーターズ解散後精神病院に入院していたという。数年前にロスアンジェルスのライノ・レコードで再帰しその後ジ・エイリアンズを結成。今回ＣＢＳレコードでオーバーグラウンドに浮上した。プロデュースにはステュ・クック。そのサウンドアレンジは、商業的ですらある。しかしながらその歌詩の異様さはコマーシャリズムとは裏腹なものだ。「双頭の犬」「吸血鬼の夜」「死体と散歩」「創造物と原子の頭脳」といったタイトルだけでも異様だが、全編「ルシファー」「デーモン」「デビル」「モンスター」という偏執的文句に埋まっている。この屈折さとギミックなしの完成度の高さこそフリークス、ヘテロドキシーを現代に継承するエリックソンの存在の証しとなるであろう。なおエイリアンズのメンバーの他にこのアルバム製作に参加したミュージシャンの中には、マザーズと一緒に来日した事もあるキーボード奏者アンドレ・ルイスがいる。

（秋田昌美）



H.J. ROEDELIUS
Reise Durch Arcadien
SKY044

クラースターの片われ、ハンス・ヨワヒム・ローデリウスの最新ソロ・アルバム。表現主義的タッチで描かれたジャケットに写るは、多分ローデリウス自身であろう。クラスター＆イーノ以来、完全に踏みかためられた観のある彼のアート・コンプションは、再編されたと聞くNeu！や、78年以降全く活動の途絶えてしまったクラフトワークと並び最も重要なドイツ・ミュージックの指標となっていることはいうまでもない。Neu！やデュッセルドルフがその強迫性の材料にローリング・ストーンズ的色彩を用い、クラフトワークがポップなディスコ調のリズムを導入していることで一般的な市民権を得ていることについて、僕自身は何の異論もないのであるが、マルセール・デュシャンやケネス・アンガー、ルドルフ・シュタイナーですら、商品広告の媒介と化す時代であるからして、日本とアメリカの広告産業には参った、いや恐れ入ったという正直な感想のついでに、消費材的価値観で音楽をきくようなテメエラの思い上がりは、ますます音楽を駄目にするぞと言っておこう。情報マニアなんかの出る幕はさしあたってない。ところでこのアルバムも、以前の３作同様にひたすら静かで、浄化作用のあるメタフィジカルな空気の震えで構成されている。作品は、73年から79年までのものがアトランダムに挿入されていて、電子音楽というより足踏みオルガンの独奏のような純度の高い標白性のある空間を具想している。　（北村昌士）



THE BOLLOCK BROTHERS
The Bunker
McDonald & Lydon Records

正体不明のグループだ。THE BOLLOCKS BROTHERS。マクドナルドアンドライドンレコーズという自制製作のようなレコード会社でレコード番号もない。わかっていることはジョニーライドンがプロデュースしているということだけだ。

音はやはりP.I.L.に近いが、ポップに対する方法論に徹底的な違いがある。完全なストイック状態の中で、神経機関の痙攣と麻痺を導き出すP.I.L.のdeath Disco、一般的なポップの方法論を昇華していき、表面感覚機関の痙攣と麻痺を導き出すTHE BLLOCKS BRO'SのHeaven Disco。最近、P.I.L.の「ライブインパリ」が出たが、音的に「メタルボックス」の足もとにも及ばないものなので失望させられたが、このアルバムのおかげでマイナスプラスゼロという所だ。この他にP.I.L.タイプの音を出すグループは、ローカルヒーローズ、キリングジョークなどがある。

A面：THE BUNKERS
B面：BOOTLEG MAN　（森田一義）



TG
Something
Came Over Me
E：IR0013

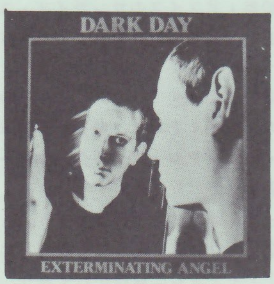


DOROTHY
I Confess
E：IR0014



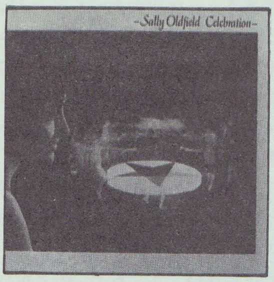
TG
Adrelalin
E：IR0015

前号で小特集したインダストリアル・レーベルの13〜15番までが一斉に発売された。全て45回転のシングル盤で、13と15がスロビング・グリッスルのもの、14は初登場の女の子ドロシーのデビュー・シングルだった。この他何でもTGによる全25巻のカセットが7万円だかで売り出されているとか、２月にトリオ・レコードから「Heathen Earth」が日本盤で登場するとか、すごい世の中になってきたね本当に。TGとしてのシングルは、実に「United」以来３年ぶりのことだが、彼らのコンセプトは全く変化していないのが如実にわかる。「Subhuman」ではぐじゃぐじゃの工業ノイズの中で「United」のメロディーが歌われ、「Something……」の方は、不健全なリアリズムと汚臭の香る中でせいいっぱい陽気にふるまう誰かさんのようなポップ・ナンバーである。スペース共有を目的とした彼らのコンサートと、電波メディアに積極性を発揮したシングルとはおのずとTGの理知による区別がなされているようだ。同じことは「Distant Dreams」についても言える。甘美な音色とポップな装飾が施されたこの曲はTGの繊細さを新たに投射しているようだ。ドロシーは19才の女の子で、インダストリアルのオフィスにテープを持って来て、それがそのまま採用されたのだという。ちょっと映画「エクソシスト」に主演したリンダ・ブレアみたいな感じの子で、こちらの方は中庸的なメロディーと奇抜なリズムが妙にバランスを得た可愛らしいテクノ・ポップ・ミュージックでした。　（北村昌士）



R.L. CRACH FIELD'S
DARK DAY
Extermmating Angel
A: Lust/Unlusf JMB229

ニューヨークのアクチュアルな動向のなかでも特に飽和状態で完了したような凝縮した音世界をものにしているラスト／アンラスト・ミュージックの新盤は、これもまたノー・ニューヨーク派の作品で、元DNAのキーボード奏者、ロビン・リー・クラッチフィールドが新たに結成したダークデイなるバンド。メンバーはクラッチフィールドの他にフイル・クライン（ギター、シンセサイザー、アコースティック・ピアノ）、バリー・フライア（ドラムス）の３人。時代のエア・ポケットの底から響いてくるような甘味なキーボードの旋律。重力感のない浮遊するドラムス。ニヒリスティックなヴォイス。全てが蒼ざめて耽美的に燃焼している。聴く者の意識と感覚を狼狽させるような覚醒していてショッキングな世界が展開されている。Ｂ一⑦ではタキシード・ムーンのメンバー、スティーブン・ブラウンがソプラノ・サックスで参加。プロデュースはチャールズ・ベル。また、同じニューヨークのチャイニーズ・パズルのメンバー、デビット・ローゼンブルームへのスペシャル・サンクスの表記があり、ライナー・デザインとフォトをやはりチャイニーズ・バズルなどを手がけているジャック・サロガが担当。　（秋田　昌美）



SALLY OLDFIELD

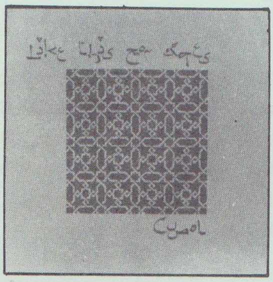
Celebration
Bronze-528

サリー・オールドフィールドの３枚目〝セレブレイション〟がリリースされた。このアルバムには〝あなたが誰であろうと、このアルバムはあなたを祝福するためにあるのです〟とクレジットされていて、彼女の聴き手に対する優しい心使いが感じられる。いつもながらの彼女の高音域に伸びる透明感あふれるヴォーカルが、このアルバムの最大の魅力であり、彼女の声が好きな人には手離すことのできない１枚である。

彼女の曲というのは、弟の、かのマイク・オールドフィールドと組んでいたデュオ〝サリアンジー〟の頃から一貫していて、彼女のヴォーカルを生かしたトラディショナルな香りの高いものである。今回のニュー・アルバムでは曲としては特に目立った変化は見られないが、サイド１の〝マンダラ〟ではピエール・モーレンがドラムで、〝ウーマン・オブ・ザ・ナイト〟ではメル・コリンズがサックスで彼女のバックを務めている。

彼女のヴォーカルとその節まわしは不思議な調べとなって私達を遠い、世界のかなたの森へと誘う。彼女の少女であり、女であり、母親のような歌をききながら、彼女の統治する愛の国へ導びかれてゆくがいい。そして彼女の催す儀式に加わりなさい――― Come on！ Won't you join in the celebration.

（石井理恵子）



GRAHAM LEWIS
BRUCE GILBERT
Cupol
4AD BAD9

グラハム・ルイスとブルース・ギルバートは今までに4 枚のアルバムを発表している。１作目はDOMEという自分達だけの自主レーベルから発表されたが、全ての音の重なりがうまくいっておらず、かけそこないの呪術のようにみっともないものになってしまった。これはきっと自主レーベルのため、いろいろな雑務に追われ、自分達の音楽を作ることだけに専念できなかったためである、そう思ったのか、２作目からは現在最も期待されている４-ADから発表された。３作目もかなりの出来であるが、２作目のほうがすばらしいので、今回は２作目を取りあげてみた。

このアルバムは今まで数多くのインダストリアル・ミュージックの中で最高峰に位置するものであろう。プレス機械や旋盤機械達の作り出す騒音はまさにシャーマニズムの極地である。人間達の呪文より機械達の作り出す工場騒音のほうが、シャーマニックであるなんて皮肉なことだ。Ａ面は45回転で、Ｂ面が33回転である。Ａ面の「ライク・ディス・フォー・エイジス」は、現代社会における我々、人間生活の一定化、決まりきった毎日の繰り返し、それは全世界で、全ての人々が人類滅亡のための呪術をかけているようである。

人間社会はもうすぐ終わりだ。

（森田一義）

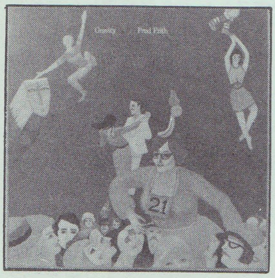


THIS HEAT

Health and Efficiency
E : Piano This 1201

ディス・ヒートの最新30㎝EP。非常に難解な２曲が入っている。彼らは演奏にシンセサイザーも使わないし、すぐに手持ちの楽器を捨てて全く違った編成で次々と新しい音を作り出してしまうことで有名だが、このレコードのA面とB面の指し示す全く違った方向へのベクトルは、まさにディス・ヒートならではの覚醒したセパレイションの結果といえる。まずB面の「Graphics/Varispeed」だが、コードなし、リズムなし、楽器構成不明、というノイズの平坦な合成音がゆっくりと流れる。時々テープのスピードに変化が生じて波調に特殊な動きがみられるほかは、ある一定の規則に従って、時折共鳴による音程の変化・偶発的な効果が生まれるのみであるが、意識を集中してその音に従って感覚の世界をのぞき込んでゆくと、実に〝自己〟に対する驚きが鮮明に感受され、〝音〟をフィルターにした客観的観照が生まれてくる。おそらくは生理的なる知覚性の自己フィードバックのために提供されたエンバイランメント・スペースといえるだろうが、ディス・ヒートの主張する心的機能集中の序文的役割をもつものであるだけに、これは是非聴いてみて欲しい。A面は、太陽の崇拝を、世界の古代宗教性のシャーマニスティックな側面から真摯に取り上げた作品だが、打楽器の使用、ヴォーカルの導入は新境地であり、彼らのハイ・パワーな集束力は、再び更なるスケールのもとで組織化されようとしていることがわかる。まさにThis Heat ― その名に恥じない名演奏だ。

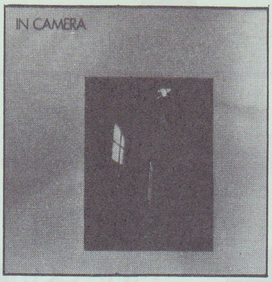
（北村昌士）



FRED FRITH
Gravity
A: Ralph FF-8057-L

フレッド・フリスのソロ新作は79年10月米国メリーランドと80年１月スイスのサンライズ・スタジオで録音されている。前者のエンジニアにはトム・スコット。後者にはエチエンヌ・コノドがそれぞれ当っている。アート・ベアーズ以外ではもっぱらフリー・ミュージック連とのギター・イムプロバイゼーションの活動が主だったフリスであるが、今回の作品は全てスコアによるいわゆるオーソドックスなユーロ・プログレッシヴ・ミュージックのスタイルであり、ギター奏者以上に具像化された彼の音楽観がうかがえる。バックにはマーク・オランデル、アクサク・マボール、ユニヴェール・ゼロ、サムラ・ママス・マナのメンバーが参加しており、RIOやランダム・ラダー・レコード周辺の協力を得て作製されたRIOのコラボレーションといった趣きがある。トラディッショナルやエセニック・ミュージックの素材を用いた変拍子リズムやフリーを経違した即物的手法のロック・チューンなどそれらは以外にも醒めたオプティミズムに貫ぬかれており、アート・ベアーズとはまったく異なった位相に於けるヨーロッパの省察、展望が看取できよう。

（秋田昌美）

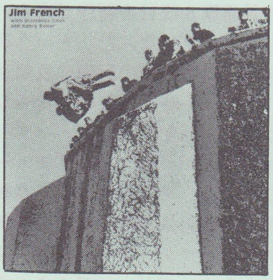


IN CAMERA
IV Songs
4AD BAD19

ラフ・トレードやインダストリアルの時代はもう終わった。今はファクトリー、そしてこの4-ADの時代である。ジョイ・ディビィジョンをより過激にしたような音を持っバウハウス、シャーマニック・インダストリアル・ミュージックの極地、グラハム＝ルイス・アンド・ブルース＝ギルバート、P.I.L.とバウハウスを足したようなモダーン・イングリッシュ、非予定調和音のかたまりのザ・ザ、原始宗教ロックのレマ・レマ、畸形のためのダンスミュージック、ダンス・チャプターなどがある。そしてここに取りあげたのはイン・カメラというグループである。

このレコードはファーストセコンドサイドとセコンドファーストサイドに分かれている。「ザ・カンバセイション」という曲は重く冷たいアコースティクピアノにストイックなドラムが絡むというシンプルな静粛な曲であり、このアルバムの中で最高の出来である。他の曲はかなりP.I.L.の影響を受けているようだ。このことはイン・カメラだけでなく、4-ADのアーティスト全てに言えることだと思う。それに、シャーマニックなドラミングと猟奇的で過激なギターカッティングがこの4-ADの特徴であろう。T.Gのカセットに何万円も出すなら、4-ADを全部買ったほうがいいと私は思う。

（森田一義）



JIM FRENCH
If looks could kill
A: Metarangrage-108

メタランゲッジの108番、ジム・フレンチ（ソプラノ・サックス、ソプラニーノ、リコーダーetc.）のリーダーアルバム。

1954年オクラホマシティの生まれである彼は、ビーフハート＆マジック・バンドのドラマー、ジョン・フレンチとはまったく別人である事を提正の意も込めて明記しておく。いずれにしろジム・フレンチは特質すべき音楽性を備えたアーティストである事は疑いえない。A面はフレンチのソロ。スコット・ジョプリンのナンバー2曲。トラッド2曲。フレンチ作のオリジナル・ナンバー4曲が収録されている。至純ともいうべきプレイは圧巻である。B面はフレンチ、ダイアマンド・ガラス（ヴォイス）、ヘンリー・カイザー（ギター）によるデュオ、あるいはトリオによるインプロビゼーション。ガラスの力量はすさまじい。エキセントリッフな声の機械である彼女は言葉を解体、修繕し、スピリチュアルな音響バイブレーションを抽出する。この作品はドラマティックでリリカルだ。

（秋田昌美）



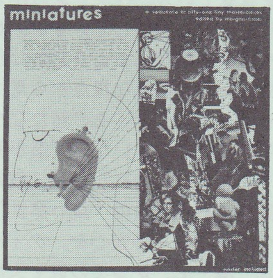
LEWIS FWREY
CAROLE LAURE
Fantastica
RCA RSL 1085

赤裸は恥辱だろうか。日本人である僕等には、少なからずそうである筈だ。あがた森魚の「嗚呼無情」が、所詮は悪い冗談にすぎないのは、虚構の舞台——キネマの調べが笑わせるではないか！——に逃げる事によって、自らの赤裸を道化てみせた点にある。いつだって、照れ隠しの身振りなしでは想いの本音すら語れない……それが僕等の不幸であるのだ。

このように語り始めたのも、「これはまるで、あがた森魚ではないか!?」という印象が、ルイス・ヒューレイにあるからに他ならない。彼は自らの作品——一枚のアルバム——を、さながら一編の物語を紡ぎ出すようにして虚構の円環を閉じる程にはしたたかではないが、例えば自らの肉声を恥じるようにして、場末の酒場の雰囲気を、そっとそのサウンドに忍ばせる事を忘れないのだ。それでもあの名作「ファースト・アルバム」では、各々の歌が各々の場に宙吊りにされたまま、青空の痛みにも似た固有性を保っていた。辛うじて、赤裸が赤裸のまま、立ち尽くしていたと言っていいかも知れない。それは悲惨な事だ。

本アルバムは、残念ながら、無名にして固有なる赤裸のインパクトを欠いている。一人の男が一人の男として立ち尽くす場所は、断じて「愛の御伽話」なんかじゃない筈だ。うそ寒いこの虚構は、悲しい——。

（和泉直樹）



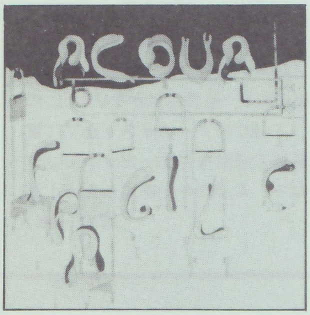
VARIOUS ARTISTS

Miniatures
E: Pipe 2

書き切れない位多くの参加者、元パトウのオリー・ハルソル＆ジョン・ハルシイからレジデンツ、ワイアット、フリス、フリップそしてエトロン・フーにZNR、ペンギン・カフェのサイモン・ジェフス、ギャビン・ブライヤーズ、D・カニンガム、アンディ・パートリッジ……あー本当に書き切れない51の参加メンバーが、一曲づつ全51曲のミニチュア的小品を提出、それを元モーガンのリーダーで、後にモットやブリティッシュ・ライオンズなどの2流バンドを転々としたキーボード奏者モーガン・フィッシャーが編集し「Miniature」とタイトルしたこのアルバムは、1938年マルセル・デュシャンによって発表された“レイザー・カヴァード・ボックス”という、68の小品を自家アトリエに展示した試みと、1955年にピート・シーガーが1分にも満たないベートーベンの「第九」をバンジョーで演奏したレコードに刺激されて制作されたという。それぞれの作品は各々アーティストの個性を適切に反映した短くも機知に富んだものばかりで、また各々自分のヴィジュアルな自己紹介をコラージュしたポスターにも腕をふるっている。フィッシャーの芸術意識の高さと顔の広さにまずびっくりさせられるが、彼自身の作品「Green And Pleasant」ではEL＆Pの演奏で有名な「聖地エルサレム」がダダ的なキーボード・アレンジでカッコヨク演奏されている。英語がわからないとダメな作品もあるが、まずはこのアーティスティックでマジカルなムードにとりあえず乾杯だ。

（北村昌士）

国　内　盤



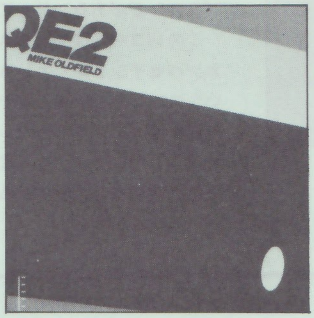
アクア・フラジーレ

キング　K22P・113

PFMの弟のような捉え方をされて、その真価を発揮する前に解散してしまったアクア・フラジーレだが、長い年月を経てここに登場したファースト・アルバムを聞き直してみると、やはり措しいバンドを亡くしたような気持ちになる。彼等やフォルムラ・トレ、イル・ボロなどが所属していたヌメロ・ウーノというレーベルは、当時のイタリア国内の音楽状況を刷新し、さらにPFMなどの国際的スターまでも生み出した真に創造的なレコード会社だったが、ここから送り出された数々の名作には、初々しくて自由な雰囲気が溢れんばかりに感じられる。もちろんここに紹介するアクア・フラジーレのファースト・アルバムなどは、このムーブメントを代表する1枚として、長い間多くのファンに語り継がれてきた名盤である。彼等はフォーク・バンドのスタイルとしてアコースティック色が強いグループでスタートしたので、ここに収められている曲の中でもその面影が随所に感じられ、時にはアメリカのウエスト・コーストのCSN&Y風のコーラスまで聞かれる。しかしそれは彼等の本質ではなく、あくまでもそういった要素を完全な形で自らのサウンド構成に織り込んでいると解釈すべきだろう。

表面的なスタイルの中には、ジェネシスやジェントル・ジャイアント、イエスなどの影響も感じられるが、それはあくまでもスタイルとして見た場合で、やはり彼等はイタリアそのものの温和で明るい面を感じさせる、つまり多くの人が探し求めている良質なイタリア・サウンドを完成させている。PFMがもっているような箱庭的なバロックの薫り、構築されきった繊細な美をもっているわけでもなく、かってのイタリアのバンドが常套手段としていたクラシカルで大胆な表現を用いるわけでもない。オザンナのようにイタリアの陰の部分を映し出すわけでもないし、フォルムラ・トレのように感傷に訴える情緒を持っているわけでもない。それでも彼等はイタリアのもつある一つの面を直観的に、しかもストレートで自然に歌い上げる。ここにもまた私達が知らなかったイタリアの1つのキャラクターがあったような気がする。

後にヴォーカルのヴェルナルドはPFMの「チョコレート・キングス」に参加し、彼の出身バンドとして引き合いに出される事になったアクア・フラジーレだが、もしもそういった事で興味をもつならば、セカンド・アルバム「マスメディア・スターズ」でも十分であり、それ以上に彼等の本質を知る意味で、このファースト・アルバムを聞き直してみる事を勧める。なおここには全部で7曲収められているが、いずれも英詩で歌われている。ヴェルナルドが長い間英語圏で生活していた事もあるが、それ以上に彼等が国際進出を目ざして希望を抱いていた良き時代を感じてしまう。プロデュースはPFMとその立て役者であるクラウディオ・ファビで ある。　(角屋　直彦)



マイク・オールドフィールド
QE2
(クィーン　エリザベスII世号讃歌)

ビクター　VIP6971

マイク・オールドフィールド通算8枚目の新作である。前作「プラチナム」あたりから〝ポップになった〟という評判のマイクだが、彼もヨーロッパ・ツアーでの巨額の負債返済とか、子供の養育だとかで、デビュー時とは比較にならないほど多くの《社会体験》をつんだ立派な大人だ。

確かマイク・オールドフィールドがデビュー作「チューブラー・ベルズ」を発表したのは'73年、その時僕は何と高校2年生。マイクは当時5月で20才を迎える天才少年として世間を騒がせていた。この頃はソフト・マシーンもキング・クリムゾンも、ゴングもファウストもカーヴド・エアもキャラバンもみんな建在だった時代だから、今思い返すと嘘みたいな話だ。「チューブラーベルズ」や「ハージェストリッジ」そして涙の名作「オマドーン」などといった初期のマイク・オールドフィールドの作品には、なつかしい感傷でいっぱいになった幼時幻想が素晴しい透明度の中であふれ返らんばかりに波打って、聴いているこちらもそれに激しく打たれ、清められるという原体験的なコミュニケイションがあり、そんな小宇宙ドームのような世界から時間や空間をながめている時の精神状態は当時、学校・家庭という社会的隔絶の中から世界を見ていた自分の生活とぴったり照応していたようだ。美しくて大好きな音楽だったし、そこには何の疑問もなかった。同世代の作家という意味でも多分、マイク・オールドフィールドは僕にとって初めてそういう感じを抱けたアーティストであったろう。

今でも彼の音楽は僕の中でとても大きな位置を占めているはずで、時々思い出したように「オマドーン」などをきくと、初めてのアシッド体験の記憶なんかが、鮮烈な情緒となって甦ってくる。

さて本アルバム「QE2」だが、プロデュースにジェネシスでおなじみのデヴィッド・ヘンツェルがあたり、バックにフィル・コリンズなども顔を見せている。ベテランの作らしくきわめて余裕のある開かれた世界を展開しているが、かつてのように自己の内部を完全に世界模型化しようとした狂ったような美しさはない。自分の音楽を様々な視点から見つめ直し、独立したオブジェとしようというマイクの新たなバランス意識が濃密に感じられる作品だ。こういうと〝進歩的〟な人は彼が後　しているように思うかも知れないが、彼の本質的なエレメンツは全て健在であり、君の〝鋭い感性〟が陳腐に感じるような箇所は全くないから御安心を。クィーンエリザベスII世号の航行する〝海〟を、かつての彼を支配してしいた母的な原理へとオーバーラップさせれば全ては明らかになる。実に象徴的なイギリス青年のモラトリアム期脱出宣言だ。　(北村　昌士)

PICK－UP



トーキング・ヘッズ
リメイン・イン・ライト
フォノグラム　RJ-7691

「フィア・オブ・ミュージック」に次ぐトーキング・ヘッズのアルバム第4作目「リメイン・イン・ライト」こそ昨今の最っともインパクトをもったロックのリリースである事はまちがいない。その衝撃の由来は、この作品が楽曲の完成度の高さとハイテックなスタジオ技術－といっても単にミキシング技術やイーノとヴァーンの手によるアレンジメントの妙理についてではなく飛び抜けた表現力を供った演奏力についてなのだが－によって生じた上質のクオリティーをもった作品という以上に、トーキング・ヘッズが今回この作品制作に当って導入したアフリカン・ミュージックの概念なるものによるところが大きい。ライナーおよび関係記事にも明らかなとおりヴァーンは前作の「ジンブラ」や今だお目にかかってはいないが、ヴァーンとイーノとの共作「マイ・ライフ・イン・ザ・ブッシュ・オブ・ゴースト」以来フェラ・クティ等現代アフリカン・ミュージックのコンテキストに接近している。「リメイン・イン・ライト」がアフリカ的であるという事だけでは驚ろくには至らないわけだが、トーキング・ヘッズは音楽の上位構造として装飾的なやり方でそれを使用するのではなく、音楽の制作プロセスの首尾一貫した方法論としてそれを適用した。こうして導びきだされた音楽にはいくつかの特徴がある。それは、音楽の基本的フォーマットがインプロヴィゼーションによっている事。このインプロヴィゼーションは、リズムとモノ・コードの反復という約束事によって行なわれている。その為これらの曲は全てフェード・アウトで終了する。予定調和的なコード・チェンジが皆無である事。メロディーはリズムとのりの生みだすアトモスフオアの裡から自然に沸きでるものとしてあり、それをもとに事後のアレンジが成されていることなど。歌詞も大方ヴァーンによる即興的なものである。（ヴァーンの唱方は実に表現多彩なものに変貌しているが、これには彼の愛聴リストにも含まれているアルバン・ルチエールのヴォーカリゼーション等の感化もあるのかもしれない。）

アフリカ音楽が直観によって、アナーキーな部分をもった統一的総体を作りあげているとすれば、トーキング・ヘッズの場合は、従来のロックの規範的音楽構造を論理的に分析、解体、再構成するところから音楽のインスピレーションをひきだすという回路に従っている。これはまことにトーキング・ヘッズらしい操作といえよう。そしてそれは最も戦闘的、エモーショナルであると同時に最も文明化された音楽として成功している。イーノのプロデュースによるこの作品のパーソナルはオリジナル・メンバー4人の他に、元マザーズのアドリアン・ビュロウ（ギター）、元ラベルのノーノ・ヘンドリックス（ヴォーカル、コーラス）、ジョン・ハッセル（トランペット）らが協力している。

（秋山　昌美）



オメガ
ライブ
・キスタディオン'79
キング　K22P・114～5

ハンガリーの大スター、オメガの最新ライブは共産圏で盛り上がるホットなロック状況を伝える素晴しい出来である。まず驚くのはもの凄い拍手の大きさであろう。効果音を巧みに用いたオープニングと観客の熱狂ぶりは、ロックの後進国と思われている東欧のイメージを吹き飛ばさんばかりの勢いである。むしろコンサートの数が少ない状況の中で、フラストレーションを抱えて会場に足を運んでいるような印象すらある。ひと昔前は、二流ハード・ロック・バンドのイメージが強く、ハンガリーのトップ・グループでこそあれ、その内容は過小評価されがちであったが、日本でも「ガマポリス」という傑作が発売され、その本質がやっと理解され始めたようである。確かにドイツのベラフォン・レーベルから発表されているアルバムで、日本にもかなりの数が輸入されているものの中には、ゲテ物としか思えない作品もあるが、それは単にたまたま多くの人が知っているオメガの一面がそうであっただけで、前述の「ガマポリス」のシンフォニックで流れるような美しい旋律を聞けば確ずその捨て難い魅力を感じるだろう。そして「ガマポリス」以上に聞いてもらいたいのは、この素晴しい2枚組のライブで、過去から現在に至るまでの印象的な曲がバランス良く網羅されている。雄大なスケールで広がるシンセサイザーをバックに歌われる曲やヘヴィーでハードなナンバー、アップテンポの曲など音楽性にも幅が感じられるようになったが、彼等のリズム感やノリは日本人に好まれ易い重くて引きずるようなもので、さらに歌の節などにはそれこそ泣きのメロディーが終始一貫して流れる。特に観客が曲と一体になってこのようなメロディーを唸る様子などは、他人事とは思えない。そう言えば日本では、かってユーライア・ヒープとかディープ・パープルが海外を上回る人気を獲得していたが、私個人の判断ではこれが日本人好みのノリだと思ったこともある。それはオメガにも共通して言える事だし、数年前にモスクワでユーライア・ヒープの「七月の朝」が時期はずれの大ヒットになった事でも解ると思う。とにかくドイツにしろ日本にしろ、そしてハンガリーを含んだ東欧にしてもマイナー調のハーモニーに対する思い込みがとても強くて、オメガに対する日本での評価もきっと高くなっていくように思う。少し無駄な話が多かったみたいだが、彼等の曲の構成テクニックの素晴しさには、本当に驚いてしまう。そういった意味からは、いわゆるプログレ・ハードの形容だけで片付けられないかもしれないし、彼等の音を楽しむ方法もまた人によって様々であろう。彼等は国家的な英雄であるそうで、共産圏に住む若い人々の心情を歌い上げるスターとして想像を絶する人気を獲得している。いずれにせよオメガが優れたグループで私達にも無言で感動を呼び起こすことは当然だし、むしろ自然なのかもしれない。録音の悪さ以外は文句なしだ!!

（角屋　直彦）

国内盤



ジョン・ウェットン
クロス・ファイアー
ポリドール　28MM0010

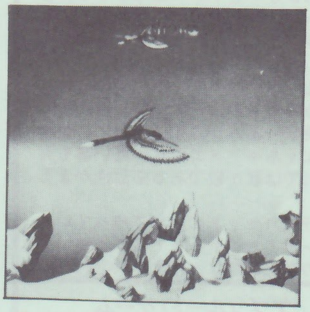


ジャパン
孤独な影
ビクター　VIP6969

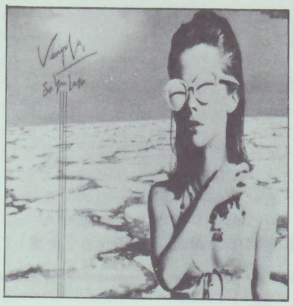
ジョン・ウエットン——お前はいったい何者なのだ？
金のためなら何でもやる——ちょっと言葉が悪いかな——節操のない男、という印象が強いんだよね。だって、モーグル・スラッシュ、ファミリー、キング・クリムゾン、ロキシー・ミュージック（ツアーに参加）、ユーライア・ヒープ、ＵＫ、ウイッシュボーン・アッシュ……という、彼の辿った経歴を考えてみる時、誰だって「お前いったい何考えてるの？何が本当に演りたいのさ？」と聞いてみたくなるんじゃないの？
実際、キング・クリムゾンからユーライア・ヒープに移る際に——もっともクリムゾンが解散した後の話だけど——「金のためさ」みたいなコメントを残しているわけなんだけど、そうすると、彼って結局、スタジオ・ミュージシャンにすぎないのかな……って思ってしまうんだ。リーダー格でかなり頑張っていたみたいだったＵＫも解散——入れこんだボクも「れれっ!?」とズッコケ——そして今度は、ナニィ、ウイッシュボーン・アッシュだと!?うんもうウエットン様ったら、浮気性なのね、嫌い！……なんちゃって。ベースはいつもバカテク最高、歌（＝声）だっていい感じ出してるんだけどねえ……いつだって素顔の半分も聴き手に見せない、彼ってホントに、一人の優秀なスタジオ・ミュージシャンにすぎな……ん？ナニこれ？
——で、彼のソロ・アルバムなんだけど、まさか、ズドドドドドグガーン無伴奏ベース・ソロ、なーんてガキの遊びみたいな事を演っているんじゃあるまいな……とその実ホントは期待しながらチッと針を下ろすと！
何だか彼の過去の経歴がグオーンと徒党を組んで押し寄せて来た……って感じで、一瞬これはヤバイんでないかい、と思ったりして。
サウンドは端正だし、まあこれは彼の力量からして、当然みたいなもの。驚きの音はないし、可もなく不可もないってトコ。でまあ、やっぱしどうしても、あっクリムゾン、あっＵＫ、あっユーライア・ヒープ……なんて感じてしまうんだよね。要するに、サウンド的に目新しい事はナンニモ演ってないの。
で、ボク、このアルバム聴いてさ、でもとても嬉しかった事がひとつあるんだよね。それは、このアルバムで初めて、曇りガラス越しではあるけれど、「ああ、こいつはこれが言いたかったんだな」みたいな、まあ言ってみれば彼の素顔の一端に出会う事ができたって事。『やりきれない夜』なんて、いいね、ホントに。別に四畳半フォーク（古いね！）にへつらうわけじゃないけど、音楽の向こうにきちんと一人の男が居て、でコッチをきちんと見てる……てのじゃなけりゃいかんのじゃないかい殊にロックン・ロールは。次回は、彼とダイレクトにひとつの夜を過ごしたいって、いまこれ読んでくれてるキミも、そう思うだろ？
（和泉　直樹）

日の丸を意識したとてもダサいジャケットでデビューしたジャパン。もうあれから３年経ち、日本では写真集は出るはナニは出るはで大変な人気グループにのし上がった。このアルバムは、「クワイエット・ライフ」（これは傑作）に続く４枚目の作品。本国ではレコード会社をヴァージンに移しての初アルバムだ。イアン・ギランが出たりこのジャパンが移籍したり、ヴァージンは今大変な模様変えの真最中みたいだが、これだけのことでヘヴィ・メタルとグラム・ロックのブームが一辺に来たと考えるは余りに日本音楽業界人的な考え方だ。11月にイギリスに渡った高野裕子嬢の最新情報によれば、サッチャー政権の見るも無残な失政の影響で、イギリスは福祉抑制とインフレの谷間に落ちた底なしの不況状態だという。ザ・ポップ・グループのメンバーは500円のお金もなくて、高野嬢の部屋にやって来てはお金と食い物を手当り次第にあさって帰り、ちまたでは職にあぶれたコックニーがさんざん怒り狂ったあげく世直しを意気込んでネオ・ナチに入団する。社会生活における価値観も何もあったもんじゃない。正気と狂気が現実に入り乱れている、そんな現状のロンドンだ。ジャパンのような到錯した連中（ファンの方、失礼！）もある意味で正統であり、巨大なアンプにファズギターをつっ込んで、一種の真空状態の中に身を秘めていたいと願うヘヴィ・メタル・ファンの心情も　この国のリアリズムの確かな一環であろう。いずれにしても日本のような資本主義構造の中でブームの波に乗せられて集団ヒステリー状態になっているのとは、その内実は根本的に異なるのである。渋沢龍彦氏のサディズムに関する評論書などを読むと、エロス的到錯と政治性が微妙な関係を持つことが言及されているが、アジテイションとしてのエネルギーがエロティシズムへのフラストレーションと奇妙に結びつく、とはどうやら本当らしい。
で、日本の熱狂的ジャパン・ファンの女の子たちが政治的にジャパンを聴いていた、なんてことが現実に起こっていたら日本も本格的な世紀末国家の仲間入り間違いなしなのだが、そんな事はこの際けちけち考えないようにしたい。
ロキシー・ミュージック、デヴィッド・ボウイ、ブライアン・イーノの香りが、このアルバムからも濃厚に感じられる。前作よりも更にキーボード奏者の某君の腕が上がったようで、全ての曲においてアレンジメントの飛躍的進歩が伺える。歌詞が手許にないが、デヴィッド・シルヴィアンはとても良い詞を書く。そして場面場面、あのけだるい低音で情感たっぷりに歌い込んでいる。30年代のベルリンとか、そんな暗く重いものを引き摺るようなけだるさと甘美な芳香を放っている。いいねえ、なんて思って聞いていたらボウイーの「ワルシャワ」にそっくりな曲まで出てきた。次のアルバムのプロデュースはイーノかボウイーが登場するという本当のようなデマも飛んでいる（北村昌士）

P I C K — U P



イエス
イエスショウズ
ワーナー　E5565〜66



ヴァンゲリス
流氷原
ポリドール　28MM0013

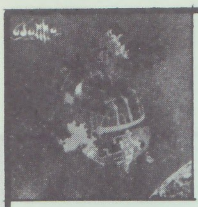
かつてイエスが来日し、そのステージでスタジオでのあの複雑な曲をもの凄いロック感覚で完璧に演奏し、しかもステージでしか味わう事が出来ない楽しさも兼ね備えたショーを展開したのが、当時あまりにもショッキングな出来事で忘れられない思い出になっているが、その後発表された３枚組のライブ・アルバム「イエスソングス」は、その衝撃と興奮を永遠に伝える大ベスト・セラー・アルバムになっている。当時はとにかく世界中が彼等の新しくて常織を打ち破る音楽に熱中し、イエス・ブームとさえ騒ぎたてられたのである。当時の事ながら彼等の人気は常に不動の１位を保ち、巨大なスーパー・スターの座を獲得した。しかし日本においては、ここ数年来イエスの人気が下降気味であり、その音楽的評価もなぜか低いのが現状である。それは彼等の音楽性や魅力を中途半端な形でしか理解出来なかったことによるもので、かつてのイエス・ブームの際にも多彩なキーボード群や一つのスキもないテクニックの話題やその他あらゆる面でセンセーショナルだった彼等は、単に物珍しさや表面的な新鮮さだけでしか解釈されていなかったのかもしれない。当時、ロックに対してあらゆる意味で無知だった我々は、まるで原始人が文明の力を知らされたような、そんな屈折した衝激だけが先に走ったのかもしれない。土台がしっかりしているイギリスやアメリカでは、今だに想像を絶する人気を保ち、彼等の音楽が正しく認識されているのがうらやましいばかりだ。彼等にとって２度目のライブ・アルバム「イエス・ショウ」は、そんなイエスの自信と真実味が伝わってくる物凄い迫力のライブを私達に聞かせてくれる。これはジョン・アンダーソンとリック・ウェイクマンが脱退する以前に録音されたもので、一度発売が決定したにもかかわらず延期されていたものである。これを聞くと「イエスソングス」時代のステージよりも数倍スケール・アップし、もはやロック・コンボの演奏とは思えない域に達してしまったような、そんな計り知れない完成度とショーそのものの楽しさや絶妙な構成に思わず身震いすらしてしまう。イエスは、一般に冷たくて歌心を忘れたバンドのように言われる場合が多いし、確かにクールで客観的なところはあると思う。しかし彼等のサウンドは、その歌詩からも判断できるように、人間の感情や営みを無視したものでも、またそれを起えたものでもなし、むしろブルースなどよりも人間臭さを感じさせるのである。この人間らしさというのは、可能性を極限まで追求し、新しいサウンド・スタイルを限りなく求めて前進するひたむきな姿勢にも感じられ、これは意外にあたりまえの事のようでも多くのバンドが実践できるものではない。ジョン・アンダーソンは、イエス・サウンドに対する批判に対して『人はなぜ山に登ろうとする？それは、そこに山があるからさ。』と平然と答える。彼等の姿勢は本当に美しい。　（角屋　直彦）

ヴァンゲリス・パパサナシューの新作。この後にもうイレーネ・パパス（ギリシアの女優で「666」で狂気じみたヴォイスを聞かせてくれた。ヨーロッパの映画界ではかなりの大物）とのジョイント、アルバムや、ジョン＆ヴァンゲリスのセカンドが控えているらしいので、オリジナル・ソロ・アルバムの新作とでもいうべきか。ヴァンゲリスは現在、ポリドール・インターナショナル、イギリス・ポリドール、フランス・ポリドールの３社と別個に契約を結んでいて、これは「チャイナ」に続くインターナショナルからのもの、そして「＆イレーネ・パパス」が「野生」に続くフランスとの契約作。またジョン＆ヴァンゲリスはイギリス・ポリドールからの作品と大変ややこしく、また多忙であるようだ。

先日特別テレビ・ドキュメント「コスモス」で彼の音楽が使われて話題になった。この人の音は、映像関係者からとても高く評価されていて、ＢＧＭに使うと非常に効果的なのだという。ちなみに僕は、３年前に巨人軍の王がホームランの世界新記録を打ち立てた時に、その特別記念番組で、王が756号を打ってホームベースを一周する場面が突如スロービデオになって、バックにヴァンゲリスの「反射率0.39」のB-1が登場してとてもドラマティックな効果をあげていたのを鮮烈に憶えている。

富田勲ではないが、ＢＧＭ作曲家としては本当にメジャーなヴァンゲリス。けれども人々は、彼が何を考えながら音楽創作を行っているのかはあまり考えようとしない。ジョン・レノンは芸術家としても音楽家としても、そして単に人間としても人々に大きな関心を持たれて死んでいったけれど、ロック・ミュージシャンとしてのヴァンゲリスの存在感は、その才能に比較して実に過少評価されてしまっていると思う。

このアルバムでは、そんな寂しい一面を彼自身多少不満に感じているのか、いつもよりもアップ・トウ・デイトでロック的なアプローチが見られる。あまり今まで関心がなかったポップな領域を意識して、全面的にヴォーカル・パートに創作の比重がかけられているようだ。そしてそのヴォーカリストたちのヴァラエティーの豊かなこと、チェリー・ヴァニラ、ジョン・アンダーソン、そしてイタリアの人気ニュー・ウェイヴ・グループ、クリスマのマウリツィオとクリスティーナと、今まで考えられなかったような異色の組合わせだ。まあ〝ポップ〟といってはそこは天才ヴァンゲリスのこと、この雰囲気はまたまただ事ではない。非常に冷たく突き離したようなアーティスティックな感覚の金属的な手ざわりがひどく現代的なだけで、人に媚びるような箇所はまったくない。シュールな光景と覚醒した詩情、そして全編を包み込む壮大なエレクトロニクスの亜空間。ヴァンゲリス存在の証しとして、充分信じるに値する作品である。　（北村昌士）



オザンナ／人生の風景

キング　GXH-2016

発売が延期になっていたオザンナの「人生の風景」が、とうとう発売になりその喜びもひときわ大きいものとなった。暗躍するイタリアの陰の部分をリアルに映し出していた彼等の音楽性は、「パレポレ」に於いて最もその特質を明らさまにしていた事は認めないわけにはいかないだろうが、サウンドのトータル性や完成度、そしてスケールの大きさではこのアルバムが頂点に立っていると言えよう。余りにもヒステリックで緊迫感のみが先行していた「パレポレ」は、確かに彼等の魅力が最大限に生かされたものではあったが、ここでは、それに加えて外に向かって力強く発散されるラテン系民族の暑い血が脈々と流れているのである。激しく大胆なアンサンブルは、解放的な暖かさとある種のロマンに基づくヒューマニティーすら感じさせるものである。歪な感性の持ち主は、「まさか……」と嘲笑するかもしれないが、これは誰もが本当は求めている根本的欲求を満たすものだ。（角屋）



レオ・セイヤー／シティー・ライフ・セレナード

東芝　WWS 81377

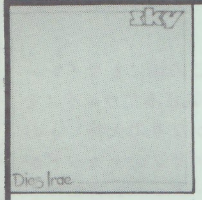
これは最高！……たまらない！……少し前、ラジオの深夜放送でA④『モア・ザン・アイ・キャン・セイ』を初めて聞いた時から、「ウヒャ、今度のレオ・セイヤーめちゃイイ！」と一人はしゃぎ、編集部内で孤立した。ふん、何を言うか、深夜放送で聞いてハラリとしなければ、ボクらのロックではないの娘なのだ。

実にこのアルバムの彼はですねえ、ボクとキミ、その間の「と」のね、シェイプアップを演っているんですよ──ナウいじゃん？

歌ってのはね、それが歌である時が一番カッコイイんだよ。哲学とか思想にまで横すべりしていかなくちゃテメエの言いたい事も言えないようじゃイカンのです。それでは歌が歌である必然性がまるでなくなっちゃうわけ。

ボクはこのアルバム、今度の旅行にカセットにいれて持っていきたい。各駅どまりの夜汽車で聴くレオ・セイヤーってイイよ絶対！

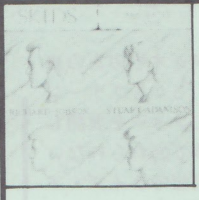
ロックってのは、ポップスがその至上形態なんだよ。（和泉直樹）



スカイ／怒りの日

キング　K15P-48

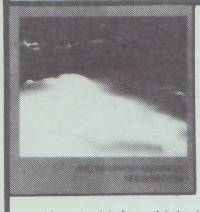
スカイの最新30cmEP。A面にはフランシス・モンクマン作曲の「怒りの日」(7,43)、B面にはベリオーズ作曲、トリスタン・フライ・アレンジの「断頭台への行進」(4,51）が収められている。ライナー・ノーツにはデジタル録音のことがいろいろと書いてあるが、音楽に関しては下らないどうでもいいことしか書かれていない。B面の「幻想交響曲」のアレンジ物は、フライのパーカッションと主題部がおもしろいかけ合いを演じるほかは、過去にいやというほどヨーロッパのプログレ・バンドがやってきたスタイルと大した変化はない。興味をひいたのはA面のモンクマンの曲だが、淡々としたキーボードとリズムのアンサンブルの中を、ウィリアムスによる中近東風の甘美なソロが舞うようにかぶさってゆく。何かとても力強いものと、同時にフランシス・モンクマンのロマンティストぶり（彼はW・ブレイク愛好協会のメンバーでもある）が鮮かに反映している。（北村）



スキッズ／アブソルート・ゲーム

ビクター　VIP6968

スキッズの3枚目のアルバムが、スコットランドから届いた。オリジナル・メンバーのギタリスト、スチュアート・アダムソンとヴォーカリスト、リチャード・ジョブソンに新メンバーとしてベーシストのマイク・ベイリーとドラムスのラッセル・ウュップを加えてのレコーディングである。子供の大人の世界から遊離した深層心理をテーマとした〝アブソルート・ゲーム〟は、彼らの民族性を鱗片に見せている。テクニックの素晴しいパンク・バンドは五万と有る。しかしながら、彼らには、スコットランド地方特有の民族音楽を兼備えているのである。ロンドンの殺駭とした気風の中では生まれることのないメロディックな音。特に「ハリー・オン・ボーイズ」B面Ⅰ曲目などディドゥジェリドゥの笛の音が、ギターと融合し不思議な感性の世界へと導いてくれることだろう。（鈴木布美子）



オーケストラル・マヌーヴァーズ／エノラ・ゲイの悲劇

ビクター　VIP 6967

このアルバムはオーケストラル・マヌーヴァーズの2作目にあたるもの。あちらでは日本におけるYMO的な聴かれ方をしているとか……なるほど、さすがはイギリスだ！（別に意味がないな。）プログレ及びユーロロック、オンリーではないけれど、かといってギンギン・パンクやテクノポップもちょっと…しかしどちらも適度に好きで聴きます、といった人には向いた音ではないかな、と勝手に思ってみたりする。歯切れの良いリズムの刻みとシンセサイザーの波のような残響がなかなか心地良い。ジャケットじゃないけど、午前4時頃の白々と夜が明けてゆく、あのイメージが全体に流れている。もちろんお婆さんの早起きではなく、ずっと闇の中で電燈を燈していた人がふと気づいて窓を開けてみた時のあの空と街の雰囲気です。

（高橋恵美子）



ジョン・アンダーソン／七つの詩

ワーナー　P-10937A

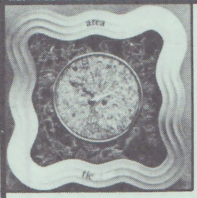
イエスを脱退したジョン・アンダーソンが発表したソロ第2作は、バックにブランドXのメンバーなどの参加もあり、話題に的になっているようだ。それでもこのレコードに収められている音は、昔ながらのイエス・ファンにはある程度の満足感しか得られないのかもしれない。たとえば、ファンキーなリズムを主体にした曲や、ポップなバラードがあったりして、これはどう考えても彼のイメージとは程遠いものになってしまうのだろう。彼がどうしてイエスを脱退したかは、もちろんこのアルバムの中の作風によって理解できるし、解答も容易である。だからと言って、彼の新しい出発点となった本アルバムの出来が悪いという事ではなく、むしろ音楽性に幅をもたせようとするジョン自身の努力が、なにか新鮮で刺激的である。そんな視点からも今後の作品や活動に期徒し、独自の道を歩んでほしいと思う。

（角屋直彦）



ドアーズ／グレイテスト・ヒッツ

詩人はいつも何を見てるのだろうか。焦点は正確に一点へと収束してるのだが、それが現世なのか、何処なのか。僕は色々な詩人の顔を知っている。そして気着くことは皆、目が同じだということ。A・ランボウもE・A・ポーもはるか彼方を見ていて、摑みようがない。瞳は空気のように透明なのだが決して純真とは見えない邪悪な様をしてるのが多い。思うに彼らの魂はこの世に無いのかもしれない。彼らの存在は四次元空間からの単なる影で、描く世界は魂の究極に潜む四次元の実体でしかないような。彼らは常にそこへ回帰したがっている。「俺は愛と死とセックス以外の歌は歌わない」──ジム・モリソンがデビューした時の発言だが、影がこの朧んだ三次元空間を彩るのに他に何があるだろう？　何も無いからジム・モリソンは絶望していたし、ドアーズは熱かった。ジム・モリソンが死んだ時、僕はまだロックなんか知らなかったけど、遺産だけでも彼が永遠の美に見える。（中島）



アレア／ティック・タック

キング　K22P-116

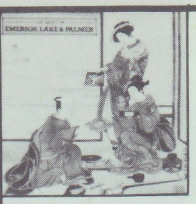
〝Tic & Tac〟という時を刻む音をタイトルにしたアレアの最新アルバムがリリースされた。レコードに針を落とすと聴こえてくるのはかなりジャズ／フュージョン色の濃い音である。ロックファンというよりはむしろそちらの方面のファンに拍手をもって受け入れられるのではないかという気がする。

あらゆるものをその腕に抱きこみながら廻り続ける〝時〟をモチーフにしたジャケットに目をやりながら音の星々が流れてゆくのを聴くことができる。Patrizio Fariselliのキーボードと Larry Nocella のテナー・サックスをフィーチャーし、からみあう音の大きなうねりがあなたの身体を包みこんでゆくことだろう。（石井理恵子）



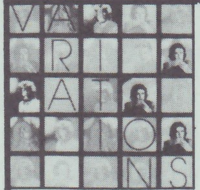
マーク・ボラン／メタル・グルー
東芝 EMS 81380

ボランは天国でも踊り続けているのだろうか、それとも踊り疲れて眠ってるのか。否、ボランは天国にも地獄にも行きはしない。彼は唯死んだ。血みどろになって粉々に砕けて。踊り疲れて全てを消費してしまった。彼は自分が死ぬ日を知っていた。死方も。そしてそれは刻一刻と迫り来る。知ってはならないことを知った時、人間は冗談で忘れようとする。でも死・時間・運命の前に人間は余りに無力だ。だから時間の絶望の大河に漂流しながら彼は逃げた。道化師という冗談、舞踊病という傷の内に。彼は狂ったように踊り、メークする。「僕はブギーするのに生まれたのさ」――嘘だ。でも何と崇高で透明な嘘だろう。このベストアルバムは死神の魔手に捕われ、どうすることもできずに笑ってるはかなき逃避の軌跡である。未発表曲も一曲含まれており震える彼の歌声はむせび泣きにすら聞こえる。多分ボランならこう言うだろう、塩ビの化石は回りながら消えていく、と。（中島）



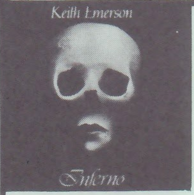
EL ＆ P／ベスト・オブ・EL ＆ P
ワーナー P10920

ＥＬ＆Ｐの解散、イエスのジョン・アンダーソンとリック・ウェイクマンの脱退、レ・ツェッペリンのジョン・ボーナムの死去と70年代のブリティッシュ・ロックシーンを象徴した大物グループが没落していくのを見るのは辛い。その中でリリースされたEL&Pのベスト・アルバムである。キース・エマーソンのキーボード・フィーチャリング・バンドの先駆者としての功績は大きい。ロック・キーボードの分野での革新者であることはもちろんのこと、ハモンドL-100とハモンドC-3の間に立ち、両手を広げて２台をプレイするというステージ・アクトは視覚的にもエキサイティングなものであった。アルバム自体は初期のナンバーからのピック・アップが多く70年代のロック少年達には、思い出深いアルバムとなることであろう。（鈴木布美子）



リック・ヴァンダー・リンデン ＆ カタラン・ティルコレア／変奏
キング K22P・117

オランダのロック・シーンはフォーカスを台頭として、カヤック、トレース、フィンチ、スーパーシスター、ソリュージョンと70年代初めから活動が目まぐるしくなってきた。フォーカスが「ハンバーガー・コンチェルト」を発売し、日本でもある水準の人気を得た頃リック・ヴァン・ダー・リンデンはデビューした。フォーカスのタイス・ファン・レアのキーボードが、バロック音楽に精通し、ヤン・アッカーマンのジャズ色の強いギターとの掛合いが見事であった様に、リックのクラシカル・ロックも素晴しいものであった。新作アルバムも、フォーレ、バッハに傾倒した、流麗なメロディを奏でている。それはあたかも、中世ヨーロッパ社会と80年代の接点を結びつけているがごとく、私達を甘美なファンタジーの世界へと運んでくれることだろう。（鈴木布美子）



キース・エマーソン／インフェルノ
ポリドール 28MM0008

イタリアのレーベルでサウンド・トラックのアルバムを数多くリリースしているシネボックスからキース・エマーソンのアルバムが発表されたのは、日本でもロードショウされた某映画のためで、内容の方もＥＬ＆Ｐ時代からの多くのファンの失望をうながすのが目に見えていたのでまさか国内盤が発売されるなどとは思ってもいなかった。今でも根強いファンが多いために、彼のソロ作が手に入りづらいイタリア盤でのみ発表されているというウワサやデマもかなり流れたが、こうして身近に聞けるようになった以上、そのあまりにもくだらない内容には、ほとんどの人があきれかえるのではなかろうか？ちょうどタイミングよくワーナーでＥＬ＆Ｐのベストが発表されたばかりの出来事で、この両者を比較したときの情けなさといったら言葉では表現できない位だ。本誌のVol. 14の輸入盤レビューで発表直後にすでに適切な解説がしてあるのでもう一度読んでほしい。（角屋直彦）



ホーク・ウィンド／ライブ
ビクター VIP 6745

長年のキャリアを誇るホークウィンドがライブ・アルバムを再び発表した。まあ、何と言っても今風のヘヴィー・メタルの流行にはさすがに逆えませんな。ちょうどかつてのホークウィンドの一派が結成したヘッドストーンあたりの音を思い浮かべてもらえれば……。〝最後のスーパー・サイケデリック・バンド〞と名乗り、ロンドン中を興奮させた彼等のおもかげなどほとんどないし、今さらステージでヌード・ショウやサイケなライティングじゃイモになろうってもんだ。それでもヘヴィー・メタルそのものを昔から誇っていたホークウィンド、若い連中の形にはまったハードな感覚とはまるで違うし、やはり時代の重みや妙にほの暗い面が、かえって今日の時世には新鮮だ。もっと若い世代の人達もたまには彼等の渋さを味わうべきなのかも。

僕もたまにはストレートなロック感覚の中で、シンプルでダイレクトな共感を覚える音楽を素直に受けとめてみたいな。（角屋直彦）



ジャン・リュック・ポンティー／未来の罠
ワーナー P-10939A

ジャン・ルュック・ポンティはかつて一度来日しているバンドで、その時は彼らの音楽の特異性が一部で評判となったものである。今回、私の手元に彼らの音が届けられた時、フュージョンと分類されていたことから、それらの音楽に対する私の先入観で軽視していたのだが一針落としてみるといわゆるフュージョンというものから連想される妙な軽さは微塵も感じられず、代わりに幻想的で深遠なうねりに包まれたので驚いた。通産８枚目のアルバムなのだが、前作でイマジネーションの広がりを重視したプログレッシヴ・ロック的な作品であったのに対し、今回はそれにリズムのうねりにも重点を置いており生き生きとした作品になっている。ポンティという人は３才からクラシック・バイオリンを始め、パリ国立音楽学校首席卒業ということもあり、彼の創り出すサウンドにはクラシックのテクニック、ジャズの自由さ、ロックの攻撃的な絶対性が息づいている。（中島）



イーラ・クレイグ／ヴァージン・オイランド
キング K22P-119

右岸にはドナウ川が細波ぎ、北東部に聳えるアルプス山脈の白い頂。中世ヨーロッパ社会は、ハプスブルグ家のもとで壮厳な歴史を象り、クラシック音楽では、ハイドン、モーツアルト、ベートーベン、ヨハン＝シュトラウスと数えきれぬ程の巨匠を生み出したオーストリアから出現したイーラ・クライグ。「ヴァージン・オイランド」と名付けられた最新アルバムでは、彼らの10年間の足取りを辿るとわかるようにシンフォニックなサウンドを展開させてくれる。メロトロン、シンセサイザー、フルートの音は、ギターに融け込み、クラシックとロックミュージックは離合する。これは、彼らがコンサート会場にフランクフルトのオペラ会場を使用するという面からもうなづけるが、80年代のロックを創り出す新しい要因を含んでいるとも考えることができよう。（鈴木布美子）



アイアン・メイデン／ライブ!!＋ワン
東芝 EMS 41001

「このレコードは許す限り最大のヴォリュームでお聴き下さい」とジャケッ帯にある。成程それに違いない。キミはこのアルバムでアイアン・メイデン噂のライヴ――とは言え45回転30cm盤で４曲入うち１曲は未発表スタジオ録音曲であるが――に接する事ができるのだから。まずはキミの部屋をロンドン・マーキー・クラブにセットしろ。用意はいいか。

「音のデカさは七難を隠す」――あまり聞かない諺だが、まあ当たらずといえども的はずれだな。でも連中は七難をものともせず押しまくるのだ。この熱気を感じてよ！ボクらはやはり、あるものはあると認めねばなるまい。この音がいまここにある――これは現在のロンドン・ロック・シーンからの偽らざる現場報告なのだ。観客のノリは最高だ。

同時代をも振り切って疾走するパンクスの影に、紛れもなくこの連中みたいな反時代が生きているのだ。（和泉直樹）

死体派達の春が来る。死体派というとすぐネクロフェリア、つまり死体と交わるということを思う浮ぶと思うが、それだけではない。死体嗜好や自殺願望も死体派に属する。

《JOY DIVISION》

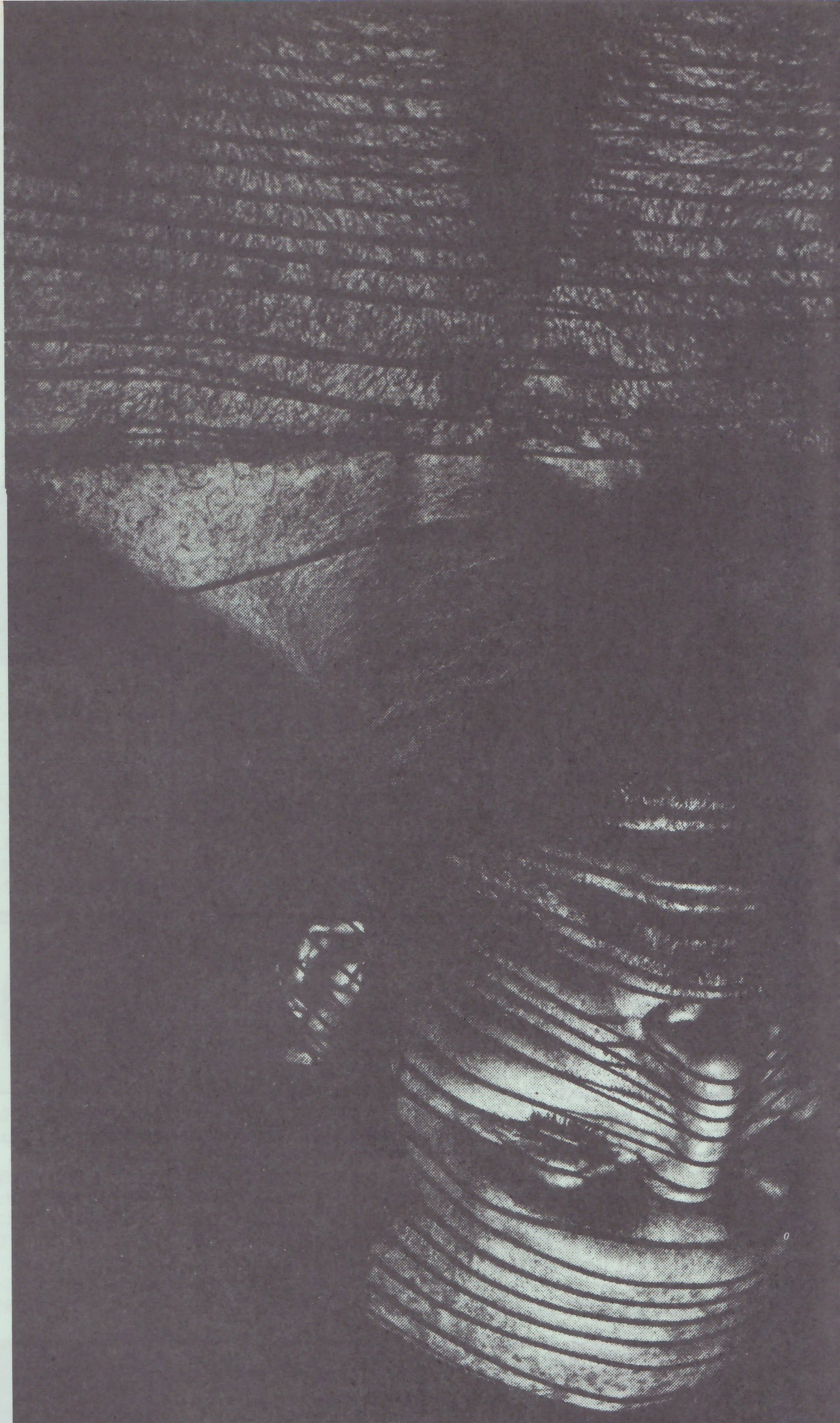
自分達の音楽を憂鬱で重苦しいと評価されることを人一倍嫌っていたイアン・カーチスが自らの生命を捨てた。原因はナゾである。彼は何も語らなかったし、他のメンバーも沈黙している。なぜであろう。筆者はそのナゾを彼らの2ndアルバム「クローサー」から解き明してみたいと思う。

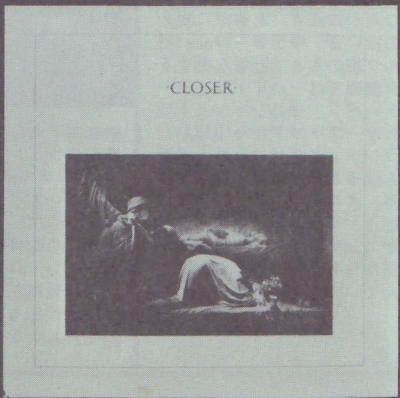
「クローサー」、それは人を食する晩饗のための音楽である。聞く者は死体嗜好者であり、その食卓に載るのはイアン・カーチスである。このレコードを聞く時は、正装をし、前かけをし、食卓の前で聞くのが好ましい。

晩餐は始まる。人食い人種達の儀式に用られる打楽器の音と骨にノミを打ち込むような鋭い音を叩きだすステファン・モリスのドラム、肉体をきざむチェーンソウのようなバーナード・ディッキンのギター、黙々と唱えられる儀式のための呪文のようなピーター・フックのベース、そしてほどよく腐敗した肉体で食卓の上に横たわり、神へ祈りを捧げているイアンのヴォーカルが聴こえてくる。チェーンソウがイアンの肉体に入る。腐敗した肉はチェーンにまき込まれ、食堂中に吹き飛ぶ。骨は少しの抵抗の見せたが、すぐに砕れ、手、足、頭がドウ体から切り離される。それらは皿に載せられ、我々の前に置かれる。頭だけは皿の上に立てられ、食卓の中央に置かれ、我々を見つめ、まだ祈りを捧げ続けている。私の前には右足が置かれる。切り口をノゾくと、無数のウジ虫どもがうごめいている。思わずツバを飲み込む。私は前かけを整え直し、彫りの深いスプーンを手にし、かろうじて形を保っている皮膚を破りうじ虫のかたまりをえぐり取る。目の前に持っていき、しばらく目と鼻で味わったあと、口の中に入れる。噛むとうじ虫がはじける。恍惚とする晩餐がしばらく続き、終わりが近づき、ばかげた話にワインを浸み込ませる。晩餐の終わりにイアンの頭を神台に移す。その瞬間、それは口と目を閉じ、神の国へ去く。

イアンの死は、非常に個人的なことだ。故に、その原因を我々が知る必要はない。では、我々はそれをどのように理解すればいいのか。それは娯楽と理解すべきだ。人食いという娯楽に、イアンは肉体を提供しただけだ。

1977年、ワルシャワで結成
ギター：Bernard Albrecht.
ドラム：Stephen Morris.
ベース：Peter Hook.
ヴォイス：Ian Cutis.

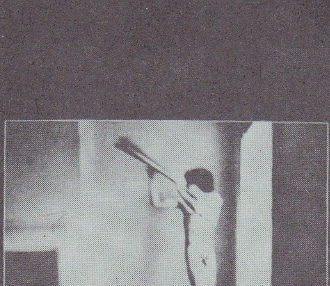




死こそ最高の娯楽である

●バウハウス ●J・ディヴィジョン

森田一義



BAUHAUS

人類滅亡の時が間近であるということは周知のことだと思う。そして、その時期が2000年前後であるということもほぼ確かなことである。あと20年たらず。滅亡を防ごうとする全ての努力は無駄だし、いまさらザンゲしたって遅すぎる。

では、我々は残り20年で何をすべきか。楽しむべきである。何を？死を。どのように？自分の最高の死に方を見つけるのである。もはや、人間に残された唯一の娯楽は死だけである。数年前,「スナッフ」というにせの殺人映画が上映され、あまりにも見え見えの特撮で殺人狂達をがっかりさせた。しかし、現在世界中でこの手の本物の殺人映画が頻繁に作られている。それらのフィルムは一本一千万から五千万円ぐらいで取り引きされて、金持ち達の格好の娯楽となっている。日本にも何本か輸入されているらしいが、作っているという噂はない。他人の死を楽しむのもいいが、いろいろと問題がある。自分の死を楽しむ方が、比較的、楽である。よく検討してほしい。

バウハウスの音楽には、死の願望、そしてそれの接近のための切迫感が感じられる。その切迫感は彼らの腐敗した肉を剝ぎ取り、白骨化してしまった。

彼らは今まで6´枚のシングルと一枚のアルバムを発表している。それらを辿ると、彼らの死の接近速度は毎回倍化しているようだ。最新シングルでは、かつてバカな奴らにネオ・グラムの騎手と言われた恨みを晴すためか、T.レックスの「テレグラム・サム」を取り上げている。T.レックスの曲は色々なグループに取り上げられているが、一度もマーク・ボランを越えるものはなかった。しかし、バウハウスは違っていた。完全に破壊してしまった。筆者はもはや、T.レックスを聴くことはないと思う。

彼らはもうそろそろ頂点に達するはずだ。もはや、彼らに望むことは死だけである。彼らの最期のステージはきっと、ものすごいものになるだろう。彼らは観客とのコミュニケーションを一切拒否をする。いや、それだけではなく他のメンバーとのコミュニケーションをも拒否する。故に演奏は完全に非調和的であり、観客はマシンガンで乱射されたような恍惚とした快楽に浸る。そして、頂点に達した瞬間、彼らは自決する。なんて素敵な見せ物なんだ！

《死こそ、最高の娯楽である》
ベース：デビット・ジェイ　David Jay
ギター：ダニー・アッシュ　Dauiel Ash
ドラム：ケビン・ハスキンス　Kevin Haskins
ヴォーカル：ピート・マーフィー　Peter Murphy
78年、結成

sky

虚構の青空

スカイ
あるいは コンテンポラリー・ムードの鏡

軽く聞き流すには良いんでないの……程度にしか最初考えていなかったこのスカイではあるが、まさかこのボクに彼等の原稿の執筆依頼がまわってくるなんて、人生これだから判らない。人生の判らなさはこれのみじゃない、実はボクはスカイ登場の瞬間を現場でもって体験しているわけでありまして、つまりは二年間のレコード店勤め、デビュー・アルバム登場の瞬間……てのは、いま考えてみても（こう言っちゃ何だけど）実に精彩のないものであったな。ちょっと聴いてみて、ヤバイなあコレ、置き場所に困った。記憶に間違いなければ、と言ってもその頃のボクはもう完全にアルコール漬けだったから何ともアヤシイものだけど、確かフュージョン扱いだったと思う、いやメーカーのセールス路線の話だけどね。で、現場の人間は四六時中音楽浸りな事にかけては、もしかして評論家以上にキチガイであるわけで、ブツがいわゆるジャズ系のフュージョンじゃない事くらい、一発で見抜いてしまうから、習慣とは恐ろしい。それでもって、この奇妙に端正な響きをもった一枚のアルバムは――だいたい初回入荷が一枚ってのがいまなら嘘みたいな話だ――なんとあのクロード・チアリなんかといっしょに店頭に置かれたのだ。置いた人＝これ書いてる本人、キングさんゴメンナサイ。ゴメンナサイついでに書いてしまえば、このアルバムは一ヶ月くらいで返品されたのでありまして、チェックした人＝……とても書けません。

いまこれを書いている現在、スカイは全アルバム大ヒット中というとんでもない事になっていて、人生これだから……これはもういいか。するってえと、あの、とりたててどうという事のないサウンドの中に、当然そのキザシが秘められていたという事になるわけで、季節はずれのキリギリスみたいに、いつも時流の後手にまわるこのボクはミジメなのじゃ。

だからって、別に居直るわけではないが、「スカイ2」、「スカイ3～怒りの日」のたて続けの大ヒットという、厳然たる事実をつきつけられてもなお、ボクにとってスカイの音ってのは、良くて「うん、まあこんなもんだな」くらいの印象しかないのだ。演奏が上手である事と、その音楽が感動的なものである事とは全く別の事なのだ。リーダー格のギターのジョン・ウィリアムスを匹頭に、キーボードのフランシス・モンクマン、ドラムのトリスタン・フライと、日本で言えばさしずめ東京音大といったところであろう、イギリスはロイヤル・アカデミー・ミュージックの出身がゴロゴロしているのだし、またいわゆる学士サマとかではなく、各々が豊富な音楽活動の経歴の持ち主であるという事からして、出てくる音楽が下手であろうはずがなく、ボクとてそこいら辺は十分に判るのだが、では端的にこの音楽が面白いかって言うと、残念ながらそういうわけにはいかないのだ。



ムード音楽というれっきとしたジャンルがあって、たとえばホラ、「歌のない歌謡曲」なんていう奴がそれだが、スカイの音楽ってのはその、高級ムード音楽という気がする。正統的なテクニックに裏づけされた、ジョン・ウイリアムスのギターが、聴き手のクラシック・コンプレックスの琴線をぴらぴらとくすぐるところが、高級ムード音楽の高級ムード音楽たるゆえんだ。うん、ちょっぴりジャズの香りもしたりして、高級だなあ。でも、バンドのフォルテシモの時にでさえ、リズムが決定的になしくずしなのが、ムードだなあ。生活への決意（地に足つけて歩く）にはほど遠い、細々としたリズム——これはなんだが日々我関せずの姿勢だなあ。うん、リズムが問題なのだ。まあ仮にエレキがギンギン弾きまくっていたとしてもだね、あるいはメロディーがいくら良くってもだね、リズムがシャンとしてないと、流れちゃうんだよね。ムードに流れちゃう。まさに、ムード音楽をムード音楽として成り立たせているもの、スカイをスカイとして成り立たせているものは、いわばこの虚勢されたリズムにあると言って良い。ひとつだけ例を示せば、レゲエは、どんなにスロー・バラードであっても、その裏に突っ立った深いリズムがあって、それが聴き手を常に生活へと喚起するが故に、ついにムード音楽と成りえない部分てのがある。

いつの世もムード音楽の売れない時代はないのだ。しゃくにさわるが仕方がない。誰だって一日中ファイティング・ポーズってわけにはいかない。疲れたら眠ればいいのだが、何だか人生もったいないような気がして、夜、ひとり、ステレオのスイッチをひねったりする。そんな時、スカイのこの安全な音楽はお似合いだ。スカイは聴き手にナイフを突きつけるような事は決してしないからだ。キミはキミのままで居られる。そんな馴れ合いにガマンできなくなったら、その時はキミの言葉で語ったらいいだろう。虚構の青空はボクにはいらない。

（和泉　直樹）



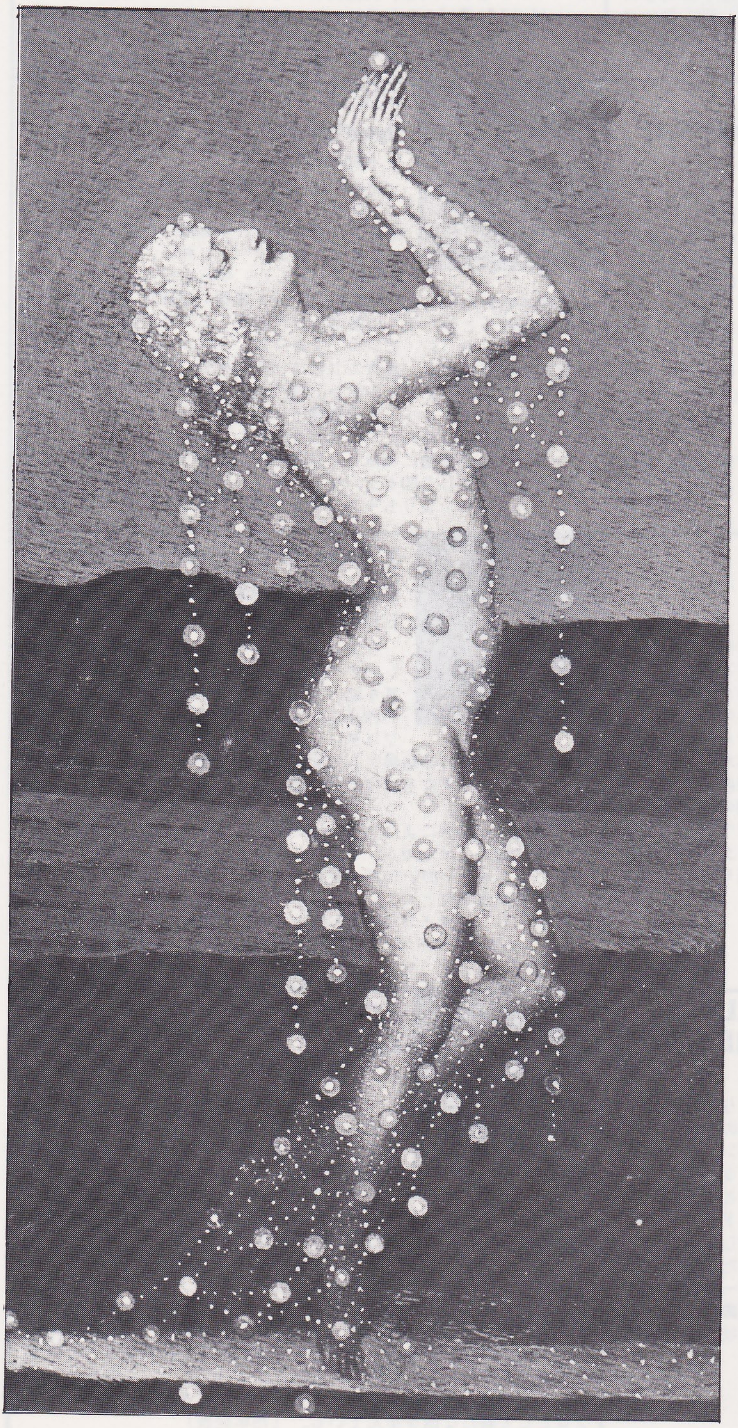




ミンスキーの領土　　秋田昌美

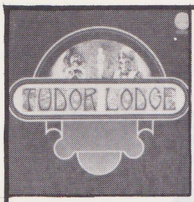
名盤選評特集

——フールズ・メイト未公開名盤150選!!——



選評
赤羽至、秋田昌美、M・石井、岩本晃一郎、小野正明、角屋直彦、木野草司、久野克浩、坂地昭一、佐藤正徳、杉山薫、鈴木真一、中島達弘、ヌメロ・ウエノ、山口尚武、山本雅幸、O・怜子 (50音順)

E：イギリス　G：ドイツ　F：フランス
I：イタリア　S：スペイン　Sw：スウェーデン
D：オランダ　Den：デンマーク　A：アメリカ
Fin：フィンランド　C：カナダ　Tur：トルコ
Fil：フィリピン



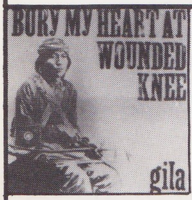
TUDAR LODGE
Tudar Lodge
E: Vertigo 6360-043

71年にヴァーティゴから1枚アルバムを出したブリティッシュ・フォーク・トリオ、テューダー・ロッジ……。紅一点のアン・ステュワートは、あのカーヴド・エアのファンタスマゴリアにフルート奏者としてゲスト参加しているし、ロバート・フリップやピーター・ハミルが参加して話題になったシンガー・ソングライターのコリン・スコットのアルバムにも参加している。このアルバムは、3人のソロ及びコーラスを主体としたそれはそれは美しいアルバムで、エレクトリック楽器は殆ど使用していない。ただひたすらに美しい生粋のブリティッシュ・フォーク・アルバムで、森崇先生と共に僕の涙の愛聴盤の1枚である。アン・ステュワートの澄み切った声と息使いも聴きとれるエモーショナルなフルートが、胸の奥底までしみわたり、聴く度に涙を誘うのである。変則6面開きジャケットなのだが、そんなことは単なるオマケに過ぎない内容勝負の絶品!!



THE LIVERPOOL SCENE
Amazing Adventures of
A: RCA LSP-4189

69年にアンディ・ロバーツと2人の詩人、アドリアン・ヘンリ、マイク・エバンスを中心にギタリストのマイク・ハート、ベーシストのパーシー・ジョーンズ、ドラマーのブライアン・ドブソンというラインアップで彼らの最初のアルバムを発表したリバプール・シーンは当時のブリティッシュ、アンダーグラウンド・シーンを代表するユニークな存在であった。この作品のプロデュースには人気ディスクジョッキー、ジョン・ピールおよび現在もTGなどと縁の深いライター、サンディ・ロバートソンがあたっている。アメリカの当時のアンダーグラウンドなアーティストに比べて、存在感の希薄なのは、ボンゾ・ドック・バンドなどと同様、英国特有のものである。この作品では、チェ・ゲバラに捧げられたチューン、HPラブクラフトやブラッドベリをモチーフに扱ったもの、バッドマンのテーマ曲のパロディ、また詩の朗読、フラワー調フォーク、ジャズブルースを試みている。



GILA
Bury My Heart at Wounded Knee
G: Warner WB-6234

73年、ポポル・ヴフの3rdアルバムより少し遅れてギラの2ndアルバムが出た。コニー・ベイトはポポル・ヴフの3rdアルバムにおいて重要な要素となったが、このアルバムではフローリアン・フリッケがそれになっている(ポポル・ヴフのメンバー2人参加)。

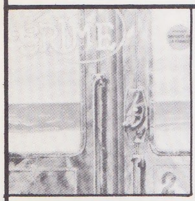
A面などは多少ポップという感じもするが、全体的にフローリアンのピアノが神秘的にかつ耽美的に流れる様は、やはりポポル・ヴフのサウンドとしか言い様がない程である。また、このアルバムのみに参加している女性ボーカルSABINE MERBACHについて詳しい事はわからないが、その哀愁的なボーカルはタイトル通りの感を呼び起こすにふさわしいものである。

コニー・ベイトとフローリアン・フリッケのコンビ第二弾とも言うべきこのアルバムは、ドイツ・ロック屈指の名盤であると言えよう。



NICO
Desertshore
E: Reprise K-44102

78年4月、パリの場末のディスコティーク"シアター・コンプリミエール"にニコは当時ちょうどブルームを結成したばかりのディディエ・マルエボールと共に、ハーモニウムを携えて登場した。明らかにコンビネーションの噛み合わぬマルエボールのフルート演奏に立腹して彼女は30分余り演奏するとそうそうに舞台をひきあげてしまった。エンディングはモリソンの"ジ・エンド"であった。これが私のニコについての最後の記憶である。大方ニコには「洗面所のバルブがきしむように歌う」と評されたヴェルベット時代のキャンピイなイメージが付きまとうが、ヴェルベットの影響下にあった"チェルシー・ガールズ"以後は彼女自身のエゴの世界を開拓していった。それはとりわけフランス中世歌曲に相似した曲調をもつ独特な作風である。71年この作品を発表して間もないインタビューで彼女は「私は人工のイリュミネイションよりもキャンドルの明かりの方が好きだ」と語った。



GRIME
Grime
F: Grime N°D-5679

アトウールの新作がポップになってしまい、アンジュがマンネリズムに陥り、パルサーが行くえ知れずのフランスのプログレシヴ・ロックシーンは終末だと噂される今日この頃。本当に悲しい限りであるが、そんな中で自主制作レコードを出して頑張っている連中がいる。それがこのグリムだ。男の叫び声から始まり軽快なリズムの滑り出す音楽はさながら、もう夢物語となってしまったフレンチロックの最盛期のアトウールやパンタクルなどを思い出させてくれる。音全体のサウンドはスイスのサーカスやスウェーデンのトラッティオアリガ、クリゲットなどに非常に近いが、クラシカル・オルガンや美しい語りかけるボーカル、激しく迫るリズムがすばらしいアルバムだ。

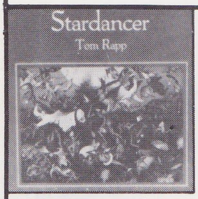


L'UOVO DI COLOMBO
L'uovo di colombo
I: EMI 3C 064-17889

リズム・セクションにのせて軽快なオルガンがすべり出し、この〝コロンブスの卵〟は幕を開ける。73年発表の彼らのおそらく唯一の作品、たかみ氏が音専でメモっていた様にブリティッシュ風タイト・サウンドと言えなくもないが、それは結果として類似したのであって中心をなすのはあくまでイタリアならではの美意識に乗っとった、彼らのエネルギーの発露である。

4人編成だが例によってFURIO CHIRICOタイプのバカテク・ドラムスに加え、オルガン、ピアノ、メロトロン、シンセ等多彩なキーボードとギターのVOLPINI兄弟が全編大活躍し、この作品を起伏に富んだ高水準作としている。

なお、シンセサイザーによる美しく印象的な分散和音で始まるA-3〝Anja〟は同じくイタリアの中堅ODISSEA(73年)のA-2の曲と驚くほど似ている。



TOM RAPP/PEARLS BEFORE SWINE
Stardancer
A: Blue Thumb BTS-44

天と地の瞑想の裡に色とりどりの花を咲かせたドラッグ・レボルーションの幻花パールス・ビフォア・スワインの"ワン・ネイション・アンダーグラウンド"がESPレコードから発表されたのは1967年のことである。トム・ラップの独特の唱法と浮遊感のある神秘的サウンドがルー・リードや初期ジャーマン・プログレッシヴ・ロック、そして今日ではスロビング・グリッスルのようなアーティストに与えた影響はきわめて大である。"スターダンサー"はブルーサム・レコード移籍後の1972年の作品。依然として衰えざる蒼ざめた詩情と楽曲の完成度の高さは言うまでもない。タイトル・チューンのような壮大なナンバーに於ては幻覚的きのこ雲の現出を見る。



FOX
Fox
E: GTO GTLP-001

ユニークな女性シンガー、ヌーシャ・フォックスを中心とするイギリスのポップ・グループであるフォックスの1stアルバム。その母体は71年結成された女性4人のグループだったそうだが、60年代末期に渡英した英国のソングライター、ケニー・ヤング(渡英後ソロ・アルバムを2枚発表)との出会いによりグループは再編され、女性はヌーシャ1人となった。メンバーには元スナフのピート・ソリー、元ハードのケイリー・テイラー、後にヤングと2人でイエロー・ドッグ(黄色い犬=きつね=Fox)を結成するハービー・アームストロング等が居た。サウンドは、鼻にかかったヌーシャのストレンジ・ヴォイスを中心に、ヤングのソングライターとしての才能がフルに発揮された素晴しく味のあるポップ・サウンドである。3枚アルバムを発表した後ヤングとアームストロングはイエロー・ドッグを結成、ヌーシャはソロとして新たな道を歩んでいる。(75年発表)

FLOH DE COLOGNE



Rockoper Profitgeier

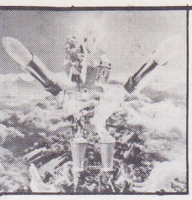
G: Ohr OMM 556-010

68年"VIETNAM"というアルバムでデビューした、フロー・デ・コロンの3rdアルバムである。全く、ジャケットといい、レコード盤（赤のカラーレコード！）といい、これ程までに徹底したグループも珍しいと思われる程、このグループの政治色は濃いのである

サウンド的には、前作同様テクニックに関して今一と言うところだが、ロックらしいロックをやっているという感じで、彼らの最高傑作だと言えよう。特にこのアルバムは、彼らのライヴ第一弾でもあり、B面におけるパーカッションのテクニックにはアシュ・ラ1stのクラウス・シュルツ顔負けの凄まじさがある。

何はともあれ、フロー・デ・コロン・ファン（もし、そういうのがあるとしたら）必聴のアルバムなのだ。

SECOND HAND

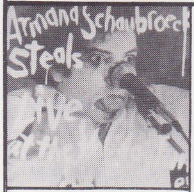


Death Maybe Your Santa Claus

E: Mushroom 200MR6

ケン・エリオット、キーラン・オコーナーの２人によるポップなプログレ・バンド(？)、セヴンス・ウエイヴの前身バンドが、このセカンド・ハンドである。メンバーにはその２人の他に、ストライダーに加わったヴォーカリストのロブ・エリオット(ケン・エリオットの兄弟という説あり)も居た。このアルバムは２ndにあたるもので、１stがグシャグシャでさほど面白くない出来であるのに対して、構成がダイナミックで緻密なサウンドを展開する好盤といえる。セヴンス・ウェイヴといえば、あのケン・エリオットの華麗なキーボード・ワークが魅力だったが、このアルバムでも彼のキーボードが中心となっており、特に全面的にフィーチュアされているヘヴィーなメロトロンが素晴らしい。もちろんパーカッショニストとしてのキーラン・オコーナーの才能も十分に光っている。ブリティッシュ・ロックの幻の名盤の１枚と考えても良いアルバムだろう。（71年）

ARMAND SCHAUBROECK



Live at the Holiday Inn STEALS

A: Mirror-4 7-98

アーマンド・シャウフロークは地元ニューヨーク州ロチェスターを本拠に活動するロッカーで米国のアンダーグラウンドなシーンでは隠れた支持層を獲得しているという。自主レーベル"ミラー"から既に５枚のアルバムをリリースしている。彼のロッカーとしての活動の基点には60年代の不良生活、62～63年にかけてのエルマイラ刑務所収容というものがあり、以後のロック活動はこの刑務所での体験を中心に形成された模様である。ミラーからリリースされている作品の大半はこの時期に作られたものが多い。その内容は刑務所での生活、体制批判、ホモセクシャルといったもので実生活でも刑務所改善運動を始めとする政治活動を行なっている。この作品はタイトルどおり77年ロチェスターにあるホリデー・インでのライヴ。とりわけトーキング・ボーカルで始まるサイド２全面を使用した"ストリート・ウオーカー"は屈折した存在の激しさをもったナンバーで圧巻。

TRETTIOÅRIGA KRIGET



Trettioåriga kriget

Sw: Epic EPC-80220

その名も「30年戦争」というスウェーデンのトレッティオアリガ・クリゲットの１作目。「北欧のイエス」との異名を取ったという彼等のこのアルバムは未だ荒削りではあるが、そのパワフルでプログレッシブな音作りは当時のスウェーデン、いや北欧ロック・シーン全体において、かなりの完成度と可能性を顕示していたと言っても過言ではないだろう。サウンド全体をリードするのは何と言ってもジャケットのナイフを思わせるようなクリステル・アカーベルクの冷たく冴え渡った鋭利なギター・ワークであり、その傾向は最新作「mot alla odds」まで変わらず一貫している。そしてスウェーデン語の独特のボーカル。高度なテクニックを有するバック陣。決して派手ではないが、味のある飽きのこないサウンドを展開してくれる。

サムラと並び北欧で最も存在感のある彼等が74年に発表した、北欧プログレッシブ・ロックの記念碑的な名盤。

GOLDEN EARRING



Moontan

G: Polydor 2310-288

ゴールデン・イアリングは基本的には、ストレートでハードなポップロックバンドだと思うが、この「ムーンタン」での大胆な曲創りには驚かされる。A面１曲目はキャッチャーなリズム、メロディラインで始まるが、後半はガラッと変って、ダーティーで幻想的なムードになってしまう。続く２曲目も東洋的な感覚を折り込んだり、ワンコードベースに乗ってサックスのソロが登場して来たり、中々ヴァリエーションに富んだ演奏を聴かせる。

圧感はアルバムラストの「The Vanilla Queen」シンセサイザーのシークエンスにメロディックなヴォーカルのからみ合い、アコースティックギターのソロ、そしてテープエフェクトからヘヴィなエンディングへと、思い切った曲構成が実にドラマチックだ。この創造性豊かなサウンドクリエイトぶりにゴールデン・イアリングの実力がうかがえるだろう。

NINO ROTA

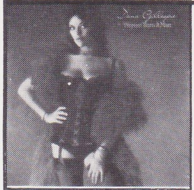


Federico Fellini's 8-1/2

I: RCA Victor FOC-6

五番街のCMキャッチフレーズに答えて、１枚フェリーニ＆ロータの紹介。前作ボッカチオ'70ではミルクのCMソングが楽しいが、この作品では、クラシックを大幅に導入してチャイコフスキー、ロッシーニのセビリアの理髪師、ワグナーのワルキューンの騎行、サセパリやサラギーナの踊るマンボ、ロータ自身の曲が混然一体となって、ラストの少年の吹くピッコロのトーンまでサウンド・トラック史上の傑作となっている。ロータは太陽がいっぱい、ロミオとジュリエット、ゴッドファーザー等多くの名作を手がけているが、フェリーニと組んだ時もっとも真価を発揮するようだ。1933年からサントラを担当してきたロータは昨年死去。オーケストラ、リハーサルがフェリーニとのユニットの最後となってしまった。青春群像で田舎の青春時代、甘い生活で都会のジャーナリスト期。8½では監督時代を描いている。現実、過去、想像の世界が同一日展開する自伝的要素の強い作品。

DANA GILLESPIE

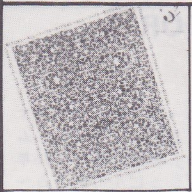


Weren't Born a Man

E: Victor APL-1-0354

ダナ・ガレスピーは、英国のシンガー兼女優として、その妖しげな美貌であまたの男を悩ませた。このアルバムは、一般的には１stアルバムと思われているようだが、実はこの前に２枚アルバムを発表しているので、３rdアルバムにあたる。彼女のアルバムは、その妖しげな美貌や112cmのバストを誇るグラマラスな姿態などとは全く縁の無いような、シンプルなサウンドで構成されている。デヴィッド・ボウイに注目されて、なにかと彼の世話になったということで、彼の書いた曲「アンディー・ウォーホール」ともう１曲では、彼自身とミック・ロンソンがプロデュースしている。半分以上がダナ自身の曲で、プロデュースも彼女が行っており、彼女の並ならぬ音楽的才能がうかがわれる。又、リック・ウェイクマンを中心とするバック陣も超一流だ。こんな少い字数ではとても彼女の魅力を表現出来るわけがないので、サウンドについても詳しくは触れずにおく。

RITUAL-ALL-7-70



Ritual-All-7-70

A: ESP 1048

〝リチュラル・オール・７－70〟は、マルチ・プレイヤー、アラン・ソンドハイム（キロフォン、アルト・フルート、サクソフォン、アコースティック＆エレクトリック・ギター、琴、イングリッシュ・ホルン、クラリネット他）を中心にするエクスペリメンタルなワークである。制作年は1967年、モノラルの録音。ソンドハイムのもち変える楽器によって様々なアンサンブル形式がとられる。中国のダブル・リード楽器"ソナ"、インディアン・フルート"バンサリ"、インドネシアのフルート"スリング"などの民族楽器の使用も注目されるが、これらはサンドハイムのフリー・ジャズからインド、中国、バリ島、イエメン、フランスの民族音楽までの広範囲の音楽志向視野を示す一例である。ライナーによると、リチュラル・ミュージックは演奏家と聴衆の両者を同時にクリエイトする一種のコミュニケーション音楽である。彼らのテープからピックアップされた13のフラグメントを収録。



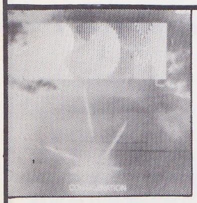
CMU
Space Cabaret
E: Transatlantic TRA-259

なんてファンタスティックなジャケットなのだろう!!宇宙服を着た踊り子たち……これこそスペース・キャバレーなのだ。CMUは、トランスアトランティックから2枚のアルバムを発表したグループで、メンバーにはギルガメッシュやソフト・マシーン等に参加したベーシストのスティーヴ・クックが居た。ジャケットやタイトルから想像する程スペイシーな感じは少なく、若干“夢遊病的サウンド”とでも呼べる部分があるだけのジャズ・ロックと言えるだろう。ロレーヌ・オデルとリチャード・ジョセフという人のヴォーカルを中心に、キーボード群（特にハモンド・オルガンが良い!!）とギターのアンサンブルが非常に心地良いサウンドである。ともすればアッという間に終ってしまうという感じのする、摩可不思議な魅力を持ったアルバムと言えよう。メンバーの殆んどが正体不明というミステリアスな先入感も奏功するのだろうか……？73年発表の2nd。



ITOIZ
Itoiz
S: XOXOA X-1101

知っている？XOXOAレーベルなんて。このイトイズやイズカイズなんて名前を見るとスペインのどこかの片田舎の地方のバンドみたいで、超マイナーレーベルなんだろうね。このレーベル3枚ぐらいのアルバムを出したっ切りつぶれてしまった様だけれども、とっても素晴らしい財産を遺してくれた、それがこのイトイズのアルバムだ。スペインでは珍らしい変形観音開きのジャケットのアルバムは、音を聞いただけでスペインのバンドだって解る人いないだろうね。それ程このアルバムが洗練されていて素晴らしいってこと。女性ボーカルと誤えるほど澄んだ声のボーカルと、優しく語りかける様なギター、夢の中を飛びまわる様なフルート、どれを取っても素晴らしい。パンタクルをもっと完成させたサウンドには誰しも涙が出てくるだろうね。きっと、とかく迫るだけしか脳のない一本調子のスペイン・ロックの中にあって僕らを魅了し心から聞かせてくれる素晴らしいアルバム。



ROVESICO DELLA MEDAGLIA
Comtamination
I: RCA TPL-1-1049

ギター、ベース、ドラムス、キーボードにヴォーカルの5人組「R·D·M」のこのアルバムはイタリアン・シンフォニック・ロックの粋を集めた大傑作である。

高度なテクニックに支えられた緊迫感あふれる演奏、そしてクラシカルなストリングスが効果的に配されている………。

このストリングスの導入はニュートロールスの「コンチェルトグロッソ」を思わせる程だが、それもそのはず、プロデューサーとして、ルイス・バカロフ氏の名前がクレジットされている。しかし、ストリングスはサウンドの中の一部で、主役はあくまでも5人のメンバーによる演奏である。ピアノ、チェンバロ等のアコーステイック・セットから、パワフルでタイトなリズムセクション。変幻自在に展開される広大な音空間に響き渡る張りのあるヴォーカル。

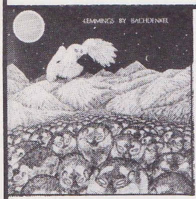
ひとつの完璧な芸術品がここにある。



MYTHOS
Mythos
G: Ohr OMM 556-019

ドイツ・ロック・フアンの間で幻の名盤とされていたMYTHOSの1stアルバムである。このグループは今でも活動をやっているが、何と言っても71年作のこのアルバムが最高傑作であろう。メンバーの1人、THOMAS HILDBRANDという人はメトロポリスと言うグループでも活躍した人でそのいかにもドイツのファシズムを思わせるドラムスは他に類を見ないものである。

A面“神話”“東方旅行”“英雄の死”と言う様な一貫したテーマの曲が続き非常にロマン的な感じなのであるが、B面すべてを費やした組曲ではいわゆるヒットラーとファシズム、第2次世界大戦といった人類の暗い歴史を物語る様な構成で最後に来たるべき人類の破滅を警告した文句などは、恰も現代社会への批判とも言えそうで印象深い。MYTHOSのメンバーはこのアルバムを残して一時解散する…、一つの神話を残して…。



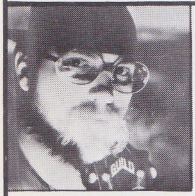
BACHDENKEL
Lemmings
E: IRC-001

フランスの古典的バンド、バッハデンケルのアルバムは、英国で自主再版されている。ここに紹介するのは70年の6月から8月にかけてパリでレコーディングされたもので、サービス用のシングル盤が付いている。このようなレコードが78年に入ってから再びリリースされた動機などは、まったく定かでないがそれでも時代の移り変わりによってめまぐるしく変動する音楽状況の中で、10年も前のしかもまったく未知であったフランスの音楽状況の一端を垣間見られるような貴重なドキュメンタリーとしての発掘の喜びとでも言うべき感動を与える。音の方は、当時のイギリスの噴火寸前の緊迫したアンダーグラウド・シーンのパワーを継承したとも思えるサイケデリックな趣きでいっぱいだが、強いてたとえるなら、ちょうどピンク・フロイドの衝撃的なファースト・アルバム「夜明けの口笛吹き」あたりに近い、そんな現実を超越してゆこうとする未完の領域への旅出ちを感じる。



STACKRIDGE
Extravaganza
E: Rocket PIGL-11

「最もイギリスを感じさせるグループは」と銘打って、評論家諸氏にアンケートをとったら面白いと思うが、僕だったらこのスタックリッジに一票を投ずるだろう。70年初頭に結成されたスタックリッジは一時解散状態に陥ったが、74年に再結成してこのアルバムを4枚目として発表した。もう1枚アルバムを発表して解散したが、現在メンバーの2人によって作られたコーギスが活躍している。どのアルバムをとってもとにかくイギリスであり、これは言葉で表現出来ないので大変イギリスである。このアルバムももちろんイギリスで、ゴードン・ハンスケの名曲“みみず讃歌”は特にイギリスと言える。次作「ミスター・ミック」では、あのデイヴ・ローソン（元サムライ、グリーンスレイド）が加入しており、これまた実にイギリスなのである。



R. STEVIE MOOR
Phonography
A: HP HPS-30734

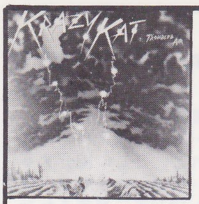
クリス・カトラーによって“ポップのマエストロ”と称されるR・スティーヴィー・ムーアの「フォノグラフィ」は1974年から76年にかけてテネシー、ナッシュビルにあるムーアの自宅で製作、録音されている。ムーアはギター、ベース、シンセサイザー、キーボード、ドラムス、音響効果まで全て自らの手で行なっている。極めてラブリーなハンド・メイド・ポップ。「フォノグラフィ」は最初全くマイナーな機構のもとに初回100枚のプレスで発表されていたものである。



LOS JAIVAS
Cancion del Sur
F: Sonopresse 69682

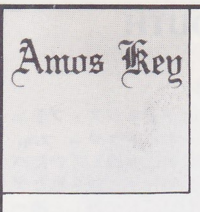
このグループは、アルゼンチンのグループである。アルゼンチンというとフォークローレの国であり、まさかプログレシブ・ロックと呼べるものなど存在しないだろうと思っていたのだが、なんと、こんなにもユーロロックに近い感覚のグループが育っていたのだという事実が判明した。おそらく、スペイン系であろうこのグループは77年アルゼンチンで結成され、現在は、フランスで活動しているようだ。

アルゼンチンというお国がら、多種の民族楽器をとり入れ、フォークローレの影響もみられるが、なんといっても彼らの最大の持ち味は、タイトなリズムとヘビーなサウンド展開である。また、メロトロンやシンセサイザー類のキーボードも大胆に取り入れて意欲的な試みをしている。南米の国々には、このアルバムを聞く限りにおいて、他にも高度な音楽性を持ったプログレシブなグループが存在しているのではないかという期待を抱せる。



KRAZY KAT
Troubled Air
E: Mountain TOPC-5009

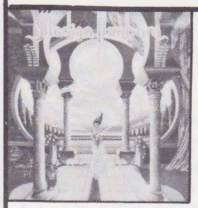
元キャパビリティ・ブラウンのメンバー3人を中心に結成されたクレイジー・キャット（ハナ肇とは関係ない.!!）の2ndアルバムである。キャパビリティ・ブラウンもヴォーカル・ハーモニーが素晴しいグループだったが、こちらはサウンド自体がナウになっており、ハーモニーも実に洗練されて非常にかっこいい!!とにかくセンス抜群で、文句のつけどころのない極めつけのポップ・アルバムである。1stよりもこちらの方がより完成度が高く、ブリティッシュ・ロック通ならば誰でも一目置いている隠れた名盤と言えるだろう。行き着くところまで行ってしまったというわけでも無いだろうが、彼等は本作発表後しばらくして解散したようである。話は全く変わるが、同じマウンテン・レーベルから去年デビューしたVoyager というグループ（あのトントン・マクートのキーボード・プレイヤーがリーダー!!）は最高!! ケイト・ブッシュは人気が出すぎて面白く無い。



AMOS KEY
First Key
G: Interconrd 26 413-5U

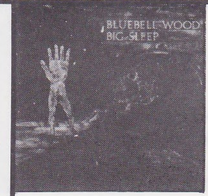
キーボード・プレーヤー、ベーシスト、ドラマーの3人、いわゆるＥＬＰタイプのグループは他にもトリトナスやトリアンヴィラットなどがあるが、このアモス・キイは同じＥＬＰタイプ(一言で言えば)のグループでも少し違っている。それは、クラシカルなサウンドというよりむしろバロック的要素が強く、全面に流れるハモンド・オルガンの響きは紛れもなくバッハやベートーベン、シューマンを思わせるものがある。

キーボードの荘重さという面では多少物足りない感じがしないでもないが、あくまでもベースとドラムスのリードをとるという感じでそのオルガンの余韻を残して走り去る様なサウンドはアモス・キイならではのものである。アモス・キイが残した唯一のこのアルバムは、ドイツ・ロックでありながら非常に晴れやかな気分を与えてくれるものである。　74年作。



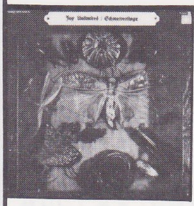
MEDINA AZAHARA
Medina Azahara
S: CBS S-84014

スペインでは今まで人気NO.1を保ってきたトリアナが最近ＣＢＳからデビューしたアラメダに人気を抜きさられたと言う。またもう一つ、トリアナの好敵手としてＣＢＳからデビューしたグループがいる、それがこのメディナ・アサハラである。全員がまったくもって新人の彼らではあるけれども、アラメダと同じくトリアナなどよりもっと演奏力や作曲能力があるグループだ。僕の友人が「トリアナはスペイン演歌だ」って言ってたけれども、トリアナやグラナダ、ガルベルトなんていういも臭いGONGレーベルの時代はもう終わり。これからは、イマン、カイ、アラメダ、メディナ・アサハラのCBSとクラック、ニュウ、メズキュウィタのChapaの時代だ。だいいち、メディナ・アサハラなんて、とっても知的な響きの名前じゃない？



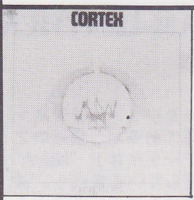
BIG SLEEP
Bluebell Wood
E: Pegasus PEG-4

我々が古き時代のロックを語る時、ある種の郷愁が、ふいに頭をもたげてくるのだけれど、本人たちはいったいどんな気持ちで昔を思うのだろうか。このビック・スリープも古くは、ブリティッシュ・サイケデリック・ロックの雄アイズ・オブ・ブルーそしてこの後は、ニュートロンズをへてマンの人脈図へと加わっていくのだが。ここでの彼らは、後のニュートロンズ、マンといったロック・バンドとしての姿とは、やや異なる、どちらかというと、アイズ・オブ・ブルーの持っていたクラシカルな響きをよりつきつめた音造りをしている。とりわけ哀愁の極みとも言える美しいメロディー・ラインと、ピアノのきらめきが素晴らしく、ひかえめではありながらも、無駄なく使われているストリングスも、彼らならではの世界を造り出している。あくまでも、メロディー主体に音造りをしていた彼らの姿勢は、当時のブリティッシュ・ロックの一つの頂点をかたちづくるものであった。



JOY UNLIMITED
Schmetterlinge
G: Pilz 20-21090

ドイツでは70年前後、実験音楽がさかんになり、バレーやミュージカル等にまでその活動がえいきょうした。そしてジョイ・アンリミテッドもまたそのような波にのったのである。「シュミッタルング」と題されたこのアルバムはJOY UNLIMITEDが音楽を担当したバレーのアルバムであり、このバレーは1972年ボンで公演されたのである。彼らはこの外に「リフレクションズ」というアルバムを出しているが、シュミッタルングは彼らのデビュー作である。　シュミッタルングとは日本語で表わせば「人類の創生」という言葉にあり、このアルバムもその題名にまつわりつくいろいろな曲を含んでいるのだが、バレー音楽としても、ロックグループのアルバムとしても完成度の高いものがあることにはちがいない。ドイツ音楽を知る時、それらがロックと交わるときこのアルバムはジャーマン・ロックファンにはかかすことの出来ないアルバムである。



CORTEX
Troupeau Bleu
F: Esperance ESP-155524

コルテクスは、フランスのジャズ・ロック・グループ……と言うより、この1stアルバムはほぼジャズに近いサウンドである。2ndの方（頭の薄い男2人が向き合ったジャケット）を聴いたことが無いので比較が出来ないが、このアルバムでは紅一点のミレイユ・ダルブレイのハイ・トーン・ヴォイスが極めてフィーチュアされている。スキャットも素晴らしく、女性ヴォーカル・ファンには応えられない歌いっぷりだ。フランス語の響きというものが、本来のシャンソンならぬこういったジャズ・ロックに奇妙にマッチするのはどういうことなのだろう？特に1曲遊びっぽくやっているサンバなど最高.!!リズムは相変わらずフランスのバタバタ・ドラムだが、フランスの音だなあという感じがして逆に良いのかもしれない。演奏ではキーボードのテクニックが相当のもの。およそロックとは言えないが、フランスの中では極めて質の高いアルバムと言える。（75年発表）



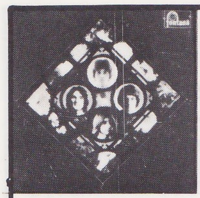
TONTON MACOUTE
Tonton Macoute
E: Neon 4

ブリティッシュ・レーベルの中でもマニアの間でさわがれている超マイナーレーベルのNEONから出た20枚にも満たないレコードのうちの一枚がこのトントン・マクートのアルバムだ。NEONと言えばジャケットはもちろんあのキーフであり、このアルバムに於いてもキーフの感情が十分に味わえる。ひなびた古き良き時代のイギリスの音は淡々と流れるオルガン、軽く、それでいてどこか激しいドラムにより代表される。そしてこのアルバムはそんな要素がたくさんつめこまれたタイム・カプセルだ。トントン・マクートはジャージィなロックを展開していたがこのアルバムを一枚だけ残して解散してしまった。しかし彼らの残したこのアルバムは当時のイギリスが目に浮んでくるほどに、ほんとうになつかしい。時をへて聴けるアルバムはそうざらにはないと思うが、ブリティッシュ・ロックの全盛期をプンプンに匂わすアルバムの一枚としてここに紹介したい。



JAD FAIR
The Zombies of Mora-Tau
E: Armageddon AEP-003

ロスアンジェルス・フリー・ミュージック・ソサエティで活動するハーフ・ジャパニーズのドラマー、ジャド・フェアの7曲入りＥＰ。レジデンツのグーズバンプでイラストを描いている男だ。ポリバケツで骨でも洗っている様なトイ・ミュージックとでも言うのか、ジャドの幻児性と周到な生理科学が生みだしたダダ的な音響詩。ギミックなしにフリー・ミュージックはこのようにタブラ・ラサの状態から導きだされねばならない。全てのインストルメンタルをジャド自身で手がける。



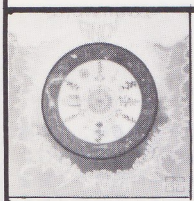
FLAMING YOUTH
Ark 2
E: Fontana STL-5533

フレミング・ユースはジェネシス・ブランドXをクロス・オーバーするドラマー フィルコリンズがジェネシス以前に在籍していたバンドである。そしてこのARK2と題されたアルバムはFLAMING YOUTHの残した唯一のアルバムである。このアルバムは宇宙というテーマのもとにトータライズされていてAB面を通して彼らの音楽性がうかがえる。このアルバムに於いてフィルはドラムはもちろんボーカルも部分的に担当しているが、後にジェネシスのメンバーとしてドラムとボーカルを担当する彼の才能が随所に見られる。69年から70年にかけて当時、数々のバンドが色々な革新的要素を取り入れたアルバムを発表しているが、このアルバムも宇宙的な広がりを見せるサウンドがそのような要素の一つとして考えられることが出来る。ガブリエルが抜けたジェネシスが今もなお存在するのはほかならぬフィルの力によるものではないかと考えさせられる一枚だ。



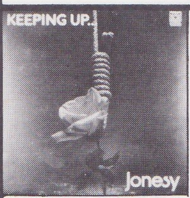
I DIK DIK
Suite Per Una Donna Assolutamente Relativa
I: Ricordi SMRL-6095

ディク・ディクの最高傑作を紹介しよう。「Volando」っていうラブ・ロック調アルバムばかりが有名な彼らだけれど、ここに紹介する「Suite Per Una Donna……」というやたら長いタイトルがつけられた1972年に発表されたこのアルバムこそ、このコーナーで紹介すべき幻の名盤、全編組曲の息もつけない素晴らしいアルバムだ。"女が持っている娼婦と妖精の2面性"をテーマに切々と歌い上げるこのアルバムは初期のバンコやリアル・アカデミア・ディ・ミュージカなどのサウンドによく似ている。それもそのはず、リアル・アカデミア・ディ・ミュージカでメロトロンやギターを担当している人間などが参加しており、メンバークレジットがないのだけれどサウンド作りやアコースティック・ピアノなどはリアル・アカデミア・ディ・ミュージカそのもの。おそらく、リアル・アカデミア・ディ・ミュージカの母体はこのアルバムと思われる。とにかく知ってもらいたい。



FINCH
Glory of the Inner Force
D: Negram NR-107

ジャズ色の強いバンドの多いオランダにおいて、フィンチは最も強力なバイタリティーが感じられる。音の中心であったヨープ・ファン・ニムウェグンの卓絶した技量と、熱情を注いだロックスピリットによる張りのあるプレイは、フィンチの各アルバムをドラマティックに仕上げている。現在迄に3枚のアルバムを発表しているが、そのどれもが力強いエネルギーの中に緻密で哀愁を帯びた音律を見出す事が出来る。NEGRAMからbubble（Ariola）に移って出された3rdアルバムでは、メンバーチェンジされ内容的にはまとまりのある好作品を発表したが、フィンチの真の姿は前2作、特にこの1stがたたみかける限りない魅力を秘めたバイタリティーが感じられる作品となっており、他のオランダのグループには無いオリジナリティー溢れる息遣いが感性を貫く。3rd以後彼等の名を見る事が無いが、近い将来さらに飛躍した姿で烽火を上げてくれる事だろう。



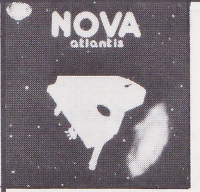
JONESY
Keeping Up
E: Dawn DNLS-3048

ジョーンズィーは、69年からアンノ・ドミニというグループに居たジョン・エヴァン・ジョーンズと、その兄トレヴァーを中心として72年に結成されたブリティッシュ・ロック・グループである。日本でも全アルバム（3枚）が発売されていたので、御存知の方は多いはずだ。この2ndアルバムには、トランペッターとしてキャリアを持ったアラン・ボウンが参加しており、ジェイミー・カレス（あのグレイシャスに一時在籍）のメロトロン等も含めて、3枚の中で一番プログレッシヴな内容を持ったアルバムと言える。従ってプログレ・ファンには一番人気があるのだが、一般的な評価としては次作の「グロウイング」（74年の「モントルー・ダイアモンド賞」を受賞）の方が高いようだ。ジャケットに裏付けられた、一種の冷たさを感じるような寒々しいサウンドが魅力的なアルバムである。初期のクリムゾンのような美しいメロトロンの洪水が涙もの。（73年発表）



DON BRADSHAM-LEATHER
Distance Between Us
E: Distance

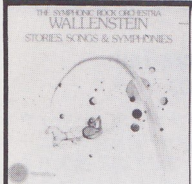
ドン・ブラッドシャムというアーテイストについての詳細は未確認であるが、最近のオルターネイティブ系のアーティスト"North with Wound"なども言及している事から、英国ではある程度の知名度はもっているのだろう。この2枚組のアルバムは恐らく彼自身によるインディペンデント・レーベルであろうと思われる"ディスタンス"から72年にリリースされたものである。1枚目のレコード両サイド全面を使って展開されるタイトル・ナンバーと「ゴブリンの踊り」、「秋のもや」という2曲、計3曲が収録されている。内容はブラッドシャムのアコースティック・ピアノ、オルガン、メロトロンの即興演奏ソロで部分的に打楽器がオーバーダビングされている。クラシカルでアナクロなフレージングが蜒々奏される様はアンバランスな録音も作用して「オペラの怪人」めいた偏執狂患者の作品というイメージであるが、それに反しトータルな印象はアフリカ音楽のように響く。



NOVA
Atlantis
Fin: Love LRLP-169

このノバと名乗るグループは、あの有名なイタリアの同名グループとはまるで関係のない紛れもないフィンランドのグループ。フィンランドのグループというとどうしてもジャズ色が強く頭に浮かぶのだが、このノバは珍しくシンフォニックな音作りで、華麗でクラシカルなピアノを中心としたキーボードの使い方は北欧というよりも、伝統的なヨーロッパ・ロックのそれに近いようだ。そしてこのキーボードを中心にして展開する華麗でシンフォニックかつプログレッシブなサウンドに守られるかのような、頼りなげでとぼけたようなボーカルが作り出す不思議な音空間が、何と言ってもこのグループの最大の特色であり、魅力でもある。ともかく彼等が遺したこの「アトランティス」はそのフィンランドらしくない音作り故に、かえってその魅力と印象を高めているようだ。

76年、愛しのレーベル"Love"からの素晴らしい贈り物。



WALLENSTEIN
Stories, Songs & Symphonies
G: Ohr-Cosmic KM 58-014

"ワーレンシュタイン"というのは、ドイツ30年戦争の時代にドイツ皇帝フェルディナント二世に仕えた将軍の名前である。また、ドイツ・ロマン主義において、シラーは「ワレンシュタイン」という作品で、ゲーテの「ファウスト」と共に先の古典主義を確立させた。ワレンシュタインが以上の様な事と、どの様な関係があるのかは、彼らのクラシカルなサウンドがすべてを物語ってくれるのである。

このアルバムは、前作の"コズミック・センチュリー"の様な迫力には欠けるが、それなりにロマン的雰囲気のする、いわゆるワーレンシュタインの小品集といった出来である。このアルバムを最後に、オリジナル・ワーレンシュタインは解散するが、クラシックとロックとの融合を見事に確立したグループとしてドイツ・ロック史にその名は永遠に残るであろう。それから、このアルバムのデザインはかのハラルド・グロスコフ氏である。



BRIAN DAVISON'S EVERY WHICH WAY
E: Charisma CAS-1021

ナイスのドラマーであったブライアン・ディビソンが結成したのがこのエブリ・ウィッチウェイで、70年に当時の新興レーベル"カリスマ"からこの作品を発表してすぐに解散してしまうが、それは彼らの音楽が全く聴衆に理解されなかった為であったという。ディビソンをフォローしているのは、グラハム・ベル、ジェフ・ピーチ、アラン・カートライト、ジョン・ヘドレイという顔ぶれである。地味ながらも手法と構想の一体化したサウンド、白昼夢のごとき雰囲気をたたえる叙情は稀有のものだ。曲はおおよそグラハム・ベルの作品。とりわけサックス、フルート奏者ジェフ・ピーチのプレイと地味ながらもパワーを内包したディビソンのドラミングが印象的である。

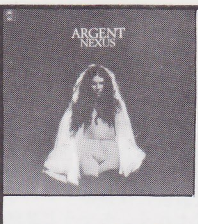


JON HASSELL

Earthquake Island

A: Tomato Tom-7019

ブライアン・イーノ、トーキング・ヘッズなどとの共演でロックのイディオムにも接近しているコンテンポラリー・ミュージックのコンポーザー、トランペッター、ジョン・ハッセルの78年の作「アースクウェイク・アイランド」はケージのピアノ作品等のリリースで著名なニューヨークのレーベル“トマト”の録音盤。ハッセルをバックアップするのはミロスラク・ヴィトゥスを始めとするフュージョン・ジャズ系のミュージシャンである。ハッセルはシュトックハウゼンに師事し、ライリー、ラ・モンテ・ヤングらとの活動のかたわら古代インド音楽を研究している。「アースクウェイク・アイランド」ではドラム・キットを排してコンガ、タブラなどの打楽器の浮遊するようなリズムの流れの上にハッセルの奏するトランペット、ポリ・ムーグ、ARPストリングスの甘美なメロディーがあふれるようにして、大地一女性原理のエロティックな想念を音像化する。



ARGENT

Nexus

E: Epic KE-32573

ベテランキーボードプレーヤー、ロッド・アージェントを中心にした「アージェント」が1974年に発表したアルバム。コンポーザーとしても有能であったギタリスト、ラス・バラードは、このアルバムを最後に脱退してしまう。(この後に発表された2枚組ライブでは演奏している)

さて、この「Nexus」は、メドレーで演奏される3曲のインストルメンタルナンバーで幕を開ける。「運命」をアレンジにまじえながら、ロッド・アージェントのキーボードがコホーテク彗星の到来を告げ、太陽の回りの無数の放浪者達を写し出す。そして、ラス・バラードの舞い上るギターが「愛」を歌い、宇宙からの音楽は、雷鳴と稲妻の中で、人々を創造主のもとへ導く。

トータルなイメージで構成された、このアルバムは、地味ながらも堅実に歩んで来たアージェントのひとつのピークであったと言えるだろう。



THE ONLY ONES

The Only Ones

E: CBS-82830

イギリスのポップバンドである。彼らのサウンドは聞いている者に霧に包まれたロンドンの大通りを思い起こさせるが、決して陰鬱ではない。微かにジャパンやロキシー・ミュージックを匂わすが彼らの持つ雰囲気よりは遙かに明るく軽い。むしろブロンディと同形列上にあるようにも思える。かつてデヴィッド・シルビアンが自分らの音楽をさして、パリの街角で聞いても東京で聞いてもその町に溶け込めるもの、と言っていたが、このアルバムについてもそれが言える。ただジャパンの場合は、その都市の亜流酸ガスで重く淀んだ空気に溶けていくのだが、彼らのはエンジンの音に混ざっていく。巨大な喧噪に引き擦り回され次第次第脱色されたピエロとなっていき、気が付くと自分は唯一人、闇のハイウェイに佇んでいる。それでもピエロはおどけてる、車の騒音に混ざって、それが彼らの音楽のようだ。

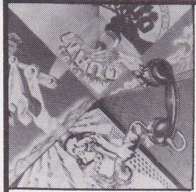


TRIADE

1998: La Storia Di Sabazio

I: Derby DBR-65801

もうだいぶ以前の事になるんだな、このトライアドがユーロ・ロック・マガジン0号で紹介されてから。当時、幻のアルバムとして騒がれていたのを知っている人も少なくなったことだろう………改めてここに、再登場!!「1998年/安息日の物語」と題されたこのアルバム、Side Aはタイトル曲の“La Storia Di Sabazio”組曲。キーボードを中心とした。ピッキオ・ダル・ポッゾなどに通じるアヴアンギャルド組曲だ。Side-Bに移ると、一転してファンタスティックに流れる様なストリングス・シンセとアコースティック・ギターが絡み合いヨーロッパの古町のたたずまいが目の前に広がり、続く2曲目、このLP中の名曲“Caro Fratello”に移る。ラッテ・ミエレに似たキーボードの展開と心地良く広がりオーバーラップされるオルガンの響き、最高の音楽のひとこまだ。気品あふれる線画のジャケットと幾許かの憂愁を秘めて、このアルバムは閉じられる。



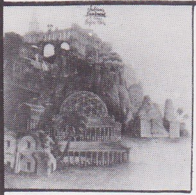
ANNEXUS QUAM

Osmose

G: Ohr OMM-56007

70年初頭のドイツ・アンダーグラウンド・シーンにおいて知る人ぞ知るというグループアネクサス・クァムの1stアルバムである。このグループは70年の万博の時に来日して、東京、富山、金沢などでコンサートをやったということで、当時ではかなり有名な存在であったらしく内容も凄まじいものだ。ギター、ベース、ドラムス、オルガンに加えてサックスやフルート、クラリネットなども使っていて、そのロックともフリージャズともわからない物狂おしい演奏は、当時のドイツ・アンダーグラウンド・シーンを反映しているかの様である。A面、B面共に曲目のついてないこのアルバムには、ASH RA TEMPELやGURU GURU XHOLなどとは違ったカオスの世界がある。

A-1に針を落とした瞬間からタイトルの示す通り、ドイツ・ロックへの“OSMOSE”(浸透)が始まるのだ。



JULIAN'S TREATMENT

A Time Before This

E: Decca DL-75224

スペシャル・ストックで初公開したジュリアン・ジェイ・サヴァリンの、それ以前に発表されていた幻のアルバムである。本作にも全くメンバーのクレジットが無く、ただ1つの手掛かりとして、メンバー5人(サヴァリンと女性ヴォーカリストを含む)の似顔絵が残されたのみである。本作もまた彼のSF小説を基にしたトータル・アルバムで、「前世界」とでもいったすでに滅び去った文明をテーマに構成されている。メロトロンこそ使用していないものの、ハモンド・オルガンの泣きのトーンを中心としたキーボード・ワークと、切々と唄い上げる女性ヴォーカルを中心とするサウンドは、70年という製作年度がウソのような、見事にトータライズされたものである。また1つ、幻の名盤としてブリティッシュ・ロック・フアンを悩ます作品を紹介したのだが、これを聴いて10年の歴史の重さを本当に感じるのが僕だけでないということを確信している。



DEAR MR. TIME

Grandfather

E: Square SQA-101

1970年の作品。タイトルが「Grandfather」でバンドの名前がディアー・ミスター・タイム。詳しいことは全くわからない。EMIのマイナーレーベルSQUARE RECORDSというところの1番として発表されているのだが、実をいうとこんなレーベル他には全く聞いたことがない。編成は、ギター、ベース、ドラムス、キーボードそして、サックスとフルートが入る。たんたんとここまで書いてきたが、実はこのレコード、なかなかどうして素晴らしい出来なのである。完全なトータル、アルバムとして作られた、このレコードは、一人の男の誕生から死までを、戦争体験、そして恋、結婚、愛するものとの死別等を通して描いたものである。単純なテーマではあるが、最もドラマチックなものである人間の一生を、サックス、ギター、を中心にヘヴィーなアンサンブルで、また生ギター、フルート、メロトロンによって悲哀に満ちた荒涼たる風景を見事に描き出している。



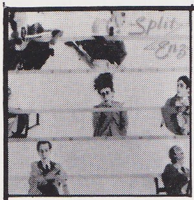
ANNA SJÄLV TREDJE

Tussilago Fanfara

Sw: Silence SRS-4646

スウェーデンのキーボード奏者、Anna Själv Tredjeについては、詳しいことは全くもって解らないのであるが、この人が制作したこのアルバムは、スウェーデンのエレクトロニック・ミュージック・シーンにおいて、大御所ラルフ・ランゼンやボー・ハンソンの種々のアルバムに比肩し得る素晴らしい出来となっている。

音の傾向はランゼンとハンソンの間のどこかに位置するとでも言ったら良いだろうか。ハンソン程暖かくはないが、かといってランゼン程の凍りつくような冷たさでもない。北欧特有の冷たさと奇妙な暖かさとが混ざり合った不思議な魅力で満ちた音楽といえるだろう。ともかくこの不思議な音の波は、A面19分弱、B面23分弱、ジャケットをそのまま音で表現したような不気味な曲から始まってB面ラストまで一気に聴き込んでしまう。スウェーデンの至宝的レーベル、サイレンスが世に送り出した名盤。



SPLIT ENZ
Dizrythmia
E: Chrysalis CHR-1145

1977年、ロンドンで録音されたもので、エキゾチックで夢見心地になれるアルバムである。どこかウルトラヴォックスに似た感じがするのだが、彼ら程大袈裟には振舞っていない。かといって地味でもなく、ちょうど装飾過多の部屋から考え無しに飾り物を取り除いていき、残った物、といったところだろうか。メロディーは華麗で、曲の盛り上りもあるのだが何故か印象に残らない。というものこのアルバムは沈黙の置き方や効果音の出し方が特に秀れているからであり、そこが既成のバンドと一線を引くところである。とにかく聴いている時はあたかも夜霧の道を果てまで抜けては回転し、消滅するかのようになるのだが、曲が終ってしまうとハッと現実に引き戻され、今まで何を聴いていたのか忘れてしまう。ちょうど夢と同様の象徴的な作用をするアルバムである。またテクニックも秀れており、プログレッシブ・ポップという言葉があるかどうか知らないが、正にそれである。



DENNY GERRARD
Sinister Morning
E: Deram Nova DN-10

たとえば、キング・クリムゾンのような有名な（ありきたりな言いかただ。）アーティストになると、やたら長大な人脈図ができちゃって、関連するレコードを探し始めるともうたいへん。いもづる式に次から次。それはそれで楽しいと思うけど。誰にも言えることだと思うけど、必ずしも、有名アーティストだけがミーハる対象ではないのです。このデニー・ジェラルドという人は、何とあの、今世紀最高の超ド級ヘヴィー・プログレッシブ・ロック・バンド、〝地獄のハイ・タイド〟のデビュー・アルバムをプロデュースした人なのです。その上なんとこのアルバムには、全曲にわたって、ハイ・タイドのメンバーが全員クレジットされているではないですか！数少ない彼らの関連アルバムを血まなこになって探し求める僕としては、じっとしてはいられないのです。しかし、ここでのハイ・タイドのおとなしいことったら、まさしく借りてきた猫なのです。ほんとに信じられないけど。



TIME
Time
E: BUK BULP-2005

ここに紹介するタイムは、ゲイリーとトリスのマーゲッツ兄弟を中心とするハード・ロック・バンド。彼等２人が、グレッグ・レイクに見出され、スポンタニアス・コンバスションという一風かわったハード・ロック・バンドとして登場したのを御存知の方もいると思う。スポンタニアス～解散後、新たにギタリストを一人加え、よりギター・バンドの色合いを濃くしたのが、このタイムである。しかしながら、彼らの作り出すサウンドは、当時その主流をなしていた一連のハード・ロック・サウンドとはあきらかに異なるものである。ゲイリー・マーゲッツの超人的ギター・プレイは、様々な音色をいともかんたんに弾き出してしまうし、トリスとジョードのリズム・セクションは、めまぐるしいリズム・チェンジをこれまたたやすく弾き出す。中でも８分にわたる大作〝Dragonfly〟では、ヘヴィーなベース・ラインに硬質のギターがからみそのまっただ中をゲイリーのギターが舞う。



KARL BERGER
We Are You
G: Calig CAL-30607

カール・ベルガー（ヴァイブ、ピアノ、マリンバ）、アレン・ブレアマン（ドラムス、パーカッション）、ピーター・コワルド（ベース）、イングリッド・ベルガー（ヴォーカル、パーカッション）による「ウィー・アー・ユー」は未曽有の音世界に立っている。これほどまでに音が錬磨され沸騰した結晶化を示すのは音楽の稀にみる瞬間である。「耳はいまだ未完成の状態にある」ことを我々は痛感せねばならぬ。ドラマーのブレアマンはアルバート・アイラーのラスト・レコーディングの際のメンバーであった。この作品にスピリチュアルなエモーションがあるのもアイラーの死が録音の基因になったという理由によるのであろうか。1971年作。



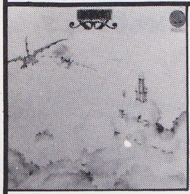
CRACK
Si Todo Hiciera
S: Chapa HS-37021

御世辞にもすばらしいジャケットとは言い難いものの、何故かあまり目立たない存在ではあったが、スペインでは中々出来のいいレコードを出し続けているCHAPAレーベルより79年にデビューした、このCRACKこそが、既成のスパニッシュロックに対する不満を一気に吹き飛ばしてくれる程、中途半端な所など微塵もなくビシッと決まった、とても新鮮なグループだ。この１stアルバムは、ギター、ベース、ドラム、キーボードに加えてこのグループの特徴と言えるフルートと時折女性ヴォーカルも入って、緊張感あふれるスリリングな展開や叙情的な描写をドラマチックに一層、盛り上げている。非常に精練されて完成されているサウンドは、70年代の最後を飾るに相応しいスパニッシュロックの集大成とも言える代表アルバムだ。いくらここで僕が、書いても音は伝わりようがない。スパニッシュロックファンであるならば、ぜひ自分の耳で確かめてほしい１枚である。



BLONDE ON BLONDE
Rebirth
E: Ember NR-5049

ブロンド・オン・ブロンドは69年から70年初頭にかけて、英国を中心に活動を続けたアメリカのバンド。この「Rebirth」は英国に渡って発表された彼らの2ndアルバム。ファーストでは、アメリカのバンド特有のサイケデリックなヘヴィー・ロックを聞かせていたのだけれど（このアルバムは昔、日本でも発表された。）このセカンドでは、そのタイトルも示しているように、新たなる意気込みをもって、スペイシーなプログレッシブ、サウンドを生み出している。サウンドの中心となるのは、攻撃的なギターなのだけれど、そのプレイをひときわ輝かしているのが、バックの音空間を作り出す、すさまじいばかりのオルガンと、そしてこれが最も重要なキイポイントとなっている、金属質のメロトロンなのである。



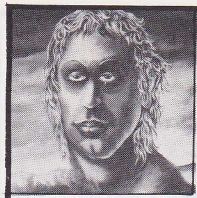
CLEAR BLUE SKY
Clear Blue Sky
E: Vertigo 6360-013

70年代初頭のブリティッシュ・ロックに、ある種のいいようのない魅力を感じる、我々ブリティッシュ・ロック・マニアが、その核について語る時、そこには、ポピュラリティーであるとかテクニックであるとかいうものは全く存在しない。当時、一つの地平にたった数々のミュージシャンたちは、よりメジャーなるものを作り出すために、うちに秘められた情熱を、何はばかることなく注ぎ込んで、〝栄光のブリティッシュ・ロック〟の基盤を作り上げていったのである。パトリック・キャンベル・ライオンズに育てられたヘヴィー・ロック・トリオ、クリアー・ブルー・スカイも、そんな情勢のもとに登場し、結局一線にはたどりつけなかったアーティストなのである。R.ディーンの美しいジャケットに包まれた彼らのサウンドは、ヘヴィー・ロックといえば、それでおさまってしまうのだけど、でも、でも何かあるんだよな。うまく言えないけど。ヴァーティゴの名盤!!



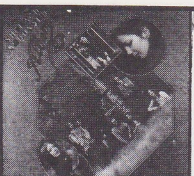
MICK FARREN
Vampires Stole My Lunch Money
E: LOGO 1010

フラワー・パンク、モーター・サイクル・ハード・ロッカーのスポークスマン的存在であるミック・ファレンはＭＣ５、ピンクフェアリーズ、モーターヘッドら一連の流れとパラレルに活動を行なってきたアーティストである。ヘヴィ・メタル盛んな今、この辺りのドラッグとヘルス・エンジェルス的環境に蝕まれてきたフリークス達の評価は必要とされるはずだ。この作品は1978年のものでファレンのバックにはラリー・ウォリス、ウイルコ・ジョンソン、サニア・クリスチナ他。Ａ－①ではザッパの「トラブル・カミング・エブリディ」を演っている。ソリッドでスピードのあるバックとファレンの声に肉化した存在の激しさは至純である。



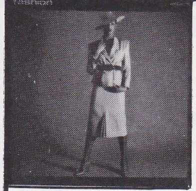
SEMIRAMIS
Dedicato a Frazz
I: Trident TRN-1004

バビロン及びその空中庭園を造ったアッシリアの女王、セミラミス。まさにこのアルバムも彼女の造り上げた音楽の空中庭園そのものだ。A面1曲目、気味あふれるvibのユニゾンと女性コーラスから始まるあたりはチェルベロをほう沸させる。そして1曲目をイントロにして爆発し滑り出されるギター、キーボード群、ドラムス、ベース、フルートの波の渦、ラッテ・エ・ミエレやチェルベロ、バンコなどすべてを越えている。気味の悪いジャケットにつつまれた空中庭園に君臨する素晴らしき女王セミラミス。構成力や各人のテクニックに渡りすべて申し分のないスーパーグループだ。メンバー、プロデューサー、だれもわからないトリデント・レーベルの最後までなぞに包まれた幻のアルバム。同じトリデントのビリット・パー・ル・インフェルノと並ぶイタリア屈指の名盤だ。



SHELAGH McDONALD
Album
E: B&C CAS-1019

70年、71年と優れたアルバムを発表し、忽然と姿を消してしまった幻の女性ブリティッシュ・フォーク・シンガー、シェラ・マクドナルドの1stアルバムである。このアルバムにはキース・ティペットが参加しており、その為熱狂的クリムゾン・ファンに知られているという変わったフォーク・アルバムでもある。フォークと言っても、2ndと比べるとそれほどアコースティックでも無く、ロック色の濃いアルバムと言っても良いだろう。他のバック陣にはアンディ・ロバーツ、パット・ドナルドソン、ゲリー・コンウェイといった本誌読者には馴染みの薄い有名人が居る。彼女の一番の魅力は、無機的でクールな唱法と美しいハイ・トーン・ヴォィスが絶妙にマッチしているところであり、それが顕著に感じられるのはむしろ伴奏がシンプルな2ndの方と言えるだろう。フールズ・メイトの読者の方にも存在を知っていて頂く意味で紹介した1枚である。



FÀSHIÖN MUSIC
Pröduct Perfect
E: FML-1

ファッション・ミュージックという名の示す通り内容のない音楽であるが、完成度は一応の線までいっている。パーカッション、ハープをディク（としか書かれていない)、ギター、効果音をルーク、ベース、シンセをムルガンというメンバー構成だが、彼らは自らプロデュースまで手がけている。音はレゲエっぽく、耳障りのない快いリズムと透明で無味乾燥な音色で全曲通されている。その名のごとくファッションショーのようなアルバムで一曲一曲器用に、電子音の微妙なところまで生かして練り上げられている。ファッションは作り手と受け手の断崖を埋める重要な掛橋であると共にそれは人間の足に踏み潰され結局は橋以外の何物でもない。どうやら彼らはそれを十分に意識してロックの新しい方向性を摑み取ろうとしているようだ。彼らはアルバムの中で華麗に演奏しているのだがファッションというレンズを通して聞いてみるとあがきのようにも聞こえるのである。



MCCHURCH SOUNDROOM
Delusion
G: Pilz 20 21103-7

“DELUSION”と題されたこのレコード、頭骸骨をジャケットに描いたレコードは他にもあるが、これはその中でも極めつけのレコードである。71年の作でメンバーについての詳しい事は一切クレジットされておらず、ただCHIESA、ALTHAUS、JOKOB、JUD、MCCHURCHとメンバーの名が記されているだけ。プロデュースはJ・Schmeisserという人で、このグループ以外にもピルツ系のグループを専門としている人である。

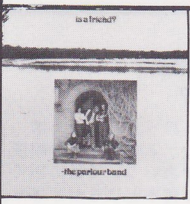
全体的に流れるオルガンの音は、中世のドイツを思わせる暗さがあり、それに加えてフルートの神秘的な響きは何物かに対して訴える様なボーカルと共に非常に効果的である。もはや、すべてが失われてしまった現実に対して、髑髏は叫ぶ“DELUSION、COME BACK TO ME!



NEURONIUM
Vuelo Quimico
S: Harvest 10C 064-021 523

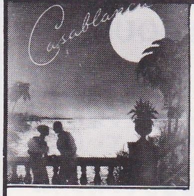
77年に「Quasar 2C36!」というアルバムで世に姿を現わしたエレクトロニクス・グループ、Neuroniumが創出したこのアルバムはとにかく物凄い。アルバム全体を支配する多種多様のキーボード群は前作以上に厚みを増し、その壮厳さと華麗さは他に類を見ない程だ。構成はA・B面あわせて3曲で、A面全てを使った“Abismos de terciopelo”は、静かにうねる官能的なE・ギターとキーボード群の音の波、それを断ち切って爪弾かれる生ギターと清らかなボーカルとの対比が素晴らしい。そして更に感動的なのがB面に収められたタイトル曲。憂いを帯びた女性ヴォイスが現われ、それを取り巻くシンフォニックなキーボード群が更に哀しみの彩りを添えて、信じられない程ドラマチックで、限りない哀しみに満ちたエンディングに向かってゆく。

78年、スペインの生んだ比類なき名盤。



THE PARLOUR BAND
Is a Friend?
E: Deram SDL-10

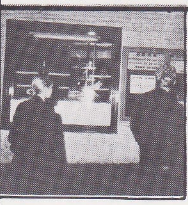
そこはかとなく漂う物悲しさと憂いが、アコースティック・ギターの繊細なきらめきと、美しいコーラス・ラインによって演出されるパーラー・バンドの唯一のアルバム。Band Call “O” と言えば御存知の方もいると思いますが、グループ名を変えてからは、そのサウンドがどんどんアメリカナイズされていってしまいます。まったく残念なことではありますが、それがかえって、このアルバムに重みを持たせていると言うこともできると思います。ここに聞かれる、美しいメロディーラインは、英国ならではの深みのあるものであるし、始めに述べた繊細さと、対照的なヘヴィーなエレクトリック・ギターのリフもアメリカには決して生まれ得ないものです。ここにお見せできないのが残念でならないのですが、湖水に遊ぶ数羽の水鳥を映した中ジャケの美しさは、それだけで彼らの演奏を物語る素晴らしいものなのです。一度は聞いてほしい名盤に違いありません!!とにかく一聴を。



CASABLANCA
Casablanca
E: Rocket PIGL-7

僕は変形ジャケットが大の好物で、ちょっと細工がしてあるだけでも大喜びしてしまう。このジャケットは、中袋をひっぱり出すと月の所を飛行機が通過するという代物で、こんなチャチな仕掛けにいつもウキウキするというのは、まだ子供なのだろうか？

さて、カサブランカというとあの映画を思い出してしまうが、このグループは元トウリーズのバイアス・ボッシェル、デヴィッド・コスタ、そして2人の女性ヴォーカリスト（元エア・フォースのアリキ・アッシュマンと黒人のセッション・ウーマン、ジュアニタ・フランクリン）によるブリティッシュ・ポップ・グループである。単にポップという音でなく、やはりブリティッシュ固有のセンスとユニークなオリジナリティを備えた独特のサウンドと言えるだろう。アルバムはこれ1枚のみで、73年の発表。玄人好みのイキなアルバムという感じがする。



CHRISMA
Chinese Restaurant
I: Polydor 2448-060

ロックの通俗美学はミック・ジャガーやマーク・ボランあたりが肉体をもってさらけ出してきたものであるが、ともすれば肉体をもたぬ描象として作用する。薄められた退廃と人工着色的気分、ぺらぺらのエロスとファッショナブルな夜。この程度なら上流階級の奥方たちにも喜ばれる。

クリスマのチャイニーズ・レストランは1977年イタリアのミラノで製作されている。彼らは50年代のロックン・ローラー達やストーンズ、ロキシー、ノイ、イギー・ポップなどに影響を受けているという。今でいうベガーズ・バンケットあたりの音に近い。A－①やB－③のノスタルジックなナンバーが良い。



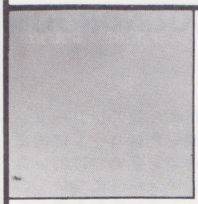
TREES
On the Shore
E: CBS 64168

当時のメロディ・メイカー誌の案内欄に、「ビューティフルな歌手がいるビューティフルなグループによるエレクトリシティとフォーク・ソングの融合」という表現で紹介されたトゥリーズの2ndアルバム（70年発表）。そのビューティフルな歌手というのは紅一点のセリア・ハンフリーで、2枚の写真で見るかぎり、エキゾチックな顔立ちをしたロング・ヘアーの美女である。メンバーの2人が後にカサブランカを結成（カサブランカの欄を参照されたし）して、セリアはプロデューサー某氏と結婚したとか……。トラディショナル・ナンバーを取り上げるのはこの頃の一種のブームで、その中でもこのトゥリーズは見事にオリジナリティを加味した一流のグループと言える。全体に流れる荘厳な響きは、ブリティッシュ・トラッドの伝統をズシリと感じさせてくれる。それにしてもこのジャケット（もちろんヒプノシス）を本誌13号の表紙に使ったニクイ人は誰？



SAKRE
Bizitako Gauzak
S: Elkar EIK-37

このコーナーで書いているITOIZと同じくスペインの片田舎、カンタブリア地方の言葉で歌われている超マイナーバンドサクレのアルバムはとっても不思議なアルバムだ。アラビア的民族楽器の笛がイントロとして用いられここまではガルベルトみたいな音楽が始まるのかなと思いきや、突然軽快なリズムに乗せてノリノリのロックンロールが飛び出したかと思うと続く2曲目では泣きのギターと爪弾かれる美しいピアノがからみ合いフランスのパンタクルやイトイズの様な素敵なプログレをやっていたりという具合で一種の雑居ビル的アルバムだ。が、しかしやはりこのアルバムの中心はあくまで2曲目のような素晴らしいプログレシヴ・ロックのようであり、そこでみせる多彩に変化するキーボードや、泣きのギターは本当に素晴らしい。このコーナーで紹介するのにふさわしい得体の知れない謎のアルバムだろう。



BRUCE DITMAS
Yellow
A: Wizard 222

コンテンポラリー・ミュージックのアーティスト、およびジャズ・ドラマーであるブルース・ディトマスのニューヨーク“ウィザード”レコードからリリースされている作品、「イエロー」は1976年ダウンタウン・スタジオでの録音。ディトマスはここでドラムスの他にミニ・ムーグ、ARP2600シンセサイザー、ムーグ・ドラムス、エレクトリック・コンガ、パーカッションを演奏している。全6曲中、彼のソロ、オーバー・ダビング作品よりも、イタリアのトラムペッター、エンリコ・ラヴァと、しばしばディトマスと共に活動するケージ派の女性歌手ジョアン・ラ・バーバラという2人の共演者をまじえた作品の方がより斬新な工夫がみられる。A－①はフリー・ジャズ・ドラミングとエレクトロニクス、ヴォイス、ペットのソロによる組合せ。B－②ではヴォイスとエコープレックス使用のエレクトリック・コンガの組合せが聞かれる。



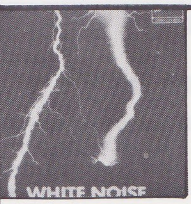
THIJS VAN LEER
Introspection 3
D: CBS 86034

タイス・ファン・レア。この名は私の心から離れる事は無い。フォーカスとしての一連のアルバムにおいては、グループのコンセプトによりフルートを用いてはいたが、彼のクラシカルな真の感性は、日本でもＳＯＮＹよりジャケ違いで（英ではオリジナルな形で）発売されたので聞いた人も数多いと思うが、72年のソロアルバムIntrospectionで発揮される。それを聞いた時、可憐な音の映像が眼前のスクリーンに、そう、まさに「ロマンの映像」として映し出された瞬間を今でも忘れる事が出来ない。同2（'75）も良い作品であったが、米録音「O MY LOVE」（'75）、クラシック・アルバム「Musica per la Nottedi Natale」（'76）では少々物足りなさを感じたが、77年のこのアルバムIntrospection 3は同シリーズでも最高の一枚だ。Letty de Jongのスキャットボーカルは相変わらず煌いている。特にA面は涙が溢れ出るような、詩情豊かな素晴らしい旋律で奏でられている。



J.E.T.
Fede Speranza Carità
I: Durium MS-A-77307

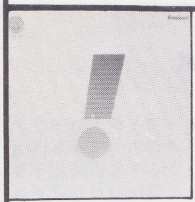
1972年、イタリアン・ロック・シーンは、最も充実した時を迎えた。この年、その絶頂期を物語る数々の名盤があいついで世に出ていることは、誰もが知り得るところだと思う。ここに紹介する“J·E·T.”のアルバムもまた、72年に発表された、美しさと力強さに満ちたまごうことなき名盤の一枚である。彼らについて、詳しいことはわからないのだが、この作品以前にも数枚のアルバムを発表しているらしい。このアルバムは、“宗教”をテーマに5つのパートから成るトータルアルバムに仕上げられている。ヘヴィーなギターをサウンドの要とし、深みのあるキーボード群と、哀愁の極みとも言える美しいメロディーラインが、イタリアンロックならではのロマンティシズムを描きあげる。どこまでも、どこまでも感動的なJ.E.T.の世界。とめどなくあふれ出る情熱に身も心もとろけさせているのは果して私一人なのだろうか。



WHITE NOISE
An Electric Storm
E: Island ILPS-9099

笑いも涙もおののきも、あらゆる感性を断片化し、秒刻みに詰めこんだテレビジョン空間。殺虫剤の有毒ガスのようにきらびやかな音声と、チカチカ点滅する走査線にひっきりなしにさらされている私たちの感性もまた、コマ送り的に寸断されているのではあるまいか、などとホワイト・ノイズを聴いて思ってみる。あるいはまた、B面の〝地獄の黙示録〟サントラをホーフツとさせる、劇的構成に乗って、女々しく泣いてみてもいいような。

アイランド・レーベルといえば、すぐにジミークリフを条件反射するトロピカルボケにとっては、深夜のテレビジョンのホワイト・ノイズのごとく、巷を覆う霧のごとく、大英帝国の知の行方はかくも寒々としているのだと、ひとり合点するにうってつけの、老成した音作り。



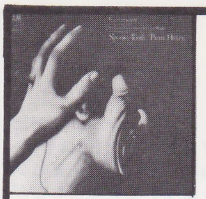
GRACIOUS
Gracious
E: Vertigo 6360-002

このアルバムはズバリ言ってプログレッシブ・ロックファンなら一度は聴いてみたいアルバムだと思う。それはジェイミーカレスの弾く美しいメロトロンの響きが十分に味わえるからだ。曲の方もベートーベンの名曲「月光」などをアレンジしてやっているし、「フーガ」などもやっていてクラシカル・ロックファンにとって本当にほしいアルバムだろう。ジェイシーカレスが初めて手にした楽器がメロトロンだったという事実から彼がマニアの隅でメロトロンの使用法において評判がいいというのもうなずける。「月光」や「フーガ」のほかに「21世紀の精神病者」ににたファズボーカルの使用が目立っているし、曲の構成などもなかなかいい。だからぼくはグレイシャスの2枚のＬＰの中ではこちらの方が好きである。ジェイミーカレスはきっと自分の弾くメロトロンの音につつまれてこのアルバムを録音したにちがいないと、ぼくは思うのです。クラシカル・ロックは不滅です!!



CHRISTMIAN BOULÉ
Photo Musik
F: Polydor 2473-086

クリアライトのアルバムに名を連ねて、その音楽性に攻撃的な作用を加えていたクリスチャン・ブーレのソロ作。ここにはクリアライトの音楽的主導権を掌握していたシリル・ヴェルトも参加しており、その他にも多数の著名なミュージシャンが集まり和気あいあいとしたムードで音が作り上げられているのが印象的。ここに聞かれる乾ききった空間は、ちょうどスティーヴ・ヒレッヂのアルバムなどと同じベクトルを感じさせる。さらにゴング神話を受け継いだような優しさが溢れた彼自身のユーモアは特異なコズミック空間を描き出す事に成功していると言えよう。とにかく初期のヴァージン・レーベルが好きでたまらない人には最適である。レコーディングは78年の初頭にパリで行なわれており、B面のラストの曲などには、故ジミ・ヘンドリックスの名がクレジットされるなど、クリスチャン・ブーレの音楽的ルーツを探るにも格好な素材と言えよう。



SPOOKY TOOTH

Ceremony /PIERRE HENRY

E: Island ILPS-9107

スプーキー・トゥースほど70年前後の思慮深き英国ロックバンドの実験精神とその末路を典型的に示す例はないであろう。高度な音楽性を内包しながらも、例えばトラフィックなどの場合とは対照的に変転せる軌跡を歴史にとどめたまま消失し忘れ去られた。「セレモニー」は日本でも「現代音楽の領域」なるタイトルで70年に発表されたものだ。フランスのミュージック・コンクレートの作曲家ピエール・アンリーとの共作で、アンリーのエレクトロニクス音響とスプーキー・トゥースのラフなリード／パッショナティヴなサウンドが合体というよりは並置された作品。ミサの形式を借りた構成はアンリーの作品にしばしばあるが、ロック・サウンドを用いたどのアンリーの仕事よりもこのスプーキー・トゥースとの共演は説得力のあるものだ。



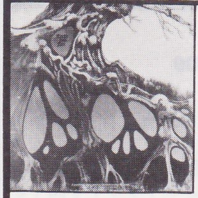
FLÄSKET BRINNER

Fläsket Brinner

Sw: Silence SRS-4606

スウェーデンのグループ、フラスケット・ブリンナーのアルバム。レコード番号によると、あのサムラ・ママス・マンナとケブネカイゼの記念すべき1stの次に出されたもので、それから察するところ71年頃に制作されたものだろう。音はトラディショナルな感覚に裏打ちされたジャズ・ロックとでも言えるだろうか。ライブ録音のためか少々音が悪いのが残念だが、オルガン、ギターを中心にして展開してゆくサウンドは、地味ではあるがかなりの熱気と迫力を帯びて進行してゆき、一気に聴き通してしまう程。

ところでこのアルバムには、忘れてはならないことがある。なんとB面3曲目であのボー・ハンソンが参加しているのだ。このグループとハンソンはかなり交流があるらしく、名作「指輪物語」以来彼のアルバムには、同グループよりフルートのSten Bergmanとサックスの Gunnar Bergsten が頻繁に参加している。

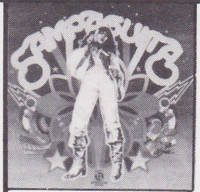


EARTH & FIRE

Earth & Fire

E: Nepentha 6437-004

去年2年ぶりの新作を発表し、根強いファンを感涙に包んだアース・アンド・ファイアーの、71年に発表された1stアルバムである。当時はショッキング・ブルーに代表されるオランダのポップスが、全世界を真っ赤に燃え上がって総ナメした時期であり、このアース・アンド・ファイアーの"シーズン"も御多聞に漏れずその1曲である。このアルバムの内容は、もちろん"シーズン"を含む大ポップス大会なのだが、そんな彼等があの「To The World of The Future」のような一大プログレ傑作を創るとは、一体誰が想像しただろう？あえてそのポップス・アルバムを紹介することにしたのは、英国盤のジャケットがあのロジャー・ディーン大先生の手によるもので、しかも穴あき変形隠し味ジャケットだからなのである。実物を見たい人は観覧料を払って下さい。冗談はさておき、ファンにとっては涙が出るほど懐しい記念碑的アルバムと言えるだろう。



SAMPAGUYTA

Sampaguyta

Fil: Black Gold BA-5017

今や、ロックは全世界に滲透しつくしたようだ。共産圏にもアジアにも。おそらくアフリカにも生まれつつあるだろう。このアルバムはフィリピンの女性ボーカリストのレコード。イタリアロック等から強し日本のニュー・ミュージックの共通性を、サンパギタのロックからも同様にそれはかぞえられる。

歴史的にみてもフィリピン文化にアメリカ色がでてくるのが当然と思われるが、演っているのは、バラード、R＆R、ハードロックでユーロファンを満足させる要素は少いが、フィリピン語の語感は奇妙に欧州北から東ヨーロッパ的なものと感じられる。ギター、ベース、キーボード、ドラム、コーラスに二人の女性マオとエミーを加えてストレートな音作りをしているのでサンパギタの声の良さと合い好感のもてるアジアの名盤となった。



COVEN

Blood On the Snow

A: Buddah BDS-5614

そのものズバリ "Witchcraft" と題されたアルバムで、恐るべきデビューを飾ったアメリカの黒魔術バンド"COVEN"。このアルバムには、何と13分にわたる、黒ミサの実況録音が収められていたのです。ジャケットを開くと、そこには、祭壇の上に全裸で横たわる紅一点Jinx Dawsonの姿体と、それを取り囲む、13人の使徒（coven）が……。いやがうえにも、そのムードをもりあげていました。ここに紹介するのは、COVENの3rdアルバム "Blood on the Snow"。ここでは、デビュー当時から持っていた、英国のバンドにも通ずる一種独特の暗さに加え、何ともあかぬけないポップ感覚を身につけ、そのあかぬけないところが、かえってマニアを唸らせる結果となっているようです。中でも、Jinxの、思い入れたっぷりのヴォーカルをきらびやかなメロトロンと、ヘヴィーなドラミングでもり上げて行く、"Blue, Blue Ships"は、涙なくしては聞けない名曲なのです。



BONFIRE

Bonfire

D: EMI 5C 062-25163

彼らの演奏は、A－1"デリリウム"（錯乱）の出だしにあるように、クラシック畑の経験豊かな才能を有するピアニストによってリードされている事が分かる。そんな訳で、全てインストゥルメントな事もあいまって当時（'75）英国で活動が始まろうとしていたR.Jゴドフリー率いるエニードと非常に似た点がある。ただ相違点といえば、おそらくJAZZ界から流れてきたドラマーと、ロック・ギターそしてクラシック・ピアノの混然としたサウンドと、前進的に世界を捕えようとしている意欲（東洋をテーマにした曲もやっているのだ。）そして、オランダという欧州の地理的中心地という、北欧ジャズ・ロック、南欧ラテン系ロック、ジャーマン、ブリティッシ・ロックの接点で、それらのエッセンスを巧みに体内に取り入れる事も手伝い、これこそ、数多いダッチ・ロックの中で、重さを感じさせてくれる、唯一無二のアルバムと成ったのだ。

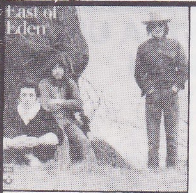


QUELLA VECCHIA LOCANDA

Quella Vecchia Locanda

I: Help 2SLH-55091

先の「幻の名盤100選」の中で坂地君が書いていたQuella Vecchia Locanda。ここに紹介するのは彼らの1stアルバムだ。ヌメロ・ウノ・レーベルの傘下のマイナーレーベル・ヘルプからの彼らのデビューアルバムは、2ndと比べると、2ndがかなりクラシカルだったのに対してとても攻撃的でヘビーな音作りだ。"古ぼけた田舎の宿屋"というグループ名やジャケットの夜中に荒れ果てた町を出る旅人の絵と比べても攻撃的でヘビーだ。全体的な音の感じとしてはデリリウムに一番近いと思われるが、A面出だしのヴァイオリン、ピアノ、フルート、ドラム、ベースがたたみかけて次々と飛び出す所は圧巻!!イタリアン・ロックの素晴らしさを物語ってくれる。今まで誰にも知られることなく、最近になってたて続けに発掘されたクウァラ・ベッキア・ロカンダ。こんなに恐しいアルバムがまだまだイタリアには埋れているんだろう。

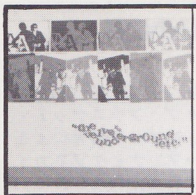


EAST OF EDEN

East of Eden

E: Harvest SHVL-792

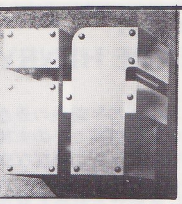
中近東ジャズとサイケ調ロックの奇妙な混合物といえる"マーカーター・プロジェクテド"でデビューし、メンバー変動の末、オリジナル、メンバーのヴァイオリニスト／サックス、フルート奏者、デイヴ・アーバスを残して心機一転ハーベストに移籍、再度デビューしたイースト・オヴ・エデンのアルバムがこの作品である。最初A－①などはよくデレク＆ドミノスに比較されたものだが、イースト・オヴ・エデンの作風はA－③やB－②～④のようなナンバーに顕著である。5、6、7といった変拍子、オリエンタル・ムードと倦怠感ある感傷性、英国特有のブルージーで陰性のサウンドが特徴である。1曲ヒット・チャートに送り出したが、アーバスはフーのセッションに参加したり、その後バンドとして1枚アルバムを発表し消えてしまった。



THE VELVET UNDERGROUND etc.

A: Plastic Inevitable First-1

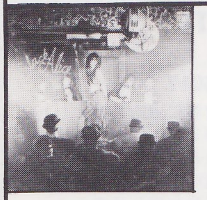
ジャケットもしっかり作られていて、録音もかなり良いが一種の海賊盤だろう。サイクルアンー、フェリーボートビル、ゼムばりの曲、ザ・オスリヒ、スヌーキーピート等９曲とも未発表曲。ヴェルヴェットのかなり初期のものと思われる。裏に公演ポスターがうつっていて、？年４月21日土曜日、ヴェルヴェット＆ニコ。入場料、平日＄2100、金土、50。出演、ウォーホールおかかえのイングリット・スーパースター。映画（僕の解説には必ずでてくる）ヴィニール、スリープ、イット、キス、エンパイア、バナナ etc etc。 食物、名声。場所、アーカス23丁目、2nd､3rd アヴェニューの間。ウォーホールの工場は47丁目あたりだからファクトリーではないようだ。Ａ面ラストにはイングリットスーパースターのインタビューが？おさめられている。曲中アイムステッキングウィズユーはアフターアワースの調子でモーリン・タッカーがヘタなすばらしい声でソロをとる。Good！



IF
If

E: Island ILPS-9129

60年代後半は数多くの興味深いバンドが出現したことにより、プログレッシブ・ロック・フアンには忘れられぬ時代となった。またジャズ・ロックのフアンについても同じことが言える。そしてここに紹介するアルバムは、両方のフアンにとって必聴盤であるIF の1ST だ。IF は69年にデビューし、数々のメンバー・チェンジを行ない70年中期に解散してしまったが、このアルバムはそんな彼らの作品の中でピカーのものである。内容は全体的にホーンを伴なったジャズ・ロックであるが、同種の他のグループとは少々異なったサウンドを持っていた。今、聴くとやはりなつかしさを感じないわけにはいかないが、ジャズとロックの中間音楽をプレイした彼らの残した Ist はブリティッシュ・ジャズ・ロック・シーンの中で、ひときわ異彩を放つアルバムであると確信せざるをえない。ジャズ・ロックフアンへの彼らの忘れられたメッセージを聴いてほしい。



SLACK ALICE
Slack Alice

E: Philips 6308-214

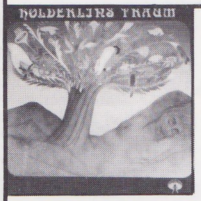
ダミ声のブス、アリス・スプリングを中心に、79年突如ニュー・ウェイヴ・シーンに踊り出たダーリンというグループがある。実は、そのアリスは74年にアルバムを発表したスラック・アリスというグループのヴォーカリストだったのだ。当時ロンドンに吹き荒れたパブロック・ムーヴメントにより一躍注目を集めたグループで、メンバーにはあのケストレルやストレッチで後に活躍するジョン・クックが居た。そのジョン・クックがメロトロンを使用しており、メロトロン入りのパブ・ロックというのも珍しい。パブ・ロックということでやはりステージ活動が盛んだったが、本作にはステージ向きではないスロー・ナンバーが２曲あり、ジョンのメロトロンが実に見事にドラマチックな雰囲気を出している。これ程の才能を持ちながら曲をあまり書かないジョン・クックだが、そこがユーティリティー・プレイヤーの悲しい宿命なのかもしれない……。



WARM DUST
Peace For Our Time

E: Trend 6480-001

ティモシー・リアリーが世に問うた著述“Politics of Ecstasy”をベースにウォームダストが作り上げた強烈なトータルアルバム「Peace for our Time」。ジャケットを開くと戦争を知らない我々ですら、思わず目をそむけたくなるような数枚のスナップ写真が目にとびこんでくる。アルバムは、人類の最もおろかしい行為としてとらえられた第二次世界大戦の爪跡を語るナレーションを曲間にはさんで展開していく。ジャズをベースに２本のホーンとポール・キャラックのキイボードを中心にくり広げられる、彼らのサウンドは、時に激しく、時に流麗にヘヴィーなコンセプトを完璧なまでに演出していく。メロトロンの導入により、前作以上のスケールを生み出したことも見逃せないだろう。彼らの意図したところを、どこまで自分が理解しているかは定かではないが、力強いサウンドと強烈なメッセージを持った高水準アルバムであることは確かである。



HÖLDERLIN
Hölderlins Traum

G: Pilz 20 21314-5

言うまでもなくドイツ・ロマン派の詩人ヘルダーリンからその名をとったこのグループのデビュー作である。「ヘルダーリンの夢」と題されたこのアルバムは、まさしく神秘的でディオニソス的な古代ギリシャを夢見た詩人ヘルダーリンの悲しき人生の体験を物語った作品である。このアルバムのみに参加している女性NANNY VON GRUMBKOWのボーカルは、ピアノ、バイオリン、チェロ、フルートと共に優雅でありながら物悲しい雰囲気を出していて、トラッドぽい全体的なサウンドにおいて効果的な要素となっている。

また、ゲストとしてBROSELMASCHINEのPETER BURSCHがシタールで、W&WのWESTRUPPがフルートで参加している。ドイツ・ロマン主義の影響を受けたアルバムとしてこれに優るアルバムは他には無いと思われる程の素晴らしい出来である。

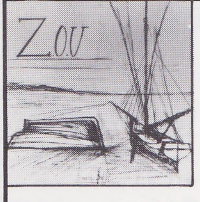
72年作。



ENGLAND
Garden Shed

E: Arista ARTY-153

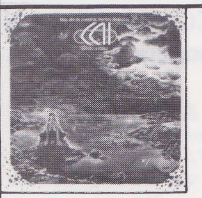
ENGLANDはその名に恥じないブリティッシュ・プログレッシブ・ロックだ。ぼくはこのアルバムを何度聴いたのだろう。ジェネシスやイエスに似たそのサウンドはぼくをとりこにしてしまい、一枚のＬＰを残して解散させるには本当に惜しいグループである。ROBERT WEBBのひくオルガン、メトロン、ピアノ、シンセは当時何を聴いてもつまらなくて意気消沈していたぼくをふるいたたせたものだ。Ａ面に針を落とすと、いつもＢ面の最後まで聴いてしまう、僕にとって珍らしいアルバムだ。録音が77年だから知っている人も多くいると思うのだがドウルイドのIstやキャメルスのスノーグース、そしてアンダラバンドのIstなどを好んで聴く人にとって名盤の印をちゅうちょなく押すことが出来るだろう。これはぼくが最後に出会った真の意味でのブリティッシュ・ロックのレコードの１枚であり、私の宝物のレコードでもある。本当にイイョ！



ZÖN ORCHESTRA UNLIMITED
Zön Orchestra Unlimited

F: Polydor 2393—103

Z.O.U.は、フランスで活動していたヴァライエティーに富んだグループで、女性ヴォーカリストのマリア・ポプキエヴィッチ（何国人でしょ？）と４人のエルヴ兄弟というユニークなメンバー構成である。ヴァライエティーに富んでいるというのは良い言い方で、はっきり言えば何がやりたいのかはこのアルバム１枚ではわからない、というムチャクチャな内容である。ハード・ブギーありジャズ・ロックありメロトロンどばーの叙情派プログレありと、とにかくひどい。ひどくてもマリアのヴォーカルがその曲１つ１つにピッタリとマッチしているので、僕個人としては非常に気に入っている。聴きものはＢ面の組曲と、Ａラストのシールズ・アンド・クロフツの曲「ハミング・バード」。ヨーロッパ諸国にはこういったえたいの知れないバンドがまだまだいくつも有りそうで、その辺は興味の尽きないところである。75年発表の支離滅裂愛聴盤。

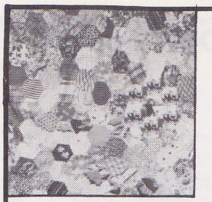


CAI
Más Allá De Nuestras Mentes Diminutas

S: Lacochu LC-001

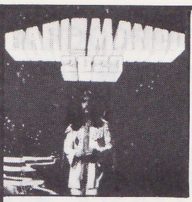
同じアルバムの原稿を一週間のうち２回も書いてしまった。(このフールズ、メイトとイタリアン・ロックFCの会誌）でも、それだけ紹介したかった僕の愛聴盤の一枚だ。

海の波打つ音と広がるキーボードで雄大にこのアルバムの幕は切って落され、カナリオスのシクロスと同様なふん囲気を持って進行され次々とキーボードとギターが絡み合い展開されるのはさながら万華鏡の如く華麗でスパニッシュ的憂愁に満ちている。カナリオスのシクロスと日本のスペース・サーカスをプラスした様なサウンドは2nd（CBSから最近発売された）でより一層、鮮明に華麗に展開されており、スーパーグループだと十分に感じさせてくれる。LPタイトルの表わす、“私達のもどかしい心のもっと遙か彼方に…”っていう言葉はこれからCAIが目指して行く素晴らしい世界があるところを言っているかのようだ。



IL PAESE DEI BALOCCHI
Il Paese Dei Balocchi
I: C.G.D. FGL 5115

イタリアのクラシカルなロック・グループにはPFMやマクソフォン、RDM等のように、バロック音楽、特に室内楽に影響を受けたようなグループが多いが、このIL Paese Dei Balocchiは、同じくクラシックからの影響を受けているとは言え、これらのグループとは多少傾向を異にしており全体的に印象派的な音作りが成されている。導入部における劇的なストリングスの使用とそれに続くアコースティックなギターのつまびき、そして淡々と歌い上げるボーカル、それらは進行するにつれて幾分、無機質なけだるさをも伴って聞く者をつつみこんでいく。しかし、そこにははるかイタリアの美しい山河、人々の日々のいとなみ、うらぶれた街角の風景が、続々と風景を垣間見るかのように演奏されていくのである。72年に発表されたこのアルバムは、華々しかった当時のイタリアン・ロック・シーンのもう一方の方法論を代表する名編である。



BARIS MANCO
2023
Tur: Yavuz YP PLÂK-1015

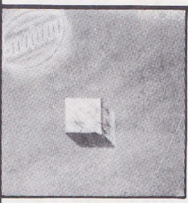
ここに突如として姿を現わしたのは、なんとトルコの大御所ロック・アーティスト、その名も正に知る人ぞ知るBaris Manco!?この人が世に送り出したアルバム「2023」は制作年度もバック・ミュージシャンについても全く解らないけれども、ただ一つ言えることは、トルコにもヨーロッパの透れたアーティスト達が遺してきた幾多の傑作にも負けず劣らずの素晴らしい音楽性を有する名盤があったということだけだ。

内容はヨーロッパが育んできたプログレッシブ・ロックの影響が多大だが、その中にも民族楽器が効果的に使用され、アルバム全体を不思議な彩りで包み込んでいる。キーボード、フルートなどの導入法も的を得ているし、効果音も実に上手く溶け込んでいる。そして何と言っても、Mancoの力強くも哀愁を帯びたボーカル及び語りが素晴らしい。文字どおり、未知の国の生んだ、ナゾのアーティストによる、正に幻の名盤。



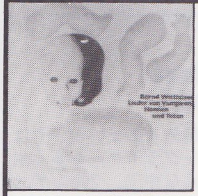
JOHN LEES
A Major Fancy
E: Harvest SHSM-2018

ジョン・リーズといえばバークレー・ジェームス・ハーベスト、バークレ・ジェームスハーベストと言えばジョン・リーズ。まあ妥当な言葉だと思う。しかしこのアルバムではバークレー・ジェームス・ハーベストというよりもやはりジョン・リーズ個人の音楽に対する考えを打ちだしたことに拍手を送りたい。B・J・Hのメンバーの混じったバックに乗り彼はあの名曲「CHILD OF UNIVERSE」を歌うところなど、ファンにとっては涙が出るだろう。しかしホーンセクションが入っていてB・J・Hのアルバムにおける曲とは趣を異にすることを書き加えておきたい。またこのアルバムはHARVESTのHERITAGEシリーズの一枚として再発されたもので、ファンにとって「CHILD OF UNIVERSE」が聴けることはなによりもうれしいのではないだろうか。



FUSIOON
Minorisa
S: Ariola 88863

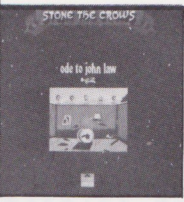
スペイン・ロックを語る時、必ずと言っていいほど幻のグループとして名前が出されるフシオン。ここに紹介するのは、僕自身何度となく感動を受けた2nd「Minorisa」だ。(実はフシオンは1stアルバムが出ているのだ)1stの方はあまりパットしない出来だったがこのアルバムは当時のスペインでは計り知れぬほどのスケールをもった凄いアルバムだった。A面1曲、B面2曲の3曲は、それぞれまったく異ったタイプの曲でA面は次々と目ま苦しく展開する恐しいアヴンギャルド&クラシカルロック。そしてB面1曲目は不気味なシンセのイントロで始まり誰しもが目を見はる圧倒的衝撃のピアノと教会の鐘の音が素晴らしい曲だ。これ一曲だけでも完全にイタリアを越えている。そして2曲目はアシュラテンプルなどのコンセプトを持つシンセサイザーだけの曲。こんなに凄いアルバムがもっと気軽に手に入るようになるといいのだけれども……。



BERND WITTHÜSER
Lieder Von Vampiren Nonnen Und Toten
G: Ohr OMM 556-002

BERND・WITTHÜSERとWALTE・WESTRUPPはもともとドイツのエッセン地方にある"Podium"というフォーク・クラブで修業をしたということで、当時はWITTHÜSERが支配人でWESTRUPPがディスク・ジョッキーをやっていたということである。そして、69年にグループを組みそのデビューとして70年に出したのがこのアルバムである。「修道院と墓地の吸血鬼歌曲集」と妙なタイトルがつけられているが、ハイネやノヴァリスの詩を歌ったものなど全体的に流れる雰囲気はまさにフォルクス・リートと言ったものである。そして、そのドラマチックな演劇形式は単純素朴でありながら非常に心を打つものがある。

この二人組W&Wは後にコズミック・シリーズにおいて、シニカルな雰囲気の中に非常にヒューマン的なものを感じさせる部分として欠くことのできない要素となるのである。



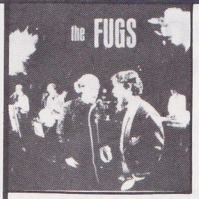
STONE THE CROWS
Ode to John Law
E: Polydor 2425-042

女ロッド・ステュワート、英国版ジャニス・ジョプリンと言われたマギー・ベルをフィーチュアしたブルージーなロック・グループ、ストーン・ザ・クロウズの2ndアルバムである。ギタリストのレスリー・ハーヴェイ(あのアレックス・ハーヴェイの実弟)が3rdアルバム発表後に感電死したことから、「悲劇のグループ」とかつて言われたのだが、4枚目のアルバムに正式メンバーとして参加したジミー・マカロック(ウィングスで有名)も今はこの世の人ではない。悲劇は繰り返したのだ。このアルバムでは、レスリーのギターやマギーの渋いヴォーカルもさることながら、オルガンと生ピアノが実に素晴しい。ブルージーに、時にはファンキーに繰り広げられるナンバーは、いずれもドッシリと腰の座った優れたものばかりで、本当にじっくりと噛みしめながら味わうことが出来る。尚、ドラムスは後にフォーカスの一員となるコリン・アレンが担当していた。(70年)



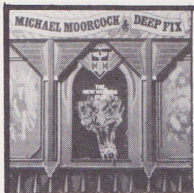
STEELEYE SPAN
Hark! The Village Wait
E: Victor SF-8113

ブリティッシュ・トラディショナル・ロックの重鎮、スティールアイ・スパンの記念すべき1stアルバムである。一般的には2nd、3rdの評価が極めて高いが、僕個人としてはこの1stの方が好きだ。こちらは明るく聴き易いが、他の2作は非常に暗く、そして重苦しい。本格的トラッド・ファンには重厚でシビアな作品の方が好まれるというのはうなずける。本作にはマディー・プライアーやティム・ハート等の他に、後にウッズ・バンド、ゲイ・アンド・テリー・ウッズを結成するウッズ夫妻が参加しており、ゲイ・ウッズとマディー・プライアーという僕のお気に入りの女性シンガーが2人一度に聴ける唯一のアルバムでもある。スティールアイは78年に解散したが、フェアポート・コンヴェンションとともに、ブリティッシュ・トラディショナル・ロックの歴史を築いたと言っても過言では無いだろう。本作は70年に発表された。



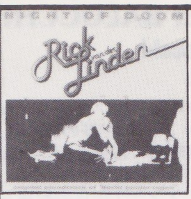
THE FUGS
The Fugs
A: ESP 1028

天然のヒッピー達の部族集会。アシッドとヒューマン・ビー・イン、反戦、アジテーション、エログロナンセンスのランダムな構成物。60年代ヴィレッジのワイルド・パーティーを体現するファッグスは、星条旗で飾られた巨大なペニスが登場するアングラ芝居「ファックナム」や「徴兵をのがれる1001の方法」、「働かずに生きる1001の方法」などの著者、トウリ・クッパーバーグと詩人エド・サンダースを中心にする。このアルバムではビート派ギンズバークがライナーを担当。マッド・マガジン調の歌詞のフォーク・ブルース・ナンバーあり。B—④の「ヴァージン・フォーレスト」なる組曲などはクレイジーな内容とブラック・ユーモア的な手法とが一体化した前衛的作品である。



MICHAEL MOORCOCK & THE DEEP FIX
New World's Fair
E: United Artists UAG-29732

SF作家、というよりもヒロイックファンタジーの大御所として広く知られるマイケルムアコックが、いかなる経緯をもってホークウインドに参加することとなったか、僕は知らないのだけれど、75年（ホークウインドの最高傑作"Warrior on the edge of time"が発表された年)彼は、Deep Fixというバンドをひきいてリーダーアルバムを発表した。Deep Fixとしてここに集まったのは、この年、ホークウインドに加入した、元ハイタイドのサイモンハウス、そして旧友ピートパブリ。アランパウエル、サイモンキング、デーブブロックのホークウインド勢、そして昨年、ピンクフロイドのツアーメンバーを経て、シンリジーに加入した、スノーイーホワイト（リード・ギター担当）等々、そうそうたる顔ぶれである。"New Worlds Fair" と題されたこのアルバム、音楽的には未熟なところも多々あるようだけど、ホークウインドファン、ムアコックマニアには、たまらない一枚である。



RICK VAN DER LINDEN
Night of Doom
E: CNR 655-072

オランダのキーボード・プレイヤー、リック・ファン・デル・リンデンの78年のこの秘蔵のアルバムは（最近独盤が出たらしい)、リックのファンならずも是非聞いて欲しい一枚だ。「GXI」の4ケ月後に録音されたこのアルバムは、何と言ってもオリジナルサウンドトラック「Nacht zon der Zegen」と言うのに魅かれる。Thijs van Leer, Ton Scherpenzeelの作品や、あのChattanooga Choo Choo、もちろんバッハやヘンデルの曲も相変わらず取り入れてあり、熟達したその巧緻な彼のプレイは一驚を喫する出来で、ジャケットこそGXI（CNR盤）の素晴らしさに比べるとお粗末だが、彼のアルバム中でも最高に充実した内容の傑作だ。Trinity後、5年ぶりに戻ったEkseption'78では、どうも冴えたプレイが見られないだけに、彼の崇高で張りのあるプレイを次のソロアルバムに期待するのは私だけではないだろう。



RUSTICHELLI & BORDINI
Opera Prima
I: RCA DPSL-10594

最近になってイタリアのいわゆる幻のアルバムが多く発掘されているが、このアルバムもその中の一枚。RCA系のミュージシャンのバック・キーボード（リカルド・コチャンテの名作「MU」など…）を多く手がけているパオロ・ルスティッチェリと同じくスタジオ・ドラマーのボルディニの2人によって1973年に制作された素晴らしいプログレシヴ・ロックだ。サウンド的にはEL&Pやラッテ・ミエレなどに近い音作りになっており、やはりアルバムの中心はパオロ・ハスティッチェリのあやつる多彩なキーボードワークであり、特にA面一曲目などでみせるラープ・オデッセイの重厚で広がりのある音は傑出!!（ただし彼のボーカルはもうカンツオーネでいただけないのだが…)「Opera Prima」なんていうタイトルはブッチャーのようなおじさんが赤ん坊を抱き上げているジャケからは想像もできないプログレシヴ、ロックの好アルバムだ。



SERGIUS GOLOWIN
Lord Krishna Von Goloka
G: Ohr-Cosmic KK 58-002

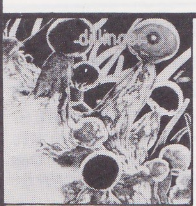
Ohr-COSMICシリーズのASH·RA·TEMPEL "SEVEN·UP"に続く強力な1枚。SERGIUS GOLOWINについて詳しい事はわからないが、ジャケット、タイトルからしていわゆるこのシリーズにおけるコズミック神とも呼べる様な人物ではないだろうか。このアルバムにおけるメンバーは、他にワーレンシュタインのユルゲン・ドラセにジェリー・ベーカース、それからクラウス・シュルツとW&Wの二人組と言ったいつもの顔合わせである。内容はと言うと、さすがにコズミック初期だけあって遊び的な雰囲気というものがなく、最初から最後まで緊張感と陶酔感の連続である。そして恰もクリシュナ神の啓示でも受けた様なSERGIUS GOLOWINのヴォイスが天上からでも響いてくる様は一種の宗教的な陶酔感に満たされているようだ。

コズミック・シリーズ屈指のアルバムである。



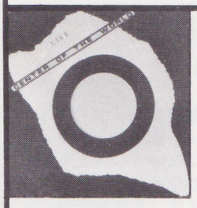
SPRING
Spring
E: Neon NE-6

NEONレーベルといえば、インデアンサマーや、トントンマクートが代表的存在だが、ここに紹介するスプリングというグループはこれらNEONレーベルのアーチストのうちではおそらく一番の音楽性と存在感を持ったグループであることは明白であり、今までマニアの間でのみ語られてきた幻のグループである。メンバー五人のうち、メロトロンを演奏する者が三人いて、この圧倒的なメロトロンの洪水の中をメロディアスなギターと、深みのあるボーカルが同時進行するという、いかにもブリテイツュ然とした典型的グループであり、その意味において、斬新な試みはあまり感じさせないが、反面確かな音楽性と秩序ある構成で完成された音作りが売り物である。もう一つ、キーフのデザインした三面びらきの豪華なジャケットも、このグループを賛美する上での条件として欠かせない。



DILLINGER
Don't Lie to the Band
C: Daffodil 9216-10055

カナダはアメリカと地続きのせいか、やはり優秀なシンガー・ソングライターを多く生み出して来ている。そんな中で、フレンチ・カナディアンのミュージシャン達によるプログレッシヴ・ムーヴメントがほのかに芽生えたのだが、このディリンジャーというグループは、またそれとも違った雰囲気を持ったグループである。どちらかと言えば、彼等のサウンドは正統派ブリティッシュ・ロックに近いと言えるだろう。しかし、やはりそこにはカナダ特有のさっぱりした音、言葉を代えれば冷たさを感じる音がある。かっこいいギターとメロトロンも駆使するキーボードを中心に、カッチリとまとまった緻密なサウンドが展開するのだが、アルバム全体を通して胸を熱くさせるようなところがない。批判に聞こえるかもしれないが、ボクは逆にそんな彼等のクールなサウンドが好きなのだ。かなり耳の肥えたロック・ファンを十分満足させてくれる2ndアルバムである。



FRANK WRIGHT QUARTET
Center of the World
F: Sun CW-001

フランク・ライト（テナー、ソプラノ・サックス)、アラン・シルヴァ（コントラ・バス、チェロ)、ボビー・フュー（ピアノ)、ムハメッド・アリ（ドラムス）のカルテットによる1972年5月26日、ロッテルダムにおけるライヴ、ESPのデビュー（1966）の時は、まるで言語障害をおこしたかのようなプレイが印象的であったが、ここではむしろアンサンブルに重点が置かれている。静寂の中のひきつったようなライトのサックスの導入部に始まり、シルヴァのベースを構造上の軸にして各自の演奏が星雲のラセン状に進行してゆく。各自のソロに分断されることなくカオスの裡にも極めて有機的な総合がある。ライトとアリの動物性に神秘的イメージを放射しているのはピアニストのフューである。



THE BATTERED ORNAMENTS
Mantle-Piece
E: Harvest SHVL-758

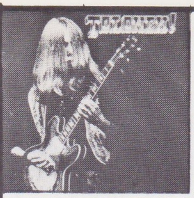
バタード・オーナメンツに私が何故興味を持ったかと言うと、ジェイミー・ミュアーのことを調べている時に、この名にぶつかったからである。しかしジェイミー・ミュアーの名はバタード・オーナメンツのアルバムには見ることが出来なかった。私は一度はガッカリしたものの、レコードに針を置くと、スピーカーからはそんな感情をみごとに消してくれるサウンドが流れ出て来たのである。バタード・オーナメンツはジャズコンボのスタイルでこのアルバムを録音した。ジャズ的要素の強いロックと言うより、やはりジャズバンドと言ったほうがいいだろう。ブリティッシュ・ジャズファンにはおすすめ出来るがロックファンには今一だろう。後でわかったことなのだがJ・ミュアーは何らかの形でこのバンドにかかわりがあったということだ。まあ、何はともあれ、そんな謎を秘めたこのアルバムはやはり名盤といえよう。



KINGDOM COME
Journey
E: Polydor Super 2310-254

ワーレンシュタインの“コズミックセンチュリー”という、ジャーマンロックシーンが生んだスペースロックの歴史的名盤があるが、このキングダムカムの3rdアルバム“ジャーニー”は、それとまさに好対象をなす名盤である。

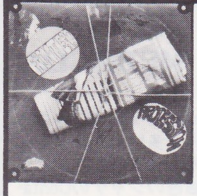
共にメロトロンのだいたんな使用とシンセサイザーによる音空間の広がりを重視した基本的な姿勢から作り出されたものであるが、ワーレンシュタインが、ハロルド・ゴロスコフのドラマチックなドラミングをその要として、奥行きのある位相関係を生み出したのに対し、アーサーブラウンは、今でこそ、ポピュラーになってはいるが、そのデジタルな響きは、およそプログレとは結びつかないと思われていたリズムボックスを使って、なおかつ表情豊かな圧倒的迫力の演奏を聞かせてくれた。ドラムセット以上にスピーディーなリズムボックス、変幻自在のシンセサイザー、唸りをあげるギター、そしてメロトロンが作りあげる無限の宇宙空間……スゴイネ。



JUKKA TOLONEN
Tolonen!
Fin: Love LRLP-47

ユッカ・トローネンは、フィンランドのトップ・グループ、タサヴァラント・プレジデントのギタリストであるが、一般の彼のソロ活動はファンキーなギターのインタープレイが印象的な“クロス・セクション”というアルバムで語られてしまう事が多いようだ。しかしここで紹介する71年に録音されたアルバムこそが、彼の最高傑作と言える。そのジャージーなセンスが光るインプロヴィゼーションはもちろんのこと、古典的な響きが印象的なスピネット、さらにシタールなど多種多様なインストゥルメンタルで味付けされた彼の音楽的素養には、ただただ頭が下がるだけだ。さらにバックのメンバーのテクニックには本当に超一流のものを感じるし、ペッカが参加しているのは、マニアにはたまらないだろう。

クリアーな音を好む北欧のロックの愛好家ならぜひ一度聞いてほしいと思うし、ＥＣＭなんかが好きな人にも推薦します。



PROCESSION
Frontiera
I: Help DZSLH-55131

その昔、イタリアン・ロックが一気に燃えあがり、あたかも百花繚乱の如き様相を呈した72年。このプロセッションというグループもこの「Frontiera」というアルバムを、幻のレーベル“ヘルプ”からなんと手下げ付ジャケット!?で世に送り出していた。

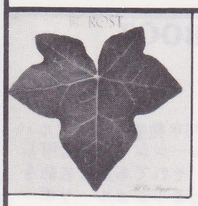
内容は、それほどには創造的でも独創的でもなく、同時期に発表された他の名盤に比べると全体的に構成力及び曲展開に今一つ工夫が欲しくやや見劣りがするのは否めないが、しかし静かにうねるメロトロンがバックを務めるドラマチックなエンディングを配したトータルな音作りのＡ面において、硬質なボーカルと粘っこい２本のエレクトリック・ギターそれに２本のアコースティック・ギターが同時にあるいは交互にリードしてゆくさまは、時に重厚に押し迫る部分と静かな部分とがけっこう上手く配列されている。捨てきれない魅力を持った中々の好盤と言えるだろう。



CROMAGNON
Cromagnon
A: ESP-2001

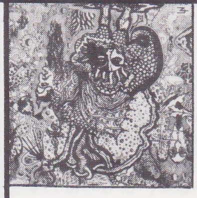
波長の合わない真空管ラジオから流れる国民的音楽に聞き入る夕べのひととき――そんなイーノ的な状況設定の後に、思わず「大本営発表」が続きそうな唐突な不安をもたげさせるようなＡ面。このアルバムの出た69年といえば、ウッドストックやドアーズや、青少年のそれなりに真摯な心情吐露のご時勢。そんな時にあって、安易な“泣き”を捨象した、時代の暗黒を凝視する視線の確かさを、コネチカットのこの音楽集団に感じてしまう。

評価の向きこそ皆無に等しいが、きょうびのモノクロームセットやら、ペルユウブやらの暗黒アヴァンギャルド路線を先取りしていたというべきだろう。



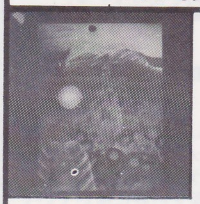
BIFROST
Til En Sigøjner
Den: CBS 88264

〝BIFROST〞というのは、北欧神話に語られる神々の国〝Asgard〞(天上界）と人間界を結ぶ七色のかけはし（虹）のことだそうです。この作品は、77年に発表されたデンマークのロックバンド？の２枚組の大作です。数々の民族楽器を交え、彼らが映し出す、ファンタジックな音の世界は、確かにロックではあるけれど、トラッドの影響を色濃く感じさせるメロディーラインの美しさ、そしてあくまでもマイルドにかなでられる、インストゥルメンタル・パートは、ロックとは遠くかけはなれたイメージを持っています。しかしながら、歌詞のもつ障壁は、いかんともしがたく、語学力貧困の僕には何語かすら判りません。とはいうもののここに語られる一つの物語がどれだけすてきなものであるかは、演奏に耳を傾けるだけでも容易に感じ取れるはずです。イマジネイションをいっぱいにふくらまして、古の北欧の神々に思いをはせてみるのも楽しいのではないでしょうか。



ARZACHEL
Arzachel
E: Evolution Zel Z-1003

Arzachelの唯一のアルバムをここに紹介するわけだが、果してどれだけの人がこの名前を知っているだろうか。ブリティッシュロックシーン、その長きにわたる創造の歴史は、いくつかの伝説を生み落した。今、Arzachelの名はその伝説の中に埋もれてしまおうとしている。ここにクレジットされている４人のメンバーは、発音さえおぼつかないおかしな名前である。録音年代も不明である。そのサイケデリックなサウンド傾向からして60年代後半かと思われるが、ひとたび盤面に針を落してみさえすれば、そのギターフレーズに、オルガンの独特の音色に、その正体は鮮明に浮かびあがってくるはずである。Ｄ．スチュワート、Ｍ．キャンベル、Ｃ．ブルックスそしてＳ．ヒレッジがコリエルの時代に偽名を使って発表していたと言われるこのArzachel幻のままで忘れ去られてしまうのは、あまりにも惜しい名盤である。



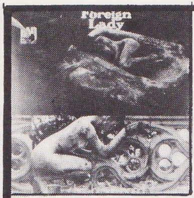
ELOY
Floating
G: EMI EMS-80151

今まで数多くのジャーマン・ロックが紹介されてきたが、何故かこのグループだけは除かれていた。国内盤も出た事のあるこのアルバムは、現在も活動を続け、数多い彼らのアルバムの中で、最も、気を吐いた２ndアルバムなのだ。１stでは煮えきらなかった彼らのサウンド・スタイルもここでは、すっかり落ち着きを見せ、余裕さえ覗かせている。意気の上がらぬヴォーカルと混沌とした演奏は、生粋のジャーマン・ロックとして正統的な立場にある。いつも思う事だが、ドイツという国はどんな時代においても、他国を寄せ付けない一風変わったポリシーを持っているようだ。現在では、よりメジャーにジェネシスのような感覚を付け加えるようになってきたエロイは、当時のロック増産時代の中から生き残り続けている、正真正銘のジャーマンロックの雄なのだ。



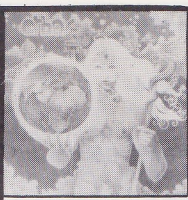
FORMULA 3
Dies Irae
I: Numero Uno 2-SLN

イタリア・ロック史上最高のロック・トリオとしてあまりにも有名なFormula３。彼らの事についても幾度も取り上げられて来たが、それは3rdの名作「Sognando e Risosnando」や4thの「La Grande Casa」ばかりでIstや2ndについては、ただＬＰタイトルが書かれているばかりで音の方を具体的に紹介される事は少なかった様なのでここに取り上げた訳なのです。このIstアルバムは「天の怒り」と題された、音の方も文字通り壮厳な素晴らしいプログレシヴ・ロックだ。(ただのハード・ロックだなんて言ったのは誰だ？）特に、地を引き裂く重々しいドラムと天を分かち合う壮厳なオルガンから始まるタイトル曲〝Dies Irae〞は、後半〝Dies Irae〞とリフレインされる混声コーラスと共に感動を呼ぶ素晴らしい曲。3rdの〝Sognando e Risognando〞と並ぶ名曲だ。



CHRIS BRAUN BAND
Foreign Lady
G: Pan 87-586-IT

ジャーマン・ロックの歴史を彩ってきた女性達の中で、僕にとって特に印象が深いのはフランピー、アトランティスのインガ・ランフと、ジョイ・アンリミテッドのジョイ・フレミングである。どちらも太い声を持った男まさりのヴォーカリストであるが、ここに登場するクリス・ブラウンという女性も、その２人に劣らぬ太い声の持ち主である。さらにすごいダミ声なので、インガ・ランフにより近いと言える。このアルバムは２ndで、前作はブルージーなロックをひたすらやっていたのだが、ここではシンセサイザーやメロトロンも使用している。プロデュースは大御所ディーターおじさんで、流石にドイツらしい音の仕上がりになっている。夢と現実が頭の中を飛び回るようなジャケットもまたよろしい。クリス・ブラウンはこの後忽然と姿を消してしまったようだが、１stからこの２ndへと確実に進歩していただけに、もう一作アルバムを残して欲しかった。



ETHOS
Ethos
A: Capital ST-11498

フロイドの「狂気」クラフトワークの「アウトバーン」の大ヒット以後、アメリカでも数多くのプログレッシヴな音楽性を持ったバンドが登場して来たが、中でもこの「エソス」は最も完成されたバンドだったと言えるだろう。確かにブリティッシュ系のバンドからの影響は多く受けているだろうけど、そんな表面的なスタイルよりも、彼等自身の創り上げた音楽そのものに確立されたオリジナリティがあると思う。○○風というのではなく、完全なエソスの音楽が存在している。

鋭角的なギターと２人のキーボード奏者が描き出す世界は、多彩で奥深く、どこまでも果てしなく広がっていく。弾む様なリズム・セクションは恐しく強力だし、さらにヴォーカルの表現力も素晴しい。これらを巧みに盛り込んだ曲作り、アレンジワークの見事さも特筆に値する。全てにバランスのとれた素晴らしいバンドが創り上げた高密度な傑作。



BRAINCHILD
Healing of the Lunatic Owl
E: A&M AMLS-979

ウォルラス、サムライ、ヘフンといった英国のブラス・ロックに、強い関心を示すロック・ファンは以外に多勢いるようで、僕もその一人なんだけど、シカゴやBS & Tといったアメリカのバンドには何故か、ちっとも魅力を感じない。何でイギリスのバンドはあんなにかっこいいんだろう？　というわけで、ここに紹介するブレインチャイルドもギターベース、ドラムス、キーボードに４人のブラス・セクションを配したブラス・ロック・バンド。彼らのサウンドを語るのに特別な賛辞は必要ないと思う。やっていることは、極めてオーソドックスなのだけれど、やはり脈々と流れる英国の血は穏しようがないようで、そのフレーズの節々に言いようのない、ぞくっとくるようなかげりが感じられる。ヘヴィーなリズム・セクションをバックにメロディアスなそれでいて力強いソロを聞かせるホーン・セクションの素晴らしさといったら。



IL ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Contaminazione
I: RCA DPSL-10593

Il Rovescio Della Medagliaなんてフルネームを書くとわからない人が多いがR.D.Mなんて言うと知っている人もいるだろう。米ピーターズ・レコードから銀色のジャケのContamination、っていうタイトルのLPが出ており最近はこのイタリア盤もレコード店に出まわっているが、ここに取り上げた「Contaminazione」はこの「Contamination」のイタリア語版。ジャケットも見開きでバッハが原野を散歩している絵だ。バッハの曲をモチーフとしたこのアルバムは、Newtrollsなどに似たすばらしいクラシカル・ロックだ。このLPの他に「Io Come Io」という1stアルバムがあり、ここではグループ名の“メダルの裏側”っていう意味にひっかけて、Rovescioっていう単語がひっくり返っているジャケで、音の方もキーボードがいないせいもあって、ハード・ロック。2ndがこの「Contaminazione」で3rdにあたるのが「Contaminazione」の英語版、「Contamination」である。



TARANTULA
Tarantula
S: Novola NLX-1073

狂的な女性ボーカルをフューチャーした恐怖の 2ndアルバムで知られるスペインのグループ、タランチュラの 1st アルバム。2nd は78年“Chapa”から出ているが、こちらは77年ナゾのレーベル“Novola”からの作品。メンバーは、リーダーと思われるキーボード奏者だけが 2nd と共通しているだけで、あの女性ボーカルも未だ在籍しておらず、それだけに、かえって結成当初の意欲に満ちた新鮮さが、アルバム全体に漲っている。また内容の方も、美しいジャケットを反映するかのように素晴らしいものとなっており、メロトロン、ピアノ、オルガン、シンセサイザーといったキーボード群と高音域にまで力強く伸びる男性ボーカル、更にギター、フルート、コーラス、効果音等が程良く調和されたシンフォニックな拡がりを持ったサウンド・曲展開には、余裕さえ感じられるほどで、かなりの完成度と魅力を放っている。



EMMANUEL BOOZ
Clochard
F: Atlantic 50-294 Y

エマニエル・ブーツ76年発表の幻のアルバム。最近作程多くのミュージシャンを起用しているわけではないが、それでも主な名前を挙げると、元ズーにいたミッシェル・リポーシュ、クリアライトにいたジョエル・デュグノー、フランソワ・ジャヌーといった腕達者連が参じている。

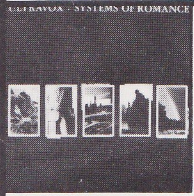
さて内容の方はというと、生ギターだけをバックに切々と歌う曲と、上記の素晴らしいゲスト達を従えて自由奔放に扇情的に歌う曲とに分かれているのだが、どちらにしても、彼の常に緊張感を伴った鋭角的で強烈なボーカルは、時に身動き一つ出来ない、まるで金縛りにでもあったかのような切迫感と恐ろしい程の攻撃力を携えている。それはまるで悪魔のようであり、また神々しくもあり、そして極めて人間的でもある。

最新作のような怒濤のような物凄さとは異なった、徐々に聴き手を闇の中に引きずり込むような不気味な音空間を秘めている。



JUAN HIDALGO
Rrose Sélavy
I: Cramps Nova musician 13 520-6113

ジュアン・イターゴの「ローズ・セラヴィ」はタイトルどおりマルセル・デュシャンへのオマージュである。曲名は「ローズ・セラヴィ」、「美しき呼吸」、「ヴェール水」「L·H·O·O·Q」といずれもデュシャンのレディメイドに縁の深いタイトルが付けられている。この作品のスコアは数字の１から５までの組み合わせを順次配列した図表であり、１から５までは音符のドからソまでが当てはめられている。演奏はチェレステのソロから始まり、３種類のピアノフォルテの変形、打擲音、フィードバックがデュオ、トリオ、カルテット、クインテット、セクステットと前のテイクの上に同一のスコアをもとにした変形によってピッチ、スピード等を変えながら前のテイクの上に重層的にかぶさってゆく、ローズ・セラヴィの変幻自在さと同様にして、音の語呂合わせが最低の素材を無限に変形させる事を示す一例である。



ULTRAVOX
Systems of Romance
E: Island ILPS-9555

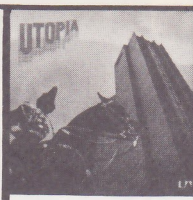
このアルバムを発表した後、ジョン・フォックスはウルトラヴォックスを脱退した。ジョン・フォックスという人は一曲一曲に風景画のような瞬間的な描写を巧みに描いていくため、どの曲も一つの次元を持った完成度の極めて高い物となっているのだが、このアルバムは、最近発売し話題を呼んだ「メタル・ビート」よりも聴いた後の印象が強く、頭の中により鮮明な情景が繰り返される。毎回驚かされる彼のエレクトロニクスの応用もここでは卓抜で、電子という冷たく幽閉されたものを実に見事にロマンスの装置として活用している。それはロマンスという炎の拘束から離れ、鏡に映るそれを冷静に客観視し観察する者だけがなし得る、孤独な崩壊の内での一つの可能性なのかもしれない。ネオン輝き無表情の人々が徘徊する都会で、それを孤独として閉じ込めてしまうより、風景として描写することにより救われている、そんなロマンスをこのアルバムは描いている。



MARK CHARIG with KEITH TIPPET, ANN WINTER

Pipe Dream　E: Ogun

OGUNはブリティッシュ・ジャズの中堅所のアーティストのアルバムを一手に引き受けていると言ってもよいだろう。そしてこのアルバムもそれらのアーティストの一人であるMARK CHARIGがキース・ティペット等を作った一枚である。しかしここには数々興味深い事実がある。それというのもティペットがパイプ・オルガンを弾いていることだ。アルバムにはティペットのアイデアによりとり入れたと、ぽつんと書れているがMARK CHARIGよりもティペットのファンの私にとってはそれは見逃すことの出来ない事柄である。アルバムはベルの音で始まり奇妙なコード進行を伴ないパイプ・オルガンに乗って行く。クリムゾンファン、ティペットファン、そしてジャズ・ロックファンの諸君、ティペットのピアノもいいけれどたまにはパイプオルガンもいいですよ。もしクリムゾンで彼がパイプ・オルガンを……なんて考えてしまいますよ。ほんと。



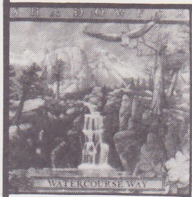
UTOPIA

Utopia

G: United Artists UAG-29438

73年にアモン・デュールIIは“VIVELA TRANCE”という非常にポップな到底あの闇と狂気に満たされたアモン・デュールIIの歴史を思い浮べることのできないアルバムを発表した。もはや、アモン・デュールIIではなくなってしまったのだ。同年、そのアルバムより少し前に、いわゆる商業上のお遊び的な感じで発表されたこのアルバムは事実上の彼らの最後のアルバムと言えるものである。曲によってセッション・メンバーが変わり、即興的に作られた感じで特にAndy Marxが参加しているのは興味深い。

全体的にブリティシュ志向が強まったという感じであるが、やはりアモン・デュールIIとしての本質は所々で如実に表われている。B-1の“Deutsch Nepa1”という曲におけるROLF ZACHERのトーキング・ボーカルは何と言っても凄まじいものがある。



SHADOWFAX

Watercourse Way

A: Passport PPSD-98013

アメリカのPASSPORTレーベルは数多くのプログレッシブ・ロック・アーティストのレコードをリリースしているがその中でこのSHADOW FAXのレコードは5本の指に入るだろう。SHADOW FAXはフュージョン系のサウンドを所々に見せながら、アコースティクギターの美のしらべをかなでる数少ないバンドである。そしてそんな彼らが75年にプロデューサーにラリー・ファーストをむかえて作ったのがこのWATER COURSE WAYである。LYRICONというウッドウインドのシンセサーイザーや、CHAMBELINなど当時目新しい楽器を彼らは積極的に取り入れている事を考えればレコードの出来ばえはおのずから素晴しいものであると考えられるだろう。ぼくはこのグループの2ndを聴いたことがないが、いったいグループはどうなったんだろう。もし2ndを作るとすれば、BRANDXを超えるかもしれないのに……。



SADISTA SISTERS

Sadista Sisters

E: Transatlantic TRA-313

4人の才女による英国のグループ。アルバムはこれ1枚のみで、バック陣はアイザック・ギロリー（パシフィック・イアドラム）、モー・フォスター（アフィニティー）、ジム・トゥーミー（タイタス・グロウン）といった一流どころ。アルバム自体は割とオーソドックスなポップ・サウンドで、傑出した作品ではないが、彼女達の一番の特徴は、そのステージがシアトリカルであったことにある。残念ながら裏ジャケットに9枚のステージ写真が載っているだけで、その写真を見ながらステージの異様さを想像することが我々に出来る精一杯の努力である。歌詞を聴きとってみると、かなりエロチックな内容が盛り込まれており、コミカルな印象を与えるステージ写真と4人のヴォーカルによるオーソドックスなサウンドとミックスして考えると、頭の中で様々なステージが繰り広げられる楽しいアルバムである。英国的ユーモアのセンスがほんのり香ってくる1枚!!

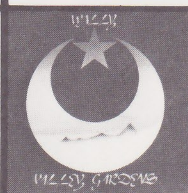


WIND

Morning

G: CBS S-65007

70年～72年当時のドイツのロック・シーンは、まだカオスのまっただ中であり、前衛性とヨーロッパ感性の最も暗黒の部分を映し出したグループが大勢を含めていた時代であったが、このころ（70年ごろ）最もドイツらしくないシンフォニックでプログレシブなグループが誕生していた。このウィンドというグループである。ここに紹介するのは彼らのセカンド・アルバムにあたるが、その内容はジャケット同様、非常にファンタジックであり、ロマンで溢れんばかりの感性が表現されている。また、メロトロンの大胆な導入や静と動のサウンドのコントラストの見事さは、クリムゾンの影響を随所に感じさせる。ドイツ・ロマン主義の伝統を代表する伝説的グループ、ヘルダーリンが登場する以前にこれほどの完成度を持ったグループが存在していたなんて驚嘆に価する。



WALLY

Valley Gerdens

E: Atlantic K-50180

ウォーリーは、1974年にボブ・ハリスとリック・ウェイクマンのプロデュースによるデビューアルバムを発表した、6人編成のバンドで、フランスのシンガー、ミッシェル・ポルナレフの日本公演用のバックバンドとして来日した事もある。（ポルナレフの様なポップシンガーのバックバンドになった事について、ウォーリー自身は、「だって、日本に行きたかったんだモーン」と言っております。）

そして、1975年に発表されたのが、この2ndアルバム「バレイ・ガーデンズ」だ。

ウォーリーのサウンドは、キャメルを思わせる程、繊細で甘く美しい。ピート・セイジのヴァイオリンとポール・ミドルトンのスティール・ギターに彼らならではの魅力がある。それにクリアでメロディアスなコーラス・ハーモニーも見事にきめている。B面の全てを使ったドラマチックな組曲での新鮮で躍動的な演奏ぶりは圧感。



TOPOR

Panic

F: Stedelijk Moseum

最近話題のシャンソン歌手薩めぐみさんの詩にも協力しているトポールは、アニメ作家として有名な人。日本でもイラスト集の“マゾヒストたち”等が出版されている。アニメ映画もとっていて“かたつむり”はレニカの“A”と同工異曲の作品。スペインの劇作家アラバールやメキシコのホドロスキーとも組織を作っていたようだ。アラバールの映画“死よ万才”にも残酷なアニメが使われていた。このレコードは彼のフランス語の詩の朗読で歌ではないが、音楽的解釈に基づいているそうだ。フランス語の解らない僕には解らないのだが。ジャケットのトポールのイラストと中に入っているたくさんの絵はがき、イラスト、超現実的な写真、トポールの昔のパスポートのコピー等のおまけをみるとついつい買ってしまうようなそんなすてきなフランス、レコードです。



DONELLA DEL MONACO

Opus Avantra

I: Trident TRI-1006

イタリアの秘宝庫トライデントより登場したOPUS AVANTRA。オペラティック・ヴォーカルと3台（！）のヴァイオリンをフィーチュアした異色のプログレッシヴ・グループだ。このおそらく1stアルバムは、フィーチュアされる女性ヴォーカリストDONELLA DEL MONACOとプロデュースのRENATO MARENGOによって作り上げられた魅力いっぱいの実験作である。

全く正統的な古典派のオペラに突如カットインする蜂の様に鋭く攻撃的なフルート、壮絶にたたみかけるリズム・セクションとアヴァンギャルドなピアノ、ストリングス群。その波間にもて遊ばれるDONELLAのヴォイス。全ての感性がこの瞬間に向けて凝集され、痛い程濃密な音空間は見事としか言い様がない。

集中連載

ジャーマン・ロック史学

History Rock in Deutscheland



インタビュー

ASH RA TEMPEL

エレクトロニクス遊星

Q：アシュラテンプルで使っていたような着想をどうやって得たのですか？60年代の情況と何らかの接触があったように思うのですが。

M：うーん、68年に最初に足を踏み入れたのです。学校のグループつまりキンクスやストーンズやスモールフェイセズをやっていたポップグループでやったのが初めてです。私は歌いました、なにしろその頃６年も前からクラシックギターを習っていてそれ以上やりたくなかったから！（笑）少し後にハルトムント（エンケ)、この人はアシュラの初期の数枚のアルバムでベースを弾いた人ですけど、彼が出て行ってブルーチアのアルバムを手に入れ、それがとてもよくて我々皆気に入り、これだ！と思ってそれから即興音楽をやることにしたんです。最初はこんな「奇妙な」音楽で成功するはずないと言われたけど、我々は演りたかったことを――我々の感じたことをやったんです。

Q：この時点でのバンド名は？

M：毎日違っていました。

Q：gigsのために？

M：当時はgigsはありませんでした。タンジェリンはリハーサル中で、それからアジティション・フリーもそうで、名前は忘れたけどスイスの男に率いられていたっけ。彼は本当にどうやって即興をやるかを教えてくれて、その可能性が与えられるのは演奏中で一緒に演っている他の奴のを聞いてもとづいてやるんです。我々はフリージャズ、前衛音楽に踏み込んで――彼は前衛音楽を作っていたんです。とっても――そして「Flippy」だけど、すごく正確なんです。わかる？10秒毎にこの音、そしてあの音。彼はしばらくベルリンで演奏したけど、もうそこには住んでいません。彼に実験音楽について多くを学びました。どう操作するか、その可能性、どうやって使うかについて。非常に面白い時期でした。それから我々はクラウス（シュルツ）に会い、アシュラを結成してずっとやって来たんです。

Q：クラウスはタンジェリンを脱けて――

M：ええ、最初のアルバムの後やめて、ハルトムントは夏をロンドンで過ごしていくつかの装置を持って帰って来てそれを我々がスタジオにつみ上げたんです。そしてクラウスがやって来てこの装置を見て「いいよ、すごい！」と言って仲間に入ったんです。(笑）それから我々の音楽を持ち込んだらベルリンのクラブのみんなは驚きました。何しろ当時ベルリンでこの手の音楽をやってた人はいなかったから。ますショックを受けどう考えてよいかわからなくなって――それ程新しかったんです。

Q：どうやってこの――いい言葉が見つからないけれど――「コズミック＝ミュージック」に足を踏み入れたんですか？

M：やあ、わからないな――それはただの名前だと思うけど、多分エドガー・フローゼが考え出したんで、我々はそう呼んだことはありません。カイザーが自らの音楽を「コズミック」と呼び始めて、いやむしろ彼の呼び名で発表した音楽を、かな。つまりヴァレンシュタインのようなグループは絶対コズミックと呼べるような音楽はやらないだろうということで――いろんな意味でそれはプロモーションの方策です、とにかくカイザーにとっては。

Q：単なる呼び名の１つですか。

M：うーん、恐らくそれが１つの見方でしょう。このケルンのスタジオで我々がやっていたセッションから出て来た雰囲気でもあったんです。最初はカイザーが我々を発援助してくれたんです。どうしてかわからないけど彼は我々の音楽つまり構成もなく普通使うものも使わない我々のやり方が気に入って――いつも演っては聞き演っては聞き――それから我々の気に入ったものを選ぶんです。とにかくカイザーがスタジオをかなり長い間借していてくれたのでケルンの我々はスタジオで独特の気分を味わったものです。まるで家にいるようにスタジオにいました、働いているという雰囲気なしに。すべてそこにありました。楽器も、テープも。とても面白かった、毎日、それにほとんど毎晩楽器はつなぎっ放し、テープもまわしっ放しで演奏を続けて。たいしたことない時もあったけど、気に入ったものができたこともあった。普通のレコーディングセッションつまりみんなが一定の時間にスタジオ入りして録音して家に帰るとすっかり忘れてしまうといったようなのとは違っていました。ストレスもプレッシャーもなかった。

Q：ずい分のどかないように聞こえますが――

M：ええ、ある意味では。単にスタジオ演奏できるようにして、何らかの経験を得るわけですから。我々だけでなくレーベルのグループ全部がね。これは非常によかった、なにしろ当時つまり70～71年のドイツでスタジオを取るなんてほとんど不可能なことだったし、まして契約するなんてことはドイツのミュージシャンにとって何か特別のことだったんです。

Q：Cosmic Courier　Ohr の作品はみなそういうジャムセッションの結果なのですか？

M：最初は違いました、みんな違っていたんです。――レコーディングの為の、特に技術的或いは電気的可能性についての経験、それを使って出来る特別なことを知るとても良い機会でした。我々はいつもそこにいっ放しで生活の重要な一部だったんです。特にそれが単なる仕事ではなかったから。(黙り込む）或るもの、特に⅞の作品などは完成したテープを聞いたことすらないんです。カイザーはそういうのを取り上げてリリースしたんです。彼は素材を取り上げ、ミキシングしてリリースしました。いつか、「おい、何だこれは、何か新しい――俺達のだよ」なんていうレコードが出てるかも知れない。(笑)

Q：彼はあなたには全然頼まなかったんですか？

M：アシュラのアルバムに関しては我々はただ素材を選び、あとは――カイゼルがプロデューサーで――彼は本当に音楽が好きで――彼も気違いですよ。

Q：それがでるまで知らなかったんですか？

M：いや正直言って大して気にも留めなかったんです。その時クラウスとタンジェリンはそれが気に入らなかったと言っていました。彼らは言っていました、「おい、我々は演奏していて得るところはないしカイザーは商売熱心だ。」でも私は会話したようなことを知る機会を与えられたこと音楽に深く入り込んで検出することが出来たことがうれしかった。

Q：カイザーはrip-offだという人の意見を変えるにはずい分かかりそうですね。

M：それはわかるけど私個人は決して rip-off されたと思わないし、我々に彼が与えてくれたもの、私が彼に与えたものは何かを知っています。





私にとってはあれでよかったんです。クラウスは決して満足しなかったけど私は違いました。私はいくつか年下でアシュラが始まった時17、最初のアルバムを作った時で18でした。クラウスやタンジェリンも真面目なミュージシャンとして何か他のことがわかっていたし、でも私とは違った地位にいたから私は何も言えません。この時我々は長い話し合いをしました、音楽について、そしてただすわってヘッドホンをかけて、「すごいすごい、続けて」と言ってる決してプロデューサーたりえなかった我々のプロデューサー、カイザーについて。

Q：ふーんまるでカイザーがそこでサイケデリック集会を開いていたって感じですね。

M：うーん、そういうのは我々が72年にてかけたティム＝リアリーのアルバム、『セヴン＝アップ』から始まったと思います。リアリーはその時逃亡中だったんです。彼はスイスに約1年いました。我々が彼のところに出向かなければならなかった、無論彼はドイツに来られなかったから。多分スイス高官に友人が居たのでしょう。

Q：『セヴシ・アップ』はどうして出来たのですか？

M：うん、カイザーがティムと関係をつける為にハルトムントと一緒にスイスに行ってティムに最初のＬＰを聞かせると彼はそれが気に入って senen lene' やもろもろのことに関するコンセプトをだしてくれたんです。ハルトムントはまるで熱狂して帰って来ました。それから我々は7人位の多人数で出かけたんです。アシュラはしっかりしたグループではなくて人が出たり入ったりして、みんなとても差があったのでとてもそんなことはできないと思っていました。あるステージで私はやめたくなってよく考えようと言ったんです。うまく行きました。ティムが全体をうまく運んでくれ、とても注意深くいろいろ作り出したんです。

ええ、彼はいろんな人と話ができるだけでなく、気付かぬ程微小な影響を及ぼしました。誰にでも話してみたいのにどう話してよいかわからない人とかいるけど彼は誰とでもそうしていたしそれで自然だったのです。

Q：着く前は彼についてどう思っていたんですか？多くの人は彼を導師だと――

M：スイスに行ったみんなが違う印象を持っていました。彼を導師だと思った人には導師だし友人だと思えば友人だしもしスターにしたければ彼はスターになれるし――ティムには問題ではなかった。(笑)

Q：どの位のＬＳＤ(アシッド)がありましたか？

M：『セヴン・アップ』が私にとっては初めてで、不思議なことにそれ以前には知らなくって、こういうものを人にこういうやり方で与えるのはよくありませんが――おそらく10～12発分位セヴン＝アップのびん(我々がアルバムタイトルにした)に入っていました。我々はセヴン＝アップのびんをスタジオに持ち込んでいて、何しろその夏はとても暑かったから、のどが乾くとまわし　みしていました。誰もティムが何をしたか知りませんでした。でも私にとってはそれがよかった、もし私が知っていたら、ＬＳＤをやるという行為が呼び起す垣根を越えるという問題をかかえていたでしょう。でもすぐに私は何が起こったかに気づき、納得して、「すてきだ、何が起こるか確かめよう！」と思いました。ティムが我々を導く為にその経験をさせ、うまく行き、そして計画全体もうまく行ったんです。以後は違いました。カイザーが我々の欲しいだけくれました。最後にはミュージシャンには多すぎて「もう結構――もう2度と！」セヴンアップが℅のことの始まりでした。我々はケルンのディールクスのスタジオに行きました。彼のスタジオは当時ドイツでは最も進んでいてディールクスはアメリカのスタジオ技術に非常によく対応していました。

Q：そこにはあなた方だけだったのですか？

M：いや違います。いろんな時間に多くのバンドが録音をやっていました。エリック＝バードン、ティナ＝ターナー、アメリカやイギリスの役者達。カイザーとディールクスは最初から知り合いだったから特別な関係でした。でもディーターはこういうあまりリラックスした感じのセッションは本当に好きではなく、もっとコマーシャルなことを続け、スタジオの仕事を開拓する方を好んだんです。

Q：『ジョイン＝イン』については？

M：B面のロジの詞は『セヴン・アップ』の制作について彼女がその時どう感じたか、です。

Q：セヴン・アップについてあなたには？

M：私が何をしたらよいか本当はよくわからなかった。我々はグループではあったけどみんな好き勝手をやっていました。私は実際はアシュラのリーダーではなかった。私はただ演奏して、名前についてや私達のイメージについてあまり考えませんでした。ハルトムントがこういったことをしていました、つまり渉外とか、会見とか。私はこういったことはしたくありませんでした。

Q：それではあなたはただ演奏して家に帰るんですか？

M：ええそうです。うーん、私が考えていたのは音楽に関することだけです。私は人々の前に行って、「聞いてくれ、これが私の新しい音楽だ」などと言える男ではありませんでした。私は演奏して人々の反応を見るのが好きだったんです。今でもアピールなどできません。

Q：そうですか？

M：(笑)私は人々に近づいてみようとしたけどただ演奏して、どの人がそれを気に入ってくれてるか、プロモーションやビジネスなしでわかるんです。

Q：『ジョイン＝イン』自体については？

M：クラウスがタロットアルバムの制作の為に少ししかそこに居られなかったので『ジョイン＝イン』は短いセッションから生まれたんです。我々は大体3時間位セッションしてその結果の出来ばえが気に入り、それがアシュラのアルバムになったんです。我々は再びクラウスと共にコンサートをしました。1人で活動するのが好きだったのでソロ活動に専念していたけど時にやりたくなると我々と一緒にやったんです。それからハルトムントは気が狂ってしまったのため、グループを脱けて――彼は自分のやっていたことが気に入っていたけどうまくあやつれなかったんです。彼は何かとても不思議なことをしていました。例えばローマに行って教皇にＮＡＴＯをやめさせるよう説得しようとかとても不思議な――ええ本当に行ったけどできたのかどうかわかりません。でもやろうとしました。彼はそれ以上音楽をつづけることができなくなってしまいました。最後にいくつかクラウスとコンサートをやったけれど、不可能になってしまいました。ある時コンサート中に





突然彼はやめてしまってステージの端に坐り込んで私とクラウスの演奏に耳を傾けるんです。それから「君達がやってたことがあまりにすばらしくて合わせることが出来なかったんだ」って言うんです。『できないよ、僕は聞かなきゃならなかったんだから』って。彼が協会に入ってしまったので、私達は話をすることもできなくなりました。色々見たり考えたりして次の瞬間はどうか別の所にいて、何かを継続してやることができなくなってしまったんです。彼は２度と音楽をやらず、何度かサナトリウムに入ったりしました。これは少し役に立ちました。彼を普通の状態に戻して――でもそれは彼にとってベストではありませんでした。１年後どこかで働いている彼に会いましたが、音楽をやってはいけませんでした。それにセヴン＝アップの後ティムと一緒に何度か帰って来ました、ハルトムントは本当にティムのことを導師として見ていたから。彼は何をやっていいのかわからなかったのだと思います。

Q：ザ・ロジのアルバムは少し変わりましたね。

M：私はいつも大変いろんなアルバムを手がけて来たから手紙を書いて来るファンの批評を受け入れられるんです。ロジのアルバムについては即興とは違った何かをやってみたくて――歌をやりたかったんです。

Q：サイケデリック・カントリー・ロックはちょっと使い古された言葉だけど――

M：そういうふうに呼ばれて来ました。我々の意見の為、奇妙な呼ばれ方をされたんです。ウェストコーストの音楽と比較されました、ロジのアルバムについて好んでそうされました。

Q：あなたはサウンドをはっきりうちだせないんですか？

M：私の個人的自由としてそうしないんです。『ニューエージ・オウ・アース』でやったように何度も簡単にそうすることはできました。いくつかのアルバムをこの方向で作ってここに別のエレクトロニック奏者として坐ることも可能だったけれど私はそういう考え方は今も昔も好きではありません。いいアルバムだったけれどもうああいうことはしたくありません。

Q：それをプレッシャーなしですることができますか？

M：ええ。私の契約は私が自分の音楽性を作っていける為のものです。私はヴァージンといわゆるスタンダード契約を結んでいますがそれは自由な基本にもとづいています。これはもしヴァージンがある時ある国でアルバムをリリースしない場合――契約は世界的なものなので――我々は新しい契約交渉をできるのです。

Q：マネージャーはいますか？

M：はい。この複雑な契約を結んだフランス人です。私がさっき言ったのは一言で言えば、バージンに第一選択権があるんです。

Q：あなたの名が『インヴェンションズ』のアルバムジャケットに一緒にのっているというだけのことで多くの人々があなたに懸命に協力したんですね。

M：うーん前にも言ったように私は音楽に於いて巾広いのでこの面を継続していくのはたやすいのです。どう語り、どう名をつけ、商業的見地からどうつづけて行くかが困難なのです。インヴェンションズとルッツとのツアーの後、私は１人で何をしてよいかわからない自分に気づいたんです。私はちょぅどカイザーと縁を切る頃だったので何か新しいことをするチャンスだったのです。私はギターを持ってインヴェンションズとルッツとでそれを行なったんです。その時はエレクトロニクスに移行する時期でした。

Q：ツアーはよかったですか？

M：ルッツとのツアーですか？ええ、非常に有効でした。我々はフランスのＯＲＴＦ放送局に行き、推薦者を狂わせてしまいました。彼は我々に一定の演奏時間しかくれなかったんですが我々は延々とやったんです。恐らく彼はまだ狂い切ってはいなかったんでしょう。我々はＣＡＮとも演奏しました。この間に私はステージでキィボードを使い始めたんです。我々が決裂してから私はオルガン、小型シンセ、インヴェンションズの為に持っていたＴＥＡＣの４トラックなどのものを集め始めました、それで私はこれを使うのは今だと思ったんです。私にとっては非常に新しかった、それまでさほどエレクトロニクスを使ったことがなかったんです。私はそのサウンドと開発の可能性に魅かれました。仲間を集め、その他には長い時間がかかりました。

Q：ミハエル＝ヘーニッヒから受けた援助は？

M：私はミキシング・デスクを持っていなかったので彼のところでこのアルバムをミックスダウンしたんです。私は自分の音楽を録り、彼はデパーチャーズを録音していたんです。そして彼が終えてからは一緒にやりました。我々は話し始め、一週間というもの彼のミキシングデスクを使わせてもらったんです。これは私が自分でミキシングした最初のアルバムでした。『インヴェンションズ』はスタジオ＝ディールクスでミキシングしたんです。

Q：そうですか。彼はそれをどうしたんですか？

M：ディーターはそんにいなかったので、本当にそれを気に入った彼の助手の１人がやりました。ディーターには少しプログレッシヴすぎたと思います。歌と構成の点で彼はロジのアルバムが好きだったんですから。彼はよく『こういうセッションのことは忘れてこれをもっとやれよ』と言っていました。

Q：ヘーニッヒは「ニューエイジ」のミキシングを手伝ってくれました？

M：いや、ミカエルとはリラックスしていて本当によかったんです。彼は自分のアパートに１週間も私を泊めてくれ、好きなときに彼のミキサーを使えたんです。夜でも昼でも。

Q：彼の『デパーチャーズ』は好きですか？イギリスではあまりうけがよくなかったけれど。

M：ええ、それは理解できます。彼はこのアルバムを76年に制作したけれど確か２年位の長い間お蔵入りだったのですから。その間に音楽は発展したんです。ミヒャエルは契約に２年かかりました、何故って有利なのをさがしたから。(笑)

Q：でも彼は契約した――

M：ええ、確か。でも長い目で見ればそれが彼にとってよかったかどうか。もっと小さなレーベルでも早く出せば彼も裕福になれたのに。コマーシャルサイドからではなく、彼はもっと多くの人にとどいたろうと確信しています。

（Ｍは立ち上がり、ニューアルバムのテープをかける）

M：――『コリレイションズ』での最大の困難は、又グループで演らなければならなかったことです。私はその前の３枚をソロでやったし、ル





Ash Ra Tempel
Ohr OMM 556015
Schwingungen
Ohr OMM 556020
Join Inn
Ohr OMM556032
Seven Up
Kosmisch KM58001
Starring Rosi
Kosmisch KM58007
Invention For Electric Guitar
Kosmisch KM58015
New Age of Earth
Virgin V2080
Blackouts
Virgin V2091
Correlation
Virgin V2117

ッツとハラルドを紹介する為自分のやりたいことを削らなければならなかったんです。私は『あ前はこう演れ、お前はああやれ』と言うのでなく私の音楽の創造的な一部であって欲しかったから。

Q：気分よかったですか？えーっと、リーダーというのは？アシュラでは望んでいなかったけど。

M：私は音楽をリーダー格とか抜きでやりたかったけど、ルッツやハラルドとの関係が――私は『コリレイションズ』の為いろいろ前もって用意していて、それが彼らが独自のスタイルでやる妨げになったんではと思います。新作は『ベル＝アライアンス』という名で、我々の今の関係を表現することになるでしょう。『コリレイション』のときある面ではリーダーであり、又グループのメンバーでもあるということから圧迫を感じたのとは違って、ベル＝アライアンスにはコンセプトはありませんでした。『さて、皆何を出来るかは知ってるんだから一緒にアルバムを作り出していこう！』と言ったんです。そして３週間スタジオに入り、録音してうまく行き、それぞれが発言権を持っていました。今度の仕事は私にはずっと楽でした。新作からはこういうものが出て来ると思います。

Q：それは確かにより共同的で壁がなくて――『コリレイションズ』の方が形式的な気がしますが。

M：『コリレイションズ』の場合は私が先に一歩踏み出していてそれが喰い違いになったんです。私の方が余計知っていて、彼らの知らないこともあったんです。このことが『コリレイションズ』の完成を困難なものにしましたが、我々に継続して別の基本に基ずいた何か新しいものを作る可能性を与えてくれたという点で私は『コリレイションズ』を手がけてよかったと思いました。恐らく最も重要なことは『ブラックアウツ』以後、私のアイデアが具体的なものだったということで、ルッツとハラルドは私と位置が違うから彼らとは一緒にやれないな、と制作中に気付いたんです。

Q：３人というのはいい数ですね。

M：私はいつも３人で演るのが好きでした。

Q：アシュラもこのラインナップで続けるんですか？

M：アシュラについてはそうです。でもいつも心の中には、自分のソロの為に考えたアイデアがあって、それがアシュラに新しい次元を与えることになると思います。私はもう少し１人で時間を使いたいし、大きなこととしてではないけれど、他人とやっているアシュラの制作では前にも言ったようにやりたいことが全部できるわけではないし、妥協しなければないから。妥協の必要のないアルバムを作りたいんです。ハラルドもソロでやっています。

Q：ルッツは？

M：彼はいつも何かをやりたがって、私も手伝おうとするけど、ルッツとハラルドのアプローチはとても違います。ハラルドはより実験的なことをやり、ルッツはとても保守的です。

Q：本当に？

M：ええ、ルッツは正確にする為にいつもリハーサルをしたがり、私は中間です！

Q：ハラルドはとても正確なドラマーだと思えるけど。

M：シークエンサーに合わせて演奏してごらんなさい。うまくやれるプレーヤーは少ないんです。彼もスタジオに来て考え込むことなしにうまくそれが演れます。多分前に言ったケルンでのセッションのお蔭です。彼もそこにいて、こういう即興演奏にああいうセッションから入ったんですよ。今言ったように私は言わば中庸で、それで面白く強力になるんです。何かしら創造的な緊張があるんですよ。

Q：『コリレイションズ』には多分欠けていた弾力性が『ベルアライアンス』にはあるんですね。

M：多分『コリレイションズ』はあまりにプログラムされすぎていたんでしょう。

Q：今ドイツでは何が起ころうとしていると思いますか？

M：多くの人が80年代に備えていると思います。きっとどこでも自分の部屋に坐って考え込んでいるでしょう。

Q：ではあなたは？

M：私はエレクトロニック＝ミュージックを続けて行きたいです。この分野でやるべきことはたくさんあります。今世紀末に向けて、そして来世紀も電子音楽は発展し続けるでしょう。ロックン＝ロールやそういったものはクラシック、流行遅れとなり、聞かれなくなるでしょう。

Q：その点については反論も多いと思いますが。例えばグンター＝シッケルト。2000年になってもギター抱えてやっているでしょうね。

M：ええ、そして私もやはり電子音楽をね。それは無視できないと思います。最終的にはコンピューター音楽にまで進むと思います。プログラムだけで何ひとつ手作りのものはない。音楽家の頭の中ではそんなことがもう始まっる頃ですよ。

Q：ミュージシャンの役割が減少するとは考えませんか？

M：うーん、その時はプログラムが面白くなるでしょうから。

Q：個人が実際に作るということはどんどん問題にされなくなり、無名の技術者をやとう、ということになりますね。

M：もちろんミュージシャンはもっと技術的知識を増やさなければならないでしょう。それはロックでも同じことです。例えばクラシックギターを弾くときだって弦のこと、胴のこと、どうして音がするか、を考えるでしょう。エレキギターもある意味では機械と言えます。今音楽を聞けばその行き先はディスコであったと商業サイドから言うことができます。最終的にはディスコではシークエンサーが使われることになるでしょう。ディスコでとても変わった音楽を聞きました。ほとんど電子音楽でちょっとドラムと声がなり、ギターはリズムギターすら入っていませんでした。

Q：ギターもエレクトロニックな楽器の１つですが――

M：ええ、純粋にアコースティックな音と電子音との最も進んだ融合体です。エレキピアノのような混合物ですね。電子オルガンは最初のシンセサイザーだったと言えます。音を合成して作るのですから。ギターは１つの楽器として存在し、決して完全に消え去ることはないだろうけれども音楽の総体はエレクトロニックな方向に将来進むことは間違いありません。

ROUGH TRADE
RECORDS LIMITED

Stiff Little Fingers

スティッフ・リトル・フィンガーズは77年8月に北アイルランド、ベルファストで結成されたバンドである。4人編成で、メンバーは、ジェイ・バーンズ(Vo&g)、アリ・マクモーディー(b)、ヘンリー・クルニー(g)、ブライアン・ファルーン(d)、で構成される。彼らは、78年初頭に自身のレーベル、Rigid Digitsレコードからデビューシングル「サスペクト・ディバイス」を発表。同年、秋にはセカンドシングル「オルタネイティヴ・オルスター」を発表した。その結果、今ではもう懐しいという気さえするトム・ロビンソンに気に入られ、自分たちのツアーの前座をしないか、と申し入れられる。その頃、アイランド・レコードとの契約の話があったのだが、アイランド社長 クリス・ブラックウェルの承諾が下らなかったので、当時創設されたばかりの〝ラフ・トレード〟と契約。その後、ラフ・トレード初のアルバム・リリースとなった彼等のファーストアルバム「インフラマブル・マテリアル」がラフ・トレードのオーナーでもあるジェフ・トウヴィスとレッド・クレイオラのメイヨー・トンプソンのプロデュースにより発表となる。同時に自主レーベルで発表していた前述の2枚のシングルも再プレスされラフ・トレードから発表。彼等の、パンク ・グループにしては珍しいともいえる、ツイン・リード・ギターとギター・ソロ、それでいてハードな歌詞とサウンドが高い評価を得た。結局、このアルバムは8万枚以上を売り、PILに続くブライテスト・ホープに選ばれたりもした。この後、スティッフ・リトル・フィンガーズ はマイナーレーベル〝ラフ・トレード〟を有名にしたにも拘わらず、クリサリス・レコード と移籍する。同時にオリジナル・メンバー、ブライアンは脱退し、代わりにジム・レイリーが加入する。セカンド・アルバム『ノーボディズ・ヒーローズ』がすでに発表となっている。

The Pop Group

このバンドは日本でも〝Y〟で割に宣伝され、あの薄気味の悪いジャケ写で記憶に新しい方も多いと思われる。ザ・ポップ・グループは77年末にブリストルで結成され、平均年令18才という若さからは想像もつかないサウンドを創り上げる実力・才能を持つ天才集団である。レーダー・レコードから発表した〝Y〟は圧倒的な評価を示した。というのは、それがフリージャズのスタイルとパンクのスピリットをミックスし、ダブ・サウンドを取り入れた余りに画期的なサウンドであった為である。これは、プロデュースしたデニス・ボーヴェルに寄る処が大きいのだが。その後、彼等はレーダー・レコードを離れラフ・トレードと契約を交す。シングル『We are all Prostitute』発表後、多少のメンバー・チェンジを行った後、スリッツと共に〝Y〟レーベル創設、ラフ・トレードがディストリビューションを行う。80年春、スリッツとのカップリング・シングルを発表した後、『For How much longer do we Tolerate mass murder ?』というセカンド・アルバムを発表。サウンドは以前の形式を引き擦ってはいるが、プロデュースが代わった為もあり、独特のダブ感覚はなくなっている。グループ〝Y〟の本領を垣間見させてくれる。



The Raincoats

レインコーツは当初、Ana (G & Vo)、Gina Birch (B & Vo)、Jermie Frank (G)の3人の女性のみだったのだが、ドラムの必要性に迫られ、唯一男性、Richard Dudanski が加入。長い演奏活動の割にレコード・デビューは遅く、79年の夏にシングルがリリースされた。なお、彼等のファースト・シングル「In Love」と前後してメンバー・チェンジを行っている。ギターのJeremieとドラムのRichard が脱け、元スリッツのドラマー、Polm Oliveとバイオリン、Vicky Aspinallを加え女性四人のバンドとなった。その後、79年秋にはジェフ・トラビスとメイヨ・トンプソンがプロデュースを手掛け、ファースト・アルバム『レイン・コーツ』を発表する。このアルバムには後述のエッセンシャル・ロジックからローラ・ロジックが参加している。演奏の点では、まだまだ未熟だが、キンクスの『ローラ』を取り上げるなど、仲々フリーキーな魅力を出している。スリッツの対抗馬として女性だけのグループ〝レインコーツ〟が注目される。

Swellmaps

スエル・マップスは77年初頭に結成されたバンドである。メンバーは6人編成で、Nikki Mattress, Epic Soundtracks, Phones B, Sportsman, Jowe Head, Biggles Books, Golden Cockrill という、見るからに嘘のような名前の者ばかり。彼等は最初自分自身のレーベル、Ratherレコードからシングルのみ発表していたのだが、後に、ラフ・トレードがRather のディストリビューションを行う事になり、彼らのレコードもラフ・トレードからリリースされる様になる。そして79年春、ファースト・アルバム『ア・トリップ・トウ・マリネビル』が発表されたのだが、これはグループ自身のプロデュースによるもので、5曲入りEP盤が付録として付いている。全部で一時間程になるこのレコードは、曲により編成やパートがバラバラで、全員マルチ・プレイヤーという実力を感じさせる。内容はコミカルに歌われる曲、パンクっぽい曲、実験的なフリージャズとバラエティに富んでいる。これは、ラフ・レードの今後の実験的要素を多く含んだ音楽の路線がうかがえる。今までに4枚のシングル、メンバーのPhones Sportsmanのソロ・シングルの1枚を発表している。

This Heat

1976年の或る13日の金曜日、This Heat は結成された。メンバーはチャールズ・ヘイワード、チャールズ・バレン、グレス・ウィリアムスの三人編成。この内、チャールズ・ヘイワードはクワイエット・サンのドラマーであったこともあった。グループの起こりはヘイワードが13才の時、兄バレンと組んだ家庭内デュオに由来するのだが、後、彼らはドルフィン・ロジックと名のり即興音楽を得意とするようになる。そんな76年の金曜日、ガレス・ウィリアムスを最初のギグの為加え、また元キング・クリムゾンのヴァイオリン奏者デヴッド・クロスなども交えてディス・ヒートとなった。この当時、ウィリアムはミュージッシャンではなかったのだが、これは一緒にやっていて楽しい者を選ぶという彼ら独特の方針によるものらしい。彼らはレコード製作を76年2月に始め78年9月に完了した。遅れた原因は金銭問題が絡んでいたようだが、前もって一万ポンド支払った者にファースト・アルバムの権利を与えるという考えで何とか処理した。ディス・ヒートというバンドはどこまでも実験的で、他のラフ・トレードのバンドとは違ってシンセサイザーを使っていない。これは、彼らの音楽の源とその性質を意識的に支配してきた結果でもある。

Cabaret Voltaire

キャバレー・ボルテールと言えば1916年、チュリッヒにおいて誕生したダダイズムの拠点が思い出されるが、このグループもそこから名前が来ている。このバンドは1977年、ヨークシャー州の工業都市シェフィールドで結成。メンバーは3人編成で、クリス・ワトソン (Key, Tape, Vo)、ステファン・モリドン (B, Tape, Vo)、リチャード・H・カーク (G, Tape, Vo)。この都市からはヒューマン・リーグの方が先にデビューしているが、このグループの方がシェフィールドでは高く評価されていた。彼等もラフ・トレードと契約を結んだ後、79年春、『Extended Play』のシングルでデビュー。夏にはセカンド・シングル『Nag Nag Nag』を発表。秋にはファースト・アルバム『Mix up』を発表する。その後、80年に入り、3枚目のシングル『Silent Command』、続いてライブ・アルバム『Live At The YMCA 10−79』を発表。さらに4枚目のシングルは12インチで『Three Mantras』を発表。全般的に彼らの音は映像と共に綿密に計算されたノイズによって構築されている。ヒューマンリーグとはドラムレスという点でも同一なのだが、より実験的なエレクトロニクス・サウンドを展開している。



Doctor Mix

このドクター・ミックスの前身はフランスのグループ、メタル・アーバンであった。メタル・アーバンはラフ・トレードのファースト・リリースだったのだが、その後、解散、分裂し78年夏にはメタル・ボーイズとドクター・ミックスの2グループになった。現在では共にラフ・トレードからレコードをリリースしている。彼等、ドクター・ミックスは78年夏に、かつてのストゥージズの曲『No Fun』をファースト・シングルとして世に送り、79年に入り、セカンド・シングル『I can't control myself』を発表。79年末には遂にファースト・アルバム『Wall of Noise』を発表するに至る。メンバーは3人編成で Sky Saxon, Reg Presley, Serpent。フレンチ・アヴァンギャルド・グループであるが、デヴィッド・ボウイー、ルー・リード、ストゥージズの曲を取り上げている。今後のフレンチ・アヴァンギャルドでの動きの要になるであろうことが期待される。

Young Marble Giants

ヤング・マーブル・ジャイアンツはスタート・マックスハム (G & Organ)、フィル・マックスハム(B)の兄弟と女性ヴォーカリスト、アリソン・スタットンの3人編成である。彼らは、コーヒー・バー〝Cardiff〟を中心にギグを行っていたのだが、ラフ・トレードにデモ・テープを送ったところ契約することになった。80年3月には『Colossal Youth』をデビュー・アルバムとして発売。続いて『Final Days』の4曲入りEpを発表。ギターのリフレインにシンプルなオルガン、トラッドを思わせるかのようなスタットンのヴォーカルの絡み合いに新しいタイプの音楽を匂わす。

The Fall

1976年、マーク・E・スミス(Vo)、マーティン・ブレイマー(G)、トニー・フリール(B)の3人組としてマンチェスターで結成されたのだが、トニーは後に脱け、マーク・ライリィー(B)、と女性イボンヌ・ポーレット(key)、カール・バーンズ(D)、が加わり5人編成となる。78年に、ステップ・フォワードと契約し、ファースト・アルバム『ライブ・アット・ザ・ウィッチ・トレイル』というタイトルとは裏腹のスタジオ録音のアルバムを発表。79年末にはセカンド・アルバム『ドラグネット』を発表。初期のパンク・ロックのあらゆる部分を生のまま継承したかのような音。80年になると、ラフ・トレードと契約し、今度のは本物のライヴ・アルバム『トータルズ・チューン』を発表。79年10月から80年2月の間に行われたライブ録音。サイケデリックだがエレクトロニクスによるものでないところが面白い。

Last Words

メンバーはマルコム・バクスター(Vo)、アンディ・グルーム(g)、レイ・ケンドール(b)、ジョン・ガン(d)、の四人編成である。バンドの起こりは1972年、ハイスクール在学中にアンディとマルコムの組んでいたバンドにある。その後、彼らは多くのバンドを経て、77年8月、彼ら自身のレーベル、リマンド・レーベルから「アニマル・ワールド」をリリースするに至る。さらに79年6月、新しくレイ、ジョンを迎えラフ・トレードでレコーディング。彼らは、それからもロンドン周辺、郊外でギグして回ったり、ドイツ遠征等をして、1979年11月半ばニュー・シングル「トゥデイズ・キッズ」がラフ・トレードを通じてリマンド・レーベルから発売となるに至る。

Essential Logics

エッセンシャル・ロジックスの結成者、ローラ・ロジックは過去、X-Ray Spexに在籍した後、78年夏、自身のグループを結成する。しかし、結成後もローラは個人でストラングラーズやレッド・クレイオラのレコードやステージに参加しているなど、活発で精力的な動きも見せる。78年末、ラフ・トレードより ファースト・シングル『Aerosol Burns』を発表。が79年にはヴァージンに移籍し、『Wake up』の4曲入り12インチEPを発表する。ところが、その後また、ラフ・トレードに移籍し、3枚目のシングル『Pop corn Boy』、79年末のファースト・アルバム『Beat Rythm News』発表に至る。メンバーは5人編成でローラ・ロジック(Sax, Vo)、マーク・ターナ(b)、デイヴ・ライト(Sax)、リッチ・ティー(d)、アシュリー・バフ(g)、ローラ個人のグループとも言える程、彼女によるサックス、ボーカルがそのままグループ自体の個性にもなっている。

Spizzenergi

スピッツは当初スピッツ'77というバンド名で77年8月のバーバレローのパンクフェスティバルでデビューした。ボウイのナンバーを好んで演奏していたのだが78年になると、北海油田開発にちなみスピッツ・オイルとバンド名を変える。メンバーはスピッツとペイト・パトロールである。その後、ラウンドハウスでスージー&ザ・バンシーズとのギグがきっかけとなりジョン・ピールの番組出演、バンシーズのツアー同行など様々のチャンスを得る。そして78年秋、ラフ・トレードから最初のシングル「6000クレイジー」が発売、ヒット・チャートにも入る。これはLP、「コールド・シティー：4」に収められている。79年に入るとスピッツ・オイルは解散となるのだが、次にスピッツはハハ・ジャームスのメンバーと共にニューバンド、スピッツ・エナジーを結成する。メンバーはマーク・コールフィールド（ピアノ）、ジム・ソラー（ベース）、ピート・ハイド（ギター）、である。79年春になると、ギタリストに元バンド・オブ・ドレスデンのデイブ・スコットを加え、セカンド・シングル「ウェアーズ・キャプテン・カーク」をラフ・トレイドから発売する。なお、この曲は「スター・トレック」のテーマに使われていることでも有名である。彼らは、80年になると、バンド名を「アスレチコ・スピッツ・80」と改名し現在に至る。

Delta Five

メンバーはアラン（ギター&ボーカル）、ビーザン（ベース&ボーカル）、ジュルツ（ベース）、ケルブ（ドラム&ボーカル）、ロス（ベース&ボーカル）という女3人、男2人の5人編成による。リーズに本拠をおく1979年8月にファースト・シングル「マインド・ユア・オウン・ビジネス」をラフ・トレードより出したばかりの新人バンド。グループは態度といい、音といいメーコンズやギャング・オブ・フォーと巣を同じにする。

Kleenex

メンバーはレギュラ・ズィンク(Vo)、マレーネ・マーダー(g)、クラウディア・シク(b)、リズロット・ハー(d)、の四人編成。1979年11月、彼らはサンライズ・レコードからEP盤でデビューした。スイスのバンドなのだが、初回プレス1,000枚は、すぐ売り切れてしまった。そこでラフ・トレードは、オリジナル一曲の「エイント・ユー／ヘディーズ・ヘッド」をシングルとして発売。1979年5月には同レーベルのザ・レインコーツ、スピッツ・エナジー、クリーネックスらの合同ツアーがラフ・トレードにより行われ、一大センセーションを巻き起こした。サウンドは澄んだきめの細かいものに、バックの狂的な金切り声が響くというものである。その後、シングル「You/U」がラフ・トレードにより発売されている。



The Monochrome Set



白黒テレビのライセンスをグループ名にした「モノクローム・セット」は、78年にヴォーカルとリズム・ギターのビドとギタリストのレスター・スクウェアの2人によって結成された。

ビドとレスターの2人は、マイナー・レーベル・アルバトロスから数枚のシングルを発表しているパンク・バンド、アート・アタックのドラマーであったJ・D・ヘイニーを誘い、そしてレスター・スクウェアの在籍していた、アダム&ジ・アンツのベーシストであったアンディー・ウォーレンを引き入れて，同年4月にデビュー・ギグを行った。

このモノクローム・セットの特徴は、モノクローム感覚に満ちたサウンド志向にある。ステージでは、5人目のメンバーとしてフィルム・メーカーのトニー・ポッツが加わり、視覚的な部分で、大きな役割をはたしている。

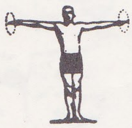
彼らは、ギグを重ねる一方で、先鋭的で最も注目されている、マイナー・レーベルのラフ・トレイドと契約を結び、79年の1月にデビュー・シングル“Alphavllle, ／He's Frank”を発表。地味ではあったが、ハード・パンクが風を切っていた当時のロンドンロック・シーンの中で異彩を放った。

このデビュー・シングルを発表した後、4日には“Eine Symphonie Des Grauens／Lester Leaps In”、9月に“The Monochrome Set／Mr・Bizzarrd”そして12月に、ラフ・トレードとの契約の切っ採けとなったデモ・テープをセレクトしたシングル“He's” Frank Slight Return/Slic On Carne／Fall Out”をたて続けに発表し、モノクローム・セットの名を不動のものとした。

この4枚のシングルを発表した彼らは、ュートしているディン・ディスク・レーベルと契約を交し、80年4月に通算5枚目のシングル“The Strange Boutipue/Surbing S.W. 12”を発表。続いて5月にはデビュー・アルバムSTRANGE BOUTIQUE”を発表した。

ラフ・トレード時代のシングルのインパクトがあまりに強烈だったためか、このアルバムの評価は一般的にきびしいものであったが追いうちをかけるように10月には、早くもセカンド・アルバム“LOVE ZOMBIE”を発表した。

Barracudas



バラクーダーズは英国唯一のサーフィンバンドであるが、1978年1月の結成当時はR・A・Fとして知られていたが。が、春までにはスタンドルズソングの名にちなみバラクーダーズとなった。1979年には最初のシングル「アイ・ウォント・マイ・ウッテイ・バック」を発売。ロンドンパンクとサーフィンの合成品のようなサウンドである。メンバーは、ロビン・ウィルス(g, Vo)、ジェラミィ・クラーク(Vo)、デビッド・バックレイ(b, Vo)、ニッキー・ターナー(d, Vo)である。

Liliput

スイス出身のリリプットは、女性4人によって構成されている。メンバーはギターのMarlene Marder, ドラムのLislotha, ベースとヴォーカルのKlaudia Schiff, ヴォーカルのRegula Singである。78年にラフ・トレードと契約し、ファースト・シングルにあたる「Ain't You」を発表。プロデュースは、E. Conodであった。セカンド・シングルは翌79年に同じくラフ・トレードから「You」と題して発表されたが、こちらの方はグループ自身でプロデュースしている。このセカンド・シングルと同時に、彼女達はイギリスへ渡り、レインコーツ（同じくラフ・トレードのアーティスト）らとコンサートを行った。これによって彼女達はイギリスでの人気を決定付けてしまったようだ。ポップなメロディー・ラインとシンプルな演奏が下手ながら評価を得ている。



Red Crayola

レッド・クレイオラは現在ではバンドというよりは、ひとつのプロジェクトとして機能しているといってよいだろう。それは、メイヨ・トンプソンを中心としたプロジェクトである。

アメリカはテキサス州ヒューストン出身のメイヨ・トンプソンは、1966年に9ヶ月ほどのヨーロッパ留学を終え故郷のヒューストンに帰ってきた。そこでメイヨはリック・バーセルミという友人を誘いバンドを結成したのである。バンドはメンバー移動が激しく、2人の時、3人の時、6人の時などいろいろな状態で続けられた。そして、正式に3人目のメンバーとして加わったのがスティーヴ・カニンガムであった。こうして、最初のアルバム“PARABLE OF ARABLE LAND”を67年に発表。ついで、メイヨ＝カニンガムにトミー・スミスという編成で68年春“GOD BLESS THE RED CRAYOLA”を同じくテキサスのローカル・レーベル、インターナショナル・アーティストから発表している。これらは後に英レイダーから再発されている。しかし、当時は成功を得られずに、メイヨはテレビ技師として働くようになった。そして、70年には再び音楽活動を始め、ソロ・アルバム“CORKY'S DEBT TO HIS FATHER”をテキサス・リヴォリューション・レーベルから発表した。

72年になるとメイヨはニューヨークへ行き芸術家集団アート&ランゲージに加わり、彼らのために音楽を書くなどの活動をした。76年にはロンドンに渡り、レイダー・レコードとコンタクトを持った。そして、そこでレッド・クレイオラを再び甦がえらせるべく、78年初め、ニューヨーカーで元ハリー・トレド&ザ・ロケットやネセサリーズにいたドラマー、ジェシ・チェンバーラインと組んで活動を始めたのである。新生レッド・クレイオラは、KrayolaからCrayolaへと変わっている。

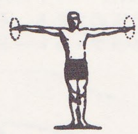
78年5月、メイヨは、2度目のイギリス、ヨーロッパ公演を行なっていたアメリカはクリーブランドのバンド、ペル・ウブとロンドンで初めて出会い、意気投合したのである。78年10月には新生レッド・クレイオラによるシングル“Wives In Orbit”を発表、続いてアルバム“SOLDIER-TALK”をレイダーから発表しているが、このレコーディングにはペル・ウブのメンバーやローラ・ロジックが参加しており、ウブ／クレイオラのプロジェクトが生かされた作品が作られることになった。そして、11～12月にかけてメイヨとジェシはペア・ウブとソフト・ボーイズとともにツアーを行なった。また、この頃、メイヨはラフ・トレードのジェフ・トラヴィスとも共同で作業を行なうようになり、スティッフ・リトル・フィンガーズやモノクローム・セットのプロデュースを手掛けている。

79年3～4月はエッセンシャル・ロジック、スクリッティ・ポリッティとツアーを行ない、同年10月には再び模様替えしたレッド・クレイオラによる12インチEP“Micro Chips & Fish”をラフ・トレードから発表している。ここでのクレイオラは、メイヨ(ギター、ヴォーカル)ローラ・ロジック(サックス、エッセンシャル・ロジック在籍)ジナ・バーチ(ベース、レインコーツ在籍)エピック・サウンドトラックス(ドラムス、スウェル・マップス在籍)という編成である。以後、現在までこの編成によるレッドクレイオラ・プロジェクトを続け、80年秋にはシングル“Born In Flames”を発表し、近々アルバムの発表も予定されている。

また、メイヨ・トンプソン個人としては、80年ペア，ウブのパーマネント・メンバー・として正式に加入をしている。

Athletico Spizz 80

ラフ・トレード時代はSpi22 Oil, あるいはSpizzenergiと名乗っていた彼らは、現在はAthletico Spizz '80と改名して活動している。この名のものに最初のLPを制作ラフ・トレードを離れ、このところワズモ・ナリッツ、オインゴ・ボインゴといった極ものをものにしているA&Mに移籍先頃アルバムをリリースした。ラフ・トレード時代のヒットは“Wheres Captain KirK”がある。



The Slits

現在はラフ・トレードを離れたが、スリッツもアイランドから移籍して一度はラフ・トレードに身を置いたバンドである。ラフ・トレードからはオフィシャル・ブートレッグが一枚リリースされている。オフィシャル・ブートレッグとは、必ずしもミュージシャンがレコードにする事をプッシュしていないテイクを庸価で発売するというもので、ポップ・グループのウイー・アー・タイム、ゼスリックのこのLP等、ジャケットも無地かコピーを貼りつけただけの装丁、内容ともにラフなもので、一種のドキュメントといえよう。特にスリッツの場合は1作目からは想像できないほど、アナーキーな音盤であり、アフリカに強く傾斜したプリミティヴさに於てアヴァン・ギャルドであり、ノイジーさに於てはインダストリアル・ミュージックを想わせる。彼女らは現在、西ドイツのドキュメント映画「ウーマン・イン・ロック」の撮影を進行中である。

Pere Ubu

ペレ・ユビュは既に３枚のＬＰを制作しているが、４作目の"The Art of Walking"からラフ・トレードに移籍した。クリーブランド、オハイオから出現したペレ・ユビュは同じくオハイオのディーボと同時期に紹介されたグループであるが、ディーボの成りゆきとは対照的に当初のヴイジョンを地味地に拡大、展開、発展させて今日に至っている。その音楽性の高さや存在のインパクトの大きさは、例えばレジデンツと並んでレコメンデド・レコードで紹介されている事、又、カルフォルニアのハード・パンク・グループ、デッド・ケネディーズのボーカリスト、ジェロ・ビアフラのサンフランシスコ市長選挙立候補がユビュのギグに刺撃された発作的なものであったというような一例によってもうかがえる。ユビュの４作目"The Art of Walking"は前作"New picnic in Time"の延長線上にあるが、ユビュは"ニューピクニック・タイム"あたりから明確にパワーを増した。そして前２作が"ダンス"に収斂してゆくものであるとするならば、現在のユビュは、よりフリー・ミュージックの形態へと拡散している。といってあいかわらずヴァレーズの"デザール"を想わせるような、不条理でディスポーザブルな工業的風景を内乞したヴィジョンは変わっていない。この作品からユビュと密接な関係にあったレッド・クライヨラのマヨ・トンプソンが正式にメンバーに加入している。

ラフ・トレード・レーベル

現在英国には1,000にもおよぶスモール・レーベルが存在するという。76年２月にジョフ・トラビスとケン・ダビットソンの二人の手によって設立されたラフ・トレードもそうした数あるスモール・レーベルの一つとして活動を始めた。しかしながら現在、商業的利益はともかくも知名度は、こうした自主制作レコード会社の中でも群を抜いて高まっている。英国のオルターネーティブ・チャートの上位の大半をしめるのもこのレーベルのものであるし、何よりもポップ・グループ、スリッツ、そしてペル・ユビュといった影響力のあるグループの大手レーベルからの移籍という事実から察せられるように、ミュージシャンにとっても魅力的なレーベルに成長している。それは、ラフ・トレードが事実上の「インデペンデント」というポリシーを設立当初から貫通している為であり、レコード会社とミュージシャン、商品と音楽のバランスが良い状態にある為である。今回日本でラフ・トレードのレコードがトリオから紹介される事になったわけだが、聴者にとっては商品としての音楽が問題である以上、こうしたインデペンデント謂ということは無関係なのであろう。こうした事はミュージシャン当者の問題であるのだろうし、バンシーズなどは新人バンドに対してラフ・トレードと契約して徴々たるシングルをプレスしないように申告している。ヒップ・キャピタリストはどこにでもいるのだから。要は英国やその他の場所でインデペンデント・レコード制作者たちの良い前例にラフ・トレードがなれば幸いであるという事である。特にこの日本で。我々はレコードに接する事が音楽に接することであると同時に商品の物質代謝の一端に接している事を知っている。



オランダ・ロック・シーン再考

――グルッポ・スポルティヴォ　ハーマン・ブルード――

羽積　秀明



近すぎた英国

〝大英帝国はあまりに近すぎた。〞これは、イギリスの向い側に位置しその国土の¼を海抜下に持つ小国オランダを考える時によく言われる宿命的な命題である。世界の一大中心地ロンドンから、たった 300マイル程しか離れていないこの国では、ロンドンの最新情報などが、あたかも国内の出来事かのような速さで伝わる。それはイギリス国内の田舎よりもかえって早いくらいだという。この地理的条件は、ヨーロッパの窓口と言われるオランダの利点であり、また同時に弱点でもあった。それは、この近さ故に、新しい物がその国の判断、消化を経てに国全体に浸透してしまうという意味である。これはロックにおいてもやはり同様と言える。この国のロック・シーンはもはやイギリスの影響無しでは考えられないものになっている。イタリア、フランス、ドイツのロック・シーンがそれぞれ持っている独自のオリジナリティーと較べて、オランダ・ロック・シーンというイメージはあまりに希薄である。しかし、それはオランダにとってかならずしも悲観的な材料とはならなかったようだ。なぜならブリティシュ・ロックに通じていたオランダ・ロックはアクの強すぎた他のヨーロッパの国々のそれよりは、ずっとインターナショナルなロック・スターに浮上できる可能性が高かったからだ。これは彼らにとって果たして幸福であったのが不幸であったのか、それは誰にもわからない…。

オランダ・ロック・シーンの概要

オランダ・ロックを歴史的に大別すると三つの時期に分けることができる。その1つは60年代後半から起った、ショッキング・ブルー、アース＆ファイアー、ゴールデン・イアリングらを中心とする〝ダッチ・サウンド〞の隆盛である。それ以前、つまり60年代半ばまでのオランダでは、チャートの殆んどが英米のアーティストに独占されており、自国のものはまったくの不毛であった。が、67～68年頃からショッキング・ブルーが国内チャートに進出し始め、その触発もあってかアンダー・グラウンドな活動を行なっていたゴールデン・イアリングが浮上、そしてアース＆ファイアー、ジョージ・ベイカー・セレクション、ティー・セットといった有望グループの登場でオランダはにわかに活気づいたのであった。さらに〝ヴィーナス〞(ショッキング・ブルー)、〝シーズン〞(アース＆ファイアー)等の英米のチャートをも制した名曲の発表で〝 ッチ・サウンド〞は世界的なムーヴメントにまで発展したのである。この時期のサウンドの中心は解り易いメロディアスなフレーズに、いかにもヨーロッパ然として、大陸的なおおらかさや哀愁を盛り込んだ良質なポップであると言えるだろう。これはオランダ第二期の隆盛となるプログレッシヴ・ムーヴメントに相通じるところが多かったのだろう。70年代に入りイギリスでプログレッシヴ・ロックが台頭すると、オランダもそれ一色に転換したのである。事実、第一期の連中の幾つかはそのまま継続して君臨した。時にアース＆ファイアーの〝Song For Marching Chirdler〞以下のアルバムにおける完成度は白扉であるし、ゴールデン・イアリングや元ショッキング・ブルーの結成したギャラクシー・リン等も活躍した。しかし、何と言っても超目玉はレディング・フェスティバルの成功から世界と制するまでに至ったフォーカスの登場であろう。さらにはエクセプションを経たトレースやカヤック、ソリュージョン、フィンチ、クリス・ハインズ・コンビネーション、そして後に詳述するスーパー・シスターらが中心となり華やかな展開をみせるのである。しかし当然のことながら、イギリスにニュー・ウエイヴの大波がおしよせた時、オランダも追従することとなる。それはグルッポ・スポルティヴォ、ハーマン・ブルード、メテオスらが第一線を飾ざる現在、すなわち、第三期のオランダなのである。



R.J.ステップスそしてハーマン・ブルード

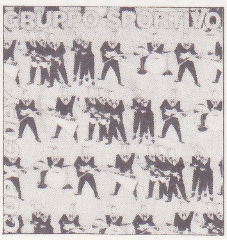
本来であれば各々のグループに詳しいコメントを付すべきであろうが、スペースの都合で許されないのでそれは次の機会に譲るとして、ここでは2人の典型的かつ対称的な人物について述べ、オランダという国を再考するにとどめたい。その2人とは元スーパー・シスター、ゴールデン・イアリングのロベルト・ヤン・スティップスと第三期の旗頭ハーマンブルードである。第一期から第二期への世代交替において、幾つかのアーティストが生存を続けたことは前に述べたが、第二期から第三期の移行においてその顔ぶれはまったく変っている。ニュー・ウエイヴは過去のすべてを精算し再構築を計るという性格を持っていたからである。しかし、ここに例外的な男が一人いる。ロベルト・ヤン・スティップスである。彼は1950年にハーグの実家に生まれ、音楽学校で10年の クラシック教育をうけた。彼がその間に学んだことは『僕の学んだことは全て間違いである。(R.J)』ということを知るのみだったという。20才の時にソフト・マシーン、マザーズ・オブ・インベンションの影響を強く受けたグループ、スーパー・シスターを結成し5枚のアルバムを発売、かなりの成功を収めるが最後の作品のエルトン・ディーンをメンバーに迎えた「Spiral Starcase」でサウンドがフリー・ジャズ化しすぎたため解散。彼はゴールデン・イアリングの2枚のアルバムに参加するが、これにも失望し脱退。この時、彼は『あまりに複雑化したロックは再びシンプルなロックン・ロールに戻ること(R.J)』を痛感したという。彼のこの考えはグルッポ・スポルティヴォのプロデュースという形で具現化される。それはもはや古い世代の人間となった自分の限界を知っていたR.J.の賢い選択であった。しかもグルッポ・スポルティヴォが芸術的見解の相異から一時活動を休止すると、グループの中心人物ハンス・ヴァンデンブルグのソロという形式ではあるが、バディ・オドール・ストップというグループを結成させ、さらに自らもメンバーとして加わり自分の長い経験で得た全てを教え込んだ後に、再びグルッポ・スポルティヴォをスタートさせるという徹底した教育を行なうのである。こうしてR.J.から一人立ちした彼らの新作〝コピー・コピー〞をぜひ聞いて欲しい。そこには完成されたサウンドがあり、R.J.の執念とも言える真のロックン・ロールがある。しかもR.J.は今度は自らTransisterというグループを作り、愛弟子グルッポ・スポルティヴォに挑戦するという、ロック版〝巨人の星〞を演出しようとさえしているのである。

一方のハーマン・ブルード　彼はR.J.とは逆にアナーキーな青年期をすごした。少年院ドラッグ、刑務所この繰り返しの中で、ロックン・ローラーとしての彼は形成された。1976年ワイルド・ロマンスを率いて登場するや、またたくまにスーパー・スターの階段を昇りつめた彼のサウンドには、野性的というよりはむしろ実に知的な大人臭さと、真剣に音楽と取りくむ男の姿が感じられる。それを実証したのが今年になってのワイルド・ロマンスの解散と〝ウエイト・ア・ミニット〞の発表である。人気絶頂にあったワイルド・ロマンスとの訣別はまさに予想だにできないことであったが、数段にもグレード・アップされた〝ウエイト・ア・ミニット〞を聞けば、その新たな挑戦が、ワイルド・ロマンスという一定の人気を得てしまったグループにおいては成し得ないものだということが充分に納得できるだろう。面白いことに、グルッポ・スポルティヴォ、ハーマン・ブルードともイギリスでのレコード・セールスはもう一歩なのである。それは彼ら2人がイギリスという巨大なプリズムを経つに、自己の中に形成されたロックン・ロールというプリズムを通過してきたためだからなのではあるまいか。この2人の試行は果たしてオランダ独自の第4期を導びくものなのだろうか。それとも再び〝もう1つのイギリス〞としての第4期が訪ずれるのだろうか。それは誰にも解らない。最後にもう一度問おう。〝近すぎた英国〞は彼らにとって果たして至福でちったのか、それとも救いようのない悲劇であったのか。





ハーマン・ブルードとそのニュー・アルバム



グルッポ・スポルティヴォ(左下)とニュー・アルバム「コピー・コピー」(左上)。(下)はR.J.の新グループ、トランジスターのメンバー





——不死鳥の如く甦った——

イタリアの栄光OSANNA!!

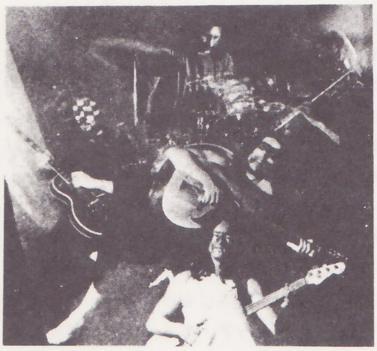
キング・クリムズンがデビューを飾った翌年、そうしたムーヴメントは、イタリアでも蘇生を始めていた。そんなイタリアン・ロック界の中でも、唯一無二の'異端児'は、5人の若者達によって〈OSANNA〉と名付けられた。

—— 高石源太 ——

イタリアン・ロック史上、最もその存在感が大きいのは、まぎれもなくこのオザンナであろう。彼らはそれほどまでに、オリジナリティーに富んだ、偉大な功績を残した。誕生し、解散、そして再編するまでに到る、オザンナの歩んだ壮大なドラマは、たったこれだけのスペースの中にとても言い表わせるものではないのです。

図I——戦前からあった2つの会社が合併して設立されたイタリア国営会社フォニット・チェトラ・レーベルより1971年発表された、記念すべき彼らのファースト・アルバム**「ルオモ」**は、当時のイタリア音楽界の中ではそれまでの一般の通念をはるかに超えた作品でした。両サイドすべて、つなぎ目なしのトータル・アルバムであったことも斬新でしたが、ロック、ジャズ、民族音楽といったジャンルを問わない内容は、彼らの高度なテクニックに支えられて、ヘヴィで美しいオザンナ独特の世界を創出しています。ジャケットが、壁に掛けて飾れるように三っ折になっていて非常に凝ったものでした。

図II——セコンド・アルバムは、サントラに使用された**「ミラノ・カリブロ・ノバ」**というタイトルであり、現代映像芸術の極致といえるくらいの素晴しいジャケットにも一見の価値はありますが、そんなジャケットの世界に、のめり込んでしまいそうなサウンドは無気味なシンセサイザーの音によって壮大なドラマの幕が切って落とされます。ルイス・エンリケリス・バカロフ指揮（『荒野の用心棒』等の伊映画音楽で有名）によるシンフォニック・オーケストラの、大海の唸りを想わせる様な美しいストリングスの音色が徐々に重ねられてゆき、その上から引き裂くようにオザンナの暴力的な演奏が被さってゆく様は、すさまじく、とても筆舌する事などは不可能なほどです。T・S・エリオットの文学世界を見事に音楽化したこの作品は、全世界のロック・アルバムの中でも歴史的名盤として後世に受け次がれてゆくことでしょう。



オザンナはキッスの元祖？

図III——サード・アルバム**「パレポリ」**に関して言えば、「ミラノ・カリブロ・ノバ」がクラシカルな要素が大部分を占めていたのに対して、ジャズのエッセンスが強く打ち出されています。演奏面ではメロトロンの大幅導入によって、前作にも増してより一層スケールが大きくなっていることもさることながら、人間社会の在り方を根底から皮肉った詩が圧倒的に素晴しい作品となっています。オザンナの中で、どれか1枚を選べと問われたら、このアルバムをかかげることでしょう。どことなく「リザード」の世界に似ているなァ！と思うのは私だけなのかな？

図IV——フォース・アルバム**「ランドスケープ・オヴ・ライフ」**は、彼らとしては初めて英詩を使うなどして、インターナショナルな線を狙ったようですが、内容として何かひかる部分に欠けるような気がするのは、なぜでしょうか。しかし、これはオザンナだからこそこれだけ厳しい評価を受けるのであって、決して水準以下の作品ではないことをここで断わっておきます。このアルバムのリリースと殆んど時を同じくして、悲しいことに、オザンナは長い眠りについてしまいます。

しかし、素晴しい2つの分家グループ、**ウーノ**と**チッタ・フロンターレ**を生み出しました。

図V——ヴァイレッティとグアリノは、4人のジャズ畑の実力派を加えて、**チッタ・フロンターレ**を結成しました。アルバム**「エル・トール」**は、オザンナの曲をクロス・オーバー風に演ったようなサウンドで、決定的な魅力に欠けるようです。

図VI——ド・アンナとルスティシと、オザンナ・フォースアルバムでパーカッション担当のヴァリチェッリによって**「ウーノ」**は結成されました。彼らのアルバムでは、ピンク・フロイド等で有名な女性ヴォーカリスト—リザ・ストライクも参加しています。サウンド面ではオザンナの暗く無気味なイメージがまったく感じられず、(それがオザンナの魅力だったようですが）とにかく美しくファンタジックな素晴しい演奏を聴くことができます。ウーノとしてはたった一枚の作品しか残しませんでしたが、この一枚は、イタリアン・ロック十指に入る名盤でしょう。

OSANNA

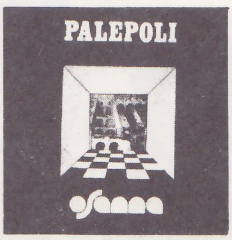
I



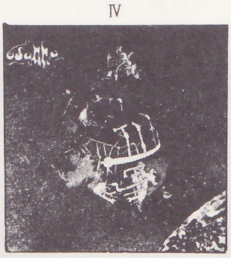
II



III



IV



X



図VII――ウーノは、ロンドンで録音を行なうなどして英国進出を計り、1975年、新たに**NOVA**（〝新生〟という意味）とグループ名を改め本場イギリス・ロック界へ、殴り込みをかけました。英アリスタより、ファースト・アルバム「**ブリンク**」を発表、**クォンタム・ジャンプ**のルパート・ハインによるプロデュースでした。サウンドは、やはりブリティッシュナイズされた、クロスオーバー風に変ってきてしまいましたが、セールスを上げるうえでは一応の成功を収めたようですし、アルバムの出来としては決して悪いものではありませんでした。

図VIII――セカンド・アルバム「**ビマナ**」には、ロビン・ラムレイ（ブランドXのキーボード）とジェリー・スミスの名コンビがプロデュースにあたっています。ギターが、ダニロと実の兄弟であるコラド１人になってしまいましたが、**ニュートロールス**（これもイタリアのグループでオザンナと並び大御所）のキーボード・プレイヤー、レナト・ロセットが正式メンバーとして加入しました。**マハビシュヌ・オーケストラ**のナラダ・マイケル・ウォルデンがドラムスに、**ブランドX**のパーシー・ジョーンズがベースに、パーカッションには、**ジェネシス**、ブランドXのフィル・コリンズがクレジットされています。これだけ素晴しいメンバーを集められる事実は、英国においてノバの評価がいかに高いかが伺われます。音の方は、勿論透き通った見事なサウンドです。



――このアルバムのあと、元キャラバンのベーシスト、ジョン・G・ペリーのソロＬＰに、マイケル・ジャイルズ等と一緒に、ド・アンナ、ルスティシが参加しています――

図IX――ノバのサードアルバム「**ウィングス・オヴ・ラヴ**」では、**ＩＢＩＳ**（イタリア幻のグループ）、**アトミック・ルースター**を経たドラマー、リック・パーネルまでも名を連ね、オザンナ＋ニュートロールス＋ＩＢＩＳといった具合に、恐しい混合グループとなりました。内容に関しては、ノバとしては最高傑作と見ています。最近の英グループのものよりは、遙かに出来のいい作品といえましょう。

同X――オザンナの流れを汲む唯一のグループ、ノバは、やはりブリティッシュナイズされたサウンドに変化していってしまいました。そして、もうあのオザンナ節ともいえる魅力あるサウンドを二度と味わうことができないと思うと、寂しさはかくせないところでした。

ところが、オザンナが解散して４年が経った頃、どこからともなく風のたよりで、オザンナ再編の噂を耳にした時は、そうであってほしいと願いながらも、正直言って、信用していませんでした。

だからこそ、今、この「**サッドダンス**」を手にしているこの感激は、本当のイタリアン・ロック・ファンなら誰しもに判ってもらえる筈です。

とにもかくにもオザンナは本当に再編してしまったのです。そう、不死鳥の如く甦ったのです。

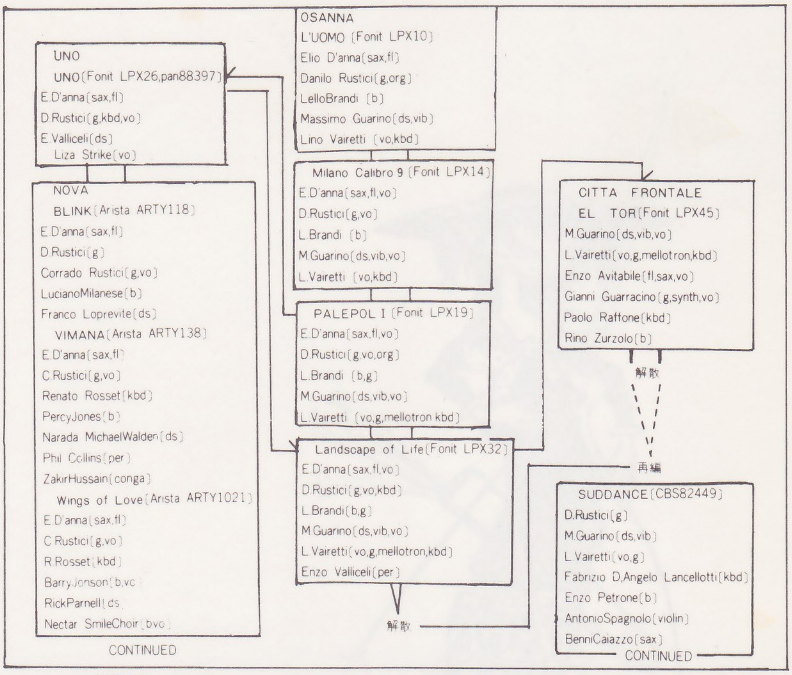
オザンナは、1978年、新しく甦ったその年に、イタリアン・グラミー賞の最優秀グループに選出されました。

イタリアのロックなんて、本質のない、ただのめずらしさだけとの妄評やアングロサクソンへのコンプレックスは、そろそろなくなってきてもいい頃でしょう。今や本場ブリティッシュ・ロックの手本となるようなアーティスト達がヨーロッパ各地から生まれ育ってきているように、ユーロ・ロック・ファンの果てしなき夢を乗せて、オザンナは、世界へ向かって、今！翔きはじめたのです。

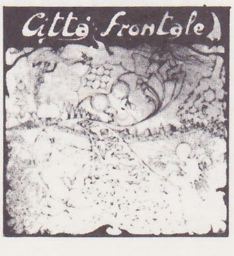
《インフォメーション》

「サッドダンス」オザンナは、今年暮、エピック・ソニーより発売予定です。来年初頭には、キング・レコードより待望のユーロ・ロック・シリーズとして、オザンナも組み込まれているとのことです。

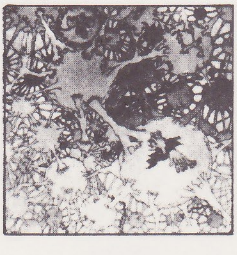
※資料協力に当って、エピック・ソニー斎藤氏、キングレコード藤崎氏、に深く感謝致します。



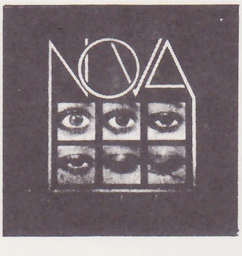
CITTA FRONTALE V



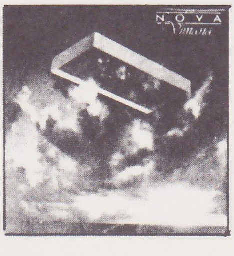
UNO VI



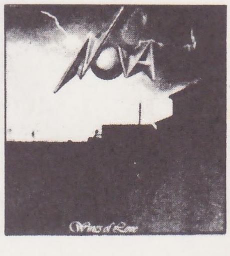
NOVA VII



VIII



IX

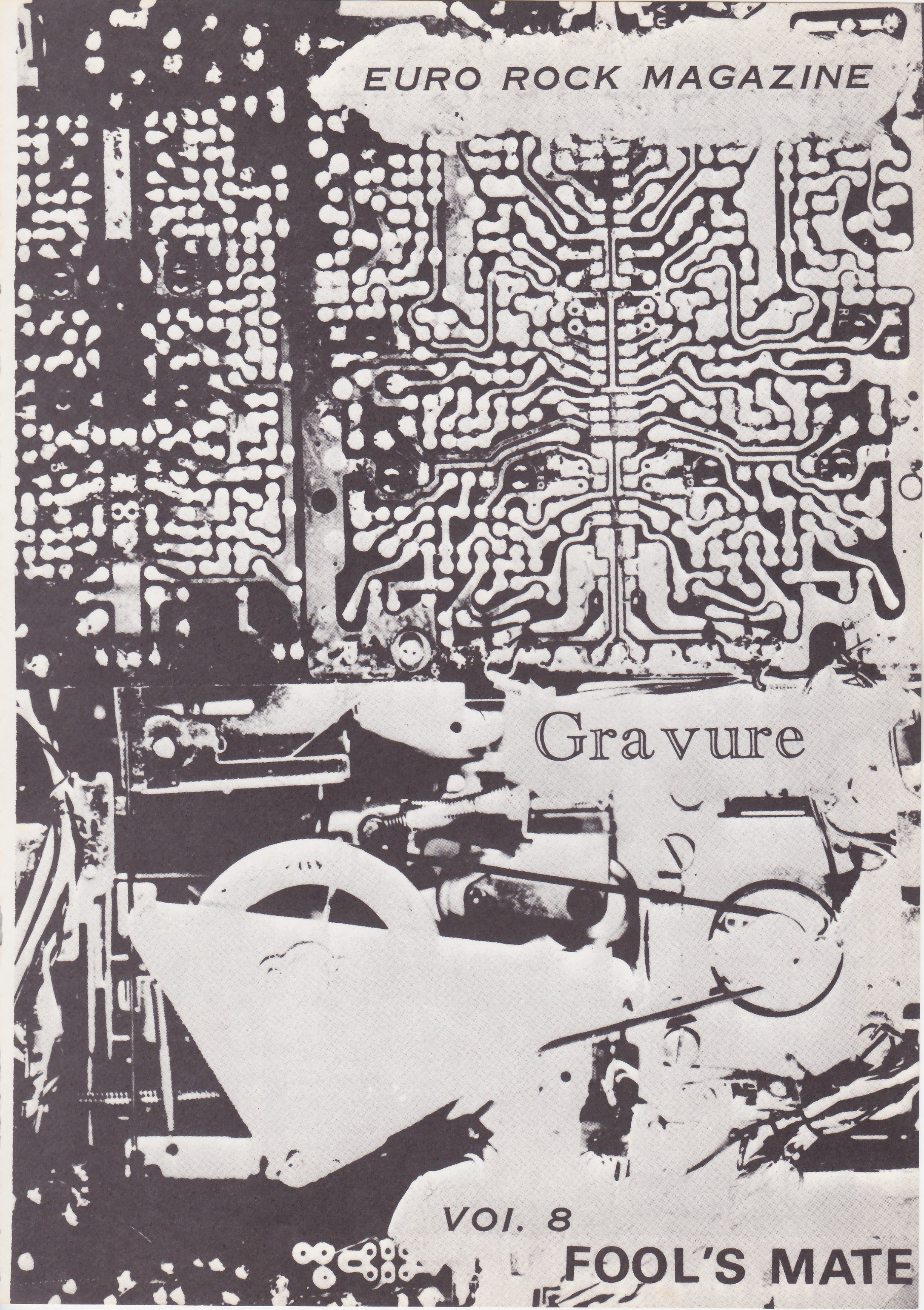


My baby don't go to high school
My lady, she has a kid
She works real hard
Washing down a toil
Sweating like a pig
My baby, she's not high class
She's bouncing in a tank car
She moaned and groaned
A long time alone
Loading cargo in the dark

She's a workin' girl
She's a workin' girl






EURO ROCK MAGAZINE
Gravure
VOl. 8
FOOL'S MATE

Una Donna Per Amico by Lucio Battisti

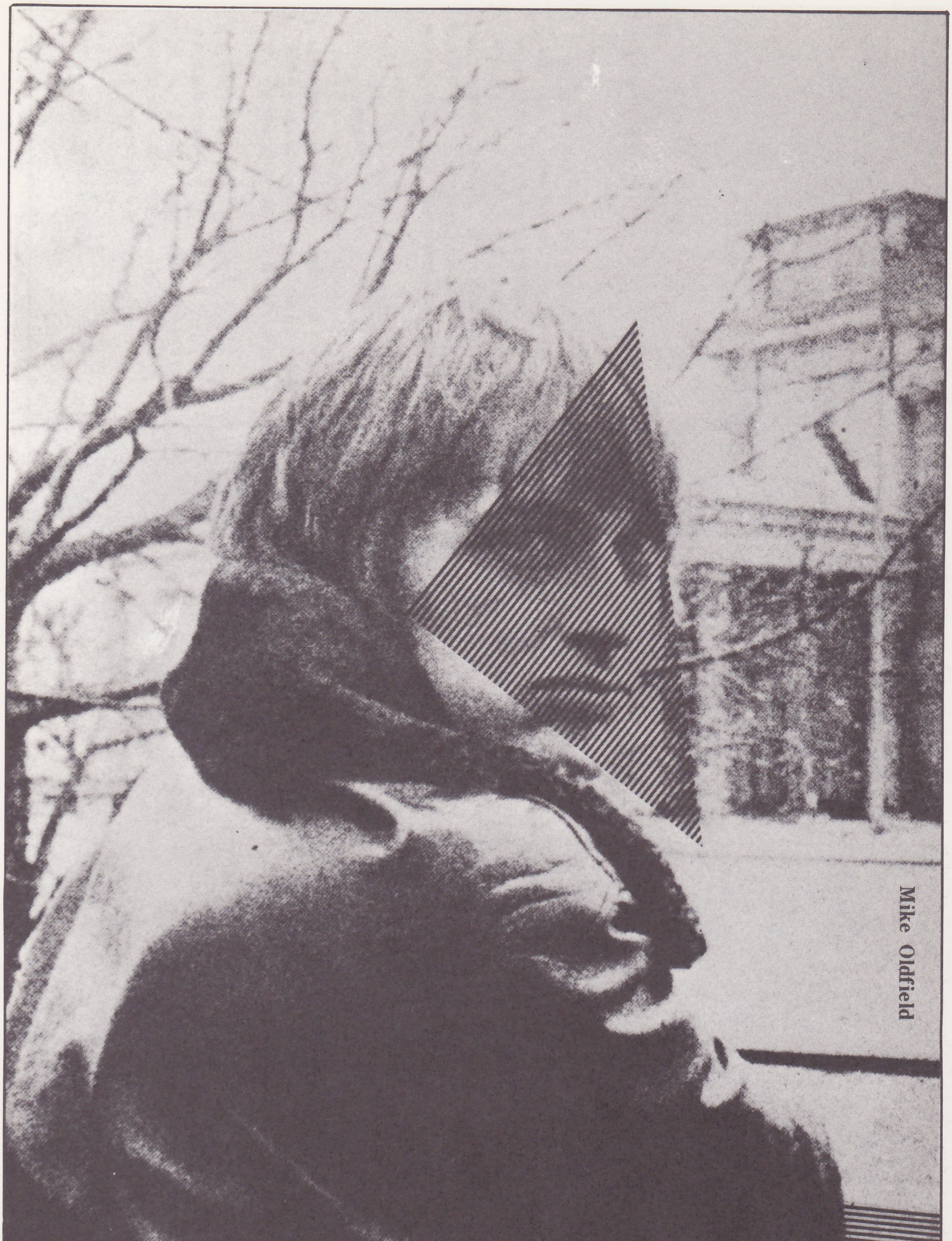
もしかしたら
自分がわからないのかもしれないけど

君を、友としての女を見つけても
僕の仕事は人生を、全ての日々を
あるいは誰も知らない人生を生きること
君を愛してる　強く
教え、教えられる　弱い友を

パンクしないタイヤなんてありはしない
糊は　僕の親友だ
僕は不名誉な布片
君を愛してる　強く
教え、教えられる　弱い友を

夢中になっているのだろうか
そう、少しね
君にくらべて僕はちょっと惨め
ヤキモチはいけない
僕のしたいことを　君は知ってる
僕を止めることなんて　できないさ
悲しくない
君はいつだって　笑顔





Mike Oldfield

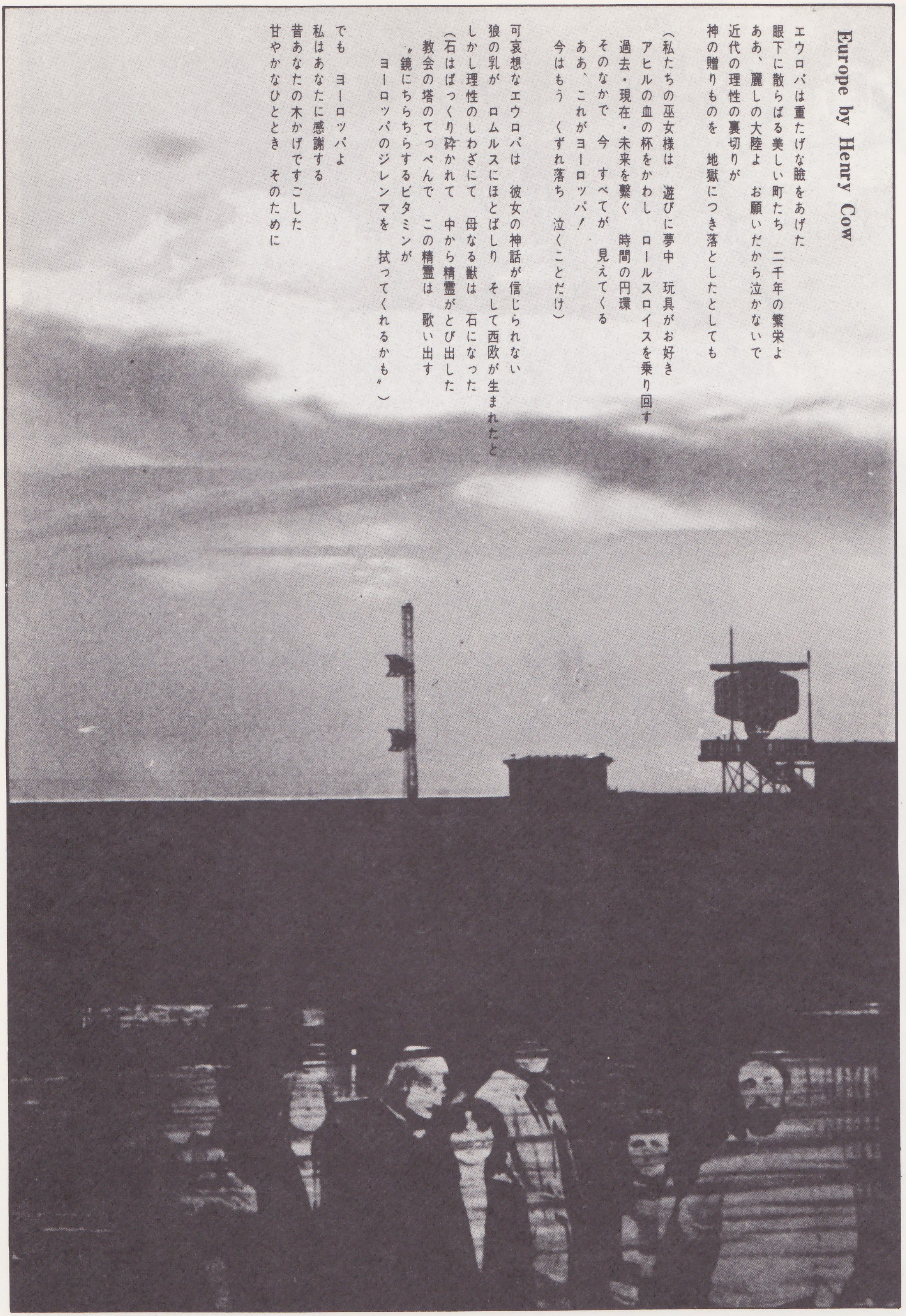
Europe by Henry Cow

エウロパは重たげな瞼をあげた
眼下に散らばる美しい町たち　二千年の繁栄よ
ああ、麗しの大陸よ　お願いだから泣かないで
近代の理性の裏切りが
神の贈りものを　地獄につき落としたとしても

（私たちの巫女様は　遊びに夢中　玩具がお好き
アヒルの血の杯をかわし　ロールスロイスを乗り回す
過去・現在・未来を繋ぐ　時間の円環
そのなかで　今　すべてが　見えてくる
ああ、これがヨーロッパ！
今はもう　くずれ落ち　泣くことだけ）

可哀想なエウロパは　彼女の神話が信じられない
狼の乳が　ロムルスにほとばしり　そして西欧が生まれたと
しかし理性のしわざにて　母なる獣は　石になった
（石はぱっくり砕かれて　中から精霊がとび出した
教会の塔のてっぺんで　この精霊は　歌い出す
〃鏡にちらちらするビタミンが
　ヨーロッパのジレンマを　拭ってくれるかも〃）

でも　ヨーロッパよ
私はあなたに感謝する
昔あなたの木かげですごした
甘やかなひととき　そのために





United by Throbbing Gristle

君ト 僕 君ト 僕
愛ノ 絆ニ 繋ガ レ テ

君ハ 僕 僕ハ 君
彼女ハ 彼女 ソシテ 君自身
此処ニ トダエル 至福歩行

虚偽 慢性化
悲嘆 麻痺

地面ノ 急降下
真実ハ インペイ
残サレ タノ ハ
拘禁ノ 愛 ダケ

君ハ 昔昏 君ハ 闇
此処ニ 留マル 欲望 炎
僕ラハ 全テノ 地平 ニ

触合 永劫
ヒトツニ 溶ケル ……



So Long, Ago So Clear by Vangelis

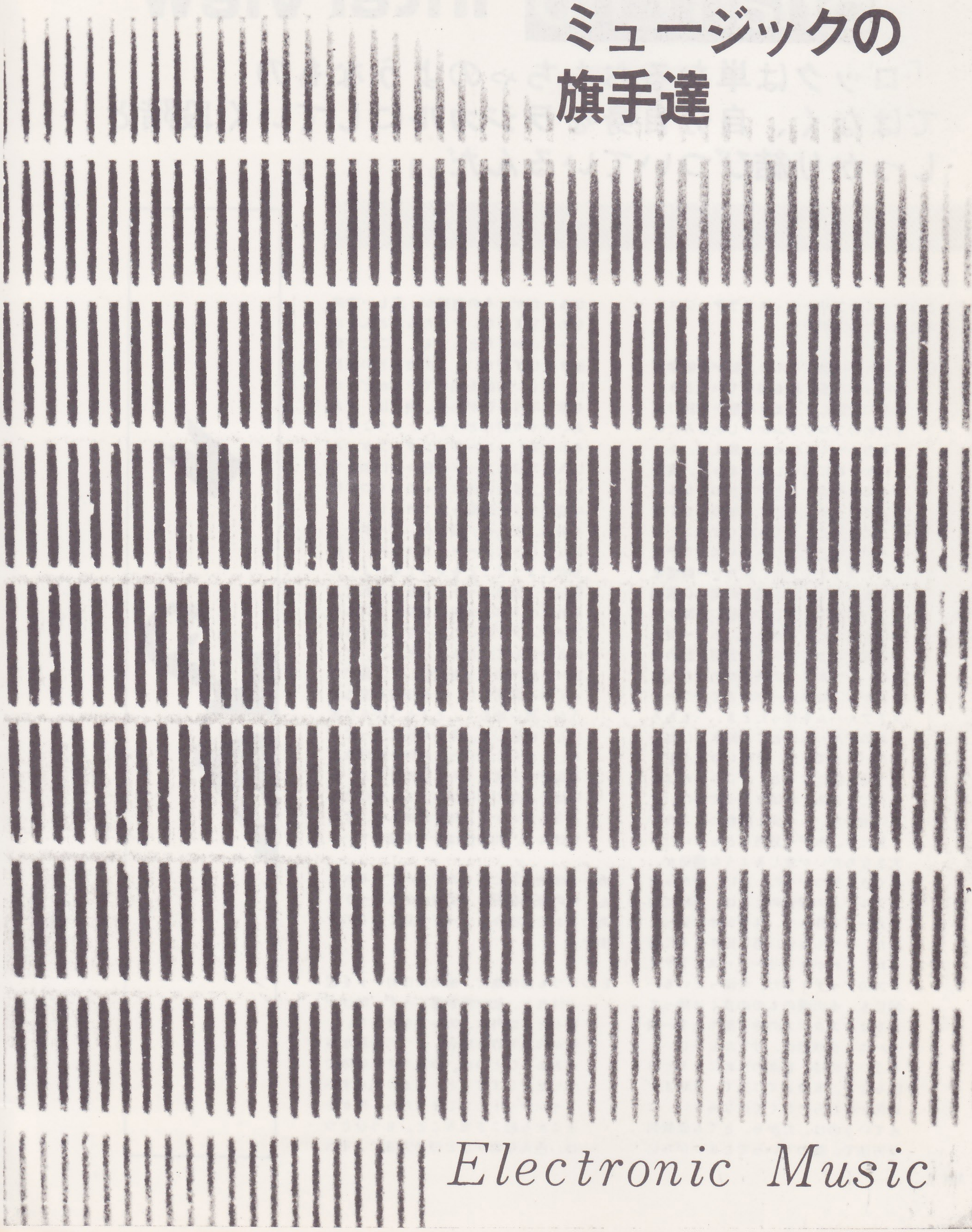
遙かなあのとき　大空へと駈けた
神に選ばれたものの　するように
この手で　満天の星に触れようと

あの日　私達は抱擁した
どんなに　過去の日々は　あなたの若さを愛でたことか
英知のことばを知るように
私達は　夢みつづけた

わたしたちの　解逅

遙かなる　時の流れのかなたから
あの時の音が　きこえてくる
ほら
こんなにも　く　っ　き　り　と

特集●ユーロ エレクトロニック ミュージックの 旗手達



Electronic Music

Brian Eno interview

「ロックは単なるおもちゃのようなものではなく、自分自身をラジカルにしていく段階としっかり結びついているんだ。」

どうやってオブリーク・ストラティジスを考え出したのですか？

E：とても長い話になるよ。私が美術学校へ行ってた頃、絵を描いているとき、作品に没頭してしまう状態から脱け出すためのプログラムか、しかけみたいなものをつくり始めた。例えば、あまり細かな事に集中してしまって、実際に全体を見渡すことができなくなる。そして、一歩外へ出て、対象を全く物としてみることもできなくなることがあるでしょ。オブリーク・ストラティジスのアイディアは、見方を一瞬混乱させることなんだ。絵との関係に遠回しな作業を課すことで、絵に正面から到達することができるし、もう一度見つめ直すこともできる。当時、頭の中には、5つか6つの法則があったんだ。それから、ロキシーができて、ファーストアルバムを作ったとき、—もちろんあのアルバムはとても好きだけど—アルバムができて、そのレコードを、家で聴く段になると、「こうすればよかった、ああすればよかったのに」と思い始めた。もう少し離れたところから見たり、ちがう見方をとっていたら、大きなちがいが生じるような個所が、たくさん見つかった。急に。だから次のアルバムの録音のときは、25枚位他のカードを作って、スタジオに張ったんだ。いつも自分に思い出させるためにね。これがオブリーク・ストラティジスのアイディアだ。今使っている一組にも、その頃のものの多くは残っているよ。スタジオの中で落ち入る一種のパニック状態は、リアルじゃない。そういうのは、音楽のためになるとは限らない。8時までに来て、9時までに何か終わらせなくてはならない、なんていうのは。だから、とても直線的な方法で、進めていってしまいがちになる。だが、その直線が、正しい方向をめざしていないとしたら、どんなにハードにやったとしても、どこにも到達するはずがない。このカードの役目は、正しい方向を向いているかどうかを常に問うことがある。例えば、「ああいうやり方はどうか」というように。それ以来、レコーディングでスタジオに入るたびにカードに色々付け加えていった。また、後になっていくつか役に立ちそうな法則を見つけたし。
その後、友人の、画家の、ピーター・シュミットにカードを見せたら、「私も似たようなことをやって来たよ」と言って、彼のノートを見せてくれた。それには1ページ毎にアフォリズムや、アイディアが書いてあって、多くは私のと一致していたんだ。それで、ピーターと私でカードを整理して、他のをいくつか発見した。これは役に立ちそうだと思い始めて、とうとう小さな本にして出版した。今でも役に立っている。しばらくしたら、進行を妨げる力も失せると考える人もいるけれど、私にはそんなことはない。もう役に立ちそうもないから、外したのも2、3あるけれど、90枚位は今でも使っている。

カードは無作為に引くのですか？　それとも、その時の状況に、関連のあるカードにあたるまで、次々にカードを見ていくのですか？

E：いつも無作為だ。他の人はカードを選ぶけれど、私は行き詰まって、助けが要るとき以外は、カードを使わない。私が作品を作る場合、2つの特異な点がある。ひとつは、作品をそれ事体で歩かせてしまうこと。つまり私がすべてインプットしてしまったら、何かをそこから起こさせること。もうひとつは、色んな物がひとつの方法で、それ



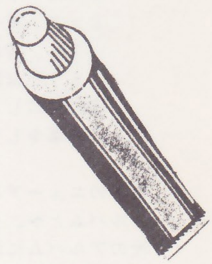
も私がインプットした物からは、予想も予見もされない方法で組み合わされ出した場合だ。こういう状態ならすべてOKだ。なぜならその時は、作品がそれ事体の条件を、支配し始めるのだから。つまり、ある先の動きが必要になるような、アイデンティティを得ていくのだ。でも一番目の状態では、行き詰まりになってしまう。何を与えれば良いかわからない。そういう時、カードを1枚引くことにしているんだ。

曲は、ある順序に従って書くのですか？

E：それは色んなやり方だ。私はひとつの技術とか、ひとつのやり方だけを取らない。まあ大ざっぱに言って、3つか4つの別なカテゴリーに分類される。ひとつは、伝統的なカテゴリーだ。私はいつも、丁度君のと同じようなテープレコーダー（マイクロカセット）を持っている。道を歩いていて、リズムやメロディや一連の言葉や、ちょっとしたアイディアが浮かぶと、それを録音しておくんだ。そういう記録はもう何千もある。そして、どれかお互いに合う物があるかどうか検討してみる。それが終わると、今度はデモの段階に入り、私のテープライブラリィに保管する。でも、それをあるオーダーで、やろうとしているけど、とてもむずかしいよ。そういう物に名前をつけたり、分類したり、出来ないんだから。直接スタジオにいて、何か出来る為にする方法もよく取る。それまで使った事のない楽器を2台－特別なタイプのオルガンとエコーとか－を持って来て、素材になりそうな物が生まれるまで、色々やってみるんだ。素材となる物は、あるムードを示唆し、ムードがある詞を生み出す。もうひとつの方法は、音楽に関係のない節約を作るやり方だ。「ええと、この曲は3分19秒で、ここと、ここと、ここで変わって、ここに大きな変わり目があって、そしてここでとても早いリズムになって、同時に緩やかな動きのパートをかぶせて…」という風に。こういうビジュアルなアイディアをグラフ用紙に書いていく。沢山のフィルムミュージックは、こうして作ったんだ。それから、普段は一緒にやる事のないミュージシャンを、集めてやることもある。

誰かが、貴方はお互いに好意を持っていないミュージシャンを使うと言ってたけど。

E：いや、個人的な敵意を持っている訳ではない。彼らがお互いに憎んでもいないし、ただ全く違う音楽のジャンルの出身で、そのジャンルが相反しているんだ。1人はホークウィンドのメンバーで、もう1人はジェネシスのフィル・コリンズ確かに、この二人は全くかけ離れた所に位置している。そしてそのトップにロバート・フィリップ、そして私、他のパートもやるけれど、そしてもう1人はスプーフ・ロックバンドでやっていたような人間、50年代初期の音楽みたいなのをね。やり方としては、ただグループを集めて、それぞれ自分のパートをしっかりやるように言って、そして、みんながあるポイントを均一化させて、譲ってしまうような状態で普通起こることはやらないこと、実際みんな大体同じスタイルでやってるようなものだから。私はそれと全く反対のことがしたいんだ。それぞれ自分のスタイルを強調して、私はそれらを引き離す。すると中心に一種のスペースが出来て、私はそこをオペレートして、ある方法でこれらを連結させせようとするわけだ。実際私の作品は、多くはこうして出来る。



ボウイとロウをつくった時、インストゥルメンタルサイド（B面）は、あらかじめ計算されていたのですか？それともスタジオに入ってから考えたのですか？

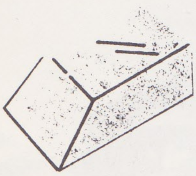
E：曲によって少しづつ違うんだ。事情が〝ウィーピング・ウォール〟と〝サブタレニアンズ〟は、もともと「地球に落ちて来た男」の、サウンドトラックとして出来たんだけど、契約上の理由で使われなかった。それでそのトラックに二人で手を加えたんだ。実際は私は〝ウィーピング・ウォール〟には全くタッチしていない。そして、デビッドが、誰かに訴えられたので、2日間パリに行かなくてはならなかった。それで、スタジオで私が時間を無駄にするよりは、と思って自分で曲を作り始めることにした。もしデビッドが気に入らない時は自分で使えばいいと思って。とにかくスタジオで時間を浪費するのはたまらなかった。そして自分でやり始めたら、デビッドがもどって来た時は、全部のインストゥルメンタルの部分は終わっていて、彼が、それにボーカルを入れた。それが〝ワルシャワ〟、とても明快な分業だったわけだ。〝アード・デケィド〟は、彼がピアノで弾いたフレーズがもとになっている。4本の手が要るから二人で弾いてみたけれど、出来てみたら彼はあまり気に入らなくて、忘れかけていた。でも、たまたま彼がいなかった2日の間、1曲出来たので、もう一度どうにかならないかやってみた。前のに色々楽器をたしてみたら彼がそれを気に入って、望みがありそうだと思い始めた。彼がそれにさらに楽器を使って手を加えた。〝アート・デケィド〟は、本当に私の好きな作品だ。「ヒーローズ」では、それ程はっきり分けなかった。何しろ



ふたりで全曲を作ったし、ずっと一緒で、大抵変わるがわるに。オブリーク・ストラテジィスも、だいぶ使ったよ。〝センス・オブ・ダウト〟をやる時、最初にふたり共カードを引いて、ずっと持っていたんだ。ゲームみたいに。かわるがわるに曲を作っていて、彼がオーバーダビングして、次に私がして。名々が自分のカードに出来るだけ忠実に従おうと考えていた。ところがカードはお互い全く逆の事が書いてあった。私のは「すべてを出来るだけ類似させよ」で、単一のラインを作ろうとしているし、彼のは「差異を強調せよ」だ。つまり私は曲を平胆にして、ひとつの連続体にしようとしていて、彼は全く逆の事をしていたわけだ。

貴方のニューアルバムや、ボウイの最近のアルバムとか、クラフトワークの最近の2枚のアルバムには、踊れる音楽、それでいて、アドヴァンストな音楽があるけれど、ディスコに進出するのはどうですか？

E：オー、イェー！　考えるよ。もし王権みたいなものを少しの間持っていて、自分の夢の通りのグループをつくれるとしたら、そう、パーラメントとクラフトワークとの合同のグループをつくるよ。2つを一緒にして、レコードをつくらせるよ。パーラメントの奇妙で肉体的な感じと、それにストレンジで硬質なものを加えた、ものすごい組み合わせになるだろうな。



ドナ・サマーのような？

E：そう。ドナ・サマーが、そういうアイディアのきっかけだった。レコードを聞いた時、打ちのめされたような感じがした。これが本当のプログレッシヴだと思った。エレクトロニックミュージックで、私が本当に興味を引くのは、あの領域から生まれたものが多いよ。エレクトロニクスを極端に駆使したものじゃない。つまり、ギミックを追求する人々が生み出すもの、それは、平凡なもので、他の人が以前にやったことのないもので、どんなサウンドが、つくれるのかって考えるところから出来るんだ。パーラメントのファンカデリックな連中が好きなのは、彼らが本当に極端な事をしているからだ。連中のやっていることで、普通のことは、ない。ある意味でクラフトワークと同じように極端なんだ。そのふたつを、くっつけてそこから何が出来るか、とても興味があるよ。それから、ロボットレゲエもやってみたい。レゲエから意識的に感情を抜き取って、白人音楽で硬い感じにしてみたい。

貴方の回りのミュージシャンたちのあまりにも多くは、音楽以外のことに、ほとんど関心を持たないのではありませんか？ある意味で彼らは、生きる事へのアプローチが、殆ど一次元的であるのではありませんか？



E：私が一緒に仕事している人達にはないよ。他の沢山のミュージシャンについて、それは全く本当だけれども、私はそんな人達とは仕事をしない。スノッブな根恨でいってるんじゃないよ。彼らと出合うチャンスがないだけさ。私は外へ出かけようとしないから、出会う人々はといったら、私に近づいて来る人々か、私の方から近づく人々だけさ、彼らが面白いからという理由でね。

どんな状況が、貴方とボウイを一緒に仕事させる事になったのですか？

E：その時私が彼の〝スティション・トゥ スティション〟を発見し、凄いレコードだと思った。同じ時、彼は〝アナザー・グリーン・ワールド〟を発見し、それはいいレコードだと思い、よく聴いていた。そして彼は私と接するようになり、イギー・ポップのアルバムの〝ザ・イディアト〟で一緒にやってくれないかと誘った。実際、それは実現しなくて、私はこのレコードには参加しなかったのだが、彼は次に〝ロウ〟で仕事しないかと誘い、私は同意したんだ。

貴方の方が〝ヒーローズ〟を共作した時、リフやアイディアが、先に出たのですか？それとも、ボウイが先に詞をつけたのですか？どの様に作ったのか話して下さい。

E：あれは、私から始めたんだ。私はほとんど無関係なディティルから始めた。つまり、ある時間を規定してゆくシンセサイザーの音さ。私はその時、スタジオの小さなシンセサイザーの音に合わせてプレイしていった。始めに私は2つの基本コードだけやるつもりだったのが、カルロス・アロマーがプレイに加わり一たぶんそれは、Aマイナーだったと思うが一そしてディビッドが終りのコードをつけ加え、ピアノを弾き始めた。全くこんな風に起こったんだ。この曲の頭の部分は、殆んどディビッドが書いた。もちろん、最も大切な寄与のひとつはフィリップのプレイにある。何故なら、それは本当にヒロウィックな荘重な感じを曲に与えたからね。



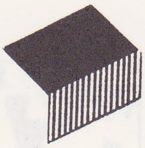
ロキシーミュージックの〝スター〟であるイーノと、今日のイーノはどのように違っているのですか？人々が貴方に近づくやり方の違いはどうですか？

E：違いは私の役割のからくりというより、人々の見方の方に関係があると思うね。

はにかんでいる様に聞こえるかも知れないけど、私はロキシーでスターになることを期待もしていなければ、特に欲してもいなかった。事実、ロキシーがスタートした時、私はステージの上にさえ居なかったんだよ。私は、その方がよく音をミックス出来るからという理由で、いつもホールの後ろに居たんだよ。私は、自分の小さなシンセサイザーを後ろに置いて、ホールの後ろの方で仕事していた。バック・ルームボーイでいることが好きだったんでね。そうしたら、レコード会社がいうんだ「この男がホールの後ろの方に居て、時々歌っているなんてちょっと変だ」そして、私にステージに上がれというんだ。そして私はステージに上がり、結果的に（と彼は笑い）スターになった…全く期待してなかったことに。

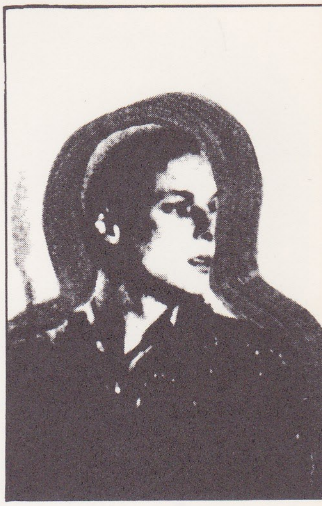
貴方はスターという言葉に笑いましたが？

Ｅ：そう。このポジションは本当にばかげてると思うよ。決して私が欲していたことじゃなかったんだ。極端に物事を制約されているんだよ。もし、君がスターになったとしても、君の出来る変化の殆どが単純に累加的な、付加的なものだ。あれやこれやをもっと得る事が出来、ある特別な事をほんのちょっと改善出来、又、もう一そうモーターボートが買えるとか、そのようなものだ。ところが常に私のエネルギーと興奮は、探さくされていない領域へと脱線していく事にあるのであり、とぼとぼ歩いていく事ではないんだ。スターに関する事でおかしなことは、その言葉から来る皆のイメージが、輝きに満ちていて、とんでいて、うっとりする様なものだということだ。でも、事実精神的には、本当に固着してしまうだけさ。さんざん踏みつけられた道の上をとぼとぼ歩くのはやめにすることだ。



人々はしばしば、そのイメージにそって、生活せねばならずと考え、自分を茶化してすませてしまうようです。これは彼らを、よい音楽を作ることから遠ざけてしまう。これはたいへん、破壊的なことに思えますが？

Ｅ：私は実際、たいへん知的な動きをして来て、その中で自分が多くの違った放出口を持っている事を確めようとしてきた。だから私のリリースしたすべてのアルバムが次のブライアン・イーノのアルバムだ、だからある意味で前のものと似た連続体一部だ、とか一直線上に発展したものだろう、とか見なされることはないわけだ。〝オブスキュア・レコード〟を始めた事、フィリップや、その他の人々との共作を始めた事のポイントは、基本的に人々を失望させない違ったタイプの作品をリリース出来るからだ。私は人々に私の名前が出ているからという理由で、オブスキュアのレコードを買って、家に持って帰って聞いて、全然歌がないといって失望してほしくないのだ。〝オブスキュア〟（不明瞭な）というレーベルの名前は、人々にこういうつもりで、よく考えてつけたのだ。〝見なさい。買う前にこれを聞いてみて下さい。貴方が求めているものを確かめて下さい〟とね。今日、多くの大きなバンドについていえる問題は、彼らのリリースするすべてのアルバムが１つのシリーズと見られる事だと思う。これは彼らに、ある１つの方向だけへ目を向かせてしまう。



彼らはこれが〝フログクト〟になるというんですよ。

Ｅ：そうせざるをえないんだよ。彼らは罠に充分早くから気づいていない。彼らはもうすでにその中にいて、複雑な事すべての中に頭をつっ込んでしまい、ソロ・アルバムを出す事で、それを打破しようとする。それは多くの場合失敗するね。私の見る限り彼らは間違った前提から物事を考案しているんだから。こういう考えからきているんだ。「私は自分自身の独自性を主張したい」とね。これは音楽を作る上での、良い基盤とはいえない。「自分自身を主張したい」

では貴方は会釈されたバンドを組んだのですね。

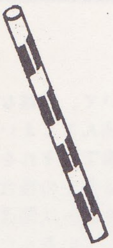
Ｅ：そう、彼らはバンドの機能を作るものが何であるかという事を、決して注意深く探さくしたりしない。初期のロキシー・ミュージックは、それが独特の構成を持っていたという理由で、偉大なる例だと思う。バンドを見た誰もが言ったものだ「明らかに、３人の強烈な個性がある：ブライアン、アンディ、そしてイーノだね。ドラマーは、座ってプレイするだけだ。彼は多く物を言わないし、色々な事に関しての議論や反ばくには決して加わらない。」しかし実際は、彼が常にやっていた事はそこに座って、物事を錨を降ろしてすえつける事だった。彼こそは重要だった。同じ様にフィルもね。バンドは、多くの個性の集合体ではなくて、ある特別の人間関係なのだ。多くの個性の間のたいへん複雑な関連であり、人は決してこれを簡単にやり過ごすことは出来ず、これが機能する事を期待するのだ。人がもしこれをやり過ごしてしまったら、あるメンバーを出して、新しいメンバーを入れたら、人は音楽のアイデンティティー全体が変化する事を予期



しなければいけない。これはまだいいのだけれど、人々がおかす間違いは、あるメンバーを止めさせて、新しいメンバーを入れておきながら、前と全く同じバンドのつもりでいる事だ。彼らは全く新しく始めなければならないのにね。

貴方は自分のシンセサイザーを自分で作るのではありませんか？

E：まあ、私は自分の対象が何か面白い事をやる迄手を加えひねくり回していくんだよ。私は電子工学の資格を持っている訳ではないが、何かが出来そうな小さな部品を見付けたら、それらを一緒にしてみるのさ、コンポーネントするという事ではなくて、たとえばラジオに使われている様なコンプレッサーの事だ。実際、私の使っているシンセサイザーはとても単純なものだ。私が本当に使っているものは、コントロール・ルームさ。いつもコントロール・ルームの中で仕事してるんだ。全部のシンセサイザーを中にセットして、机の中に一列に置いてあるから、スイッチひとつ押せば、どんな楽器だって、私のシンセサイザーにストレートに送る事が出来る訳だ。このやり方で私はサウンドを望み通りどんな風にも変える事が出来る。すべての複合体の一部として、私はシンセサイザーに高い信頼を置いている。コントロール・ルーム全体が私のシンセサイザーであるけど、私の持っているシンセサイザーは、今ある内で最も普通のヤツだと思うよ。



ここ4、5年のポピュラー・ミュージックについて最悪の事は、その無味乾燥さだと思います。それは、ドルビーをかけられ、フィルターされて、均一につるつるに聞こえるのです。

E：その通り。私もそう思っていたんだ。だからニューウェイブが、まるで新鮮な疾風の様だったんじゃないか。実際、私はニューウェイブがいつかは何かをなしえると思っているよ。ニューウェイブは、状況を打破しつつある。これは、私自身のトランペットをふいている様に聞こえる。私がプロデュースした2枚のアルバム、デボとトーキング・ヘッズは、たいへんに力強いアルバムだ。それらは革新的なだけでなく、たいへん聞きやすい。それらは、とげとげしくない。たいへんに性急でナイーブな姿勢をとっていて、ある意味で、全く深みがないともいえるのだ。両方のアルバム共、多次元的なものであり、それですばらしいのだと思っている。事実、興味深い音楽が起こりつつあるのだが、主にイギリスの方でよく売れている。トーキング・ヘッズは、私の知る限り、アメリカでよりイギリスでの方が、はるかに人気がある。

ラモンズもそうですね。

E：そうだ。イギリスに真に強力なムーブメントが起っているんだ。何故なら私達の方が貧しいからね。又私達は、多くの欠点はあっても、国家的なロック・プレスを持っている。

そして熱狂的なね…

E：とても熱狂的だね。実際過剰のけらいはあるが、熱狂がたりないよりはいいさ。彼らはお互いにはり合っていて、最新のバンドについて我先に報道しょうとする。だから、イギリスの最もかすかな才能のひらめきしか持っていないバンドだって、一度に信じられない位の注意を引きつける事が出来るんだ。最近2年間位、そうだったね。

貴方が一緒に仕事していて、他よりぬきん出て印象づけられたバンドは何ですか？

E：ワイアーとエクスタシーがとても好きだ。そしてバズコックス。

ロキシー・ミュージックが何らかの意味でロックを変えた、あるいは改善したと思いますか？

E：私はイエスだと思う。イギリスでは、きっとそうだった。なぜなら、もう一度言うけど、初期ロキシーは、均質な、つるつるした物とは反対だったからだ。まずスタートから、ファースト・アルバムは、ひとつのアイデンティティーを持っていないという意味でたいへん混とんとしている。同じ様に、タイトなスタイルで出て来た他のバンドは、こうでなかった。ロキシーは、真の多様性と、殆ど方向性の混乱を示して出現したんだ。このファースト・アルバムは12のそれぞれ異なる未来をその上にきざんでいる。そこには、異った多くの道があり、音楽は各々そこから発展してゆくんだ。しかしながら、私の大好きなアルバムは「ストレンディド」だ。私が参加していなくてもね。私が参加していないから好きなのかも知れない。その材料となったものを全く知らないで聞くからだろう。

自分が参加していないものの方が判断しやすいと思いますか？

E：ずっと判断しやすいよ。

自分が創造したものから自分を切り離して考える事はむずかしいですね。





E：長い時間がたってしまえば、それは可能になる。私はロキシーの最初の３枚が大好きだ。何故ならイギリスで彼らは２つの事をなしとげたから。まず第一に、彼らはその頃はやっていた音楽低温殺菌みたいなパターンを打ち崩した事。第二にロック・ミュージックが芸術と社会に関係するものだという概念を、突然に人々に示してみせた事。この概念は、イギリスで1964年から69年にかけて受け入れられていたもので、フーとか、他のいくつかのバンドに始まり、ビートルズと、勿論ベルッベト・アンダー・グラウンドをへて貫かれて来たものだ。そこには、ロックは君の身につける単なるエンタティメントのおもちゃの様なものでなく、もののあり方に関係するものだという意識があって、君がそれに望む態度はいくつかの意味で、自分自身をラジカルにしていく段階としっかり結びつけられているという事なんだ。ロキシーは、それを再確認したと思う。もし君が、ロキシーを好きなのなら、君はある姿勢をとって、あるやり方で世界にアプローチしているといえるのだ。

ツアーに出る予定はありませんか？

E：いや、ないよ。別に切望していなんだ。もし実際に面白い音楽を作り出すやり方を思いついたら、やるかも知れない。問題は、コントロール・ルームを自分の楽器として使う事にあるんだ。どうやってそれをロードにもっていったらいいかわからないんだ。どうすればいい？シンセサイザーをプレイする事は、自分に関する問題ではないんだ。かなり大きなバンドを使わなければロードでは出来ない。大きなバンドでなければ、常にプレイ出来る。でも、大きなバンドだと、ぼくの仕事の殆どが、多くの資質のテクスチャーの結果になってしまう。自分が興味を持っている事よりも、グループの多くの人々のトップにたって働かねばならない。４人かそこらの人々とでは、こうはならない。私は多分10人か11人雇わねばならないだろう。経済的に、それでは意味を成さない。私が出来ると思う唯一の方法は、ツアーの反対で、私が一つ所に居すわって、人々が私を見にツアーして来る事だ。これは、もし私がロンドンに大きなホールでなく、1500－2000席のホールを雇えば可能だ。15000 席での所では、全然想象できない。もし小さな所を雇えば、全部の楽器をそこにすえつけて、スタジオと同じようになり、技術的に機能することが出来る訳だ。そしたら、毎晩そこでやる事にして、２週間ぐらいつづければいいだろう。むずかしいとは思わないけどね。

貴方は、どんな教育を受けたのですか？

E：教育は、すべての概念化作用を抑圧してしまう。私は11の時迄、カトリックの修道院に行っていた。16迄は、カトリックのグラマー・スクールへ行っていた。グラマー・スクールは、別に悪くはなかったが、本当に重要だったのはサフォーク州イプスウィッチの、本当に良い、アート・スクールへ２年間行ってからだ。後に３年間別のアート、スクールへ行ったが、最初の２年間が決定的だった。このアート・スクールを乗っ取った様な形になった一連のスタッフが、この学校を実験的に使ったんだ。彼らは創造的な思考をつける様にしただけでなく、古い思考方法を徹底的に混乱させた。最初の学期は、生徒の答えるであろうレディメイドの答えを破壊する事についやされ、事実、３人の生徒が神経哀弱になった。最初の学期はとてもしんどかった。私が前に受けてきた教育を破滅させるために、特に企画されたものだったんだ。尋常でない実験のための強烈な時期だった。

誰か他にこのクラス、グラフィック・アートとか他のクラスから出た人がいますか？

E：ピート・タウンゼントだ。彼は、他のアート・スクールで、同じスタッフから学んだ。彼らはこのアート・スクールを専抑したのだが、教育委員から全員クビになり、イプスウィッチへ移って私の学校へ来たのだが、またクビになった。そして又彼らは別の地へ移った。かなりの人々が彼らのもとで学んだ。彼らは人の知るような名前ではないが、面白い事をやっている人々だ。建築家であったり、私の知っている女の子はとてもいいチェリストになったり、あと、作家、イラストレーター、画家になったりした。人々は散り散りになり、大概面白い事をやった。全体としてとても高い成功率だった。皆が前に受けた教育によって、成されたダメージを取り除くという、単純なテクニックによってこれは成されたんだ。それは、「これは可能で、これは可能じゃない」という古いルールを取り除き、かわりに「我々は何が可能で、何が可能でないかを君達に教えはしない。常にすべての可能性を歓得するためのテクニックを教えるのだ」と言った。今日こんな学校があったら、それは、精神療法とか、その様によばれると思う。あれはただのアート・スクールではなかったんだ。

訳　磯村　知子
尾形加代子

klaus schulze interview



ジャーマン
エレクトロニック
ミュージックを語る。

あなたがはじめに音楽をやりはじめたきっかけは？

ＫＳ：私の最初のきっかけは兄を通してだった。兄は、ドラムをやっていて、フリー・ジャズのようなことをやっていた。私はこれをとおして音楽に接近していき、彼らがどんな風にやっているのか、聞いてきた。私はドラムではなく、ギタからはじめた。私は６弦アコースティックギターで正規の一教育を受け、バッハとか、そのようなものをやることで始めた。これは３年か４年間のことで、次にグループでプレイしはじめた。私達は、キンクスとか、シャドウズ、その辺のグループをコピーしていた。そして、私は、ドラムにくら変えし、２年間音楽のアレンジをやった。私達は、私自身の曲と、いくつかのストーンズのやつをやっていた。その後、私達は〝プシー〟という実験的なグループを作った。そこにはギタリスト（現在はアトランティスにいる）と、クラッシックしか出来ないオルガニストがいて、私はドラムをやった。でも私達は解散し、各々、全然違う方向へ行った。ベルリンのパブで、毎晩ジャムセッションが行なわれていた。私達はそこへ行って（全てのミュージシャンが通っていたんだ）プレイし色々なミュージシャンと会った。ある晩グループが作られると、次の晩にはもうそれは存在しないといった調子だった。私がそこでドラムを自己流に練習していると、タンジェリン・ドリームのエドガー・フローゼが来ていて、そして言った「何故、私達は一諸にプレイしないのだろう」そして、私は言った「何故しないんだろうね」



それは60年代の終り頃？

ＫＳ：69年さ。私達は２、３のギグをやって、うまく行ったのでグループで行く事にした。そして、ファースト・アルバム「エレクトロニック・メディティション」を作った。

このアルバムが、グループの許可なしにリリースされたと言うのは本当ですか？

ＫＳ：本当は違うね。私達がスタジオに入って、セッションをレコーディングして、そして、分裂して６ヶ月後、私はエドガーにコンサートで会った。彼は言った「私達がアルバムを一諸に作ったのを知っているだろう、一ヶ月の内に出るよ」私が知らない内に起こった事だが、でもそれでよかったのさ、タンジェリンのあと、私は電子音楽をやりたい奴を探していて、ついに２人の奴を見つけ（ヘルムート・アンクとマニュアル・グートシュンク）アシュラ・テンプルを作った。ファースト・アルバムは、かなりよい出来だったが、彼らはその後もっとロック・ミュージックをやりたいと言い、私はこう言った「ＯＫ、名前もそのままで、すべてそのままでいきなさい。私は、一人でやるよ」で、それからずっと、私はソロでやっている。私達は後にコローニュのセッションで会った。私達は偶然に会い、このダブルＬＰ〝タロット〟を作った。私は言った「何んで、セッションアルバムをやらないんだろう？」彼らはテープのスイッチを入れ、私達は40分プレイした、彼らはそれを真ん中で切り、〝ファースト・サイド／セカンド・サイド〟と呼んだ。

でももとは、それは長い一曲だったのでは？

ＫＳ：そうだ「ジョイン・イン」というアルバムだ。私達は始め〝ジェンセイツ〟そして〝フレークン・ロール〟をやった。人それを、よいセッションだったと言うよ。アシュラ・



テンプルは今は、マニュアル・グートシュンクとアジテイション・フリーからのもう１人のギタリスト、ルッツ・ウルブリッヒでやっている。

他のセッションも〝コズミッシュ・ミュージック・レーベル〟でリリースされている。コズミック・ジョーカーズとシフィ・パーティであり、レーベルはこれらを〝コズミック〟という局面からしかとらえていない事で、クラウスは不満だった。しかしこの時彼は〝サイボーグ〟の作曲に従事していた。彼はすでに「イルリヒト」を出しており、彼はこのレコードでベルリン・シンフォニー・オーケストラを活用した。

ＫＳ：オーケストラと仕事をするのはハードだ。彼らは、クラッシックのトレーニングを受けていて、インプロビゼーションになれていない、だから私は説明しようとする「10分間だけ〝C〟でやってみてくれ、バイオリン、チェロ、コントラバスそしてオーボエだ〝C〟で入ってつづけるんだ」彼らは言う「10分間も〝C〟だけで？／―／」だから、私は普通の作曲をし、シンセサイザーを使い、思っていた音を、出した。

「サイボーグ」でも同じ人々を使いましたか？

ＫＳ：オーケストラには、こういう音楽を本当にやりたい人間は12人か、15人程度しかいないさ。

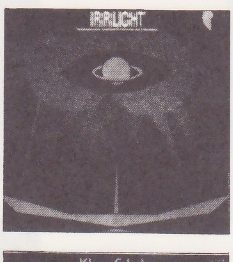
「イルリヒト」そして「サイボーグ」で特に、貴方が言いたかった事が何かありますか？

ＫＳ：はい。始め「イルリヒト」は単調な概念を提示し、他の物は一つのトーンを提示する、浮かんだ波の様になる、しかし一つのトーンを聞いていると、一つのトーンの中に多くの転調が成されている事が解り、全くの偶然によって、複雑な音を、作っているのが解る。「イルリヒト」は又、シンセサイザーとオーケストラが演奏するのが、どの様に可能かという事を示している。ノーマルな方法でなく、オーケストラから音を取り、音を作る事だ。同じアイディアが「サイボーグ」にもある。これは思うに、もっとソフィスティケートされている。本当にやりたかった別の事は、人々に沈黙と休息を与えることだ。「サイボーグ」に関する私の

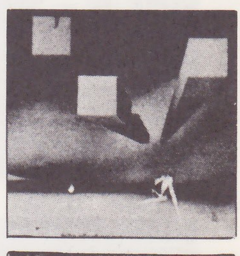
discography

▶Solo Album

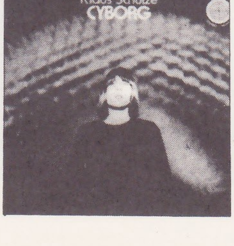
Irrlichit Ohr OMM556022



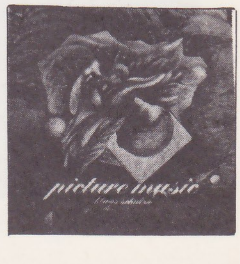
Black Dance
Calorine CA2003



Cyborg Kosmick KM2
／58005



Picture Music
Brain　1067





主概念は、休息の獲得だ。次に、リリースしたアルバムは「ブラック・ダンス」だ。それは、たいへん成功したので、会社はもっと他にリリースしないかと言って来た、それで私は「ブラック・ダンス」の前に作った「ピクチュアー・ミュージック」を出した。

そして次が「タイム・ウインド」ですね？

ＫＳ：これは、私にとって最も完全なアルバムだ。これには、他の４つのアルバムで使われたアイディアがすべて集められている。〝ワンフレイド、1883〟は最初の２つのアルバムと同じフィーリングを持っており〝バイロイト・リターン〟は次の２つに似ている。表面的なものが出なく、リズムに関して同じ態度を持っているという事だ。

タイム・ウインドと呼ばれるグループがあったと思いますか？

ＫＳ：はい。私達（シュルツとミシェル・ホエニー、アジテーション・フリー）がやりたがった。それは、レコードが出来る前だった、私達は、いくつかのライブをやったが、皆が、それはミシェル・ホエニーに、助けられたクラウス・シュルツだと言うのでトラブルがあった。私達２人にとって、それはひどい事だった、何故なら、私達２人共ステージでは一諸なのに、人々は私だけを受け入れるからだ。だから私達はやめた。彼は、タンジェリン・ドリームに入ったが（1975年４月）そこには全く同じ問題があった。それで彼は、グループで働く事をやめてソロでやっている。彼のソロアルバムは、来年始めにリリースされる筈だ。ともかく私達はグループ、タイム・ウインドをやめたが、バージンとコンタクトをとり、混乱をさけるつもりだ。私達はまだ一諸にプレイしていて、その内もっとリラックスしたものになるだろう。そうしたら、私のスタジオでセッション・レコーディングを出すよ。きっといい物になるだろう。

サウンド・トラックとか、そのような物は録音しましたか？

ＫＳ：ＴＶ、ラジオ、映画のための色んな作曲をやった。私はラジオ・プレイのための賞をもらったよ。ＢＢＣが、ドイツラジオから、これをかったんだ。彼らは言葉を変えたが、音はそのままにした。

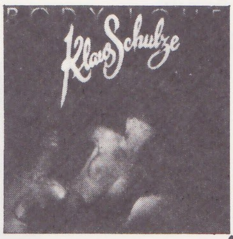
Time Wind Calorine CA2006



Mirage Island ILPS 9461



Body Love Island ILPS 9510



Moon Dawn Brain 1088



Body Love (original) Metronome60047



X Brain80023



私はこれを通して聞けないのが心配である。私はダグラス・マゲリッジとコンタクトをとり、これがたいして良くないとして、棄却されたのを知った。私にはすばらしい様に思えるが、これは、未来の幻想劇であり、人々が休日を求めれば、人々は過去の日々に帰って行きハンフリー・ボガートとかの過去のスター達の生を生きられるというものだ。アルフレッド・ベレンスによってプロデュースされている。

ＫＳ：私は又、ＴＶプログラムの為の作曲もした。惑星コホークが、ごく最近、地球を通り過ぎる事についてのだ。映画の為の作曲は〝ア・ルック・イン・ザ・カントリー〟という実験的な映画についてのものだ。セバスチャン・クレアーズによってプロデュースされており、サイト・シーイングについての映画だ。私達は、もう一つ作っており、また間もなく違う物をやるつもりだ。これが、この分野でやっている仕事の全てだ。

ドイツでは、貴方はどの位人気があるのですか？

ＫＳ：ある時には、殆んど関心を持たれていなかった。殆んど２、３、４枚のアルバムを売るぐらいで、しかし、今は会社が一度にプッシュしてくれているので、かなりの線をいっている。これは最初に私が成功したフランスからのフィード・バックだろう。ドイツでは、始めに他でも有名にならなければ受け入れられないんだ。ドイツでも、他でも、今はうまくいっている。この手の音楽で、ロックで起こさせる様なレボリューションをもたらすことは出来ない。これは、ゆっくりと進行してゆくより、心理学的なものなのだ。長い時間がかかるが、私はきっと起こると信じている。

貴方は、最近イタリーでプレイしませんでしたか？

ＫＳ：はい。この国に来るすぐ前にね。イタリーとスイスとをツアーした。とてもファンタスティックなツアーだったよ。一度古い教会でやり、他は普通のホールでやった。次のツアーは、全てカテドラルでやる事になるだろう。ここは音楽的にも、フィーリングも一番良いからね。

タンジェリンもこれをやりました。あなたは、報道関係の反応が心配ではありませんか？

ＫＳ：もし、ストーンズがマナー・スタジオでレコーディングしたとしたら、私がやってはいけない理由がどこにある？私は気にしない。タンジェリンと私は、ミュンヘンの同じ教会でやり、人々はそれを好んだ。報道関係は、これについてあまり知らないし、理解していない。彼らはこれを〝スペシャル・ミュージック〟と言うんだ。

この国であなたのレコードは、かなりのセールスを示していますが、この国でやるチャンスはどうですか？

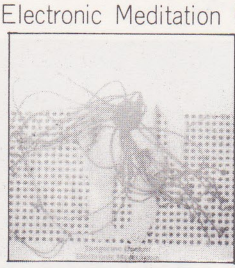
ＫＳ：ここでプレーしたいと思う。私は、何故イギリスでプレーしないのか、という手紙を沢山もらった。でも、私がバージンにいた時、彼らはタンジェリン・ドリームで忙しかった。彼らが私に言った事といったら、ピンク・フェアリーズとやらないかだって（!!）私はデビッド・ボーハンズとコンサートをやるつもりだったが、キャンセルされたのでプランは実現しなかった。ライブは、タイム・ウインドのファースト・サイド〝ウエイズ・オブ・チェンジズ〟と、〝ピクチュア・ミュージック〟の一部にとても似ている。しかしライブは違ったメディアなのでもっとパワフルだ。私は、録音されたドラム、パーカッションを使っているが、将来はテープを使う予定はない。

貴方は、ソロをやっている貴方自身を触発する事が、容易だと思いますか？

ＫＳ：私は、グループでやったが、音楽を壊してしまうトラブルがいつもあるのを発見した。１人の方が簡単だ。シンセサイザーでは、ひとつのハーモニーに合わせていくが、１人でやっている方が、リズムやハーモニーをより容易に変えられる。私は今ムーグをやっていて、セットしてしまえばひとりでになるシンセサイザーがあるので、グループでやるのと殆んど変りない。

▶Works

Tangerinedream
Electronic Meditation OMM556004



TAROT KK2/58002



Ash Ra Tempel Ohr OMM556023



Si-fi Party KM58011
Gilks Zyitshiff KM58012
Planeten Sit-In KM58013
Kosmiche Music OMM256027

Tsutomu Yamashita's Go
Go Island ILPS 9387
Go2 Arista SPARTY 1011
Go Live Island ISLD 10

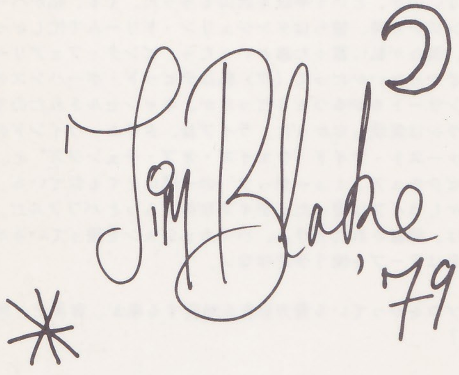
Ash Ra Tempel
Join In Ohr OMM556032

Kosmick Lebel Session
Lord Krishna Von Gololoka KK58002
Galactic Super Market KM58012
Cosmic Jorkers KM58008

「音楽のコミュニケーションは“マジック”と表わすのが一番ぴったりだと思うよ。」

来日インタビュー

ティム・ブレイク



元ゴングのメンバーとして知られ、クリアライト・シンフォニーやスティーブ・ヒレッジのアルバムなど、イギリス、フランスのプログレッシヴ・ロック・シーンの重要なアーティストであるシンセサイザー奏者、ティム・ブレイクが、彼の所属するEggレーベルの日本プロモーションのために来日した。4月6日に音楽・映像関係者やマスコミ関係を対象にしたコンサートを行なったが、この種の催しが日本では皆無に等しいため、本当はより一般の人々にも解放してあげたいほどの興味深いショーをみせてくれた。

本誌のインタビューは4月7日夜、彼が宿泊しているホテルの部屋で行なわれた。ティムはとてもハンサムで快活な印象を与える好青年で、質問に驚くほどていねいに延々と答えてくれた。以下は、ティム・ブレイクとフールズ・メイトの約40分間にわたる会話である。(北村)

inferpreter　磯村　知子

F：今日は私達に時間をさいて下さってありがとう。私達はこの雑誌(ファンタジーの号をさし出して)のスタッフです。“Fool's Mate” というのはピーター・ハミルの最初のソロ・アルバムの名前です。

B：“Fool's Mate”…そうだね!(誌面をパラパラめくりながら)あ、ティム・ブレイクの写真だ……ぼくは美術が好きだけど、なかなか良い紙面だね…

F：この雑誌は、日本で唯一つ、ユーロピアン・ロックを主に扱っている雑誌です。でもこのジャンルは、日本でまだマイナーなものです。

B：そういえば、ぼくのイギリス人の友だちなんか、へえ、日本へ行くんだって、どういうかんじなんだい? なんて言うね。何かヨーロッパのグループがまっすぐ入っていけないみたいなところがあるからね…

F：まず最初に、あなたの属しているEggレーベルについて教えて下さい。私たちがEggレーベルに持っているイメージは、アヴァンギャルドな音楽を、何かとても洗練された、ファッショナブルなイメージに変えて紹介しているということですが。

B：え、ファッショナブル、洗練されたってかんじはぼくはしないな。Eggレーベルは、君も知ってるとおり、バークレーというフランスのレコード会社の傘下のレーベルだ。この会社は、フランスの音楽を世界に売る仲介をしている。だから、この傘下で、アヴァンギャルドな実験を行なっても、もうけにはならない、というわけだよ。

F：世界レベルでの商業的成功をめざしているのですか?

B：いいや、まあめざしてないってわけじゃないけど、Eggレーベルでは、他のレーベルより、コマーシャルなことは心配しなくていいんだよ。レコードをふつうのやり方では出さないレーベルを作るには、ちょっとした技術がいるんだ。何しろアヴァンギャルドを出すんなら、ふつうのやり方じゃだせないんだよね。Eggレーベルの人々には、充分な時間がないわけだ。バークレー傘下の、他のレーベルもかけもちしている人たちがEggレーベルにかかわっているんだから。だから、アーティスト自身がプロデュースして、レーベルはそれに協力するという形をとっている。アーティストとレーベルは、ダイレクトな関係にあるんだよ。

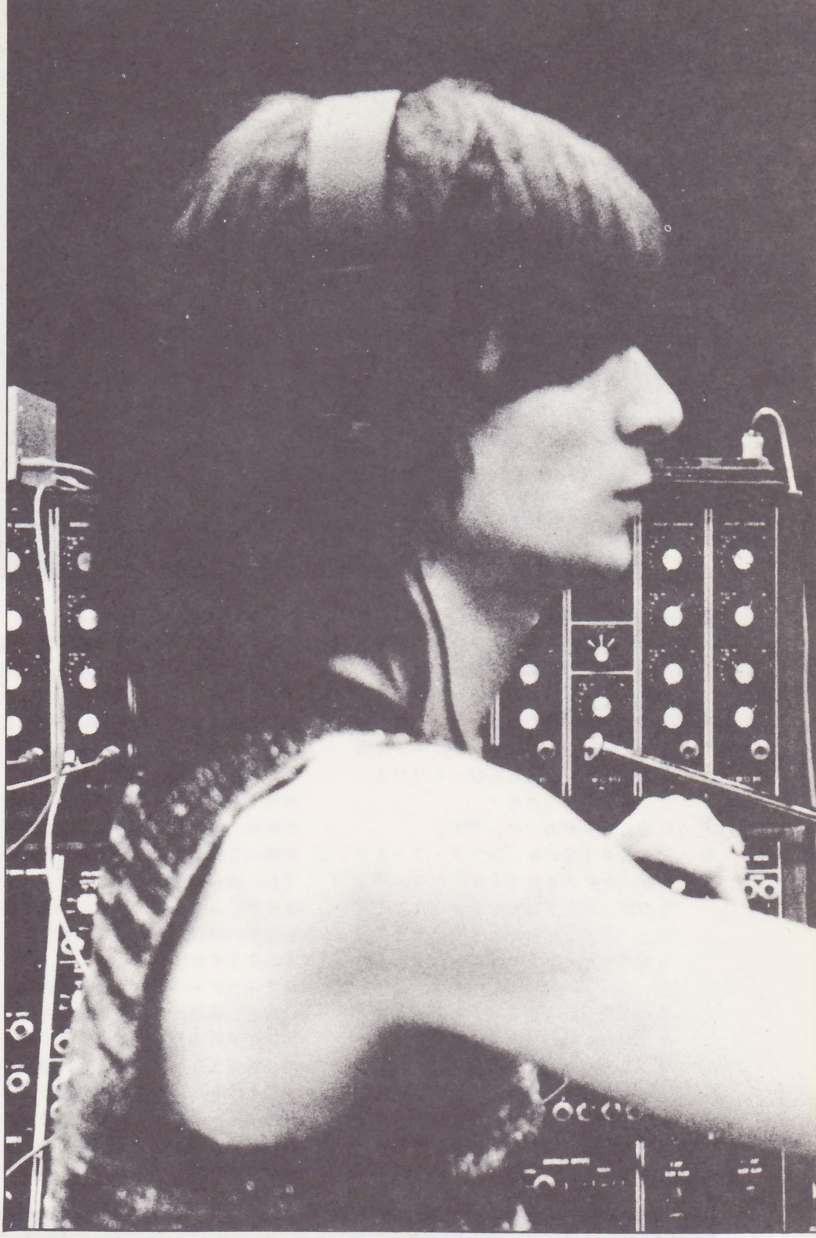
F：Eggのアーティストは、何か精神的な新しいヴィジョンを持っているのですか?

B：全員がそうだとは思えないな。全く違った人々が違った考えでもって仕事をしているんだから。ぼくに関していえば、ぼくは持っていると思うよ。でもぼくは他の人のヴィジョンについて議論することはできないから、それは彼らにきいてもらわなければ、わからないな。



F：あなたのファースト・ソロアルバム「クリスタル・マシーン」はライブ・レコーディングですが、曲はあらかじめ作曲されたものですか？　それともインプロビゼーションですか？

B：レコード全部、全くのインプロビゼーションだよ。昨日のコンサートでもそうだったけど、一つのトラックにはテープを使っているんだ。リズムをきざむトラックで、メトロノームみたいなものだよ。あとのヴォイスはぼくが作り出して、その上にオーバーダビングしていくんで、だから、ワン・トラックだけが本当のライブかもしれないな。あとのトラックはあらかじめ作曲されているといえるかもしれないけど、全体としてはちがうよ。二つのパートがあって、残り一つは、その場でうかんだものをストレートに出していくんだもの。ほら、こんな風にね（と彼は、日本で買ったメロディーの出る薄型電卓で、一つのメロディーをくり返してみせた。彼は電卓が気に入ったらしくインタビューの間にしょっ中いじって音を出している。）



F：セカンド・アルバム「ニュー・イェルザレム」の中の「Song for New Age」はとてもアコースティックな印象の曲ですね。あの様に詩が重要な役割を持つ曲もお好きなのですか？

B：うん、あの曲は気に入ったからアルバムにのせたんだ。ぼくは気に入らなかったもの、自分がエンジョイできなかったものはアルバムにのせないからね。「Song for New Age」は以前に作ってあたためておいたもので、レコードにのせる機会をねらっていたんだ。この曲はアコースティック・ギターを使っているけど、前からこれをやりたいと思っていた。ぼくがアコースティック・ギターを持って歌うなんて、誰も想像もしないんじゃない。だから、アルバムのトップにのせたんだ。人々がレコードをターンテーブルにのせて、ストリング・シンセサイザーの長い演奏を期待してた人たちが、「あれっ」といってもう一度針をもどすんじゃないか、と思ってね。

F：未来の音楽メディアにとって、ライブでのレーザー光線との紹合は、とても面白い可能性を示している様に思えますが。

B：パトリック（スタッフの一人）とぼくは、もうかなりのコンサートをやってきたよ。かなり前から計画して準備してたことなんだ。以前に、「ぼくたち、コンサートとレーザー・ショーを一緒にやるんですけど」と言ったら、「気違いじゃないか、何いってるんだ」と言われたもんだ。でも、ヨーロッパも事情はかわったし、ぼくはパリで活動しているけど、レーザーの可能性は全くアメイジングだよ。

F：コンサートで、あなたは聴衆とどんな方法でコミュニケートするのですか？

B：ヤマハの広告を引用すればだよ、音楽はすべての人間に共通の言語だ。だから、もし君が誰かとプレイし始めたなら、君はその人と会話をしたことになるでしょう。違った言語を持った人とでも、その人とよくコミュニケートできたか、できなかったかがわかるんだ。たとえば、きのうの一回目のコンサートでは、聴衆とのコミュニケーションがどうもうまくいかなかったけど、二回目はかなりうまく言った。ミュージシャンのプレイの違いがわかっただろう。聴衆は音を出すわけじゃないけど、何かステージとの間に相互の行き来があるんだ。つまり、聴衆の反応がフィード・バックとなって、プレイが違ってくるんだ……うまくいえないけど、マジックだよ。音楽のコミュニケーションは、マジックと表わすのが一番ぴったりだと思うよ。

F：あなたは日本の、また東洋の音楽に興味を持っていますか？

B：君きのうのコンサート行った？

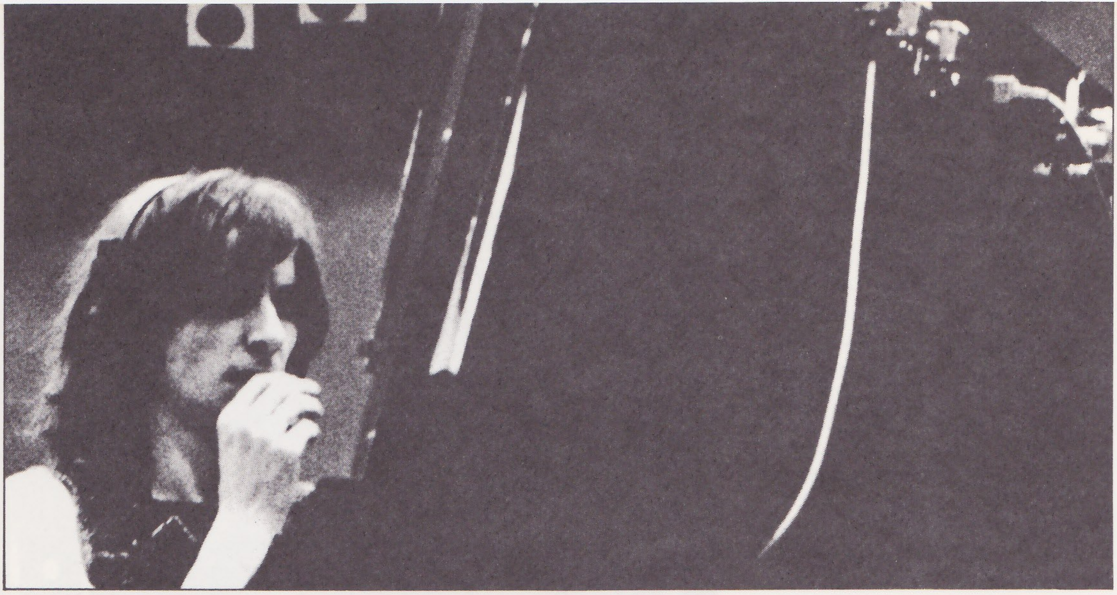
F：いえ、でもこの人（編集長）が行きました。

B：じゃあ、コンサートが日本のシンセサイザーでかなでるインドのメロディーで始まったことを話してもらえたんじゃないかな。シンセサイザーは、インドのメロディーをひくととてもいい音がするのを発見したからなんだ。勿論すべての音楽を愛しているよ。

F：たとえば……シタールなどひいたりしますか。

B：うん、シタールはジョン・フィリップス（スタッフの一人）位のときからひいているよ。

F：日本にも、ゴング、ティム・ブレイク、タンジェリン・ドリームに影響をうけたプレイヤーは沢山います……



B：そうそう、驚いたんだよ、ぼくはきのうの朝はじめて日本のゴング・ファンという人たちに会ってびっくりしたよ。日本にも、ゴングのファンがいたなんて知らなかった！ まったく、世界中どこにいってもゴング・フリークに会えるんだから、ほんとびっくりだよ、ファンタステックだ！

F：私達もゴングのファンです。

B：君達もそうなのか。ゴング・ファミリーがいかに大きかったか、だな。残念なのは、ゴングは続かなかったことだけど、ファミリーがこんなに大きくなったのだから、それでいいのかもしれないな。

F：でも、日本は、彼らにとって成功するのに困難な状況にあります……

B：そうは思わないな。まったく、世界中どこへ行っても人々は「ひどい状況だよ、いい事なんかなかなかない、よそはいいなあ、これはホントに最悪だよ」なんていう。ぼくは本当にそうだとは思えないけどね。

F：しかし、レコード会社も報道関係者も、彼らにはほとんど関心を示しません…

B：でも、ぼくはこういうレコード会社を知ってるよ。わざわざ高い金を出して、はるばるフランスから一人の男を呼んでだよ、 400人の人に無料でプレイをみせて、また帰りなさいと言うんだよ。だから、レコード会社はかなりの関心を持っている筈だと思うんだけどね。

F：でも、彼らは日本のミュージシャンにはそうじゃないんです。だから、何かあなたの経験から彼らに助言することはありますか。

B：ただ一つアドバイスできることは、もし本当に音楽がやりたいのなら、ただプレイすることだ。何もささいなことに心を悩ませないで、正しい時がきたら、それをかたちにすることだよ。ぼくだって、Egg レーベルを自分からさがしたわけじゃないよ。でもある日、誰かが言い出す。「これは君の音楽かい？ぼくはかうよ。」 ぼくは、これがおこるのを待っていたんだ。もっとやらなきゃいけないだろうかという疑問はないよ。ゴングにいた時ぼくは、ちょっとハードにやりすぎたと思う。もうぼくがゴングにいないから、そう感じるんだろうけど。

F：何も他のことを気にかけずにですか？

B：まず第一にやるべきことは、プレイすることだろう。自分が選んだ方法で、自分を表現することだよ。画家であってもそれは同じだ。まずはじめにやることは、絵を画くこと、ほかはあとでやればいいんだ。ぼくは自分の仕事を、はじめからみんな自分一人でやってきた。だから、マネージャーを持たないんだ。時々、気が狂いそうになったり、投げ出しそうになったり、すべてを忘れてしまいたい、と思うことがある。でも、何かをやりはじめると、少なくとも自分には誇りがあるし、こういう気持ちが心の中にわきおこってくる。



ぼくは今迄やってきたから、やってきたんだ、他のどんな理由のためでもない、と。

F：あなたはゴングやクリアライトに参加なさいましたが……

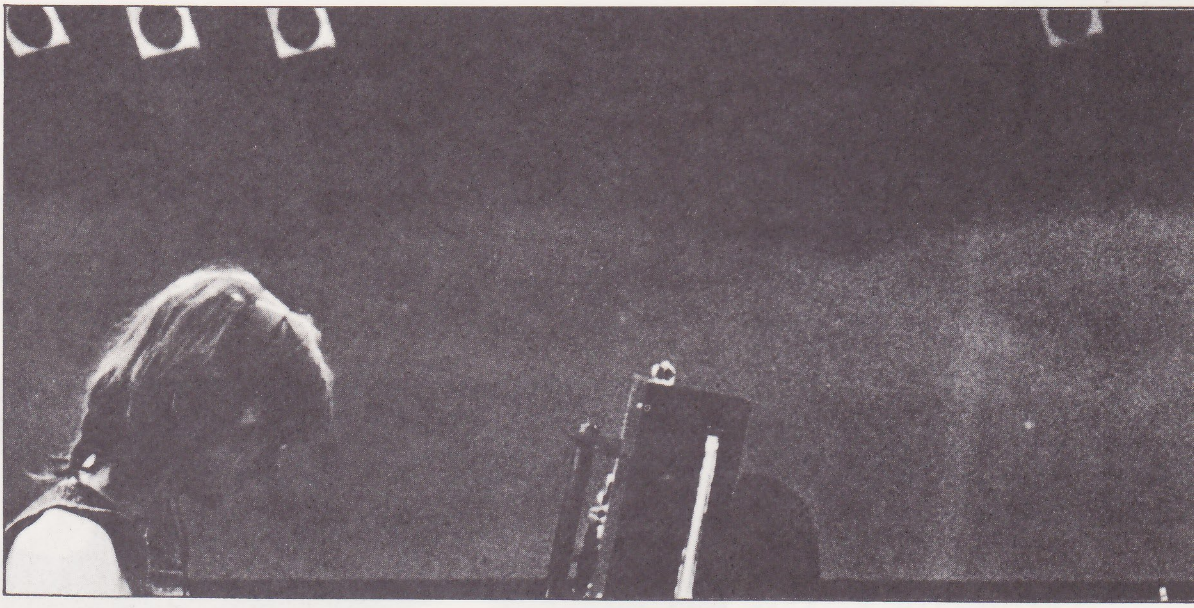
B：いや、クリアライトでプレイしたわけじゃないよ。レコードをプロデュースしただけだ。知ってのとおりぼくはエンジニアで、ある日人と会っていて、レコードを作るのを手伝ってくれ、と言われた。ヴェルトがある日ぼくのへやにきて、「レコードを作るんだけど、何かアドバイスしてくれないか」っていうんだ。ぼくはOKして、2人で一緒にレコード会社に行ってりょう解をとった。そして契約書にサインして、さあこのスタジオを使いなさい、はい、てなわけだ。また別の時に、セッションを頼まれて一緒にやった。ぼくらは友達なものだから。

F：ゴングやクリアライトの前にソロでプレイすることを考えていましたか？

B：そう。クリスタルマシーンはゴングの前に存在していた。ぼくは最初のクリスタルマシーンのテープを1971年に作った。「Flying Teapot」の前だね。そういえば、こんど日本に来たんで楽しみなことは、テープ・マシーンをパリへ持って帰って、テープを作って配ることだ。これは、レコード会社やビジネスと関係ない、プライベートな仕事だよ。同じ様なことが、ゴングとちょっと仕事したあとにもあった。レコードを作るちょっと前のことさ。連中はぼくのテープをきいて、「ファンタスティックだ。またシンセサイザーのポジションに帰ってきて一緒にやらないか」って言うんだ。で、ぼくはまたゴングに帰って、数ヶ月後「Flying Teapot」ができたんだよ。

F：あなたが参加していたころのゴングについて教えて下さいますか？

B：うわあ……今日は時間がないそうだけど、これは話してると3ヶ月はかかるなあ。ゴングはとても強力なグループで、良い時、悪い時、いろんな起伏があった。デビィッド・アレンは1968年に、ソフト・マシーンを抜けたあと、ゴングを作った。ぼくは70年代のはじめに、サウンド処理のためにゴングに参加したんだけど、シンセサイザーがやりたくてサウンド処理には急に興味を失ってしまって、グループを離れてクリスタル・マシーンを作ったんだ。後にゴングに復帰したわけだけど、しまいには、グループ内にとても強い分裂があることに気がついた。グループは死んだようで、メンバーは完全に理解し合っておらず、不安の叫びにみちていて……つまり分裂寸前だったんだ



よ。そんな中で「Flying Teapot」を作ったんだ。ぼくらのこのアルバムにスティーブ・ヒレッジを招いて作った。驚いたことに、ファミリーの一人のクリスチャン・トリッシュとデビィッドの仲はもう全然ダメだったんだ。グループ全体の雰囲気も険悪で、ついに全体が分裂した。結果は、「Flying Teapot」のすべてのミュージシャン—クリスチャン、デビィッド、ギリ、フランシス・モーズ、ローリー・アレン、ラシード、ディディエ、ぼく、スティーブ—すべてのミュージシャンがグループを去った。マネージャーが去り、デビィッド・アレンが去り、ギリ・スミスが去り、ドラマーが去り、セカンド・ドラマーは気が狂い、ベースのフランシス・モーズが去り、クリスチャン・トリッシュが去った。ディディエとぼくは、スタジオの台所のスミでささやきあったもんだ。「おい…、一体どうなってるんだ」ってね。そしたら、スティーブがギターをかきならしながらカタカタ走ってきて、例の調子で、「ハーイ、一体何がおこったんだーい？」っていうんだ。で、ぼくは「来週ギグがあるから、もう家に帰ろう」と言って、ぼくらは帰ってしまった。そしたら、ピエール（モーラン）がいて、「ぼく、新しいドラマーなんですけど。」っていうじゃない。だから言ってやったよ。「君、もう遅かったよ。」 いつもトラブルのたねになるベース・プレイヤーは、マイケル（ハウレット）が来る前に2、3人変わった。ぼくらは、それからグループを結成しなおした。デビィット・アレンの直接のリーダーシップなしにグループを再結成したことは、とても重要だと思うんだ。グループのアイデンティティーにとってね。そして……

（ここで電話が入り、中断さる。別のアポイントメントの連絡が入ったから、最後の質問をする様にとディレクターからの指示。）

F：ジャーマン・シンセサイザー・ロックをどう思いますか。たとえば、タンジェリン・ドリーム、クラウス・シュルツ……

B：ぼくはゴングにいた頃、ジャーマン・シンセサイザー・ロックを皆にきかせようとして、ずい分時間とエナジーを費したもんだ。ぼくらは、クラウス・シュルツをフィーチャーしたタンジェリン・ドリームと、フランスをツアーしたんだよ。クラウスはその頃、タンジェリンとやっていたからね。後に、ぼくは彼らをヴァージンに推せんして、ヴァージンはここからアイディアを得たというわけさ。でも、ぼくは、今のタンジェリンの音楽、そしてショウより、前の方がずうっと好きだったと言わなきゃならない。彼らは今、昔の様

にオリジナルでないことをやり始めたから。レーザー・ショウなんかも含めてね。タンジェリン・ドリームがタンジェリン・ドリームをコピーしているなんて、おかしいと思わない？　ピーター・バウマンはとてもすばらしいミュージシャンだったけど、グループをやめてしまったしね。タンジェリンの、ほんとに初期のコンサートには、まったく肝をつぶしたよ。ここにいるパトリックに聞いたら、それは彼が今まで見たフランスで行なわれた電子音楽のコンサートの中で、最もすばらしいものの一つだったと言ってくれるよ。コンサートは、フランスの14世紀にたてられた大きなカテドラルで行なわれた。そこで500人の人々は、まだ無名だったグループをきいたんだ。全くファンタスティックだったよ。



F：彼らはフランスで人気がありますね。

B：うん、すごく人気があるよ。昔の方があったけど。ぼくは、タンジェリンの音楽は大改革をおこしたと思うんだ。一握りの人々だけが、こういう音楽をやれるのでないことを教えたから。彼らはたしかに、こういう音楽を作り出した最初の人々だ。そしてたしかに、フランスではテレビをつけても、こんな音楽がバックに流れるフィルムを見ることはできないけど…Dimdididung-dung, dimdididungdung（といって、電子音楽のマネをする）ちょっと抽象化されたタンジェリン・ドリームだけど、わかる？
ぼくはクラウスが大好きだ。今はチャンスがなくて、昔程会っていないけど、とてもいかした奴だよ。ぼくがゴングをやめた時、彼はコンサート会場からまっすぐぼくのところへきてくれた。ぼくはすごく悲しい思いをしていて、ほんとにひどい状態だったんだ。彼はぼくのところにきて、肩をだいて、「心配することはないさ！」と言うんだ。

F：あなたとクラウスはとても親しいのですね。

B：すごく親しいわけじゃないけど、良い友人だ。お互いに尊敬してるし。彼は、ものごとはずっと同じままではいかない、と言ってるよ……ねえ、もし人々が君に、クラウス・シュルツの様にやりたいの、と聞くとするじゃない。で、君がノーと答える。ぼくがなぜ？ときく。そしたら君はこういうんじゃない。私はマグマみたいにやりたいの。あなたは、テリー・ライリーをめざしてるんでしょ、なんてね。

F：あなたは、ニューウェイブについてはどう思いますか？

B：ニューウェイブ？　フフーン

F：ニューウェイブとか、ブライアン・イーノ、そして、デビィッド・ボウイ。

B：デビィッド・ボウイやイーノとニューウェイブを一諸にするの？　ぼくにとっては全然ニューウェイブじゃなくて、コンテンポラリーだよ。彼らは10年も、しっかりした仕事をしてるじゃない。
ニューウェイブっていうのは、せっかちなグループで、髪を脱色して、何かぼくらが子供のころやってたようなロックン・ロールを演奏する奴らじゃない。皆がこれが新しいんだ、ていうけど、ぼくにとっちゃ何かムチャクチャだよ。レコード会社の策謀じゃない？

F：ブライアン・イーノはニューウェイブのグループをプロデュースしてますよ。たとえば、トーキング・ヘッズとか…

B：彼らはすごくいいけど、彼らをニュー・ウェイブっていう必要があるの？
イギリスでは新しいグループは、ニューウェイブとパンクに分かれるけど、イギリスのどこにいっても新しいグループが秒きざみででてくるよ。売れているのもあるけど、ぼくにはいただけないな。君がイーノ、クラフトワーク、ボウイ、ディーボなんかをさしてニューウェイブというみたいなんで、すごく面白いなと思ったね。でも、ぼくはあまり詳しく知ってるわけじゃないんだ。レコードプレーヤーやハイファイ・ステレオを持っていないからね。
自分の楽器のモニター・システムを持ってるだけだから、ぼくがきくのはテープだけだ。それも、オープン・リールのテープで、みんな自分の音楽をオープン・リール・テープにするわけじゃないから、すべてのジャンルの音楽をきくことができないんだ。

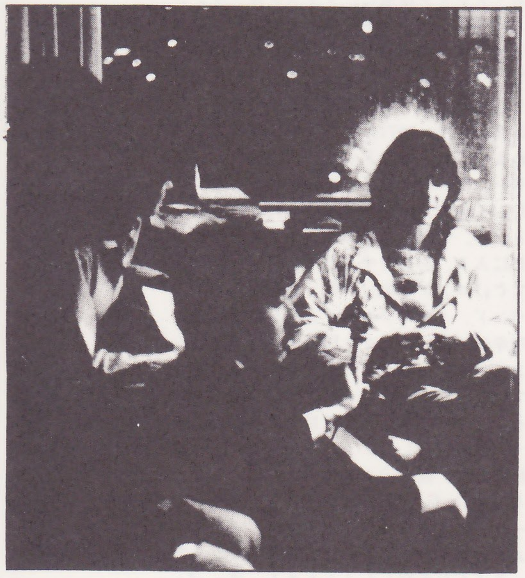
F：どんなグループに興味をお持ちですか？

B：今実際に、ぼくの大きな愛は、クリスタル・マシーンにささげられている。ゴングを抜けたあと、ぼくはパトリックと会って、一諸に大きなトリップをしてきた。そして、ジョン・フィリップスと会った。この2番目のミュージシャンと会ったことは、ほんとにアメイジングな体験だった。ゴングについてのことは、すごく特別だ。ゴングは大きなファミリー……本当に偉大なフ



ァミリーだったのだから。今のアメリカのバンドについていえば、Music & Joy にとてもインスパイアされた。それはファンケデリック、つまり、言うなればブラック・コズミック・ミュージックなんだ。♪Woo ye want the funk for you woo wa wedaghadagha, shit! てかんじですね。このバンドは、11人のシンガー、2人のベース・プレイヤー、8人のギタリストがいて、マネージャーがソングライターをプロデュースしている。リードシンガーはジョージ・コンテスっていって、この人たちの父みたいなものだ。彼らのスピリットはゴングと全く同じものだけど、彼らはアメリカン・ニグロであることのプライドを持っていることがちがうよ。ぼくは現在これが最も アメイジングなグループだと思う。彼らの音楽も





大好きだ。ぼくは、今迄多くのコズミック・ミュージックを聞いてきて、そして思うよ。ぼくは人々を起こさせる弾薬を持っているんだ、とね。

F：ありがとう、そろそろ時間がないので(フールズメイトの7号をさし出して)これさし上げます。

B：(表紙をみて)えっ、アヴァンギャルド!?(バラバラとページをめくって)出てるのはぼくの友達ばかりじゃないか！ エルトン・ディーン、ヒュー・ホッパー、ヘンリー・カウ……まだある。信じられない、すごいよ。どのページにもぼくの知ってる人がでてる。あ、デビィッド・アレンがのってるじゃないか！

F：あなたもです。ほら、ここ「New Jeal-salem」のアルバム・レビュー。

B：君、なんて書いてあるのか訳してみてよ。

F：……ゴングのシンセサイザー・プログラマー、これがいつもティム・ブレイクにつきまとう。実際、ゴング神話は偉大だった。でも、それとは関係なく、このアルバムはすばらしく、独自の音楽空間をつくっている。しかし……

B：しかし!?

F：詩はそれほど……つまり音楽ほどよくない。ウィリアム・ブレイクをベースにしているといいますが、あなたが詩をかかれたのですか？

B：そう、それで？

F：そして彼は、あなたのユートピア思想についてのコメントを書いています。Blake's New Jealsalem とは彼にとってのユートピアなのだ、と。

B：……これを書いた人、誰？

F：今、ここにはいません。

B：(考えこんで)ぼくはたとえば今、日本にきてて、色々な人と会ったり話したりする。実際、ぼくのレコードのことをわかってくれている人は少ないんだ。でも、今君が言ったことは、実際そのとおりだよ。

F：あの、これもさし上げますから(ファンタジィの号、エロスの号をさし出す)よく読んで下さい。

B：わあ、ほんとにいいの？(エロスの号をめくって)何、スパニッシュ・ロック？ アメイジングだ！……(「愛の嵐」のシャーロット・ランプリングの写真を指さして)おい！ ちょっとみんな見てみろよ！ ジャン・ミッシェル・ジァールのワイフが出てるじゃないか。
そうだ、君たち、今年の6月21日に、この雑誌に出てる様な人々が、皆イギリスに集まってフェスティバルをやるんだよ。Record Revolution て知ってる？

F：いいえ

B：7年前にもこういうことがあったんだ。その時、タンジェリンなんかも出たんだよ。今年は6月21日で、ぼくも出ることになってるんだ。

F：それはすごいですね！ 私達のビジネス・マネージャーが行くといっています。今日は本当にどうもありがとう。よい旅をなさって下さい。

END.



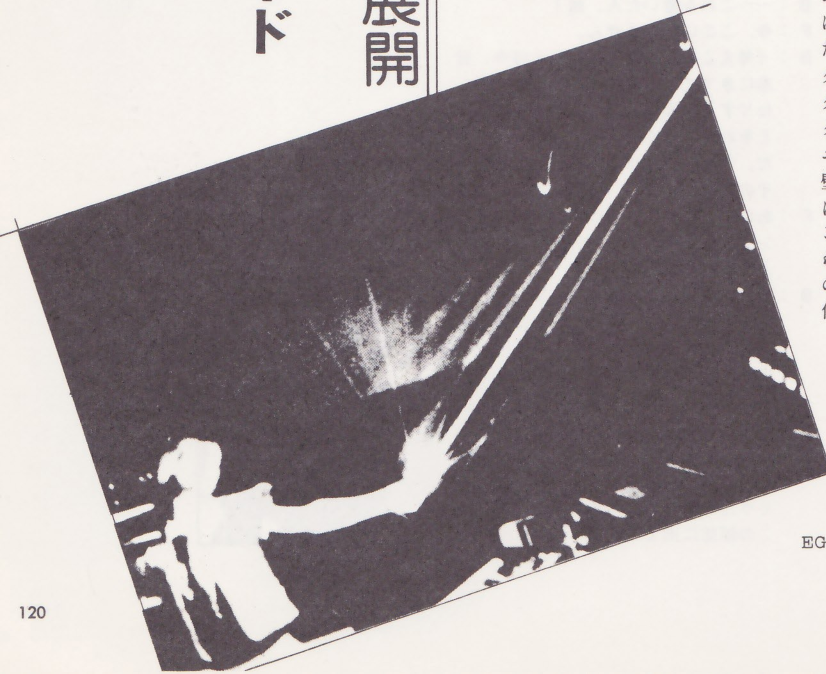
ユーロピアン・プログレッシヴ・レーベルの展開

The Most Progressive European Music Experience

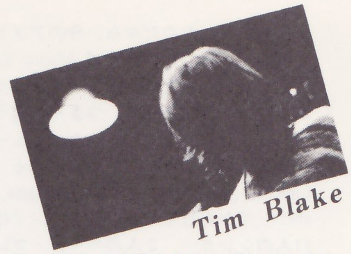
エッグ レコード

EGG RECORDS

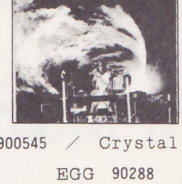
1976年に設立されたバークレイ・レコード(Barclay)のレーベルがエッグである。バークレイ・レコードの制作担当の副社長ジャン・フェルナンデスと、ファブリス・キュイタと、アーティスト達の友情が契約の基礎だという。エッグ・レコードはある才能、つまり"普通のコマーシャル系統"のものではない音楽をクリエイトしているアーティストに発表の場を与えるために設立された。フランス国内でプログレッシヴレーベルというイメージを定着させたエッグ・レーベルは、78年から海外進出を計っている。アメリカでのエッグのディストリビューションはジェム・レコードが扱う。バークレイ・レコードの国際部長とリル・ブラントの訪米により、エッグ・レコードは、これまで未発売だったギタリスト、ラリー・コリエルのアルバムの発売権を得、ピーター・バウマンとプロデュース契約を結んでいる。またイギリスではロゴがディストリビュートする。



ティム・ブレイク


Tim Blake

ゴングのあの独特の宇宙を想わせる音をスティーヴ・ヒレッジと共に担っていた、ティム・ブレイク。ハイ・T・ムーンウィドの名で、ラジオ・ノーム・インヴィジブル3部作のレコーディングに加わり、ゴング神話を完成させた一人だといえる。エッグからリリースされている2枚のアルバムの中には、ゴングの曲を彷彿とさせる曲もいくつかあり、彼の中のゴングの大きさと、ゴングでの彼の位置を表わしている。ティム・ブレイクは他に、クリスタル・マシンという自分のバンドを持っていて、ゴングとクリスタル・マシンを行ったり来たりしていたようだ。彼はロンドンの中心部にわりと近いハマースミスで1952年の2月2日に生まれた。1971年に一時的にゴングに加わるまでに、彼はトゥリーズ、スキン・アリー、ホーク・ウィンド等を点々としていた。この間、演劇学校へ通ったこともあるという。サウンド・エンジニアとしてゴングに入り、シンセサイザーを買った彼は、すぐにゴングを脱け、電子音楽を追求するバンド、クリスタル・マシンを結成した。72年の12月にゴングに戻るまではEMSシンセサイザーのデモンストレーションをしていたらしい。ゴングの三部作で謎のシンセサイザー奏者として注目を集めたが、「ユー」の後脱退し、クリスタル・マシンを再結成した。彼らのコンサートでは、もう一人のメンバーであるパトリス・ウォーレナーによるレーザーのライティング・システムが使用されたらしい。この時期、クリア・ライトに在籍したこともある。アルバム「クリスタル・マシン」は76年から77年にかけてのライヴである。ティム・ブレイクのソロとしての最初のスタジオ・アルバムは、78年3月と4月にイギリスで録音されたもので、夏にパリにあるバークレイのスタジオでミックス・ダウンされた。B面のタイトル曲は、詩人のウィリアム・ブレイクの"Jerusalem"から創り出された。ユニ・セックス的な容貌とシンセサイザーの壁とは対照的に、ティム・ブレイクの音には人間的なやさしさが含まれている。フランスの感性がとり入れられているのかもしれない。なお、今年4月にプロモーションのため来日し、関係者を集めてレーザーを使ったコンサートを行った。





EGG 900545 / Crystal Machine

EGG 90288 / New Jerusalem

フランソワ・ブレアン

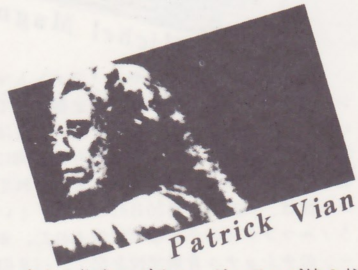


「視覚的な音」と題されたアルバムを78年に発表し、ＥＧＧレーベルのスターとなったフランソワ・ブレアンは、西フランスのルーアンの出身である。1947年９月23日生まれというから、端正なルックスにもかかわらず30を過ぎていることになる。画家兼ピアニストの父と、劇場の衣裳係の母を両親に持ったため、薬学に興味があった彼も芸術的な方向へ進むことになったらしい。12才のころには、近所の教会で聖歌を歌っていたという。ハイ・スクールにはいるとチャーリー・パーカーやコルトレーンの影響を受けたバンドで活動を始めた。ルーアンはグラフィック・アーツ・アンド・イラストレーション・スクールを67年に出た後、パリへ移り、パリ・デコレイティヴ・アーツ・スクールに入った。そして、マグマのオリジナル・メンバーのドラマー、クリスチャン・ヴァンダーのグループ、クルーシファリアスに加わり、70年まで活動を続けた。(クリスチャン・ヴァンダーはエッグからソロ・アルバムを出した。)71年になると、アメリカに渡り、ニューヨークやサン・フランシスコでスタジオ・セッションをしながら８ヶ月程過ごした。翌年パリに帰ったフランソワ・ブレアンは４人のメンバーを集めてネモ(Nemo)を結成した。彼はキーボードを弾き、バンドは２枚のアルバムを残した。75年にネモが解散するとメンバーはスタジオ・ミュージシャンとなったり、バンドを作ってツアーに出たりしたようだ。1977年になって、シンガーであり、コンポーザーでもあるベルナール・ラヴァリエールとフランソワ・ブレアンは知り合い、彼のバンドに加わり、曲も書いた。そして、フランソワ・ブレアン自身のアルバムもこの頃録音された。これにはネモのパスカルアロヨ、マーク・ペルー、エマニュエル・ラコルデールがベース、ギター、パーカッションで加わっている。複雑な音の積み重ねとシンフォニックな広がりは、彼の才能を完成させる。ミックス・ダウンは、シャトー・デルーヴィルで行なわれた。



EGG 900553 ／ Sons Optiques

パトリック・ヴィアン

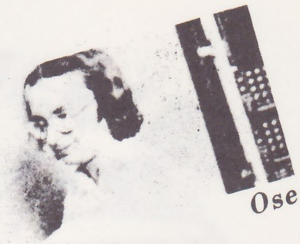


有名な作家のボリス・ヴィアンが彼の父親である。ボリス・ヴィアンはヴァーノンサリヴァンの名前で作家をするかたわら、20年前にはジャズ・トランペットを吹いていたらしい。その息子であるパトリック・ヴィアンは、パリにあるセントラル・インスティチュートで電気関係の勉強をしていたころレッド・ノイズというバンドをやっていた。1968年５月の文化革命のとき、学生が築いたバリケードに守られてソルボンヌ大学でコンサートをやったというアナーキーなバンドであるレッド・ノイズは、60年代の多くのフランスのアングラ・バンドのように前衛的なギターを弾いて、チャーリー・パーカー、マイルス・ディヴィス、ジョン・コルトレーンという人々を乗り越えていった。69年になって南フランスでフリー・フェスティバルがいくつか開かれ、フランスのロックがある意味で停滞しはじめると、アルバムを一枚出してレッド・ノイズは解散した。そしてコミンテルンというバンドが生まれたが、パトリック・ヴィアンはガイアナ、インド、バリ島などを一年ぐらい旅行した。この旅で得たインプレッションをアルバムにしたのが「騒音と時間」(“Bruits Et Temps Analogues”) である。レッド・ノイズではギターを弾いていた彼も、このアルバムではピアノとキーボードを演奏している。時の流れと旅が彼を変えたといえるだろう。テレンス・スタンプ主演の映画「HU MAN」のサントラに彼の作品が使われた。

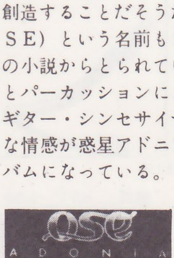


EGG 900541 ／ Bruits et Temps AnaLogues

オズ



ヘルドンのメンバーであるリシャール・ピナス、フランソワ・オジェをむかえて、鬼才エルヴェ・ピカールはバンド“オズ”の名前で「アドニア」をリリースした。恒常的な“オズ”のメンバーは、エルヴェ・ピカールだけで、彼の意志でバンドの人数は変化するらしい。つまり、今度のアルバムでは彼が３人で演奏する曲を書いたため、３人編成のバンドとなったわけである。現在26才のエルヴェ・ピカールは、フランスのロック雑誌の記者を何年間かやっていて、その雑誌のコラムで、エッグ・レコードの誕生を紹介したこともあるらしい。彼は初めベースをやっていたが、ギターをやり始め、最近はキーボードも弾くようになった。「アドニア」では彼がエレクトロニック・キーボードとギター・シンセサイザー、リシャール・パナスはシンセサイザー、フランソワ・オジェがドラムスをやっている。エルヴェ・ピカールは、フランスでトップのシンセサイザーのエキスパートであるリシャール・ピナスがいなかったら、「アドニア」をこのように完成させることはできなかったろう、と言う。彼らは綿密な話し合いをして、エレクトロニックなパーカッションに人間味を持たせるため、フランソワ・オジェにパーカッションを頼んだという。オズの「アドニア」における目的は２つある。小説家、Ｈ．Ｐ．ラヴクラフトの言った“完全に機械化されたセンセーション”に関連するもので、ひとつは機械構造のシステムから快楽を得ること。もう一つは想像上の惑星アドニアの「オルガスマシン」で音楽に匹敵する官能を与える形式を創造することだそうだ。彼らの“オズ”（ＯＳＥ）という名前もＨ．Ｐ．ラヴクラフトの小説からとられている。シンセサイザーとパーカッションによる「アドニア」は、ギター・シンセサイザーの醸し出す不思議な情感が惑星アドニアの風景を伝えるアルバムになっている。



EGG 90277 ／ Adonia

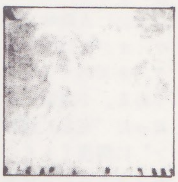
ヴァンゲリス・パパタナシュー



Vangelis Papathanassiou

アフロディティス・チャイルドでのキーボード奏者として、また幅広い音楽活動と多くのアルバムを通して名高いギリシャの天才ミュージシャン、バンゲリス。彼の「イグナチオ」もエッグから出ている。このアルバムは、フランソワ・リシェンバックの映画“キャン・ユー・ヒア・ザ・ドッグバーク”(原題“Etends-tu lés chiens aboyer ?”)のため彼が書き、演奏したものである。このアルバムの前には、フレデリック・ロッジの2本の映画のサントラを発売している。一時期イエスにいたこともあるバンゲリスの詳細については、フールズメイトでもたびたび触れているので割愛するが、確かに彼のキーボード・テクニックには人をひきつける有機的に輝く美しさがある。「イグナチオ」はバンゲリスの種々のアルバムの中でも、良質の部類に属する評判の高いものである。

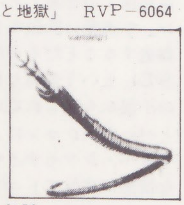




EGG 900531 ／ Ignacio

「天国と地獄」 RVP－6064

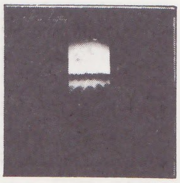




「反射率0.39」 RVP－6156

「螺旋」 RVP－6265





「霊感の館」 RVP－6312

「白羊宮の巨星／ベスト・オブ・ヴァンゲリス」 RVP－6361

ミシェル・マーニュ



Michcl Magne

「地下室のメロディ」や、「ファントマン」などのフランス映画の音楽を担当していたのがミシェル・マーニュである。彼は1956年から74年までに、109本もの映画に音楽を書いている。画家としても知られている彼は、1930年3月20日にリジューというノルマンディの小さな町に生まれた。カーンのナショナル音楽学校を出て、パリの名門コンセルヴァトワールでシモーヌ・コサーデについて学んだというから、かなりきちんとした音楽教育を受けたことになる。15才のとき、オーケストラの指揮をし、一年後にピアノ協奏曲を作曲し、またオラトリオも書いた。22才になるころには、彼は前衛派の一人に数えられていた。2人の電気技師、マルセル・ムローとジェラール・デラシュと共に人体における音と電流の関係を研究していた。1952年に彼がパリで率いたオーケストラの楽器はすべてエレクトロニクスによるものだった。同じ年、“心理学的音楽”と呼ぶものをいくつか書いた。精神的現象である恐怖、歓喜、苦痛、性的興奮等と、それらに対する肉体的反応についての研究の成果としてのミシェル・マーニュの作品には、「煮え立った湯の中の合唱鐘」(Carillon dans l'ean bouillante)や「穴のあいた記憶」(Mémoire d'untrou)などがある。1955年になるとソシエテ・デ・コンセール・デュ・コンセルヴァトワールのオーケストラが彼の指揮で彼の作品「ヒューマン・シンフォニー」を初演し、翌年からは映画音楽を手がける。そこでサブソニック（亜音速）を用いて種々の効果を生み出した。これは最近の“センサラウンド方式”と似たものである。75年から77年に南フランスのサン・ポル・デ・ヴァンスで書かれた作品の中で、78年の初めにパリで完成されたのが「ラ・テール」である。4部作「エレマン」(Eléments) の第一部で、タイトルは英語の「Earth」の意味である。続いて、水、大気、火の部も発表される予定である。このアルバムでは自然に電子楽器が使われ、東洋的音階も取り入れられた、無理のない、多彩なシンフォニーが演じられている。彼の経験と実績が相当なものであることを窺わせる。



EGG 90187 ／ La Terre

ツトム・ヤマシタ



Stomu Yamash'ta

エッグから出ているツトム・ヤマシタのアルバムは、1971年から録音は始められ、彼自身が8チャンネルのテープレコーダーで録音した本当のソロ・アルバムである。いろいろな楽器を8つのグループに演奏法や材質で分け、最初のチャンネルに骨組みとなる楽器が録音され、その録音した音を聞きながら順々にレコーディングを進めて作り上げたという。彼のスコア・ブックにはリズムのパターンと楽器のチェンジしか記入されていなかったらしい。

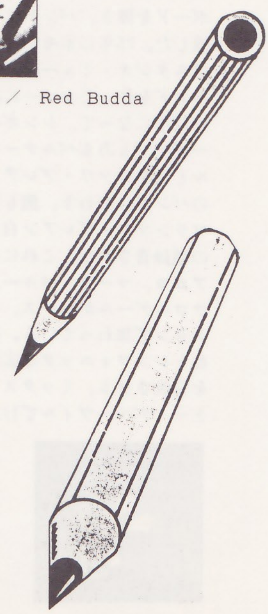
「日本におけるパーカッションの発想は単にものをたたくということから発展したものだ。100フィートの滝の落ちる水音をレコーディングしたこともあった。」

ツトム・ヤマシタ

「我々は不協和音の時代に生きており、人々はマーラーやバッハやベートーヴェン以上のものをもとめている。パーカッションの演奏と作曲はおそらくその要求を満たしそうだ。」



EGG 900569 ／ Red Budda



コンラッド・シュニッツラー



Conrad Schnitzler

エッグのアーティストの中で、最も無機質的なイメージを持っているのがコンラッド・シュニッツラーだろう。元タンジェリン・ドリームのピーター・バウマンが見つけたミュージシャンで、アルバム「コン」は彼がプロデュースしている。コンラッドシュニッツラーのバイオグラフィについては、ほぼ不明であるといえる。47年の7月ベルリンで生まれたという話もあるが、これからわかることは、彼はドイツ人らしいということぐらいである。また、彼は"インターメディアリスト"として生まれ、生まれたときからあらゆる職業、窓掃除夫、運転手、ペンキ屋、ヒッピー、密輸業者等の知識を持ち、さらに特筆すべきことはヨセフ・ボイの最初の子弟である、という。ベルリンについては、彼はベルリン以外のところで生活するのはとんでもないそうで、コンラッド、シュニッツラーにとってヨーロッパの中心に位置するこの都市は西半球の中で最も東寄りにあり、ヨーロッパで最も非凡な都市であり、インターメディアの音楽にふさわしい都市である、ということだ。インターメディアについて、「コンラッド・シュニッツラーは、決してひとつのメディアでは満足しないし、またできない。彼の創造性はいろいろな芸術を総合したものを目指してはいるが、その芸術は決して融合してはならない。」音楽について、「彼が影響を受けたのはアーノルト・シェーンベルク、ピエール・シェファー、カールハインツ・シュトックハウゼン、ブルースやゴスペル、チャック・ベリー、ジミ・ヘンドリックス、ピンク・フロイド、タンジェリン・ドリームなど。」アルバム「コン」について「これは独特のキャラクターを持っている。今日のリスナーのセンスに半分だけ応えたものだ。ポピュラー・ミュージックではあるが、決してロック・ミュージックではない。ロックへの傾向はあるものの、ルーツは中部ヨーロッパの音楽にある。当然の結果である。」

以上のことと、彼の化粧をした顔と、アルバムがベルリンのスタジオで録音されたことから、コンラッド・シュニッツラーがただのミュージシャンではないことがわかるだろう。期待してしまう。なお、クラスター、タンジェリン・ドリームの創設メンバーのコニー・シュニッツラーとコンラッドは同一人物である。



EGG 90184 ／ Con

エッグ・レコード

ティム・ブレイクを筆頭とするエッグ・レコードのイメージは、シンセサイザー等の電子楽器を駆使した、比較的古典的意味での"美しさ"を探求する、といったようなものである。テクノロジー自体を問題の中心に置いた、いわゆるプログレッシヴ・ロックがほとんどだと言える。その水晶のような音のかけらは、内部宇宙の幻想を忠実に具体化していく。シンセサイザーの無機質状態の響きは研ぎすまされた歯先をもっている。純度の高いキラキラした固い歯である。私達を日常性から断ち切り、純粋な夢へと解き放つ。エッグのアーティスト達は夢織人という名前の、職人だという気がする。天賦の才能で楽器を操り、音を織っていく人が多いように思う。彼らのほとんどは腕のいいミュージシャンであり、彼らの仕事は完璧だといえる。テクノロジーを材料に添加した作品は、ノスタルジーを越えて未来への想いさえ満たしてくれる。たしかに、時には「やすらぎ」が必要だろう。エッグ・レコードのアーティスト達はそれを供給することのできる、貴重な存在だといえる。大部分が個人で活動していることも、彼らの才能の偉大さを示しているのだろう。

ところで、エッグ・レコードの卵は、ボイルド・エッグであることに、もう気がついていますか？

(瀬沼　俊隆)

Christian Vander

マグマのオリジナル・メンバーで、ドラマー、クリスチャン・ヴァンダーは、現在マグマのメンバーである3人と共にソロ・アルバムを制作した。74年の4月に録音されたこのアルバムは"Tristanet Inseult"の伝説を映画化したもののサントラである。



EGG 90171 ／ Tristan et Iseult

Popol Vuh

ジャーマン・エレクトリック・ミュージックのパイオニア、特にシーケンサーの使い方のうまいポポル・ヴーのサントラが、エッグから出ている。このアルバムでは、シタールやフルートが使われて、彼らのアコースティックな面を聞かせてくれる。なお、この映画はWerner Herzog が監督である。最近「Nosferatu」という、サントラ盤がもう一枚エッグからリリースされた。





EGG 900536 ／ Coeur de Verre
EGG 900573 ／ Nosferatu

Alain Markusfeld

ピアノとパーカッションだけのバックでギターを弾き、アレンジや作曲もする彼のアルバムはエッグから2枚出ている。彼独特のギターのチューニングをはずし、速くて複雑な旋律のところでチューニングするという方法をもっている。





EGG 900528 ／ Le Dèsert Noir
EGG 900556 ／ Platock

Larry Coryell

ニュー・ヨークとモントルーで75年76年にレコーディングされたラリー・コリエルのアルバムが、バークレイの国際部長の訪米によりエッグから発売された。彼がマイルス・デイビス・グループに入る前の録音で、サックスにマイク・ブレッカー、デイヴサンボーン、ドラムにトニー・ウィリアムス、というそうそうたるメンバーで、スティーヴ・カーンが、彼と共にギターをデュエットしている。



EGG 900558 ／ Differences



EGG 910007 Michel Madore ／ La Chamre Nuptiale



EGG 90291 ／ Roedelieus Jardin Au Fou


Mauro Pagani



特集　ROCK MUSIC IN

ITALY

●マウロ・パガーニの独白

●イタリアン・ロック展望

1979

元ＰＦＭの名ヴァイオリニスト

マウロ・パガーニ、デビュー・ソロ・アルバム「地中海の伝説」を語る。



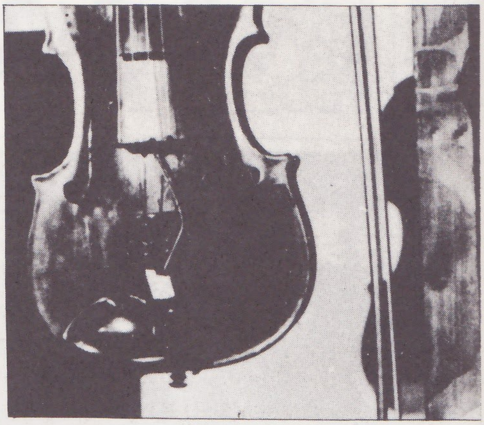
「地中海の伝説」 GXF 2041 （キング）

私はとても早くから音楽とのかかわりを持ちはじめた、と云うのは10才からバイオリンを習い始めたからだ。私はクラシックのバイオリンを10才から17才迄７年間学んだ。その間に私の友人達、若いミュージシャンと共にブルースやロックの演奏も始めたのでバイオリンのクラシック音楽は少し放棄した。それから数年たってバイオリンを再び始め、２、３年学んでからＰＦＭとやり出した。しかし、私にとってのＰＦＭ時代は、恐らく100％の可能性のうち、たった１％しか発揮できなかったように思う。そのため、本来の自分を取り戻すのに２年という歳月を必要とした。私は、ＰＦＭのような有能なミュージシャンである友人達の助けなしで独りで働きながら、２年前から、云わば最初からやり直すことを決めた。彼等とは度々逢う等まだ非常な友情を持っている。私とＰＦＭとの分離は喧嘩や不一致によるものではなく単に私が違ったことがしたかったからなのだ。

私はこの２年で前はするのが困難だった色々なこともまたする必要があった。この２年の間私は他の音楽研究者のグループと一緒に働いた。その仕事は学校での音楽教育で、私は国立学校やミラノの他のミュージシャン達と準備し機能させた学校でも教えた。なぜなら学校で普通行っているものよりもずっと完全な方法で子供達に音楽を教えることが極めて重要であると思っているからだ。より優れた音楽文化は一層豊かで、一層複雑ではあるけれどいつも将来にもっとスペースをみつけるためにますます創造的でもある音楽様式を子供達に認めさせるからだ。そして今の世の中では子供の学校教育の中で音楽文化はその他の多くの勉強と同じ位重要だと思うからだ。

私は、私達が地中海音楽と呼んでいるタイプの音楽をよく勉強するのに時間が必要だと考えＰＦＭと別れた。私がしている音楽の中にも、どのミュージシャンがしている音楽の中にもその本当の音楽文化の根があることが極めて重要だと私は思うからだ。そしてこの地中海文化の中にはアラブ音楽の大きな成分がある。なぜならこれはアラブ人達が数千年の間地中海沿岸の全ての国々と接触し、足跡と種子を残しそしてそれ等が各国で成長したからだ。私はこの２年間、前述のような仕事をしたりこれ等のことを勉強しながら過した。それからソロ・アルバムを作った。

今回のアルバムには、多くの空間が詰めこまれている。私の所属しているレコード会社の何人かは、私の演奏パートが少ないと指摘した。が、私はそんなことは意に介さない。私は自分のレコードを“聴衆に感銘を呼び起こすヴァイオリニストの競技”などとは思ってもいないからね。ただ、私自身が描いた地図のようなものを、力を貸してくれるミュージシャンたちと一緒にめざそうとしていただけだ。別の言い方をするなら、デメトリオは歌うためにやって来た彼自身でならねばならないし、私がデメントリオの声色を使うわけではないのだからね。不思議に思えるだろうけど、私自身このレコードについて語るのは至難の技なんだ……要するに……タイトルひとつを例にあげても、そこにドラマがあった。３、４回タイトルを変えたんだ。レコーディン

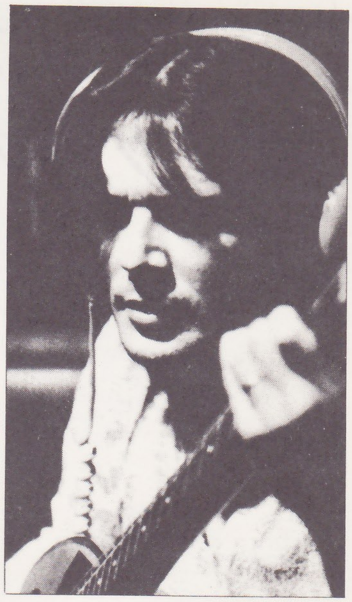


グを始める前のタイトルは「ロンゴバルドとサラセン」だったが、あとになってロンゴバルドの部分が空中分解してしまった。──ロンゴバルドよりサラセンの方が、より大きな比重を占めていたからね──で、イメージを還したところ、最終的に残ったのは「マウロ・パガーニ」これだったってわけさ。本来はこんな風にしなければいけなかったかも知れないな──「マウロ・パガーニ、ブレーシア地方のキアリリにて1946年２月５日出生、かくかくしかじかの経験をして現在33才。職業ヴァイオリニスト……」──。

このアルバムにはエウジニオ・ベンナートのムジカ・ヌォーヴァにいるテレーザ・デ・シオが協力してくれた。以前テレーザの歌を耳にした時、彼女が自分の声をまるでひとつの楽器のように使うことに心打たれたのだ。彼女は量り知れない創造力の持主だ。このアルバムの中で、彼女の声とヴァイオリンのソロが出てくる最初の部分が

一番気に入っている。この曲にはアレアの3人のメンバーと、カンツォナール・デル・ラツィオの2人が参加している。これが好きな理由は、この中に様々な要素が少しづつ溶け合っているからなんだ。ふたつのモードによって拡がっていくひとつの不変的なテーマ。最初の部分には、より都会的な発展があって、そこからトルコの市場の雰囲気へと移行してゆく。それからナポリ方言で歌われるテレーザの歌が出てくるが、その部分はギリシアの楽器バズーカを2台使用して演奏されているので、韻律はナポリ的というより、むしろバルカン半島のそれを思わせるのだけれど。また、オーボエの即興部分は、7世紀のイタリア的手法だ。

次作は私自身の内部に存在する言葉を基調にして製作するつもりだ。それと、次に探追してみようと思うのは楽器をもっと違う方法で演奏するということだ。もしかしたら、等1作よりきっちりと準備された部分も出てくるかも知れないし、個々の創作は、別の方法で利用されていくだろう。私と楽器、また私と他のミュージシャンたちとの関係は、長さ、構造などそれぞれの手段に応じて相対的なものとなっていくはずだ。私のレコードは、色々な意図の見い出せ





るレコードであると思う。しかし、多分あまり笑いのこぼれないレコードだろうな。私は、音楽の中に笑いを盛り込むことができたら素晴しいと常々考えている。だから私はフランク・ザッパの熱狂的なファンなのだ。しかし、この私のレコードは金額とか命題とか提案を要求していたわけではない。1978年に私がもっていたものを、自己を見つめながら創りあげたものなのだ。この中には、言葉やモードによって表わされているひとつの飛躍がある。つまり、私の生活空間そのものだと言わねばならないだろう。そして、33才の己れの中に存在しているもの、それまで我々が為してきたこと、もうひとつ、我々が毎日見て暮らしてきているもの……。

私はフランク・ザッパを崇拝しているが、彼の素晴しいレコードは1万枚しか売れないのに、ビージーズのそれときたら30万枚の大台だ。私は、聴衆に対しては怒りを込めたことはない、ただミュージシャンにはげっそりさせられることがあるだけだ。愚にもつかない音楽を演奏するミュージシャンには、何の期待も抱いていない。彼らは無能なジャーナリスト連中に取り入るだけで、音楽そのものは何も分っちゃいないのさ。残念ながらディスコ・ミュージックは世界的病気になったけど次第に弱まりつつあるような気がする。早く終るよう期待しよう。

私がソロの道に立ち向かおうとしたのはミュージシャンをすることが、私の務めであると本当に思ったからだ。私の内部に持っているものを表現したい、作り出したいと云う望みを投げ入れることが出来るだろうと感じ、上手にすることが出来るだろうと感じることが出来る唯一のものであると云う意味で。私は音楽とは、君自身の内部にある何ものかを表現する方法だと思っている。数多くの人々にとっては、最も豊かな表現方法になり得るだろう。はっきり言ってしまうと、普段の対話よりずっと豊かなものと言えるだろうね。音楽は人々と通じあう信じられないような媒体であると思う。私は他のことは出来ないからずっとミュージシャンとしてやって行くつもりだ。しかし人々は、音楽というものを文化的にねじれたものと解釈してしまっている。過敏な神経で受け取られているのが現実だ。現在では音楽を提供する構造自体が、音楽というものに消費物としての役割を与えようとする傾向にあるのだ。ゆえに人々は音楽を生活のリズムから湧き出てくる輝かしいものとは考えようとしないのさ。まるで、ひとつの事実の資料か、ひとつの生産物といった風に扱われてしまっている。

（マウロ・パガーニ）



イタリアン・ロック界の展望

北村　昌士



プロローグ

久しぶりにイタリアのロックについての集中的な記事を掲載することになった。今回の最も大きな目的は、イタリアというとてもカソリック支配の強い、現代にあってはいささか時代遅れの観を呈するこの国のロックが、今日的な文化を推進するにあたってどれだけ大きな力を持っているのかということだ。もちろん、多くの場合において、同時代の産物であるロックにそれほど違いのあるわけがない。しかしここではとても異質ないくつかの部分をさぐり当てることができる。

ひとつには、あらゆるロック・ミュージシャンは、イタリアでは芸術家であるということ。なぜならイタリアではカンツォーネの流れをくんだポピュラー・ミュージックが、音楽的なエンターテイメントの大衆的な部分を担って余りある存在だからである。英米を中心としたディスコ、ポピュラー・ミュージックもしっかりと浸透している。日本では、1979年のクランプス・レーベルのアーティスト（アレア、アルティ＋メステエリ）以来久しく国内でのイタリアン・ロックのレコードは発売されていない。非常に残念なことだが、日本のコマーシャリズムは、彼らの音楽上の魅力を、メディアを通じて多くの人々に広めることができないようだ。よって少しばかりの耳のあるファンは、困難な輸入盤の購入と極めて少ない情報収集に頼りながらイタリアのロックを聴いている。需要と供給のバランスは大きく歪み、馬鹿々々しい位に高価なレコードが何種類もある。

こうした状態は一刻も早く解消してほしいものだ。なぜなら客観的にイタリアのロック・ミュージックが非常に高度な技術と音楽性を有していることは疑う余地のないところだからである。少なくとも多くの人々が、イタリアの音楽が過去、現在を通じてヨーロッパで最も良質の要素を創造し続けてきていることは知っていると思う。ロックの領域においても、それは確固とした既成事実なのである。（この後、ゆっくり説明しよう）

尚、この特集にあたり、イタリアン・ロックの明晰な認識に基いて久々の国内発売を実現したキング・レコードの藤崎氏による好意的な情報提供に感謝します。実際とても勇気づけられましたから………。



1．シンフォニック・ロックは何処へ…

イタリアのロック・グループが、総合的に他国のそれと一線を画していることといえば、それは“ロックン・ロール文化”から殆んど影響を受けていないということだ。イタリアをレポートのために訪れたイギリスの音楽記者クリス・ブレイザーはメロディ・メーカーの紀行文の中でこう書いている。

「イタリーにはロックの伝統などは存在せず、我々になら充分理解し得る“ロックン・ロールのスピリット”は、彼らにとって全く理解し得ないものだ。イタリー人にとって、ロックとは例外なく国外の事象であって、彼ら自身の音楽的、また全般的文化伝統とは何ら関連性をもたないものであるが、しかし70年代は、こうした問題をかなり表面的にする事実が見出しはじめている。

60年代は、イタリアはアングロ・アメリカの影響に対し開放的であった。しかし70から72年にかけて、人々の嗜好も態度も変化し始めた。ラジオのリクエストでは自国の伝統的な音楽が増え、シンガー・ソングライターに人気が集った。[註1]イタリアが政治的アイデンティティーを得るためにも、他国の文化を受け入れるかわりに自国の文化のアイデンティティーを求めることが最良策とみなされたのだ。」

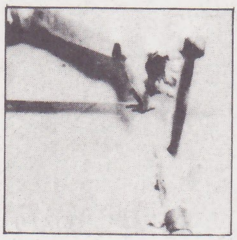
実際、イタリアのロックに接して過去にもまともなロックン・ロール・グループに出会ったためしはない。ＰＦＭ、バンコ、フォルムラ・トレ、レ・オルメ、アレア、オザンナ、ニュー・トロルスといった成功したロック・グループはすべて、通常私達が“プログレッシヴ・ロック”と便宜上呼んでいる、シンフォニックで多様性に富んだ構造を有する音楽性であることに驚かされる。これはもし仮りに彼らに対して強い影響を及ぼした“ロック概念”なるものがあるとしたら、それは間違いなく別系統からの流入であると考えるべきだろう。

おもしろい証言がある。イタリアで唯一の週刊ロック雑誌“Ciao 2００1”の記者はこう言っている。

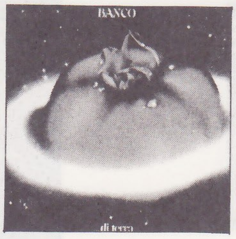
「イタリアにとっての英国のロックとは、ジェネシス、ジェスロ・タル、イエス、キング・クリムゾンを意味する。驚くべきはイタリアがジェネシスを“発見した”ということだ。1971年に彼らが初めて訪れた時、それもピーター・ガブリエルが派手な衣装を着ける以前に。それは素晴らしい成功だった。イタリアはジェシネスにほれ込んだし、ジェネシスはイタリアにほれ込んだ。けれど彼らはここで演奏することを恐れていて、我々は74年以来、彼らのコンサートを観ることができなかった。[註2]」

イタリアの人々は、ロックン・ロールのビートを持たないロックを望んでいるということか。彼らの精神的欲望の内には、アングロ・アメリカのスピーディズムを潜在的に拒んでいるといえるようだ。彼らのアイデンティティーを求める心理の内には、西欧の伝統的なリズムとメロディー——クラシックや宗教音楽の要素を持ち込みたがっているようだ。そしてそれらを着実に踏まえた上での高度な技術的水準を求める傾向がある。イタリアのミュージシャンは、聴衆に３分のシングル曲よりも20分以上の組曲を要求されるのだ。

70年代のロック・シーンにおいて、イエスやＥＬ＆Ｐと並び称される大成功を収めたイタリアの２大グループ、ＰＦＭとバンコは、こうしたイタリアン・ロック気質を見事に象徴するグループといえるだろう。シンフォニック・ロック——この２つのロック・バンドは、まさにこの呼び名にふさわしい、正統的で高度なテクニックを持ったグループである。ＰＦＭは初期にはルチオ・バティスティのバック・ミュージシャンや、ありきたりのポップ・グループ“クウェリ”のメンバーとして活動していたが、本質的にはジャズを学んだミュージシャンだった。しかしＰＦＭのモデルには、ジェスロ・タルとジェネシスが考えられていた

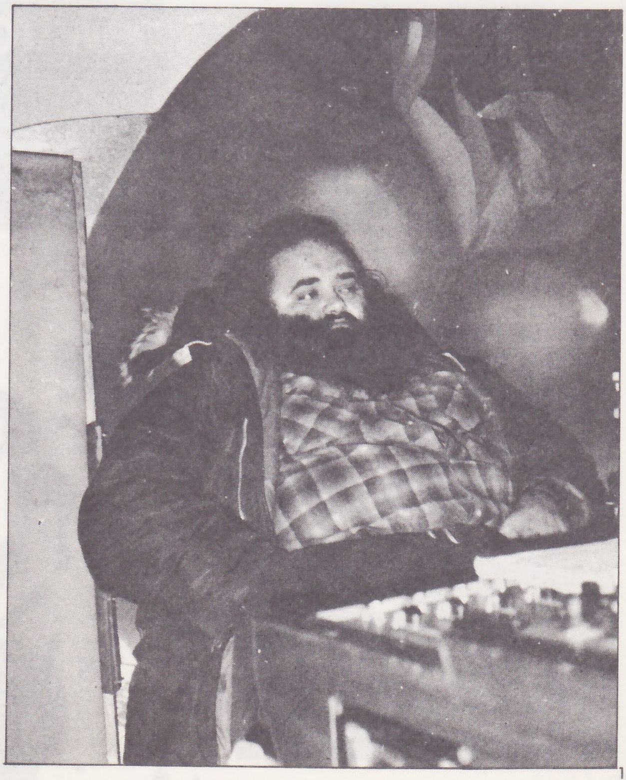


「As In A Last Supper」



○バンコ　「Di Terra」





○イタリアの２大グループバンコ（右）とＰＦＭ

という。実際に初期のＰＦＭには、ジェネシスのクラシカルなアンサンブルが多大な影響を及ぼしている。しかし、現在古巣のヌメロ・ウーノ・レーベルから離れ、イギリスのマンティコアとも手を切ったＰＦＭは、非常にジャズを意識し、またよりアコースティックな方向へと進んでいる。（次章参照）一方のバンコは、ＰＦＭとは全く対照的によりクラシック・ミュージックを強く意識した前衛的な方向を目指している。ジェネシスの作風をコンセプトにまで持ち込んだ76年の作品「As In A Last Supper」（最後の晩餐）はその最たるものとして挙げることができる。この作品に続いて78年に発表した「Di Terra」というアルバムでは、スカラ座のオーケストラと共演した宇宙的シンフォニアを高度な作曲法によって、とても真面目に創造している。最新アルバムを近々発表するというバンコは、再び世界に名乗り出ることになるかも知れない。

ＰＦＭ、バンコほど世界的に名前は知れていないグループだが、それにもかかわらず非常に高水準のシンフォニック・ロックを演奏するグループとしてレ・オルメ、ニュー・トロルス、オザンナ、アクア・フラジーレ、フォルムラ・トレ、ロカンダ・デル・ファテなどの名前を挙げることができる。(Fool's Mate Vol 3, Vol 4, Vol 6 参照）これらの美しく知性的な音楽性を秘めたグループのうち、６月にようやく日本でも発売が決定した２つのグループ、オザンナとニュー・トロルスについて再び触れよう。共に70年代のイタリアン・ロックの歴史で欠くべからざる働きをした重要なこの２つのベテラン・グループは、奇しくも現在まで数度の解散、メンバー・チェンジを乗り越えて活躍している。オザンナは、フォニット・レーベルから移籍し、イタリアＣＢＳより「Suddance」という最新盤を発表し、国内のロック部門の最優秀アルバムに選ばれた。またニュー・トロルスの方は、イタリアＷＥＡから最新作「アルデバラン」を発表し、ヒット・チャートのトップに昇りつめるほどの大成功を収めた。この２つの実力派グループの日本にお目見えするアルバムは、共に70年代の初期のイタリアのロック・シーンを完璧に象徴する素晴らしいシンフォニック・ロック・アルバムなのである。オザンナの「ミラノ・カリブロ・９」、そしてニュー・トロルスの「コンチェルト・グロッソ・パートＩ」は、通常のロック・アンサンブルに加えて、ストリングス・オーケストラが極めて重要な役割りを果たしている。ＰＦＭのデビュー・アルバムが与えたあの新鮮な衝撃に加えてこの２枚に接するならば、５年以上の歳月は完全に消滅し、イタリアン・ロックの出発点にあたる作品が、どれだけ素晴らしく創造力に富んだものであるかが分かろうというものだ。もしもヨーロッパのロックの本質的な回帰の対象が、クラシック音楽にあったとしても、それは全ての芸術家が自らのエゴの中へアイデンティティーを求めていくように、とても自然なものだといえるだろう。もしも英国のジェネシスやキング・クリムゾンの音楽がロックンロールよりも魅力的に感じる人々が、イタリアン・ロックを知らずにいたなら、それは本当に莫大な損失であろう。

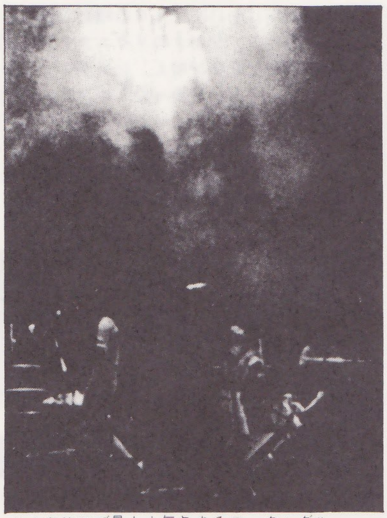
註１　２章参照
註２　74年以降のイタリアでは、ロック・コンサートがキリスト教党系の右翼にひんぱんに防害される。死者が出ることもしばしばあるという。



○オザンナ「ミラノ・カリブロ９」　キングGXF－2042



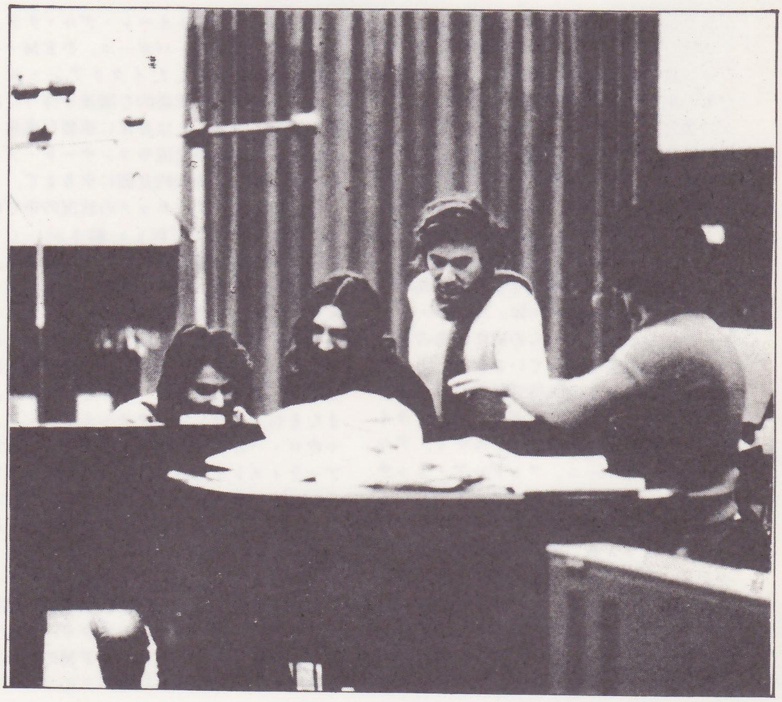
○ニュー・トロルス「コンチェルト・グロッソ・パートＩ」　キングGXF－2043


○イタリアで最も人気のあるロック・グループ、ジェネシス


○オザンナ


○ニュー・トロルス

2. コミュニズムとロック・シーン

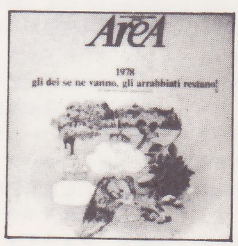


60年代に存在した英国やアメリカへの関心は、70年代に入ってイタリアの若者の間から急速に薄らいだ。社会的動乱が、他国の平和的な物質文明の中から生まれる〝楽しみ〟から彼らを遠く隔ててしまったのだ。歴史的な説明をするならば、イタリアは今世紀初頭にようやく統一を成しとげた、ヨーロッパの中でも極めて国家内の結束力の弱い不安定な国である。特に、彼らが現在のような西欧民主主義国家に生まれ変わる以前、1922年から、世界大戦の敗戦とムッソリーニの死の時まで、長いファシズム国家としての前歴を持っている。戦後のイタリアの民主的内閣は、現在まで1年に1・5回の割合で交代しているという。ヴァチカン教皇庁の支持する右翼系のキリスト教民主党は、ファシズム時代のレジスタンスの伝統を受け續いだ強屈な多数の分裂状態にある左翼との連立内閣によってようやく形ばかりの与党として短命な指導者を送り込んでいるに過ぎない。この根深い政情不安が、70年代の経済危機と合致して現在のような状況をつくり出していった。1969年の秋、一連の重要な労働者の組合の勝利が、以前の低い賃金を欧州一般の水準に引き上げることに成功した。しかし、これまでの繁栄していた安い輸出品の値段も引き上げられてしまい、逆に多くの失業者が生まれた。1973年の石油危機はその悪い状態をより拡大し、現在まで失業者は常に 200万人以上という。こうした状況にも関わらず、イタリアの社会変革は未だ行われていない。国内には極左共産主義者と絶望した市民、またそれらを圧制しようとする右翼との勢力の間に、激しい政治的暴力が渦巻いている。世界のマスコミを騒がせたモロ氏殺害事件を引き起こした〝赤い旅団〟や武装プロレタリア中核のような極左集団は、50件以上の暗殺と30数件の爆破事件、46件の誘拐事件を既に起こしている。もはや、イタリアにおける政治的暴力は日常的な社会問題なのである。

「芸術も、文学も、音楽も、すべてはイタリアの政治的崩壊に関連している〝病める小枝〟だ」

イタリアのトップ・グループ、バンコのリーダーである、フランチェスコ・ディアコモはいみじくもこう語る。そしてロック・ミュージックもいやおうなしにその小枝の1本として政治と深い関わりを持ち続けてきた。ロック・コンサートのように多くの人の集まる場所は、最も政治的暴力の介入が激しい。事実、海外のアーティストがイタリアでコンサートを催す事は、3年前から完全に不可能だという。1975年のルー・リードの公演では、場内で暴動が起きて警官が出動、催涙ガスと鉄パイプによって何百人もの死傷者を出した。他にも、ボブ・ディラン、サンタナなど、アメリカのビッグ・アーティストは軒並み大騒乱を起こして本国に逃げ帰っている。

イタリアの国内のミュージシャンは、このような状況に対しそれぞれ独自の対処の仕方を示しているようだ。ロック・ミュー



アレア（上）と最新アルバム
「1978 Gli Dei Se Ne Vanno,
Gli Arrabbiahti Restano！」



ジシャンの側の政治的見解も必要である。
　当然ながら、イタリアの誠実なミュージシャンは一様に政治色が強い。多くの若者たちの前で彼らを説得する力量とメッセージの強烈さにおいて、いくつかのミュージシャンは下手な政治屋よりも強い指導力を持っているのだ。高度なテクニックと抜群のインプロヴァイズ・エネルギーによって最も早くから成功したジャズ・ロック・グループ、アレアはその中でも著者な存在である。彼らをデビューさせることに成功したクランプス・レーベルは、デレク・ベイリーやジョン・ケイジらの前衛音楽の領域でも強い影響力を持っている会社であり、有識層の若者からの支持で活動している。アレアのほかには、シンガー・ソングライター、ユージェニオ・フィナルディ、アルベルト・カメリーニ、アンドレア・トッチ、ロベルト・チオッティ、ルチオ・ファブリなど、政治的主張を歌詩に中の盛り込んだ〝プロテスト・シンガー〟をはじめ、カンツォネーレ・デル・ラツィオ、ベラ・バンド、スキアントスといったロック・グループのアルバムも発表されている。日本で発売されたアルティ・エ・メスティエリは既に解散してしまっているが、アルティのような高密度の音楽性はクランプスのアーティストのどのアルバムにも一様に発見し得る。特に、クランプス以前から活躍しているカンツォネーレ・デル・ラツィオのようなベテラン・グループは、元ＰＦＭのマウロ・パガーニなどとも密接な交流を持ち、一時パガーニを正式メンバーに加えたこともある優秀なロック・グループで、民族音楽の領域からも積極的な音楽的吸収を進めている。また、トニ・エスポジートのような前衛的な作曲家、クラウディオ・ロッキも、新たにクランプスに加わってアルバムを発表している。

　アレア、カンツォネーレ・デル・ラツィオ、そしてマウロ・パガーニ、ＰＦＭ……1978年には、こうしたイタリアン・ロックの一群が非常に組識的な関連を持った活動を行っていることは非常に重要な事象といえよう。彼らの交流やコンサート・プロモート、そして音楽的な面に至るまで、ここ数年のイタリアのロックの状況の中で最もクリエイティヴで新しい動きがいくつかの作品を通して収束しているのである。
　ＰＦＭのマネージャーであり、またイタリアでのロック関係のコンサート・プロモーターとして有名なフランコ・マモーネは、ヌメロ・ウーノ・レーベルからＰＦＭを独立させ、新たにZooレーベルを設立した。またそれと並行して、マモーネはアレア、マウロ・パガーニ、ペペ・マイナといったアーティストを集めて、イタリアのポップ・シーンで最大の規模を持った大レーベル、ＣＧＤの下に、アスコルト・レーベルを設立した。２つのレーベルはいうまでもなく、ＰＦＭとアレア、そしてマウロ・パガーニのための、より自由で創造的な活動を意図している。特に約４年ぶりにクローズ・アップされることになった元ＰＦＭのヴァイオリニスト、マウロ・パガーニのソロ・アルバムは、バック・ミュージシャンとしてアレア、ＰＦＭが殆んど全曲に顔を出した、イタリアン・ロックの一大スーパー・セッションとなった。彼らのアルバムで聴かれる熱のこもったインプロヴィゼイションは、現在の混迷するイタリア社会を真正面からとらえ、ロックが最も政治的なエネルギーと強く接触した際の動的な可能性を打ち出した結晶である。彼らの背景には、クラシック・ミュージックと、ジャズと、そして民族音楽が同居している。特に、ここ数年来、民族音楽の面からのイタリア音楽のアイデンティティー、ひいては地中海全域に及ぶ歴史的な同一意識を生み出そうとするイタリアのミュージシャンの意気ごみは素晴らしいものがあるようだ。
　フランコ・マモーネと並ぶ大物のプロモーターにデヴィッド・ザードがいる。彼はロック・グループのバンコや、カンタウトーリ（シンガー・ソングライター）では、アンジェロ・ブランデュアルディという、共にイタリアで絶大な人気を持つアーティストのプロダクションを持っている。特に、現在大御所カンタウトーリ、ルチオ・バティスティに迫る人気を持つブランデュアルディは、イタリアで新しいタイプのヒーローになりつつある。彼もやはり、民族音楽から得たインスピレーションを、巧みに人々への勇気づけ、そしておとぎ話やファンタジーに昇華する芸術家肌のシンガーで、彼のアルバムは英国でも発売されせいるほどだ。ブランデュアルディが、彼のヴァイオリニストとして腕前を発揮したセッション・ワークもかなりある。例えばバンコの「As In A Last Supper」をはじめ、ロベ



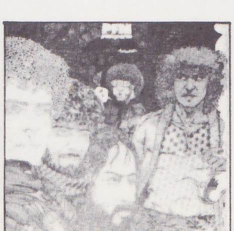
マウロ・パガーニとその仲間

Canzoniere Del Lazioのステージ風景



Canzoniere Del Lazio
／Sprito Bono





ＰＦＭの最新作
「Passpartu」

ルト・ヴェキォーニとウカンタウトーリのアルバムでは、トニ・エスポジートと共にかなり難解な演奏を行っている。古典的で土着の伝統を現代のリアリティーにまで高めた重々しいアコースティックミュージックを演奏するブランデュアルディやロベルト・ベッキォーニは、プロモーターのザードが育てた新しい分野の音楽家といえる。同じシンガー・ソングライターの正統的な流れ、ルチオ・バティスティやリッカルド・コチャンテ、元フォルムラ・トレのアルベルト・ラヴィウス、ジャンニ・ベッラ、ウンベルト・トッツィのような都市的な感覚の人々と明らかに一線を画している。民族のアイデンティティーの切なる欲求は、政治的アイデンティティーの合一を得ることにつながると信じることで、こうした動きが支持されるのもまた、彼らイタリア人にとっては必然に他ならないのである。政治的にとても皮肉っぽい歌の得意なエデュアルト・ベンナートや、ピエロのようなメイクでステージに現れるレナート・ゼロ、多少ディランのようなイメージを持ったフランチェスコ・ディ・グレゴーリは、この分野でビッグ・ネームのアーティストといえるだろう。例えばグレゴーリのアルバムは、イタリアで常時40万枚を売り尽くしているのだから。

　サードを中心とした一派もまた、政治的には左翼に属している。2000～3000の人をどこかに集めて内乱を起こしたいような話を公然とする程の過激さも持っている。彼らが起こす行動や主張、それはすべて政治的意図に基いた変革のためのファースト・ステップと考えられている。ザードはこう語る。

「イタリアの若い世代は、今とても革新的エネルギーに満ちている。68年５月のパリを除き、世界のどこにもなかったほどのもの凄さだ。」

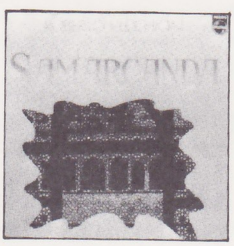
　実際に音楽状況の面から見たイタリアは、ロック、ビートによる人工的な興奮を必要としていない程、ひとつの真理に向かって数々の思いがけない実験と創造をくり返しているようだ。バンコ、ＰＦＭ、アレア、マウロ・パガーニといったミュージシャンの最近の動向は、これを全く明晰に裏付けているのである。

　先頃、イギリスのヘンリー・カウとの接触によって本誌にも紹介されたオルケストラ・レーベルのストルミー・シックスも、実にいうまでもなくイタリアでの政治活動を75年からずっと続けてきた強者グループである。彼らの属するアリストン配下のオルケストラは、ストルミー　シックスが自ら同じ志向の仲間と共に設立した自主レーベルで、運営から企画に至るまで全てミュージャンの手で行われている。ストルミー・シックスのオルケストラからのファースト・アルバム（実際には３枚目にあたる）は、75年に「スターリングラード」という大ヒットを出した有名なアルバムだが、彼らの炭坑労働者を真似た服装や、とても美しく力強いメロディー・ライン、そしてしなやかなヴァイオリンの音色は、音楽的な面からも非常に優れたものとして〝名作〟の一枚である。セカンドの「Cliche」になると、今度は完全にコマーシャルな表現から遠ざかり、インテリジェンスを強調したインストゥルメンタルの組曲を演じてきるが、決して彼らの持ち味である一種の「親しみ易さ」だけでは失われていない。せしてサード・アルバムは、より前衛的な風格のにじみ出た。頃度イタリアン・コミュニズム・ロックの雄、アレアと双璧を成す重要なグループとしての彼らの存在をいやおうなしに感じさせる傑作アルバムとなっている。

アンジェロ・ブランデュアルディ



ブランデュアルディの英国でのデビュー・アルバム「High Down Fair」のプロデュースは、元キング・クリムゾンのピート・シンフィールドが手掛けている。



ロベルト・ヴェキオーニ
「Samlcanda」



ストルミィー・シックス
「Un Biglietto Del Tran」



ストルミィー・シックス

エピローグ

今日のイタリアにおけるロック・ミュージックの形式は、大体以上の通り、つまり政治意識に対して厳格なコミュニティーを形成するロック・グループと、より大衆に近い位置にいるシンガー・ソングライターたちである。特にヨーロッパ諸国の中でシンガー・ソングライターを中心としたアコースティック・ミュージックが大きな勢力となっている国は、フランスとこのイタリアが特に目立っている。彼らは聴衆の世代を限定することなく、幅広い年齢層の支持者を持ち、またイージー・リスニング、ポップ・ミュージックの分野をも代表して活躍している。60年代に登場して以来、10年来のうちに700万枚以上のレコードを売ってきたシンガー、ルチオ・バティスティの栄光と、彼の直系の影響下にある若いシンガー・ソングライターたちの数は、ここ数年ますます増加しているようだ。代表的なアーティストは先程紹介したリッカルド・コチャンテを始め、元フォルムラ・トレのアルベルト・ラディウス、マルチェラの兄ジャンニ・ベッラ、元ダータのウンベルト・トッツィ、フランコ・シモーネ、サンドロ・ジャコッペ、アントネッロ・ヴェンディッティ、レンツォ・ゼノビらだが、イ・プーやコラージェ、ホモ・サピエンスといったラヴ・ロック・バンドと共に国内のポピュラー・アンバムの売り上げの上位を占めるほどに大衆化しているようだ。彼らの作品は、世界的な流行であるディスコやプログレッシヴ・ロック、クロス・オーヴァーのような形態にとても意識的に取り組んではいるものの、元来のイタリア音楽の正統的な継承にも忠実で、どれもみなイタリア語の美しい響きと、カンツォーネのメロディーを失ってはいない。トラディショナルな表現のブランデュアルディや極端にアメリカ的な人々よりは、音楽的なバランスが外的に保持されているようだ。

政局の悲惨さにもめげず、イタリア人は音楽を世界で最も愛する国民のようだ。彼がが未来の歴史の上に、過去何千年にも及ぶイタリア音楽の伝統を継承するにあたり、この国の現在のロック・ミュージック、そして独立的な創造性に富んだシンガー・ソングライターたちの生命力は、とても大きな意味を持つものだと評価できるだろう。


ルチオ・バティスティ

〔付録〕日本におけるイタリアン・ロックの発売方針とその実現の可能性について

●キング・レコード　藤崎雅夫

前号のフールズ・メイト誌にて募集いたしましたイタリアン・ロック発売に関する熱烈な支持のお手紙多数ありがとうございました。おかげさまで、今回ついにイタリアン・ロックのシリーズ発売の第一回目を無事に迎えることができました。キング・レコードは、今後も続々とイタリアの優れたロック・ミュージックの作品を日本のファンのもとに紹介する方針ではありますが、それらは常に多数の支持者の希望に沿ったものであると同時に、より多くのファンをつくりつつ、今後ますます畜実、発展してゆかなければならないと考えております。幸い皆様の下さったお手紙の中での御希望や御意見は大変深く参考にさせて頂くことができました。深く感謝申し上げます。

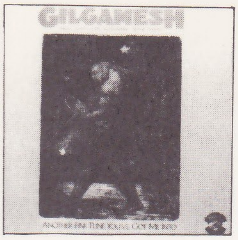
まず最初に今後の方針といたしましては、今回のマウロ・パガーニ、ニュー・トロルス、オザルナ、ルチオ・バティスティのシリーズに引き続き、今年の10月には第２回ユーロ・ロック・シリーズを企画しています。イタリア関係では、今回最も要望の多かった作品を中心に６本のレコードを一挙に発売する予定であります。現在予定として挙がっている作品は、オザンナのメンバーによる名作の呼び声高い「ＵＮＯ」、そしてニュー・トロルスの５作目「ＵＴ」、またリコルディ時代のバコンの作品、アスコルトに移籍したアレアの最新アルバム、ＰＦＭのベルナルド・ランゼッティのいたグループ、アクア・フラジーレのセカンドアルバム「マス・メディア・スターズ」、そしてナポリ・チェントラーレの作品などが最重要候補ですが、この他契約上の問題な解消し次第、ＰＦＭの「Passfartu」 やバンコの「Di Terra」 なども発売可能となります。もちろん価格は今回と同じく1800円でオリジナル・ジャケットです。この企画は今後も継続して行ない、コンスタント12年３回づつ、計30枚程のアルバムを発売してゆきたいと思っています。

現在キング・レオードは、イタリアのレコード会社10数社との契約を持っていて、日本の業界でのカタログ占領率は80％に及びます。ロック関係のアーティストを挙げるならば、有名なところだけでも、マウロ・パザーニ・ニュー・トロルス、オザンナ、デリリウム、ラッテ・エ・ミエレ、イ・プー、アレア、ディク・ディク、ホモ・サピエンス、エキペ84、ルチアーノ・バッソ、ナポリ・チェントラーレ、バンコ、アルニ・デル・ソーレ・アクァ・フラジーレ、アルベルト・ラディウス、ジアルディーノ・センプリーチ、カマレオンティ、チコ、リカルド・フォリ、ロマンス、コラージュ、ペペ・マイナ、ウンヘルト・トッツィ、初期のレ・オルメなどの発売権を持っており、加えて年内にはクランプスの売売権を獲得する予定です。

そして圧倒的に人気の高いマメロ・ウーノ・レーベルのフォルムラ・トレ、イル・ヴォーロなどの発売権も、ＲＶＣに日本発売の意向がなければ80年６月をめどに獲得し、その年に発売いたします。ただし、イタリアＷＥＡ、ＣＢＳ、ＥＭＩ、ＲＣＡ、フォノグラム、ポリドール系のアーティストに関しては、現在では決定的な可能性が見当らないため方針ははっきりと分かっていません。（無論必要に応じてアーティスト契約は可能です。）

もしもこうしたイタリア系ロック・ミュージックの定着が可能になった場合、マウロ・パガーニやＰＦＭのような親日的なアーティストは、日本での企画制作による作品の録音も了承してくれています。実現すればとても素晴らしいことでしょう。是非今回のシリーズを応援して下さい。

草々



Gilgamesh

再編成されたカンタベリーのスーパー・グループ

まったく興奮させる話だ。あのギルガメッシュが再編されたというのだから。かつてハットフィールズの兄弟バンドとして、人々にその比類なき音楽性を知らしめていたギルガメッシュが今ここに甦えったのだ。しかもベーシストはヒュー・ホッパーを携えての登場だ。実際、結成以来彼らはベーシストには苦労していたようだ。そしてベーシストに限らずギルガメッシュを通過していったミュージシャンは必ず良い仕事をしてきている。

初代ベーシストを勤めたニール・マレイはコロシアムII、ナショナル・ヘルスと、共にデビュー・アルバムで大活躍を演じ（マレイが脱けた後は両グループ共初期の迫力を欠いているように思う。）2代目スティーヴ・クックはミラージュでアルバムを発表した後ソフト・マシーン「アライヴ・アンド・ウェルイン・パリ」に参加して、この作品をギタリストが加った「バンドルス」以後の最高作とすることに貢献している。このほかにもナショナル・ヘルスと同様にモント・キャンベルやリチャード・シンクレアがたびたび客演していたようだ。

そして第一期ギルガメッシュの唯一の記録であるキャロラインからリリースされたデビュー・アルバムにおいては、ニュークリアス、アイソトープ等を経たジャズ・ロック創世紀世代のジェフ・クライン——彼の率いるターニング・ポイントは現存英国のジャズ・ロック・シーンの中で最も注目すべき存在の一つといってよいだろう。特に、日本で既にリリースされているセカンド「サイレント・プロミス」からデビュー・アルバム「クリエイチュアズ・オヴ・ザ・ナイト」におけるヴォイスのペピ・レマーとサックス、デイヴ・ティドボールによるユニゾン形式のスリリングな展開は見事としかいいようがない。

話を戻そう。1975年5月、マナー・スタジオにおいて録音されたアルバム「ギルガメッシュ」は、当時のヴァージンを象徴するような独自で高度な音楽性を備えた作品だった。ディヴ・スチュワートがプロデュース、ヴォイスにはナースのアマンダ・パーソンズを配して、ハットフィールド風には違いないが、メンバーがジャズ・シーン出身であることを裏付けるかのように即興可能なパートが多いように見うけられる、静と動の対照のはっきりとした、みずみずしく美しいものだった。リーダーであり、ほとんどの曲を手がけるアラン・ゴウエンのエレクトリック・ピアノ・プレイは後にナショナル・ヘルスにおいて、ディヴ・スチュワートのトーン・ジェネレイター、オルガンとの好対称を成すのだが、表われては消えていく星屑のようなきらめきを忘れられない。そして、そのゴウエンと絶妙なるコンビネーションを誇っていたのが、ギルガメッシュのもう1つの核であるギタリストのフィル・リーであった。むしろ地味にも聴こえるクリアーなトーンは新時代の音楽にふさわしい。

幾分ハットフィールズよりジャージィーで、ヴォーカルを重視しないアンチ・ポップ性が音楽的レベルは同等といってもよいにもかかわらず、片やヴァージンの看板グループ、片や売れないキャロラインと明暗を分けたのだろう。

1975年暮にハットフィールズ、ギルガメッシュが相次いで解散した後、両グループのメンバーによりナショナル・ヘルスが結成され、78年になってやっとアルバムがリリースされた等々この辺の事情は既に本誌でも詳しく特集しているので重記しないが、ヘルスのデビューアルバムでゴウエンがゲストとなっているのはレコード発表と録音（77年3月）との間のギャップにより彼がこの時点では脱退していたためであろう。とにかく昨年夏に制作されたヘルスのセカンド・アルバムは、相変わらず素晴らしかったけれどゴウエンのピアノ・プレイが聴けない分だけ確実に楽しめなかったのは事実だ。

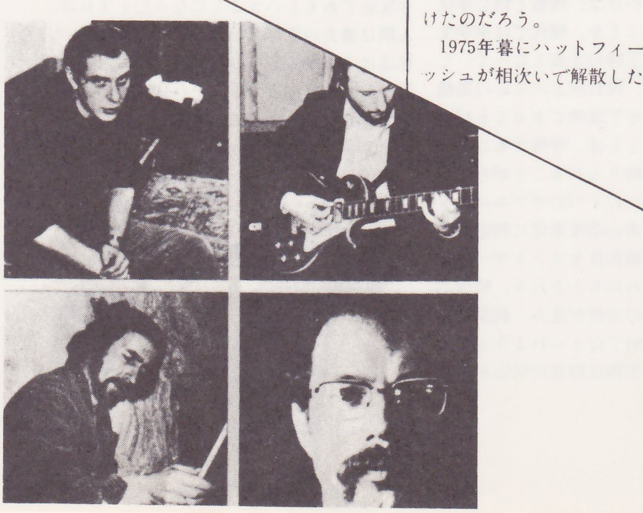
ゴウエンはヘルス脱退後しばらくしてギルガメッシュの再編を計画し、作曲を始めた。メンバーも旧友フィル・リーがまず戻ってきた。ベースはヒュー・ホッパーに、そしてドラムはトレバー・トムキンスに決った。そして昨年秋に「アナザー・ファイン・ターン・ユーヴ・ゴット・ミー・イントゥ」と題されたアルバムが、ヘルスのセカンドと前後してチャーリー・レーベルから発表された。

> 2台のシンセサイザーをプレイする機会があったので、バンドの音楽性を拡げるためにそうしてみた。その結果オーヴァーダヴはほとんどしないで済み、ライヴをやっているように聴こえる。
>
> ——アラン・ゴウエン——

確かにサウンドはよりシンプルに、そしてどちらかといえば地味なものに変化してきている。壮大なる流れの中で、音の一粒一粒がはじけ合い、ぶつかり合って一つの大きな連鎖を造り出していくのはギルガメッシュの新しい魅力だ。

ただし、ゴウエンのワンマン・グループ的な現在のギルガメッシュは残念ながらセッション・グループとしてしか期待できないだろう。アコースティック・ギターとピアノによるフィル・リーの曲や、暗いトーンの不協和音を奏でるホッパーの作品は、他のゴウエンの曲と異質すぎるからだ。事実、昨年の夏にはゴウエンとホッパーにエルトン・ディーン（サックス）ディヴ・シーン（ドラム）によるソフト・ヘッドと名付けられたグループによる活動を開始し、オガンからライヴ・レコードもリリースされている（後にドラマーがピップ・パイルにグループ名もソフト・ヒープへと変わった模様）

（増田　洋）



人間達の黄昏

the residents

RR0677 ／ Meet The Residents



RR1174 ／ Not Available



RR1075 ／ The Third Reich'n Roll



RR1276 ／ Fingerprince



RR0278 ／ Buster & Glen, Duck Stab





RR1177 ／ Duck Stab

「人形」という言葉には、何とも薄気味悪い響きが伴う。空地に捨てられたフランス人形や、古くなったひな人形などは気分のいいものではない。新陳代射することなく、次第に汚れていくのは見るに耐えない。人形への奇妙な愛着に誘い出される種々の感情はいったい何だろう。人形と人間はどんな結びつきにあるのだろうか。実際、一人の人間にとって、一人の〝他人〟と自分との関係と、一つの〝人形〟との関係にどれ程の違いがあるというのか。〝人形〟が単に思い入れのカタマリだとすれば、それは明らかに〝他人〟の存在とは異なる。思いどおりに動く人なんかいないからである。しかし、何も言えない動けないものが必ずしも意志を持たないと断言できるだろうか。アンドロイドなら、なおさらである。オカルトの話をしているわけではない。沈黙が意志表示として受けとられることもあるし、見る側の気持が変化すれば、刻々と変わっていくだろう。人の心を正確に推し量ることは不可能である。これは時間軸が精神活動を支配しているためもあるが、観測者にとっては見えることだけが真実を作る材料となるためだといえるだろう。裏返せば、相手の内部とは無関係に人を想定することができるということである。人はやがて死ぬが、人形もやがてこわれる。

むかし、まだ人間が人形をかわいがることのできたころ、人形達は時として人の心を慰めていた。今から思えば、不思議なくらいに人形達が使われていた。人間にとって快い面だけが誇張され、憧れにさえなっていた。円満な主従関係が成立していたといえる。分裂病の少女の手記で、発病前のある時期に人形に対して極端に神経を尖らせて世話をしていた、という件がある。人形に人間として快適な生活をおくらせることだけに、一日のほとんどの時間を費していたらしい。彼女は決して両者を混同していたわけではなく、食事を与えたりすることはなかったが、夜、カゼをひかないようにとか、汗をかかないようにとか生理的に不快な思いをさせないためには大変な努力をはらったという。外側の世界とのコミュニケイトに失敗して、外部との精神的接触を断ってしまう分裂病者が、何も言わない人形に人格を求めていくのはよくわかる気がする。他人が自分と同じ人間であるとは思えず、強烈な異和感を持って内側へと落ちていく人達。旧式な意味での人間の否定は、現在、科学的にも常識になりつつある。都市では既に分裂病者的な他者認識の方法があたりまえになっているといえる。

生物も分解していけば、物質と同じ単位で構成されていることを、現代では中学生でも知っている。生物の定義となっていたいろいろな特質が、物質同志の反応の集積あるいは組み合わせで説明できることがわかりつつある。たとえば、呼吸することにより酸素を体内へ取り入れることができるのは、ヘモグロビンの4つのサブユニットによる構造が、酸素の濃度変化に対応してヘム基の酸素への親和性をコントロールすることにより行なわれるとされる。精神活動の領域にも同様の分析が進み、刺激に対しての反応という形で捉えられようとしている。要するに、生物は物質の反応を単位とするシステムとして表わされつつあり、目的論的色彩を帯びた純粋に物理的な生物学が生まれるのも近い将来のことかもしれない。もし、心の動きが物理的現象のみで説明され、アンドロイドと人間が本質的に同じだということになると、私達は自分自身の認識について前代未聞の大きな改革を迫られることになる。アンドロイドは人形を高度に発展させたものである。人間はもう特権を失ってしまい、人形と対等の立場に置かれてしまう。科学的分析が進むにつれて過去の〝人間〟という概念はつぎつぎと破壊されてゆき、しかも真実を知ってしまった以上あと戻りすることは許されない。盲目的に信じられていた風景が絵になって、確率の支配する骨組が露わになる。人間が人形であり、他人も人形であれば、人形は他人となる。私達は旧式な人間関係のいびつさにもう気づいている。いつまでも〝人間〟に固執していては足元をすくわれるばかりだ。生物と物質との境界線が滲んでしまい、人間と物との区別もつかなくなり、何の新しい手だても見つからないまま部分集合としてのみ捉えられる。精神活動が化学反応であるということになったとすれば、人間は過去の意味での人間ではなくなる。私達はこれから新しい人間あるいは人間関係を見出せるだろうか。それは死後の世界を想像させる。そこに何もなかったら、消滅してしまうのだろうか。とにかく、視点



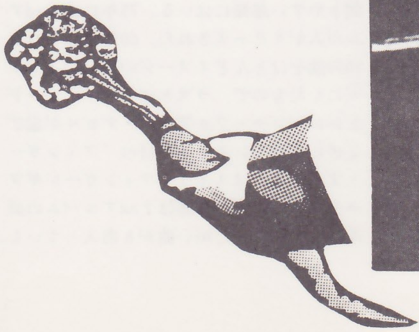
の跳躍が不可欠である。今は「生」という文字が空虚へ向かってひらひらと舞っていき、この言葉の意味は収束せずに、無限小の暗闇へ指数的に落下するばかりである。希薄な有機物溶液のようにぼんやりと濁った世界観や、金属のギラギラした立方体が斜面を転がっていくような生活が私達だといえる。これまでの精神的文化は、新しい目で見ればガレキの山か子供のおもちゃにすぎない。救われない人形であることを誤魔化しつつ、辛ろうじて日々を送っているというのが現実である。

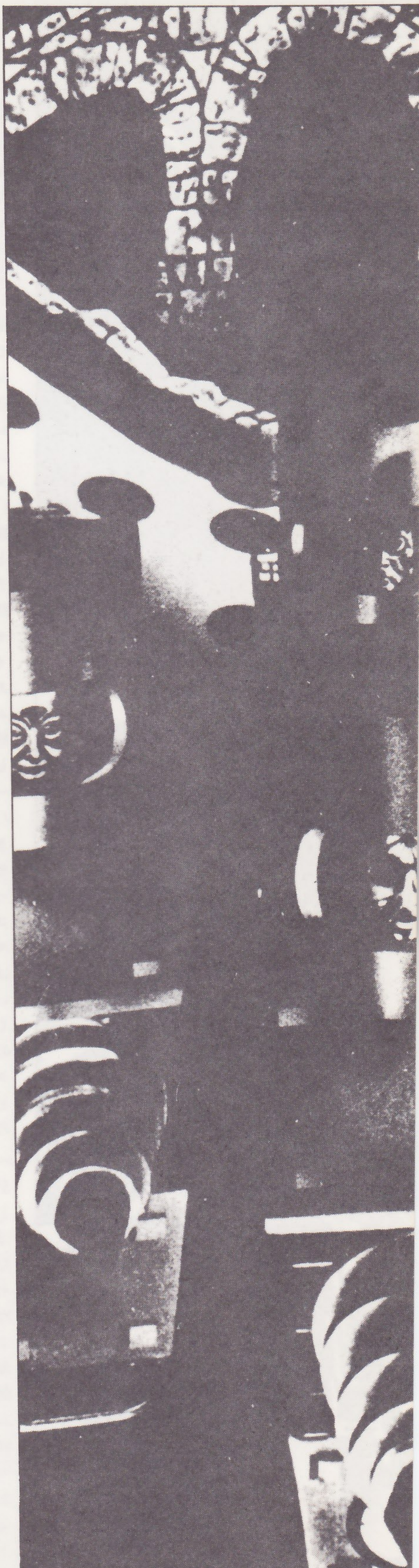


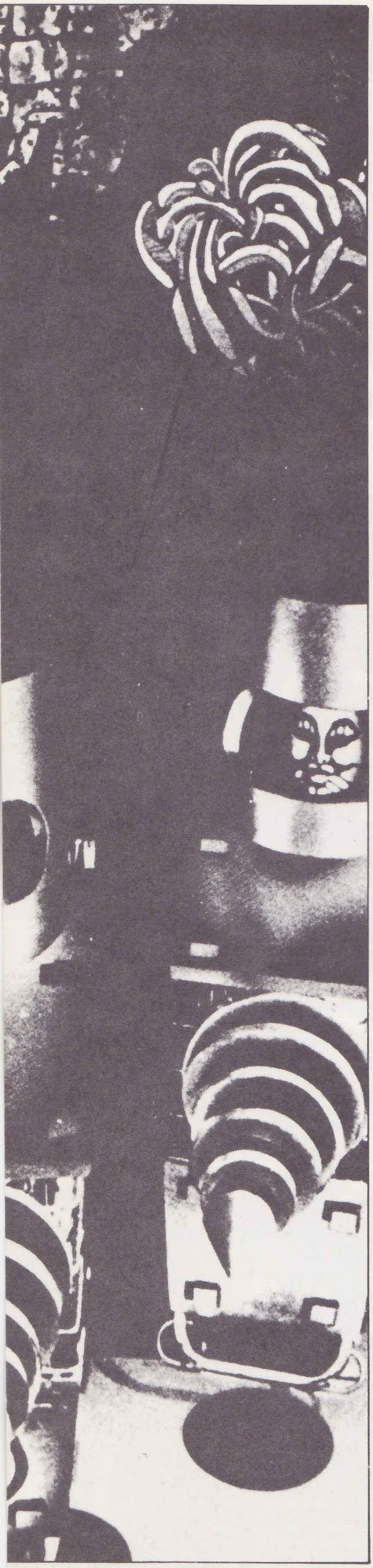
プログレッシヴ・ロックは、このような状況を認識するための行為だったと解釈される。このプログレッシヴ・ロックが行き詰まったのは当然のことといえる。知れば知るほど今までのやり方では解決できない絶望に陥っていかざるをえない状況にあることは、以上のことから明らかである。プログレッシヴ・ロックの終焉がパンクの生まれたほとんど直接の原因として上げられる。ＵＳＡライヴをクリムゾンの一応の結論とすれば、リリースされたのが75年３月、ピストルズの100クラブでのデビューが同じ年の９月である。不安定な状態を見て見ぬふりをするようになってきた、ロック全体の姿勢に対するフラストレーションが凝結して、ニュー・ウェイブを生み出す核となったといえるだろう。だから、ニュー・ウェイヴのバンドは追いつめられた立場を、たとえ無意識のうちにでも踏まえていることを前提として、各々活動しているわけである。その意味で最も前衛的だといえる。



彼らの半ばヤケクソのようなメロディの否定から派生した、共有しにくいいくつかの性質がある。政治への接近と機械への接近、女のミュージシャンの台頭などである。また、パンク全体に通ずる顕著な特徴に、音以外の部分でも見られることに意識的で、ショウ・アップしているというか、自分達を遊んでいるような感じがある。（ミュージシャンの客へのアプローチの仕方の変化は大きな意味を持つものだし、それ自体が一つの糸口を含んでいるようにも思える）これを考え合わせると、再構成されたもののうちで機械への接近が比較的前向きだといえる。事実、最近注目を集めはじめているバンドにはテクノロジーとの関りの深いものが多い。彼らは、人間の感覚つまり常識の基盤を創り代えようとしているのである。「科学技術的音楽」なんて聞いただけで興奮してくる。少なくても他の音よりは創造的だといえる。テクノロジー的なものと結びついた数々の音から、今はさらに新たな渦が巻き起こっている。デボをはじめとする、これまでの音楽の形態を裏がえしたようなバンドである。聞くに耐えないとも思える音は、耳が慣れるにしたがって、脳が回転していく感触を与える。彼らの方法が有効であるかどうかはまだわからないが、可能性は充分にあると思える。こういうバンドの活動空間は、レヴェルが２つ３つ上をいっているような印象を受ける。レジデンツの音も不協和音の連続によって構成され、特異な雰囲気をかもし出している。60年代のロックンロールに憎しみのようなものを抱き、コケにしたような重いアレンジで焼き直している。おどろおどろしい響きのすきまから微かにロックンロールが漏れてくるのは、ある種の快さと不快感の入り混じった奇妙な肌ざわりがある。徹底した人間らしさの否定にもかかわらず、狭い意味でのＳＦ的要素はあまりなく、不思議なリアリティを感じるのは彼らの真剣さの表れだろうか。肉声を研究する音声学をもとに、もちろん未完成ではあるが体系的なパフォーマンスを続けているバンドである。長いキャリアと緻密な音作りは、レジデンツの根の深い強さを示している。それは、言語と論理のみによる文化をのりこえて、新たな地平をつかみかけているようにも思える。レジデンツがより真面目であること、つまりより大がかりな冗談を企んでいるということから、レジデンツのもっているポテンシャルの壮大さがわかるだろう。









レジデンツのメンバーについては、４人編成であること以外はほとんど発表されていない。１stアルバムのライナーによると、レジデンツは66年ごろからいろいろな音をテープで集めはじめ、音への認識を深めようとしていたという。音自体への関心がレジデンツの出発点だったといえる。彼らは他人のテープを集めるだけでなく、自分達でもサン・マテオ・サウンド（San Mateo Sound ——サン・マテオはシスコに近い都市）と呼ばれるものを録音していた。レジデンツの評判はアンダー・グラウンドシーンを通じて、英国の無名に近かったギタリスト、〝スネイクフィンガー〟リスマン（〝Snakefinger〟Lithman）の耳まで届いた。彼はN．セナダ（N. Senada） という老人と共にレジデンツのスタジオのあるサンマテオに飛んだ。この２人はレジデンツの進路に多大な影響を与えたと思われる。N．セナダはスネイクフィンガーと以前、西ドイツの南部のババリアの森で会ったことがあり、音声学をベースにした複雑なシステムを開発した人らしい。彼とレジデンツは約半年共に仕事をし、クラブで演奏したりした。ワーナーの支配人、ハル・ハルヴァーシュタット（Hal Halverstadt）と交渉したが、購買層が限られているとされ契約できなかった。スネイクフィンガーは帰国し、セナダはエスキモーの音楽を調べに北へ行ったといわれる。よって74年にラルフ・レコード（Ralph Records） から出た１stアルバムには、スネイクフィンガーとセナダは関わっていない。このアルバムではいろいろな曲、聖歌までがレジデンツにより全く別の曲のように演奏されている。すべてのアルバムにいえることだが、通常のロックの楽器構成は無視され、数知れない楽器と共に異様なコーラスが浮き上がってくるのは圧巻である。このアルバムの内容をベースにした〝Vileness Fats〟 という映画をラルフ・レコードの援助で撮っていたこともあった。２nd〝ノット・アバイラブル〟は、今のところ唯一のオリジナルのみからなるトータル・アルバムとなっている。N．セナダの音声学を応用した、Obscurity の理論の概念化したものだという。物悲しいような雰囲気から始まって展開していく５部構成の組曲は、彼らのレコードの中では聞きやすい部類にはいる。75年には３rdアルバムがリリースされた。60年代のＴＯＰ10の曲をほとんどイメージの異ったメドレーにしたもので、ラストはヘイ・ジュードとシンパシー・フォア・ザ・デビルが混ぜこぜにされている。４枚目の〝フィンガー・プリンス〟はスネイクフィンガーがギターを弾いている。Ａ面は２ndアルバムの副産物としてできた短い曲が８曲入っている。



"Snakefinger"

Ｂ面は72年ごろから基本的なものはできていたという、バレー音楽として書かれたもの。このアルバムからは、ラルフ・レコードがクリプティック・コーポイレション（The Cryptic Corporation）に吸収されたため、クリプティックからリリースされる。78年に出た５thアルバムは両面共よく練られた曲が７曲ずつはいっていて傑作といえるだろう。片面〝Duck Stab〟は33回転ＥＰとして前に発売されていた。(但し曲順が異なる。)シングルはこの他〝Beyond The Valley of A Day In The Life〟と、Ａ面が〝サティスファクション〟でＢ面はオリジナルのものがある。スネイクフィンガーも〝The Spot〟を出している。〝Beyond……以外は、アルバムもすべてクリプティックから再発されている。79年の末か80年にはイギリスツアーの計画もあり、アルバムはヴァージンかレーダーからイギリス国内へも発売される予定である。これに元ヘンリー・カウのクリス・カトラーやニック・ホッブスが関わっていて、レジデンツは反対派ロックの一つに数えられている。しかし、このようなバンドがメジャーになる状況というのは、考えてみれば恐ろしい。



RR7803　　Satisfaction

スウェーデンの秘宝

サムラ・ママス・マナ&ケヴネカイゼ



現在のヨーロッパ・ロック・シーンにおける2つの対照的な勢力として、文明や科学をひとつの形而上学的な概念として受け入れ、未来的な産業システムや社会心理をいちはやく体現しようとするもの(ブライアン・イーノ、クラフトワーク、その他テクノ・ポップとか呼称されているもの)、そしてその逆の側には、より密接な自己の地域性や民族的意識、民族的記憶の地平に立ち帰ろうとするもの——いうなれば、音楽をひとつの内面的な力学的構造によってコントロールしようとする時のプロセスが、どのように働くかという興味深い問題を提示しているのだが、少なくとも我々は、肉体性や知覚の限界を力づくで押し開こうとするフリー・ジャズの方法が"概念としての芸術"の領域からまったく発展できない理由のいくつかに既に気付いている。それは、非常に困難な状況と、悪らつな社会構造と、一定のスピードの中でしか事象をキャッチすることのできない人間の悲しい感性によるものだ。発想や根本の単純で明晰なものほど、その確立のテクニックは、けわしく果てしないのである。

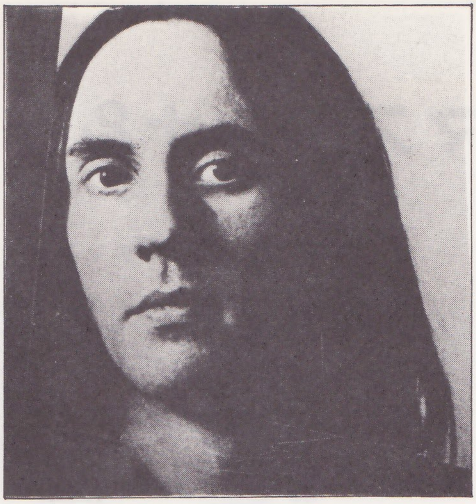
スウェーデンのまるでコマーシャリズムから隔たったいくつかのロック・グループは、彼らの地域で着実な音楽的探求を進め現在に至っている。彼らの眼中には、イギリスもアメリカもなく、唯スカンジナビアという広大な自然と、温厚な社会制度がもたらした環境のみが基盤となっているという点で、他国の自負心旺盛なロック・ミュージシャンとは完全に一線を画しているようだ。多少秘密めいた、そして儀式めいた難解さや一貫性を掲げた彼らの方法は、ひとつかふたつの有力なレーベルを組織化して、おおよそそこに集結している。サイレンスとNMWがそれにあたり、共にスウェーデンのSAMという会社の子会社である。アンチ・コマーシャリズムや強迫的な政治性を前面に押し出す気配もなく、それでいてとてもしなやかな美しい音楽を全くの独自性と共に展開する"魔法の国"の芸術家たちは、ロック懐胎期の処女性や未統制の自由なエネルギーを今でもまるで失なっていないという特殊な状態を世界でただひとつ、決して意識的にではなく保ち続けている事実も重要だろう。70年初期ドイツのOhrレコードとか、英国のヴァーティゴ、カリスマ、ペガサスといったレコード会社が抱えていたアーティストが、決して理知的統合を許さないようなアマルガム的な膨大なエネルギーを持ちながらも、社会構造の中でその大半が自滅してしまったという現実的な現象と考え合わせてみるならば、僕の言わんとしていることが多少なりとも理解していただけることと思う。彼らの音楽は、終始北ヨーロッパのアイデンティティーに根ざし、果てることのない民族的集合意識の基盤の上に成立しているのである。

サイレンスのアーティストをざっと挙げるならば、完全な民族音楽に根ざしたグループとして、トラッド、グラス・ステナー、ティルサマンス、フィレーモン、アーサーザ・デュング、グデブラン、またフォーク・ミュージックを基調としたシンガー、トマス・メラガルツ、トマス・ヴィーエ、ヤン・ハンマーランド、アンナ・スヤルブ・トリエといった人たち、そしてロック・グループとしては、ソロ・キーボード奏者、ボー・ハンソンを始め、ヘンリー・カウのRIO(vol・7参照)にも参加しているプログレッシヴ・グループ、サムラ・ママス・マナ、そしてボー・ハンソンのバック・ミュージシャンとしても知られるケブネカイゼの他、ボー・ハンソンも時折参加しているフラスケット・ブリンナー、前衛的な音造りのアルガナス・トラッガード、そしてサリドといったところが代表的だ。しかし彼らの会社の姿勢は、完全にコマーシャリズムから隔たり、またスウェーデン国内のみのマーケットにとどまっているため、その全貌ははっきりと把めていない。わずかに、英国のカリスマ・レーベルよりボー・ハンソンのアルバムが紹介され、サムラ・ママス・マナがRIOのコンサートに参加していることぐらいしか公式的なニュースは明らかになっていないのだ。

スウェーデンのエコロジカル・ミュージックが、果していかにしてこんなにも魅力的なエネルギーを放ち続けていられるか、そしてその根源はどこにあるのか?とても素晴らしい2つのグループを紹介することによって、何らかの示唆的な考察と成り得れば幸いだ。







ケウネカイセのギタリスト　ケニー・ハカンソン



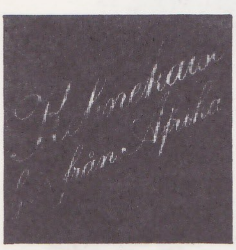
●Kebnekaise／ケブネカイゼ

ボー・ハンソンを知っている人なら、ハンソンのバック・グラウンドを務めるスウェーデンのミュージシャンにいくばくかの興味を抱いたこともあることと思う。とても土俗的なパーカッションやヴァイオリン、そして時としてマイク・オールドフィールドも及ばないくらいハイテクニックでパストラルな音を出すトラディショナルなリード・ギター、それが彼らケブネカイゼの面々だ。ケブネカイゼは、サイレンス・レーベルの中でも最も初期からずっと活躍しているベテラン・グループとして知られている。初期のケブネカイゼはリード・ギタリスト、ケニー・ハカンソンを中心とした9人編成という大がかりなグループで、コミューン意識を持った、丁度ドイツのアモンデュールなどに共通するロック・グループだった。ファースト・アルバム「Resa Möt Okant Mal」は、不思議なムードを持つハード・ロックを、ある独特のエネルギーによって演奏しているが、セカンド・アルバムを発表する73年以降の彼らの音楽は、もはや言及し難いほどの情緒性と、ファンタジックな情感に溢れている。

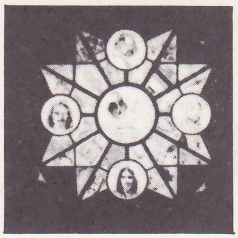
ケブネセイゼのセカンド・アルバム「Kebneaise II」とサード・アルバム「III」では、いよいよケブネカイゼの本領を発揮した特異なインプロヴィゼイションを聴くことができる。リード・ギター、ケニー・ハカンソンを筆頭とした驚異的なテクニックに支えられ、彼らの不思議なムードのロック・シンフォニーは、スウェーデンの古い民謡を全く新しい形で手直ししたものだ。スウェーデンのロック・シーンには、ケブネカイゼのほかにも、アルキメデス・バッカーやアルベーテ&フリティッドといった人たちが、やはりトラッドを素材にした音楽を得意としているようだが、ケブネカイゼの世界は、その生命感、躍動感、イメージの高潔さにおいて群を抜いている。太古の精霊や自然界の超自然的なエナジー、また普遍的とも思える純粋な“生”への回帰は、都市社会をひとつの基盤に発達したロックへのアンチ・テーゼのようでもある。早い話、彼らの音楽は、トールキンの「指輪物語」や、アーサー・ラッカムの童話絵本、ヒース・ロビンスンの妖精の森の中に迷い込んでしまったような不思議な体験を与えてくれる。ケブネカイゼは、続いて彼らのアフリカ音楽への憧憬を素材に表現した「Ljus Fran Africa」を、何人かのアフリカ人ミュージシャンと共に製作し、77年には5枚目のアルバム「Elefanten」を発表している。このタイトルはやはり、“象”の意味をもつものだが、ケブネカイゼの流れるような組曲は、彼らの音楽的要素全てを結集した素晴らしい作品に仕上げられている。リーダーのケニー・ハカンソンはソロ・アルバム「Springlek」でも、とても素敵なギター・ワークを披露しているが、マイク・オールドフィールドらを例に挙げるまでもなく、ヨーロッパのロックの重要な流出を北ヨーロッパのアーティストは確実に担っているのだ。（Kebnekaise の名前の由来は、スウェーデン北部の高山、Kebnekajse からきている）

ケブネカイゼ











●Samla Mammas Manna／サムラ・ママス・マナ

ケブネカイゼと同じく、極めてアンダーグラウンドな地点から出発したロック・グループ、サムラ・ママス・マナの音楽は、もはやスウェーデンというワクを超えて語るべきであろう。それほどまでに、現在のサムラの存在意義は、ヨーロッパのロック・シーンに於いて重要なものとなっている。1971年のデビュー・アルバム「Samla Mammas Manna」は、彼らの特質であるリズム・パターンの多様さと、暗くどんよりしたメロディーによる魔可不思議な世界を暗示した作品だ。メンバーは、キーボード奏者、ラセ・ホルマー、ドラム、ハッセ・ブリューソン、ベース、ラセ・クランツの3人のアンサンブルに、ヘンリック・オーベルグのパーカッションが入った編成だったのだが、73年にリード・ギタリスト、コステ・アペトリアを加えたサムラは、飛躍的な音楽的進歩をとげ、また、北欧のロック史上、最も個性に富んだロック・グループとしての活動を開始するのである。サムラの音楽をごく主観的に語るならば、素朴さの中の狂気、激しさの中の静寂、そしてまるで自分が動物に戻ったかのような体験を強いるプリミティヴなエネルギーを、持ち前の冗談ぽい雰囲気とともに、アヴァン・ギャルドな臭いをぷんぷんさせながらも実に心憎い方法で聴く者を引き摺り込んでしまう不思議なテクニックに焦点をしぼることができる。初期のサムラは実に上手くこの方法を実験していて、サード・アルバム「Klossa Knapitatet」はその極めつけの作品ということができる。しかし、その残り2枚のアルバムは、より我々を驚かせてくれる作品だろう。1976年に発表された4thアルバム「Snorungarnas Symfoni」は、その名の通り、完全なトータル・コンセプトを持ったロック・シンフォニーを大真面目に演奏している。ギタリスト、コステ・アペトリアの抒情性と力強さに富んだエレクトリック・ギターと、時折エニッドのロバート・ジョン・ゴドフリーまがいのリリカルなピアノを聴かせるラセ・ホルマーの完璧なアンサンブルは、北欧世界の美的感覚と劇的な情感をいやという程味あわせてくれる。完成度の高さからみて月並な言い方をすれば、「北欧ロックを代表する傑作アルバム」と称して差し支えないだろう。続いて発表される2枚組大作「Schlagerns Mystik」もこれまたどえらい作品だ。丁度この時期にイギリスの大家ヘンリー・カウと国内ツアーをしたサムラは、このアルバムでカウの強い影響を受けた作品を何曲か録音しているが、前作により磨きをかけたメロディアスかつ力強いインプロヴィゼイションは、非常に強力な魅力を放っている。一種の音楽的究極性、即ち"魔術"をこのグループはとてもリアルに感じさせてくれる数少ないロック・バンドなのだ。

（北村　昌士）



サムラ・ママス・マナ

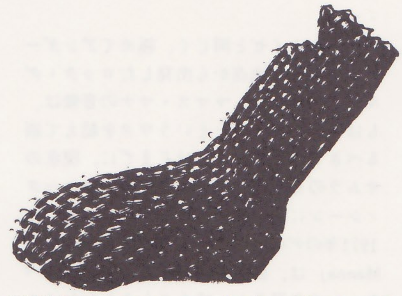






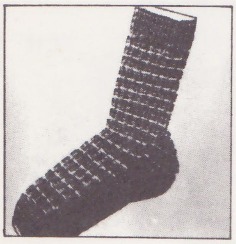
Henry Cow Discography—

—日本語ヴァージョン





非英語圏民族のための　**作成　竹田　賢一**



A: 1) Nirvana For Mice
2) Amygdala
3) Teenbeat Introduction
4) Teenbeat
B: 1) Extract From "With The Yellow Half-moon And Blue Star"
2) Teenbeat Reprise
3) The Tenth Chaffinch
4) Nine Funerals of The Citizen King

John Greaves (bs, p)
Chris Cutler (drms)
Tim Hodgkinson (org, p, sax)
Fred Frith (gtr, violin, p)

〈Legend〉

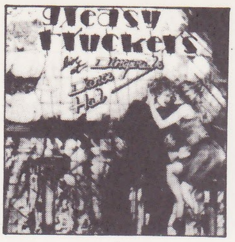
1973年はコンテンポラリー・ロックの一時代を画する年だ、と心あるイギリスの音楽批評家たちがこぞって瞠目したのだが、コマーシャルなロック・シーンに突如浮上した幻の前衛ロック・グループ《ヘンリー・カウ》のこのデビュー・アルバムだった。カウは1968年にケンブリッジ大生のフレッド・フリス、ティム・ホッジキンソンによって結成されたが、70年にジョン・ピールズ・ロッコーテュニティー・ノックス・コンテストに優勝したほか、71年にロンドンに出てきた以降も、左翼の運動とアンダーグランドなロック・シーンの外側ではその名を知られることも少なかった。ところがこの73年、ロンドン経済大のエクスプローラーズ・クラブのコンサートでデレク・ベイリーやロル・コクスヒルと共演したり、チューブラー・ベルズのコンサートでフィーチュアされるなど、このアルバムを含めて、初めてその全貌を顕わにしたのである

この〈Legend〉というレコードのタイトルは、もちろんコロンビアから発売されたときの邦題〈伝説〉に違いないか、同時にレイ・スミスのジャケットのごとく〈脚の先〉であり、さらに〈脚の涯〉つまり〈弱りはてて、死にかかって、いまにもしくじりそうな〉という意味も内包している。このタイトルの複合性以上に、収録されている演奏は、厳密で高度なテクニックとアレンジと、奔放なフリー・インプロヴィゼイションが編み合わされている。レコードに針を降ろしたとたんに耳にする管によるトーン・クラスター的響き、2、3、8、16といったこの累乗ではないビートなどによって、ピンク・フロイドやソフト・マシーン以上にカウがロックの新しい幕開きを告知しているのをぼくたちは知らされたのだ。Ⓐ—②の新古派室内楽の導入、「十番目の鶸」でのシェーンベルク的唱法は、彼らが現代音楽を手の内に入れていることを示しているが、なおかつ後者でのオルガンはロックと紐帯を忘却させない。同様に、フリー・ジャズ・ピースとしてもすばらしいⒶ—③や、Ⓐ—①でのジェフ・リーのテナー・アドリブも、唐突なフリー・ジャズの導入でも予定調和的なフュージョンでもない、ロックの変様として提起されている。ソング・ヴァージョンであるⒷ—③は、ロックであり、かつロックを超え出ようとするヘンリー・カウの姿勢を端的に示すかのように、無調とアラビアン・モードを結合して歌われる。

〈Greasy Truckers〉
〈油でギトギトしたトラック運転手たち〉
——カムデンロックのディングウォール・ダンスホールで奇妙なロック・コンサートを催したこの運動体が、どのぐらい持続し、どのような活動の具体的成果を挙げたかは、詳らかにしない。だが、このイギリスの労働者階級の象徴的イメージを名告ったこの集団は、1973年秋の時点でのヘンリー・カウ（とゴング）のライヴ演奏を音構に刻むことによって、ぼくたちの伝説にその名を残

すことになった。

この、名のみは知られてはいても現在ではそれこそ伝説的に入手困難になっている２枚組のアルバムは、Ｂ面のヘンリー・カウのほか、Camel, Global Village Trucking Co., Gong の演奏が各一面ずつを占めている。ここにクレジットされているヘンリー・カウの４曲の演奏がとりわけユニークで重要な位置を示しているのは、なんといっても徹底した即興演奏へののめり込みによるものだといっていいだろう。後に〈Concerts〉において、改めてヘンリー・カウのフリー・インプロヴィゼイション・グループとしてのハイ・レヴェルな成果に接することになるわけだが、このアルバムでは特に、グループとしての集団的な即興アンサンブルが一つの統合を見出す前の、個々のメンバーの即興演奏上の技倆に括目させられる。中でも、カウの創立メンバーであるホッジキンソンとフリスのソロ・インプロヴィゼイションが、「Off fhe Map」の前半と「Cafe Royal」でそれぞれプリペアド・ピアノとフリペアド・ギターによってフィーチュされている点に、魅き込まれてしまう。彼らの即興演奏が多くの点でフリー・ジャズの影響を受け、交互的な類縁性を見せているにも拘ず、ロック・ミュージシャンとしてのアイデンティティーを崩さないのは、特に反復の効果に意を払っている結果だろう。ちなみにこの時期、カウはドイツのロック・グループFaust とジョイント・ツアーを行っている。



Live At Dingwalls Dancehall
1) Off the Map
2) Cafe Royal
3) Keeping Warm in Winter & Sweet Heart of Mine

Chris Cutler (drms, vo)
Fred Frith (gtr, violin, vo)
John Greaves (bs, pno, vo)
Tim Hodgkinson (organ, clarinet, alto sax, vo)
Geoff Leigh (tenor/soprano sax, flute, clarinet, recorder)

〈Unrest〉

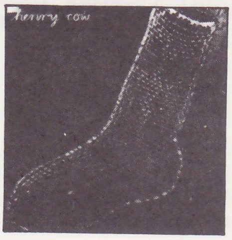
1974年１月、サックス奏者のジェフ・リーがレイガー・フェイヴァリッツ結成のため転出した代わりに、リンズィー・クーパーがカウに参加した。国立青少年管弦楽団、コウマスの活動を経た彼女は、バスーン、オーボエというロック・バンドでは異例な楽器奏者で、このアルバムのⒷ－①、④で顕著に見られる室内楽的なカウ独得の響きに大きな貢献をすることになった。

73年暮れのオランダ・ツアーに引き続いて、74年２～３月にレコーディングされ、〈不安、あるいは、心安まるところなく〉と題されたこのアルバムは、インストルメンタル中心のアヴァン・ロック・バンドと性格づけられるヘンリー・カウの音楽の第１期の完成を示す、文句なしの傑作だろう。ヤードバーズの「Got to Hurry」をパラフレーズしたフリスの曲からこのＬＰは幕を開けるのだが、オスティナート・フレーズとリズム・フレーズの各々の長さが異なっているため、ポリビートあるいはマルチビートとでもいったらいいだろうか、特異なロック・ビートに乗せられてしまう。Ⓐ－②はグリーヴズらしいロマンティックな曲だが、長短さまざまなモティーフの連なりという構成法は、ブルーズ形式や歌唱形式（プラス・アドリブ）というロック・コンポジションの常道とは大きく隔たっている。ドン・チェリーのイマジナティヴ・スイートやカプリッチオの自由な展開を想起させられる。そしてバッハのリチェルカーレを思わせるＢ－①、ベルリオーズの〈幻想交響曲〉中のコールアングルによるパストラーレを思わせるⒷ－④など、彼らのヨーロッパ近代音楽に対する教養を背景に見てとることができるが、もちろん懐古趣味とは無縁のものだ。ベルリオーズの見た物憂い風景とカウの見る生態学的に荒廃した自然とは、似て非なるものだ。Ⓑ－②はランボーの詩のように、母音の色を描く、鮮やかな原色ではないが。そして、テープの倍速、半速などにコラージュしたＡ－③や、Ⓑ－⑤は「ほろび」、「わざわい」といったタイトルどおりに、ロックや音楽や世界の崩壊感覚そのものがテーマになった即興＝構成的演奏である。

アメリカのジャズ誌「ダウンビート」で〈Legeud〉とともに５つ星の評価を与えたチャールズ・ミッチェルは、このヘンリー・カウの音楽の源泉を次のように定式化している。

1) ヴァレーズ経由のザッパ／和声構造
2) ソフト・マシーン／オルガンの効果による、煙ったようなへロディー・ストラクチュア（マイク・ラトリッジ）と、独得なヴォーカル・スタイル（ロバート・ワイアット）
3) ジョン・ケージ／時間概念と打楽器的なカラレイション

なお、このアルバムはロバート・ワイアットとイレーネ・ジュワイツァーと働いたウリ・トゥレプチという、フリー・ジャズ／フリー・ロックの２人のドラマーに捧げられている。



A: 1) Bittern Storm Over Uhn
2) Half Asleep, Half Awake
3) Ruins
B: 1) Solemn Music
2) Linguaphonie
3) Upon Entering The Hotel Adlon
4) Arcades
5) Deluge

John Greaves (bs, p, vo)
Chris Cutler (drms)
Tim Hodgkinson (org, p, sax, clarinet)
Fred Frith (gtr, violin, p)
Lindsay Cooper (bassoon, oboe, vo)
guests; Mike Oldfield, Lol Coxhill, etc.

〈Desperate Straight〉

生き生きとした深い知は、決してひとところに止まらない。〈Unrest〉 で一つの完成を見せたヘンリー・カウは、そのスタイルをコピーし再生産するのではなく、新たな未知のロック改造の旅に赴くのだった。フレッド・フリスにいわせれば、それはカウの「鏡の時代」から「槌の時代」への旅だった。その最初の里程標となったのは、74年、キャプテン・ビーフハートとジョイントして行なったイギリス・ツアーである。マジック・バンドとつきあう中で、ヘンリー・カウが最も強いインパクトを受けたのは、ヴァン・デ・ヴリエの〝歌〟であった。お定まりの歌詞をありきたりの歌い方で歌うのとは全く異質な、彼のシアトリカルなステージングは、音だけに抽象されるメッセージよりもより具体性を求めていたヘンリー・カウにヴォーカルを導入させることになった。それも、スラップ・ハッピーというシュルレアリスティックなポップ・グループとの合体という形で。スラップ・ハッピーは、現代音楽、実験音楽の系譜をひくピアニストのアンソニー・ムーアと、語呂合わせに満ちた迷宮的な詩を書くことでは天下一品のピーター・ブレグヴァド、それにロッテ・レーンヤを思わせる硬質でかつ幅広い表現力を持つヴォーカリストのダグマー・クラウゼで構成されていたが、彼らとカウとの合体第一作は、柔道一直線ならぬ〈絶望一直線〉。「ヨーロッパは疲れ切

った眼を開き、そのなべてのかわいい町々は虚に平準化される」というブレグヴァドの詞句にあるように、ヨーロッパと理性の倖れをシニカルな嘲りに自嘲を込めて歌われるソング12曲と、スケールの変様をミニマルに捉えたインストル・ナンバー「コーカサスの子守唄」が収められている。ただそれは、アレンジや詩のおもしろ味はあっても、カウの立場からすれば株今なおヨーロッパに鉄槌を振うには至らなき。歪んだ鏡であったかもしれない。



A: 1) Some Questions About Hats
 2) The Owl
 3) A Worm Is At Work
 4) Bad Alchemy
 5) Europa
 6) Desperate Straights
 7) Riding Tigers
B: 1) Apes In Capes
 2) Strayed
 3) Giants
 4) Excerpt From The Messiah
 5) In The Sickbay
 6) Caucasian Lullaby

Dagmar (voice)
Peter Blegvad (gtr, voice)
Anthony Moore (pno)
John Greaves (bs, pno)
Chris Cutler (drms, pcsn)
Tim Hodgkinson (clarinet, pno)
Fred Frith (gtr, vln)

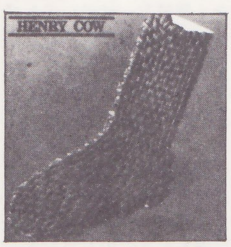
〈In Praise of Lerning〉

〈Desperate Straights〉の中の1曲「A-warm is at work — 虫は作業中」で予告された、ムーアとブレグヴァドの曲「War」でこのアルバムは幕を開く。しかし、これは前作と同じ74年11月のセッションで、75年3月録音の他の4つのテイクをヘンリーカウ／スラップ・ハッピー合体劇の第2幕とするなら、まだ第1幕の延長。幕が変わってキャスティングが変わる〈Desperate …〉ではムーア、ブレグヴァド、グリーヴズが主役だったのに対し、このベルトルト・ブレヒトの「学ぶことをたたえる」という詩の題を借用したアルバムでは、フリス、ホッジキンソン、カトラーが主役だ。ホッジキンソンの詞・曲によるⒶ－②「野獣の心臓部に生きて」は、帝国主義本国で〝自由〟の名をもって奴隷化されている彼ら（ぼくたち）の任務をうたう50行に及ぶ長編叙事散文詩。ヴォーカル、インストルメンタル、ビート、フリー・リズム、調性、無調が、コーラスのような繰り返しがなく、アシンメトリカルに交代していく。カトラーの詞、フリスの曲であるⒷ－②「月のように美しく、戦旗はためく軍隊のように恐ろしく」も、AAABBAという構成やフリスのピアノ・ソロをフィーチュアした部分を除いて基本ビートが設定されているけれども、曲の非対称性、反抒情的で硬質な訴えかけは変わらない。「時は言葉を解く——行為によって。起て労働者諸君、摑め未来を。終わりを始めよ」で終わる時は、中世の至福4年の詞章をプロレタリアートの立場から換骨奪胎したものである。いずれにしても、これらの〝歌〟が、世界の変革を意図した彼らのメッセージの明らさまな表明であるという点でポレミックなものである。といったその内容は単なるアジテーションを遙かに超えている、あるいはその拍象性に限界を感じる人がいようとも。一方、Ⓑ－①、Ⓑ－③は完全なフリー・インプロヴィゼイションのセッションである。エレクトロニクスを含んだコレクティヴ・インプロヴィゼイションの水準は、ヨーロッパのフリー・ミュージック・シーンの核心的部分に位置づけられるものに違いない。



A: 1) War
 2) Living In The Heart of The Beast
 3) Beginning; The Long March
 4) Beautiful As The Moon -terrible As An Army With Banners
 5) Morning Star
B: 1) War

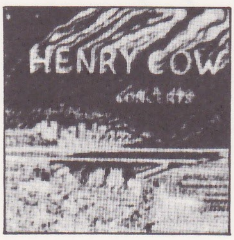
Dagmar (voice)
Peter Blegvad (gtr, clarinet, voice)
Anthony Moore (pno, electronic&tapework)
John Greaves (bs, pno)
Chris Cutler (drms, radio)
Tim Hodgkinson (org, pno, clarinet)
Lindsay Cooper (bassoon, oboe)
Fred Frith (gtr, vln, pno, xylophone)



〈Concerts〉

〈Desperate……〉と〈In Praise……〉の間にある溝を考えれば、ヘンリー・カウとスラップ・ハッピーの合体は早期解体を余儀なくされるだろうと、誰にでも感じ取られることだ。案の定、合体は半年と続かなかったが、ダグマーがカウに参加することになり、メッセージを持った高度にアレンジされたソング・ピースとフリーな即興演奏という二本の柱は維持される。そしてこのアルバムは、Ⓓ－①、③を除いて、再びヘンリー・カウ単独となった演奏、それもカウ初めてのライヴ演奏を収めている。A面、B面はダグマーと、それにB面では〈The Little Red Book of Matching M-ole〉で思想的近親性を明らかにし、初期のカウにとって音楽的にアイディーアルなグループだったソフト・マシーンの創立者ロバート・ワイアットのヴォーカルをフィーチュアした演奏、C、D面ではフリー・コレクティヴ・インプロヴィゼイションによる演奏を収めている。A面は、〈In Praise……〉の「Beaufiful as……」が2分割されてその中間に、初期のレパートリー（Ⓐ－②）、カトラーがかかって組織した20余名のロック・オーケストラ、オタワ・ミュージック・カンパニーの思い出に捧げられたⒶ－③、ワイアットのレパートリー（Ⓐ－④）が挟まれる枠構造をなしている。B面は〈Desperate……〉でのグリーヴズの曲、〈Unrest〉のハイライトだった曲が収

められている。スタジオ録音に比べれば、いずれもアレンジは簡略化されているが、個々のメンバーの、そして集団でのアドリブにはより大きなスペースが与えられている。だが、なんといってもこのアルバムで一番刺激的なのは、C、D面のフリー・インプロヴィゼイション・トラックだろう。もちろん、デレク・ベイリーをはじめイギリスやヨーロッパのフリー・ミュージックのミュージシャンたちの活動と多くの重なるところを持ちながらも、彼らの即興演奏が独自に達成している鉱脈は深い。それはただ彼らがエレクトリック・インストルメントを含むマルチ・インストルメンタリストであるという以上に、節約を知ったサウンド・ディスプレイ、間にまで延長される脈動感のコントロールなど、自由によって否定する方法論に裏打ちされているのである。



A: 1) Beautiful As The Moon
   2) Nirvana For Mice
   3) Ottawa Song
   4) Gloria Gloom
   5) Beautiful As The Moon
B: 1) Bad Alchemy
   2) Little Red Riding Hood Hits The Road
   3) Ruins
C: 1) Oslo
D: 1) Groningen
   2) Udine
   3) Groningen Again

Dagmar (voice, pno)
Lindsay Cooper (bassoon, oboe, flt, recorder, pno)
John Greaves (bs, voice, celeste, pno)
Chris Cutler (drms, pno)
Tim Hodgkinson (org, alt sax, clarinet)
Fred Frith (gtr, pno, vln, xylophone)
guedt
guest; Robert Wyatt (voice)

〈Hopes & Fears〉

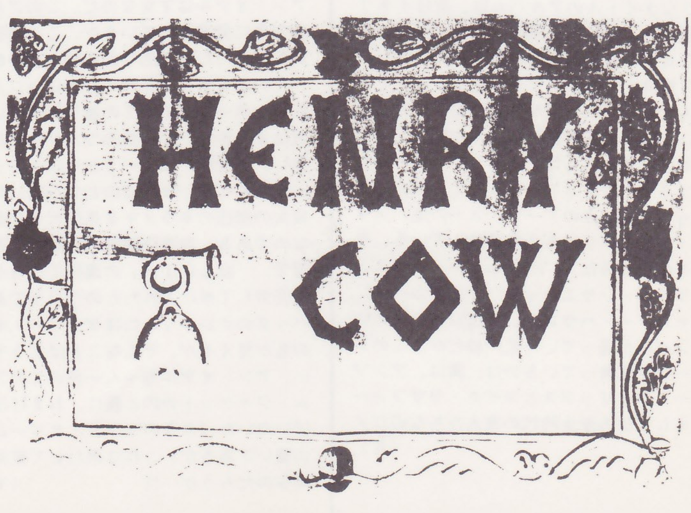
77年にヴァージン・レコードの、パンク・ロックを商業化するという路線転換、わけてもこれまでプログレッシヴなグループに好意的にアルバム化の場を提供していた路線からの撤退という事態は、コンサートや共同体的なミュージシャン生活の自乙組織を行なってきたカウの活動を、さらにインターナショナルな形に拡大し、レコードの自主制作、自主流通ルートの確立まで徹底化させることとなった。その前者が78年春にイギリス・ツアーを行なったロック・イン・オポジションの運動であり、後者の最初の成果がアート・ベアーズの名で制作されたこのアルバムである。カウのリング・テューンのコンビである，フリス、カトラー、ダグマーがメンバーとしてクレジットされているが、もちろんホッジキンリン、クーパー、それにグリーヴズに代わって参加した、フェミニスト・インプロヴァイジング・グループのメンバーでもある女性ベシストのジョージー・ボーンも参加している。

このアルバム＝歌曲集は、直接的には、政治上の意見の対立でヘンリー・カウと袂を分かったグリーヴズ、ブレグヴァドがつくったレコード〈Kew・Rhone.〉に対する批判として構想されている。現実の多義性に対する不可知論、ピュタゴラス的神秘主義を、弁証的理性によって批判しようとする試みである。カトラーが書いたこのアルバムと対をなすブックレットに依ればよりはっきりするのだが、それは迷宮の中で地図を作製する作業に同定される。Ⓐ−①の「自殺について」がブレヒトの詩であるほかは、いずれもカトラーの詩によるものだが、今の生態学的にも現在の体制では、それは資本主義でも似而非社会主義を問わず、未来のない地球人にとっての、直ちに生命を放り棄てたくなる夜と朝のしじまに捧げられている曲集である。不均衡なリズムと冷めたダグマーの声を核としてひたすら暗闇へ向かうアンサンブルは、だがしかしミノタウロスを確かに討をとろうとする意志に満ちている。



…HA: Palace Countryard
 1) On Suicide
 2) The Diving Line
 3) Joan
 4) Maze
 5) In Two Minds
…MER: Irrigated Land
 1) Terrain
 2) The Tube
 3) The Dance
 4) Pirate Song
 5) Labyrinth
 6) Riddle
 7) Eoeris, Dancing
 8) Piers ("The Leech Of Life The Graft Of Grace")

Fred Frith (bs, gtrs, violin, viola, pno, harmonium, xylophone, bs on Terrain & Tube)
Chris Cutler (drms, electic drms, percussions, noise)
Dagmar Krause (singing)
-joined by
Lindsay Cooper (bassoon oboe, soprano sax, recorder)
Tim Hodgkinson (organ, clarinet, pno, on Pirate Song)
Georgie Born (bass, cello, 2nd voice on Maze)
Jack Balchia (cigmeering assistance)





今は昔　懐しのブリテイッシュ・ロック傑作選—①

Y—山口　尚武
K—北村　昌士



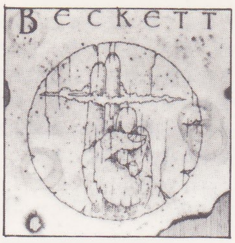
Beyond The Empty Dream
(E: Charisma CAS 1101)
英国の特異なマイナー・レーベル“カリスマ”は、今日ジェネシスなどの成功によってとても安定した活動を行なっているが、以前ほどおかしなレコードは、余り出さなくなってしまったようだ。このロマンティックなタイトルのアルバムは、実はイギリス国内のカソリック系教会のチャリティー的な目的で発表されたものらしい。オムニバス形式で、カリスマを代表するアーティストがそれぞれ何曲か作品を提供しているが、どれも全て宗教的な色彩を帯びていることはいうまでもない。キャパビリティー・ブラウンやクリフォード・T・ワードといったおなじみのアーティストの他、ジョン・マクラグリンも2曲参加している。中でも傑作なのは、“チャルター・ハウス・コラール・ソサエティー”なるグループ。チャルター・ハウスといえばジェネシスのメンバーが通っていた名門校だが、このグループを名乗っているのは、実は、アンソニー・フィリップスとマイク・ラザフォードそして彼の学生時代の友人たちなのだ！
（K）



Ann Odell／A Little Taste
(E: DJM DJLPS 434)
ショパンのアン・オデルのソロ・アルバムである。アン・オデルと言えば、この間のブライアン・フェリーのコンサートのとき、ステージの片隅でピアノを弾いていたという話を聞いたが、なんたることか!?…。アン・オデルは才女なのだ。このアルバムは73年に発表されているが、この時彼女がいくつだったか残念ながら知らないが、すべての曲を書き、すべてをアレンジし、またキーボードをすべての曲で弾いている。歌はまあ普通だが、曲のつくりかたが実に良い。英国版「ニューミュージック」といったかんじで、ほのぼのとした感じの中に、彼女の個性のキラメキを見出ださせる名盤なのである。音楽評論家の山田道成氏も絶讃で、「欲しいよー」の連発であるが、最近苦労して手に入れたとのウワサである。バックのクレジットにはゲイリー・ボイルの名が見えるが、そんなことはどうでも良い。アン・オデルちゃん一色のこのアルバム・ジャケットの内と裏に、おまけがいっぱいついたバニラのソフト・クリームが沢山書いてあるが、これは果たして彼女の好物なのだろうか…!?
（Y）



STREET NOISE
(　: Polydor
ジュリー・ドリスコールと、ブライアン・オーガー＆トリニティーによる2枚組のアルバムである。最近のボクの好みからして、こういった思想的なパッケージ・サウンドにはちょっと御無沙汰しているのだが、やはりこのアルバムには一目置かなければならないだろう。ジャズ・ロックともブルース・ロックとも言えるこのサウンドが何を主張しているのかというと、それはストリート・ノイズに他ならない。ストリート・ノイズとは街のざわめきである。例えば奥さん連中が物価が高いとかいうのもそのうちだが、ここでいう街のざわめきは、若者によるだわめきである。自由とは何か、そして、若者達の姿、現代社会の姿、そして祖国に対する感情、そんなことを彼等はこの2枚のアルバムにたたき込んでいる。メンバーは、ドリスコール、オーガー、そしてデヴィッド・アンブローズ、クライヴ・サッカー、この4人である。ゲイリー・ボイルが何故参加しなかったかと惜しまれるところだが、なんでもこの頃一時的にグループを脱退して学校に通っていたそうだ。
（Y）



BECKETT
(E: RAFT RA 48502)

幻のグループ、ベケットの残した唯一枚の作品は、正統的ブリティッシュ・ロックのバンドによる最高の一枚と考えていいかも知れない。全編はひとつのストーリーを持ったトータル作品として貫かれ、各曲には場面をより印象づけるために美しいオーケストレイションが配されている。1974年に現れたこの詩的なロック・グループのプロデューサーは、ファミリーのロジャー・チャップマン。キーボードも同じくファミリーのティム・ヒンクレーが担当している。決して音楽的に変わっているわけでも、新型の創造力にみなぎっているわけでもないのだが、そこはかとなく漂うこの気品と肌ざわりは、イギリスのしとやかな風景をゆっくりと喚起させる。このアルバムは、ブリティッシュ・ロックの残した完璧な芸術品として忘れることができない。（K）



RAREBIRD
(E: Charisma CAS 1005)

発足間もない英国のカリスマ・レーベルにデモ・テープ・オーディションを受けるためにやってきた４人の少年たち。1969年、全英ナンバー・ワン・ヒット「シンパシー」を発表したレアバードは、ハード・ロック一辺倒だった当時のニュー・ロックをよりプログレッシヴな方向へと導いた貴重な貢献を残したグループだ。グレアム・フィールドの教会オルガンを思わせる美しいキーボードの音色は、しばし時の存在を忘れさせられるほどの恒久的な響きを保ち続けている。70年に入って傑作「アズ・ユア・マインズ・フライズ・バイ」を発表したこのグループも、今では既に過去のものとなってしまった。しかしこれによって、カリスマ・レコードは、ジェネシスやヴァン・ダー・グラーフといった英国の至宝的ロック・グループの育成に力を入れて今日に至るのである。（K）



Clair Hamill／One House Left Standing
（E: Island）

日本の女優でボクの最も好きだった大関優子が名前を変えて日活ロマンポルノに入り、オリヴィア・ハッセーは来日してフランコ・ネロと結婚すると言い、さんざんのこの頃だが、さてさてこのクレア・ハミルは今いったい何をしているのだろう。彼女はこのワン・ハウス・レフト・スタンディングでデビューし、その後やはりアイランドからオクトーバー、そしてコンクに移って２枚アルバムを発表している。アイランドの２枚とコンクの２枚とではずいぶん雰囲気が違っている。アイランドではかなりフォークっぽく、そしてコンクではかなりポップに…大ざっぱに言えばこうなる。このアルバムは彼女の記念すべきアルバムだが、ジャケットが１番気に入っている。顔の映りが一番まともだからだ。しかしあのハスキー・ヴォイスはもう聴けないのだろうか？（Y）



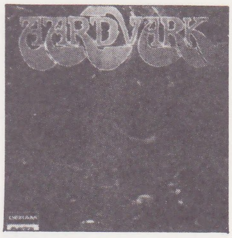
Chrs Harwood／Nice to Meet Miss Christine
(E: Birth RAB 1)

クリス・ハーウッドという女性シンガーについては、僕はまるで予備知識を持っていない。彼女のアルバムをリリースしたバースというレーベルは、たった２枚のアルバムを出して潰れてしまった会社だ。しかしこのアルバムのバック・ミュージシャンには誰でも多少ぎょっとさせられるに違いない。フルートとサックスを担当するイアン・マクドナルド、ギターの元イエス、ピーター・バンクス、そしてリフラフやマーク・アーモンド、ニュークリアスで働いたトミー・アイアーとロジャー・サットンという名うてのミュージシャンが集められ、各自のリラックスしたプレイが楽しめる。幻のレコードというか、夢の共演というか、このアルバムは実に美しく仕上げられた良質のポップ・ロック・アルバムの一枚でしょう。（K）



LINDA HOYLE／Pieces Of Me
（E: Vertigo 6360 060）

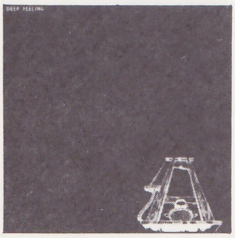
アフィニティーの女性ヴォーカリスト、リンダ・ホイルの唯一のソロ・アルバムである。バックの面々が超一流で、クリス・スペディング、ジョン・マーシャル、ジェフ・クライン、カール・ジェンキンスと、これだけでもブリティッシュ・ファンなら卒倒してしまうくらいの価値がある。これらのニュークリアス系のミュージシャンの存在を忘れるほど、このアルバムはリンダ・ホイルの素晴しさが光っている。なんといっても彼女の魅力はあの訴えるような悲しい響きを持ったヴォイスで、アフィニティのぶんちゃかぶんちゃかしたドロ臭い音より、やはりこうしたしっとりとした音に彼女の魅力がより大きく感じられる。クリス・スペディングは男は納得するハンサム・ボーイだが、このころリンダ・ホイルをはじめとして、リンダ・ルイス、ジュリー・ドリスコールといった女性シンガーのアルバムに参加している。気になる野郎だ。このジャケットを見るとわかるが、アフィニティーのジャケのブロンド娘はリンダ・ホイルではない。彼女は赤毛なのだ。（Y）



AARDVARK
(E: Deram Nova DN 17)

1970年当時、キース・エマーソン、グレアム・フィールズらの登場によって、キーボードを中心に展開するロック・グループに新たな評価が与えられることとなった。デラムの“ノヴァ”というレーベルからデビューを飾ったアードバークも、スティーヴ・ミリナーというキーボード奏者を中心とした完全なオルガン・グループである。彼らの演奏する全てのオリジナル曲は、極端なまでにオルガンのフューチャーされた古典的なブリティッシュ・ロックである。残念なことにこの若いグループも、またスティーヴというキーボード奏者も、今では全くの忘却の彼方の人となってしまったが、この作品に収められた暴力的で攻撃的なインプロヴィゼイションのテクニックの高さは、本当に惜しいグループだったと感じず

にはいられない。そして何といってこのジャケット、まさにイギリスのロック・アルバムだ。 （K）



DEEP FEELING
(E: DJM DJLPS 419)
黒地に白く断頭台が描かれただけの地味なジャケットで71年に登場したディープ・フィーリングは、デレク・エルソンのキーボードを中心とした5人編成のプログレッシヴ・ロック・グループ。エルソンの奏でるハモンドC3とハープシコードは、ブリティッシュの霧に包まれた、ある程の高貴さを持っている。変則拍子や複雑な曲構成が次々と飛び出す中、この素晴らしいアルバムは、芸術的な香りを時の奥底に永久に保ち続けることだろう。B－1「ギロチン」のフランスを舞台にした物語風の組曲は、ディープ・フィーリングの最も完成された部分だろう。A－3は、有名なベガーズ・オペラやポール・モーリアも演っている「クラシカル・ガス」だ。メンバーのことも、グループのこともまるで分からないが、このアルバムは、何度も何度も聴きたくなるのです。 （K）



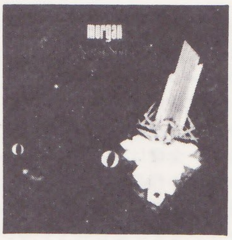
GRINGO
(E:MCA MKPS 2017)
同名異人がいるという説しきりのジョン・ペリー(元キャラバンその他のベーシスト)がいたグループ。ギターにはセイラーのヘンリー・マーシュがいる。もちろんこのグリンゴというグループは同タイトルのこのアルバム1枚で解散、このアルバムもとうの昔に廃盤になってしまった。発表は71年。音はもろにブリティッシュ・ロック、といった感じで、ジャズの香りとドロ臭さが見事な調和をなしており、ファンにはたまらないアルバムと言えよう。女性ヴォーカルのキャシーという正体不明のひとがいて、おそらくグリンゴ解散の後は、平凡な主婦になって今では太った母親にでもなっているだろう。このひとの声が男と区別しにくいほどの渋いハスキー・ヴォイスで、どこかなまりを感じさせる独特の発音がグッとくる。AB両面ともトップの曲が出来が良く、特にA1のレズリー・トーンのキーボードは涙を誘う響きを持っている何とも言言えない味わい深いアルバム。 （Y）



CRESSIDA／Asylum
(E: Vertigo 6360025)
ブリティッシュ・ロック興隆期の英国で最もクリエイティヴかつプログレッシヴな活動を行なっていたヴァーティゴ・レーベルは、現在のユーロ・ロックの先駆的グループを数多くリリースしていた。マーティン・グリフィス、アラン・パーク率いるベガーズ・オペラやロバート・カルバートのキャタピラー、そしてこのクレシダは、70年初頭のイギリスを見事に再現する素晴しいグループとして非常に貴重な足跡を残している。キーフの狂気じみた芸術的なジャケットに包まれたクレシダのセカンド・アルバムは、正統的なシンフォニック・オーケストラとイギリス的なハモンド・オルガンの響きに支えられて、現在聴いても美しく、また極めて力強い。A面の大作「ミュンヘン」は、ヨーロッパの古城にたたずむようなノスタルジックな優しさをたたえたブリティッシュ・シンフォニック・ロックの極致。 （K）



AFFINITY
(E: Vertigo 6360 004)
イギリスの片田舎、古城に張りめぐらされた堀。そこで無心にたわむれる2羽の白鳥をぼんやりと見つめる、番傘をさした細身の女性……。今や伝説的となったキーフのこの名ジャケットにつつまれた1枚のLP。これがブリティッシュ・ロック界きっての名盤と言われるアフィニティーのアルバムである。番傘をさして座っている女性は、リンダ・ホイルなのだろうか…。よく僕は「歴史を感じさせる音」とい表現をして友人に笑われる。例えば、ジェントル・ジャイアントのスリー・フレンズなんかをひっぱり出して聴いてみると、例えようのない音の「重さ」を感じる。これが「歴史を感じさせる音」なのだ。このアフィニティーの音も、ズバリ一言「歴史を感じさせる音」である。重い重い、高見山と朝潮をたしてもまだ足りないよ。まだ （Y）

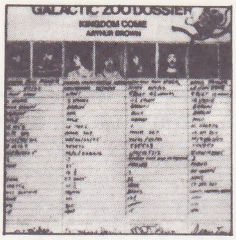


MORGAN／Nova Solis
(I: RCA LISP 34154)
英国のミュージシャンがヨーロッパで活動し、その国でレコードを発表する例は割と多い。ドイツのネクターなどはその代表だが、1972年のイタリアで、当時のイタリアン・ロック顔負けの大プログレッシヴなアルバムを発表した男、モーガン・フィッシャーは非常に奇特なアーティストといえるだろう。余りにも有名な組曲「ノヴァ・ソリス」は、ホルストの「惑星」がフィッシャーの重厚なキーボードの演奏によってテーマ化され、広大な宇宙空間への旅を開始する。モーガンの複雑きわまる宇宙的インプロゼイションの中で、きらめくようなハモンドC3の音色が、ヴォーカルと一体となるとき、アルバムは至高のクライマックスを迎える。尚モーガンは、この翌年セカンド・アルバムを録音するが、それが世に出ないままモット・ザ・フープルへと加入し、現在はウェイン・カウンティのグループに働いている。 （K）



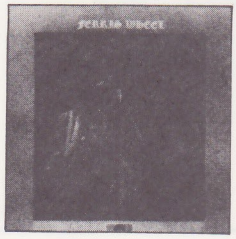
Julie Driscoll／1969
(E: Polydor 2383 077)
ジュリー・ドリスコールのソロ・アルバム「1969」の登場。仲間うちではボクしか持っていなかったのに、つい先頃友人の森崇氏がカナダだかアメリカだかで買って来て、「ほら」といって見せてくれた。ジャケットがボクのよりキレイで、非常にくやしい。このアルバムは1969年に録音されている。それで単純に1969とタイトルをつけたのだろうと考えると、なんとなく彼女らしいような気がして可笑しくなる。ところが発表は71年となっており、もしかしたら

ボクの持っているアルバムが再発ものかもしれないが、そうでないとしたらこの２年間の空白は不思議である。バックにはやはり壮々たるメンバー。ざっとあげると、キース・ティペット、クリス・スペディング、ジェフ・クライン、マーク・チャリグ、エルトン・ディーン、ニック・エヴァンズ、トレバー・トンプキンス、ジム・クリーガン（リンダ・ルイスを奪ったニクイやつ!!）ボブ・ダウンズといったところである。サウンドはとやかく言うまい。　（Y）



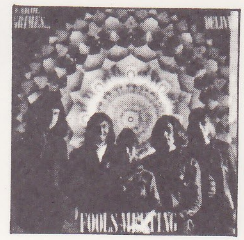
Arfhur Brown's Kingdome Come／Galactic Zoo Dossier
(E: Polydor 2310 130)

クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウンの解散後、自らのグループ、キングダム・カムを率いて不死鳥の如く甦ったアンダーグラウンドのヒーロー、アーサー・ブラウンが1971年に発表した記念的なセカンド・アルバム。M・W・G・ハリスとジュリアン・ブラウンのツイン・キーボードとアンディー・ダルビィーの強力なリード・ギターを得て、水を得た魚のように活力にみなぎったアーサーのヴォーカルは、まさに鬼気迫る邪悪なエネルギーの権化のようだ。現在はイギリスの大学で講義をしたり、たまにソロ・アルバムを発表しているブラウン氏だが、彼のキャリアの中で最も熱い季節がこの作品の中に凝縮されている。キングダム・カムの演奏は今聴いてもまるで陳腐な感覚はない。興味のある方は、ガル・レーベルから出ている２枚組ベスト盤を聴いてごらんなさい。　（K）



FERRIS WHEEL
(E: Polydor 583 066)

女性ヴォーカル気違いの僕にとって、生涯の恋人であるリンダ・ルイス…。そのリンダ・ルイスがソロＬＰを出す前に在籍していたグループが、このフェリス・ホイールである。リンダは17才のとき学校をやめて、ソロを出す前最後にこのグループに参加したのだった。このフェリス・ホイールもアルバムは１枚のみと思われる。70年の発表で、メンバーは黒人３人（リンダ・ルイスとスウィートナム兄弟）を含む５人組。Ａ面に針をおとすと、かなり古臭い音がのっけから飛び出す。リンダ・ルイスは天才としか言いようの無い素晴しい女性シンガー＝ソングライターで、すでにこの時にして彼女独自の世界を切り開いていた．大御所中村とうよう氏をして、英米トップクラスの女性シンガー数人が束になってかかってもリンダ・ルイスにはかなわない、と言わしめたほどの彼女、この時若干19才である。ヴォーカルはリンダのみではなく、男の歌もまた良い曲で使われている。幻の名盤！　（Y）



Carl Grimes And Delivery／Fool's Meeting
(E: B&C CAS 1023)

1970年、イギリスの音楽界を騒然とさせたスーパー・グループがまたひとつ誕生した。女性ヴォーカリスト、キャロル・グリムズは当時非常に人気のあったロック・シンガーで詩人。バック・ミュージシャンのスティーヴ・ミラー、フィル・ミラー、ロイ・バビントン、ピプ・パイル、ロル・コックスヒルは、いずれも経験豊かなセッションマンだった。このアルバムは、発売当時どのような扱いで世に出たのだろうか。彼らは現在までに、カンタベリー・ツリーといわれる英国の重要なアーティスト群の一貫として数多くの作品を残していることは云うまでもあるまい。ハットフィールド＆ザ・ノース、ソフト・マシーン、ゴング、キャラバン、コックスヒル＆ミラー、アンクル・ドッグ、ナショナル・ヘルス、……初期イギリスの女性ヴォーカルをメインにしたアルバムとして、「アフィニティー」と並ぶ傑作。　（K）



IMPORTED RECORDS





ZNR

Traite De Mecanique Populaire

F：Invisible 10002

ＺＮＲは、元バリケイドⅡのヘクトール・ザゾウと、ピアニスト、ヨセフ・ラサイユを中心にしたフランス産のアヴァン・ギャルド・グループ。1976年のデビュー・アルバムに続くセカンド・アルバムが、つい先頃発表され彼らの健在ぶりを伝えている。

このグループ、実は数あるユーロピアン・ロックの中でも有数の高度な音楽性を有している。それも全くのコマーシャル機構を超越した絶対的な位置にいる数少ないアーティストだ。

彼らは、フランスからしばしば現れる前衛的な文学者や画家、音楽家と同じように、極めて精神的余裕を持った音を出す。メンバーのセンスのいいプロフィールも、今世紀初頭のパリの芸術家のように洗練されている。殆んどの曲が、不協和音と変則的なリズムを持ったキーボードによる小品だが、厳密な計算と空間性が生み出すこの深遠な実験音楽は、日常我々が決してのぞくことのない感性のクレバスを、目が醒めるような心地よさとともに映出してくれる。もう我々の世代にはサティもケイジも必要ない。しかし、これがロック・ミュージシャンの作品かと思うと、やはり日本の現状にはあまりいい気持ちはしない。

（北村）



PIERRE MOERLEIN' S GONG

Downwing

E：Arista SPART1080

……ピエール・モエルランズ・ゴング、か。なんともシビアなグループ名。かって彼らはデヴィッド・アレンズ・ゴングと名乗っていたとか、C.O.I.T.とかは今さらどうでもいいことなのだろう、多分。この雑誌が出るころにはスペインでのソロアルバム３作目がリリースされているであろうアレンとか、スティーヴ・ヒレッジ、ティム・ブレイク、ギリ・スミスといった人達の活躍をみていけば何も言うことはないわけだし。

レーベルをアリオラに移したニュー・ゴングの魅力は、前回に続くスーパー・ゲスト陣。マイク・オールドフィールド、ディディエ・ロックウッド、スティーヴ・ウィンウッド、ミック・テイラー等が曲ごとに参加して花を添える、というよりもむしろモエルランを初めとするメンバーにバックアップされて華麗にソロを繰り広げている。モエルランとはペッカ／遙かなる地平線、以来の共演であるタイトル曲でのオールドフィールド。そして、ザオやクリアーライトでプレイしていたヴァイオリニスト、ロックウッドにはスペイシーなゴングを垣間見ることができる。モエルランとのデュオは美しい。アラン・ホールズワース参加の前２作の後ではとても心地好いし、何より次回のゲストが楽しみだ。

（Ｍ・洋）



LOCAN DA DELLE FATE

Forse Le Lucciole Non

Si Amano Pui

I：Polydor2448055

あァ、なんて美しいのだろう…………。

ラピス・ラズリーの精の魔法にかかった世界では、月も浜辺も、そして、天使も水晶になってしまう。

人が想像できるかぎりの最も美しい情景——ロカンダ・デレ・ファッテは、音楽で描写してしまう。

ダブル・キーボードにツイン・ギター、ベース、ドラムス、そしてソロ・ヴォーカリストという理想的な７人編成。確実なリズム・セクションに泣きのギター、ギタリストの吹くフルートも効果的だ。そして、なんといっても、このグループの最大の聴かせどころは、雄大なキーボード群に絡み付くアコースティック・ピアノであろう。まるでリボカクサンのように綾織りをなしてゆく様は、たとえようもなく美しい。これでもかという位に泣きのフレーズが重ねられていくイタリアン・ロック史上不滅の一枚といえよう。

ＰＦＭを初めて聴いたときのあの衝撃が、彼らからは感じられた。

もし、ロカンダ・デレ・ファッテを先に聴いていたら、きっとＰＦＭは聞き流されていただろう……………。

（高石源太）

ドイツで比較的安定した活動内容を誇るメトロノーム・ブレインの体質は、ここ数年ちょっとした硬化現象を起こしているようだ。ブレインに限らず、ドイツ出身の大物ロック・グループが、現在商業的な成長とジャーマン・ロック自体のもつ独自性の間でひどいジレンマに陥っているように感じるのだがどうだろう。経済力ではヨーロッパで最も進んでいる西ドイツが、ディスコ・ミュージックで大成功を収めた時点で、ロック・シーンも不可解な変質をとげてしまったようだ。ブレインの新しいグループ、アドニスのファースト・アルバムは、典型的なドイツ産のシンフォニック・ロックである。ノヴァリス、ペル・メル、ヘルダーリンなど、過去に素晴らしい作品を残したトップ・グループ達の影響の中から新たな可能性を生み出そうとするアドニスの真剣な姿勢は充分に評価できるものの、彼らの目指すものの対象があまりに大きすぎるような気がする。つまり世界市場へ意識的になるあまり、ボストンやカンサスのような領域にまで足を踏み入れてしまっているようだ。しかし、この雄大なオーケストレイションと哀愁のギター・ソロは、日本のファンの間でもかなりの話題となることだろう。

（北村）

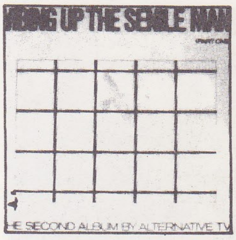


ANYONE'S DAUGHTER
Adonis

G：Brain0060.186

単調といえば単調だが、演劇的というか場面を想像させる彼らの音はひどく立体的で、神経に食い込んでくる。ファースト・アルバムとの間にヒア・アンド・ナウとのライヴをはさんで、ＡＴＶのセカンドがリリースされた。シンセサイザーを中心とせず、いわゆる楽器の音やヴォイス、自然音で組み立てられた音群に歌詞がかぶさってくる。パンク・バンドというイメージは完璧に拭い去られ、アヴァン・ギャルドな方向をとっている。ヨーロッパ的な繊細で計算された彼らの態度は、直線で描かれたカイネティック・アートを想い出させ、とても快く、また興味深い。少くても表面的には意識の暴走はなく、冷静で知的な姿勢を保っているが、視点を変えればこのような曲形式をとることが大きな暴走だといえるかもしれない。暴走することがニュー・ウェイヴならＡＴＶは明らかにその意味にあてはまる。実際、近頃はこのようなタイプの音に心を乱されることの方が多い。ＡＴＶのパンクからの方向転換は、最近の前衛的バンドの動向と合わせて多くを考えさせる。このアルバムにはスロビング・グリストルのジェネシス・Ｐ・オリッジが参加している。ATVは、Dave George を加え、既にPart　2 を計画しているという。それにしてもこのジャケは光っている。

（瀬沼　俊隆）



ALTERNATIVE TV
Vibing Up The Senile Man
(PartI)

E：Deptford Fun City DLP03

スペインのジャズ・ロック・バンド、ムジカ・ウルバナは前回の反対派ロックの特集で少し紹介しました。彼らは1978年にＲＣＡから「Iberia」というタイトルのセカンド・アルバムを発表していて、そこではオーケストラを導入したかなりスケールの大きい作品を演奏していますが、この作品は彼らのデビュー・アルバムにあたるものです。ムジカ・ウルバナは、ひとえにキーボード奏者、ホアン・アルベルト・アマルゴスのワンマン・グループと言いきってもかまわないでしょう。アルベルトはとてもアクティヴな男で、スペイン本国では同じエディグサ・レーベルからフルイ・イ・ホアン・アルベルトというグループ名で、スパニッシュ・ギターとキーボードの多重録音によるマイク・オールドフィールドのような作品を出したり、プログレッシヴ・グループ、ゴティックの一員でもあります。このアルバムにおけるアルベルトのプレイは、彼を〝スペインのデイヴ・ステュワート〟と呼びたくなるくらい、ハットフィールズやナショナル・ヘルスに通じる洗練され尽した高度なハイ・センスのプレイを聴かせてくれます。時折入るヴァイオリンやスパニッシュ・ギターの鮮烈な音色と織り合って進行するアルベルトのキーボード・プレイは、カンタベリー系の新しいジャズ・ロックが、いまやヨーロッパ全域で普及したという証しでしょうか。

（北村）



MUSICA URBANA
Musica Urbana

SP：Zeleste UM2033

ペペ・マイナはイタリアの作曲家でマルチ・プレイヤー。このアルバムでもギター、ベース、シンセサイザーの他、フルートや電気シタール、タブラといった実に多くの楽器を巧みに操っている。この全篇インストゥルメンタルのアルバムは、イタリア独特のカンツォーネ色は殆んどなく、多分にイギリスのマイク・オールドフィールドに通じるものがある。シンセサイザーのたおやかな流れや〝Spring Song〟、〝Africa〟といった曲名にもみられるように、今頃の季節を音で綴ったような明るく、とてもみずみずしい演奏が収められている。

イタリアが持つ美術品は約 400万点といわれているが、そのうち美術館などで一般に公開されているのは、僅か８％の約30万点で、残りの92％は私蔵または死蔵の状態にあるという。いつ迄たっても、このペペ・マイナのような音楽をとり扱わない日本のロック業界にあっては、彼の存在もさしずめ、閉鎖中の部屋に無造作に積み重ねられているイタリアの美術品と同じだが、彼の他にもまだ、素晴しいミュージシャンはたくさんいる。広く一般に知られていないイタリア芸術の至宝は、なにも美術品だけとは限らない。

（三津間　功）



PEPE MAINA
Il Canto Dell'arpa E Del Flauto

I：Ascolto ASC20004



DOROLES
Asa Nisi Masa

SP：Polydor CAS1101

最近某誌(？)で某氏(？)が紹介して以来、スパニッシュ・ロックのブームが続いているようだが、比較的人気があるのがTriana, Granadaといったメロディアスな言わゆる叙情派志向のグループである。このドロレスは、そういったタイプのグループにはあてはまらない。言わゆるジャズ・ロックといったタイプのグループである。ドロレスは、サックス奏者をリーダーとした5人組で、キャリアはわりと長いらしい。このドロレスという名の前にも、別のグループ名で活動していたということだ。このアルバム・タイトルは、映画通の人が、なんとかいう映画の中で使われた有名な呪文だと言っていたが、意味は不明である。サウンドは圧巻である。まず1曲目はスキャットを中心とした軽快なサウンド。後半に入るスパニッシュ・ギタリストPaco De Luciaのフラメンコ・ギターが素晴しい。ドロレスは、パコの新作で数曲にバックで参加しているのでそちらの方も聴く価値十分である。2曲目はサックスの独断場で、見事な空間を創っている。そして3曲目もスキャット。B面に行くと進境著しいというピアニストのソロ・パートも聴ける。とにかく〝カッコ良い〟ドロレスのサウンド、トリアナにしびれているキミも聴いてみよう！

（山口尚武）



GUADAL QUIVIR
Guadal Quivir

SP：Harvest C062-021534

前述のドロレスと共に、ジャズ・ロックの有望グループ。こちらは新人グループで、これがデビュー・アルバムである。スペインにはジャズ・ロックのグループが非常に多いのだが、僕が思うにドロレスとこのグァダルキヴィール2つが群を抜いている。技術的な面ではスペインのグループはどれもみな非常に高いものを持っているが、この2つはサウンド面で一皮むけた大人の味を出していると思われる。ゴーマ（アルバム1枚で解散）にしても、イセベルグにしても、ちょっと「臭さ」があるのが気にかかる（またそれも良いのだが）。グァダルキヴィールは、新人とは思えない程の洗練されたサウンドを展開する。リズムの切れは抜群だし、ギター、サックスも申し分ない。ドロレスに比べると、ひとつひねりが足りないという感じもあるが、そこはイキの良さでカバーしている。このグループの特徴は、ツイン・ギターにピアノなしというところで、2本のギターとサックスの絡みが絶妙なのである。アルバムを通して、実にスペインらしいサウンドが展開されており、ドロレスと共に今後大いに期待できる。これまた〝カッコ良い〟グァダルキヴィールのサウンド、グラナダにしびれているキミも聴いてみよう！

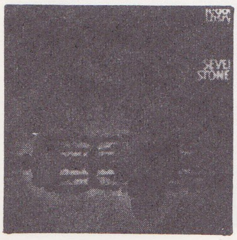
（山口尚武）



RICCARDO COCCIANTE
Concerto Per Margherta

I：RCA TPL1－1220

イタリアン・ロックの幾つかの作品には、音楽として本当に大切な要素を持った、ロックの思想的云々とは全く別の位置で貴重なレコードが少なくない。彼らは実に音楽の持つ独立的な概念を大事にしていて、ともすればひどい時代錯誤に陥る危険もある。しかしイタリアの良さはとても生理的なものなのだ。リッカルド・コチャンテというカンタウトーリを紹介しよう。彼はイタリアの生んだ最大のシンガーの一人だ。国内での彼の人気は、しばしばバティスティの絶対的な地位を脅かしている。このヴァンゲリスを全面的アレンジャーに迎えた76年の作品を君にも聴いて欲しい。切々と歌うコチャンテの姿はあの伝統的なイタリアン・カンツォーネのそれだ。ヴァンゲリスの雄大なキーボード・オーケストレイションもとても真剣な歌の救済役を演じている。旧式の歌曲の概念から全てはまるで脱出していない。それでもこのアルバムはとても強い説得力と普遍的な音楽風景を以って聴く者への事実肯定を迫ってくる。決してオザンナやイル・ヴォーロのイタリアを期待することなかれ。それでもこのシンガーは圧倒的に魅力的なのだ。（北村）



Teddy Lasry
SEVEN STONES

F：RCA PL37257

「$E=MC^2$」は契約上の手違いから、惜しくも日本発売のチャンスを逸してしまったようですが、本国でのテディー・ラスリィの存在はあの名作のおかげで、ソロ・アーティストとしてよりクローズ・アップされたようです。彼の新作「セブン・ストーンズ」が今年の初めにリリースされました。ラスリィの無限を志向するような力強いシンセサイザー・ソロで幕を開けるこの作品では、彼のキャリアを忍ばせるジャズのエッセンスが前作よりも一層大胆にフューチャーされています。パーカッシヴな感覚は前作よりもヴァラエティー溢れる複雑なテンションをもたらし、泣きのエレクトリック・ピアノによる静寂の部分とのはっとするような対比の中で、異次元的なフェアリー・ヴィジョンを現出してゆくのです。テディー・ラスリィの音楽に聴かれるような、イマジネイションとヴァイオリズムを強調した作品は、内的な意識の中であなたの超越性の発芽を期待するものなのでしょう。非常に生理的に気持ちのいい音の波間から時折出てくる超前衛的不協和音による音像は、知覚と未知、時間と空間への疑問を最も明晰に与えてくれるような気がします。少くとも、僕は安易なスペース・ミュージックよりも、こちらの方が全然好きだから………。

（北村）

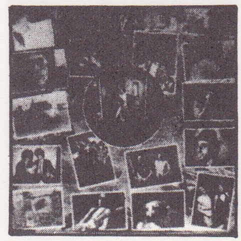
フランスの前衛ロックはいよいよメディアへの総攻撃を画策しはじめた。実存的な考察から政治まで、あらゆる知識階級の問題を自らのエナジーに転換すべく、彼らはとても積極的だ。元ZAOのサックス奏者ヨッコ・ジェフ・シェファーのプロジェクトも3枚のソロ・アルバムとこの二度目の「スピード・リミット」のセッションによっていよいよ基本方針を意識的なかたちに整えようとしている。仮空のアマルガムと能動的な美意識を極端に露呈したこのアルバムから、多くの人は自由なインスピレーションを確実に得るしくみになっている。ミシェル・リポーシュの刃先のようなヴァイオリンソロと、女性ヴォイスによるエロスの森の向こうに広がるのは、シェファーの試みる究極的な形態改造論に基いたジャズの概念である。そしてそれはすべてのロック・ファンに向けられたものだ。メンバーには“ディフェンス・ド”のシロックや“マグマ”のヤニック・トップ他、フランス・アンダーグランドの著名な人物が名を連ねている。（北村）



SPEED LIMIT
Speed Limit

F : Fpli 0101

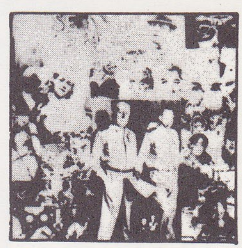
たぶん、2枚目だと思う。凝ったタイトルを裏切らないアルバムになっている。2人の女性ボーカリストとホーンが所々に効果的に入り、全体に飽きのこないセンスのよさを聞かせてくれる。ボーカルとギターのハンス・リンデンブルグがほとんどの曲を書いているが、彼はなかなか知的な人のようだ。オランダのパンクという見方もあるようだが、彼らの音はパンクでもなければ、テクノ・ポップでもない。しゃれたセンスをイヤミなく演じられるバンドである。スパイスの効いた感覚が耳を刺激する。元ゴールデン・イヤリングのロベルト・ヤン・スティップスがプロデュースしている。ところで、この中に「Tokyo」という短い曲があり、生ギターで歌っているところまではいいのだが、ラストに例によってバカにしたようにドラが鳴る。彼らにとってトーキョーは別天地であり、未知の不安と期待の入り混じった理解不能の土地なのである。そして、そこに住む私達も多かれ少なかれ、彼らとは別の生物として認識されている。私達にとってロックは、その場しのぎの借りものなのだろうか。（瀬沼　俊隆）



GRUPPO SPORTIVO
Back to '78

E : Epic EPC83263

北欧、特にスウェーデンのロック・グループの信じ難い力強さは、決してコマーシャルな場所との結び付きを必要とせずに存続している。前回の特集で紹介した「反対派ロック」は、ヘンリー・カウの重要な補佐官としてサムラ・ママス・マンナの名を挙げている。そしてサムラと共に是非とも紹介しなくてはならないアーチストがこのアルベーテ&フリティッドだ。この2枚組のアルバムは、まず地獄のような暗い場所を連想させるインプロヴィゼイションで幕が開く。素晴しく強靱なエネルギーにみなぎったアルベーテの世界には、パンクの持つ都市社会への挑戦と彼らを取り巻く自然界への考慮が対比的に描かれている。“全てのジャンルが君の異常性の根源なのだ”と攻撃的に語るこのアルバムを英国の評論家ケネス・アンセルは、「ヨーロッパ社会の病巣にメスを入れたスウェーデンのヴェルヴット・アンダーグラウンド」と紹介している。この民族音楽の領域にも精通するA&Fのサード・アルバムが君の脳に何を残すのか、とても楽しみだ。（北村）



ARBETE AND FRITID
Se Upp För Livet

S : MNW 75P

雄大絶美な白いアルプスを背景に、この熱血の愛国〝イタリア〟が生みだしたアルニ・デル・ソーレ。

大抵、男性であるならば誰でもが一度、理想の女性像としてラファエロの描くマドンナを、自分自身の心の片隅の生みだした事があるはず。そんな彼女との出会いは正に奇蹟としか言い表わせないが、それもやはり、ほんの束の間の幸福。すべてが鏡のようにきらめくと沈んで行ってしまった今、もう二度とあの幸せな日々は還って来ない。そんな思い出も消えぬまま、今年もあの海鳥の舞う地に戻って来てしまった。

そんなラブ・ストーリーを感じさせる彼等の通算枚目に当たるこのアルバム。全曲をボーカルがリードをとり、バラード風に仕上ってはいるものの、このアルバムの雰囲気を醸し出すのは、甘いゆったりとしたピアノの旋律と、透明感に溢れるシンセサイザー、メロトロンのメロディ・ラインの風雅さに他ならない。そして、B-1“Se hai Peccato”で見せる哀愁に満ちたギターのドラマチックなサウンドも、聞き逃すことはできない。

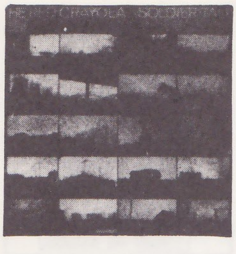
さて、得てすると本当に映画のサントラ盤に成り兼ねないが、まあ安楽椅子にゆれた気持ちで聞いてみるのもたまには良いでしょう。

主人公はあなた自身なのだから………（春原幸美）

NOW

PRINTING

ALUNNI DEL SOLE
Liu
I : Ricordi SMRL6225



THE RED CRAYOLA
Soldier-Talk
E : RADDAR RAD18

このレッド・クレイオラというバンドの経歴はよく知らないが、とにかく音はかなりすごい。前に、同じくレーダーから60年代にリリースされた彼らのアルバムも再発されている。これには、アヴァン・ギャルドなサイケデリック・ミュージックが収められていて、今尚非常に新鮮である。今度出たアルバムでは正式メンバーは２人で、数人のゲストが参加している。一連の前衛パンク・バンドや反対派ロックと比較しても、かなりの鋭さがある。数年以上の時間を経過した前衛的アンダーグラウンド・バンドがニュー・ウェイヴの動きを吸収する、といったパターンをとっているが、言いかえれば、あまりにも前衛的であるために認められなかったものが、ようやくオーヴァー・グラウンドへ浮上する時期になってきたのである。まもなく、そう、80年代にはこのタイプの音が主流になるという可能性を実感させるアルバムだ。立ちふさがっていた巨大な壁が、崩れ落ちていくのが聞こえる。ペル・ウブのメンバーが参加している。

（瀬沼　俊隆）



KENNY HAKANSSON
SPringlekar Och Ganglatar
S : Silence SRS4645

今月号で紹介したケブネカイゼ、興味を持って頂けましたか？　ケニー・ハカンソンはそのケブネカイゼのリーダー格のギタリスト、これは彼のソロ・アルバムです。

通常私達が、ユーロ・ロックとしてプログレッシヴなミュージシャンに求める音楽性とは、ヨーロッパが長い間の文化的産物として生み出した洗練された美的感覚に負うところがとても大きいように思います。それは、時にはクラシック・ミュージックから流れついた和声構造の美しさであり、不安定なまでに内面的で詩的な世界との対面にあるようです。

しかし現在のヨーロッパの創造的な芸術家は、そうしたナルシスティックな汎ヨーロッパ主義的な傾向と暗に対立しているようです。より新しいエネルギーを獲得するために、彼らは様々なファクターに挑み、全くの新しい領域を築こうとしています。スウェーデンのベテラン・ギタリストのソロ・アルバムであるこの作品からも、北ヨーロッパのロック・ミュージックが、彼らの地域の民族音楽と深い接触をもっていることが伺えます。全編をハカンソンのシンフォニックなギター・シンセサイザーが、多重録音によって不思議な有機的空間を創出しています。誰かがこのアルバムを評して、「アシュラがマイク・オールドフィールドとセッションをしているような」と語ったとか。

（北村）



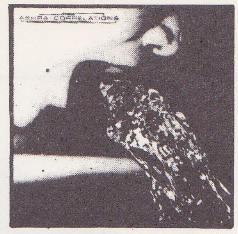
This Heat

RECORD REVIEW 国内盤

文・北村　昌士



UK／デンジャー・マネー



アシュラ／水平音響への誘導



デレク・ベイリー／ロンドン・コンサート

UK／デンジャー・マネー
ポリドールMPF 1227

UKが4人編成で発表したデビュー・アルバムが、あまり音楽的に傑出したものではなくて少しがっかりした憶えがあるが、4人のうちの2人が抜け、新たに元フランク・ザッパのドラマーを加えて発表したこのセカンド・アルバムの素晴らしさはどうだろう。現在の英国のロック・シーンからこれほどまでに熱意と創造性にみなぎった作品が生まれるなんて信じられない程だ。今回の作品で最も重大な役目を負ったエディ・ジョブソンは、アラン・ホールズワースのうっとおしい早弾きギターに代わって超越的な音色のエレクトリック・ヴァイオリンをふんだんに披露してくれる。ソリッドでたくましいジョン・ウェットンのヴォーカルもたまらない。この作品に関しては、ある意味で名誉と防衛の色彩を濃厚に秘めたものと受け取ることも出来るが、やたらとポップになるだけが能じゃない。ここまでやれば誰も文句は言わないさ。手に汗握る大傑作だ。

ブライアン・イーノ／ミュージック・フォー・エアポート
ポリドールMPF－1229

「〝Ambient Music〟は特別の強要なしに、聴取の際の多くの注意の度合いに適応するに違いない。興味深さと同時にそこには無限の可能性が存在するのだから。」
Brian Eno

イーノはこう言ってのけても、時代が僕たちにいくつかの問題を強要する。現代における環境の概念とは、決して理知整然とした物質のみを指さしたものではない。僕たちを暴力的に服従させようとする巨大量の情報は、物質や自然界以上の強力な影響力を持っているはずだ。このアルバムの主張である音楽情報の物質化、精神と環境とのバランスの確立は、資本主義文明の中でどれだけの効力を持つのだろう。性的な欲求やさまざまな欲求に関連したいろいろな商品がちまたで売られている。それらの中でこの音楽がなんらかの特権を有するなら………これは疑いもなく最大級の暴力といえるのではないだろうか。こんなイーノのNHK教育テレビ的な発想がたまらなく気に入らない。

ライブ・ヘラルド／スティーブ・ヒレッジ
ビクター－VIP－9908（2枚組）

常に我が道を行くスティーブ・ヒレッジ。彼の率いるLバンドのギグは、数回のツアーが全て音楽関係者の間で圧倒的に注目されるという素晴らしいものであるらしい。この2枚組ライブ・アルバムは、多分スティーブ・ヒレッジのギターに酔いしれてやまない人々には、待望のレコードといえるだろう。ヒレッジはゴングの時代から、ヴァージン系のアーティストの中で最もライブ・ステージを重視する男だった。それもそのはず、彼のギタリストとしてのエナジーは、決して思考的に生み出されたものでなく、感覚と肉体の協調によって生成されたものだからだ。「サーモン・ソング」「ハーディー・ガーディー・マン」「エレクトリック・ジプシーズ」と彼のおなじみのナンバーが元気よく飛び出してくる。新生ゴング、そして旧ゴング、このLバンドと、かっての神話的共同体は、それぞれのリーダーのもとに、独自の活躍を定着させたようだ。さあこれからが本番だ。

アシュラ／水平音楽への誘導
ビクターVIP2117

西ドイツ最大の巨星アシュラの新作。現在では無数に存在するシンセサイザー・グループの中で、アシュラの動きが初期からずっと気になっていたのは決して僕ばかりではない。ギタリスト、マニュエル・グートシュンクの天才的なひらめきに支えられたアシュラのサウンドは、現在の音楽メディアの中で最も今日的でしなやかな世界を創造している。

今回の作品は、ヴァージン・レーベルに所属してから既に三作目、油の乗り切ったマニュエルのギター・プレイは素晴らしく新鮮だ。マシーンと人間性との関連は、彼らのような自然さに基いて探究されるのがよいのではないだろうか。60年代から70年代を征はした〝ロック〟のフレーズが、この未来的な音楽構造の中にもしっかりと生きている。ジャケットもハイ・センスの極致といいたい。（要するに全部イイのだ！）

ロンドン・コンサート／デレク・ベイリー、エバン・パーカー
ビクターVIP－6658

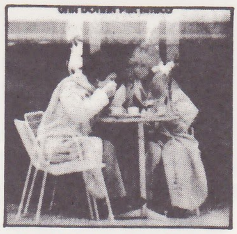
彼らは始めなくてはならなかった……ヨーロッパのジャズが、演奏者たちが、ヨーロッパ文明の中での衰弱した病人でしかなくなった頃、厳然たる創造者と破壊者の役割を背負ってインカス・レーベルを設立した。カンパニーは現在まで5枚のアルバムを発表し、フリー・ミュージックに於ける合同演奏が何たるかを開示した。そしてこの、ロンドン・コンサートは、デレク・ベイリーのギターとエバン・パーカーのサクリフォーンによって、心ゆくまでデュオの可能性を追求したアルバムだ。欧米の合理文明は、楽譜に書き表わせる様な音楽にしか快感を覚えることのできない人間を無数に作り出した。音楽の起源そして楽器の原性は、人々の生理から完全に追放されてしまったのだ。デレクのギターとエバンのサックスによる息の合った高密度のインプロビゼーションは、side2あたりから異常な盛り上がりをみせてくれる。フィルターとオブラートを取りのぞいた裸の音楽がここにある。このストレートな感触が僕らに与えるものは、偉大なまでに強力な精神エネルギーを持った2人の男の存在感である。

ルチオ・バディスティ／女ともだち
RVC RUP6378

RCAヌメロ・ウーノ・レーベルのスーパーアーティスト、ルチオ・バティスティの最新アルバムは、ここ3年ほど彼が追求し続けたある問題の解答が含まれた作品である。バティスティの努力とは、他のイタリアのロック・ミュージシャンが国民的なアイデンティティーをかたくなに守ろうとするのに反して、イタリアのロックをいかにインター・ナショナルな次元にまで到達されるかという立場を明らかにしている。これにはいくらの反対意見も当然あることだろう。前作で彼は英語の歌詞を使用してアメリカの市場へ登場した。しかし結果的にはまだ成功したとはいえない。今作は、英国での録音によってヨーロッパ的な雰囲気だけはしっかりと貫いている。サックスもギターもバック・ミュージシャンは全てイギリスのセッション・マンだ。よって洗練されたインターナショナルなイタリアン・ロックの今日性に触れることができるだろう。何度もいうけどこの人は天才的なカンタウトーリとして「イタリア・ロックの創造主」なのです。

マウロ・パガーニ／地中海の伝説
キング GXE－2040

イタリアン・ロックがいよいよ本格的に日本でも発売されることになった。その第一弾として重大な責務を負ったのは、共にイタリアの凄さを充分に伝え得る実力を持ったアーティスト、ニュー・トロルス、オザンナ、ルチオ・バティスティ、そしてこのアルバムの主人公、元PFMの名ヴァイオリニスト、マウロ・パガーニである。中でもこのパガーニのアルバムは、4枚のアルバムのうち、最も録音も新しく、現在のイタリアの熱さに触れることのできる優れたアルバムである。作品の殆んどは、アレアとPFMのミュージシャンをバックに従えたパガーニのインストルメンタル・ナンバーだが、女性ボーカルを加えた作品やしっとり美しいアコースティックな曲も収め



ルチオ・バティスティ／女ともだち


マウロ・パガーニ／地中海の伝説


パルサー／ポーレン



グリマルディ ニザイハー／愛のシーズン

られている。どの作品も世界の超一級の実力と構成力を以って展開されたエネルギッシュなユーロピアン・ロックだが、もし何らかの違和感を感じたなら、本誌のパガーニの記事を読んでからもう一度聴いてみて下さい。多分彼の存在は唯一無比の大切なものとなるでしょう。

遙かなる地平線／ペッカ
ビクターＶＩＰ－4055

フィンランドの名門ロック・バンド、ウィグワムのベース奏者として名をはせるペッカ・ポーヨラのヴァージンでの２枚目のアルバムにあたるこの作品が、日本盤として限定予約制というハンディはあるが発売された。実はこの作品、北欧ロック、いやユーロピアン・ロック史上の名作中の名作といってもよい程の凄い作品なので、もしも多少の認識不足で買い控えていた人は是が非でも入手して下さい。この極限まで美しく昇華されたジャズ・ロック、民族音楽を統合し、より普遍的な味を添える立役者は、ペッカの他には、マイク・オールド フィールド、サリー・オールドフィールド・ゴングのピェール・モエルルン、メイド・イン・スウェーデンのゲオルグ・ワデニウスといった各国の第一級のアーティストばかり。（より詳しく知りたい人はFool's Mate のVol3. Vol6 を読みましょう。）

消えた椅子／ワイアー
東芝ＥＭＩ　ＥＭＳ

ヴァージンのＸＴＣ、ワーナーのディーヴォ、サイアーのトーキング・ヘッズ、アイランドのウルトラヴォックスに続いて、ＥＭＩ ・ハーヴェストの誇るコンポラリー・パンク・ロック・グループ、ワイアーのセカンド・アルバムがめでたく日本発売された。ワイアーのサウンドは、前出のグループに比べていくらかのきまじめさと、真剣な表現テクニックへの希求が感じられるというところだろうか。機械の視角とか科学の運命とか、あまりむずかしい事は考えない方がいいのでは……。ミステリアスな詩情、ガラスの割れ口の様な鋭い緊張が、なんていうと熱烈なテクノ支持の方々に笑われそうなのでやめましょうか。

パルサー／ポーレン
キング　ＧＸＦ－2040

パルサーは御存知の方も多いかと思いますが、フランスでとても人気のある典型的なプログレッシブ志向の幻想的なロック・グループのひとつです。他のヨーロッパ諸国に比べ、フランス産のものは、イマジネーションの領域に於いて、完全な知性と感性のバランスを保った優れたアーティストが多く、そうした意味では、純生の感覚主義、印象主義に基いていると考えられるようです。このアルバムに収められた５つの流れるような組曲は、時には余りにも情緒的に流れすぎるきらいもあれど、決して陳腐なものではありません。キング、クリムゾンの初期のサウンドをよりソフトにしたようなパルサーの世界は、現代の〝夢想の抽出〟的な役割を果たしているといえるでしょう。

ロバート・ゴードン／ロック・ビリー・ブギー
ＲＶＣ　ＲＶＰ6374

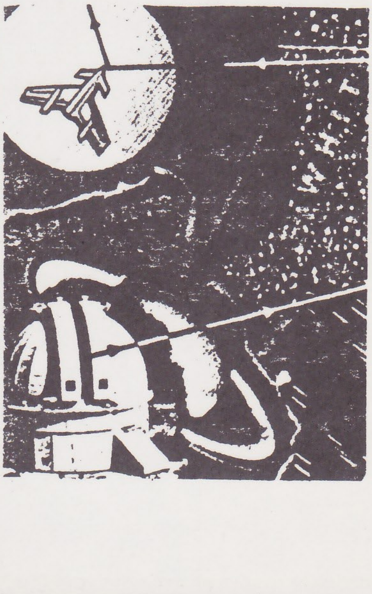
ついにパンク・ロック・シーンからレイド・バック第一号が現れた。ロバート・ゴードンは知る人ぞ知るタフ・ダーツのリード・ボーカリストだった人だ。（あの極端なリーゼント・ヘアーだ!!）　この人のノスタルジーは自ら本物まっ青のロカビリーシンガーを演じることで現実化しようとしている。もう多分この男の頭の中にはパンクのヴィジョンなどひとかけらもないだろう。バックには、悪乗りすることで有名なロック界の伊達男クリス・スペディングもいる。多分ラジオか何かでロバート・ゴードンのこのレコードを聞いたらプレスリリーと間違ってしまうことだろう。ＲＣＡは増々こういう冗談とも本気ともつかないレコードを出すのだけれども、もし売れるようなら、世の中はまだまだ平和で住みやすい。

イ・プー／ブーメラン
キングＧＰ678

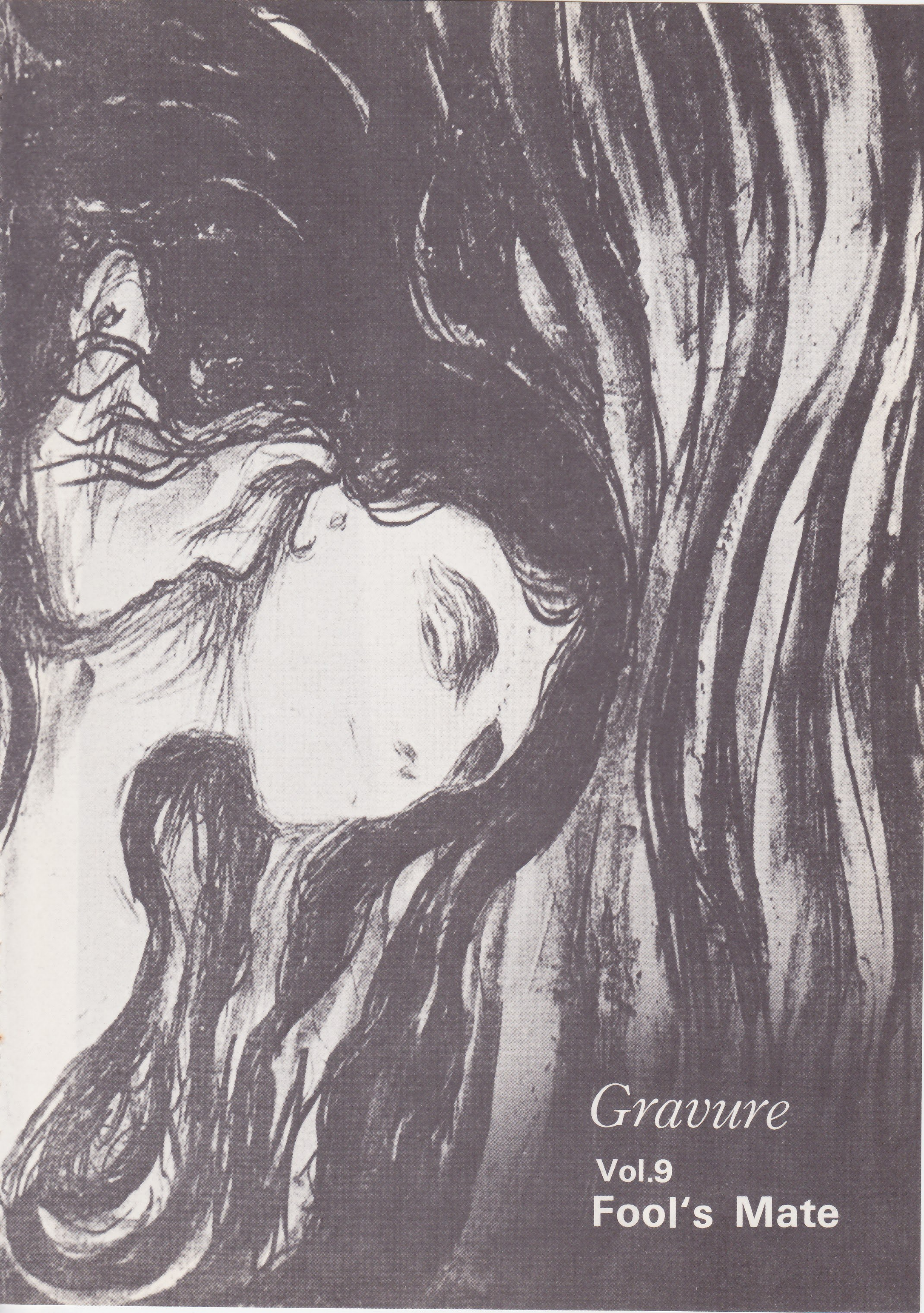
イタリアン・ラヴ・ポップのヒーロー、イ・プーの最新アルバムの登場である。イ・プーの人気は本国ではとどまるところを知らず、つい先日キングの試聴室で見せていただいた彼らのＴＶ用ビデオでのステージのあまりの素晴らしさにはすっかり感激してしまった。ヨーロッパの哀想がみなぎいたシンセサイザーと泣きのストリングス・アンサンブル、そしてカンツォーネの魅力を完全に継承したボーカル・ハーモニーの美しさは、ライブに於いても一糸乱れぬ驚異的なテクニックを披露してくれている。このアルバムの最後に収められた曲、「リンドバーク（ヨーロッパの夜明け）」などはＰＦＭ的な構成がほどこされた実にプログレッシブな味わいがある。そして何といってもアルバムのハイライトは「マウトマの伝説」だろう。目を閉じると地中海のまっただ中にいる様な気持ちにさせられてしまう。

グリマルディ、ザイハー／愛のシーズン
ＲＶＣ－ＲＶＰ6387

フランスＲＣＡから２人組のポップ・デュエットが紹介されることになった。バックにラリー・カールトンがいると聞いたので、アメリカ志向のどうしようもないクロス・オーヴァーかと思ったが、聴いてみるとどうだろう。さすがフランスといった感じ。要するにサウンドは極端にソフィスティケートされたシティー・ポップまがいの代物だが、ヴォーカルのフランス語による洗練された感覚と、その曲調だけは、アメリカのハンバーガー野郎にはとうてい真似のできない凝ったものだ。アトールとパンタクルを生んだフランスらしい、抒情的でムードに流されながらも捨てがたい魅力を持っている美しいアルバムだ。



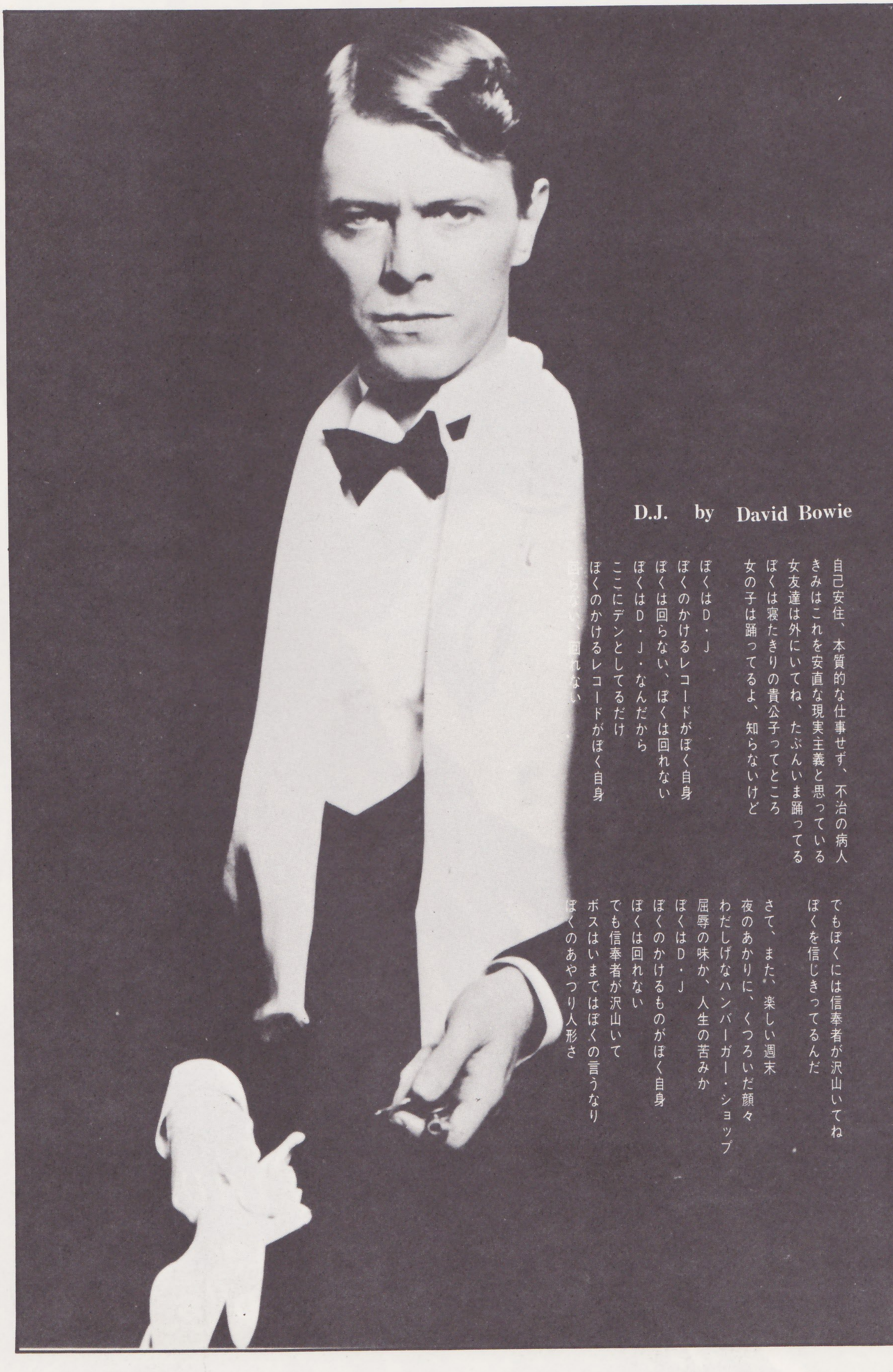




Gravure

Vol.9

Fool's Mate



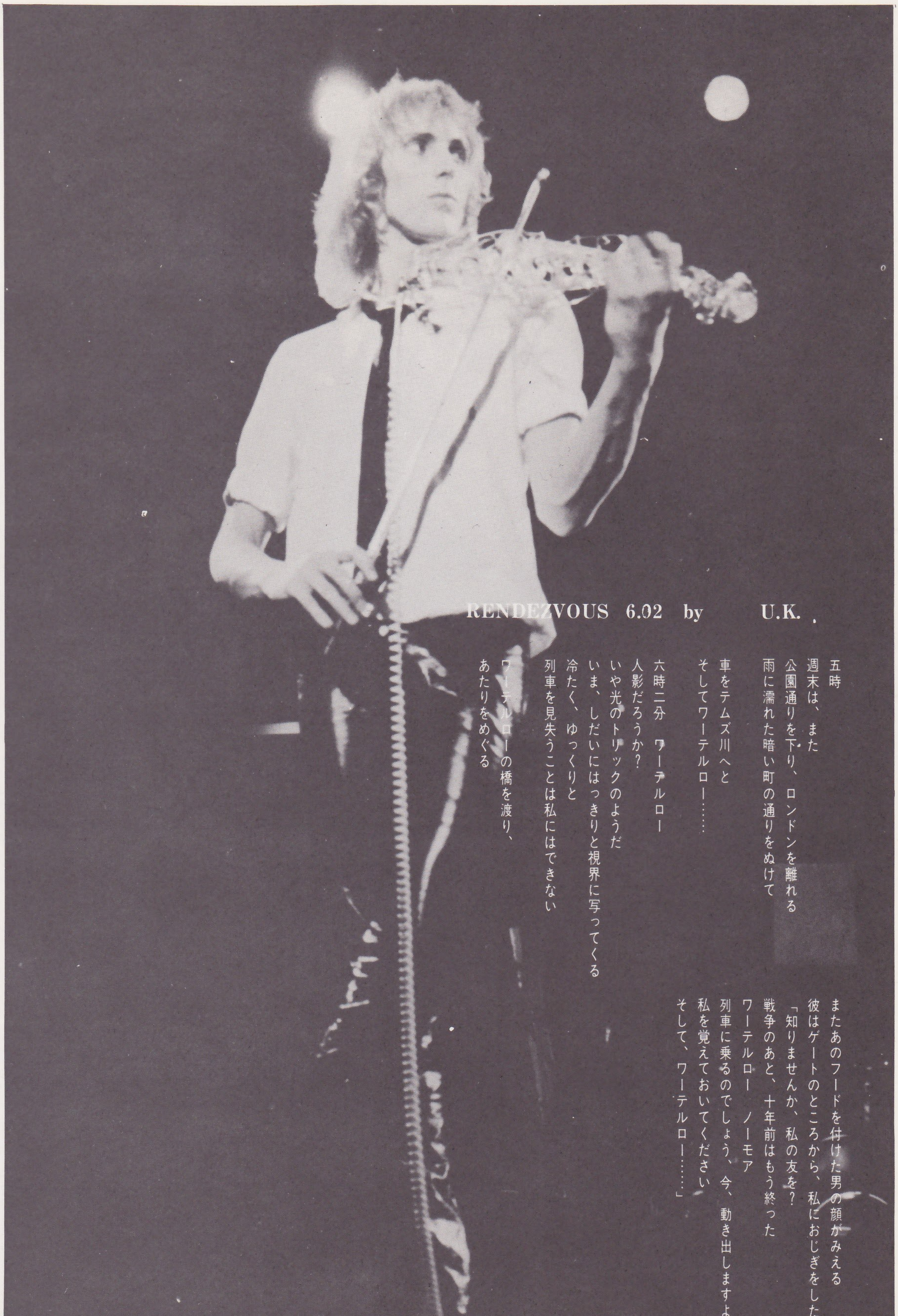
D.J.　by　David Bowie

自己安住、本質的な仕事せず、不治の病人
きみはこれを安直な現実主義と思っている
女友達は外にいてね、たぶんいま踊ってる
ぼくは寝たきりの貴公子ってところ
女の子は踊ってるよ、知らないけど

ぼくはD・J
ぼくのかけるレコードがぼく自身
ぼくは回らない、ぼくは回れない
ぼくはD・J・なんだから
ここにデンとしてるだけ
ぼくのかけるレコードがぼく自身
回らない、回れない

でもぼくには信奉者が沢山いてね
ぼくを信じきってるんだ

さて、また、楽しい週末
夜のあかりに、くつろいだ顔々
わだしげなハンバーガー・ショップ
屈辱の味か、人生の苦みか
ぼくはD・J
ぼくのかけるものがぼく自身
ぼくは回れない
でも信奉者が沢山いて
ボスはいまではぼくの言うなり
ぼくのあやつり人形さ



RENDEZVOUS 6.02 by U.K.

五時
週末は、また
公園通りを下り、ロンドンを離れる
雨に濡れた暗い町の通りをぬけて
車をテムズ川へと
そしてワーテルロー……

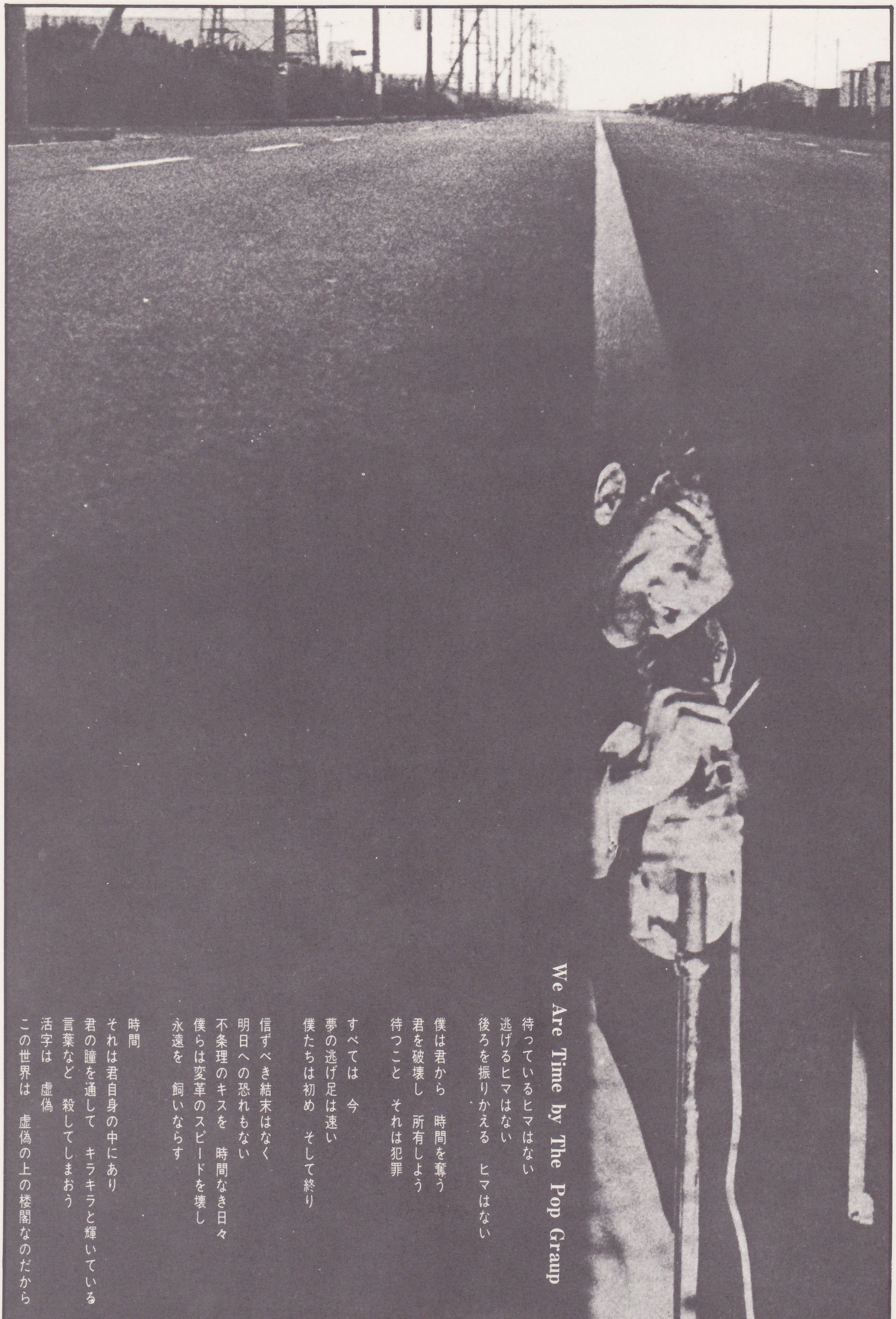
六時二分　ワーテルロー
人影だろうか?
いや光のトリックのようだ
いま、しだいにはっきりと視界に写ってくる
冷たく、ゆっくりと
列車を見失うことは私にはできない

ワーテルローの橋を渡り、
あたりをめぐる

またあのフードを付けた男の顔がみえる
彼はゲートのところから、私におじぎをした
「知りませんか、私の友を?
戦争のあと、十年前はもう終った
ワーテルロー　ノーモア
列車に乗るのでしょう、今、動き出しますよ
私を覚えておいてください
そして、ワーテルロー……」



Magazine



We Are Time by The Pop Graup

待っているヒマはない
逃げるヒマはない
後ろを振りかえる　ヒマはない

僕は君から　時間を奪う
君を破壊し　所有しよう
待つこと　それは犯罪

すべては　今
夢の逃げ足は速い
僕たちは初め　そして終り

信ずべき結末はなく
明日への恐れもない
不条理のキスを　時間なき日々
僕らは変革のスピードを壊し
永遠を　飼いならす

時間
それは君自身の中にあり
君の瞳を通して　キラキラと輝いている
言葉など　殺してしまおう
活字は　虚偽
この世界は　虚偽の上の楼閣なのだから



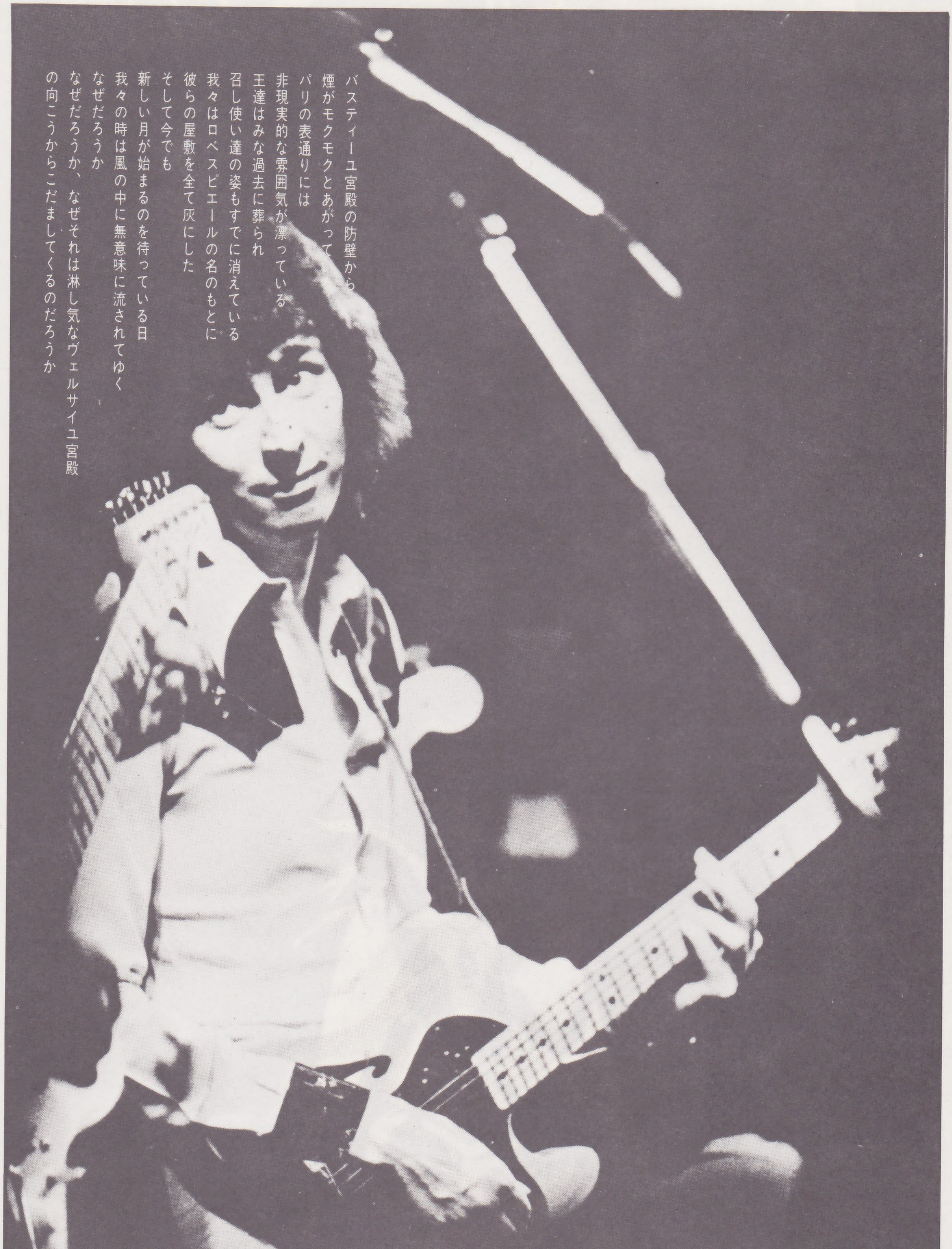
You Burn Me Up I'm A Cigarette

by Robert Fripp

煙草を喫うように
君は僕を　燃し尽くす
君との暮らし　それは　敗者の賭け
そして僕は　正気を失う
なんと刺激的な法悦　そして生きながらの悟り

戦略的な相互作用　もう割ることのできない分数
最終的な無活動　敵意に満ちた分裂
不安はつのり　僕はもう半狂乱
役にたつものは　対称療法のみ

煙草を喫うように
君は僕を　燃し尽くす
うわの空の僕を　君はなじる
賢者は一体　何を言おうとしたのか
賢者は何を　見たのだろうか
音楽的な高揚　それだけか
僕のたったひとつの
慰めだ



Palace of Versailles by Al Stewart

特集 オカルティズム幻想

かういふ世界の深みまで降りてゆかない精神が、どうして
作品などという確実な物体に化身することができるものか！
——三島　由起夫



私は特に音楽が好きなわけではありません。音楽は単に魔
法的な状態を作り出すための一手段にすぎないのです。
——ロバート・フリップ

人工迷宮

北村　昌士

すでに御存知の方も多いと思うけれど、僕は音楽形態に対してある種の賞讃を意図する場合、〝魔術的〟〝魔法的〟という形容詞を無意識のうちに多用する傾向がある。ある側面に於いてすべての音楽とは魔法のようなものだとも思っている。今回の特集もこんな僕の独断をより実証的に位置付ける試みであることはいうまでもない。リズム、和音、メロディーといった音楽の基本的要素の様々な組合わせが空気中の振動を伝って人間の耳から脳へ入り込む際に生じる反応、この因果関係や特殊な法則が情報に置き換えられ、意識と意識、送り手と受け手の精神交感の成果がどれだけ強烈な威力を有しているか、現在の音楽メディアの異常な発達ぶり、そして巨大な産業的性格を見ればそれは一目瞭然だろう。芸術という名の音楽、風俗としての音楽、儀式としての音楽………諸々の存在様式を持った音楽、もしくはより単純な〝音〟が人間の居るあらゆる空間にひしめいている。

その中でもかつて愚にもつかない共同幻想をたたき込まれて世界中に波及したロック音楽の持つ特殊性は、ＬＳＤカルチャー、実存主義、神秘主義、政治性など数知れぬ人間精神のカオスを通過しながら（無論商業性も）発展したという理由で、非常に興味深く魅力的だ。メディア的な性格は残念ながら今では多少力無いものに退行してしまったにもかかわらず、ある種のロックは今でも歴然と〝オカルティック〟なままでいる。ロックの神秘的な性質を際立たせる多くの要因とは、彼らのエネルギーに満ちた攻撃的な志向、そしていうまでもなく彼らの反社会的な性格の表出大代表される。しかしそれはあまりに未統制であり表面的には混乱をきたしているかのようだ。彼らは哲学者でもなければ、宗教家でもなく、ましてやある特殊な概念の研究者ではない。彼らの無限に湧出する〝知〟への欲望は、〝感覚〟との表裏一体化によって形ばかりの主張をようやくあらわにしているに過ぎない。ロックとはあくまで音楽を〝演奏〟するところに本質がある。不気味な反社会性の仮面やパラノイアへの憧憬は付加的な側面である。彼らは自己の位置するフィールドをより確かな形で確認し、エネルギーをより効果的に解放するためにオカルティズムを志向するのである。ロックがオカルティズムに限らずとも異常なものを好んで取込んでしまうという現象の裏側には、とりもなおさず現代の持つ否定的なヴィジョン――即ち危機――が秘んでいる。その昔、ヨーロッパに憤き上げたシュルレアリズムの運動において、「異常なるものの期待は、解放への期待、充足への願望」というジュール・モヌロの一節が極めて印象深く記憶されているのと同じく、現代のもつ病的要因をあらゆる角度から照射するための必然的な応用術として、また憎むべき世界に敵対するエネルギーの収束術として、反社会的なロックはあらゆる異常を礼讃し、神秘を崇拝し、狂気を志向するのである。

信仰と進歩という2つの巨大なアンヴィヴァレンスの間で、中世ヨーロッパ社会は様々なグロテスクを創造した。ブリューゲルやボッシュがイメージした地獄の図は、当時の群衆がごく一般的に内部に秘めていた混乱の具象化である。これは20世紀のシュルレアリスムやダダの運動が、ヨーロッパの危機を反映していたのと同じ意味を持つものだ。異常なものの本質が問われ、聖なるものが次々と破壊され、一見個人的な病性が超個人的存在として社会に根をおろす背景には、常に大衆が支持するだけの病的な状況というものが確実に現実を支配している。何か分からないが、確かに巨大な力が存在する。しかしその性質が肯定的なものか否定的なものか、それともそうした区別すらも絶した唐突で絶対的なものなのか人間にとって、科学にとって、知性にとって、その存在を検証する方法はなにもない。合理主義者たちはその存在の感覚について、まるでロジックに当てはまらないという理由で信じまいと努めるであろうし、その意味や感覚を認識するものたちを「精神病」という分野の医学的分類のオリに閉じ込めてしまうおとするだろう。

しかし現代とは、狂気にまで救いを求めようとする時代なのだ。表面的で形ばかりのものとはいえ、ピンク・フロイドの「狂気/Darkside Of The Moon」というアルバムは、延べ1千万人以上の人間の耳に何らかの形で届いているはずだ。そしてそれ以上の数の現代人が、単に一時的に日常意識から脱却するというだけの目的によって、ＬＳＤ、メスカリン、マリファナなどのドラッグを服用していることも事実である。情報伝達や物質的な充足がきわめて発達したことで、現代社会が非常に心地良い場所だと主張する人々は、このような現象をどのように説明するつもりなのだろう。

太陽のもとにさらされた合理システムとの対極を形成する目的は論理、闇の思想、そして外的世界と表裏一体を成す内的な空間は実在する。古代人や中世の錬金術師、そして近世の芸術家が志向した超現実、超自然への願望は、とりもなおさず存在の危機と抑圧の恐怖から魂を解放し、進化論的な限界を取り除き、精神を新しい地平に招き入れ、心理状態の崇高な浄化と治癒を実現するための手管と考えられている。即ち異常という概念の裏側に秘む積極性、そしてそれを携えた攻撃性とは、ひとつの真剣な進化欲求の表れなのである。人間の可能性にとって非常に息苦しく限定を強制する社会への反対を彼らは表明している。

現代社会が強固に構築する哲学論理と知性的認識、そして科学技術の厚い壁を、ある時は破壊し、侵食し、透過し得る唯一の〝独立し対立する力〟は音楽の内側に存在する。絵画も文学ももはや現代において文化的権力の擁護なしには生きてゆけないほど貧弱きわまりない。しかし音楽の生命力はいまだに雑草の如く強靱で、またあまりに抽象的でつかみどころのない文化の中の化物のようなものだ。その上いまだに批評というジャンルはめちゃくちゃなままだし、だからといってそれらが死に絶える兆しはまったくない。それは現代の魔術師たちが生延びることの出来る最後の土壌であり、超越的な怪物が生まれるに必要なあらゆる栄養が

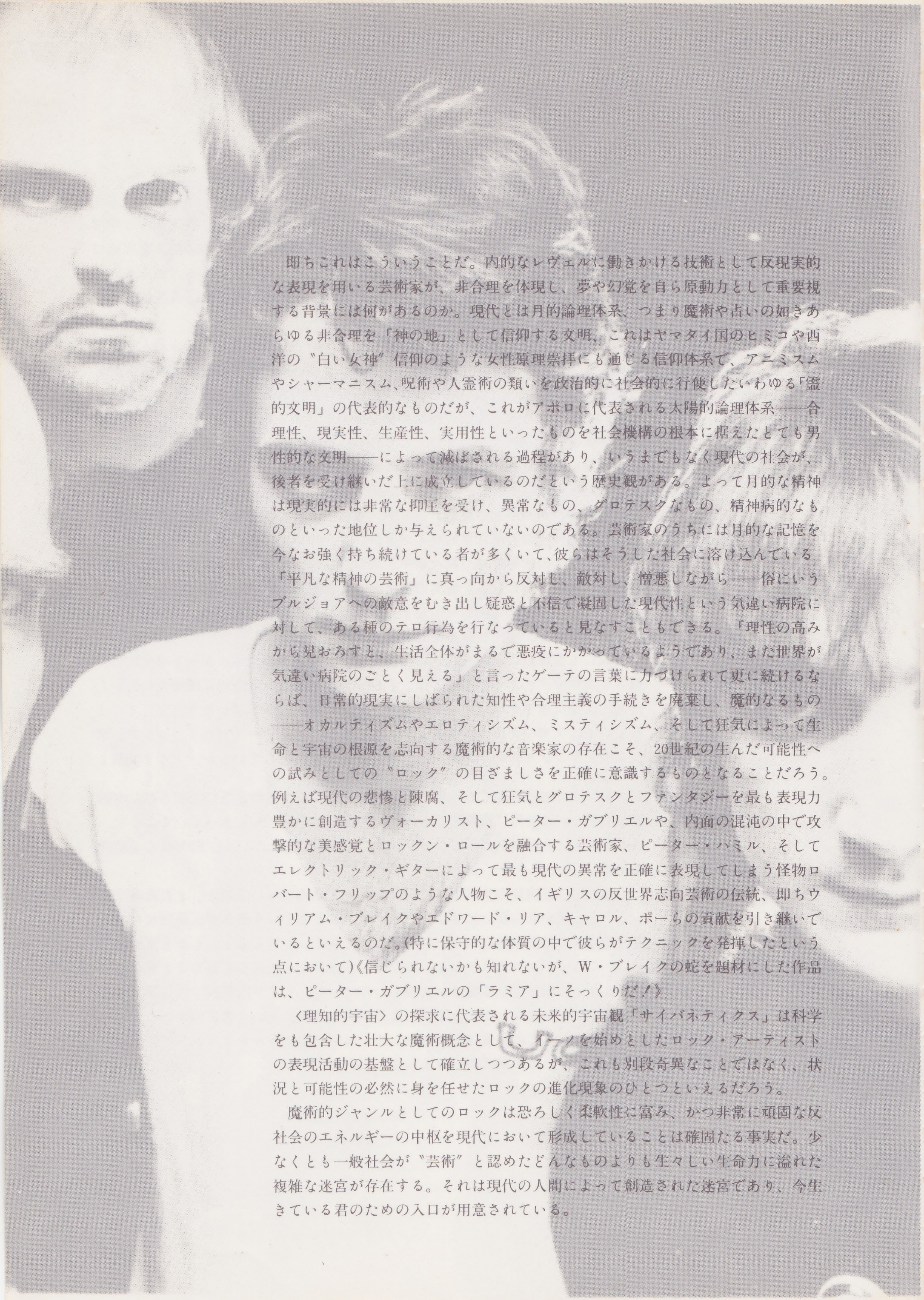
備わっているオカルティズムの羊水である。音楽の持つ特性は、例えどんな場所であれ空気の振動した際の波が人の感覚を充分に刺激し伝達情報の流入を可能にしてしまう強制的な状態をつくり出してしまうことにあるといえる。最も本能的であり、直観的であり、初源的なレベルの伝達を、最も科学的に、人工的に成し得るという強味をもっているわけだ。

非常に長い前置きになってしまったが、ロック音楽の中に存在する最も動的で重要な要素が、オカルティズムを考える際にも深い同一性を持っていることをどうか分かって欲しい。長い時を経たつたのつるが四方八方に延びてからみ合っているのと同じように、人間の内部に秘む巨大なカオスの〝意味〟と、今日最も有力なメディア・ワークのひとつとしてのロック・ミュージックとは、もはや切って切れない複雑で強固な関連のもとに社会内に存続しているのは、厳然とした事実なのだ。

古代の異教から中世の魔術、占星術、妖術、予言、錬金術、交霊術、秘数学と、あらゆる隠秘主義の反世界的ヴィジョンにインスパイアされたミュージシャンの存在は、現実の世界に立つ我々に不思議な誘惑の光を照射する。「光の世紀」といわれる17世紀を境にして、現実の社会から反世界の信仰系を追放した理性的合理主義の流れは、人間の内的可能性を完全に抑制した状態で、強慢にも科学を所有し、哲学を説き、現代社会の方向性を云々している。

勇敢にも直接的に穏秘主義的方法論を掲げ、反世界のエネルギーを思念的に彷彿させるロック・アーティストは、それらの思想が最も社会的に擁護されていた時代、60年代後半を頂点にして数々のジレンマと共に今ではかなり衰弱してしまっている。アモンデュールやファウスト、サード・イアー・バンド、ゴング、アシュラ・テンプルらのポリシーは、今ではまるで消失しているか、大きく変質しているのは周知の事実であろう。ドラッグによる非日常的意識に支配された内的エネルギーが外世界に攻撃的であった時期はもはや終ってしまっているようだ。（前述のアーティストの中でファウストだけは少し違っている。即ち彼らの精神は覚醒していた）

「20世紀の抒情詩のすべてが『現代』という意味においてあり、またあろうとしているとはかぎらないにせよ、グロテスクなものという概念が広範囲にわたる現代抒情詩の自己解釈に取りいれられていてもよいといえよう。しかも意外なことに、これまでグロテスクなものにたいしてほとんど無関心であることを示していたような領域をめぐる堤防が決壊したのだった。」ドイツの解釈学派に属する文学評論家ヴォルフガング・カイザーは、「グロテスク」という著書の中でこう述べている。そしてこの言葉は今日のロック・エリアのオカルティズム／アブノーマルの概念の中にも正確にあてはまってしまう。



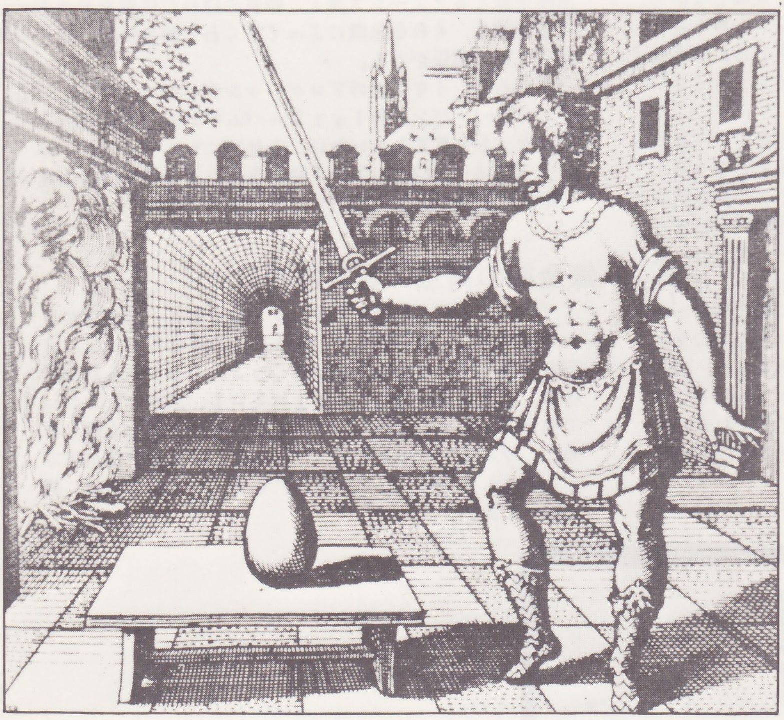
即ちこれはこういうことだ。内的なレヴェルに働きかける技術として反現実的な表現を用いる芸術家が、非合理を体現し、夢や幻覚を自ら原動力として重要視する背景には何があるのか。現代とは月的論理体系、つまり魔術や占いの如きあらゆる非合理を「神の地」として信仰する文明、これはヤマタイ国のヒミコや西洋の〝白い女神〞信仰のような女性原理崇拝にも通じる信仰体系で、アニミスムやシャーマニスム、呪術や人霊術の類いを政治的に社会的に行使したいわゆる「霊的文明」の代表的なものだが、これがアポロに代表される太陽的論理体系——合理性、現実性、生産性、実用性といったものを社会機構の根本に据えたとても男性的な文明——によって滅ぼされる過程があり、いうまでもなく現代の社会が、後者を受け継いだ上に成立しているのだという歴史観がある。よって月的な精神は現実的には非常な抑圧を受け、異常なもの、グロテスクなもの、精神病的なものといった地位しか与えられていないのである。芸術家のうちには月的な記憶を今なお強く持ち続けている者が多くいて、彼らはそうした社会に溶け込んでいる「平凡な精神の芸術」に真っ向から反対し、敵対し、憎悪しながら——俗にいうブルジョアへの敵意をむき出し疑惑と不信で凝固した現代性という気違い病院に対して、ある種のテロ行為を行なっていると見なすこともできる。「理性の高みから見おろすと、生活全体がまるで悪疫にかかっているようであり、また世界が気違い病院のごとく見える」と言ったゲーテの言葉に力づけられて更に続けるならば、日常的現実にしばられた知性や合理主義の手続きを廃棄し、魔的なるもの——オカルティズムやエロティシズム、ミスティシズム、そして狂気によって生命と宇宙の根源を志向する魔術的な音楽家の存在こそ、20世紀の生んだ可能性への試みとしての〝ロック〞の目ざましさを正確に意識するものとなることだろう。例えば現代の悲惨と陳腐、そして狂気とグロテスクとファンタジーを最も表現力豊かに創造するヴォーカリスト、ピーター・ガブリエルや、内面の混沌の中で攻撃的な美感覚とロックン・ロールを融合する芸術家、ピーター・ハミル、そしてエレクトリック・ギターによって最も現代の異常を正確に表現してしまう怪物ロバート・フリップのような人物こそ、イギリスの反世界志向芸術の伝統、即ちウィリアム・ブレイクやエドワード・リア、キャロル、ポーらの貢献を引き継いでいるといえるのだ。(特に保守的な体質の中で彼らがテクニックを発揮したという点において)《信じられないかも知れないが、W・ブレイクの蛇を題材にした作品は、ピーター・ガブリエルの「ラミア」にそっくりだ！》

〈理知的宇宙〉の探求に代表される未来的宇宙観「サイバネティクス」は科学をも包含した壮大な魔術概念として、イーノを始めとしたロック・アーティストの表現活動の基盤として確立しつつあるが、これも別段奇異なことではなく、状況と可能性の必然に身を任せたロックの進化現象のひとつといえるだろう。

魔術的ジャンルとしてのロックは恐ろしく柔軟性に富み、かつ非常に頑固な反社会のエネルギーの中枢を現代において形成していることは確固たる事実だ。少なくとも一般社会が〝芸術〞と認めたどんなものよりも生々しい生命力に溢れた複雑な迷宮が存在する。それは現代の人間によって創造された迷宮であり、今生きている君のための入口が用意されている。

ミクロコスモス——マクロコスモス
錬金術的世界の音楽像

山本　雅幸



錬金術の実験室における「大いなる作業」を一枚の音盤に託した「THIRD EAR BAND／ALCHEMY」。賢者の卵を割ることによって、太陽と月の結婚が行われ（化学の結婚）錬金術師はすべての非卑金属を黄金に変える術（精神浄化）を得るのである。

《太初に業ありき》

ある種のオカルト科学、あるいは“オカルティズム”の知識が、現代の極めて多くの文学作品、芸術作品を理解する上で必須のものとなった。詩人や小説家、芸術家たちの想像力の中で、呪術や魔術が大きな位置を占めるようになった。不可視的な存在が彼らを捕え、未知なるものの観念が彼らに付きそい、時代は、古代、中世へと回帰する。そして、これは私たちが日頃聴いているロック・ミュージシャンたちにも、その志向性が見られると思う。精神によって理解されないもの、あるいは理解不能なもの、悟性や通常の知識の範囲を超えたものを、彼らは「大いなる作業」の秘密を音に託して、私たちに伝えてきたのではないだろうか。彼らはまさに、錬金術師であり、私たちはその秘伝を、超人的な観念をもって受託し、永遠に守っていかなければならないのである。

《錬金術――その理念と歴史》

一般に錬金術とは、中世における金属変成の術で、その目的は黄金を造り出すことにあったと考えられている。しかし、真の錬金術は、技術や科学よりもはるかにすぐれていた。というのは、金属の変成は技能だけでは造り出せず、知識そのものだけでは熟達の域に達することができなかったからである。魂、および精神と神聖なものとの統一を求めて努力し、魂が高貴になって道徳的な美徳とともに、崇高な完全の状態に達したときこそ、錬金術の達人となることができるのである。錬金術師たちは、この世で最も完全な物質は不滅の金である、と考えた。常に完全に向かう傾向のある自然は、金をつくり出すことだけを望んでいる。鉛、銅、鉄その他の金属は、自然の失敗作である。神は人間の魂に、完全へのあこがれを吹き込んだ。人間も自然と同じように、自分で神聖なものを得るために努力すべきであると考えたのである。このように、錬金術師たちは、卑金属を金に変成するときに、人間も変成する、と考えたのである。

「錬金術」という用語には、様々な歴史的な事情が隠されており、またその歴史はきわめて、謎めいている。中世全般を通じて、数々の秘伝や象徴に包まれて発展しながら、隠秘学として、悪魔の術と呼ばれ迫害され、レトルトと悪魔を呼び出す呪文とを巧みに組み合わせたところに成り立つという、一般民衆にとっては、まことにインチキくさい学問なのであった。

エジプトのファラオの時代に錬金術が栄えたという説があり、ヨーロッパの錬金術師たちは、この地を聖なる術の発祥地と見なした。これは、アレクサンドリアの錬金術師たちの間には、古代エジプトの宗教教義の特徴的性格がいくつか見い出されることからもわかる。エジプトでは、重要な事がらにはすべて呪文が付随したのであるが、化学的操作（錬金術）もそうであった。ヌビアでの金の採掘から、その精練、規格化などエジプト人が金鉱石やその他の金属で細工し、この操作を秘密にした（王位継承者とか、最高の徳と知恵をもった人々のために神官によってかたく守られた）ということと、彼らの化学が呪術的であったということが、エジプトを聖なる術の発祥の地と見なした理由なのである。

ギリシアの錬金術は、あらゆる教養が救霊と天啓による認識（グノーシス）に求めていた混沌とした時代、西暦3世紀頃に形成されたようである。つまり、異教的グノーシスの特殊形態である、「ヘルメス思想」が占星術や哲学、隠秘学などに天啓として語られていた時代に錬金術が、それらと同じ基本的傾向として形成されたのである。

「ヘルメス」とは、ハデスの支配する暗黒の王国へ魂を導くギリシアの神であり、ギリシア人は、エジプトのギリシア植民たちの神「トート」のうちに自分たちの神性を認めた。そして、彼らは呪術と筆写と話し言葉の神聖な発明者トートと、ヘルメスを同一視した。こうして、ヘルメス・トリスメギストスは錬金術の哲学の師匠と名づけられたのである。

アレクサンドリアで広まったキリスト教的グノーシス説はきわめて重要な役割を果たした。錬金術はグノーシス思想家の複雑な形式にならい、こみ入った寓意画を通じて弟子たちを宇宙の秘密や世界の本質、「善」「悪」両原理の永遠の闘争に通暁させようと試みたのである。象徴と寓意のヴェールのもとに隠された哲学的、宗教的理論の本当の意味を教えるグノーシス説と、物質の隠れた性質をどこまでも認識し、それを象徴によってあらわす錬金術との間には深い類似関係がある。

ところで、イギリスのプログレッシヴ・グループ、サード・イアー・バンドの１ｓｔアルバムである「錬金術」のジャケットを見てもらいたい。これは、マイケル・メージャー（1568〜1622年）という錬金術師による錬金術の作業を象徴寓意画によって表わしたものなのである。

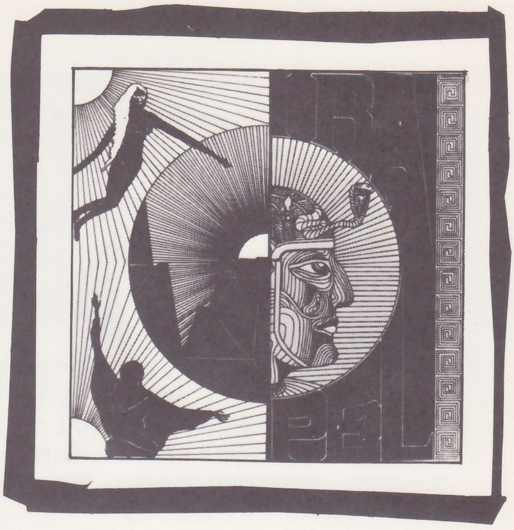
《錬金術の寓意『賢者の卵』》

「卵のことをよく知り、ぎらぎら光る剣でそれを切れ。わが世界には、他の何ものにもまして崇高な鳥がいる。その鳥の卵を捜し求めることに専心せよ。そのやわらかな黄味は、下劣な蛋白質にとり囲まれている。慣例にしたがって卵を熱してから、おんみの剣でそれを注意ぶかく捜し求めよ。ヴルカヌスのあとで、マルスがこの仕事を促進するであろう。その後、ひなが現われると、ひなは火と剣に打ち勝つであろう。」



Sepientia veterum philosophorum sive doctrina eorundem de summa et universali medicina. 18世紀
火と水、この両者の転換が示すものは、結合と分離、すなわち反復される昇華である。





古代エジプトの錬金術的宗教性、17世紀初頭の薔薇十字団による。世界統一教義、そしてキリスト教的神秘主義。「ASH RA TEMPEL」はこれらのマクロ・コスモス的宇宙観をロックによって表現した唯一のグループである。

Sylva philosophorum 17世紀
これはあらゆる不完全な金属を、不滅の完全性へと変容せしめる宇宙霊液もしくは賢者の石に関するダイアグラムである。

“ヴルカヌスとマルス”とは、金属の変成に絶対必要な“火と鉱石”のこと。

このように近代化学では、記号や数字で化学式を表わすところを、錬金術師たちは、寓意画によってその奇妙な化学式の秘密を守ったのである。

また、グノーシス派の諸象徴、特にあの有名な「ウロボロス」(われとわが尾を嚙む蛇）を、彼らは宇宙の全一性と変成作業との象徴、存在するものすべてを包み被造世界を閉じこめる「世界の魂」の象徴として崇拝した。

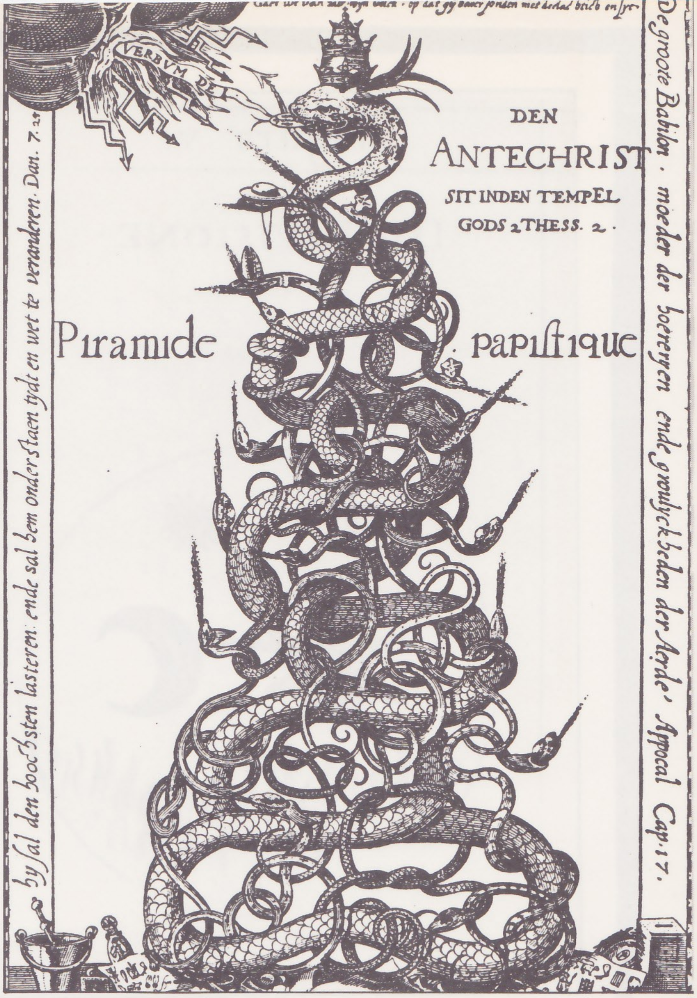
この典型的な錬金術の概念である、自己自身を産む宇宙蛇（コズミック蛇）は、なんと、あのドイツ・ロックの三位一体をなす、アシュ・ラ・テンプルのアルバムにも登場しているのである。彼らの４枚目、「SEVEN・UP」の内ジャケットのちょうど中央の部分に描かれている━彼らのサウンドとともに、その神秘性と宗教性は、全宇宙の観念としての、人間の分析としての、神からの発光現象と創造現象としてのあらゆる領域の対応におけるすべての分析知の総括である錬金術なのである。そして、これらのことは、彼らのデビューアルバムで明らかにされていることだと思うのであるが……。

ギリシアの錬金術は、発現形態の異なった様々の影響とが協力して作り出したものであり、エジプトの実用的技術とギリシアの哲学、東洋の諸教理とアレクサンドリアの神秘主義とを総合した混成品として、ギリシアとユダヤ教とキリスト教の各要素の驚くべき混合物の観を呈している。そして、錬金術は、アレクサンドリアからビザンチンに渡り、その後、多少迫害されたものの、11世紀には、プラトン学派の手であらゆる秘教から解放された、実証的かつ、合理的な術として試みられるようになったのである。

12世紀以来、西欧ではヘルメスによって書かれたという一連の著作があらわれたが、その中でも最も有名な『エメラルド板』なるものは中世以来、あらゆる錬金術師が、これに注釈を加えて倦まなかったものである。錬金術師たちは、ヘルメスみずからの手でエメラルドに刻まれたという、このテキストの起源を伝説化した。後の秘密結社、薔薇十字団の始祖とされる15世紀ドイツの伝説的人物、クリスチアン・ローゼンクロイツと、その声明書である、『薔薇十字団の伝説』も同じように秘教文学独特の志向でもって伝説化されたものである。ところで、この『エメラルド板』であるが、内容はと言えば冗談な言葉の遊戯としかとれないものなのであるが、これも錬金術の寓意画と同じように、ヘルメス学と錬金術に通じた者にとっては、奇妙なふざけた内容も実に意味深長なものとなるのである。この『エメラルド板』には、宇宙の全一性の教理や天地創造と錬金作業との間の類比と交感の教理が、いわゆる賢者の石の作り方に関してのヘルメス・トリスメギストスの言説が述べられているという。

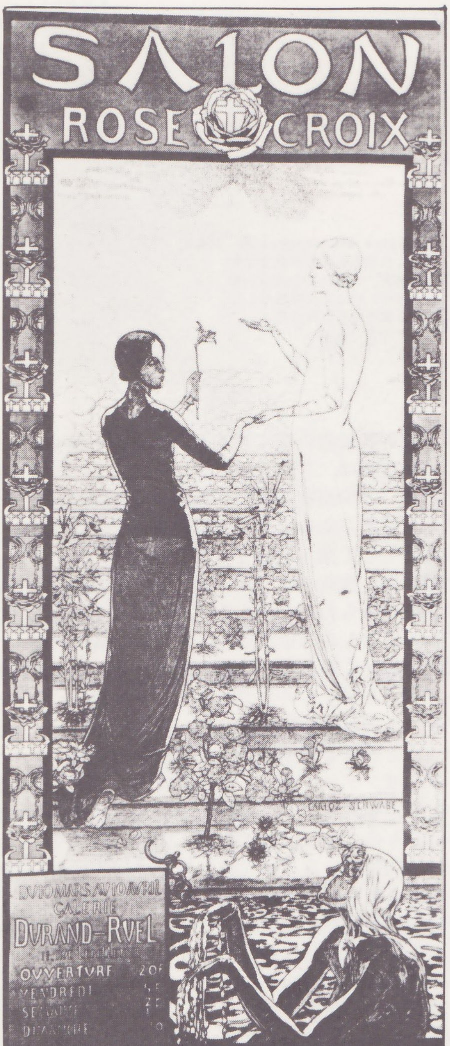
錬金術はその後、15世紀になって神智学と魔術の理論が全ヨーロッパにひろがった動乱期に、一種の秘教となり、天啓思想の一大教義となるに至った。そして、ルネサンスとともに、錬金術は最盛期に達し、新プラトン主義、新ピタゴラス主義、キリスト教的カバラ学などと結びつきながら、多くの思想家を生み出した。また、印刷術の発明で、ますます盛んになり、数々の秘密結社ができて、科学者や哲学者がこれに加わったが、それに乗じて、魔術師や詐欺師、毒薬使いや贋金作りといった、自らを錬金術師と名のる連中が出てきたのもこの時期である。

16世紀にパラケルススは、世界はやがて改革されるはずだ、と予言した。そして、『世界の改革』という題のドイツ語のパンフレットが現われたのを機にして、多くの秘術師や知識人たちは、団結して将来のために熱心に協力するようになり、17世紀初頭に錬金術は、薔薇十字団の秘教運動によって特にドイツで発展した。



ここに描かれるウロボロス（宇宙蛇）は宇宙の永遠性と循環性の象徴であり、色彩において緑は発端、赤は作業の目的を示す。

《『薔薇十字』極意の寓話》



薔薇十字展のポスター　1892年
サール・ペラダンとその弟子たちによるこの美術展は、カトリシズムと魔術の奇妙な混合体のための主要な宣伝媒体であった。

薔薇十字団の始祖とされている伝説的人物、クリスチアン・ローゼンクロイツと同一人物ではないかと言われている、ヨハン＝ヴァレンティン・アンドレーエの著に『化学の結婚』というのがある。これは、すべて寓話形式をとっており、金属の再生に託して人間の復活（ローゼンクロイツの墓には、「余は120年後にあらわれるであろう」と刻んであり、この予言通り、彼の弟子たちが墓所を発見し、発掘したという）と救済が説かれている。『化学の結婚』は、伝説的著者の名に隠れて最初から幻の書の性格を帯びていた。薔薇（東洋の叡智）と十字（キリスト教の信仰）を結びつけたこの結社の教義にふさわしく、「創世記」の７日にわたる天地創造を模した小説構造と、７つの作業過程を要する錬金術の神秘思想が織り込まれ、一種の秘儀伝授的作品となっている。

どんな人間の心にも、遊びをしたがる子供っぽさがあり、その中でも神秘的なこと、隠密的なことが、最も魅力のある遊びである。『化学の結婚』は、そんな幼年時代の夢のつづきや、陳腐な日常生活から逃避したい人間のあこがれを満たした。そして、薔薇十字団の遊戯こそ、人間は思想と行動によって、万人が兄弟となる王国へ昇ることができるという信念のもとに、物質世界を支配する人間の力を象徴した呪術なのであった。



Philosophia Reformata　1622年
王と王妃、月と太陽の樹、
三界を象徴する三匹の蛇と、
錬金術の重要なモチーフが
見受けられる。

無味乾燥なドイツの奇怪な文献のなかに咲いたただ一輪の花『化学の結婚』は、パラケルスス派の呪術を19世紀のロマン主義に結びつけた。ノヴァリスは、ローゼンクロイツの諸国を遍歴する神秘な旅を想起させるかのように、「現世は夢になり、夢は現世になる」と言い、失われた理想社会を古代ギリシアに求めたヘルダーリンは、大宇宙と自分との同一性を思い起こさせている。おお太陽よ、おお空気よ、私の心に、兄弟のように生きているのはあなたたちだけだ。

このように、薔薇十字の魔術的思想は、社会革命の欲求と混じりあって、あの著名な靴屋ヤーコプ・ベーメにも影響を与え、近代西欧社会の底流として、文学・芸術面に多くの影響を与えた。ゲーテの『ファウスト』にもその影響が多く見られ、19世紀末のフランスでは大きな流行にさえなり、いわゆる隠密学（オカルティズム）の運動を生んだのである。

ドイツ人がしばしば使う言葉に、「ファウスト的人間」というのがある。偉大な途方もない激しい性格を持った人間を指していう言葉になっている。そして、これは最大級の讃辞なのであるが、いわゆる徳の広大な、完全無欠の性格を持った人間を指しているのではなく、むしろ、ある意味で人間的不幸を持った人間と言った方がいいかもしれない。自己の力量以上の仕事に、ひたすら挑んで、自己の情熱にすべてを打ちこんで、その結果、痛ましい悲劇的没落をとげる不幸な人間なのである。「ファウスト的人間」は悪魔に憑かれた人間なのである。恵まれた調和と幸福のなかに、楽しく悠々と生きる人間にとって「破滅の美学」とはどういうことなのであろうか……。

ゲーテの「ファウスト」の主人公であるファウストという人物は、16世紀の大魔法師ヨハン・ファウスト博士をモデルにして生まれた。ファウスト博士（ヨハン・ファウスト）という人物については、詳しい事はわからず、（謎に包まれているがゆえに、偉大な存在！）なんでも1480年頃ドイツのクニットリンゲンというところで生まれ、各地を放浪した後、1540年頃に死んだと伝えられる錬金術師または魔術師または星占術師ということで、一般の人々の想像によると、悪魔を呼び出すことができ、空を飛ぶこともできた人物だったということである。

ファウスト博士の『地獄の威圧』という魔法書の翻訳は、教皇アレクサンデル六世（1492—1503年）時代にローマで印刷されたというものなど、数種あると言われている。その中でも特に有名なものは、ファウストの魔法の円と杖にヘブライ文字を書き込んだ魔法の絵や、クニットリンゲン出身のマキシムス師という妖術師の肖像画などである。また、ファウスト博士の『偉大にして強力な海の幽霊』という標題の黒書には、ベールゼブブが、その従僕の悪霊メフィストフェレスを自分に送ってよこした取引の要約が述べられているという。

とまあ、こんな具合に、ファウスト伝説みたいなことを少し書いたのであるが、それにしてもあのドイツの異端集団“ファウスト”も、ヨハン・ファウスト伝説をヒントにして生まれたのではなかろうかという気がするのだが。（いや、そうに違いない！彼らの作り出す音は、魔術であり、呪術であり、悪魔の儀式なのであるから。!!）

「このようなことは、偏見を捨てない人びとや、こんな契約は結ばれるはずがないと否定する人びとからは、ただ疑われるだけだろう」—ヨハン・ファウスト『偉大にして強力な海の幽霊』

ヨーロッパに悪魔の宴会や魔女が存在したのは、迫害されながらも、過去の異神に帰依している非国教徒たちがいたからである。農民たちが昔から住みついていた土地には、古い伝説や呪術的な伝説、古代の信仰などがふかく根を下ろしていたから、新しい宗教は彼らにとっては異教だったのである。悪魔の力が確立するためには古代の風習や、農奴の娯楽や、おとぎ話が必要であった。貧しい農民たちは、夜になるとこっそり集って、原始的で無邪気な遊戯に酔いしれた。彼らにとってサタンとは、新しい神の代理人である苛酷な領主に圧迫されながらも、彼らに威厳と自由の感覚を与えてくれた政治的人物像なのであった。農民たちは、悪魔の宴会で、人間の感情までも規制しようとする教会の干渉を受けることなく、思う存分興奮することができた。サタンは、一定の道徳的行為をおしつける天の戒律を、否定する。彼は、人間に未知なものを熱望する気持を起こさ

せ、夢と希望を与えてくれる。また、苦しさと不満とをもたらすが、最後には、よりよき善へ導いてくれる。彼は主として、善に奉仕しているのだ。

メフィストフェレス「常に悪を欲して、常に善を造る、あの力の一部ですよ」－ゲーテ『ファウスト』第一部　書斎。

ヨーロッパの諸宗教によれば、サタンの反逆は宇宙を分裂させ、常に誘惑されやすい信者たちは、死んでからはじめて永遠の幸福が得られると考えた。人々は、自分の悩みや不安については常に呪術師を頼っていた。そして、自らも呪術を行なうことによって、物質世界を動かし、超自然的なものと交わりを結んで、彼らにとって敵意あるものの圧迫をはねのけた。また、呪術的な知恵のなかには世界の調和の秘密がひそんでいると信じた。そして、古代の哲学者や呪術師たちの自然の探究は、西洋の最高の精神の持主たちに受け継がれたのである。ピコ・デラ・ミランドラ（1463－94年）は、古代の呪術的思想を復興し、カバラを利用してアリストテレス哲学とプラトン哲学を調和させようとした。アグリッパ・フォン・ネッテスハイム（1486－1535年）は、隠密的な思想のあらゆる流れに心をむけて、様々な呪術の教義を調停し、哲学とカバラとを統一しようと努力した。そして、光学器械の発明で有名な、写真術の父、ジャムバッティスタ・デラ・ポルタ（1538－1615年）は、ルネッサンスの知的探究への趣味を受けついで、呪術を基盤にして、世界を錬金術的に解釈した。この様に、呪術は、人間が思考するためには、なくてはならないものであって、人間の想像力を鋭敏にし、より高い業績への刺激なのであった。

実証主義的な科学の時代になっても、幻想的な妖怪は、依然として出没している。多くの学者たちは、隠秘的な力とは、まだ発見されない電気のような、ある未知の力のことではないかと疑い、呪術的な現象や妖怪の類などを写真にとろうと試みた。また、世界中至るところで、霊媒師が心霊体との交信をやっている。これらのことは、反証されない限り、否定することはできないことなのである。

錬金術についても、今日の科学からみれば、単に黄金を造出するという点で、きわめて滑稽なものになるであろうが、新しい宇宙の造出という点からみると、今日の科学を超えた多くの問題を含んでいる。しかし、限られた人々、限られた教義によって伝授されてきたオカルティズムが一つの科学として、象徴理論に発展していくということも考えられるような気がするのだが……。

《エピローグ》

内容が多少片寄ってしまって、恐縮なのであるが、錬金術思想とは論理性によって組み立てられるべき、「言語技術」などという表現手段によっては決して伝達され得ない性質のものであり、であればこそ、錬金術における古典的文書『沈黙の書』やラムスプリンクの『賢者の石について』のような版画や象徴詩などによる、人間の象徴的思考に訴えた表現方法が用いられざるをえなかったのだ。

魂の体験を得るための間接手段としての音楽、つまり音楽体験とは、魂の体験の一つの形に他ならぬ、ということができると思う。全身全霊で、かつ命がけで」
いているというのであれば、それはまさしく、魂の体験にまで高められるべきであろう。そして、その段階をへて次に、魂の内部の事実となった事物を出発点とすることにより、そこからさらに、今度は新たな創造を生み出す事が可能になるというわけである。その魂の体験とは、全て、象徴的かつ、暗示的な形で受け入れられるものであり、それは宗教における「啓示」と同じ性質のものに他ならない。そして、それの音楽における手段として、密教の「声明、（しょうみょう）」やユダヤ教会音楽などが現在でもまだ残っているのである。





Oh, come with old Khayyám, and leave the Wise
To talk; one thing is certain, that Life flies;
One thing is certain, and the Rest is Lies;
The Flower that once has blown for ever dies.

209. Macabre illustration by Edmund J. Sullivan for Quatrain XXVI of *The Rubáiyát of Omar Khayyám*, by Edward Fitzgerald, London, 1859.



〝私はより個人的・自己中心的になるにつけて、より深淵なものに手が届き、すべての人間を包括する普遍的なものを把むことができるようになりました。普遍的なものに到達する最大の源泉は、もはや自我ではないことに気がついたんです。愛がそこで出会い、より全体的な視野がそこから浮かびあがってくるような、何かもっと別な具体的なもの、つまりすべてのものを放射する中心があると思います。〟

——スタン・ブラッケージ

音楽の生命線

渡辺　仁

スタン・ブラッケージはアメリカの実験映画作家であり、彼の代表作「犬・星・人」は目を開けている時、閉じている時を問わず視覚に訴えかけてくる閃き・記憶・想像・夢・幻覚までも含む〈目に見えるもの〉全てをフィルムに定着しようとした彼の、極限にまで高められた映画である。

それはさておき、興味を強く魅かれるのが、この言葉がコリン・ウィルスンが彼の著作「敗北の時代」の中で〝ヒーローの問題は、内部へと向かってからもう一度外界へと戻ってゆくことだ〟と述べたことと酷似していることだ。

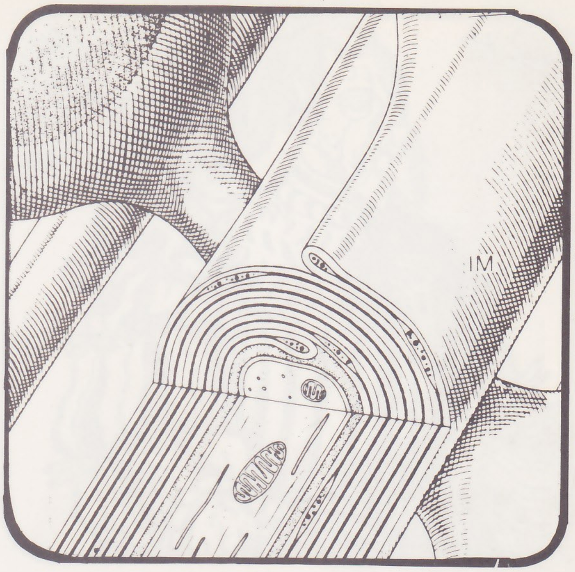
この言葉は、日々を生きる上でも創造行為においても最も重要な核心であり、生命の根源的、本質的、絶対的な大河に沿って流れ、自己の閉鎖的単一性から脱却して宇宙化しようとする態度の現れである。単に自己愛が強力な主張をするあまり、他者に自己の存在の承認を強要しようという権力志向にすぎない〈自我の拡大〉とは根本から相違している。

この稿は、音楽がより個人的より内面的になっていくことを否定した所から現在のニュー・ウェイブが生まれた、という考え方に全く逆の立場から、ロックの誕生から成長、変質さらにニュー・ウェイブの誕生という流れを一線で結ぶ為の、〈唯我主義〉あるいは〈特殊化〉という媒介を導き出す為のものである。（パンクが不良青年の反抗音楽だなどと言っている馬鹿は相手にしない）またこの稿は、物語がまさしく〈物を語る〉だけのものでよかった良き時代でなく、作品が自己完結することなく多岐に渡って作用をなしてしまう時代に、送り手と受け手が同時に生活者としてあるのだから、ひとつの作品を大事に取り上げそのものについてのみ語ることの愚かさ、無意味さに陥ることのないよう注意をはらって組み立てられている。

私は運良くニュー・ロックの出産に立ち会い音楽の感動を体験し、ロックの成長と共に私自身の成長もあったようなものだが、いつの間にやら互いのスピードが異なってしまったのか道が分岐してしまったのか、こんな文章を書く破目になってしまっている、というのは余談であるが、創世期のロックの確かな目的意識と無限に続くのではないかとも思えるエネルギーが、聴衆の感動の引き金を引いたのであった。

それは目前の社会不安やベトナム問題のせいだと言われれば、その通り、ベトナム戦争終結後のシーンの変容ぶりを見れば反論の余地はないが、少くとも他人志向型かつ男性型社会からの離反、主体性の奪回という点で、新たな宇宙観の獲得への第一歩であると認めて差し支えなかろう。そして、この新しい世界像はドラッグ文化の落し子サイケデリック・ムーブメントを抜きにしては語ることはできない。

サイケデリック・ムーブメントは、当時ドラッグによって初めて知った感覚——つまり強烈な色彩、外界との合一体験による恍惚——を正直に再現しようとしたナイーブな感性を感じ取ることができる一方、現実を忘却してしまえばハッピーな気分になれるという俗物的な一面があったことも忘れてはいけない。しかし、その新鮮な驚きを音楽によって他者と分かちあおうとした、音楽を選んだ者達は一方では歌詩の可能性を見出し、一方では既成の音楽にはあり得なかった音響の発見、新たな他ジャンルの手法の導入・発明を行なった。ジェファースン・エアプレーン〝ホワイト・ラビット〟、バーズ〝霧の８マイル〟など思い出そうとすると数限りない。ビートルズの〝ルーシー〟でもよい。



ところが現実がドラッグ文化をまだまだ目新しい汚物のように扱っている間は問題はなかった。その内浮かれた馬鹿共が働かなくても一応は食っていける社会をいいことにエセヒッピーとして風俗に入り込む。戦いを放棄した保守自由主義者の文化人共が新しい文化の擁護を始める。そうする内に次第に新鮮さは薄れ手垢にまみれたドラッグは、酒の代わりに容認され巷に蔓延する。オーライ。

しかし、彼らは先駆者であった。可哀そうな早く来すぎた者達であったのだ。自分に正直に生きようとしてみただけの、みずからを商品化することなど考えたこともなかったミュージシャンが、業者によって操られ、個人的な意識と外部の現象とのギャップを埋めることができずに、麻薬中毒患者になってしまうか気狂いになるかして死んでしまったジミヘン、ギャニス、ジム、モリスン……。彼らの想い出を語ることでは何も生み出し得ない。私達は彼らの轍を踏まないように賢くなるだけでいい。それでなくとも、普通の一般市民として高級生活者へと収まってしまうミュージシャンが多い中、そんなロックがいくらドラッグだ革命だとか騒いだ所で見せ物でしかないことを見抜けない聴衆が多すぎたのだから。

ニュー・ロックの貢献は、新しい価値観、道徳、ライフ・スタイルを現実に持ち込んだという程度である。大ざっぱに言ってだが。

〝人間に必要なものは、人間を個的な限定された世界から〈宇宙〉へと拡大溶融せしめる神秘体験であり、音楽はその為の最も適した手段である〟と以前に何かのミニコミに書いたことがあるが、これに加えて〝権力への本能の発現である自己愛の罠に陥ることなく、しかも他人との無意識ないしは意識的な相互補償関係——なれあい——に甘えずに、自我ならぬ自己そのものを深化し拡大するにはどうすべきか〟という意味のことを中村保男氏が書いておられるのを読んだ時に、ロックが得ようとしていた、従来の音楽ではその片鱗にさえ触れることのできなかったものが、これではなかったのだろうかと確信した。

生命の高揚感や一切の曖昧さを排した内視を一般の感動から区別すると、この種の体験は数えるほどしか味わうことはできない。ロックが芸術であるメディアであると、私達を期待熱狂させた者達が今ではショー・ビジネスという古い社会での駒でしかなかったことを自ら暴露している。

こうして、ニュー・ロックとしてうぶ声をあげた音楽の本質的な機能も、古い体制の中でその先の道を見出せぬまま、ブームは次の標的を捜し当てようとしていたのだが、



果たして、ハード・ロックは音楽としてのアート・ロックの正統な後継者だったのだろうか。点検しておかねばならない。

とは言ってみたものの、今さらハード・ロックについて何か書くという気に全くならない。なる訳がないのだ。現在でも次から次へと新人ハード・ロックのアルバムが登場するが、これはロックがまだビジネス——金儲けでしかない証拠。いわゆるあの当時のハード・ロックは、文字通り役目を終えて消滅してしまっているのが自然なのだが。

気を取り直して簡単に言ってみれば、ハード・ロックは、現実世界の破壊を意図した時にエネルギーが生じ、〈反世界〉の創造を目指した時に核が生まれ、多くのシンパシーを得てブームになった。とこの程度。煽られた者こそいい迷惑だったと言わない。かく言う私だってハード・ロックで生きながらえることのできた一人である。ところが、この世界が気に喰わなかったのはいいとして、それが気分でしかなかった為に現実棄却の態度でしか発露されず、衝動が客観視されないまま言いたいことを直情的に言ってしまうことによって、結果として受け手との間のコミュニケーシ



ョンは破綻をきたし、緊張感は怠情な快楽へとすり変わり、コンサートはバカ騒ぎのパーティー会場と化し、はたして〈創造〉は〈現状維持〉へと落着した。

ハード・ロックの否定面を見ればこういうことだ。

ただしハード・ロッカー達の世界への認識も自分達人間についての認識も正しかった。多くのレコードを真剣に聴いてみればより一層明確にわかるだろう。特に、今なおパワーを保ち現実の裂け目を照射するに足るアルバムをあげれば、ブラック・サバスの〝マスターズ・オブ・リアリティ（71）〟と〝ブラッディ・サバス（73）〟ＢＯＣの〝ティラニー・アンド・ミューテーション（73）〟である。それ以前ではドアーズの〝ブレーク・オン・スルー〟を筆頭にＭＣ５の３枚のアルバム、ブルー・チアーの初期などが傑出している。

つけ加えておくならば、社会から拒絶されていた者が社会へ絶縁状を叩きつける行為で社会へ帰化していくことが起こり得る訳で、これはパンクが出現した時に感じたことなのであるが、詳しいことはまた別の機会に触れるとして、パンクが不良青年の音楽態度ではなく観念の簡素化・現実化の態度であると分かった瞬間から、ある程度の安心をした。それにしても、聴き手に自分を信頼に足る存在だと確信させるような〈勇気づけ〉が、この世には常に必要だ（まだ！）ということを、これから何かをなそうとする人は念頭においていて欲しい。

この稿で語られていることは多分、音楽のほんの一面を拡大したものにすぎないかもしれないし、多くの音楽ファンの聴き方とまるで違ったものかもしれない……などと言っても全然本気ではないので気にせずに、プログレッシブ・ミュージックと宇宙論へと話を進めるが、あくまでプログレッシブとは音楽形式について指す形容詞でなく、精神の拡張の時代的先端部のブツ切り部分を指すのだと断わっておく。

人間の錯覚を利用して宇宙気分にいくら浸ったところで、人間が真の宇宙的存在になれるわけではない。しかも、本当に自らを地球の呪縛から切り離し高みへ舞い上がろうとする者は、しっかりと大地への開かれた意識＝愛を生きぬく覚悟がなければ何処へも行ける資格すらない。現今のＳＦブームが実はただの宇宙ゲームという玩具のブームでしかなく、真にＳＦが定着したのではないことは誰にでも容易に推察のつくことであるが、例えば、あるアーティストが〈宇宙〉に関してのメッセージを発する時、自分もメッセージの受け手も、同時に同様に〈宇宙人〉であるという一体化への主体的参加の認識がないとすれば、それは最も重大かつ致命的な誤謬だと言わねばならない。

同様に音楽でもしかり。メッセージが丸々プログレッシブであった初期の〈プログレ〉は重たく、暗く、美しくさえあった。それはサイケデリック・ミュージックの、信じがたいほど世界が美しいと見ることのできる無垢な子供ならではの歓喜と不安から生まれた弾力性や色彩感と異なり、その相違は、一段階成長した宇宙観を識ることのできる時代が訪れたせいであろう。でなければ、過去に対して積極的な見切りをつけなければ明日に向かって跳ぶことが不可能な厳しい状況が顕らかになったせいであろうか。故に、このような時代では、音楽が現実をだしぬくきっかけとして、受け手へ〈合一〉への参加の意志とその勇気があるかと訴え挑戦しているか否かで、その音楽の質を読み取ることができる。それ以前にきっぱりとした姿勢とさっぱりとした靱かさの感じられないものは、いつ聴いてもまだるっこい。

以上のことは〝スペース・リチュアル（73）〟までのホークウィンドを聴きながら考えをまとめた。この頃のホークウィンドの音楽が整然とした永遠の一部を切り取った様な印象の上、一種の全感覚を刺激する総合芸術であったことは、一瞬一瞬淀みがちな頭脳に動性をよみがえらせ溢れさせるに充分であった。

定めの星について行きなさい
その光の流れに流されなさい
きみが、探していたものは
そこに、たしかにあるでしょ？
確認したら
帰ってきて救世主になりなさい
〈スペース・シャンティ　訳・岩谷宏〉

さて、こうした最終的結論の表明者としてのミュージシャンはあと何人か思いつくのだが、ボウィとかフリップとか、だが大半の〈プログレ〉は、ペシミスティックであっ





たということに対して苛立ちを覚えるのは正解である。正しい現実認識をいかに体現するかによって、木乃伊取りが木乃伊になってしまうことは多々ある。また、外の世界の混乱、迷妄について口を開く時、彼は自分のシニシズムを褒めてもらいたいか自身のニヒリズムに酔っていたいかのどちらかなのである。さらに、苦痛に敏感すぎる者は、ただ泣き叫ぶだけでよいものを、苦痛を柔らげる歪んだ方法を考えついたり狂った判断をしてしまいがちなのだ。

〈無私〉の音の創造が早い時期になされなかったのも、誰もが自分なりの苦痛となれあう方法を持って逃げ場に隠れっぱなしだったということなのだろう。相も変わらず私達一人一人の間隙を満たす潤滑剤は品切れを続け、サングラスとマスクが売れ続けるとしたら、これほどの不幸はない!!

〝ペシミズムとは自身の純粋性を保つ為に、狭隘な自らの領土に境界線を引くことで、広大かつ深淵な外界への接触点を閉ざすこと〟という意味のことを前述のコリン・ウィルスンが言っているが、個に閉ざされることと個の内奥へ沈潜してゆくこととの相違をはっきりと知ることで、進化の意志を拒むペシミズムが現実を生きる態度としては否定されるべきものであることは明白なこととなる。

文学においては、ペシミズムの生み出す知的怠惰に戦いを挑んだ作家達を知ることができるが、文学的ペシミズムは文学という土壌の上に成り立っているものでしかないので、その完結性、自閉性はた易く見分け崩すことができるのである。しかし音楽においては、音楽の属性によって、ペシミスティックな音楽とはどういうものかを言葉で説明することは困難だ。とは言え、聴き手の感受性を嗅ぎ取り自己の中のペシミズムを破壊することが可能な所に、音楽故の救いがある。

〈無私の音楽〉、イーノ方法によって導れる体験は、日本の映像作画・松本俊夫の言葉を引用すれば

〝作家が自分の個人的世界をひたすら純粋につきつめてゆき、そのエネルギーが一定のヴォルテージに高まるなかで、ついには眩暈をひき起こす次元でやってくるのだ。そこでは自我は混沌とした一種のパニックを経て、かぎりなく無化され一瞬我を忘れたトランス状態を経験することにもなるだろう。ともあれそのような位相で、すべてのものを放射する中心、すなわち集合的下意識は自我にのりうつるようにして外化されるのである。エクスタシーとは、言うなればそのような状態を指している〟

のであり、冒頭に掲げたスタン・ブラッケージの言葉へとこの文章全体がフィード・バックする。

音楽の彼岸などと考えたくもないが、イーノ周辺の他、音楽の様々な束縛から解放されたフリー・ミュージックや、既成の表現手段を借りつつも自らは世界の規範から自由な音楽によって高みへ登りつめようとするアーティスト達。私はソフト・マシーンとヘンリー・カウ、言うまでもなくプラネット・ゴングが今でも大好きだ。

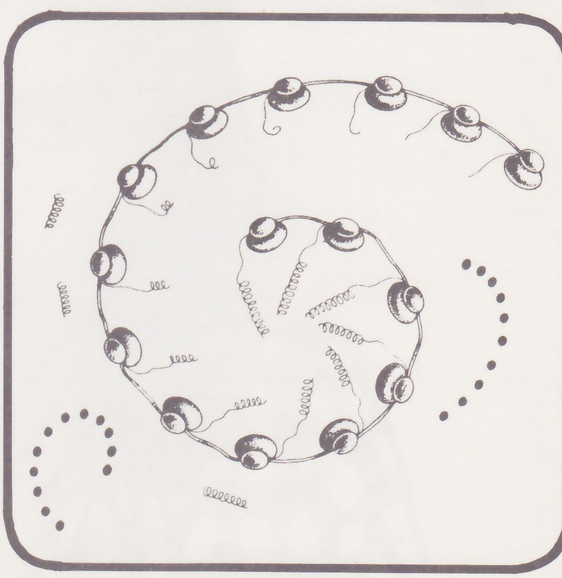
一般化する事は白痴となることに等しい。特殊化する事が顕著な価値である。

――ウィリアム・ブレイク

結論めいたものを先に言ってしまえば、特殊化の果てに辿り着いたのが、現在のニュー・ウェーブと称されているものの筈だ。次の機会があれば、ここから私の話は始まる筈である。

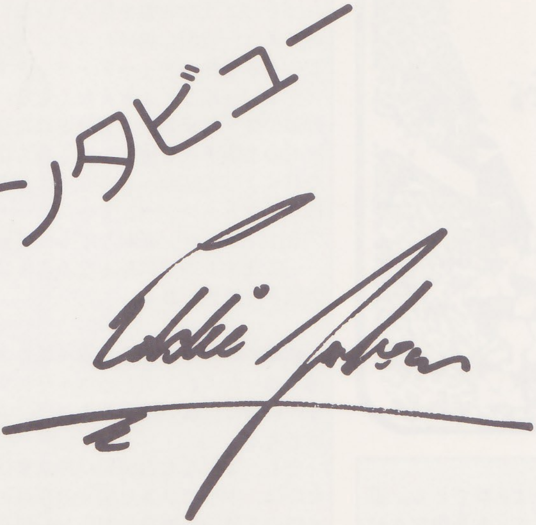
全く、こんな七面倒臭い評論家然とした長い文章を書いたのは、本当にひさしぶりの忘れかけていた体験であった。〆切の3日前に博多の友人から現在進行形の音楽、つまり最新のアルバムを数枚聴かせてもらったのが運の尽き。いつのまにか原稿全てに筆を入れ直す羽目になってしまっていた。実は、〈ダークサイド・オブ・ザ・ロック〉についてオカルティズムを人類の開かれるべき可能性に結びつけて書いてしまっていたのである。当然、現在の状況は批判されるのであるから、パンク・ニュー・ウェーブでも同罪!とやって恥をかく所であった。それをパトリック・フィッツジェラルドという少年の顔をした男のアルバムを聴いた為にこうして前向きの姿勢になれたのだからすごいもんだ。いつのまにか私って静止していたのだわ。それにしても、単純明快な事実だけを簡潔な文体でスカッと書いてみるのもよかったな。けれどそれは日頃の私の生活だから丁度いいのだ。

とにかくレコードを聴かせてくれた平山とこんな機会を与えてくれた北村氏とフールズメイトに感謝。



セミ・クラシカルな音楽をイギリスのグループとして演るのが僕にとってベストだ。―E・ジョブソン

本誌独占
UK
来日インタビュー



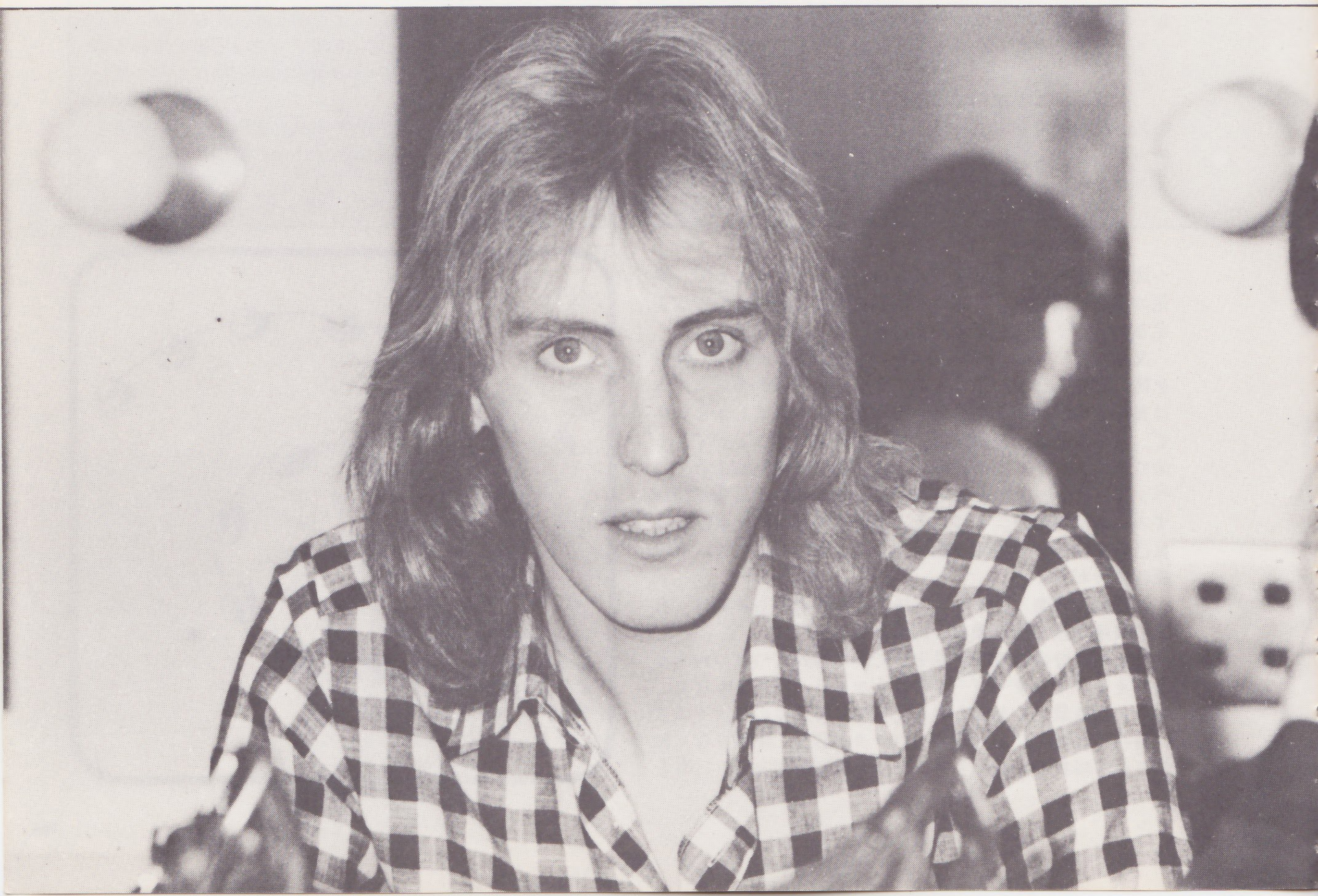
プログレッシヴ・ロック・ファン待望のＵＫが来日した。この日本公演をライヴ・レコードとして年内に発表するという彼等は、正統的ブリティッシュ・ロックを久々に僕等の前に披露してくれた。とりわけ若き天才エディ・ジョブソンのはつらつとしたバイオリン・プレイと、それとは対照的なジョン・ウェットンのおちついたステージは印象的だった。あれだけの音楽性と演奏技術を兼ね備えたグループが来日したのは、本当に久しぶりのことなのではないだろうか。そこで本誌では、メンバーのエディ・ジョブソンとジョン・ウェットンに来日インタビューを行ない、現在彼等が考えている事や今後のグループの方向性などを聞いてみた。(三)

Interview by Nick Bonie

Eddie：僕は幾度となく来日の機会からはぐれてて、やっと日本にきたよ。でも君は僕がザッパの時にテリーと一緒にやってるのを見た人間だから、この組合わせで来日と言ってもあまり新鮮味を覚えないんじゃない？

F：――そんな事ないさ。この３年間の間に君とテリーが何の進歩もない人間で、たがいに利己主義であれば別だけど、U.Kは僕が心待ちにしていたバンドの１つだったんだよ。でも、変な意味じゃなくて、本質的に、ザッパ時代のテリーのドラムと君のキーボードの組み合わせ自体はあまり変わらないみたいだけどもね。

E：君がそう感じた気持ちわかるよ。僕達２人共、長い間〝必然的〟なやり方でプレイしていたし、お互いのかみ合わせ方も知っている。



ザッパの時には僕は本当の自分のスタイルで演奏はしていなかった。今U.Kでは、より自分のスタイルでプレイしている。だから僕にしてみれば、かなり自然な流れでドラムとかみ合わさっていると思うけど、リスナーには違いはそんなにない様に見えるんだろうね。でも、アプローチの仕方はザッパの時と全然違うんだよ。ザッパ時代ではね、僕は研修生みたいなものだった（笑）。ロスでアメリカン・ミュージシャン達とプレイして、アメリカン・ミュージックの性質やジャズのアプローチを学んだ。アメリカ的なジャズ風プレイを盛んにやったよ。そういう音楽の捉え方ではね、ザッパの連中は皆グレイトだった。彼等は自分達のポイントをよく捉えていて、何が強みで何が弱味であるかしっかり心得ていたんだ。そんな中で僕が考えていた事は、常にイギリスだった。キーボード・プレイヤーとしてセミ・クラシカルな音楽をイギリスのグループとして演るのが僕にとってベストだって気が付いたんだよ。それで僕はイギリスに戻って、先づブリティッシュ・スタイルの曲を書く事に専念した。



F：——君の表現したい事が、U.Kといううってつけの被写体の中に強く映しだされているよ。でも、ファーストで打ち出した音の方向性ってのはセカンド『デンジャー・マネー』とは微妙に違ってるじゃない。いや、かなりかも知れない。君の言葉の通りを受けるとファーストの『憂国の四士』の方がイメージ的だったんじゃないの？

E：それは違うよ。僕は納得のいかない事はしないよ。セミ・クラシカルという言い方のせいかな？とにかく僕はセカンドの方がより焦点が定まっていると思うよ。ファーストで僕たちはいっぺんに色々な事をやりすぎたんだ。ありとあらゆる試みを一挙に表現してしまった為に、聴く人には何が何だか解らない面が強かったと思う。セカンドはね、そういったものの余計なものを全て剝ぎ、シンプルではっきり僕達のやってる事がわかる様な音作りだ。

F：——でもね、シンプルなのはいいけれど、ギターがなくて物足りなくないかい？特に君のバイオリン・ソロなんて後ろでギターがコードでも刻んでくれなきゃやりづらいだろうよ。ギタリストを参加させるアイデアってないのかい？

E：うん、バイオリン・ソロの時はね。だけど特別に欲しいとは思ってない。メンバー・チェンジをした時にアチコチ探したけどいいギタリストが一人も見つからなかったんだ。U.Kにピッタリくるギタリストは今のイギリスには居ないよ。

F：——随分きっぱり言うねえ。一体どういう人間がいいの？探してた時の条件的なものは何を基準としてたんだい？

E：色々な条件が含められてたから見つけられなかったんだよ（笑）。U.Kの新ギタリストとして僕達が望んでいたのは、ただ単にいいプレイをするって事だけじゃダメなんだ。多くの要素を備えていて、かつ僕等と同じ方向性でね、ロックからジャズに入った奴じゃなくて、ジャズからロックに入った奴がいい。そしてルックスも良くてビジネス・ヘッドをもった人ね。

F：——そんなの世界中に5人といるかよ!!滅茶々々にシビアな条件だな…。時に、君もルックス的な事に関して必要だと思ってるの？

E：違うよ、意味が。僕がルックスと言ったのは、50,000人のオーディエンスの前でもアピール出来る位の貫禄をもってる人という意味だったんだ。その中にテクだって含まれるんだよ。大勢の聴衆の前でどうやって演奏したらいいかを知っている奴のことさ。

F：——アラン・ホールズワースはどうだった？

E：彼はいいギタリストだ。いいプレイをしてくれたよ。でも彼はいつも後方にいてね、アピール性は全くなかったね。ピン・スポットが上からパッと彼を照らすと、そっと後ろにさがってライトの影でギター・ソロを弾くっていう人間だからね（笑）。

——アランの後釜のギタリストを探すのをやめたって言うけど、ある程度発展すれば絶対に行き詰まりを感じると思うけどな。

E：今は満足してるからいいんだ。ちゃんと3人でオーディエンスを満足させる責任も果たしていると思うし…。先、ギタリストを入れる可能性もあるかもしれないけど今は3人でつづける。少し演っていれば、何が必要かこれからどうしたらいいかという事が解ってくるだろうし、全ては試みの中で進展していくんだ。

F：——なる程ね。じゃあ話を戻して悪いんだけど、デビュー・アルバムについて。実際にアランとビルはJAZZ的な要素が強くて方向性があわずにやめた訳だよね？

E：うん。

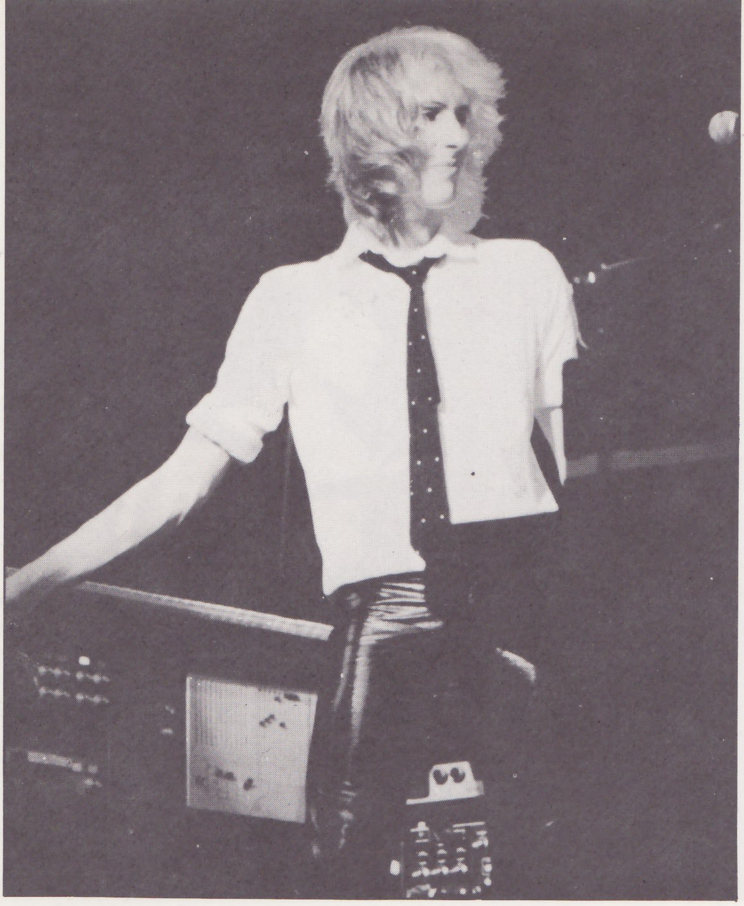


Photo (Stage) Max Takahashi
(Off) Hiki Kohichiro

F：──アランとビルはインプロビゼーションを基本としたフリー・スタイルだし、逆にジョンはストレートでシンプルだよね。君と言えばその中間に位置してた訳だけど、そのバラバラの四者の意志をどのように統一させてた訳？デビュー・アルバムの中ではどういう風に展開してったの？

E：ヘイ、君の言ってる事はその通りだ。アランやビルとジョンのスタイルは全く異なっていて、僕がその中間に居たから統一されていたのだと思う。例えばジョンが作った曲をアランやビル風にやり直すのは手間がかかったりね。その点僕の曲は誰にでもフィットしたんだ。僕はムードを大切にする為に中間になる事に務めてきたし、僕がメイン・ライターだったから順調にいっていたんだ。ところが、皆あまりにもスタイルが違いすぎていて、1年後には皆中間で進んでいくという事が妥協の様に思えてきたんだろうね、それで別れたんだ。ファースト・アルバムの時には皆、うまくやってたんだよ。僕がオファーした音楽に皆同意してくれたからね。

F：──じゃあ『デンジャー・マネー』になってシンプルになったというのは音楽がもっと簡単になったって事かい？それとも統一され易くなったって事かい？

E：んんんんん、ううん、そ・そう言えるかな。うん。色んな意味でね…シンプルなんだ。

F：──セカンドではコマーシャルな部分も窺えるね。

E：うん。ファーストは音楽的に高度だったけどコマーシャルな面にかけていたから…。

F：──レベルの高い音楽でかつコマーシャルな曲を書くって事が今の君の悩みなんじゃないのかい？

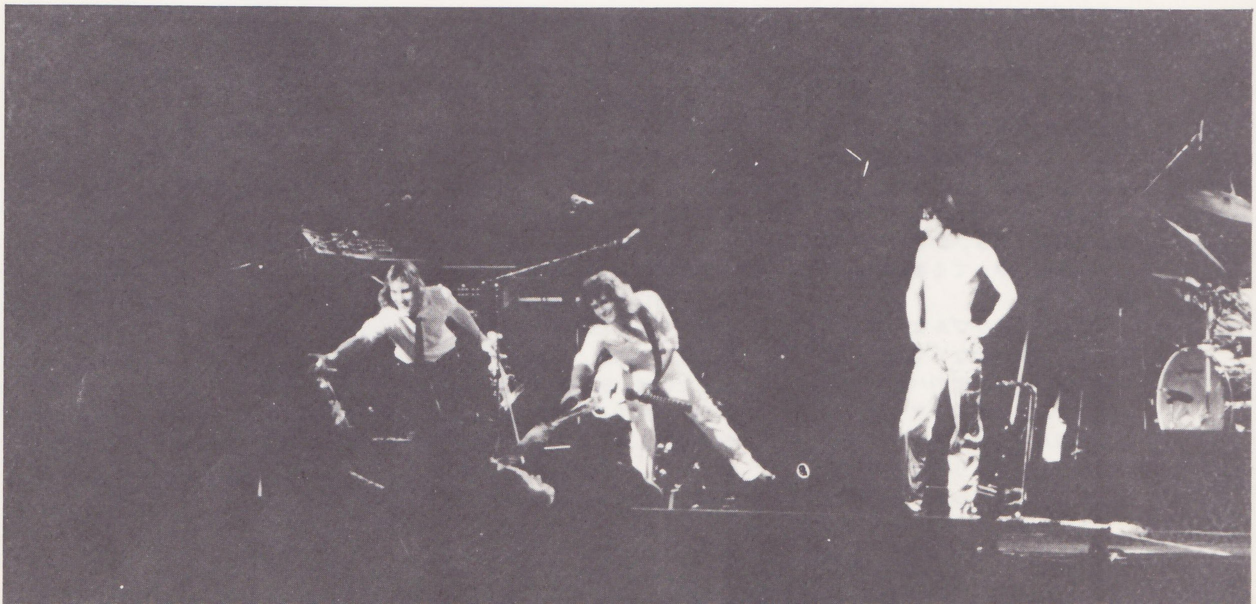
E：いつだって、いい曲を書きたいと悩んでるだけだよ。具体的な意図はもたないよ、レベルが高いだとか、コマーシャルだとか…。でもつけ加えておくと、いい曲ってのはそういうものを含むけれどもね。

F：──もっともだ!!今回の君達のライヴが今度アルバムになる訳だけど、もっともっと素晴らしいものを我々に生の迫力で提示してくれる事を切望するよ。

E：まかせといてくれ。日本の聴衆は皆グレイトだ。僕たちは素晴らしいライヴを生む事が出来るだろう!!

＊　＊　＊

確かに聴衆は彼等のプレイに酔っていた。でもその中に居た女の子達の何人かは双眼鏡でエディーをおっかけまわしてたなんて哀いそうで言えなかった。



ミュージシャンとしての自分の生き方に成功すれば有名になれなくてもいいんだ。

—J・ウェットン



周囲のざわめきをうるさそうに目で制止しながら、一昨年Roxyで来日した時よりもはるかに堂々と、はるかにスマートになってやってきた。

F：—Hi。元気？U.K イン・ジャパンの調子はどんなものかな？初日の日、ライティングにかなりうるさく注文ををつけていたようだけど満足はいったのかい？

John：まあね。君はコンサートに行ったんだろう？どんな風に思ったんだい？

F：——いやー、これは凝ってるなあと感心してたんだけど。仲々効果的なライティングだったよ。やっぱり君等のサウンドってさあ、聴覚のイメージを視覚によって具体化する事が大切なんだろう？ショーでのライティングが一番気を遣うでしょ？

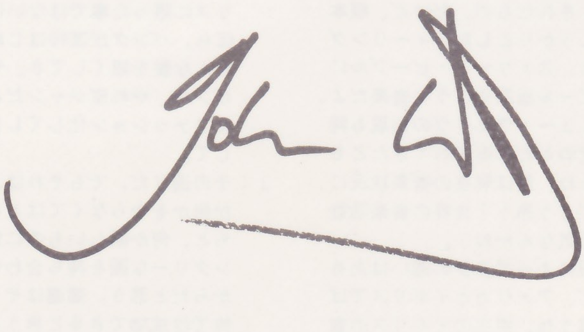
J：それはどのバンドにも言える事だし、僕達のバンドだけ特にって事はないよ。

F：——でもイエスとかジェネシスとか、君達の様なサウンドをもったいわゆるプログレッシブ・バンドって幻想的なショー作りを必死になってするじゃない。イエスなんてステージングの費用でツアーやる度に赤字なんてオマケつきでさあ。

J：ねえ、僕達プログレッシブ・バンドじゃないよ。

F：——ん？

J：僕達のスタイルはもう決まってるんだからプログレッシヴじゃないよ、ちっとも。プログレッシヴ・バンドってのはいつもいつも変化して向上していく事だろう？僕達のサウンドは変わらないよ。



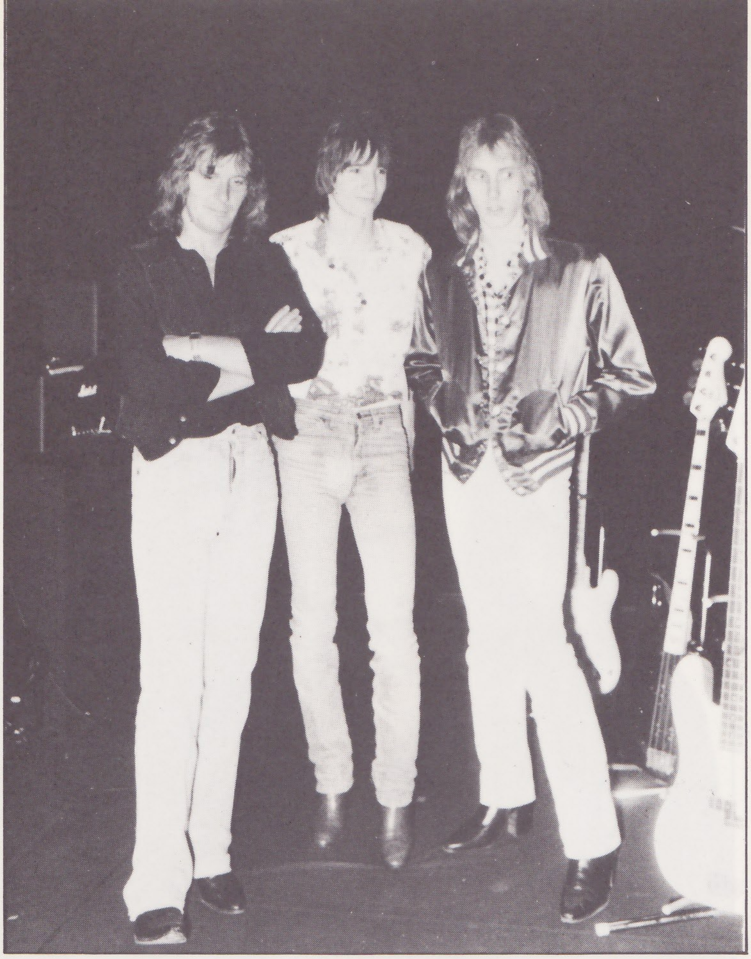
F：——え？え？(汗)あ、あのねえ、僕がプログレッシヴ・バンドって言ったのはね、つまり日本語英語で我々が使ってる表現の一つで、例えばシンセサイザー使ったり、例えばタンジェリン・ドリーム、ピンク・フロイド、例えば、えーと、えーと、

J：ああなる程ね。そうね、そういう使い方をすれば僕達もプログレッシヴ・バンドになるな。

F：——それで君はね、U.Kを結成しようと決めた時、最初どんな風にやっていこうと思ったの？ What did you wanted to be ?

J：ミュージシャン。I wanted to be a musician。

F：——（あんまりオチョクルのでか



なり熱くなってきた)あ、あのねー

J：ハハハ、ゴメンゴメン。U.Kに僕が求めたものはね、'60年代のオールドな感覚と、'80年代に続く新しいものの丁度中間をついていこうと思ってたんだ。ニュー・ウェイヴ・バンドよりはソフィスティケイトされたもの。だけど、根本にはしっかりとしたフィーリングのある、ストリート・ピープルにもアピール出来るような音楽だよ。

F：――ニュー・ウェイヴの出現も同じ設定のもとに生まれてきたとも言えるね。君は現在の音楽状況についてどう思う？世界の音楽活動や雰囲気なんかね…。

J：その国によって多少の違いはあるけれど、アメリカとイギリスでは全く違うね。現在のイギリスの音楽状況というのか状態はとても混乱している。'60年代の、いわゆるオールド・ロックン・ロールやポップ・ミュージックも盛んだし、一方のニュー・ウェイヴ、パンクもがんばってるし、その中間の、例えば僕達の様な音楽も多く根づいているし…とにかく色んなものが入り乱れて、いたずらに混乱しているよ。人々は、何を選んだらいいのか、何を聴くべきか、どっちの方向に向くべきか全く困惑させられていると思う。

F：――一理あるね。でも困惑するっていうより、若い子達ってすぐに新しいものに飛びつきたくなる傾向にあると思うよ。もちろんイギリスに限った事ではないけれど。ほら、パンクが流行はじめると、みんな髪を短くしてさ、やれ安全ピンだ、やれ皮ジャンだと、完全にファッション化してしまったりして。

J：その通りだ。でもそれは、みんなが何かをやらなくてはという気持ちと、何か新しいものに対するハングリーな面を持ち合わせているからだと思う。僕達はそういう意味では成功できると思う。

F：――違う意味では成功できないっていうの？

J：ハハそうだよ。どういう面で成功できるってのは、若いインテリジェントな人達の為に満足いくプレイができるって事でだ。又、成功できないというのは、もっと俗っぽい感覚でポピュラーになれないって事。だって、世の中には、そんなにインテリジェントな人々がたくさんいるとは思わないからね。ハハ

F：――人の顔見ないでよ。じゃあ君は俗的な成功は収められないと最初から思ってんの？

J：僕達の音楽では難しいね。かと言って、僕達は自分達の音を変えていくつもりはないよ。ミュージシャンとしての自分の生き方に成功すれば有名になんかなれなくっていいんだよ。

F：――……これはこれは完全に言いきれるんだね。スゴイや。じゃあ原点に戻った質問を1つ。君がキング・クリムゾン解散後、色々なバンドとセッションをしてね、最終的にU.Kを作った理由とそのいきさつなどを…。

J：Well、エディやビル（ブラフォード）とは昔からの友人でね、僕とビルはキング・クリムゾン、エディがロキシー・ミュージックで同じレコード会社、同じマネージメント、EGマネージメントだったから。僕がブライアン・フェリーのアルバムに参加したり、エディがクリムゾンのアルバムに参加したりしてたんだよ。オフィスの中は皆とってもフレンドリーにやってたんだ。エディと親しくなったのは'74年に僕がロキシー・ミュージックと一緒にプレイした時でそれまでは単なる顔見知り程度。'74年7月にクリムゾンが解散してから僕は色々な所でプレイしてきた。ユーライア・ヒープとかブライアン・フェリーとかね。でもそれは単なるセッションで、僕は常に自分のグループの事を頭に浮かべていたんだ。新しいグループで、本当のブリティッシュ、ヨーロピアン・スタイルのロック・ミュージックをやっているバンドは少ない、だけど、ファン達はそういうバンドをこそ望んでいる。そんな彼等の思もちとは裏腹に、そういうバンドって少ないじゃない、僕達がここでひとつ奮気をしたのもそういう訳さ。

F：――使命感!!輝くスーパー・スター（小声）。

J：'76年に僕とビルとリック・ウェイクマンでバンドの設定を立てたんだけど、リハーサルの段階で上手くいかなくて、一時、間をはずしてメンバーを新めて物色する事にしたんだよ。最初に僕が選んだのがエディで、僕は一番一緒にやっていきたい人間だと思ったからね。ビルはビルで、アラン・ホールズワースとやりたいと願って、最終

的にこの4人によってU.Kはスタートしたんだ。いや、本当のスタートをきったのはアラン加入前の3人だったのかもしれないな。エディもやはり誰かもうひとりの人間を望んでて、特に彼のバイオリン・ソロの時なんかにベースのパートを弾いてくれる人間をね…それでビルの勧めもあってアランのプレイを聴いた。そして驚いた。信じられない位ファンタスティックだったんだ。彼は世界一のギタリストだと思ったよ。でもね、問題はだ、彼がU.K向きでないって事だった。彼の求めていたものは、バンドの方向性からそれ、多分にジャズに傾倒していたから。ビルもそうだった。ビルと僕は、キング・クリムゾンからどの位変わってきたのかという点を忘れていた。ビルとアランはジャズに影響され、僕はロック、そしてエディは中間だった。そのバランスの乱れが結果的にアランとビルの脱退を招いたんだ。

F：——テリーに決めたのはどんな感じで？ドラマーのオーディションはなかったんだよね。

J：オーディションはしなかった。エディがテリーをやたらに気に入ってて、アメリカに彼を聴きに行ったんだ。その時テリーがブレッカー・ブラザーズとやってるのを聴いて納得したよ、彼はVery Goodだった。僕達はイギリスに戻って即、始めたんだ——新しいU.Kの音作りを。

F：——そうだね、彼は本当にいいドラマーだよ。音もたぶんにロック気質だし、僕も『憂国の四士』よりは『デンジャー・マネー』の方がハードだけど音がまとまっていて気に入ってるよ。

J：僕達3人のバランスはすごく上手く出来てるんだ。ギタリストを入れても入れなくてもこのバランスは保たれて、より強化されるに違いない。でも僕はこの3人で満足してるからギタリストの事はあまり気にしなくて、

F：——ねえ、もし君がU.Kをやってなくて、他の奴等がU.Kを作ったとしたらどう見る？客観的にさ。

J：もし僕がU.Kをやっていなかったら…もしいなかったら…。うーん、うーん。そんなの想像出来ないよ!!僕はU.Kの僕なんだから!

U K







ブリティッシュ・ロック・シーンにおいて、常にプログレッシヴであり続けたバンド、キング・クリムゾン。かつてその王国を通り抜けてきた人達が、その頃の経験を生かし現在のロック界で様々なすばらしい活躍をしている。そんな中で今回は、正統派ブリティッシュ・ロックの雄として活躍中のU.K.にスポットを当ててみたいと思う。

74年9月26日、キング・クリムゾンは5年8ヶ月余りの偉大なその歴史を閉じ、バンド解散後、ロック界屈指のリズムセクションすなわちジョン・ウェットンとビル・ブラッフォードは、将来の再会を誓い合い、それぞれロキシー・ミュージック、ゴングへ。その後、ウェットンはユーライア・ヒープ、その他のセッション・ワーク、ブラッフォードはロイ・ハーパー・バンド、パブロフス・ドッグ、アブソリュート・エルスウェア、ジェネシス、ナショナル・ヘルス等を渡り歩く。

76年、遂に自分達のバンドを結成すべく2人はリック・ウェイクマンとセッションを行なう。しかしウェイクマンはまだA&Mとの契約が切れておらず、またA&Mがレコードを出すなら「リック・ウェイクマンと○○」という名前を使うことを要求したためこの話は流れてしまう。

再度別れ別れになった2人は、その後ウェットンはブライアン・フェリー・バンドの一員として77年6月に来日、ブラッフォードは11月にソロ・アルバム〝Feels Good To Me〟を発表している。

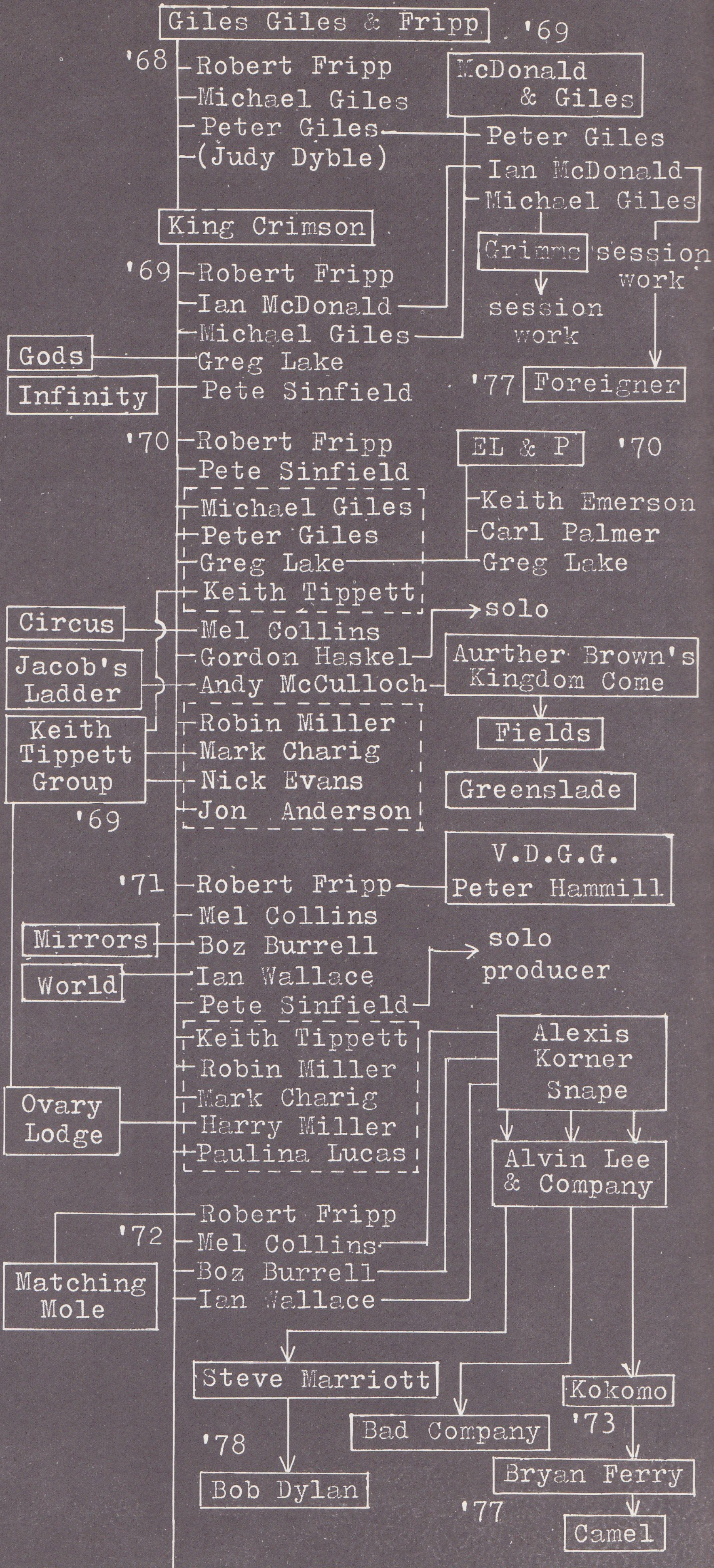
一方わずか16才でプロのミュージシャンとなり、17才で一流バンド、カーブド・エアに参加、18才で早くもロキシー・ミュージックのメンバーとなり、実力とともに人気も得た天才少年エディー・ジョブソンは、21才の時アメリカに渡ってフランク・ザッパのバック・ミュージシャンとして活動していた。そこへ白羽の矢がたった。

ブラッフォードはギタリストとしてアラン・ホールズワースを推薦。彼は69年イギンボトムでデビューし、テンペスト、ニュークリアス、ソフト・マシーン、ゴング、トニー・ウィリアムス・ライフタイム等を点々としていた。

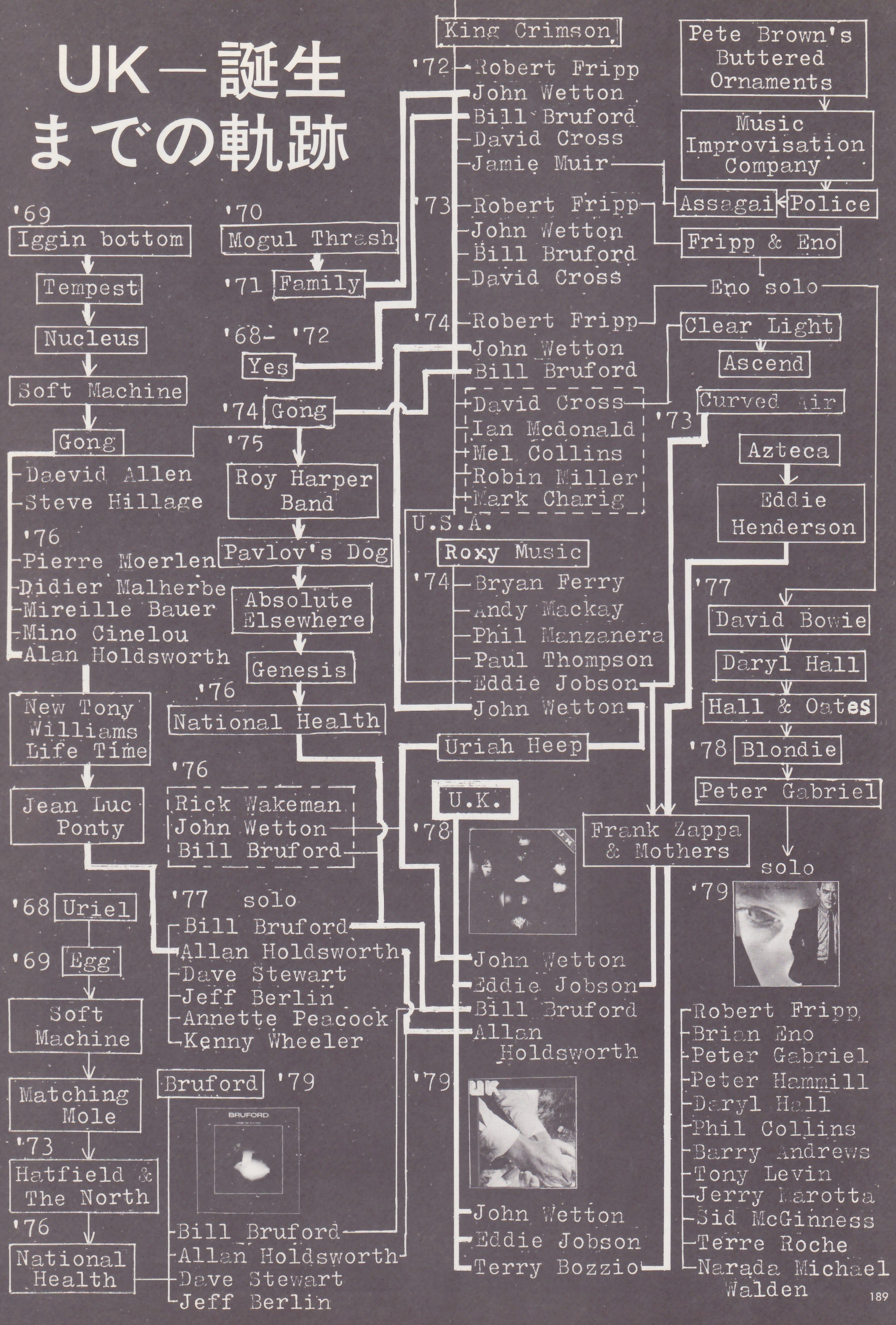
ここにバンドの原形が誕生し、ブラッフォードが〝U.K.〟と名づける。そして78年春デビュー・アルバム「憂国の四士」を発表。高度な演奏による伝統的ブリティッシュ・サウンドを展開し評判になるが、音楽の方向性の違いからブラッフォードとホールズワースが脱退しジャズ・ロックへ向い〝Bruford〟を結成する。

残ったウェットンとジョブソンは、アフロ・ロックのアズテカからマザースに加入したドラマー、テリー・ボズィオを誘い、セカンド「デンジャー・マネー」を発表。よりヘヴィーになりバンドも一体化する。79年5月には日本公演も行ない、何とそれはライブ・アルバムになるとか。

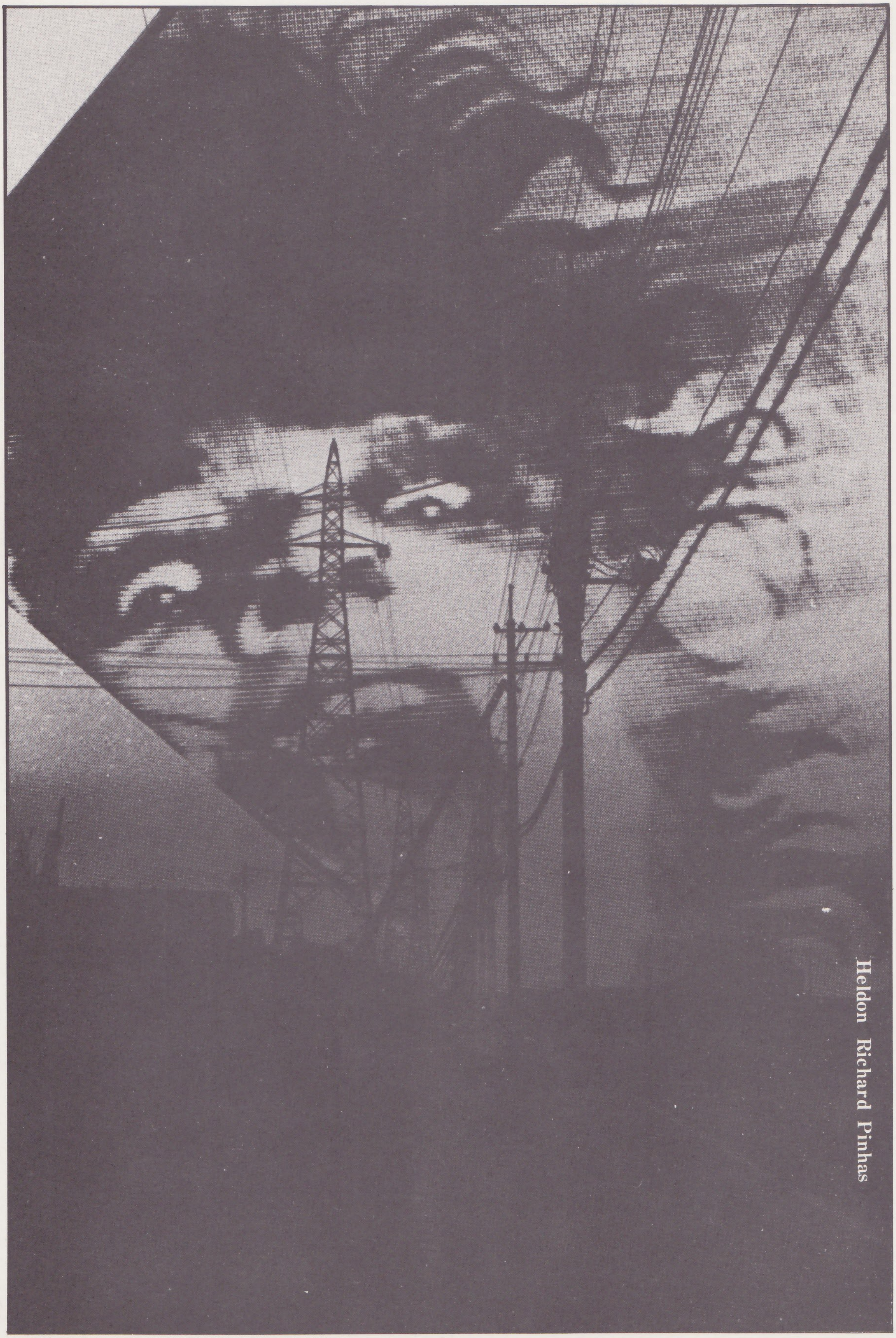
作成　渡辺　勝美
清水　嘉久

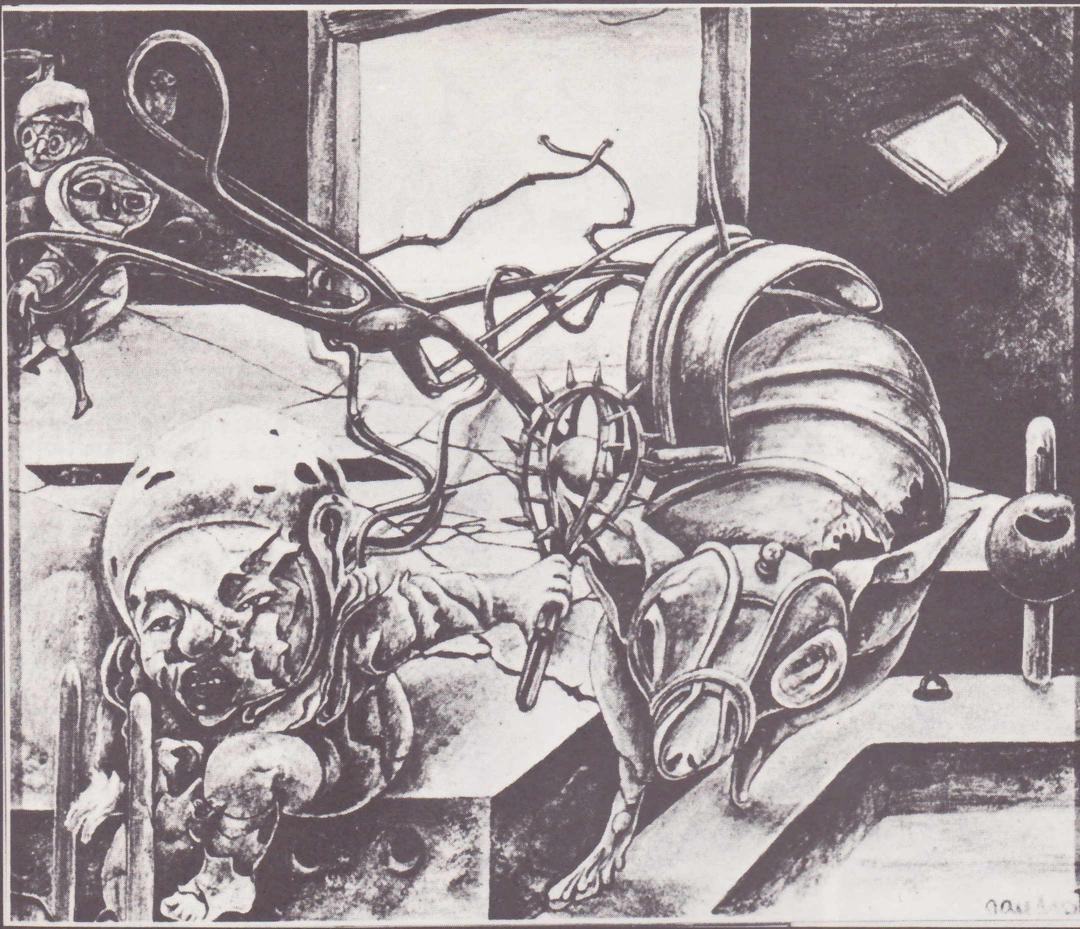


UK—誕生までの軌跡



King Crimson
'72
Robert Fripp
John Wetton
Bill Bruford
David Cross
Jamie Muir
'73
Robert Fripp
John Wetton
Bill Bruford
David Cross
'74
Robert Fripp
John Wetton
Bill Bruford
David Cross
Ian Mcdonald
Mel Collins
Robin Miller
Mark Charig
U.S.A.
Pete Brown's Buttered Ornaments
Music Improvisation Company
Assagai
Police
Fripp & Eno
Eno solo
Clear Light
Ascend
Curved Air
'73
Azteca
Eddie Henderson
'77
David Bowie
Daryl Hall
Hall & Oates
'78
Blondie
Peter Gabriel
solo
'79
Robert Fripp
Brian Eno
Peter Gabriel
Peter Hammill
Daryl Hall
Phil Collins
Barry Andrews
Tony Levin
Jerry Marotta
Sid McGinness
Terre Roche
Narada Michael Walden
'69
Iggin bottom
Tempest
Nucleus
Soft Machine
Gong
Daevid Allen
Steve Hillage
'76
Pierre Moerlen
Didier Malherbe
Mireille Bauer
Mino Cinelou
Alan Holdsworth
New Tony Williams Life Time
Jean Luc Ponty
'68
Uriel
'69
Egg
Soft Machine
Matching Mole
'73
Hatfield & The North
'76
National Health
'70
Mogul Thrash
'71
Family
'68-'72
Yes
'74
Gong
'75
Roy Harper Band
Pavlov's Dog
Absolute Elsewhere
Genesis
'76
National Health
'76
Rick Wakeman
John Wetton
Bill Bruford
'77 solo
Bill Bruford
Allan Holdsworth
Dave Stewart
Jeff Berlin
Annette Peacock
Kenny Wheeler
Bruford
'79
BRUFORD
Bill Bruford
Allan Holdsworth
Dave Stewart
Jeff Berlin
Roxy Music
'74
Bryan Ferry
Andy Mackay
Phil Manzanera
Paul Thompson
Eddie Jobson
John Wetton
Uriah Heep
U.K.
'78
UK
John Wetton
Eddie Jobson
Bill Bruford
Allan Holdsworth
'79
UK
John Wetton
Eddie Jobson
Terry Bozzio
Frank Zappa & Mothers


Heldon Richard Pinhas



特集
フランス・ロック Part Ⅰ
ーHELDON＆MAGMA篇ー

●MAGMA――帰ってきたコバイア星人たち
●リシャール・ピナス（HELDON）・インタビュー
●図解、MAGMAをめぐるフランス・アンダーグラウンド・ロック
●HELDON、レコード解析

帰ってきたコバイア星人たち MAGMA







Francis Moze　　*Klaus Blasquiz*

Janik Top



僕が思い出す限りでは、マグマが最初にイギリスに現われたのは、1973年のレディング・フェスのことだったと思う。この時一緒に、沢山のユーロピアン・バンドが出演した。そのうちあるバンドは、一日中会場を湧かせ、まるでフェイセスやスティタス・クォの様な熱狂をうけたのだが、マグマはこの点、完全に失敗した。集まった聴衆のほとんどは、マグマの演奏を気に入らなかったのである。ロック・プレスもほとんどが無関心か、またあるものはほとんど嘲笑的でさえあった。とにかく、決していいスタートとはいえなかったのだ。

マグマはその年の暮れ、ロンドンに帰って〝Makanik Destruktiv Kommandoh〟－彼らの最初にイギリスでリリースされたアルバムである－を作った。そのうち、突然すべてがかわったのである。メロディ・メーカーのスティーブ・レイクがマーキーで彼らをみて、すっかり気に入ってしまい彼らの記事を書きまくった。突然、1974年はじめの、マグマ最初のブリティシュ・ツアーに、スティーブはマグマのいくところどこにもついて回った。彼の熱狂ぶりは終わる様子もなく、必然的にほかのロック・プレスもマグマに注目するようになったのだ。スティーブ自身の言葉をかりれば、こんな調子だ。〝そりゃ、ニューヨーク・ドールズとかその辺の音はすごく面白いよ、でも、マグマこそ重要だ！〟彼は正しかった！しかしながら、マグマは今イギリスで、あのレディング・フェス以前の時と同じ位、注目されていない。人々の忘却の、なんとはやいことか。

しかし、うれしいことにマグマはなお活動している。そして、最近２枚のニュー・アルバムが、ロンドンの店頭にあらわれた。〝Inedits〟と〝Udu Wudu〟である。このうち、〝Inedits〟（新案物の意）はまったくマグマ・マニアのためのアルバムだ。これは、1970年から1976年迄の、マグマのライブ・レコーディングをよせ集めたもので、そのサウンドはまるでブートレッグに近い。なお悪いことに、なんとも無残な編集がしてあって、多くの曲は途中からフェード・アウトしてしまうのである。せめて、ダブル・アルバムにするべきだったのに、という印象をのこしながら。それが特にサキソフォンのJeff Sefferとピアノのfrancois Cahenをフィーチャーしたトラックだったりすると、じれったさはなおさらだ。この２人をフィーチャーしたライン・アップは、マグマのセカンド・アルバム〝1001 Centigrade〟以降すぐに消滅してしまったのだから、当然イギリスでは見られなかったものだ。SefferとCahenは、その音楽ポリシーについて、リーダーのクリスチャン・ヴァンダーと仲たがいしてしまい、脱退して彼らのバンドを作った。即ちZAOである。そのファースト・アルバム〝７＝ZL×２〟は1001 Centigrade〟が残したものを、そのままひきついでいる。

目立つことは、ただクリスチャン・ヴァンダーだけが、〝I nedits〟の６つのトラック全部に参加していることだ。このリーダー一

はミュージシャンたちに、彼への絶対の献身を要求し、それがダメだとクビにしてしまうらしい。結果としてマグマは、1969年の結成以来実に40回以上ものメンバー・チェンジをおこなっている。

ヴァンダーの最終的な目標は僕にははっきりわからない。おそらく、彼自身の口から語られることはないだろうけれど。しかしながら、彼は精神的・音楽的に主となる影響を、後期のジョン・コルトレーンからうけたといっている。音楽を通して、より崇高な真実を仮借なく求めてやまなかったあの男だ。この偉大なサキソフォニストに対するクリスチャンの傾倒は、20数年にわたって続いている。彼はコルトレーンへの敬意を、マグマの4 th Albumの〝Coltrane Sundia〟と名付けられた曲で表わしているのだ。

全体として、マグマの音楽からは、優しさ、おだやかさという印象はうけないようだ。彼らのサウンドには、ワグナーやバルトーク、シュトック・ハウゼン、最も特筆すべきは、カール・オルフなどの影響が見出され、サウンドに闘争的、攻撃的な面を支えている。この印象は、その尋常ならぬ歌詞によって一層強められる。地球上のどこの言葉でもない、惑星コバイアの言語なのだから！

ヴァンダーは、彼の母国語であるフランス語をあまりしょっ中しゃべらない。コバイア語は、16才の時に彼に明確なヴィジョンとなって現われたそうである。コバイア語は、のどの奥から出てくるような荒削りの言葉で、ポーランド語やロシア語にかなり似たかんじだが、完全にマグマの音楽とマッチしている。

マグマが作られた時、ヴァンダーはコバイア語をベースにして、コバイア神話をつくった。それは、未来の地球人たちのグループが、より退廃していない星を求め、自らの星地球をあとにする、というものだ。彼らの目標は、コバイア星へ向けられ、残された地球と、移住者たちの関係について、かなり錯そうしたストーリーがくり広げられていく。それは、高度にモラリスチックな物語で、ヴァンダーは心に描いた話全体を9枚のアルバムに表現している。

コバイア神話の中で、一番新しいエピソードは1976年に録音されたアルバム〝Udu Wude〟から知ることができる。このアルバムでのライン・アップは前のアルバム〟〝Magma Live〟からラジカルに変化した。残念なのは、バイオリニスト Didier Lock wood ーライブで大変すばらしいプレイを披ろうしてくれたーが抜けたことだ。（彼はクリアライトのアルバム〝Les Cortes du singe fou〟に参加している）しかし、すばらしいことに、このアルバムでは、あの伝説的なJanik Topが復帰しているのだ。

すばらしいベース・プレイヤーのJanikは、1973年から75年にかけて、グループの不可欠のメンバーだった。彼の脱退について、適確な説明がなされたことは一度もない。ある音楽誌には、彼の脱退前に、クリスチャン・ヴァンダーが彼に呪いをかけたなどと示唆する奇妙な記事がでていた。マグマは、その性格上、こういった話が誇張されすぎるきらいがあるので、多くは用心してきく必要があろう。



Christian Vander

どんなことがあったにせよ、Janikが以前と同じようなひらめきでもって、〝Udu Wudu〟の半分以上を作曲していることからして、呪い云々という話は杞憂だったようである。疑いの余地なく、北アフリカ人であるこの男の作る曲は、血も凍るようなものだ。それはまるで魔法のように、ボッシュの絵にあるような光景や、ヘビの穴のような幻影を、僕らの目の前に呼びおこす。彼の作曲の特に秀逸な例は、マグマの唯一のシングル〝Mekanik Machine〟だ。これこそ、無比の最高けっ作であり、心臓の弱い人はきかない方がよろしい。一体この男、夜どんな夢を見ているのだと思うと、おそろしくなってしまうのだ。又、このニュー・アルバムはボーカリストKlans Blasquiz作のはじめてのレコーディングをフィーチャーしている。彼はMagmaの初期からのメンバーだ。彼はバスク人で、現在のコンテンポラリー・ミュージック・シーンで、ほとんど比類のない声域を誇っている。彼のコンポーザーとしての才能も、期待されたものだったが、今ここではじめてそれが明らかにされたわけだ。



Benit Widemann



Bernard Paganotti

〝Udu Wudu〟はクリスチャンの思想にあるラジカルな変化がおこったことを示唆している。Magmaの前の6枚のアルバムでは、彼ひとりがその音楽的方向性にタイトな統制を加えていた。でもこのアルバムで彼は責任をわかつことを望んでいるようだ。

しかし重要なのは、彼らの音楽があいかわらずエナジーに満ちていることだ。幸いながら、マグマは間もなくイギリスにツアーを行う。きっとMagmaは僕達にそれを確めさせてくれることだろう。

Richard Pinhas Interview

音楽は私にとって極端に激しい
バイオレンスであって欲しい。





Gauthier Pinhas Auger (Heldon)

やはり、一回限りの実在はより印象的で架空なものであろう。しかしピナスのこの一回限りの実在は2ヶ月前のスタジオの中のことに象徴されている。このスタジオにはたくさんのミュージシャンが出入りし、ここで彼は4つの短い作品を制作した。すべての雑音とは別の息苦しげな叫びにも似た新しい音楽の滑らかなる変化は、まるで暁の咆哮のスタッカートの効いた胸を絞めつけられるような不安を導きだす。このようにピナスは自分に対して、きびしい要求をする男だ。いくらか病的なものと、狂人の間歇的な覚醒を一緒にする実在を理解しているらしい。エルドンにおける音楽哲学（彼らの作品が正確に語る、人間の機械への政略的セオリー）は、今ではもぎとられ、より前進することを可能にし、決して同じような発表は繰り返さないだろう。

人々は、エルドンが音楽を通して表現したものに好感を持ち始めている。根本的に彼らのすべての活動は、（あっけにとられた）ドイツ人とは異なっている。もし、まさしくピナスが何ごとにも到達できないバイオレンスを主張するのなら、もし、キング・クリムゾンの提示に再演の刻印を現わすことができるのなら、そしてもし、その足取りにすべての才能を使い果すことができたのなら、Post・Schizo-Crimson-nienのレコードは、LarksTongues in Aspicの裏返しと同様に組みたてられたであろう。キング・クリムゾンの獲物は、絶対的な暴力より、創造者の夢の爆発の権利だ。あらかじめ存在していた、すべての産物の除去は、そしてその混乱に打ち勝つには、たくさんのオーディアンスが必要である。彼らの音楽（このアルバムは“1984”と呼ばれている）は、まさしくピーター・ハミルのものと時として似ている。

重要なことは、欠如的芸術の内にはなく、商業的な価値と同様に、芸術的な価値を硬直化させている統制力の失われた自然の状態の芸術にある。芸術は多くの生命と個性的な創造を再演しなければならない。

Jean DUBUFFET

X：Xavier BEAL
R：RICHARD PINHAS

X：Heldon 5はすべての点において異質のものを作っている。コンサートに来る人は、まだ、この音楽の常客とはならないんじゃないかな。

R：それは2つの事によって異なる。Heldon 4は、我々のある時代の終わりを示さねばならなかった。一つは、私がとりわけ、すべてソロで演奏していた時期、もう一つはスタジオにこもって家内工業的な音楽として曲を構成していた時期である。Heldon 5において、私は装飾的経過楽句の側面を持つ並外れたタイプの音を見い出したのだ。まさしくこの作品は感覚能力で曲を構成する、よりよい音楽だ。楽符に表わせるような慣用的な形式のもとでの作品とは違うんだ。我々の音楽は極度に意味のないものを、もたらしたりはしない。だから、私はスタジアムも満員にすることができると信じてるよ。Heldon 4では曲の制作段階で録音した硬

直したものより、もっと規範に通じ合うようなアルバムを意識した。これは一回は必要なアプローチだと思うよ。

X：しかし、当然のことながら、人々は恐らくHeldon 4のイメージを捨て切れずにいるだろう。レコードを聴いて、当然コンサートに行き、もうわかりきった音を聴きたがるのではないかな。

R：Heldon 4は、バイオレンスのことを目標に制作したが、私としては、その目標は達成できなかったと思う。私自身、認めたくはないが、私はまだ十分に創造性が円熟していなかったので、多くの決定すべき方策は50%私の失敗だ。同様に、物質的、録音状況の失敗は50%はあるんじゃないかな。今まで私は録音し、それを反映させるための時間を十分にもてた。その時も私は、自分が望む、決して現存しないバイオレンスの音楽の下書きをした。注意しながらやったんだが、その時、明らかに現状からの格差はあったんだ。人々がレコードを聴いたとき、まさしく、コンサートに来たよりも激しいものを、と思って制作したんだ。それで、発売されたレコードはPost-Kripto-Schizo-Crimsonnienであり〝特殊一慣性の空想″と呼んでいる。それはキング・クリムゾンの海賊盤と同じタイトルだけど、私はすべての意に反してクリムゾンをとても気に入っているからだ。又、クリムゾンに対しても偉大な恩がある。礼拝的、道義的なものだ。しかし、そんなことは遺産であり、今の私には関係ないことだがね。

X：Heldon 2はロバート・フリップに捧げたのか？

R：礼義としての意味もあるけれども、クリムゾンに捧げたよ。1stアルバムは私にとっての神を表現したかったね。

X：個々の作品は最終的なものなのでは？

R：Heldon 4を例にとってあげれば、そのアルバムはこれからの踏み板にすぎないシンセサイザーの音の反復の作品だ。メロトロン、ギター、ベースの他に録音しようとした音の代わりに、主題の反復を多く使用した。この音は、より良く念入りに作られており、あらかじめ前もって製作されてあったのだがね。完成美として私はより完壁に制作したかった。今でも同じように演奏できるよ。

X：たしかに、それはとても心地良く、静かで、むしろ映像に伴って、演奏する音だったのでは？

R：私は砂丘の中にある雰囲気を考えて制作した。スタジオで多くは作られ、多くのインプロヴィゼーションを盛り込んだのさ。私はNorman Spinradと一緒にレコードを制作する計画を持っている。彼はＳＦ作家で、とても美しい詞を作るんだ。

X：Norman Spinrad自身、詩を作って歌うのか？

R：いや、完全には歌わないだろう。私が気に入っている声の質があるからね。ジム・モリソン、ロバート・ワイアット、ジョン・ウェットンなんかいいね。まあ、私の考えて似合わしい人になると思うけれども。声を挿入した作品には曲を構成する段階で限界ができてしまうんだ。

X：そのあなたの計画は巧みな筋の運び方のＳ・Ｆなのかね？

R：まあ、そう言えるかもね。でも数ヶ月で構成されるロックのレコードみたいになるかもしれない。でも言葉の展望の見地から見て、とてもＳ・Ｆ的だよ。

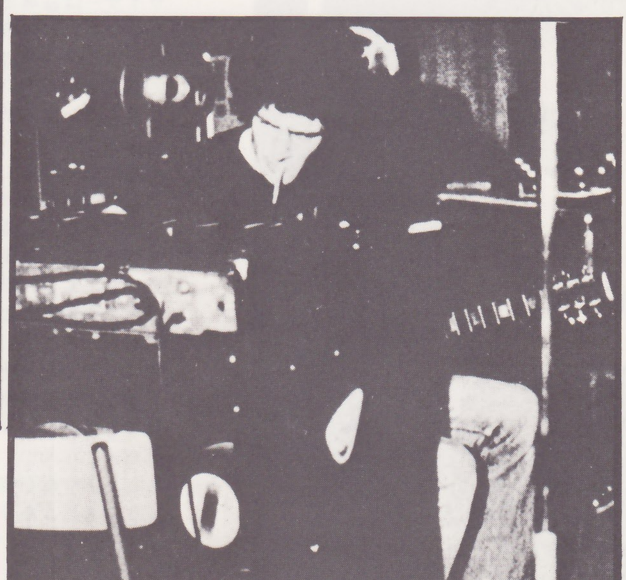
X：あなたは、イデオロギーにまで発展するようなものを見い出すのが好きらしいが、イデオロギーの支配の中の作品は、余りにも重い感じがする。

R：私は完全に卓越した計画的な効果の録音における完成美とは反対のものを見い出した。私はこのことをすべての一行程として考えることにしている。Spinradは同一化の完全な形態をあらわし、見い出したいらしい。彼が望んだ同一化とはファシズムへの過程に関係しているらしい。私の方としては、いかにファシズムが作用するかなんてことは、虚飾にすぎないと思うんだけど。

X：Spinradの描く世界は壮烈な幻想的なものなのか？

R：たくさんある小説の中では興味が







あるものだ。叙述の部分は彼の得意とするものだ。

X：1984（Heldon 5のファーストタイトル）はどうしてつけたのか？

R：1984年とは現在を表わしている。いわば今日の神話だ。一つの観念を表現するために、それと共通の性質を持つ他の観念を表わす語を用いた。私は都会に住む多くの人々における巨大な恐怖を表わしたかった。人々はエレクトロニクスの人形と同様に、極めて、正確に納税額を計算され、コンクリートづくめのパリで、今日も秒単位で作動しなければならない。私は24時間中24時間、録音したものを合成し、スタジオで2、3回生活を送った。あなたの行動領域の果て、もしくは幻影と透視は、あなたに起った3時間の観念上の世界なのだ。

X：それは息詰まるように、閉ざされた戸口を見つけるようなものか？

R：それは偶然に起ったことではない。私は音楽に、ただ単に目を注いだことはないよ。1984年の一年はとても大きな抽象作用の段階だ。それは今日、ただ今日あり得ることなんだ。人々は十年過ぎて、並はずれて表現されたより大きな抽象作用の音楽があることに気づくだろう。

X：あなたは何ごとに対しても異なった姿勢を取っている。

R：私は多くの音楽家の主題に影響をうける。曲を作り適応させる人々は音楽家の側面を持っている。だから私は誰にでも影響は受けているのだ。行動においての専門化段階はもはや必要としない。シンセサイザーは基準となる音を持つことはない。むしろ精神の楽器だ。

X：これは私の見解だけれども、独創的観念を持たないタイプは、このことを見い出す試みをしてるのではないか？

R：実際にあり得ることだ。もし、あなたが異った事態を理解することに達したなら、基本的なシンセサイザーの音の演奏を理解しているだろう。もし、現存する状態の繰り返しの観念にとりつかれているのなら、もはや、それは繰り返されているのだ。そんなことが現存するなんて気づかないのだろう。何事も致密な日々の生活のあらわれだよ。

X：もし、あなたが作った音楽が今日になすものがあり、その音を見い出したら？

R：実際、そんなのないんだからしかたないんじゃない。クラウス・シュルツ、タンジェリン・ドリームなんか、そんな感じがしないでもないけど。

X：もし、誰かがあなたが作ったような音を作っていたら、あなたはどう思う。

R：私が以前作ったものを繰り返すのなら、それはもっとも良い商業的使命だ。クソッタレメ！私のまねをしている奴らには別に意見を求めたくはないし、ショックなどまったくないよ。人々は絶えずショーの準備にとりかかっている。だから、とにかく演奏する。その音楽の主題は実質的には音を出すことによって得られる結果であり、比較的に自由意志に基づかれている。私は、私にとって役立つ有意義な主題を設定している。音楽は私にとって極端に激しいバイオレンスであって欲しい。が、現在は完全な静止の時代だ。それは恐らく愛情のような殆んど不可能な自己満足だと思う。

X：あなたの言う特殊一貫性とは？

R：それは根拠のないものではないが無価値なものだ。一回限りのとても重要な空想だが、それ故、空想でないかどうかは、もはや現実的なものではない。恒久不変なものを壊すのには極めて重要なことだがね。私の行動は可能なかぎりの私なりの承認を必要とする。私が望む結果に私が迫ったとき、始めてその行動は承認されるだろう。

X：もし、それをコンサートかスタジオで録音したならいいのではないかな？

R：まあ、それは別として、いずれにしても仮定した価値に意見を求めるなんてバカげたことだよ。特にあなたは定義を与えることを可能にしながら、その音楽を客観化してしまっている。それは、とても危険なことなんだ。Heldon 1について、人々はよく言っただろ、「ほら！新しいシンセサイザーの使用がある」と。そんなことを私は求めてなんかいない。みごとな広がりを創造するには、官能を激化した状態が必要なんだ。

X：Heldon 5にあなたは客観的なものを見い出したか？批評家は全く客観的なレコードと言ってるよ。

R：私がなす音楽の視覚は、人々の精神に真実を伝えられる。

X：それは探し示す卓越した態度でないのか。

R：いや、私は何も示してない。私は言葉なしで話し、納得させることができる。概要に逆うことなくね。

X：私が思うに、これは避けられないことでは……。

R：ええ、でもこれは例外的なことだ。君は音楽は言葉、あるいはセンチメンタルな表現を通して完全に媒介であるという関係を事実としてとらえているが、私の音楽は、すべて〝マシーン〟の反復現象が気に入っているのであって他の何ものでもないよ。

X：人々を冷酷さへと促すことのできる楽器のことですか？

R：でも、もし君が私のギターによる方法が、まったく人間的でないものを統轄しているということを理解したならば、君の言う楽器の表現形態が大した意味をもたないという考えから脱けだすことができ、媒介の冷たさが増すということもないだろうね。

X：私はEnoがよりメロディアスなアプローチをとっていた頃のFrippとの音楽に強い印象がある……。

R：Enoは、より皮肉な音楽を通して、1つの深遠なる仕事を行っていると思うよ。

X：でも私にとって彼の音楽は、真剣さの点で取るに足らない手段であるように見える……人々はあなたに〝マグマの中のEno〟のような音楽を勧めるだろう。

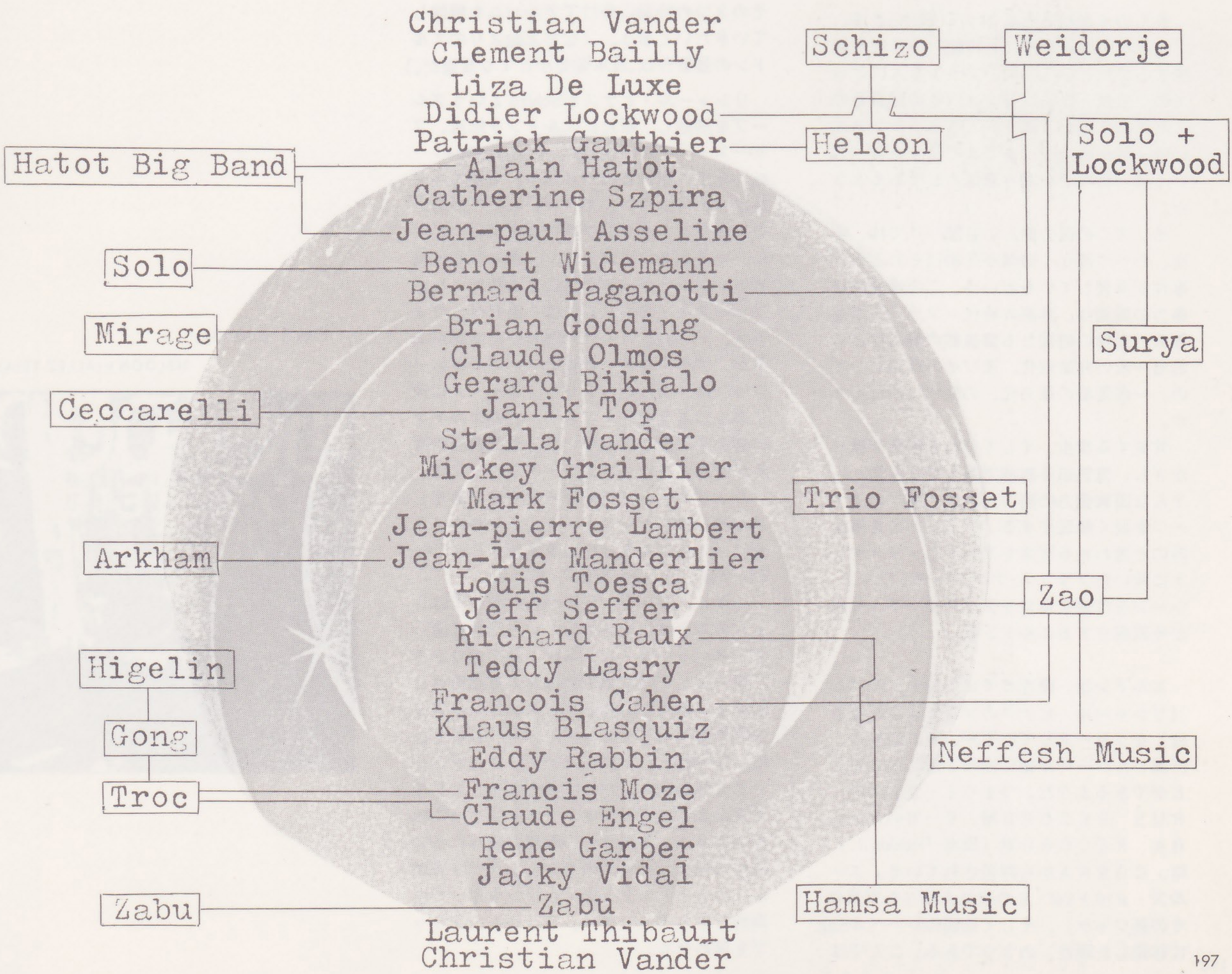
R：マグマの音楽は、君が3ヶ月で出来るような代物ではない。それに君が、彼らが保ち続けているいくつかのプロジェクトを理解したとしても、そのことが有能かどうかに疑いの余地がある。マグマの音楽には、私にはない巧妙さ、また、そこに達しようとする1つの象徴的な側面があるんだ。

X：人々がどこへの帰着を望むかを理解することがすばらしいと発見することですか？

R：私は、たいへん信じてはいるが、それと同時に、どこへ進むか、そしてすべての質問をもとの状態に戻すために壮大な時代の没落を、理解する必要があるようだね。

訳　片山　紀之

MAGMAをめぐる
フランス・アンダーグラウンド・ロック





HISTORY OF HELDON

多くのイギリス人にとって「欧州」とは、〝ドーバー海峡を隔てた大陸〟のことを意味するのだという。又、フランス人にとっての「欧州」は、フランス―その国自身のことを指すのだと聞く。どうもフランス人には、欧州の中心はあくまでフランス、という強い自負心が潜在意識としてあるようだ。

そしてこの国の美しい首都パリでは、現在、のべつ幕なく爆弾が仕掛けられるテロ事件が多発しているという。この慢性的な暴力の風潮は、激怒の時代―フランス5月革命―当時の確固たる価値観の喪失による若者一般の非政治化、及びその反動としての、一部若者の暴力化、の顕れなのだろうか。

背走する学生、そしてそれを警棒を振りかざし、鬼気迫る形相で追う機動隊員――。そんな国家権力の持つ巨大な〝壁〟のイメージを鋭く喚起させる、フランス5月革命時のと思われる写真をアルバム・ジャケットに用いたフランス・アンダーグラウンド・シーンを代表するロック・グループ、それが今回紹介するエルドンだ。

エルドンは、現在までに7枚のアルバム（リシャール・ピナスのソロを含めれば9枚）をリリースしているが、その活動は、所属したレーベル毎にほぼ3期に分けることができるようだ。つまりⅠ～ⅣまでのＵＲＵＳ　ＲＥＣＯＲＤ期、Ⅴ～ⅥのＣＯＢＲＡ　ＲＥＣＯＲＤ期（現在『Heldon Ⅰ』は、ＣＯＢＲＡから再発されている。フールズ・メイトVol. 8の表紙を飾った写真はその裏ジャケ）、そして話題のレーベルEggに移籍した現在、の3つである。ここではその3つの時期に分けてアルバムを解説していきたいと思う。（なお、Eggよりのエルドンの最新作は、日本発売がとても有望だ。）

リシャール・ピナスがSchizoというグループを解散し、新たにエルドンを結成、ファースト・アルバム『Electronique Guerilla』を世に送ったのが1974年。当初エルドンは、メロトロン、ギター、A.R.P.担当のジョルジュ・グランブラーとギター、A.R.P.、ＶＣＳ３、メロトロン、テープを担当するリシャール・ピナスの２人組だった。ファースト・アルバムには１曲だけ、ヴォイス、ドラム、ベースが加わった演奏があるが、グランブラーとピナスのコラボレーションは、あたかもフリップ＆イーノに通じるかのようなティストを、初期エルドンの音の中に醸し出していた。事実前出の写真が使用されたセカンド・アルバムには、フリップ＆イーノに捧げられた曲があるし、アルバムのファースト・チューンのタイトルは（これはあまりにも有名だが）、″In The Wake of King Fripp″という。

しかし、サード・アルバムにおいては、２人のコラボレーションという形式は薄らぎ、リシャール・ピナスが、自己のコンポーザーとしての攻撃的側面をより抽出化し始める。殆んどの曲がピナスのペンに依り、当然の事ながらセカンド・アルバムに２曲ほどみられた、アコースティック・ギターによる叙情的ナンバーは姿を消す。そして、現在のようにパーマネント・メンバーではないにせよ、ドラマーの起用にみられる以前にも増したピナスのアグレッシヴな姿勢は、かってキング・クリムゾンを率いた崇高的なまでのリーダー、ロバート・フリップを思わせる。

URUS 000002／
HELDON Ⅱ(ALLEZ-TEIA)



続く『Heldon Ⅳ』において、いよいよ彼らは、どろどろのカオスの中から、〈暴力〉そのものといえるような能動的エナジーを放ち始める。「『Heldon Ⅳ』は、バイオレンスのことを目標に制作した。」と語るピナスは、しかしまた「このアルバムは、これからの踏み板にすぎないシンセサイザー音の反復の作品だ。」ともいっている。確かにシーケンサーによる音の反復を基調とした過渡的作品かもしれないが、シーケンサーの反復音とそれに絡むドラム、パーカッションの織り成す不協和音の空間が、新たなるエルドンの飛翔を予知させた作品として、重要視されるべき必然性を有しているといえる。

ＵＲＵＳから離れ、ＣＯＢＲＡ　ＲＥＣＯＲＤ時代に発表した２枚のアルバムによってエルドンは、ひとつの頂点を極めたといって良いだろう。これには新しいドラマー、〝シンセサイザーと共演できる唯一のドラマー〟いわれたフランソワ・オジェの参加が、少なからず影響しているようだ。ドラマーとして優れたテクニックを持つだけでなく、コンポーザーとしてもピナスに勝るとも劣らぬ力量を発揮するオジェは、現在のエルドンにとって欠くべからざる存在といえそうだ。

『Heldon Ｖ』は、このオジェとピナスが中心となって演奏を展開している（１曲だけ、マグマのヤニック・トップがベーシストとして参加）。孤高なまでにクリムゾナイドされたピナスの硬質なギターとオジェのドラム＆パーカッションは、ジャケットに描かれた巨大な鋼鉄の溶鉱炉の作動ノイズさながらの壮美な音空間を構築している。

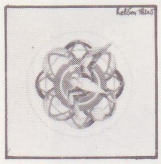
また、この５枚目とほぼ並行して、ピナスは初のソロ・アルバム『Chronolyse』を録音している。この「全てのS.F.フリーク」に捧げられたアルバムは、Ｂ面を埋め尽くす〝Paul Atreides〟が圧巻だ。ピナスのGibson Lespaul 1954はもちろんのこと、彼の奏でる幽玄なメロトロン、エレクトロニクスが今まで以上に印象的なこのナンバーは、リシャール・ピナスという謎に包まれたミュージシャンの、内的世界を窺い知ることのできる数少ない曲として興味深い。ピナスをサポートするオジェとベースのディディエ・バタールルドのプレイも地味ながら光っている。

1977年の２月から６月にかけて録音された『Heldon Ⅵ』は、基本的には前作の延長線上にあるが、このアルバムが現在のところエルドンの最高傑作といえるのではないだろうか。メンバーは、エレクトロニクスとギターを担当するリシャール・ピナス。ドラム、パーカッション、シンセサイザーを担当するフランソワ・オジェ。そしてエルドンには、サード・アルバムから参加した、ミニ・ムーグ、ムーグ・ベース担当のパトリック・グァティール。このまさに〝黄金のトリオ〟というべき３人を中心とした『Heldon Ⅵ・Interface』は、ユーロ・アヴァンギャルド・ロックの持つ比類無きバイオレンスを、最高の形で露呈した名作といえよう。特にSide Ｂ一面を費やした19分に及ぶ大作〝Interface〟では、オジェの冷徹なシンセサイザー・パーカッションとピナスのギター、グァティールのムーグ・ベースが渾然一体となって、性的オルガスム状態とでもいうべき音の飽和空間を形どっている。

ところで話は前後するが、ピナスは、『Heldon Ⅵ』の録音直前、自己のセカンド・ソロ・アルバム『Rhizosphere』を製作している。メンバーは、ピナスとオジェの２人。ここでは、エルドンのアルバムに見られた狂的バイオレンスは影を潜め、ピナスは、エレクトロニクスの反復音を基調においたプレイを行なっている。アルバムの中の１曲、〝Claire P.〟を、ピナスは、現代音楽の作曲家フィリップ・グラスに捧げている。



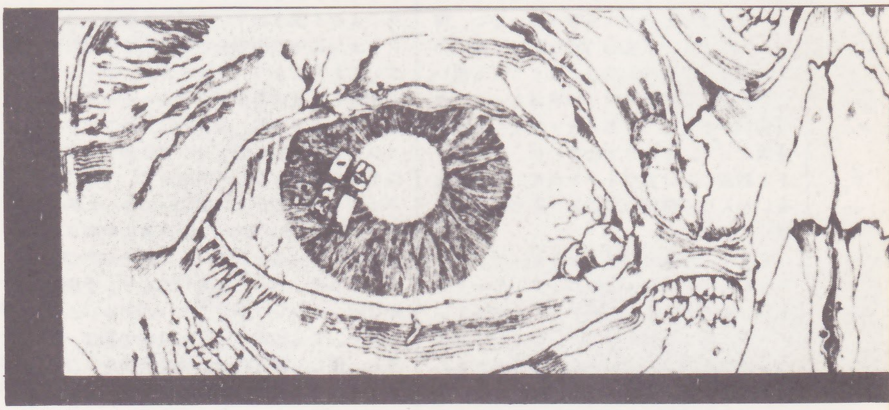
URUS 000001／
HELDON(GUERILLA ELECTRONIQUE)



URUS 000006／7／
HELDONⅢ(IT'S ALWAYS ROCK'N ROLL)



URUS 000011／
HELDONⅣ(AGNETA NILSSON)



他に類を見ない重く、硬質なエナジーを噴出するエルドンを率いるリシャール・ピナスは、本当に素晴しいミュージシャンだ。Egg に移籍し、エルドン通算７枚目に当たる『Stand By』によって、ピナスは、新たなる領域にその身を投じたようだ。それは、ヴォイスを用いたタイトル曲に明らかだ。ここでは、今までのような実験音楽的面持ちは完全に拭い去られ、とても斬新な曲作りがなされている。他の２曲（１曲は、８つのパートに分れた〝Bolero〟組曲）も、ピナスの志向する音によるバイオレンスを今までより以上に具象化した、起伏に富んだ展開を示している。そして随所に、彼の攻撃的なギター・ソロを聴くことができる。

なお、ピナスとオジェは、同じEggに所属しているオズの『Adonia』にも参加しているが、こちらの方は、前号のEgg・レーベルの特集記事を参照されたい。

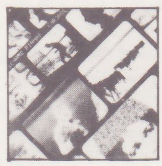
最後に、ピナスが関係したその他の代表的レコードを挙げておこう。Schizoの「Schizo And The Little Girl/Paraphrenia Praecox」、「Le Voyager/Torcol」という２枚のシングル盤。レーベルはDisjuncta。同じレーベルより、エルドンの「Perspective 1/Perspective 2」、「Baader Meinhoff Blues/O.D.B.」というこれもシングル。Flunceというグループの同名アルバム(POLE 0008)。その他Mettal Urbain というフランスのパンク・バンドのプロデュースも行なっているという。



COB 37002／
UN REVE SANS CONSEQUENCE SPECIALE



COB 37013／
HELDONⅥ(INTERFACE)



COB 37015／ CHRONOLYSE



COB 37005／
RHIZOSPHERE



EGG 900578／
STAND BY

構成　三津間　功

今は昔　懐しのブリテイッシュ・ロック傑作選



CHOPYN／Grand Slam
Jet：LP08

　ショパン…グランド・スラム…、なんて言うと、プログレ・ファンが、「おお、クラシカル・ロック!?」と雄叫びをあげそうだが、残念ながらこのグループはクラシカル・ロックなどひとつもやっていない。何故こんなグループ名をつけたのかと疑いたくなるが、まあそんなことはどうでも良い。このショパンにはアン・オデルちゃん（前号参照）が入っているのだ！ヴォーカルを全曲とっているわけではないが、キーボードと数曲におけるヴォーカルで、その才能をいかんなく発揮している（もちろん曲も書いている。）。

　もう１人注目すべき人はギターのレイ・ラッセルで、この人は元ロック・ワークショップの人である。このアン・オデルとレイ・ラッセル２人を中心に、ショパンのサウンドは実にヴァラエティーに富んだものとなっている。まあ大ざっぱに言えば、クラシカル・ロック以外のことは大体やっているのだ…。　　（山口尚武）



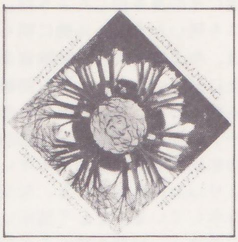
RIFF RAFF／Original Man
RCA・Victor LPL15023

　このボクが女性ヴォーカルを含まないグループを書くのだから､相当なものである…。ブリティッシュ・ロック・ファンなら誰でも一目置いているグループ“Riff Raff”は、マーク＝アーモンドにいたトミー・アイアーと、ロジャー・サットンを中心に作られたグループである。このアルバムはセカンドで、惜しくもこれがラスト・アルバムとなった。サウンドは、ホーンを加えたジャージーなもので、１stのアコースティカルな渋さとはまた一味違った渋さを感じさせる。大体の人は（ボクも含めて）この２hdの方が好きと言うが、どういうわけか佐藤正徳氏は１stの方が良いと言う。まあどちらもそれなりに「良い」アルバムなので、是非一度聴いて頂きたい。両アルバムの根底に流れるものは、まさにブリティッシュ・フィーリングそのものなのである。アシュラ狂いの山本くんも聴いてごらんなさい……。　　（山口尚武）



RUPERT HINE,DAVID MCKIEVER
／Pick Up A Bone Purple TPSA7502

　ルパートハインの名前を御存知でしょうか？もし、あなたがブリティッシュロックをこよなく愛されているのなら数多いコレクションの中に彼の名を見い出すのはたやすいことでしょう。クオンタム・ジャンプを解散した後は再びプロデューサー業に専念しているようで、最近では、カフェジャック、アンソニー・フィリップスのアルバムにその名を見ることが出来ます。（特にカフェジャックの２ndは素晴らしかったのです。）“Pick Up a Bone”は71年に発表された彼のファーストアルバム（詩人のデヴィッドマッキーバーと連名）であり、才能豊かなシンガーソングライターのアルバムなのです。ここに収められた11の小品は、どれも、優しく語りかける彼の歌声を、ひときわきわだたせる、素敵な曲ばかりです。彼が心の通じ合った多くの友人たちと共に作り上げたこのアルバムは、ほんとうの歌を求める多くの人たちに聞いてもらいたい、決して色あせることのない重厚な絵画のような名盤です。　　（佐藤正徳）



BYZANTIUM／Season Changing
A&M AMLH68163

　幻想の惑星に根を張る樹木の春･夏･秋･冬の変化をメルヘンチックに描いたきれいなジャケット（それも恐怖の４面変形ジャケット）で華々しくブリティッシュロックシーンに登場したビザンチウムは、彼らの音楽に対するみずみずしい感性をすべてこのアルバムに凝縮させている。72年、彼らはこのアルバムによって英国ロック界において一躍注目をあび、そして輝かしい前途が期待された。しかし当時の英国の多くのバンドがそうであるように、彼らもまた商業性の問題により解散をよぎなくされていく。(セカンドアルバム録音後解散)

　このアルバムは、そんな当時のロックシーンの情勢を感じさせないすばらしい作りである。特に、親しみやすいＡ面の小品のあとに続く、Ｂ面すべてを使った３部作から成る組曲は圧巻である。そこにはメロデアスなアコースティクギターが随所に取り入れられ女性的な響きを醸し出しており、流れるように演奏していく様はまさにジャケットの風景をかいま見るかのようである。そしてクライマックスを向え、走り出す粘っこいエレキギターの高揚によりブリティッシュロックのパワーは甦えるのである。　　（坂地昭一）



LINDA LEWIS／Say No More
Reprise：K－44130

　前号と同じ文章で申し訳ないが、女性ボーカル気違いのボクにとって永遠の恋人であるリンダ・ルイスの記念すべき１stソロ・アルバムが、この「セイ・ノー・モア」である。全曲彼女自身のペンによるこのアルバムには、天才少女（当時）リンダ・ルイスの才能・個性・センスが、まるで星クズのようにキラキラ・バラバラと収まっていて、森氏ではないが「涙無くしては聴けない！」といった感じである…。アレンヂには、レスリー・ダンカンの旦那であるジミー・ホロヴィッツがあたっており、バックにはクリス・スペディング(出たな色男)も参加している。

　このアルバムの後に、歴史的名盤“Lark”を発表するのだが、リンダ・ルイスの歌は、まさにLark（ひばり）のさえずりである（どこかのひばりさんとはだいぶ違うが…)。

　アリスタに移ってからの彼女は、だいぶポップに、さらにソウルっぽくなってしまったが、それもまた良いではないか……！　　（山口尚武）



SAMURAI
Greenwich GSLP1003

「色みえでうつろふものは世の中の、人の心の花にぞありける」(小野小町)。人間の心－それも男女関係における男の心のは

かなさ、うつろいやすさを巧みに表現した小町。彼女は「なげき」の歌人と言われる。そんな彼女の和歌を現代風ジャケットに盛りこんだこのアルバムは、ブリティッシュロック界に埋没してしまったＬＰなのだ。サムライの前身バンドのウェブに、イギリス空軍バンドなどで10年のキャリアを持ち、エピソードシックスを経てきたリーダー格のデイヴ・ロウスン（後にアランボウンセットを経てグリーンスレイドへ）が加わって作られた最初で最後のアルバム「サムライ」は、そのレベルの高い音楽性、ジャズ風な演奏内容等、なかなかのものであった。そしてその奥底には、日本武士道と相反する男の「なげき」が淵瀬を作りながら流れ、彼らの唱えた「世の中の人の心の花」は、８年後の今でも私たちの心底を揺るがしつづけているのである。（久野克浩）



STUD／September
BASF：20・29054-9

ファミリーとテイストが合体するとどうなるか？……こうなります。

1stは71年に発表されているが、大方は不評だったようで、この2ndそしてライヴである3rdは、独バスフを通じてリリースされたものの、本国では今もって発売の機会をもっていない。この事を逆手にとるかのように、ここでの彼らは何といきいきとしていることか。枯れた味わいのクリーガンのヴォーカル、ウェイダーのヴァイオリンはファミリー在籍時にも増して、男性部門いっちゃん！と叫びたくなるほど素晴らしい。曲そのものの出来よりも演奏全体に漂う〝まろみ〟が魅力となっていて、安息の日々を見つけ出した余裕と共に、和気あいあいとしたセッションの光景が目に浮かんでくる。

Ｂ－２「プレリュード」での落葉のように舞い踊るヴァイオリンの美しい調べを聴きながら、〝文明のたそがれ〟に思いを馳せてみるのも悪くない……。（モ）



CIRKUS／One
RCB－1

ロンドンでたったひとりで働いているボクの友人がこのレコードを送ってきたのは去年の暮だった。今だにいつだれの手によって作られたものかわからないし、本人たちも今頃はもう英吉利の土と化してしまっているのかもしれない。でも彼らの残した遺産は確実に現代に呼吸して、今日もひとり、明日もまたひとり、と聴く者をのけぞらせ続けている。とにかく「音は？」とたずねると、「70年前後」と答えるから、ムーディー・ブルースはもう屍となっていても、クリムゾンの登場がほの見えるようだけれど、メロトロンとストリングスのコンビネーションが実に絶妙の極致で、もう70ミリ超大作、壮大な宇宙空間にすべては吸い込まれてしまいそうだ。しかも彼らは、〝白っぽくなる為の手段〟としての電子楽器といったものを極端に嫌ったようで、ソリッドなギター・サウンドが縦横無尽に駆けめぐるあたり、〝シンフォニック・ロック〟と呼ぶにはあまりにも刺激的な横顔をのぞかせる。

出会いの鮮烈さが驚愕に変わり、それがさらにロックの歴史に還元されるという、存在することさえ信じがたい稀有の名盤!!（モ）



CATAPILLAR
Vertigo 6360 074

皆さんはよく、ブリティッシュの著名なレーベルのリスト等を見て、その廃盤の番号だのタイトル及びアーティスト名に胸をときめかせることがあるだろう。特に幻の名盤と言われる代物を多く含むVertigoにおいては、少なからずその経験があるに違いない。Vertigoの数多い謎のグループの１つとして、このキャタピラがあげられる。アンナ・ミークというオペラを学んだ本格派（？）の女性ヴォーカリストと、ホークウィンド等で知られるロバート・カルヴァート（サックス、フルート担当）が在籍した幻のグループで、２枚のアルバムを残してこの世から消え去っている。このアルバムは1stで、後に発表したChanges を未だ耳にしていないので何んとも言えないが、ホーンをとり入れた何やら神秘的なサウンドが彼等の特徴である。思ったよりアンナのヴォーカルがフィーチュアされていないのが残念だが、謎のグループにふさわしい謎の音…といった印象がもたれる１枚である。（山口尚武）



COMUS／First Utterance
Dawn DNLS3019

うら若き貞女の美徳はコウマスの爪に汚される。叫びは静寂を切りさき、コウマスは夏の日の悪徳に戯れる。

人は皆一様に潜在意識の奥底で狂気の種子を育てている。蓄積された感情の排き物は、秘やかに狂気の花を開かせる。リーダーのロジャーウットンは自らを神経症患者と呼ぶ。ヴァイオリン、セロ、ギター、ボンゴ、フルート等、生楽器を中心に作り上げられるコウマスの、パワフルかつラウドなサウンドは、人間が内在する〝邪悪な欲望〟をあからさまにぶちまけたような、そら恐しいものを感じさせる。かき鳴らされるギター、不気味にきざまれるヴィオラのフレーズ、そしてこれなくしてはコウマスの魔力も半減してしまうロジャーウットンの鬼々迫るヴォーカル。ファースト・アッテランス（アデランスではない。）と題されたこのアルバムのジャケットはその内容と相まって長きにわたり、ブリティッシュ・アンダーグラウンドシーンに異彩を放ちつづけている。（佐藤正徳）

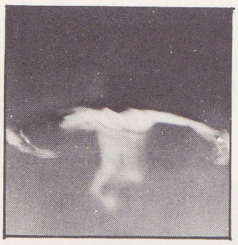


INDIAN SUMMER
Neon NE3

今や押しも押されぬビッグネームとなった王者ブラック・サバス。デヴュー以来変わらぬヘヴィーなギターサウンドを持って、その王道を歩んできたわけだが、1969年11月、彼らと共にオーディションを受けたもう一つのグループがあったことを知っているだろうか。それがこのインディアンサマーなのである。サバスにおくれること約１年、ＮＥＯＮからデヴューを飾った彼らは、既にその姿を消してしまったわけだが、R.ベインのプロデュースのもと貴重かつ素晴らしい１枚のアルバムを残してくれた。サバスが重厚なギターを前面に押し出したのに対し、彼らは、そのサウンド・ポリシーをキイボードに置き、絶妙のアンサンブルによって奥行きと広がりのある音空間を作り上げた。その空間を流れるような早びきギターが舞い躍る時、彼らの演奏はクライマックスに達する。もし、あと２年登場が遅れれば、そのプログレッシブなサウンドはより高い評価を得られたかもしれない。（佐藤正徳）

IMPORTED RECORDS





VANGELIS

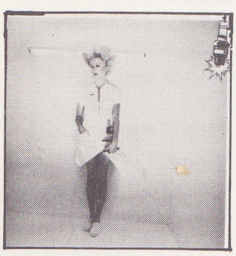
China

F : Polydor Deluxe POLD 5018

「Spiral」あたりから中国の道教の言葉をひくなどして、その中国＝東洋的な指向・方向性を強めていたヴァンゲリスだが、このアルバムではいよいよタイトルも「China」と、彼のイメージする中国（ドラゴン、托鉢僧、桃の花、ヒマラヤ、道教……）を素材にして、奔放なイマジネーションとマルチ・キーボード・プレイヤーとしての力を十分に発揮している。昔の傾向は前作「Lafeta sauvage」から引き続き、ロックというよりも現代クラシック的なアプローチが目立つが、しかし、多彩でファンタスティックで、なおかつある種の暗さ、重さを湛えた彼独特の音世界は健在であり、また、最近見られていた傾向、すなわちメロディーライン、リフの単純・単調化は増々深まっている。その結果として我々、聞き手はより自由な感覚で彼の音を捉えることが可能になり、そしてこれはまた、彼の新しい音楽的コンセプトとも密な関係があるようだ。では彼はなぜその新しいビジョンのテーマとして中国＝東洋を選んだのだろうか。同じように中国をメインテーマにしたものに最近ではアンディ・マッケイの「Resolving Contradictions」があるが、これは実際に中国を訪ずれた彼が目で確かめ肌で感じた事を以前に彼が抱いていた中国というイメージに投影させ、修正を加えたもので、その音は〝ローヤンのトラクター工場〟で働らく人々の力強い生命力をそのまま感じさせるような印象深いものだ。そして、それは主に「中国民衆の革命に向けられた熱情にインスパイアされたもの」ともいう。（しかし彼自身は必ずしもこのアルバムを中国をテーマにしたものとは言っていないようだが……。これはそれこそ矛盾していると思うのだが）

ヴァンゲリスの場合はどうやら、そういう実際的な面での中国＝東洋指向とは異なるようで、「Spiral」などで取り上げた螺旋、ひいては永劫回帰へと連なるような宗教、思想的な面での興味が大きいようだ。だが、そういった我々の推測とは関係なく、生理的にも気持ちのいい音の波が流れてゆく。東洋的な音階をぬって流れるアコースティック・ピアノ、ヴァイオリン、エレクトリック・ピアノの響きは風雅さ典雅ささえ感じさせてくれるもので、静寂で冷え冷えとした空気を回りの空間に漂よわせている。そして何故か、「China」というタイトルとは正反対にその透み切った叙情性を背景に壮大で枯れたヨーロッパの風景が見え隠れしているような気がして仕方なかった。とまれ、私はもうしばらくの間、もっと別の意識が私の内で芽生えるまでこの音世界に身を委ねていよう。夢は未だ遠く……。

（広川　裕）



SPARKS

No.1 In Heaven

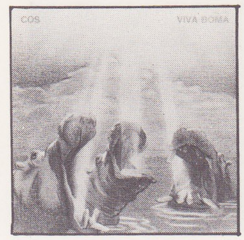
U.S.A. : Elektra 6E－186

何とも場違いな感じがしないでもないが、スパークスの登場。彼らにとって6枚目にあたるこのレコードは、ドイツで制作され、〝機械、プラスチックの中の自分に血を流し込み、生を与える〟テクノ・ポップの世界だ。あのビル・ネルソンに言わせれば、「私の身体は電気仕掛け、君を廃人にもできる人間だ、触れるんじゃない！」といったところでしょう。最近のこれらの革新的なポップ・ミュージックも、元を正せば、ジャーマン・ロック。ニュー・ウェイブがジャーマン・ロックの影響を受けているのは一目瞭然だが、このスパークスがニュー・ウェイブに影響を与えたことに気づく人はほとんどいないかもしれない。一編して軽快なリズム・ダンス・ミュージック。その裏には〝未来〟に対する慎重な考えが潜んでいる。未来楽観主義へのアンチテーゼとなるのがこの〝未来で最高の歌〟なのです。ラッセル・メイルの声から有機物が消え、残ったのは、無機物、無表情。スパークス・ユニットは、デビュー当時からロンとラッセルの2人で完結してしまう。なにしろ、前作INTRODUCINGを発表して、ロサンゼルスに戻っていたメイル兄弟が、2年もの間沈黙していたのが不気味でたまらない。

（今野スミオ）

フランスの前衛ロック・シーンの驚異的な躍進と共に、にわかにその存在がクローズ・アップされ始めたのがベルギーのロック・シーンであろう。反対派ロックから登場したストリングス・ユニット、ユニヴェルレ・ゼロや3rdアルバムで進境著しいシンフォニック・ロックの雄マキアベル、その他カンダール、フィフス・ボール・ギャングと注目すべき存在の目立つ中、ここに紹介するコスも実に魅力的なロック・グループのひとつである。元々、ベルギーという国のミュージシャンが国内で活動する場所といったら、5つの大学と20あまりのライヴ・スポットくらいしか無いという悲惨なもので（国の人口はわずか1千万足らずだ）オリジナルな音楽が発展する余地が殆んど無きに等しいにもかかわらず、コスの音楽はヨーロッパのロック・グループの中でも比類ない美しさと前衛的意欲を程よくプロパガンダしているのである。具体的には英国のカンタベリー系―ハットフィールズやギルガメッシュの音に割と近いが、女性ヴォーカルの持つ特異なエロティシズムやギタリストの荒っぽいプレイは、時としてそれ以上の精神的ほとばしりを感じさせてくれる。またキーボード奏者であるMarcHollander　はコスで活躍するかたわら、エレクトロニック・コラージュや難解な鍵盤技術を駆使したソロ・アルバムを〝カミカゼ〟というレーベルから発表している。

（北村）



COS

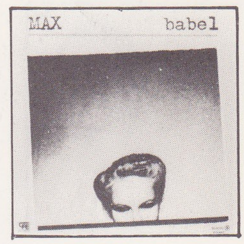
Viva Boma

Belgium：IBC 4B062-23605

マックスというのは、正式なグループ名ではなく、このアルバムにおけるリーダー格であるマックス・スーニィエからとった名称である。スパニッシュ・ロックに詳しい人ならばすぐにおわかりだと思うが、この人はイセベルグという人気ジャズ・ロック・グループのギタリストなのである。このアルバムは、いわゆるスーパーセッション・アルバムで、彼マックスの他に、ベースにスペインの第一人者といわれるカルレス・ヴェナヴェント（ムジカ・ウルバナのベーシスト）、ドラムスに元フシオン（伝説のスーパーグループ!?）のサンテ・アリサ……といった著名なプレイヤー達が集まって作られたものである（キーボードもイセベルグの人）。

サウンドはもろにジャズ・ロックといった感じで、中には殆んどジャズに近い曲もある。イキのいいエレクトリック・ギターを中心に、ビシっと決まったリズム・セクション、さらにセンス溢れるキーボード陣と、文句のつけどころ無し、といった感じのアルバムだが、特にスゴイのはB面2曲目のウルトラ・ラテン・サウンドで、有名なブラジル人のアルバムにも参加しているというパーカッショニスト、ティト・ドゥアルテのプレイが圧巻である。こういったセッション・アルバムがもっと出ているとすれば、それは絶対聴くに値するはずである!!

（山口尚武）



MAX

Babel

Sp：CFE BS32127

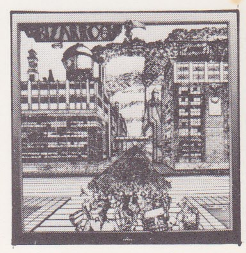
例のオハイオ・アクロンのバンド、ビザロスのデビュー・アルバム。なかなかコッたジャケットで、見ているのにはかなりいい。ところが内味の方は、ちょっと。デボやペル・ウブを聞いているだけに期待して針を落したのに、完全に裏切られたようだ。

そういえば、「アクロン」という殻だけで売っていこうというところが感じられる。だいたい出身地だけでバンドの性質を決めることなんかできないのである。あそこの都市から出て来たからいい音を出す、というような論法は成り立たない。ただ言えるのは、逆に、おもしろいバンドがあったとして、その「おもしろさ」を分析する上で出身地の影響を考えることはできる。

ビザロスの曲は、スティッフから出ているオムニバス・アルバム、「アクロン・コンパイレイション」にも収められている。地元アクロンのレーベル、クローンからもラバー・シティ・レベルズと共にレコードを出している。

裏ジャケに「Thanks To」として、デボやペル・ウブ、ヒューマン・スウィッチボードをはじめZig ZagやN.M.E.まで印刷されているが、いったいどういうつもりなのだろう。メンバー写真も、いただけない。

（瀬沼　俊隆）



BIZARROS

U.S.A.：Mercury SRM—1—[illegible]76

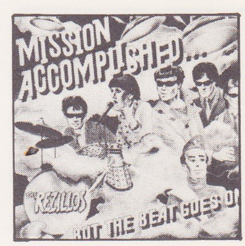
あのレジロスが戻ってきた。と書くだけでも熱くなってくる。たとえ音だけでも………。

彼らは、去年の夏ごろ突然チャートに入ってきたエディンバラのパンク・バンドだ。それよりも1年程前、エディンバラのレーベルからシングル盤を1枚出して少し注目を集めたレジロスだったが、活動のベースをつくるため、他のバンドのようにロンドンへ出て行くことはせず、エディンバラへ留まっていた。77年末、サイアーと契約し、2月にシングルを出した後、NYでアルバムを作った。発売が少し遅れて7月にシングル「Top Of The Pops」と同時にアルバムがリリースされたとたん、彼らの人気は熱狂的なものとなった。あのデビュー・アルバムほど興奮させる音はちょっと最近ないと思う。

しかし、その彼らも今年はじめには分裂してしまった。解散後もシングルを出したり、サイアーのパンク・バンドを集めたオムニバス盤に入ったりしていたが、今、レジロスのライヴが遂に出た。サンダーバードのイントロの迫力はすごい。

カップルのヴォーカルと躁病のリズムにたたき出される音は凄まじいとしか言えない。アニメチックな軽さと、気負わないストレートな感覚が快い。仕上がりとしては、ファーストの方が数段上だが、アルバム未発表曲も多く入っているこのライヴもファンとしては聞き逃せない。

（瀬沼　俊隆）



THE REZILLOS

Mission Accomplished…
But The Beat Goes On

E：Sire Spk6069



PEPAILLE
La Vielle Quel'on Brua
F:Balon Noir BAL13009

もしかしたらフランスという国は、世界で最もプログレッヴ・ミュージックの育成に適した環境を持っていると言えないこともなさそうだ。例えばクリプト・レーベルやコブラ・レーベル、潰れかかっているイサドラ・レーベルのように個性的な作品にあまねく接することができる。リパイルを出したバロン・ノアというレコード会社は、77年にＣＢＳの配下に発足した新生レコード会社である。ここのポリシーもまた個性的だ。トラデショナル・ヴォーカリスト、エマニエル・パレーニンや元マグマのキィボード奏者、ベノーア・ヴィデマンのソロ・アルバムなどがバロン・ノアのライン・アップだが、フランス・ロックの前衛性とロマンティックな伝統性の程よい調和を感じることができる。さて問題のリパイルの説明に移ろう。彼らのサウンドはイギリスでいうならばさしずめ、グリフォンでありジェントル・ジャイアントであり、初期ジェネシスに相当する。もちろん音が似ているというわけではなく、高度な演奏術が巧みに過去と未来のヴィジョンを往還し、かつ生命力を源泉にした有機的ぬくもりが保たれているという意味による。感情が自由奔放に流れ出て表現される美しさがフランス・シンフォニック・ロックの特徴だが、リパイルの場合は、何かに縛り付けられているような厳しさを感じるのだ。エレクトロニック楽器は無論、ヴァイオリン、リュート、リコーダーがいい音を出している。元トライアングルのギタリストがいる。

（北村）

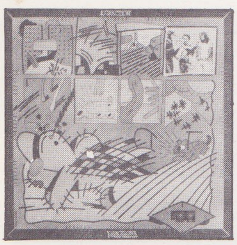


Lewis Furey
The Sky Is Falling
G.RCA PL37254

ルイス・フューレイの歌は、カーテンの向う側から聞こえてくる。真昼の生活、エスタブリシュメントの生活の向う側の、もうひとつの世界。そこで人は目を閉じ、どんな禁忌にだって、身をゆだねてしまう。三人の女性ボーカルをまじえたルイスの声は、相変わらずとてもメランコリックで、頽廃的だ。

これはルイスの４枚目（にあたると思う）のソロ・アルバムで、彼が主に活動しているフランスから発売されている。彼はもうコマーシャルに売る気が全然ないのか、曲想は前作と殆んど変わっていない。中の二曲は、パリの芝居小屋で上演された演劇のため書かれたという。昔から、数多くの亡命者、革命家をむかえ入れ、独特な文化の二重構造を形作ってきたパリ。しかし、彼らは結局は異邦人である。ルイスもまた然り。Ｂ面のSong for Lorcaは、男性へのラブ・ソングだ。Lorcaという名前は、スペインの反戦詩人を思い出させる。いづれにせよこの人、男性へのラブ・ソングを歌わせると、どうしてこんなにいいのだろう。その複雑な心の綾は、とても私にはわからないのかもしれないけれど。「僕の体中の筋肉が、あなたに出会いたがってる。ねえ、ロルカ、あなたのことを考えると、とてもロマンチックな気持になる。初めて恋をした少年のような、謹直な気持ちに。」

（Ｔ．Ｉ．）



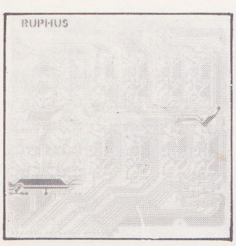
BARCELONA TRACTION
Barcelona Traction
Sp：Oliba OL－09

スペインという国は、どうも廃盤にするのが好きな国らしい。このバルセロナ・トラクションというグループの唯一のアルバムも、75年に発表されたが、すでに廃盤になっている。イタリアもその典型で、これはラテン・ヨーロッパ気質を反映しているのかもしれない……などと下手なかんぐりをしてみたくなる。トリアナとグラナダも、それぞれ１stが廃盤になってしまったというウワサを耳にしたが、なんとも困ったものだ。しかし、日本に及ぼす影響の多大たるやを、よもやスペインの関係者たちは知るまい……。

ところでこのグループ、キーボード・トリオなのだが、ベーシストを除いて殆んど無名の人であるという。スペインにはこのグループクラスの一流プレイヤーがひしめき合っているのかと思うと、今さらながら感心してしまう。やっていることは、わりとつかみどころの無いジャズ・ロックなのだが、やはりスペイン固有のセンスが印象的なアルバムである。誰かが「スペインのナショナル・ヘルスだ！」と言ったのを記憶しているが、そんな感じがしないでもない。しかし、今一つのオリジナリティーが欲しい……とつぶやきたくなる１枚だ。ゲストでオーケストラ・ミラソルのパーカッショニストが参加していることをつけ加えておこう。

（山口尚武）

（マックスのところで言い忘れたので、この場を借りて一言……「マックスのジャケット最高‼」）



RUPHS
Manmade
G：Brain 0060. 175

ノルウェーのルーファスの最新作である。実に久々という感じがするが、実を言うとボクにとってちっとも待ち遠しくなかったのだ。ところが、ジャケットを手にとってクレジットを何の気無しに見ると、なんとなんと、あのガドニー・アスパースが帰ってきているではないか‼前々作“インナー・ヴォイス”以来、あのブタ女のいまわしいシャウティング・ヴォーカルに僻易して、その存在すら忘れかけていたルーファスだったが、あのガドニーを擁して再びボクの所に戻ってきたのだ……‼

本作はイギリス録音で、サウンド自体にかなりの余裕が感じられる。ガドニーの一種独特な渋味のあるヴォーカルは健在で、６曲中実に５曲まで彼女のヴォーカルがフィーチュアされている。“レット・ユア・ライト・シャイン”ではたったの２曲、しかもスキャットのみだったので、ボクとしては万々歳だ。正直言って前作の“フライング・カラーズ”は聴いていないので、Brainの前の２枚と比較することになるが、いわゆる「しゃちこばった」ジャズ・ロックをやっていたルーファスだが、本作では実にリラックスしたプレイを展開している。前にも述べたが、ガドニーの声というのは独特で、変な言い方をすると「白人らしからぬ」ヴォーカリストなのである。その彼女も、円熟味を帯びた歌を披露しており、全体的に見て実に聴き易いアルバムとなっている。快作!!

（山口尚武）

テクノ・ポップだか、何だか知らないけど、そんなのが氾濫している中で、ドイツのスカイレーベル19番に登場したのが、このアルバム。アデルベルト・フォン・ディエンという人なんか全然知らないのだが、ボクはこのレコードを手に取った時、何のためらいもなく買ってしまった。と言うのは、ジャケット・デザインがスゴク、クラウス・シュルツのアルバムに似ていて、裏ジャケなんか、もろにシュルツの「サイボーグ（ブレイン盤）」を意識しているからである。それもそのはず、何のことはない、“ Special thanks to klaus schulze for his help”。

さて、内容はと言うと、これまた上記の通り、Ａ面が「ブラック・ダンス」でＢ面が「サイボーグ」という感じ。しかし、似ていると言っても、単なる曲の構成であり、クラウス・シュルツのユング的集合無意識に深く根ざした、シュールな空間サウンドをスカイレーベル独特の業で料理した音とでも言おうか。かつて、シュルツが「サイボーグ」や「ブラック・ダンス」で試みた、体験的音楽、何ともわけのわからない寓意画を、平淡な絵本にして、肌ざわりよくしたという感じである。

とにかく、シュルツ・ファンなら一度は聴いてみたら……。結構、頭がコズミック・ジョーカーズになるかも……。

（山本　雅幸）



ADELBERT VON DEYEN

Sternzeit

G：Sky 019

フランスのジャズ・ロック・グループ“エディション・スペシャル”の２ndアルバムである。前作ではキーボード及びヴォーカル担当のアン・バレステール紅一点のグループだったが、本作で女性ヴァイブ奏者が１人加わり、紅二点となった。さあて、その女性ヴァイブ奏者とは一体誰でしょう……？女性ヴァイブ奏者といったら、この人ぐらいしか居ない。そう、元ゴングのミレイユ・ボーエルだ。いつの間にかゴングに参加した謎の人物だが、いつの間にかゴングを脱退し、そして今度は突然こんなところに顔を出したわけである。彼女のプレイは、ゴングにおけるそれよりもフィーチュアされておらず、むしろもう１人の女性アンのキーボードとヴォーカルの方がはるかに印象的なアルバムだ（先輩後輩関係の女の冷戦でもあったら面白いと思うのだが……）。

内容についてだが、前作よりはしまりがあって聴くに耐え得る出来となってはいるものの、リズム・セクションの甘さがたたって（これはフランスのグループの致命的な欠点とも言える）、やはりもう一息といったところである。サウンドは、ミレイユの在籍した時期のゴングの出来そこないといった感じである。もう少し上手く間をとって、効果的な音の使い方をしてくれれば……と思うのだが。それにしても、こういったリズミックなジャズ・ロックにフランス語が奇妙にマッチしているのがいとをかし……。

（山口尚武）



EDITION SPECiALE

Horizon Digital

F：RCA PL37215

イタリアの前衛的なロック・シーンのムーヴメントは、クランプス、オルケストラ、アスコルトなどの改革的なポリシーのレコード会社のアーティストによってアクティヴに展開されている。大御所アレアを始め、元アルティ・エ・メスティエリのジジ・ベネゴーニのグループ、ベネゴーニ＆カンパニーや マウロ・パガーニの壮絶な作品はそれを裏付けるに充分なものだが、イタリアでは多少保守的な雰囲気のレコード会社、ディスキ・リコルディのナポリ・チェントラーレの名前は、しばしばそういったアーティストの群から遠いように思われている。実際に僕もナポリ・チェントラーレがイタリアで非常に人気があることは知っていたのに、何故か食指が動かなかったのはまさに認識不足の所以である。現在までにナポリが発表した３枚のアルバムの中で最も新しい作品「Qualcosa　Ca……」の素晴らしさはどうだろう。アレアなどが秘めるアグレッシヴなエネルギーと変則的なフレーズによる展開を、ナポリはより原初的で線の太い混沌としたムードの中で成し得ている。エコーのかかった独得のサックスの音色や重くて即興的な感覚に溢れたピアノ、そしてエネルギッシュなリズム・セクションの上に、叫びのようなヴォーカルが暗い地の底から湧き起こるかのように精神的な緊張感をかもしている。Ｂ－１のボレロのリフレインの感動的なことといい、イタリアに現存する最もパワフルなグループ、ナポリ・チェントラーレの面目躍如である。（北村）



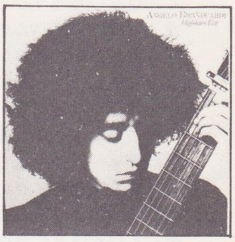
NAPOLI CENTRALE

Qualcosa Ca Na Mmore

I：Ricord SMRL6224

前回のイタリア特集でも少し紹介したアンジェロ・フランデュアルディは、いまやイタリアが世界に問うことのできる唯一のアーティストだ。ブランデュアルディの通算５枚目にあたるこのアルバムは、彼が初めて英語で歌い英国でも発売になった記念すべき作である。英詩のプロデュースには元キング・クリムゾンのピート・シンフィールドがあたり、ブランデュアルディと共にムジザ・プロダクションの支柱であるプログレッシヴ・グループ、バンコのジャンニ・ノセッティもキーボードで参加している。ちょうど75年にＰＦＭが世界各国で発表されたのと同じ様なケースだが、ブランデュアルディの音楽性はＰＦＭやバンコの様なロック・グループのそれとは大きく異なったものであることを最初に明記しておかなければなるまい。

彼の音楽を率直に表現するならば、それはヨーロッパの歴史的アイデンティティーなるものが永きに渡って継承しているフォーク・ソングの形式に乗取ったものなのである。スコット・ランドからバルト海沿岸、そしてフランスとドイツの山岳地帯を通じてイタリア北西部に流入してきたバラッド、レイといった民謡を現代的にアレンジしたものがブランデュアルディの音楽だ。バラエティーに富んだ民族楽器がシンセサイザーやエレクトリック・ギターと共に中世の面影をそこはかとなく漂わせ、澄み切ったブランデュアルディーの声がファンタジックな物語をつづってゆく。ヨーロッパが生んだ詩的で幻想的なスーパー・スターの登場である。（北村）



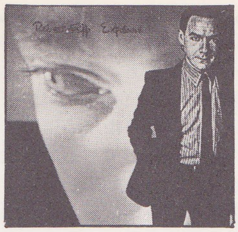
ANGELO BRANDUARDI

Highdown Fair

I：Polydor 244807

RECORD REVIEW 国内盤

文・北村　昌士



エクスポージャー／ロバート・フリップ



虹色の朝／スティーヴ・ハケット



イルリヒト／クラウス・シュルツ

ロバート・フリップ／エクスポージャー
ポリドール　ＭＦＰ1239

元キング・クリムゾンの魔術的オーガナイザー、ロバート・フリップのソロ・デビュー・アルバム。うわさでは２枚組といわれていたが、実際には１枚でタイトルも「エクスポージャー」に変更されている。何はともあれ今年のロック・アルバムの中でも最も興味をそそる１枚であったことは確かだろう。御存知のようにこのアルバムの参加メンバーは、ピーター・ハミル、ピーター・ガブリエル、イーノ、ダリル・ホールと実にイカしている。髪を短く刈り込み、黒っぽいスーツを着たロバート・フリップの変貌は、そのまま現時点での前衛ロックの在り方を反映しているようだ。つまり、フリップのような人々にとって〝今〟とは非常にチャンスに満ち、それでいてとても現実的問題を多大に背負った厳しい試練の時期でもあるようだ。しかしこのアルバムは、クリムゾン・キングの幻影に未だ魅せられている人も、またテクノ・ポップからプログレッシヴ・ロックに興味を持った人も、ハミルやガブリエルのファンの人も、皆それぞれに85％くらいの満足感を味わえるようにつくられている。全ての作業はフリップの意図的な計算であることが明瞭であるだけに、このアルバムの存在感はとてつもなく大きいのである。

スティーヴ・ハケット／虹色の朝
フォノグラムＲＪ7601

スティーヴ・ハケットの経歴についてとやかくいうのはよそう。ピーター・ガブリエルと共にジェネシスの音楽的な最盛期を創り上げたこのギタリストにとって、ソロ・アルバムがジェネシスの音楽の延長上にあることを云々されるのはあまり好ましいことではないだろうから。彼は過去に２度に渡るソロ・アルバムの発表で、正統的な英国人としての詩的コンセプトの所有者であることを自ら明らかにしている。みずみずしいまでの清楚なヴィジョンとファンタジーへの信奉を核に、優美な音と深みのあるメロディーに並々ならぬ執着心を寄せ、ウィリアム・ブレイクの伝統を引き継ごうかという意気込みだ。この美しい作品は無論、悲しくなるほどに現代の本質とはかけ離れたものだが、このレコードに共感できないとしたら、人類の将来に救いはない。

アンソニー・フィリップス／サイド
フォノグラムＲＪ7602

アンソニー・フィリップスもスティーヴ・ハケットと同様に元ジェネシスのギタリストという肩書きを持ち、同じく３枚のアルバムを発表している。限りない夢想者としてのアンソニー・フィリップスの個性もまた、ハケット同様に詩的な世界、透明な内面を映し出すことにたけているのだが、音楽に対する多少イージーな姿勢は彼の存在をハケットよりも数段低いものにしているような気がする。もちろん逆にいうならそんな彼のオープンな感覚が思いがけない成功をもたらすことになるのかも知れないのだが……。バック・ミュージシャンはびっくりするほど実力のある人達ばかりだ。元クリムゾンとかキャラバンとかレッドブッダとか……。

ブラフォード／ワン・オブ・ア・カインド
ポリドールＭＰＦ1233

UKは、エディ・ジョブソン、ジョン・ウェットンと、新たにＢＲＦＯＲＤなるグループを結成した、アラン・ホールズワースとビル・ブラフォードに完全に分離した。UKは、アランとビルの脱退の穴を、若いエディ・ジョブソンを前面に押し出すことで見事に解消し、ＢＲＦＯＲＤもビルのソロ・アルバムに見られた伸びのある演奏を展開している。確かにUKは、ブラフォードにとってみれば〝廻り道〟的存在のグループだったのかもしれないが、そこを離れ、新たに自己のグループを結成したという事実は、ブラフォードが元キング・クリムゾンとしての自己の肩書きを完全に振り切った、ひとつの証左ともとれる。

パティ・スミス／ウェイヴ
フォノグラム25ＲＳ－24

多くの人々はパティ・スミスのアルバムに、第２次ロック・ドリーム――即ちニュー・ウェイヴのエネルギーに基いた、肉体的緊張感と詩性を感じ取ろうとやっきになっている。しかしパティ・スミスのアルバムは、ファースト、セカンド、サードと経るにつれて増々対外的エネルギーが内面的な位相に換置されてゆくようだ。申し訳ていどに仕つらえたロックン・ロールは白ける。むしろエレガントで繊細な〝女〟の感覚の方により魅力がある。《ハードなロックン・ロール・スピリット》だと？ふざけるな、決まり文句で売ろうなんてパティに対して失礼だよ。

ジャン・ジャック・バーネル／ユーロマン・カメス　　キングＧＰ721

カセット・テープで聞いたジャン・ジャックのソロ・アルバムから、一時非常に興味を抱いたスロビング・グリッスルやオルタナティヴ・ＴＶ、レッド・バルーンなどアヴァンギャルド・パンクの音を感じ取った。ヨーロッパが共同体意識を高め、外側（特にアメリカ）へとエネルギー放射を行なう際の方法論を、ジャン・ジャックはテクノロジーとの結合の中に見出したのだ。そして詩は、ずっと後になって知った歌詞の中身はもっと多くの破壊的なエネルギーが詰まっていた。もしもヨーロッパ人全体の潜在意識の中に、彼のアジテイションのような暴力性が秘んでいるのなら、第３次世界大戦もそう遠いことではなかろう。その時には日本もいよいよ米中ソの分割統治が待っている。アジアのドブネズミの最期だ。

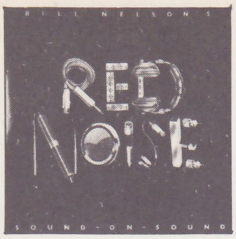
サテン・ホエール／ロスト・マンカインド
キングＧＸＦ－2047

サテン・ホエールが未だ生き残っていたとは……。キングのクリエイティヴな企画のおかげでメッセージやサテン・ホエールの健在ぶりを知り少なからず恩恵をこうむりました。

サテン・ホエールは確か僕の家にも73年頃ブレイン・レーベルから出たやつが１枚あるが、当時の彼らはドイツ的な内にこもったような陰性のハード・ロックをプレイしていた。彼らの他にもキン・ピン・メーとかイプシロンとかブレイン・ストームとか訳の分からないのがいっぱいいたっけ。前衛ジャズから電子音楽、そしてハード・ロック風超イモ・バンドまで、まるでドイツのロック・シーンは巨大なゴッタ煮のナベの中のようだった。そんなカオスの中でもみくちゃになってしまったかのような雑多でスリリングな音楽性が、現在のサテン・ホエールの持ち味である。

クラウス・シュルツ／イルリヒト
テイチクＳＵＸ－175－ＥＢ

７年前、ドラッグでやつれ果てたような弱々しい少年の瞳には何が映っていたのか。〝イルリヒト〟は通訳すると〝狂光〟という意味になる。クラウス・シュルツのソロ・デビュー作であるこのアルバムには僕もいろいろな思い出がある。時間の感覚はしだいに遠方へと遠ざかり、観念的なエネルギーが体中からどろどろと噴き上げてくるような異様な体験の中で一晩明かすと、朝の太陽と空気は眩しいくらい鮮かで美しかった。



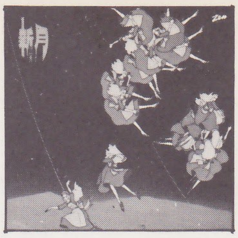
レッド・ノイズ／触れないで！僕はエレクトリック



マガジン



夢譚／ノヴァリス



新月

〝死〟に対する恐怖と〝生〟に対する執着とは、ある意味で同率のベクトルを持っているような思いにかられ、形而上の異界をのぞき込んでしまったような強烈な価値認識を抱いた憶えがある。幻想が現実の壁を引き裂いてしまうような音楽のエネルギーは実在する。そしてこの作品にとって7年の時の流れなど無に等しい。嘘だと思ったら君の耳で確かめてくれたまえ。ただしライナーは読まない方がいい。

ビル・ネルソン＆レッド・ノイズ／
「触れないで！僕はエレクトリック」
東芝ＥＭＩ　ＥＭＳ－81216

東芝の厳しい国内発売基準を見事クリアーして登場したレッド・ノイズのデビュー・アルバム。知っている人はもうよーく知っているだろうけれど、ビル・ネルソンは元ビー・バップ・デラックス。僕などは同名のフランス・アヴァンギャルド・バンドのことをとっさに思い浮かべたが、これは異常以外の何物でもない。ロキシー・ミュージックとよりアグレッシヴなパンクの両極を激しくスパークさせたようなノイズのサウンドは、好きな人からは徹底的に支持されるであろう〝つぼ〟をこころえている。A面の2曲目「ヤング・モダーンに捧ぐ」とは、どこかの雑誌の愛読者のために考えついたようなタイトルじゃないか。

マガジン／
ビクター　ＶＩＰ

ヒトはサルではない。だから常に前方にヴィジョンたるものを掲げ、それに向かって進化を試みる。ある日突然ニュー・ウェイヴの連中の中の大部分にその基本的意識の欠落を見た。特に日本の連中ときたら横の志向（つまり外国）ばかり気にして前がまるで見えないサルばかりだということに気がつき、そうした連中が何の必然性もないままにディーヴォやＵボックス、マガジンなどの音まで〝所有〟していることを知り頭にきた。かといって僕がどうこう騒いでどうなるものじゃない。理知的生命体を自負する人々よ、このアルバムを生んだ背景がいかに広大無辺のフィールドであるか。そしてそれとの関わりを意識することなしに〝音〟のみを楽しもうとすることがどれだけ怠惰で愚かなことか……リアリティーが海の向こうから歩いて来る時代は終った！

ノヴァリス／夢譚
テイチクＳＵＸ－15－ＥＢ

ドイツのトップ・グループであると同時に、日本で紹介されるジャーマン・ロックのアーティストの中でも比較的安定した知名度を持ったノヴァリス。最高傑作である「ゾマーラベンド」は、日本で最も売れたジャーマン・ロックのアルバムだ。唯ジャーマン・ロックといってもノヴァリスの音楽は、クラフトワークのコンセプトと表裏一体を成す〝もうひとつのドイツの顔〟を表わしている。つまりホフマンやリルケ、ノヴァリスのような作家を生み出した神秘主義に基くロマンの流れとでもいおうか、禁欲的で古典的な世界に精神の安息を求めようとするヨーロッパ人独自の空間を創造するロック・グループなのだ。このアルバムも時折無理矢理ポップを気どったようないやなムードが現れるが、全編はリリカルで美しい。ジャン・ジャック・バーネルばかりが〝ユーロ・マン〟じゃないのだ。

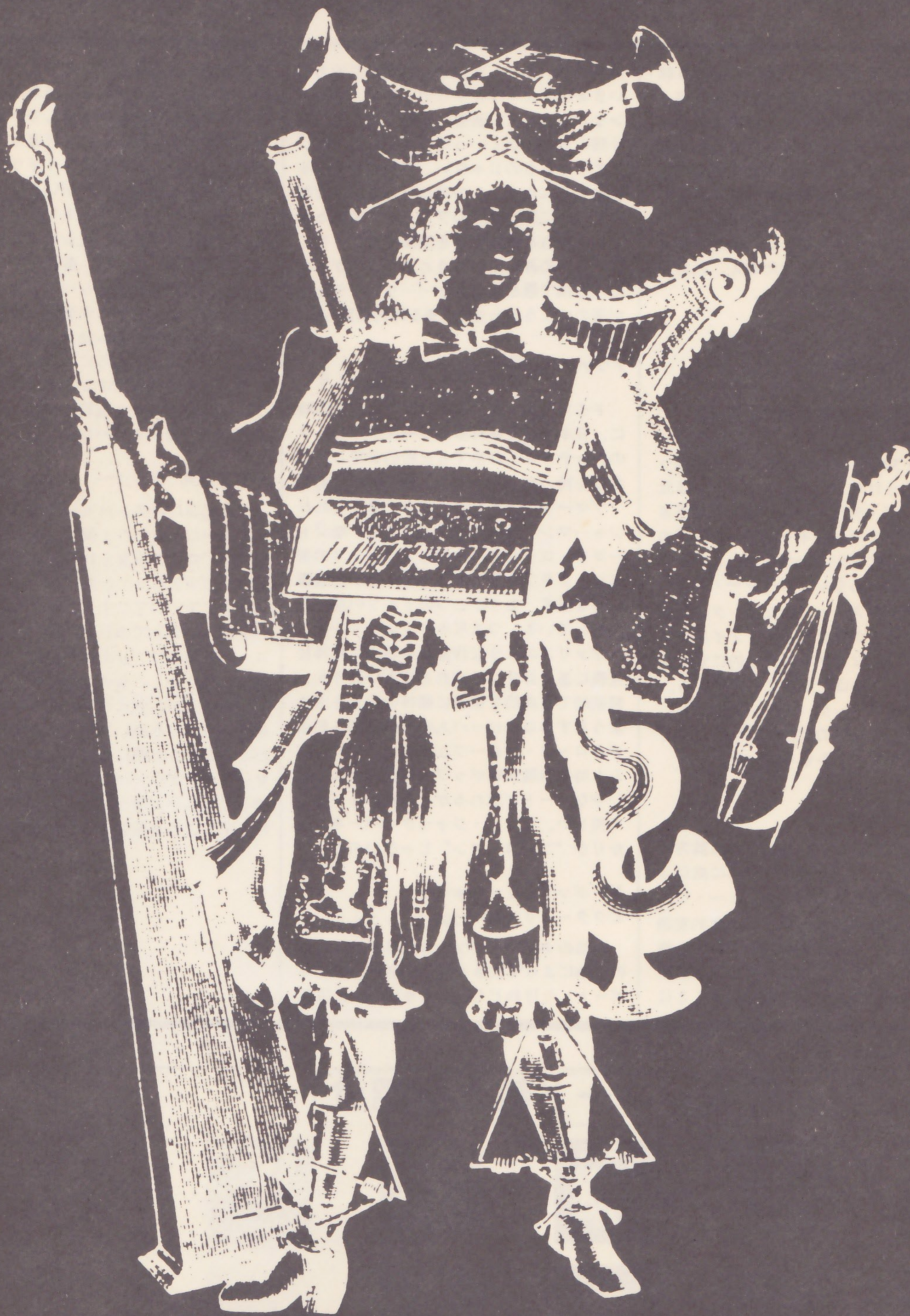
Ｍ／ポップ・ミューヂック
ビクター　ＶＩＭ－1364（シングル）

本誌の7号でドイツの音楽界がディスコの成功によって大きく変ったありさまをレポートしたけれども、それを読んだ大阪某誌の編集長が自分の本におもしろいことを書いていた。即ちディスコが未来の音楽にとって欠かせない要素を含んでいる――みたいな内容だったようだが（違っていたらごめんなさい）この意見をイギリスで実行して見事に大成功した男がいる。〝Ｍ〟という実はロビン・スコットなる本名の英国人が自費出版で発表したシングル盤「ポップ・ミューヂック」は、英国のチャートで第1位、また全ヨーロッパでの大ヒットの兆しもあるというから大変だ。ボウイばりの屈折したヴォーカルはニュー・ウェイヴ風、バックの音はもろにテクノ・ディスコ。このような無名の天才が次々と現れ、ポップスの革命が着々と進行しているのが今の英国でありヨーロッパなのだ。

新月／新月　ビクター　ＺＥＮ1009

7月25日に発売される新月のレコード・デビューにいろいろと関わって、改めて日本での〝ロック音楽を媒介にした芸術活動〟がいかに大変なものか実感した次第。しかし相次ぐ苦労の末に生み落されたこのレコードは、いままでの日本のポピュラー・レコード産業がつくり上げたどの作品よりも傑出していることもまた事実だ。新月の音楽があなたのお気に召すかどうか、一刻も早くレコードを聴いて欲しいと同時に、25日と26日の2日間にわたるデビュー・コンサートのライヴ・パフォーマンスにも是非接して欲しいと思う。そして日本にも夜明けが来たことを感じてくれたなら幸いだ。

Fool's Mate **Vol.9** *Occultism*





Japanese New Face

アウター・リミッツ

1979年７月に結成されたアウター・リミッツは、メビウスというバンドが発展した形で登場したグループだ。彼等は、その音を聞いても解かるとおり、いわゆるヨーロッパのバンドのエッセンスを踏まえたシンフォニックで、雄大なサウンドを特色としている。多彩なキーボード群の中には、メロトロン、シンセサイザーといったものも見られ、時々フィーチャーされるバイオリンも、実に効果的で素晴らしいバランスを保っている。まだ未完成で、多少のテクニックの改善の余地こそ残されてはいるものの、その可能性は、本当に未知数で、日本のプログレ・バンドの、明るい素材の一つとして掲げられると思う。メンバーを紹介しておく。

塚本　周成（Key）22才
藤井　暢之（G，Vo）22才
杉本　　正（B，Vo）22才
杉井　信行（Ds）22才

なお、アウター・リミッツについての問い合わせは、Social Complex（TEL：496-8684）まで。代表は、岩根　篤美、上野　新吾氏である。



観世音

日本のロック・シーンに於いては、古典的なバンドになりつつあるファー・イースト・ファミリー・バンドのメンバーは、解散後もあらゆる場所で活躍しており、喜多郎などの著名なミュージシャンをも輩出した。そしてここに紹介する〝観世音〟は、ファー・イーストのベーシスト、深草アキが結成した新らたなるスーパー・グループと言ってもさしつかえないだろう。その音楽性は、日本のもつ伝統美を音に託した意欲的なもので、特に尺八やつづみ、琴などの日本の楽器が自然にエレクトリック・サウンドと一体化されているのが評価できる。

深草　アキ（B，Vo，Syn，琴，G）
大場　　博（G）
鈴木　伸一（Key）

なおゲストとして参加しているメンバーを紹介しておくと

宮崎　青畝（尺八）
仙波　清彦（つづみ、なり物）
伊藤　孔八（ボーカル、シンセサイザー）
小林　ヒデキ（ドラム）以上の４人である。

12月３日に科学技術館のサイエンス・ホールで行なわれた日本・ペルーの親善コンサートでは、ステージでの効果的な演出、素晴らしいコンビネーションによるアンサンブル、各スタッフのプロデュース能力が結実し大成功を収めたと言え、観客の動員数にも目を見張るものがあったと思う。彼等は多くのセッションを行うことによって曲を完全させるそうで、そういった意味でも一つ一つの作品には計算され尽くされた要素と自由で感覚を重んじようとする面がバランス良く調和しているような気がする。結局機材の量やスタッフの数の関係で、彼等のコンサートは毎日のように見られるわけではないが、一刻も早くそのような状況が改善されることを望んでいる。次回は２月の下旬にライブが予定されているが、その前にぜひレコード制作が進んでいると良いのだが……。彼等のステージを見ても解かるが、すぐにもレコードを出すことが可能で、それに従って観世音の知名度もおそらく限りなく大きなものに変わるだろう。



News

美狂乱

彼等はいよいよキング・レコードのネクサスよりアルバムを発表することになった。おそらく81年の６月頃までには、我々の前に再びその姿を見せるようになるだろう。曲目についての詳細はまだ解らないが、とにかくクリムゾン・ファンを含む、広範囲のプログレ・ファンに強くアピールするだろう。とにかく今から大きな期待と楽しみがいっぱいである。

N　E　W　S

■**ノヴェラ**は、新曲をレコーディング中で、その中には、今まで以上にプログレッシブなものも含まれているとの事。

■**DADA**は、来年の春にはレコーディングを完了し、キング・レコードのネクサス・レーベルよりアルバムを発表する予定。なお、11月23日に行なわれた、法政大学に於けるオール・ナイト・コンサートに出場し、いよいよ活動を開始したようである。

■**グンジョウガクレヨン**は、ドイツのバンド、ポポル・ブフのメンバーと共演する予定!!

■本誌の11号に載った**豊田貴志**（元スペース・サーカス）がCBSソニーよりソロ・デビューした。彼のシンセサイザー・プレイを十分に聞ける初めてのアルバムである。

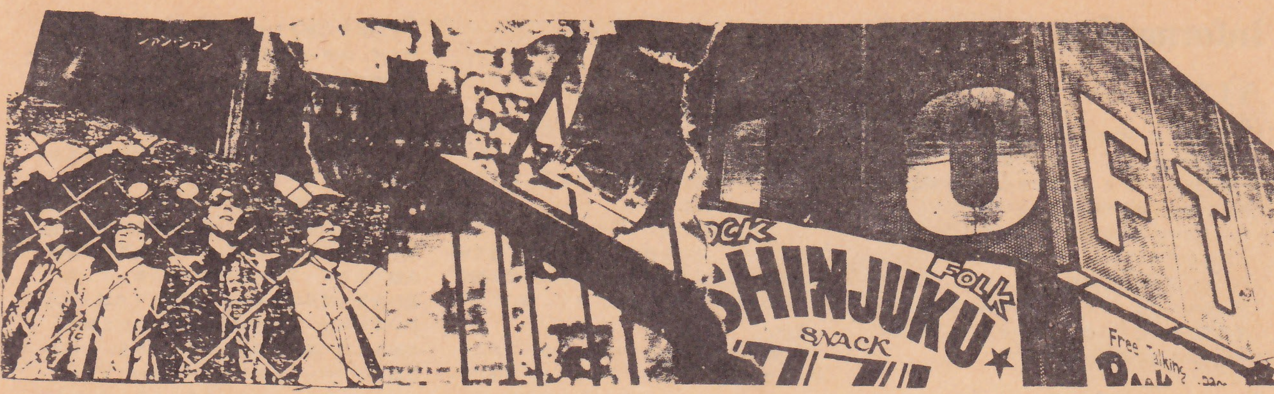
■ライブ・ハウスで人気があり、本誌でも紹介された事のある**Green**が、最近かなり精力的に活動している。

■フリー・ミュージックの影響を感じさせる**ガラパゴス**が、最近また活動を始め、いよいよ待望のレコード・デビューも果たしそうである。

■**フールズ・メイト**の自主制作レーベルが、いよいよ発足する事になったが、その第１弾として前述のガラパゴスが予定されている。

■**ツトム・ヤマシタ**は、レコーディングもほぼ終了し、１月から２月にかけてリリースされそうである。なおその後は、ヨーロッパに渡り活動する予定である。

■**喜多郎**は、12月５日に初めてのライブ・アルバムを発表。さらにロンドン交響楽団がNHKのシルク・ロードに使われている彼の作品をアレンジしている作品も同時に発売される。



Concert Review

一風堂　11月15日　新宿ルイード

以前から気にかかっていた〝一風堂〟だが、まだ放送局でのスタジオ・ライブにしか接していなかった。しかし、この日のコンサートは、私にとっては忘れる事の出来ない日本のロック・シーンの堅実な発展と、その中心に存在するべき〝一風堂〟の確かな方向性を思い知らされた、それこそ心強い確信を抱いたとも言える時間になった。

コンサートは、2部構成で行なわれ、前半に彼等のもっている多彩な音楽的バック・ボーンが披露され、後半には幾つかの新しい領域にアプローチする野心がうかがえた充実したものであったが、さらに加えておかなければならない点は、その極めて完成度が高いパフォーマンスの中にあって、彼等は決してオーディエンスを楽しませる事を忘れなかったという事で、音楽パフォーマンスの根本原理を無視していなかったのが心強かった。たまに聞かれるバラード調の曲やボブ・デュランの作品などは、場所や雰囲気に応じて臨機応変に演じられる彼等のキャリアを十分に裏付けている。さらに後半での効果的なビデオ上演などは、彼等自身もただひたむきなプロ意識でのみ音楽をやっているのではなく、それをエンジョイしている事がはっきりとしていておもしろい。しかし、彼等は妙にこびた事など絶対にしなかった。アルコールにひたり気持ち良さそうな人々も、決して体を解放してリズムに乗ることなど出来ない。そこには、鮮烈で生々しい問題意識をもえぐり出そうとする〝一風堂〟のさめきったカーテンがあるからだ。多くの日本のバンドが、安易で子供だましな反逆的エナジーによって人々を興奮させたり、また即時性や享楽的な笑い、楽しさで一時的な幸福感を植えつけているのに対し、〝一風堂〟は、あくまでもありのままを描き出していてストレートだった。新曲も幾つか披露されたが、そこには彼等が今後進むべき、もっと奥深い混沌とした領域が垣間見られたような気がする。第2作目『REAL』は、ドイツのベルリンで録音されたが、特に「ジャーマン・ロード」などにはノイやハルモニア、そしてクラフトワークの影響が感じられ、本誌の読者には、いっそう親しみがわくのではなかろうか？とにかく11月15日のルイードにおけるライブは、完成度、音響、ステージ効果など多角的な視点に立ってみても絶大な評価を与えるべきものだったと言える。なお、あらゆる面で親切にしていただいた山下さんには、このコーナーを通じてお礼を言いたい。

（角屋）

神奈川大・法政大コンサート

フリーミュージック、アバンギャルドと言えば聞こえはよいが、もとより「聞かせる」代物ではなく、竹田賢一氏の言う様にパフォーマーもオーディエンスもさながら苦業の様相を呈しているものだ。マイナーという現代の病巣の崩壊と共にかえって病原菌は拡散した様で、フリー、アバン分子は東京に散在、横浜でも活動している。ところでケイレンしたりのたうちまわるパフォーマーを自己陶酔のどうしようもないオナニストと悪罵する気はないが、だらだらと牛唾の如く〝アレ〟をやられるとかなりの災害であることは確かだ。

自己顕示欲に負の価値を負わせることは正しくないし、それはそもそもある行為を見せることによって初めて劇的世界に収束させる儀式のある側面を殊更に引きずり出し揶揄する為のコトバなのだから、人前でやるということには、どうしようもない必然性の1つや2つはあるだろうが、あなた、せめて例の「金鳥と姦輪」という極めて弁証法的なレベルに達してほしい。

さて今年はゲー術の秋というのか、フリーアバンの大規模なコンサートが多々あった。この動きは、今は亡きマイナーに出入りしていた人間が亡霊の如く再結集したものと、従来のロックコンサートにアバンギャルド色が加わったものに大別できる。まあマイナー人種と人はゆーけれど別に仲良く同窓会をやっているわけでもなく、某自販機雑誌でわかるように殺伐としたものだ、それは。

「練音術師の宴」11/8～9　神奈川大学

パンゴは高度にストイックでかつ聞き易いなんのことはない俗にいう「しぶい」やつですが、流石といえば流石。舞踏を取り入れた**闇射**は某国語辞典によるとノイズを発して型を変えながら成長していく物体のことらしい、賛否両論バンド。**灰野敬二**は最近パンクバンドで歌っているせいか元気がなかった。前夜の裸のラリーズに続いてなんとラリーズのコピーが登場。その名も**悪の華**だそーで。**佐藤隆史**のピアノにはカトゥラトゥラーナの歌姫男**ダミー**が飛び入り。

神大に於ける2日連続のオールナイトはスタッフサイドがしっかりしていて場としてはなかなかのものだった。

「IMAGINATIVE GARAGE」11/23～24法政大学

メジャーでないロックコンサートとしてはかなりの客を動員した。担しこちらはよりアバン色の強い企画だった様だ。**突然ダンボール**の知的で痴的な確実なパフォーマンスに対し、返ってきたのはまばらな拍手と罵声だったし、元ミラーズ、ヒゴの**チャンスオペレーション**等、良質な演奏とコンサートの盛り上がりの間にズレが見られた。もともと2時間遅れの上に40分延長した**裸のラリーズ**は途中で灯をつけられたが10年間に渡る断末魔の声がこの程度で終わるわけもなく裏から見ていたけれどラリーズが煌々とした照明に浮び上る様は壮観だったが、あとでもめた様だ。

他に爆竹だけは勘弁してほしかった**連続射殺魔**、**グンジョーガ**、**絶対零度等**出演したが、盛り上がりのピークは存在しなかった様だ。しかしライヴハウスシーンの衰勢とは対照的な異様な数の観客のことをどう考えたものか。

大熊ワタル



Information

YLEM

YLEMは今年、様々な人々とコンタクトをとり、かつ活動を続けて来た。もはや音楽だけ、ロックだけに止まっていることはできない。我々は広い視座を持って活動の発端としなければならない。YLEMは今までのロックバンド達とは違った視点と活動を続けて来た。そこには、今までのものとの比較による様々な誤解もある。しかし、80年代の活動の一端を、我々は充分に実践して来た。音楽状況のみならず、様々なものがもっと広範囲に活動できる為の準備を続けている。

YLEMは音楽制作の他に「遊覧展」8/29ー映像の総合展や「ALTERNATE ANGLES」12/14ー現代音楽からオールターナティブ・ミュージックの為のイベント、なども制作した。そして、様々なクリエーター達へその活動を広げている。

ロックシーンを支えている、プレイヤーとリスナーの構造からは何も生まれない。それは欧米のレコードとグラビア等での幻想による共有された感性以外の何ものでもからだ。ニューウェーブなど、オルターナティブ・ミュージックなど今の日本に存在しない。しかし、それ故に始めなければならない。今現在をひとつの円環的な終焉として、まず、古い構造から決別しなければならない。

YLEMは〝Tokyo-MEDIA〟をコンセプトして、新たな活動に前進する。12月には、日米で同時YLEM CASSETTE LINEが発売される。ラフ・トレードともコンタクトを取り続ける。さらに、関西との活動の一体化も始まっている。又、音楽だけに止まらず、様々なユニットによるALL ART化を実践している。

ともかく、日本のシーンには、もうひとつ別な角度を持っての活動が必要なのである。そして、YLEMは積極的に活動を展開して行く。

YLEMは様々な人々とのコンタクトを望んでいます。ぜひ、連絡して下さい。

KENSO

黙って聴かせれば、誰一人としてまさか日本人の演奏するバンドだとは気がつかない、そんな、ある意味では一種非国籍エリート集団とも言えるのが、このKENSOである。

まあ、何も日本人離れしていれば良いというわけではないし、それを言うなら話はむしろ逆であるべきはずのところだが、日本人離れも度を超すと、何やらアクロバットじみてきて、聴いていてて痛快！

KENSOの正式なメンバーは、グリープのリーダー格**清水義央**（ギター、キーボード）を中心に、**田中政行**（ベース、キーボード）、**矢島史郎**（フルート）、**山本治彦**（ドラムス、パーカッション）の計４名であり、現在巷のユーロ・ロック・ファンの話題をかっさらっている彼等のデビュー・アルバムには、他に数人の参加ミュージシャンの名がクレジットされている。(詳しい事は直接レコード店でアルバムを手に取ってみて。)

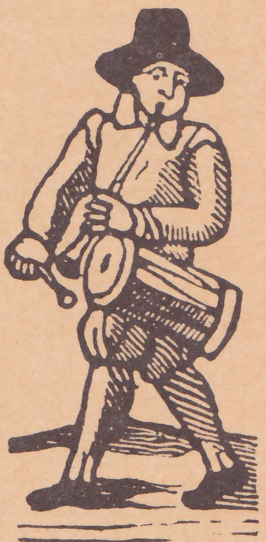
で、このKENSO、本号の別のコーナーで角屋直彦氏がすでに語っているとうり、そんじょそこらのユーロ・ロック・バンドがケツをまくって逃げ出したくなるみたいな——話が汚いな——凄い音を出す。ボクの場合、普通ただ音が凄いだけではしらけてしまう方なんだけど、KENSOの凄さってのは並の凄さじゃないんだよ。まあ、一口で言えば、ギター、フルート、キーボード（シンセサイザーを含む）を全面的にフューチャーした、抒情的かつメロデックなサウンドなんだけど、うん、リズムが強力なのですよ、リズムが！……ふふふ、ブランドＸが泣いて逃げるのが目に見えるようだワイ。(何のこっちゃ？)

で、うん、KENSOなのであります。このアルバムの一番の聴きものは、何といってもB①の『海』なのであります。だいたいスケールってのは練習次第で出せるってもんじゃないのであって、俗な言い方すればその演奏家の人間としての器——みたいなものが、正念場で出てくるものだと思う。だからこの『海』の深さ、広さ、大きさ——はすなわちメンバー４人のそれでもあるわけで、そこのところに打たれたねえ。まあ、もう一度サウンドについて語れば、今までの日本のバンドって、シンセ弾いてもサクラサクラの春がすみって感じだったじゃん？KENSOの音はゲルマンの森の深さを感じさせる——と言ったら、オーバーかな。(嘘だと思うなら実際に聴いてごらん。)

さて、まあ今後の課題というか、彼等にしたところで日本人、自分達のアイデンティティとどういう形で決着をつけるか、それが今から楽しみだ。B②みたいに日本的なメロディーに安易に接近するるんじゃなく、例えばジャズの山下洋輔みたいな演り方で、ねえ、ヨーロッパの向こうを張ってみせてよ！

（和泉　直樹）





Concert

●一風堂

12月26日(金)函館市民会館
サウンド・パパ 0138 (55) 6096
１月27日(火)名古屋雲竜ホール
フライト・ミュージック 052 (203) 1735
１月28日(水)大阪厚生年金中ホール
サウンド・クリエイター 06 (315) 0664

●インカ帝国
マウンテンゴリラ（音楽：新月）

２月20日㈮
２月21日㈯
２月22日㈰
２月23日㈪
２月24日㈫
２月25日㈬
開演：２時，７時
入場料：前売1500円　当日1800円

なおＢブロック券をお買い上げの方は、その他の３公演も御覧になれます。詳しい問い合わせは下記へ。

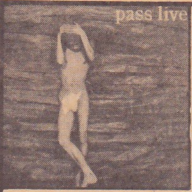
オフィス・インカ　03(360)0944

●アウター・リミッツ

１月11日㈰シルバー・エレファント　7：00～

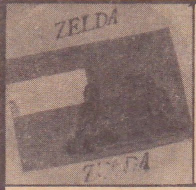


Records Review



PASS LIVE
トリオ　PAS-1001～2

前衛芸術的音楽というよりは、呪術的音楽と言った方がしっくりくるGUNJOGACRAY-ON。彼らの音を聴きながらその世界にひきずり込まれない、と言うのならそれは嘘であり自分の貧弱な感性を恥じるべきだ。なぜならこれは革新的は音楽ではなく、人間の根底に流れる人間本来の姿であり、音楽であるからだ。その音は一つ一つ好き勝手に舞い飛びながら一定のバランスを保ち、出口のない暗黒の空洞のようであり、子宮の中の胎児のような安ぎを与えてくれる。かといって彼らの提示する全てを理解するのは無理であり、又、不必要である。感ずるままに受け取り、それを行動にうつせばよい。踊りたければ踊れば良い、笑いたければ笑えばよい。彼らのライヴは夜明真近に見る夢の様だ。鮮烈な印象と余韻は残るが現実の生活にまでは浸透してこない。1人含み笑いをもらしながら忘れかけた夢を再現するがごとくレコードに針をおとすのが最適である。　(S. Tanaka)



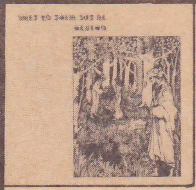
ジャンク・コネクションという新しいレーベルから現在3枚のレコードが発売されている。リザードの「サ・カ・ナ」,絶対零度、そしてこのゼルダである。シンプルな4人編成だが、たたきだされるビートは確実にそのPowerを感じさせる。原子的なコドウに以た最も気持よく体に響くリズム。16才のVo, サヨコの声はいわゆる女性Vocal にありがちな演歌的などろどろさ（粘着性）はなく、あっけらかんとした､しかし〝ぴんと張った絹糸の指の切れる様な強さ〟がある。彼女の詩の直接さ一メッセージ性、アジテイトの直接さというより、自分（聴き手）の中で増幅されていくイメージの鮮烈さがこの直接性へと結びついていく様だ。

マゼンダ色のライトの中から浮かび上がる街の幻想、音のない空間をつき抜けていくサヨコの声、渦を巻くベースライン…見たことのない光景が、私の頭に焼きついてはなれない。　(Saliex)



KENSO
PAM-001

ケンソーのレコードは、町田にあるレコード店パムが制作した自主制作のものである。まず音を聴いてびっくりする事は、録音がかなり良質である点だ。それに加えて長年ユーロ・ロックを親しんできた人に馴み深いシンフォニックで美しいフレーズが次々と展開して私達を驚ろかせてくれる。フルートをフィーチャーしたバンドは、ジェスロ・タルとか、フォーカスとか、かなりの数があるが、彼等はちょうどスペインのゴティックと共通するようなマイルドで気品が感じられる使い方をしているようだ。さてB面の2曲目などを聴いてみると、彼等が日本の民謡をアレンヂし、意欲的なところをみせているのが心強いが、これを聴いてみただけでも将来の可能性もまた大きなものである事が解る。「海」というB面の1曲目などは、このアルバムの中でも最高の出来で、俗に言う日本のプログレ・バンドのある一線を越えて、世界的にも通用する素晴しいものである　(角屋直彦)



OSIRIS／In the Mist of Time

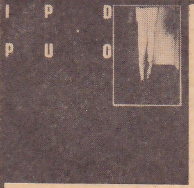
忘れ去っていた歌。忘れ去ろうとしていた歌――。同時代を意気がってみても、次の街角で君は「オシリス」に出会うだろう。

……それはふとした日常の狭間に違いない。魔がさすという奴かも知れない。遠い痛みの記憶――。メトロの椅子にからだを埋め、あるいはコートの襟をたてて歩道橋を足早に歩む時、何故か涙のように滲み出し、君は浜辺に佇む少年だ。「かつてあったものは、もはや存在しない」……「オシリス」が君を待っている。忘れ去っていた日々。忘れ去ろうとしていた人々――。

「オシリス」……この調べは残酷だ。そうだ花はいつだって血まみれなのだ。苦しみの夜の家。過ぎ去りし君の、青い花――。

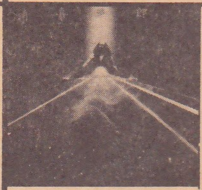
……愛していたよ。愛していたとも！

つかの間の想い出は粉々に砕け、君は階段を上り、歌はとり残される。「オシリス」……この調べは悲しい。悲しすぎる――。　(和泉　直樹)



一風堂／REAL
エピック　27 3H-25

ベルリン録音で話題になった一風堂の2枚目である。一般的には、彼等をニュー・ウェイヴ風のテクノ・バンドでかたずける傾向があるが、このアルバムに収められている一曲一曲は、それぞれ全く異った音楽的背景に基づく多彩なものだ。彼等は、なぜこのアルバムの制作地にドイツという土地を選んだのだろう。アルバム中の「ジャーマン・ロード」などを聞くと、クラフト・ワーク、ハルモニア、クラスターなどジャーマン・エレクトリック・ミュージックの影響が感じられるし、その他にもダブのかかったサウンドがあったり、バラード調の曲があったり、本当に音楽そのもののジャンルのギャップを、彼等自身のオリジナルティーと技量で埋めているように思える。彼等については、本号のコンサート・レビュー等でも紹介済みなので、ここではとにかく一風堂の2作目「REAL」の楽しい音楽性を十分に知っていただきたい事だけを願う。　(角屋　直彦)



喜多郎・イン・パースン
キャニオン　C28R0059

ファー・イースト・ファミリー・バンド出身で、バンド在籍中にイギリスのマナー・スタジオでクラウス・シュルツによるプロデュース・アルバムを制作した事によってシンセサイザー・ミュージックにアプローチし始めた喜多郎だが、それから数年経た今になってＮＨＫの「シルクロードの旅」などのバック・ミュージックとして使われ始め、今やかなりの知名度を誇る大スターに変身した。そしてここに彼にとって初めてのライブ・アルバムが発表されることになったわけだが、スタジオでのオーバー・ダビング・サウンドとはかなり違った側面が表われていてかなりの出来と言えるだろう。とにかくエレクトリック・ミュージックと呼ばれているものが、テレビの影響によってより一般的なものに変わってゆくことや、それによってソフィスケートされていくことについては、別に否定もしないし、どちらかというと喜ばしい現象だと思っているぐらいだ。　(角屋直彦)



山口美央子／夢飛行
キング　キャニオン　C28A0131

本誌の読者が気に入るかどうか解らないが、とても洗練されたシンセサイザーの音色をバックにハスキーなヴォイスを聞かせる山口美央子のアルバム「夢飛行」はかなり良い出来である。録音や音の処理が、ニュー・ミュージックに近いことは確かなのだけど、一つ一つの曲には、なにか本当に都会的なハイセンスなポップ感覚が感じられ、ちょうどスーパー・トランプのサウンドがかもし出す洒落た都会の夜のように、小粒でありながらも安心して聞ける楽しさがある。彼女は、ステージでは、メロトロンをバックに不思議なムードで歌うそうで、一度は見たいような気がする。このＬＰに収められた全12曲は、本当に身近な生活や行動をストレートに映し出し、彼女が基本的には、いわゆるシンガー・ソングライターであることを裏付けているが、歌に付随するアレンヂや歌を取り巻く各種の表現が非常に優れているために、歌そのものの説得力もまた数倍力強い。　(角屋直彦)



奥本亮／ソリッド・ゴールド
キャニオン　C25A0106

キーボード・プレイヤー、奥本亮（ＲＹＯ　ＯＫＵＭＯＴＯ）の第1作目「ソリッド・ゴールド」は、バックにジェフ・ベックとのセッションで有名なリチャード・ベイリーやゴンザレスに在籍していたクマ・ハラダなど多数のテクニシャンを従えて録音された。最近発表された2作目「メイキン・ロック」ではＴＯＴＯのメンバーなども参加しているが、両方とも共通して素晴しいリズム感が伝わってくる。こういったタイプの音楽は、わりとムードに流れ易いのが現状だが、ここまでテクニックがしっかりしていて、表現が多彩になってくるとそれだけで一つのインパクトもあるし、とても気持ち良い。だからこのアルバムは出来るだけ大きな音で聴くべきだ。歌はラブ・ソング的なものが多く、若干ヴォーカルの弱さも否定できないが、彼のシンガー、そしてコンポザー、キーボード奏者としての多角的なアプローチはこれからの無限の可能性を暗示している。　(角屋直彦)

◆Q & A◆

Q：スティーブ・ハケットがジェネシス時代（特に73年頃）に使用していたエフェクト類と最近のエフェクトの違いを詳しく教えて下さい。
　　埼玉県大宮市　　折井精一郎

A：スティーブ・ハケットは、72年ツアーの頃までは、シャフツベリーのデュオ・ファズとシャーラーのボリューム・ペダル、そしてビンソンのエコー・チェンバーを組み合わせてあの独特のギター・トーンを作り出していましたが、時にはマーシャルのスーパー・ファズも併用していました。そして「月影の騎士」発表とそれに合わせた73年ツアー以後は、カラー・サウンドのオクターブ・ディバイダーを使い（これはアルバムのＡ①の途中で聞かれるソロで効果を発揮している）さらに同じカラー・サウンドのスーパー・ファズを加え、前述のシャフツベリーのデュオ・ファズ、そしてシャーラーのボリューム・ペダル、さらにクライベビーを一つボードに組み込んでバッテリーを統一しています。それに加えてフェイズもこの頃に使い始めてます。エコー・チェンバーはビンソンのものからマエストロのエコレックに交換し、フット・スイッチでディレイ・タイムやリピート効果を操作しています。当時のアンプのヘッドはＨ＆Ｈで、キャビネットはもちろんハイワットです。そして75年の「眩惑のブロードウェイ」発表当時からは、前述のペダル・ボードに加えて、ＥＭＳ（イーノやシュルツ、タンジェリンが絶賛しているメーカー）のハイフライというギター・シンセサイザーの前身とも言えるメカに取り組んで、その意欲的な音色作りが大きな評価を得たわけです。これはＢ①の「バック・イン・ザ・ニューヨーク・シティー」に聞かれるような音です。「カーペットクロール」では、シャフツベリー、カラーサウンドの２つのファズを同時に使いバイオリンのような音色を使っています。そして77年頃の新生ジェネシスでは、ローランドのジャズ・コーラス・シリーズのアンプを使い、そのコーラス・サウンドを主体にしたプレイに変わっていきました。最近では、英国のプログレッシブなギタリストのエフェクト・ボードを一手に引き受けているピート・コニッシュ制作のペダル・ボードを使い、さらにローランドＧ＆Ｒギター・シンセサイザーにも積極的なようです。　（角屋　直彦）

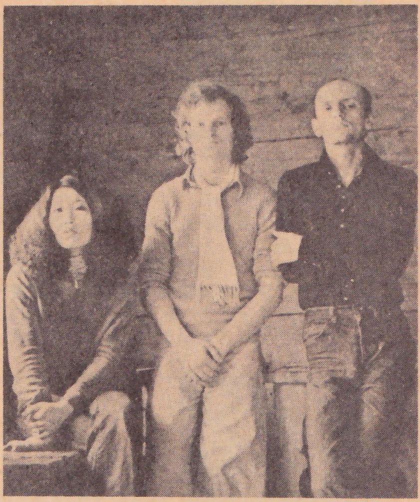
Genesis
(Steve Hacket)





Discover Cosmic

Popol Vuh



Q：ドイツのバンド、ポポル・ブフの最高傑作と言われている「ホシアナ・マントラ」を買いたいのですが、どのようにしたら手に入るのでしょう。

A：オリジナル盤にあたるドイツのピルツ・レーベルから発表されたものは入手できませんが、フランスのオール・レコードからカップリング・アルバムとして発売されている「ディスカバー・コズミック」の中の一枚は、「ホシアナ・マントラ」ですので、こちらで聞いて下さいね。　（木野）

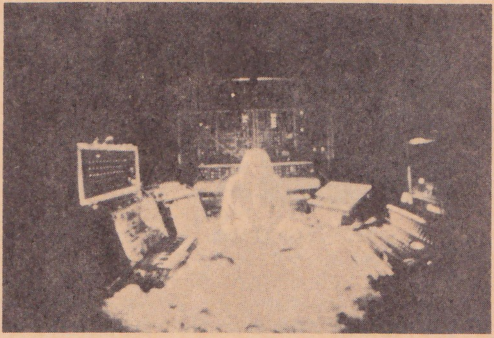
Q：YLEMについて教えて下さい。

A：YLEMについては本誌の12号に掲載されておりますが、今号でもジャパニーズ・シーンのページをはじめ、ユーロック・ディストリビューションのコーナーにも紹介されているのでそちらを御覧になって下さい。　（編集部）

Q：イタリアのエキペ84などの古いアルバムの入手方法を教えて下さい。
　　東京都豊島区　　井手　清

A：タイミングよくイタリアのアリストン・レーベルの旧譜が同レーベルのシリーズ物として再発されました。その中には、エキペ84の「ジキルとハイド」も含まれています。さらにストーミー・シックスの旧譜などイタリアン・ロック・ファンには待望のレコードが多く含まれています。
（角屋　直彦）

Klaus Schulze



Q：クラウス・シュルツのプライベート盤についてわかる事は全部教えて下さい。

A：ヨーロッパのアーティストにも未公認ライブ・アルバムや未公認テイクがあるという話は聞いた事があるのですが、残念ながらどんなに調べてみてもクラウス・シュルツのプライベート盤については解かりませんでした。機会があったときには紹介してみたいと思います。　（編集部）

◆Concert◆

Concert Review

トリスタン・ホンジンガー
シャーン・バージン
グンジョーガ・クレヨン

12月16日

新宿ニューヨーク・シアター

ひどかった。即興という概念の最も低次元な段階のみが空しく回転した圧倒的に貧相なパフォーマンスに終ったようだ。もともとリズムの切れにあまり鋭いものと持たない、グンジョーかと、音を自らの身体に集中させる、相互性の上でのリーダーシップを持たないこの集団は、最後まで互いを現解することなく、強引に増幅された無秩序で音魂の中でそのみじめな茶番劇の幕を閉じた。何のためのジョイントか、そして何のためのコンサートそのか、聴●も送り手もなにか決定的な思い違いをしているのではないか。竹田賢一氏には、ちょうどイーノのような役割を期待したのだろうが、彼者はまるで違いすぎたようだ。フリー・ミュージックとロックを引き合わせるという試みは結構だか、そのプロセスの甘さを反省してほしい。それにしても、あんなものを"ナウい"なんて思わせられて2時間も聞かされたんじゃたまったもんじゃない。何とか自分も状況に参加しようとつめかけた大勢の若者たちの表情も何とも哀れであった。

ノヴェラ
ガール

11月29日

浅草国際劇場

先日の11月29日にガールのコンサートがあった。サポートバンドが日本のプログレッシブバンドの若き獅子ノヴェラと言うことで、大くの反響を呼んだと言えよう。会場は、浅草国際劇場であったが、デビュー以前から噂が噂を呼び、熱狂的な人気を博したのとは裏腹に空席が目立ったようだ。ジャパンと同様にロウ・ティーンが圧倒的で、ロンドンブーツにギンギラの服装はどことなくアナクロニズムを漂わせていた。それでは音の方はどうかと言うと、意外に御機嫌なヘヴィ・メタルロックである。もっとも彼らがUFOと大の仲良でいっしょに全英ツアーを行なっていることからも伺うことができるのだが、日本では、一般的にルックス・バンドは音が過小評価される嫌いがある様だ。来日前のインタヴューで、「日本ではコンサートで立ちあがれないんだってね。よーし、僕らがそれを変えてみせるさ！」と言いきったフィル君。まずまずの成功と言えるようだ。

来日アーティスト

ポリス

1月20日(水)宇都宮市民会館
21日(木)宮城県民会館
23日(土)札幌厚生年金会館
25日(月)名古屋市公会堂
26日(火)大阪フェスティバルホール
27日(水)大阪フェスティバルホール
29日(金)京都会館第一ホール
30日(土)倉敷市民会館
31日(日)福岡九電体育館
2月2日(火)日本武道館
問い合せ・ウドー音楽事務所　03（402）7281
チケット・S－3000　A－2700　B－2000



JAPAN

クルセイダーズ

1月7日(水)中野サンプラザ
8日(木)大阪フェスティバルホール
9日(金)名古屋市公会堂
10日(土)芝郵便貯金ホール
12日(月)札幌厚生年金会館
13日(火)中野サンプラザ
16日(金)福岡郵便貯金ホール
18日(日)NHKホール

問い合せ・ユニバーサル　03（585）3044

アル・ディ・メオラ

1月18日(日)サンプラザホール　PM6：00
19日(月)サンプラザホール　PM6：30
21日(水)名古屋市公会堂
22日(木)大阪厚生年金会館
24日(土)渋谷公会堂　PM6：30
25日(日)渋谷公会堂　PM6：00

問い合せ・ウドー音楽事務所　03（402）7281
チケット・S－3000　A－2700　B－2000

ジャパン

2月15日(日)静岡県文化会館
16日(月)宮城県民会館
18日(水)札幌厚生年金会館
20日(金)大阪フェスティバルホール
21日(土)名古屋市公会堂
23日(月)京都会館第一ホール
25日(水)日本武道館

問い合せ・ウドー音楽事務所　03（402）7281

Concert Review

束縛されない感覚の増大・偶然の発見

JAPAN AMERICAN DANCE FORUM

日米ダンス フォーラム-3

インプロヴィゼーション《ダンス＋フリージャズ》1980年12月13日(土)7時

恵比寿社会教育会館

音・声・言葉・動きの即興
断片化の維持――構造の拒否――

ハン・ベニング＝ペーター・ブロッツマンとの共演をひとつの契機として（この点に関しては本誌13号のインタヴューを参照されたい）現在の近藤等則の作業方位は、あらゆる意味と表現の彼方へと向かっている。それはもはや「ジャズを超える」とかいったレベルの話ではなく、より広く演奏行為それ自体を、一瞬の爆発としての彼の現前、すなわち無名にして固有なる肉体の只中に解き放たんとする、一種爽快な企てであると言える。

当夜のパフォーマンスもまた、そうした彼の作業の「いま・ここ」を知るに足る、第一級の現場報告であったと記したい。

一人のダンサーと二人のミュージシャン――内一人は先の「グローヴ・ユニティー」公演でも来日した「チェロの鬼才」＝トリスタン・ホンジンガー――を迎えての「共演」は、過去幾度となく試みられた「ジャズと前衛舞踏の共演」――沖至と花柳幻舟、山下洋輔と大駱駝艦など――とは明らかに一線を画した大胆なものであった。第一彼等は「作品」を発表したのではなかったし、またいかなる「表現」を目指したのでもなかった。彼等は音と肉体をして何かひとつの全体を志向したのではないのだ。そうなのではなく、四者がひたすら四者のままにしなやかに連続していく、そういった「場」＝ハプニングを維持しようと努めたのだ。すなわち、永遠の未完のうちに、パフォーマンスそのものを世界＝他者へと向けて開かんとする試み――。言葉をかえて語るなら、「作品」そして閉じられていないが故に、舞台――実際それは文字どうりの舞台だった――は限りなく観客に開かれてあったと言えるだろう。

だがここであえて苦言を呈するならば、この種の催し自体、より多くの人達に対して開かれてあるべきだろう。観客が特定のシンパに限られるなら、爽快さも遠からず自家中毒に陥る事を、肝に銘じられたい。より多くの困難をこそ僕等の明日に――。

（和泉直樹）

●出演
ケーティ・ダッグ――ダンス
トリスタン・ホンジンガー――チェロ
シャーン・バージン――サックス
近藤 等則――トランペット





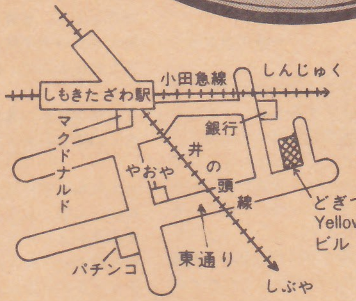
Records - Records
レコーズ・レコーズ

英盤・ヨーロッパ盤・廃盤・珍盤・カラー盤・ピクチャー盤等の入手困難コレクター向通販リスト200円切手にて配布します。
〒060 札幌市中央区南2条西4丁目☎(011)221−0960

Used Record 専門

Yellow POP

☎
(460)
1013



レコード買います。

本誌持参者
LPレコード
お買い上げ
1枚につき
100円おまけ

RECORD SHOP
ジョージ

☆レコード何でも買います☆年中無休☆

武蔵野市吉祥寺南町1−1−8けやきビル1F Tel. 0422−46−6181
八王子市中町6−10 小林ビル1F Tel. 0426−26−3023

2:00PM～2:00AM TEL 409-0421
青山学院ウラ、青山トンネル手前
定休日−毎月第2水曜日

ROCK-INN SAV

中古レコード専門店

タイム

レコード買入

高田馬場駅ヨリ早稲田方向へ
右側100m呉服店ビル1階奥

ワーズ・アンド・プログレッシヴ ロック
WaP
380yen 発売中

プログレ系歌詞専問
オリジナル歌詞＋対訳＋解説＋エッセイ 付き

全訳
"アフターズ" ハットフィールド
"ア・ブラック・ボックス" ピーター・ハミル
"メイド・イン・ジャーマニイ" アモンデュールII

***WaP*シリーズ "イエス ファースト" アレア アルバムレビュー ○○○**
特集；R. フィリップ，ジェネシス

レコード屋さんにない場合は送料150エンをそえて直接***WaP***へお申し込み下さい。
編集室……東京都港区元麻布3−1−27
ミズノ・アパートメント203号 Tel 479−0534

◆Letters◆

フールズ・メイト誌者の諸君！

かつてブリティシュ・プロブレの美しさを持つバンドは、もはや存在するであろうか？最近、子供だましのアルバムを発表して世間を騒がせているイエスにしても、アヴァンギャルドの方向に向って立往生しているピーター・ガブリエルにしても、一作ごとに下らないアルバムを発表してがんばって生残っているキャメルにしても、もう、どのグループをとってもかつて栄光の日々をかいま見ることはできない。

そんな音楽界にただ独り自分の思想を着実にサウンド化している人物、かつてのピート・シンフィールドの求めた世界を感じさせるような人は、スティーヴ・ハケットその人ではないだろうか？

今後もなお、マイナーな雑誌であり続けるよう期待しております。

―あくまでもハケットに固執する
一浪人生より―

はじめておたより致します。フールズメイトを読み始めて４号目になりますが毎日楽しく読ませていただいています。私は貴誌を読んで始めて、様々な音を知ることができたといえましょう。しかし本誌でもたびたび見かける、最近のアバンギャルド傾向やニューウェイヴと一緒にされている様な音はどうも理解しかねます。と、いうよりも音とアート、文学などを関連づけている人や記事が多いため、音の最も純粋で本質的なものをおおいつくしてしまう気がしてならないのです。例えば、オザンナ、イーノという様な傾向の音が無意識的に過去の自分の体験や絵画に結びつけられてしまうことにまず１つの問題があると思います。そもそも音の拡がり、可能性がそんなつまらないものによって限定されるべきものではないのです。アートというのは基を正せばでっちあげであり、アバンギャルドなどその極みでしょう。少しでも多くの聴き手が音そのものの本質を見失なわないことを心から願ってやみません。

練馬区　雪村美一

初期のフールズ・メイトに比べると非常に内容も専門化してプログレッシブからニューウェイブまで取り上げるようになった。スタッフは仕事上多くのレコードに接する事ができ、必然的に方向の修正が行なわれるわけであるが、フールズ・メイトと読者の間には接する音楽情報量の違いから時間的差が生じてくる。私はロックマガジンから貴誌へ流れたが実際に音に接してロックマガジンを理解するのに２年間もずれてしまった。その時すでにロックマガジンはパンクに向かってしまったので貴誌にかえたのである。

今後読者とフールズ・メイトの時間的差をどううめていくかが重要であると思う。

大阪府池田市荘園　　山ノ上　伸二

次元は我の内にあり―（EURO空間に対する私の思考）

次元は我の内にあり。
内包され浮遊する――
その小宇宙。
それは外にはなく、我の中に常にあり。
その次元は外側に存在する事なし。
常に我の内部に侵透し含蓄されるのみ。
その次元は光を持ち、影を持ち、
静寂をもち、音響をもち、
絶えず我の中で変化する――それは１個の流動体。
生まれ出る次元、鼓動する空間、

花は咲き乱れ、鳥は飛び交わり、木の梢からはやさしい葉音がそっと耳もとをかすめる。

大人たちのまわりで子供達がはしゃぐ。
急がしく働く大人たちのまわりで、
子供達がはしゃぎまわる。
それがもっと速くかろやかに太陽のまわりできらきらぐるぐるまわっている。

日がかたむけば、西の空は無気味に風を吹きつける。
EUROの青白き空間が天と地とを包み込むブラックホール的地平線上にまで、
その濃紺のベールをかけてえんえんと続いている。

次元は我の内にあり――内包され、そこに浮遊し、あの地平にまで連らなる。

旅人は少女の前に立ちどまり、小高い丘に立つ少女の下にうずくまり、そして少女の指さす、その白い指さす、あの青白き空間に彼らはあてもない旅をくりかえす。

そう彼らこそEXILE――この小宇宙を旅する。
そして彼らも又我の内にあり。――その旅は永遠に続くだろう。
終わりなき次元…終わりなきEURO空間。

岐阜市福光南町　菅原太介

前略

皆様、元気でがんばっておられますか。

最近のフールズ・メイトは、カタログ的になって、私にはつまらない。ヨーロッパの精神史といった音楽の背景にあるものの考察もなおざりにされているように思います。

Schulzeの『Dune』を聴きましたが、がっかりしました。フールズ・メイトでは、ほめてあったけど、詩の中味は、なんか教科書的で……。昔、坂本龍一が『クラウス・シュルツェの場合、耳は、はるかに西洋的で未だコードの移動の暗い　理的効果に思い入れしすぎている。』と評していましたが、ワグナーの精神を受け継ぐ無限旋律地獄にいつまでも落ちているような……。問題は、ペシミスティックに陥ることでなく、それを、いかに超克していくかでしょう。それにしても、ニーチェ―→ワグナー―→シュルツェと関係づけられていくであろう精神の流れといったものを誰も取り上げてくれないのは不満でなりません。また、ダダ（破壊）だけでなく、その後に起きた自己超克のシュルレアリスムも取り上げるべきです。

福岡市西区田町　　樋口　公滋

フールズ・メイト読者の諸君！

かつてブリティッシュ・プログレの美しさを持つバンドは、もはや存在するであろうか？　最近、子供だましのアルバムを発表して世間を驚がせているイエスにしても、アヴァン・ギャルドの方向に向って立ちじょうしているピーター・ガブリエルにしても、一作ごとに下らないアルバムを発表してがんばって生残っているキャメルにしても、もう、どのグループをとっても、かつての栄光の日々をかいま見る事はできない。

そんな音楽界にただ孤り、自分の思想を着実にサウンド化している人物、かつてのピート・シンフィールドの求めた世界を感じさせるような人は、スティーブ・ハケットその人ではないだろうか？

今後もなお、マイナーな雑誌であり続けるよう期待しております。

小平市学園西町　　金子　秀雄

vol.12、13、14は、つかれました。

私はR・I・Oの記事を載せる事に疑問を感じます。フールズ・メイトは商売やっている限り、彼らのためにもうけてはいけない。

アンチ・コマーシャリズムって一体何ですか？私は、一人の頭の悪い読者です。故にフールズ・メイトが全くわかりません。もっと簡単な文章を書いて下さい。

東京都日野市　　真野　恵



◆Letters◆

いろいろな雑誌を読んだ後に出会った貴誌は私の美意識を充分に満足させてくれ、半ば虚無主義に陥っていた私を引きずり出してくれるだけの力に溢れていて、Letterのページを読むと私はすぐさま、自分の今の気持ちをあなたに書き伝えたくてペンを取ったのです。

vol. 13の2通目に載っていた方もおっしゃるとおり私も貴誌が音楽だけでなく文学、美術、思想をも統合した（そうなれば芸術面だけではなく、そのうちに社会や政治問題など介入してくるだろうことは私にも予想がつきます）スケールが大きく、かつ先鋭的なものになることを希望します。音楽にせよ、美術にせよ、とても感覚的なものであるが故に、あまり内部へ、内部へとつき進んでいくと、やがて行き詰まってしまうことは、避けられませんし、私は貴誌にいつかはそんな危機が訪れることを（今のところは遠い将来でしょうが）とても恐れています。そうならないためにも、もっと幅を広げたり内部だけでなく外部に向かってすすむことは、とてもいいことだと思うんです。

私は貴誌を読んで、私にも何か活動が出来たらと思いましたが、そこが地方の不便なところで、音楽、映画etc…全て思うようには、行かないのです。（このはがゆさをどうやって説明したらお判りいただけるんでしょう）

私がイタリアやハンガリーやオランダのロックを聴き始めたのはつい1年位前のことでオザンナに洗脳されたのも（あの時のショックはどう言い表わしたらいいのでしょうか。ちょうどジャン・ジュネの作品を読んだ時に似ていました）ついこの間のことだから、私は、ヨーロッパのロックに関してはそれ程詳しいというわけではありませんが、今やとりこになってしまって、プログレッシヴ、クラシック・ロックは、私の最も愛するところとなっています。そんなわけで、貴誌を注文したときは、それらの記事が、沢山載っているに違いないと思って期待していたところ、案外そうでもなかったのですが、別の意味で大変満足したことをどうしてもお知らせしたかったのです。

私の人生にとって（といっても、まだあなたから見れば、私の年令は子供も同然でしょうが）今まで出会ったものの中で、生きていて良かったと感じさせられたのは、ムソルグスキー、ラフマニノフ、オザンナ、キャメル、ジャン・ジュネ、サルトル、ヴィスコンティ、それから貴誌との出会いです。（大意）

山形市蔵王温泉　　井上　しおり

お前の背後にある影――
ある一定の期間をおいて
くり返される　しうちのように
俺の機能をこわしつくす
さあ一全能の神々よ
今、この瞬間にすべての倫理をかえ
私の上におり立つことを望む
夜の街にきらめくネオンサインさながら
私に何らかの啓示を与えよ

ひしめく群集のうめきをしりめに
ニタニタと笑いすべての悪をこの身にあびせたまえ
全能の神よ

私の肉体のすべてはどす黒く腐敗している
この世の悪と神々の啓示が等しいならば
私の肉体は音もなくくずれさる
ならば――その前に
お前の背後にあるその赤い影を
うちくだいてしまえ
イエルサレムを包囲する十字軍のように
――闘争――

まず　貴誌を読みはじめ私のインスピレーションは絶頂にたっしこのような詩ができたことを感謝しております。
はじめまして。僭越ではありますが上記の詩を同封させていただきます。
貴誌が私の感性に共鳴をおよぼし私のねむれるイメージをよびさまし…。
何という喜びでありましょう。
では、さようなら。

荒川区東尾久　　山下　順三郎

前略、寒くなってきましたが、いつも楽しく読ませていただいています。

ボクは、ユーロピアンロックと名のつくものを聞きはじめてまだ日があさいため、まだまだ勉強不足が目立ちます。ボクは感ちがいをしていました。もともとプログレというのかなんというのかキーボード（ストリングス、メロトロン、オルガン）音楽が好きだったので、その手の音楽ばかり聞いていたのです。そしてユーロピアン＝キーボードミュージックと勝手にしまっていたのです。今は、これといって気に入っているグループというのはありませんが、とにかくクラシカルでメロディアス、アンサンブルばつぐんのグループが好きでありまして、イーラクレイグなんかいいなあと思っています。どなたか色々と教えてくれる人がいたらヨロシク。でもあんまりカタイ話しは好きではありませんが。

一それでは

京都府長岡京市開田　　浜田竜作

お伺いを立てますが……。

『フールズ・メイト』はシュルレアリスムの雑誌なのですか？　或いは、その方向（正確にはシュルレアリスティック―80年以降の―）に、フールズ・メイトを誘引する媚薬の類で色づけして編集していこうとなさるつもりですか？　フールズ・メイトの一人として、疑問点等お教えいただければ幸いです。

確かに『シュルレアリスム簡約辞典』扉にもフォン・デル・ガベレンツの言葉で『言語は人間がなにかを表現するのに役立つだけではなく、人間自身を表現するにも役立つ』と書かれております。しかしながら、啓蒙されるはずであるべき引用句が、R・I・O上で上滑りしている事実は見のがせません。シュルレアリスム運動そのものがブルトンの死によりピリオドを打ち、その精神とシュルレアリスティックな思考・形態のみが残りました。『フールズ・メイト』ではその精神を敬承し、R・I・Oの運動に魂を吹き込み以後その歴史的添加物をまぶし、混淆して雑誌の展開に寄与させていくつもりなのでしょう。おそらく。（vol. 13では裏表紙においてバタイユにおいて顕現されているが、少しも問題視するものでは無い。）

しかし、悲しいかなvol. 12P. 33『再びR・I・Oについて』にもあるように、『R・I・Oが革命的性格を有する理由は音楽を含めた同時代への不参与や反抗といった形での『否』ではなく……』云々と。その通り！シュルレアリスム運動に見られる『反抗』『否』という言葉はそこには無く、又、謎めいた動きも用しません。真正面から音楽と対峙する事だけを行動の種として矢を束ねているのではありませんか。ですから、vol. 12のような無理な、無茶な体制は許されません。（vol. 13LETTRS欄で某君が指摘している部分）

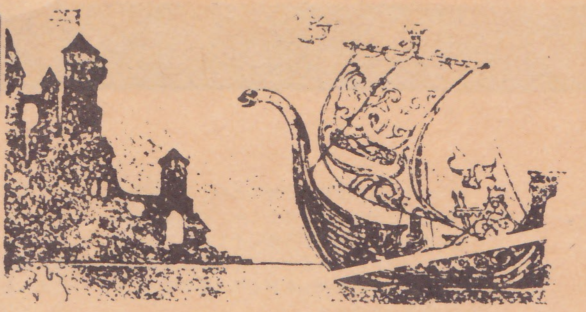
vol. 12以前でも十二分にオリジナリティはありました。（といっても秋田昌美氏を間接的に批判しているのではありません。それところか以後執筆を続けられる事を願います。）要は足元を固めてから飛翔する事だと思います。この雑誌、どこまでも展開運動させるのでしたら、無に帰するような紙面を作ってもらいたくありません。

『皮の存せざる毛将安にか伝かん』とも言うではありませんか。

香川県高松市　　宮本　好量



◆Books◆





ダリとダリ
——自分自身への公開状——

著者　サルバドル・ダリ
訳者　飯島　耕一

お　オリーブの声をもつサルバドル・ダリ
私はきみの個性と絵が表わすものを語る。私は
きみの不完全な若い画筆を賞めないが
きみのしっかりした方向を讃えるのだ。

休みなくきみが追うあの影像の不安を
きみを道で待ち伏せる感動へのあのおそれを。
珊瑚と貝殻の自転車に乗って
きみとことを歌っている小さな人魚(シレーメ)のことを
　　　サルバドル・ダリへのオード
　　　ガルシア・ロルカ

この黄色の繻子で装丁された本は、ダリ自身によって書かれたものである。ブック・レヴューということなので、何やら説明を加えなければならないのだが、前述した評からイマージュしてもらいたし、またランボーが湖底のサロンを透視したように、そしてダリの海（m'ere）とは何であるかを問いたいと思う。

胡桃の中の世界

澁澤龍彦

青工社

「胡桃の中の世界」は、渋沢龍氏が、十年前に工彦ッセー集「夢の宇宙誌」を書かれてより、——同じようなテーマ、同じような書き方で、もう一度……——とあたためつづけてきたものの結晶である。

書名と装丁も何ともいえない感を持っているが、書かれているエッセーも、普段私たちの触れにくい、むしろ敬遠してしまう科学史、物理史などの世界を通して筆者の広い見聞もまじえて、私たちの周囲の世界を新しい観点から見させてくれるものである。その知識のある方々には、楽しく読めるとは思うが、今までそのような部門を敬遠してきた方、一般的な物の見方にあきた方など、異質な世界をのぞいて見てはいかがでしょうか。ミクロ的、マクロ的な世界や、見方を楽しんでみて下さい。

（シノブ・シイナ）

「奥平衣良作品集」　けいせい出版

奥平衣良の単行本がけいせい出版より発売された。本誌でもそのシュールな手法と独特のファション感覚で話題のイラ先生の作品は、今ひさうちみちお、宮西計三らと共にアンダーグラウンド・コミックのニュー・ウェイヴとして大きく注目されている。歪曲する時代の潮流の中で、最高のモダン感覚を照射する奥平衣良の世界は、現在コミックのキャバレー・ヴォルテールとでも呼ぶべきか!?

売る

流浪の神殿（ヤン・アッカーマン）1200円イッツ・ファイブ・オクロック（アフロディティス・チャイルド）1200円、子供たちの子供たちの子供たちへ（ムーディー・ブルース）千円。希望の人はTELを
(0724) 22−7821
田中　一也

買う

ルカス・シデラスのソロアルバムと、フレンチロックとアフロディチス・チャイルドの古いＥＰ，ＬＰ（特に旧日本盤の「666」）
〒486
春日井市中野町２−８−７
山田　悟

故、間章氏のやっておられた雑紙「モルグ」を適価で。
〒658
神戸市東灘区御影石町３−４−22
藤田　たかひろ

募集、その他

M·Efekt, Zoo, Omega, Jackson Heights, etc. プログレ系　廃盤多し、リスト御請求下さい。
〒486
春日井市中野町２−８−７
山田　悟

福岡に住んでいるプログレやユーロ・ロックのファンを対象に「プログレ＆ユーロ・ロックファンクラブ（仮称）」を結成したいと思っています。福岡では欲しいレコードもなかなか手に入らないし、情報源もなく、ひとりで聞くのはたいへんです。でも、何人かが集まれば、レコード貸借や情報交換を通じて、もっとユーロ・ロックに親しむことができるはずです。是非参加してください。参加希望その他は下記まで
〒189-17
福岡県糸島郡二丈町大字吉井2934
金丸　正文

アシュラ・テンプル全アルバム、グルグル「ヒンテン」他ドイツOhr、コズミック係のレコード多数あります。(他にブルーチア、ＭＣ５など）テープに録音してあげます。くわしくは、リストを送りますので￥50切手をお送り下さい。
北海道旭川市南２条25丁目
松山　光宏

貧しい者同志団結してレコードの高価格に立ち向かおう！
レコード貸し借りサークル
〒653
神戸市長田区五位ノ池町３丁目13−15
宗和　正文

※本コーナーへの掲載希望者は、ハガキでインフォメーションの係まで!!　常時受付中。

世界観を探究し瞬間瞬間を楽しむ人。個性を持っている人。ライフスタイルの仲間に！手紙下さい。
〒228
神奈川県相模原市南台１−７−14井出様方
田井　正人（19才）

ミニコミ

鬼火第５号（ONIBI 5）
全宇宙の存在は、無限大の歴史と背後霊を内包しつつ、今この瞬間瞬間に於いて、フラッシュ・ライトのように点滅し続けている。それは神秘ではない。生命や死霊や存在霊は日々の具体的な生活の中に隠されている。それらを凝視する為には、ただそのヴェールを取り除きさえすればいいのだ。全宇宙は、まだまだ始まったばかりだ。そして記すことも……。（あとがき）
〒558
大阪市住吉区杉本町２−81　稲谷文化２Ｆ
田中　浩一

SOUND and VISION
Rockに残された最後の希望とは、あなた自身の表現手段としてのそれである。あとは楽器を手にしようが、ペンを握ろうが、筆をもとうがあなたの自由だ。大切なのはあなたが楽しむこと。好きにやるがいい。
〒653
神戸市長田区名倉２丁目３−23
馬田　尚子
（Ｂ５版タイプオフセット32Ｐ　200yen）



◆Information◆

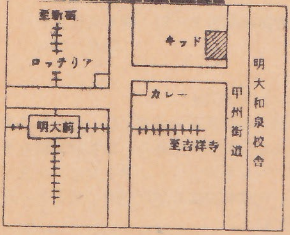
ユーロ・ロック・レコード・コンサートのお知らせ

フールズ・メイトでは、読者の方々とのより確かなコミュニケーションを確立するため、今後レコード・コンサートやミーティング等の企画を定期的に行なうこととなりました。その第一弾として、盛りたくさんのメニューを用意したレコード・コンサートを催します。

日時：1月22日(木)
場所：キッド・アイラック・ホール
時間：5：00開場
5：30開演

コンサートの後にスタッフとのミーティング、O　NI・レコード即売会などの企画も用意していますので、皆様おさそいあわせのうえ御来場下さい。





ポリドール公認ロバート・フリップ・ファン・クラブでは大々的に会員を募集します。詳しくは、50円切手を同封の上、下記までご連絡ください。

〒180 武蔵野市境3－7－9
川合由美子

スタッフ募集案内

フールズ・メイトでは現在、装いを一新して、内容面に関してもよりアクティヴで先鋭的なものへと、そして発行サイクルを縮めていく"第二段階"へと踏み出すための準備を行っています。そのために一番の急務とされているのがスタッフ陣の大幅なパワー・アップなのです。年冷、学歴、性別は問いません。本当にやる気のある方は編集室まで連絡をください。

編集室内リサーチ・システム通信

フールズ・メイト・リサーチ・システムの書店調査をしていただいた人の名簿を作りました。本当にどうもありがとう。敬称は略。

渡部　徹
松本　美世子
山本　肇
三浦　良和
荒川　伸彦
名取　雅樹
吉村　勉
亀本　亘
真野　めぐみ
黒田　雅夫
仙波　恵
金沢　幸子
佐藤　ひろみ
福田　裕子
森川　修
渡辺　英域
藤木　省策
浦島　光一
嵐　英子
中川はるみ
三沢　修
松前　公高
山崎　成
和田　洋子
児玉　浩
中川　洋美
梅崎　厚
柳原　智子
阿部　崇
若林　牧人
山田　博道
山本　浩司
黒谷　哲也
田中　紹一
高橋　比呂志
佐竹　章弘
夏目　隆
西尾　初紀
須川　善行
田中　実
赤道　淳一
東野　明広
谷内　誠
安部　哲夫
土舘　良一
塩原　純男
石島　明雄
平田　信春
太田　真一
斉藤　功一
渡部　佳里
松本　務
浜田　徹也
小林　達
和泉　直樹
早船　伸之
田中　政子
穂積　直樹
斉藤　弘美
林　督
高砂　美樹
堀　達郎
武野　茂樹
渡辺　邦雄
伊藤　永
中尾　正治
秋月　克昭
青地　英俊

フールズ・メイトが確実に手に入る店

川崎文学堂本店　044(244)1251
鎌倉島森書店　0467(22)0266
新宿紀伊国屋　03(354)0131
渋谷紀伊国屋　03(463)3241
横浜栄松堂(ジョイナス・ビル店)　045(321)6831
横浜有林堂西口店　045(311)6265
藤沢有隣堂(名店ビル3F)　046(26)1411
平塚サクラ書店(駅ビル店)　0463(23)2751
小田原八小堂　0465(22)7111
大阪駸々堂梅田店　06(341)7913
大阪紀伊国屋梅田店　06(372)5821
大阪駸々堂心斎橋店　06(251)0881
大阪旭屋書店駅前店　06(313)5412
大阪駸々堂書店　06(251)7584
吉祥寺弘栄堂　0422(22)1031
渋谷大盛堂
池袋三省堂　03(987)0511
高田馬場芳林堂　03(208)0241
池袋旭屋(東武エアキャッスル10F)
渋谷三省堂
川越黒田書店　0492(25)3138
六本木誠志堂　03(404)8551
渋谷旭屋
浦和須原屋　0488(22)5321
八王子くまざわ本店　0426(25)1201
町田久美堂　0427(25)1330
大宮新栄堂書店大宮駅ビル店　0486(44)2345
佐賀金華堂　0952(22)6178
福岡会文堂　092(751)1481
福岡積文館　092(721)0335
福岡福家書店　092(721)8267
長崎好文堂　0958(23)7171
大分明屋　0975(32)2906
熊本Books　まるぶん　0963(52)5665
熊本長崎書店　0963(53)0555
佐世保福家　0956(25)3040
鹿児島旭屋　0992(24)7932
神戸南天荘書店阪急六甲店　078(871)0130
秋田加賀谷書店　0188(33)3111
金沢うつのみや　0762(21)6136
京都駸々堂河原町店　075(221)0348
神戸三宮ジュンク堂書店　078(392)1001
広島フタバ図書広島駅前店　0822(64)5300
豊橋豊川堂ステーションビル店　0532(55)2810
福島新栄堂平駅ビル店　0246(22)1911
仙台協同書店駅前店　0222(66)2211
山形八文字屋　0236(22)2150
市川くまざわ書店本八幡店　0473(36)3514
浜松谷島屋(遠鉄名店ビル)　0534(54) 3131
名古屋新光堂書店　052(586)1165
松戸良正堂書店駅ビル店　0473(64)7997
静岡谷島屋　0542(54)1301
青森成田本店　0177(23)2481
岩手東山堂書店　0196(23)7121
千葉キディランド第二店　0472(25)2011
船橋弘栄堂書店　0474(24)3096
松戸良正堂書店0473(67)3070



◆Back Number Stock◆



Vol.10　定価680円

特集――デカダンス
共産圏のロック・シーン
インタビュー――スティーヴ・ハケット
ユーロ・ロック・オルターナティヴII
　アレア・アトール，ニュー・トロルス，オザンナ，バンコ，ワパスetc.
世界に急迫する日本のロック・シーン
マイク・オールドフィールド
ジョイ・ディヴィジョン&チューヴウェイ・アーミー　etc.



Vol.11　定価680円

特集――ファンタジィPart II
「生」と回帰する〝感性の王国〟
　――ファンタジィの再生
創世史記 −GENESIS HISTORY−
ブリティシュ・アンダーグランドの軌跡
　ヘンリー・カウ，コウマス，ディヴ・スチュアートetc.
ユーロ・ロック・オルタネイティヴII
　ファウスト，モナリザ，ZNR，イーラ・クライブ，ペリジェオ，カヤック，R.v.d.リンデン，アラン・ソレンティ
イタリアのクランプス・レーベル
中世音楽を辿る　　レコード・リスト付
インタビュー
　ビル・ブラッフォード&トニー・バンクス
ピーター・ハミル、キャメル



Vol. 12　定価680円

特集――ロック・アポカリプス
（ロック地軸の解体、時空の混乱、生態系崩壊……ロックは何故へ行くのだろうか）
カイロスの展望～ディス・ヒート、T・グリッスル、デヴィッド・カニンガム、ATV、ヘンリー・カウ&RIO、ランダムホールド、メタボリスト、ZNR、PIL、アート・ゾイド、ユニヴェル・ゼロ、アクザク・マブール、ジョフ・レイ、レジデンツ、クローム、ペル・ユビュetc
ロバート・フリップの現在（年表付）
ジェネシス・創世史記（第2部）
トランスアトランティック・レーベル
エヴァン・パーカー&トリスタン・ホンジンガー・インタビュー
その他――トリアナ、ママベア・テキエルスキー、アルティ・エ・メスティエリ、SBB、フランソワ・ブレタン、エンブリオ、ミシェル・マーニュ、ペペ・マイナ、E・シェーナー、オニリス、ヒカシュー、ノヴェラ、アインソフ、ダダetc……



Vol. 13　定価680円

クローズ・アップ Photo, Lyric, Article & Interview) デヴィッド・ボウイー
　ピーター・ガブリエル
　ジャーマン・ロック史学(第1回)
総力特集
　キング・クリムゾンの全貌（前編）
　（P・シンフィールド・インタビュー他、前期クリムゾンの全て）
Interview・Special
　P・ブレグヴァド（スラップ・ハピー）
　N・マレイ（元ナショナル・ヘルス）
　D・カニンガム（フライング・リザーズ）
USAフリー・ミュージック・シーン
近藤等則インタビュー
英国ラジカル・レーベル（ラフ・トレード、ミュート、オブジェクト、ハートビート）
その他、PFM、ラルフ・ランゼン、エトロン・フー、マリオ・ミロ、スカイ、メモリアンス、グンジョーガクレヨン、コントーションズ、スイサイド、モノクローム・セット、ヒューマン・リーグ、オーケストラル・マヌーヴァーズ、フィッシャーZ、バタイユetc.!!



Vol. 14　定価680円

総力特集
　キング・クリムゾンの全貌（後編）
　（後期クリムゾン―存在と歴史）
イエス
ケイト・ブッシュ
ロバート・ワイアット
連載――ジャーマン・ロック史学(第2回)
　クラウス・シュルツ、アシュ・ラ・テンプル、アジティション・フリー、タンジェリン・ドリーム、ポポル・ブー、アモンデュールII&I、グルグル、カン
ヨーロッパ文化史の中のドイツ
　ダダとインターメディア
　ワグナーとシュトラウス
　ドイツロックとドイツ映画
T・G & Industrial Records
Fred. Frith Interview
XTC

■バック・ナンバーVol. 3とスペシャル・ストックにわずかな在庫があります。この2冊については往復ハガキで在庫の確認をしてから御注文下さい。Vol. 3、Vol. 10、スペシャル・ストックの3冊は通販に限って販売しますので御注意下さい。

バック・ナンバー取扱い店

お茶の水イシバシ・ブック・サイド
03(291)6703
池袋西武サウンド・シティ楽器部
03(981)0111　(9F)
池袋西武アール・ヴィヴァン（12F）
03(981)0111
五番街池袋東武店（10F）
03(985)6824
五番街下北沢店
03(469)2624
渋谷ヤマハ
03(476)5475
青山パイド・パイパー・ハウス
03(499)1966
下北沢エジソン
03(411)9892
模索舎
03(352)3557
おと虫
03(948)5191
プラサード書店
03(332)1187

高田馬場オパス1
03(208)7171
吉祥寺レコード舎
0422(21)6146
五番街船橋東武店（6F）
0474(79)1066
ハリウッド・レコード上福岡店
0492(64)8856
ハリウッド・レコード新所沢店
0429(22)3319
大阪HOGG
06(365)1688
ナッティ・ドレッド
0422(21)3263
大阪プレイガイド・ジャーナル
06(251)9251
京都ニコニコ亭
075(211)6040
名古屋ピー・カン・ファッジ
052(731)3002
札幌ディスク・アップ
011(251)0986

札幌レコード・レコーズ
011(221)0960
仙台ディスク・ショップ・ランブル
0222(23)1514
水戸ロック・ボトム
0292(26)1471
金沢パイド・パイパー・ハウス
0762(22)1725
倉敷グリーン・ハウス
0864(21)3108
福岡JUKE
092(781)4369
三島ロニー
0559(72)5392
水道橋旭屋
03(294)3781
渋谷放文社

新宿東京書房
03(371)2531
吉祥寺元町通り光陽館
0422(21)2201

渋谷旭屋
03(476)3971
渋谷東邦ビル
03(499)0456
高田馬場芳林堂
03(208)0241
銀座福家書店
03(574)6993
明大前モダーン・ミュージック
03(322)4461
甲府ヴァーニア
0552(37)7182
神田書泉グランデ(B1)
03(295)0011
吉祥寺ウニタ書店
0422(22)9618
北沢第一書房
03(413)1049

Fools Mate　購売者の方に

■フールズメイトは、お近くの書店で東販・日販・大阪屋扱いで予約していただければ御入手できますが、より確実な購読を御希望の方は、定期購読を御利用下さい。

定期購読料……半年（３冊）——2700円
（送料共）　１年（６冊）——5300円

■バック・ナンバーは前ページのお店で購入されるか、直接フールズ・メイト編集部までお申し込みください。尚送料は１冊：250円、２、３冊：300円、４、５冊：350円です。

■当編集部に直接ご注文の場合は、定期購読開始号数、期間、バック・ナンバー希望号数など必要事項を明記の上、郵便為替、現金書留、郵便振替（加入者名：フールズ・メイト編集部　番号：東京５—97179）にて御送金ください。

■当編集部に直接バック・ナンバーを御注文いただいてから１ヵ月以上品物がお手許にとどかない場合は、当編集部に問い合わせのハガキを下さい。

■輸入盤Record Review 原稿募集!!

Fool's Mate では次回より、輸入盤のレコード・レビューをより充実させるために、読者の皆様も参加する場としてレコード・レビューの原稿を募集します。これこそはと思われるものがありましたら以下の要領で、どしどし御応募下さい。

■400字詰めの原稿用紙１枚半（600字）
■タイトル、アーティスト名、レコード番号記入。
■できればレコードのジャケット写真も同封の上、原稿の最後にあなたのお名前もお忘れなく。

OMNI-PRODUCTION〈スタッフ募集〉

当OMNIでは、包括的にプログレッシヴ・ロックを流布させるため、入手の難しいヨーロッパ盤の通信販売企画を行なってきましたが、次のステップとして、日本では発売されそうにもないヨーロッパ盤の権利買収によるプレス・リリース、情報誌発行、各種イベントの実行等、最終的にはマイナー・レーベルの設立を目指したプロセスを行なっていく予定です。そうした活動に興味をお持ちの方はぜひ御連絡下さい。男女不問。

連絡先
〒156 東京都世田谷区松原２—46—９—401号
OMNI-PRODUCTION
Tel 03(324)7703



あなたもフールズ・メイトに参加してみませんか？仕事は簡単です!!

仕事内容：書店調査（モニター）
：原稿執筆
：企画編集
特　　典：フールズ・メイトの無料定期講読!!
：アーチストの原文資料，レコード，写真，ポスター，の進呈
：スペシャル・メンバーシップ・カードの配布
：レコード通信販売の抽選優先！
：その他、あらゆる企画・イベントに参加することができます
その他：本誌スタッフとの定期的ミーティング
：フールズ・メイト支部の開設

◎ここに載せたフールズ・メイト・リサーチ・システムは近郊にお住まいでない方にも積極的に本誌参加の機会を解放するためのもので、一般のスタッフ募集よりも気軽に応募できるのが特長になっています。つまり、各人の都合に応じて仕事量を決定することができ、さらにその様子によっては本格的なスタッフに加わる判断をも得られます。本誌の積極的な活動を達成するためにも、どうぞふるってご応募下さい。
資　　格：男女、年齢不問
：履歴書郵送



編集者から読者のみなさまへ

いつもFool's Mateを愛読して下さって本当にありがとう。おかげさまで、ぼくらも無事にといったら嘘になりますが、とりあえず創刊３年とちょっとを迎えました。特に'80年は、全国販売という大きなステップに挑戦したため、慣れないことをいろいろ憶えたり、もの凄い危機感に襲われたり、めちゃくちゃな信じられないようなことがおこったりと、そのスリリングなことといったら格別でした。反省すべき点もいっぱいあったし、やらなくちゃと思って実現できなかったことも多々ありました。とにかく疲れる。世の中の時間カイクルというものには本当に参った。まさに光陰失の如しといった風情をも超越した凄みがあります な。

手工業的レベルの編集作業、経営というには余りも貧しい営業の２つの要素の上に今のFool's Mateは成立しているわけですが、どちらも現状のままではひどく無理があるわけで、発行部数の問題や宣伝活動の面から、今後ももうすこし良いバランスをつくり出してゆかねばなりません。そういった拡大活動の一環としてリサーチ・システムとかの発足も計画されたのですが、こちらの運営上のミスその他で組織化は大幅に遅れています。無責任な結果は絶対にまねかないことを約束しますので、もうすこしの間お待ち下さい。改善の必要は他にも山ほどあります。例えば発行期日の正常化などもあたりまえの話ですが、'81年からちゃんとしたいです。

ぼくらの望むファクターAとしてのFool's Mateが整い次第レコード製作、イベント活動を開始するつもりでいましたが、それは予定よりも早くなるかも知れません。とにかくやってみなければ、現状も何も把握できないし欲求不満はたまる一方で、恐ろしさにもつきまとわれている。今ってそんな時期みたいです。

とにかく今後もよろしくお願いします。

（北村昌士）

Fool's Mate Vol.15＋S.S

定価1800円

昭和56年１月25日発行

編集発行　フールズ・メイト
発売元　青彗社
編集室　〒156
東京都世田谷区松原２—49—９～401
TEL：03・324・7703

雑誌コード　07562—1

'81 1月21日発売

あのフォルムラ・トレと、イル・ヴォーロ遂に発売なる!!

ユーロピアン・ロック コレクション2200/パートV

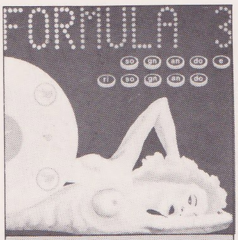
特典!
10対1プレゼント
パートVとパートVIの中から10枚をお買い上げの方に㊙レコード・プレゼント! 詳細はパートVIで!!

★みなさんからのリクエスト中、圧倒的に№1的存在であった、あの幻の名盤(その闇の値は何んと5万円以上とも……?)フォルムラ・トレとイル・ヴォーロがとうとうコレクション入りしました。

[全8枚/オリジナル・ジャケット・デザイン使用]
各2,200円
(2枚組=4,400円)

SEVEN SEAS / ariola / LONDON

FORMULA 3〈イタリア〉 夢のまた夢/フォルムラ・トレ
●K22P-111(セブンシーズ/ヌメロ・ウノ)

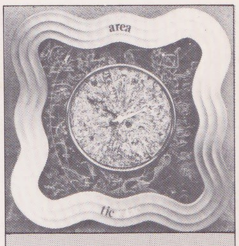


イタリアにおいて正に伝説的なトリオ、フォルムラ・トレのこれは最高傑作と噂され、数万円のプレミア付きの恐しいアルバムだ!キーボード、ギター、ドラムスという3人組が創造するイタリアン・ミュージックの美の極地は、あのオザンナやニュー・トロルスと同等か、それ以上の話題必至の不朽の名盤といえるだろう。待ちに待ったアルバムがとうとうあなたの手に……。

〈曲目〉夢のまた夢(a)~(d)/朽ちゆく、一片の葉(a)~(b)/男と女のお話し/他

イル・ヴォーロと並んでリクエスト数圧倒的No.1アルバム遂に登場!!

AREA〈イタリア〉 ティック・タック/アレア
●K22P-116(セブンシーズ/C・G・D)



あのアレアの看板男デメトリオ(ヴォイス)亡きあと、発表された新生アレア(ともいうべき)のファースト・アルバムは、ジャズ、フュージョン色を強く打ち出したバカ・テク的アルバムとなった。元々P.F.M.やアルティと並んで、テク的にNo.1のアレア、このアルバムにおけるインストゥルメンタル・ナンバーでのインター・プレイの凄まじさは、ア然とさせられる程だ。イタリアン・ロック・ミュージシャンの実力は素晴しい。

〈曲目〉錬金術師の塔/他

新生アレアは、ジャズ色を全面的に打ち出した超テク・アルバムを作った。

IL VOLO〈イタリア〉 イル・ヴォーロ
●K22P-112(セブンシーズ/ヌメロ・ウノ)



あの伝説的なトリオ、フォルムラ・トレを前身として誕生したイル・ヴォーロは、トレ以上のテクニックを十分発揮し、イタリアン・ロック独特の哀愁に加えて、繊細かつ重厚な世界を展開している。イタリア語による余りにも美しい詩情が全体を貫いて、ヨーロッパ知性の結晶体ともいえるサウンドは、感動を呼び起こすだろう。

〈曲目〉一匹の蚊の如く/魂の変革/情念/創世紀/始まりの吐息/讃歌/睡魔/テニス靴のシンフォニア

フォルムラ・トレから生まれたイタリアン・ロック・バンドの最高峰、イル・ヴォーロの記念すべきデビュー・アルバム!!

RICK VAN DER LINDEN/CATALIN TIRCOLEA〈オランダ〉 変奏/リック・ヴァン・ダー・リンデン&カタラン・ティルコレア
●K22P-117(アリオラ)

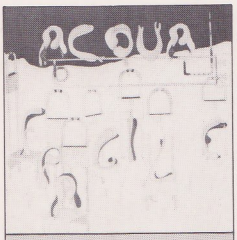


エクセプション、トレースのキーボード奏者として、リック・ウェイクマン以上とも評価されているリック・ヴァン・ダー・リンデンが、ルーマニアの民族楽器であるパンパイプ、ナイ奏者のカタリンと共に作りあげた本アルバムは、民族色、クラシック色が濃い美しいアルバムで、あのペペ・マイナの音楽にも共通するものがある。

〈曲目〉哀しみのドイナ/ブルール/パン/G線上のアリア/ジムノペディ/ラヴ・ディストラクション/ブラックバード/ダイアナ/ポロネーズ/ロンド/パン・タジー/他

あのトレースのリック・リンデンが、民族楽器奏者カタランと組んで作った民族色、クラシック色の濃いアルバム。

ACQUA FRAGILE〈イタリア〉 アクア・フラジーレ
●K22P-113(セブンシーズ/ヌメロ・ウノ)

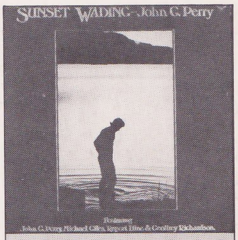


パートIIで先にセカンド・アルバムが発売されているアクア・フラジーレのファースト・アルバムがこれだ。イタリアン・ロックにしては珍らしく、さわやかコーラスを打ち出したフラジーレは、テクニック的にもあのP.F.M.をうならせた程。ヴォーカルのベルナルドは、やがてP.F.M.の一員として引き抜かれたのは有名な話だ。このデビュー・アルバムはマニアの間では、セカンド以上の出来と評判。

〈曲目〉夜明けの訪れ/脱出/他

P.F.M.の初プロデュース・バンド、アクア・フラジーレのデビュー・アルバム!!

JOHN G. PERRY〈イギリス〉 サンセット・ウェイディング/ジョンG・ペリー
●K22P-118(ロンドン/デッカ)

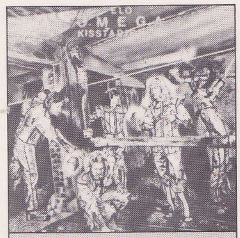


参加メンバーが凄い。マイケル・ジャイルス(キング・クリムズン)、ジェフリー・リチャードスン(キャラヴァン)、エリオ・ダンナ&カラード・ラスティチ(元オザンナ、ウーノ、現 ノヴァ)、ロジャー・グローヴァー(元ディープ・パープル)、ルパート・ハイン(クォンタム・ジャンプ)、サイモン・ジェフ(キャラヴァンのアレンジャー)等々。各メンバーの演奏はさすがだ。

〈曲目〉アイ・ウェイト・マイ・フレンド/ハウ・ゴーズ・ザ・ナイト?/ディヴォーク・ウォーター/バーズ・アンド・スモール・ファーリー・ビースツ/アズ・クラウズ・ギャザー/他

キャラヴァン、カーヴド・エア、クォンタム・ジャンプのベース奏者ジョン・G・ペリーのトータル・アルバム。

OMEGA〈ハンガリー〉 ライヴ・キスタディオン'79/オメガ
●K22P-114~5(セブンシーズ/パピタ)(2枚組)

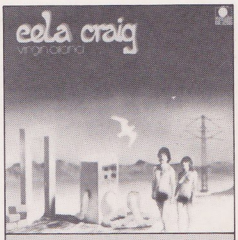


「ガマポリス」が好評のオメガのライヴ・アルバム2枚組は、そのスケール感において、アンジュあたりのダブル・ライヴと比較出来る程だ。今ユーロ・ファンの間で話題になっているいわゆる共産圏のロック・バンドの中でもトップの人気と実力を誇るオメガのスーパー・ライヴは共産圏でのロック・シーンの真の姿を知るいいチャンスだ。ギターとシンセサイザーを駆使したステージは感動的だ。

〈曲目〉ヴォストーク/ガマポリス1/他

ハンガリーのトップ・バンド、オメガの壮大なスケールのスーパー・ライヴ・アルバム!!

EELA CRAIG〈オーストリア〉 ヴァージン・オイランド/イーラ・クレイグ
●K22P-119(アリオラ)



日本フォノグラムのユーロ・シリーズで既に3枚のアルバムが発売され、大好評を得ているイーラ・クレイグの最新トータル・アルバム。旧約聖書の創世紀からインスパイアされたこのトータル・アルバムは、未来世界のアダムとイヴ物語となっている。あのクラシカルなキーボードとギターを中心としたサウンドは今までどうり。中々の力作なのだ。

〈曲目〉ファースト・ミニット/ビーチャーズ・ブルック/ハウ・イット・スターテッド/キャリー・オン/バーズ・オブ・ア・フェザー/スティル/ビッグ・シティ/他

オーストリア出身のクラシカル・ロック・バンド、イーラ・クレイグのトータル・アルバム。

《発売元/キングレコード株式会社》



雑誌コード 07562-1
定価 ¥.1800

フールズメイト VOL・15 昭和56年1月25日 第3巻6号 通巻15号(隔月刊)発行 フールズメイト 〒156 東京都世田谷区松原2 46 9・401号 TEL03 324 7703 編集人 北村昌士 発売元 清彗社